

影が薄くてもダンジョンを攻略するのは間違っていているだろうか？

ガイドライン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ダンジョンというものは攻略出来ない

少なくともパーティを組みダンジョンに挑むというのに、この少年は単独でダンジョンに潜ってしまう。

……しかし……

影の薄い為にもモンスターにも見つからず

スキルのせいで魔力以外は0なのでダメージも与えられない

そんな少年がどうやってダンジョンを攻略していくのか、これはそんな影の薄い少年

の物語

# 目次

オリ主紹介	1
time1 ここから始まる。	
影の薄さでダンジョンに潜つていま	
す。	5
影が薄くてもバイト出来ます。	16
影が薄くてもケンカ売ります。	25
影の薄さで野良犬を倒しましょう。	36
影の薄さはサポーター向きだそうで	
す。	
影が薄いのにトラブルがやってきまし	
た。	58
影の薄さがついに主人公なしでストー	
リーを進めます。	69
影が薄いからこそ出来ることがある。	84
影が薄いのに何かを求められる。	104
time2 始まるからこそ、何か変わる。	
影の薄さとスキルを売った場合は高値	
になるみたいです。	116

影が薄いとか関係なく怒られるみたいです。  
—————  
139

影が薄くても目標になれるようです。  
—————  
154

影の薄さよりも僕が変だと思われている。  
—————  
174

影の薄さと二人のお蔭で18階層まで  
来れました。  
—————  
189

影が薄いからなんて言わせない。  
—————  
189

213 影が薄くても怒る時は怒ります。  
—————  
337

243 影が薄くても心配をかけるようです。  
—————  
348

影が薄いとしてもその存在は大きいです。  
—————  
262

影が薄くても相手を困らせてしまう。  
—————  
280

影が薄くても話題の中心に立っています。  
—————  
293

影の薄さで再び野良犬を倒しましたよ。  
—————  
306

う。  
—————  
324

影が薄くても攻撃の術は持っています。  
—————  
337

影の薄さは周りの人によっては必ずではない。  
—————  
348

影が薄くても面白い物を、デートをした

いのです。 363

影が薄いから対話に苦労します。

378

影が薄くてもその手を握ることは出来

ます。 390

time3 変わったものを無くさない

ように。

影が薄くても出会いのキツカケってこ

んな感じみたいです。 406

影が薄いといっても女の子の部屋に無

断侵入はいけません。 422

影が薄くてもその反応が薄いのはおか

しい。 432

影の薄さが暗躍には向いています。

444

影が薄くても許せないものがありま

す。 457

影が薄くても調子に乗っている奴はム

カつきます。 471

影が薄くても何か変化が起きようとし

てます。 487

影が薄くても他人を悩ませてしまう。

499

影が薄くて仕方なく話してしまうのは

罪ですか? 511

影の薄さはきつと、色んな影響を与える。  
524

影が薄いからこそ登場シーンがカッコいいです。  
548

影が薄くても仲間の為に行動します。  
570

593 影の薄さを忘れるほど出来事です。

影が薄くて再び主人公無しストーリーです。  
607

影が薄いつてことはいない状況が続いても話が成立する。  
629

影が薄いなー。主人公いらずでボス倒

しました。  
641

影が薄い、と言われていた主人公がピ  
ンチです。  
657

影の薄さと、この想いは、反比例してま  
す。  
669

影を薄くしたい思ったのは初めてで  
す。  
682

影が薄いはずなのにしっかり怒られま  
す。  
695

time4 無くすことを恐れず、突き  
進むために。

影が薄い時でも人は何か為に頑張れ  
る。  
707

影が薄い、でも個性は強い人はいる。

718

影の薄さはこういう時、厄介である。

730

影が薄くても望み通りに行くことと、

行かないことはあるものだ。

745

影が薄くたってお祝い事には参加した

い。

758

影が薄い……よね？最近、悩んでしま

う。

771

影が薄い奴は、とバカにするのはい

が仲間は許さない。

785

影の薄さがここにきて裏目に出まし

た。

影の薄さのせいでまた怒られました。

797

影の薄さってこんな時に厄介である。

809

影の薄くても皆に支えられています。

823

影の薄くても準備に余念はありません。

837

影が薄くても準備に余念はありません。

ん。

850

影が薄くとも作戦会議は発言しましよ

う。

867

影が薄いという前提がなくなるとこ

なります。

882

影が薄いからこそ暗躍出来るのです。

899

は愚かだ。

982

影が薄くても計画通りに進みます。

影が薄い、という認識はここまで。そ

999

911

time5 突き進もう、その棘道を。

影が薄い、のにやる気満々です。

影の薄い、きつとそれが一番怖い気が

931

する……

影が薄いために終わりを迎えるのに気

影が薄いとゆつたりとお酒を飲めるの

づきませんでした。

940

です。

影が薄くても簡単には終わらせられま

影が薄い、でも見えてる人には苦勞し

せん。

955

かないかもです。

影が薄くても倍返し、いや10倍返し

影が薄いと、きつと普通の入団試験は

をしたいのである。

970

クリア出来ない。

影が薄い、それだけで人を判断するの

影が薄いのは他の人が濃いせいではな

1052



いのか? | 1066

影の薄さって、日々を過ごせば濃くなる。(byベル) | 1076

影が薄いと周りにも影響を及ぼす。

1091

影が薄いのですが、神様に怒ってもい

いですよね?? | 1107

影が薄いつて、こういう時に実力を発

揮します。 | 1120

影の薄い人がいるといい雰囲気は台無

しです。 | 1129

影が薄くても心配してくれるのは嬉し

いことです。 | 1144

影が薄くても必要なら強行手段です。 | 1156

影が薄い。それは時に、一波乱起こす

ことになる。 | 1171

影が薄いためにあれやこれやの出来事

に関わらない。 | 1183

影が薄いことをここで後悔しないよう

に。 | 1192



# オリ主紹介

—— 章 t i m e 3 に入ったところまでの設定 ——

トキサキ・一 ハジメ

L v . 1

力：I O ↓ I O

耐久：I O ↓ I O

器用：I O ↓ I O

敏捷：I O ↓ I O

魔力：S 9 9 9

## 《魔法》

【一時停止】 サスペンド

- ・ 全ての事象 出来事 を停める
- ・ 停めたものを再生させる
- ・ 再生する際は方向を変えられる
- ・ 必要とするもの以外はオート発動

## 《スキル》

【カミカクシ】

・所有者と主神が認めるもの以外は  
存在本人を認識出来ない

・主神が子を思うかぎり持続する

普通。本人だけが思っているが周りからしたらクレイジーな主人公

顔は整っているが、かといって美形でもなく不細工でもなく、二度三度見ないと覚えられない。

髪は癖ツ毛があり伸ばしすぎると可笑しくなるのでショートカットを維持している。

服装は白のTシャツにグレーのシャツ、ズボンは黒

一時停止により防具は必要としないので常にラフな格好をしている。

性格はマイペースで人に合わせようとせず周りにからしたらとんでもないことを平然とやってしまう。

表情は全く変わらず喜怒哀楽が分かりづらい。

相手の名前を改名する癖がありベルは「ベルベル」、ベートは「ベベート」、女性に対しては「姉」とつけることが多いがエイナだけは「嬢」とつけて、アーニヤに関しては「ちゃん」付けをしている。マトモなのはヘステイアやロキなどの神様とリユールぐらいである。

家族は両親と姉が一人

しかし姉は失踪し、両親は姉を探しにダンジョンに向かい17階層で階層主に襲われハジメを助けようと18階層に通じる穴に投げ入れてハジメの目の前で土煙と共に消えた。

それから18階層で隠れながら姉の手掛かりを探し続けたが見つからず、久し振りに地上に帰ってきたが家は無くなっていた。それからどのようにしてヘステイアとあつたかは未だに不明。

スキルである「カミカクシ」により姿は見えず、ハジメとヘステイアが認めた者にはか見えない。つまりダンジョンのモンスターも神でさえもハジメかヘステイアがアクシオンキツカケを起こさない限りは姿・気配・存在すら捉えることは出来ない。

魔法である「一時停止」はあらゆる事象を止めることが出来る。コップから落ちる水も、叱られ殴られた衝撃も、一撃で跡形もなく消えてしまう攻撃さえも止めてしまう。一時停止で止められても再生すれば動きだし向かってきた衝撃などは方向を変えてカウンターのようにうちかえすことができる。

ステイタスに載っていない魔法でベートが氷付けにされたがそれがどういうものなのかは明かされていない。

変わったあだ名ファイル（まだあるかも？）

ベル  
↓ベルベル

リユール  
↓リユール姉 ↓リユール

シル  
↓シル姉

アーニャ  
↓アーニャちゃん

エイナ  
↓エイナ嬢

アイズ  
↓アイズ姉

リヴエリア  
↓リヴエ姉

レフイーヤ  
↓レフイーヤ姉

リリ  
↓リール

フィン  
↓ダ・団長

ガレス  
↓ガレジイ

テイオネ  
↓ネネ姉

テイオナ  
↓ナナ姉

t i m e l   ここから始まる。

影の薄さでダンジョンに潜っています。

迷宮都市オラリオ

『ダンジョン』と通称される地下迷宮を保有する、いや迷宮の上に築き上げられた巨大都市。

そんな『ダンジョン』では毎日が、1分が、一秒が、命懸けの場所であり、冒険者が集い自らの力と経験と仲間との団結力で攻略する場所。

もちろん全ての冒険者が成功を納めることはない。怪物にやられ、ダンジョンという災害に飲まれ、いくつもの命が散っていった。

それでも冒険者は衰えることはない。

生活のために、仲間のために、富や名声を求めて、自分の命を顧みずにその地へと一歩踏み出してしまふ。

そんな中、ダンジョンに出会いを求める少年がいた。

きっと可愛い女の子と仲良くしたいとか、綺麗な異種族の女性と交流したいとか、英雄の冒険譚に憧れる男が考えそうなことだ。

それでも、不純な動機でも、こうして『ダンジョン』へ潜り、怪物と戦い、ステイタスを上げて、高みへと登っていく。

さてさて、前置きはここまでにしよう。

ようはどんな人でも『ダンジョン』は受け入れてくれる。

しかしその『ダンジョン』が受け入れてくれず、それでも冒険者で在ろうとする者がいたら、

その者は、何を求めたらいいのだろうか……



「すみません、そこを通してくれませんか？」

小さな声が周りの騒音に消され誰も気づかない。それはそうだろう。いまこの『ダンジョン』ではモンスターと冒険者が戦っている

しかし、ただのモンスターではない。

いま冒険者達が闘っているのは……………

「足からだ!!まずはお動けないようにしろ!!!」

「上級魔法を準備しろ!!一発で決めるんだあ!!!」

「ここは17階層。そして目の前には階層主。」

そういま冒険者が戦っているのは階層主だった

出口は階層主の足により塞がっていて通ることが出来ず、さらにその足はすでに冒険者の手によって片足がやられており動かすことは出来ないようだ

「困りました」

本当に困っているようには思えないほど淡々と言葉を発する少年。階層主が倒されれば出口に、上の16階層へ戻ることが出来るのだがそれはまだ時間がかかりそうだ

「攻撃が来るぞおおおおお!!!」

「くそ!!!後衛部隊がやられた!!」

「怯むな!!!」

後衛部隊、つまりは上級魔法による撃退が出来なくなつた。これでしばらくはここで足止めを食らうことにならそうだ。



「何をやっていたんだキミはあああああああ!!

あれほどダンジョンに潜ったらダメだっていったじゃないかあああああ!!!」

帰ってこられた。

しかし神様から有難いお説教をもらっている。

正座をしてただ説教を聞いていた少年だが、少しは言い訳をいたくなったのだろ

う。

「友達が欲しかったので」

「だからダンジョンに出会いを求めたらダメだって言ってるじゃないかああ!!!」

ただでさえベル君が夢を見てダンジョンに向かっているのに………君までそんなことをしたらこのファミリアは簡単に潰れてしまうよ!!」

廃墟と化してある教会でまるで懺悔をしているように見えるが実際は聞き分けのない子供に大人が説教をしているだけ

「大丈夫ですよ。ベルベル一人でも問題ないんでしょう。最近はベルベルが稼いでくれていきますので楽になりました」

「君も冒険者なら稼いできたらどうなんだ!!」

「僕のスキルじゃ無理ですよ」

「ツ!!!」

「ご、ごめんよ………ついカッとなってしまっ………」

「いえいえ、仕方ありませんから」

平然として言う少年に対して神ヘステイアは失態だと落ち込んでいた。この少年はベル・クラネルが入団するずっと前からいるヘステイア・ファミリアの一員。しかし少年のスキルが、少年自身を、ファミリアを現状維持を貫いていた。つまりは貧しい日々から一向に変わることはなかった。

しかしベルが入団したことにより、少しづつだがお金も入ってくるようになった。だからといって少年を責めるのは筋違いだ。だって少年のステイタスは、

トキサキ・一 ハジメ

L v. 1

力：10↓10

耐久：10↓10

器用：10↓10

敏捷：10↓10

魔力：S999

### 《魔法》

【一時停止】  
サスペンド

出来事

- ・ 全ての事象を停める
- ・ 停めたものを再生させる
- ・ 再生する際は方向を変えられる

・必要とするもの以外はオート発動

## 《スキル》

### 【カミカクシ】

・所有者と主神が認めるもの以外は  
存在本人を認識出来ない

・主神が子を思うかぎり持続する

(大体何なんだこの魔法は!!このスキルは!!!)

この二つがあるからこの子は!!)

まず一時停止の因果の停止、そして認識によるオート発動

この因果出来事はステイタスにも影響するようであり、そこに必要とするもの以外はオート発動してしまい、どうやら魔力以外には必要とされないと無意識に判断した。そして停止させられたステイタスはどうしても力などには付かなかった。なので方向を変えて魔力にすべて注ぎ込んだ。

そしてスキルである【カミカクシ】はヘステイアにとってハジメを苦しめていると

いっても過言ではない。主神であるヘステイアとハジメが二人が認めるもの以外はハジメを見ることも認識さえも出来ない。つまりいくらハジメが人間関係を深めようとしてもヘステイアが知らなければ誰もハジメを認識出来ない。ダンジョンではモンスターを不意打ちで倒せるかもしれないが……

魔力以外のステイタスを持たないハジメがモンスターを倒せるわけもなく、ただ防御一点だけでここまでやって来たのだ。

(酷すぎる……あんまりだよこんなのは……)

本人は気にしていないようだが、冒険者としてこれはあまりにも致命的である。モンスターを倒せない、ステイタスも上がらない、知り合いでなければ助けも呼べない。

それでもハジメは諦めていない。

「とりあえずステイタスの更新してもらってもいいですか？ 変わらないかもしれないせんが」

「そ、そんなことないよ!!! 必要となったら更新されるんだ。君がどれだけ求めているか君自身に分かっているはずだからね」



そうまだ諦めるのは早い。きつとこの子は誰もが驚く冒険者になるんだ!!!!

影が薄くてもバイト出来ます。

『豊穡の女主人』。ドワーフの女性が店主をやっている冒険者の間では人気の酒場だ。そこでは様々な種族がウエイトレスをしている。その中で、

「勝手に3日も休むなんて……いい度胸してるじゃないかハジメ」

「すみません」

「謝る気持ちがあるなら休むんじゃないよ!!!」

ドワーフの店主、ミアがハジメの頭上に思いつきり拳を叩きつけた。その瞬間誰もがダメだと、周りからしたら死んでしまうかと思われる一撃だった為に目を閉じてしまっただが、一向に響くような、壊れるような音がしなかったのでゆっくりと目を開けると

「危ないですよ、僕じゃなかったら死んでます」

「なに平然な顔をして言ってるのさ。さっさと着替えて仕事しな!!!」

その拳は確かに頭にあつたがこれ以上は無意味だと分かつたミアはその手を引つめてさっさと厨房へと戻つていく。

それを確認したウエイトレスの皆さんが駆け寄つてきて

「ハジメさん!!大丈夫ですか!!?」

「はい、問題ありません」

「全く貴方つて人は……ミア母さんが怒るのを分かつてやつてますよね」

「仕方ありません、ダンジョンに向かうのは衝動ですから」

それを聞いたシル、リユー達ウエイトレスはハア〜とため息を付いた。これはこれ以上何を言つても無駄だと分かつたからだ。とにかくここでクダクダと話していると自分達にも被害が及ぶと思つたリユーは

「とにかく仕事をしてください。そうすればミア母さんも許してくれるはずですよ」  
「分かりました」

素直に言うことを聞いたハジメは店の奥へと向かつた。そこで動きやすい服装へ

と着替えてまず倉庫の整理を始めた。ハジメがこのバイトをする前までは力のあるミアカリユーなどがやっていたが、ハジメがダンジョンで稼げないと分かってからここへバイトとして入った日から「男なら力仕事を進んでやりな!!」とミアに一喝されてやっている。

まずは酒ダルや酒ビンを移動させた後に、小麦粉など重たいものから軽いものへと順番ずつに整理をしていく。二時間ぐらいかけて大まかな整理が終わったところで、

「トキサキさん、そろそろ開店の時間です。ウエイターの服装へ着替えてください」

「分かりました」

「それとあとでクラネルさんも来られるそうですのでその時間に休憩を取ってください」

「ベルベルが来るんですか、何も聞いてませんでした」

まあ、ヘスティアにあの後スティタスを更新してもらったが結局は変わらなかった。するとこの神様はまるで自分のように「もうーどうして変わらないんだ!!」と怒りだし、バイトの時間になったのでヘスティアをそのままにして出てきたのだった

「……………トキサキさん、一つよろしいですか？」

「なんですか」

「魔法やスキルを教えるのはタブーだとわかっています。ですがあえて聞きます、貴方は一体どんなものを持っているのですか？」

「そうですね、どちらも教えても問題はないんですけど神様に「絶対に教えたらダメだぞ!!!」って言われましたので……………スキルだけ教えますね」

「……………いや…聞いておいてなんですが、教えたらダメなのは……………」

「大丈夫です、僕が怒られるだけですから」

それがダメなのではと思ったが言うのを止めた。ハジメがバイトに来てから不思議なことは何度もあった。もちろんそれが魔法かスキルだとは思ったがそれが何なのかさっぱり分からない。もちろんただの興味本心なのでダメだと言われればそれまでと割りきっていたのだが、案外普通に教えてもらえることになった

「簡単に言えば自分と神様が認めた人しか僕は見えません」

「……………そう、ですか……………」

あまりのことに言葉を無くしたりユ。簡単に、まるで他人事のように喋るハジメに對してどういったらいいのか分からないからだ。確かにこの店でウェイターらしいことはほとんど出来ていない。注文を取ろうにもお客様には気づいてもらえず、だから仕方なく料理を運んだり皿を片付けさせると「いつのまに!!!」とそのテーブルで物が増えたり減ったりして不気味と言われていた。

と、不気味だと言われていたのは初めだけでそれさえもお店の趣向だと思われ始め、今では名物だと言ってもいいほどそれを見たいとお客様が来て売り上げがグリーンと上がった。つまりミアがハジメに對して怒った真の理由は売り上げ貢献であるハジメがいなくなつた為である。

しかし、それはてつきりハジメの技術的なものだと思っていた。それはそうだろう、お店にいる皆はハジメを認識しているのにお客様は誰も気づかないのだ。何かあるとは思っていたがまさか、

(確かにトキサキさんがお店に初めて来たときは、神ヘステシアと一緒に来ていた。その時に私達は二人に認められたということですか)

なら説明がつくが納得というか理解というか現実を認めたくない。ハジメのスキル

は本人だけではなく神ヘステイアが認めなければ認識されない。つまりはヘステイアが知らないもの、そしてヘステイアが嫌いなものに対してハジメは誰一人認識されないのだ。ここでリユーには言っていないがヘステイアが子を想う限り効果は消えない。そうヘステイアがハジメを嫌いにならない限りはこのスキルは継続していく。

「教えてくださいませありがとうございます」

「いえ、職場の仲間ですから」

「そう言つてくださると助かります」

.....

「ベルベル、楽しんでますか？」

「ええっ!!なんでハジメがここに!!!」

「ハジメさん、教えてなかったんですか……」

「バイトしてますとは言いました」

それは言っているとは言いませんよ…とシルとベルが嘆きながらハジメは首を傾げる。『豊穡の女主人』が開店し賑やかになったところでベルが入店し、ミアから大量の食事とシルの巧みな戦略を喰らい驚いていた所にハジメが現れ、もう疲れきっている様子のベルに対してハジメは

「そんなにダンジョン大変でしたか」

「……いや、確かに大変だったけど…今ほどじゃないよ」

「よく分からないことを言いますねベルベルは」

同じファミアなのはどうしてこう話が合わないのかとハジメと出会ってから思っていた。なんか上手く掴めないような感じでキャッチボールをしているのに別のことをやり始めるような……

「ミア母さんから休憩取っていいと言われてますし、ハジメさんもベルさんと一緒に食事なんてどうですか？」



「元々そのつもりです。ベルベル、ゴチになります」

「なんで僕が払うの?!?!?」

「……………お客だから?!」

「二人分も払うお金がないことぐらい分かってるよね!!!」

どうやら冗談が通じないようなので「ベルベルの食べているものを少しもらいます」というとホツとした表情を見せる。しかし厨房からはミアの鋭い視線が向けられていたが無視することにした

「つてか、ハジメはこんな所で食べて大丈夫なの?」

「お客の反応なら問題ないですよ。僕が知ってても神様が知っている人はいない。それに別々に認識して僕を認識した人はいないから見えてませんよ」

「それは気にしてないけど…………あの店長に怒られないの?なんかすぐくこつちを睨んでるけど…………」

「ああ、ベルベルが奢ってくれなくてお店に貢献できなかったから」

「それ僕のせいなの?!?!?」

完全に被害者なのに可哀そうなベル。とハジメの同僚達は同情していた

影が薄くてもケンカ売ります。

ベルと一緒に食事をしてきて休憩を終えようとしたころ、どつと十数人規模の団体が酒場に入店してきた。

その団体——ファミリアの主神を筆頭に小人族、アマゾネス、狼人、エルフ、ドワーフ、ヒューマンと他種族同士が案内された席へと歩いていく。

「ッ!!」

「どうしましたベルベル」

『豊穡の女主人』に入ってきた団体はオラリオ最強の一角〔ロキ・ファミリア〕

そのなかでも一人、ずば抜けてオーラの違う者が、其処らの女性よりも、美しい、綺麗、そういう言葉がしか当てはまらない女性冒険者がお店へと入ってきた

「……おい、もしかしてあれ……」

「……ああ……巨人殺しのファミリア」

「第一級冒険者のオールスターじゃねえか」

「じゃ、あれが【剣姫】なのか……」

どうやらお客と同じようにベルベルもあの剣姫を見ているようだが、お客とは違う見  
る目が違うことに気づいた

「……へえ、ベルベルは見る目はあるんですね」

「な、なに言ってるのハジメ!!!」

「いいんじゃないんですか、夢は見るものですから。それからどうなるかは知りませ  
ん  
が」

「フオローしたいの!!? 落としたいの!!?」

誤魔化しているが明らかに好意があるのは分かる。すると休憩しているハジメに向

けてミアが

「坊や!!仕事だよ!!いま入ってきた客に持つていきな」

「分かりました、それじゃベルベル楽しんで」

「う、うん……」

未だに真つ赤なベルは空返事をしながら料理を食べている。その様子に特に気にも止めずにハジメはミアから料理を受け取り先程来たお客「ロキ・ファミア」のテーブルに料理を並べる。

「うおっ!!!料理がいつの間にかある!!!」

「おお!!!今日は「ステルス」がおるか!!!」

相変わらず訳の分からん奴やな、この神でも見抜けないなんて一体なんやホンマに……」

その名前はハジメがバイトを始めてから一週間もせずに付いた名だった。誰にも気

付かずにテーブルに料理が運ばれ知らないうちに空になった皿が無くなっている。

初めはオバケとか幽霊とか騒がれていたが、ミアから従業員になにいつてるんだい!! と激怒されてそれからお客の間では存在するが見えないという意味をこめて「ステルス」と名付けられた

「それはともかく、ダンジョン遠征みんなごころうさん! 今日には宴や! 飲めえ!!」

主神であるロキ様のもと、ロキ・ファミリアの宴が始まった。それからベルは目を皿のようにしてヴァレンシュタインさんを見つめていた。まるで夢心地のような表情に先程とは違う意味で笑みがこぼれる。

ハジメはというと次々と注文された酒や料理を運んでいた頃、宴が半ばに差し掛かりヴァレンシュタインの向かいの狼人が声を張り上げた

「そうだ、アイズ! お前のあの話を聞かせてやれよ!」

「あの話……?」

ヴァレンシユタインさんは心あたりがないのか首を傾げる。

「あれだって、帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！ 最後の1匹、お前が5階層で始末しただろ!？」  
「それで、ほれ、あん時いたトマト野郎の!」

その瞬間、ベルが凍りついたように動きを止めた

「ミノタウロスって、17階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐに集団で逃げ出していった?」

「それぞれ! 奇跡みてえにどんどん上層に上がっていきやがってよつ、俺達が泡食って追いかけていったやつ! こっちは帰りの途中で疲れていたのによ」

ハジメは未だにこの話がベルのことを言われていることに気づいておらず料理を運ぶ

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出しっていうようなひよろくせえ冒険者が!」

抱腹もんだったぜ、兎みたいに壁際へ追い込まれちまってよお! 可愛そうなくらい

「震え上がっちゃまって、顔をひきつらせてやんの！」

「ふむう？ それで、その冒険者どうしたん？ 助かったん？」

「アイズが間一髪つてとところでミノを細切れにしてやったんだよ、なっ？」

「……」

「それでその震えてた方、あのくっせー牛の血を全身に浴びて……真っ赤なトマトみた  
いになっちゃまったんだよ！」

「うわあ……」

「アイズ、あれ狙ったんだよな？ そうだよな？ 頼むからそうと言ってくれ……！」

「……そんなこと、ないです」

「それにだぜ？ そのトマト野郎、叫びながらどっか行っちゃまって……ぶくくっ！  
うちのお姫様、助けた相手に逃げられてやんのおっ！」

「ちよつと落ち着いてきたのでハジメはベルの所へ向かおうとしたのだがどうもが  
おかしい。」

「しかしまあ久々にあんな情けねえヤツラを目にしちまって、胸糞悪くなったな。野郎



のくせに、泣くわ泣くわ」

「……あらあゝ」

「ほんとぎまあねえよな。まったく、泣き喚くくらいだったら最初から冒険者になんかなるんじゃないっての。ドン引きだぜ、なあアイズ？」

「ああいうヤツラがいるから俺達の品位が下がるっていうかよ、勘弁して欲しいぜ」

少しずつベルの表情が悪くなっていく。それに伴ってさつきから聞こえてくる声が、言葉が、耳に入ってくる

「いい加減にそのうるさい口を閉じろ、ベート。」

ミノタウロスを逃したのは我々の不手際だ。巻き込んでしまったその少年に謝罪することはあれ、酒の肴にする権利はない。恥を知れ」

「おーおー、流石エルフ様、誇り高いこつて。でもよ、そんな救えねえヤツラを擁護して何になるってんだ？」

それはてめえの失敗をてめえで誤魔化すための、ただの自己満足だろ？ ゴミをゴミって言って何が悪い」

ほうーなるほどこの話の題材はどうやらベルのようだ。

「アイズはどう思うよ？ 自分の目の前で震え上がるだけの情けねえ野郎どもを。あれが俺達と同じ冒険者を名乗ってるんだぜ？」

「何だよ、いい子ちゃんぶつちまって。……じゃあ、質問を変えるぜ？ あのガキどもと俺、ツガイにするなら誰がいい？」

「うるせえ。ほら、アイズ、選べよ。雌のお前はどの雄に尻尾振って、どの雄に滅茶苦茶にされてえんだ？」

すでにこのベートと呼ばれる獣人の声しか聞こえない

……なるほど、ファミリアの仲間をこんな風に言われるとこんな風になるんですね  
……

「黙れババアツ。……じゃあ何か、お前はあのガキどもに好きだの愛してるだの目の前で抜かされたら、受け入れるってのか？」

「はっ、そんな筈ねえよなあ。自分より弱くて、軟弱で、救えない、気持ちだけが空回りしてる雑魚野郎に、お前の隣に立つ資格なんてありはしねえ。他ならないお前がそれを

認めねえ」

一刻も早くその口を閉じさせたかったのでアレを手にして獣人の所へ向かった。僕が見える人達は必死に止めようと言っているようだが、

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合

「五月蠅いから黙ってください。」

ハジメが持っていたのは真つ赤に染まった唐辛子たつぷりの液体。それはもう飲み物、食べ物ของ 枠を越えていておりそれをベートの口の中へと押し込んだ。

「ぎやあああああああああああ  
!!!!!!」

「ハ、ハジメツ!!!!」

「何してるんですかトキサキさん?!?!?!」

さつきまで落ち込んで苦しんでいたベルが、どういいうわけか驚いている。おお、少しは元に戻ったかな？

「トキサキさん、貴方は何をしてしまったのか分かってるんですか!!!」

「五月蠅いワンコに躰です」

「ロキ・ファミリアの第一級冒険者なのですよ!!そこら辺のチンピラとは訳が違う!!」

リユーからの説教をされていると苦しんでいたベートが近づいてきて

「そこにいるのかクソステルスが!!!」

「そこそせずに文句があるなら直接向かってきたらどうだああ!!!」

「待ってください!!!この人には理由が!!!」

「知るかあ!!!」

俺が誰か分かってやってんだよなあ!!!だったら出てきやがれ!!!てめえが売ってきたケンカだあ、買ってやるよ!!!」

完全に自分を見失っているベート。ロキ・ファミリアはベートの暴走に呆れかえっている。しかし主神であるロキは

「なにやってるんやベート。お店の邪魔になるやろうが、やるなら外でやらんか」  
「止めないんですかロキ様!!」

「無理や無理。あのバカ完全に頭に血が上って止められんわ。それに……ステルスの正体が見れるならベートの一人くらい問題ないわ」

何気に酷いことを言っているように聞こえるが、信頼しているからこそ言える言葉とも取れる。

すると厨房から出てきたミアがハジメに向かつて

「坊や!!店に迷惑かけんじやないよ!!!明日から一週間給料なしだからね!!!」

「はい、分かりました。」

「本当に分かっているのかい!!」

「負けたら一ヶ月タダ働きだよ!!!」

「分かりました」

「ミア母さん!!何を言ってるんですか!!!」

「安心しな。流石に勝ちはしないだろうが負けはしないよ」

影の薄さで野良犬を倒しましょう。

「長期戦だと周りに迷惑をかけるからな

ルールはこつちで決めるからええな」

「勝手にしろ、あの野郎をぶっ飛ばせるなら何でもいい」

路上にはロキ・ファミアや『豊穣の女主人』にいたお客、そして野次馬がぞろぞろと集まってきた。それはそうだろう、あのロキ・ファミアがそれも第一級冒険者であるベートがケンカをするのだ。そんなものがダンジョン以外で見えると分かると誰もが見たくなる。

そしてその相手が、

「本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫です」

「ミア母さんが大丈夫だと言っていました……貴方はまだ駆け出しの冒険者。十分に注意をしてください」

「はい」

ミア以外はハジメの応援の為に外に出ている。一人店にいるミアは未だに料理を続けていている。それは誰のためなのか……

「……ハジメ……」

「せっかくの料理が不味くなりましたね。あつ、不味いはミア母さんに失礼ですね。うーん……野良犬のせいで気分を害したというべきですかね」

「いくら聞こえないからって言い過ぎだと思うよ!!!」

「ベルベルは優しいですね。明らかに向こうが悪いのに。」

そうベルは優しい。いくら自分が蔑まされようとも他の人のために一緒に考える。それはなかなか出来ることではない。だからこそベルのために

「だからこそベルベルの為に僕が怒るんです」

「……ハジメ……」

「そして再起不能にしてやります」

「完全に私情挟んでるよね!!!」

最近は何れ何れのツツコミが上手くなってきた気がするなと思いつながらハジメは、人によるリングの真ん中にいるベートと対面するようにその場に移動した。もちろんそこにハジメがいると認識出来るのは仕事仲間であるリユー達だけであるために

「ロキ様。トキサキさんを見るのが出来るのは私達『豊穰の女主人』だけです、私が審判をしても宜しいでしょうか?」

「構わへんけどヒイキはいかんで。いくらステルスが見えへんと言っても結果を確かめる術はいくらでもあるんやからな」

いつも惚けるような表情をしているロキがまるで獲物を刈り取ろうとする鋭い眼でリユーを見ている。普通なら怯えたり何やら反応があるが全く臆せず

「もちろんです。神ロキ様に誓ってそのようなことは致しません。」

「そうか、ならええで。ベートもええな」

「さっさと始めろ!!」



「短気な奴やな、今からルールを説明するからちゃんと聞きや」

クソツと舌打ちをしているベートだがそこはちゃんと割りきって大人しく聞くことにしたようだ。それを確認したロキはルール説明を始めた

「ルールは簡単や。相手に一撃を入れたら勝ちや。そやけどステルスは二回目が一撃と見なす。死に関わる攻撃は禁止。ええな？」

「ああ」

「分かりました」

「了解したそうです」

「そか、なら準備はええか？」

戦闘体勢に入ったベートと特に構えもせずただ立っているハジメを確認したリューはロキにOKの合図を送り、それを受け取ったロキは片手を空に向けて上げて開始の合図と共に手を振り降ろす

「開始や!!」



(さあ、さっさと来やがれ!!!)

ベートは待っていた、ステルスが攻撃するのを。

無闇に周りを攻撃すればいつか当たるだろうがそれだと格好悪い。それに一発目ではなく二発目が一撃となっているのだ、たかが低レベルの冒険者の攻撃なんぞ喰らったところで何ともない。

(その一発目から二回目に移行する間に決めてやる!!!)

ステルスが放つ一発目から二発目の間に攻撃しようと考えている。僅かな間しかないと思うだろうがベートにすれば十分な時間がある。だから今ベートが考えるのはただ一つ

(研ぎ澄ませ!!何処から攻撃しようが直ぐ様反撃来てやるぜ!!!)

ロキがステルスへとハンデをあげたつもりだろうが所詮は低レベルの冒険者で自分は第一級冒険者、これぐらいハンデにもならない。

(側面から来るか、後ろから来るか、上から来るか、飛び道具でも使ってくるか……なんにしろその一発目を当てた時点でテメエは終わりだ!!!)

さっきまで頭に血が登っていたベートなら、もしかしたら少しの可能性があったのかもしれない。だが冷静なベートはすでに死角からの攻撃だろうとも対処できるぐらい頭が冷えていた。

全く負けるイメージがなかった。これは一方的なものであり、憂さ晴らし、どれだけ足掻こうが弱者は弱者だと知らしめるためものだとだから思いもしなかった。

「二発目の、一撃の攻撃が入りました。勝者、トキサキ  
一」ハジメ

「……………ハア？」

言っている意味が分からなかった。いまこのエルフは何を言いやがった……………二発目が、一撃が入った…だと……………!!!

気づいたときにはエルフの前に立ち思いつきり睨み付けながら

「ふざけたこと言ってるんじゃないぞ!!!!

二発目だあ?そんなもの俺は喰らってねえぞ!!!!!!

「いいえ、確かに二発目が入りました」

「デメエ!!!」

「貴方は気付かなかったかもしれませんが、貴方の目の前まで歩いていき拳で二発目、確かに当たったことを確認しました」

な、何を言っているのか分からなかった。ベートだけでは無い。周りの人達さえその真実が信じられなかった。確かに姿も認識出来ないとはいえ「攻撃」さえも感じれない

と、いうのか?!

「そんな攻撃当たっても認識できへんという事か?

もう完全な暗殺者アサシンやないか」

「それは……違うようです神ロキ」

「どういふことや?」

「………詳しくは教えてくれませんがトキサキさんは力「0」だそうです。なので攻撃が当たっても感じられなかったと………」

「は、はあー!!? なんやそれは!!! いくら魔術専門やとしても力「0」なんて、というかファミリアに入ってきた子でも0なんてなかったで!!!」

ざわめきが走る。それはそうだろう、冒険者でもあるハジメが力0でいることに。そんなの……

「……はっ、なんだそりや……冒険者ですらねえってか!!!」

「ツ!!! そんな言い方!!!」

「ウルセエよ雑魚が。ああ、もしかして力がまったくくない奴が化物を、ダンジョンを攻略

できると、本気で思っているのか?!?!?

ベルの必死の言葉も簡単に崩された。それはベル自身が分かっているからだ。力無きものがダンジョンを攻略なんて、ましてやあの化物を倒すことなんて出来ないとその身にいくつも、いくつも、いくつも、いくつも、刻み込んできたのだから……

「……興が覚めたぜ、クソが……」

「ちよつとベート!!どこへいくのよ!!!」

「ウルセエ!!!テメエには関係ねえだろうが!!!!!!」

近くの木箱を蹴り飛ばして仲間の制止も聞かずに去っていく。その姿にファミリアの神であるロキは、

「あかんわ、あのバカいまからダンジョンに一人で行くつもりや」

「……私も、行ってくる」

「ええ!!アイズたんも行くんかゝ酌してくれるっていったやんかゝ」

そういいながら第一級冒険者にフラれた神ロキはトボトボとお店の中に戻り、残りのファミリアと飲むことにした。そして二人の第一級冒険者はダンジョンへと向かう。その姿に困惑を隠せないベルは近くにいたりユーへ話しかける。

「ど、どうして突然ダンジョンなんかに行っただんでしょうか？」

「……見ていられなかったからじゃないでしょうか？」

力0という冒険者ではありえないステイタス。それでも冒険者であるというなら、あの人達にとつてトキサキさんは冒険者としての戒めだったんじゃないでしょうか」

「……………戒め……………」

考え込むベルの元へなん気なく戻ってきたハジメは

「さあベルベル。食事の続きといきましょう」

「……………ごめんハジメ!!これで支払いしておいて!!!」

ベルは手持ちのお金を全てハジメに渡して走り去っていった。いつの間にか店の外に残されたのはハジメとリユーだけだった



「頑張りますねベルベルは」

「……貴方は、トキサキさんは、行かなくていいんですか？」

「バイトを抜け出したら今度こそクビですよ」

「ミア母さんがそう簡単に貴方をクビなんてしません」

「………行きませんよ。これはベルベルの冒険ですから」

「トキサキさんは、冒険はしなくていいんですか？」

少し間が空いた後、表情も声も変わらずに淡々と答えた。

「僕は……冒険しているんですかね………」

影の薄さはサポーター向きだそうです。

「な、に、を、やってるのよ貴方達はアアアアアアアアアア!!!」

ダンジョンを運営管理する『ギルド』の窓口受付嬢、エイナ・チュールは、名物になっているだろうこの大声を出した後に頭を抱えていた。

目の前にいる白髪の少年は碌な装備もなくダンジョンに向かいボロボロになって帰ってきた。

そして黒髪の無表情な少年はバイト先でロキ・ファミリアの第一級冒険者にケンカを売りオラリオ中の話題になった

そして今ダンジョンから帰ってきたベルとその付き添いのハジメを叱っているエィナである。

「ベル君あれほど冒険者は冒険したらダメだって言ったでしょう。只でさえ一人でダンジョンに向かっているのに……」

「僕もいますよ」

「ハジメ君も勝手にダンジョンに行っているでしょう!!

それもベル君よりも酷くて……もう二人とも私をそんなに困らせたいの!!!」

「そんなつもりはないですよエイナさん!!」

周りからしたらエイナは「二人に説教している」ように見えるが、そこには一人に対して二人分説教しているように見えている。以前にも同じようなことが何度もありエイナと同じ職員からは「エイナが仕事のし過ぎで壊れた」と見られてしまった。いくらそこにもう一人いると言っても誰も信じてくれない。

ハジメがエイナに会った時はヘスティアと共に来ており、ハジメの担当だということではスティアも認めてくれた。なのでエイナはハジメを認識出来る。基本的にハジメはどんな人でも好意的に思っている。しかし神であるヘスティアでも全てのものを好意的になんてことは出来ない。それに常にハジメと一緒にいることも出来ない。だから大抵のものにハジメを認識することは出来ない

ともかくそんな状況下においてもすでに免疫のついたエイナは気にせずに説教を続ける。

「ハア、とにかく二人とも今度からは一緒に行動すること」

「やめたほうがいいと思いますよ。僕ではベルベルの足手まといになるだけです」

「ハジメはまだそんなこと言ってるの!!」

「ハジメ君はベル君と一緒にのファミリアなんでしょう。だったらベル君を頼つてもいいと思うなー。戦闘に参加しろって言っているわけじゃないの、ベルのサポーターとして手助け出来るんじゃないかな」

「……………ベルのサポーター、ですか……………」

ふむ、と考え込むハジメ。

サポーター、ベルと共に戦うではなくベルの手助けをする。確かにそれなら自分にも出来るかもしれない

「でもサポーターと言っても何をすればいいんでしょうか?」

「口で説明するのは簡単だけどこういうのは経験するのが一番じゃないかな。ベル君にとってのサポーターだから一緒にダンジョンに行つて何をすればいいのか、どうしたら助けになるのか、実感するのが一番の近道だと思うの」

「なるほどですね」

今まで考えたことのないこと、自分がモンスターと戦うだけではなくベルの為に手伝いをする。そんな新しい事に挑戦すると考えたトキサキは表面では表情では分かり難いがかなり喜んでいる

「分かりました、前向きに考えさせてもらいます」

「前向きじゃなくてやってほしいところなんだけどな…」

「なるほど、つまりはエイナ嬢は「だから嬢ってつけないでって言うてるでしょう!!!」今すぐにでもベルのサポーターとしてやってもらいたいんですよね」

「そうじゃないとベル君一人じゃ心配じゃない」

するとまた考え込むように唸るハジメ。それを見たベルは「あつ、ヤバイかも」と直感的に感じ取る。そしてその分かり難い表情のまま

「いま神様は『神の宴』でいません。そしてエイナ嬢はベルベルと担当者ですよね」

「そうだけど……」

「つまりは今現在僕達の行動の決定権はエイナ嬢にあるわけですよね」

「えっ、なに？何を言っているの？」

エイナが気づいたときにはもう遅かった。トキサキがこれだと思ったら誰も止められない。特にこういう面倒くさいことが起きるときは

「それではお願いします」

強制的に話が進んでいくのだ。

.....

「僕は今日から1週間タダ働きをしないといけませんでしたが、ベルのサポーターとして付き添うことになりました。ベルがダンジョンに行ってお金を稼いで貰わないと食べ物さえ買えません。つまりはベルは絶対にダンジョンに向かう必要があります。そしてそんなベルのサポーターと僕も付き合わなければいけません。すみませんが1週

間初日で休みを取ることになりました。

ということではベルのサポーターを決めてくれたエイナ嬢と一緒にこれからの僕のシフトを考えて頂きたいのですが宜しいですかミア母さん」

「……………ほう」

「……………」

僕の目の前には今にも激怒しそうなミア母さん。隣には顔が真っ青になりかけているエイナ嬢。そして僕の後ろには呆気にとらわれているベルがいて、周りのお店の仲間も突然のことに驚いている。

「人様のバイトのシフトを勝手に変えるなんて、いい度胸してるじゃないか」

「ちよつ、ちよつとお待ちください!! 勝手なことだとは分かりますが、ハジメ君も冒険者ですしバイトよりもダンジョンに行った方が……」

「つまり私達の仕事が冒険者より劣っていると聞いたのかい?」

「ち、違います!!! ハジメ君にとってはダンジョンに行った方がいいと思うだけです!!!! ベ

ル君一人でダンジョンに行かせるわけには行きませんし、だったらハジメ君がサポーターとして行ってくれろと安心するんです」

「ちよいと心配し過ぎじゃないか。大体の男なら危険の一つや二つ自分の力で乗り越えなくて何が冒険者だい!!」

「ベル君はまだ初心者なんですよ!!!!そんな子が危険の一つあるだけでも向かわせたくないのに、一二つも三つもあつたら命がいくつあつても足りません!!」

「命張らずに何が冒険者だあ!!いいかい、冒険者ならダンジョンで冒険しなきゃ冒険者じゃないのさ!!!!」

「そういう考え方は如何かと思えます!!!!初心者にも同じようなことを簡単に言えというのですか!!モンスターの倒し方も知らない子が簡単に命を落とすような場所なんですよ。冒険者は冒険をしない。これはダンジョンを冒険することに対して大事なことです!!」

「冒険者は冒険しない、なんて何バカなことを言ってるんだい!!この街は冒険者がいることよって賄っているといつても過言ではないんだよ!!あんだだつてギルドの人間



なら分かっているはずさ、冒険者は冒険するからこそこの街が成り立っていることを  
!!」

「そうだとしても……」

「何を言っているんだい……」

「違います……」

「分かってないね……」

「いいか……」

「ちが……」

「トキサキさんはどうしてこうもトラブルを持つてくるんですか？」

「そんなつもりはないのですが……解決しないと僕が怒られると思ひまして」

ゆっくり近づいてきていたりユーはハジメに愚痴をこぼす。そうでもしないとこの場の空気に耐えられないと感じたのだろう。実際リユー以外の店員は聞こえないふりして掃除を念入りに行っている

「間違いなく後で怒られますよ、お二人に」

「……………あー……………ダンジョンに行きましようかベルベル」

「僕まで巻き込む気でしょうハジメ!!!」

その後今日1日と明後日だけ休みをもらったハジメ。しかしその後二人から別々

にこつてりと怒られたのは言うまでもない。

# 影が薄いのにトラブルがやってきました。

あれから三日後

未だに神ヘスティアは帰ってこない。出掛ける前から何日か帰ってこないとは聞いていたがこんなに時間がかかるとは思っていなかった。

だからいまはベルベルと一緒に朝食を取り、今日も朝からダンジョンに向かうことになっていった。

ちなみに冒険以外はバイトをしているのだがどういいうわけかリユー姉が「トキサキサさん、休憩を取った方がいい。一体何時間働き詰めなんですか?」とか、シル姉が「ミア母さんも休んでいいって言ってますよ」とか、本人であるミア母さんが「元気なのはいいけど体を壊したらただのバカだよ!!いい加減に休みな!!!」と激怒された。

キッチンとバイトしているのにどうして怒られるのか分からないが、働いた分以上に給料をもらえたので気にしないことにしている

「神様、まだ帰ってきませんね……」

「あの方は抜けている所がありますから道に迷っているんじゃないですか?」

「……ハジメって神様に対してもブレないよね……」  
「そうですか？」

朝食を食べ終わりダンジョンに向けて準備をして家を出る。失われるものは少ないが念のためにお金が入っている机には必ず一時停止で開かないようにしてあるので問題は無い

「戸締りはいいですね、さて行きましようか」

「本当にハジメの魔法って便利だね。金庫番とか向いてるんじゃないの」

「失礼ですねベルベルは、それでも僕は冒険者。それに金庫番になっても泥棒が僕の姿を見えないから次々に現れて対処するのが面倒くさいです」

「今のバイトはいいの？大変じゃない？」

「ミア母さんやリユ姉にシル姉の皆さんは良くしてくれますから。それにお客さまをからかうのは楽しいです」

「そんなことしてるから怒られるんだよ……」

昨日のバイト中もベルベルが夕食を食べに来てくれたので知っているのだが、姿が見

えずに料理がいつの間にか現れる「ステルス」は店の名物となっている。なのだからか……サービスとして背後から「うわっ!!」と脅かしたからか……サービスをしているのだがミア母さんに度々怒られている。サービ……からかっているだけなのだが。

「それはともかく」

「誤魔化したね……」

「ともかくこの前のダンジョンはなかなか良かったと思います。エイナ嬢が言ったように僕はサポーターに向いているようですね」

「……あれってサポーターの仕事なのかな?」

「ベルベルの戦闘を効率よくしているじゃないですか」

「そうなのかな……」

納得いかない顔をするベルベル。何が不満なのだろうかと考えながら歩いていると『豊穡の女主人』の近くを歩いていることに気づいた。店から出できた猫キャットピープル人のアーニヤちゃんがこつちに気づいて

「おーい、鉄仮面こつちにくるニヤー」

「いい加減に鉄仮面は止めてくださいアーニヤちゃん。それだと僕はあまり話さず、考えていることを表に出さない、無口な・押し黙った・寡黙な・あまり喋らない・口数の少ない・口が重い・めつたに口を開かない・感情を表に出さない・何を考えているか分からない・口数が少ない・静かな・物静かな・喋らない・クールな・ポーカーフェイスみたいじゃないですか?」

「絶対に無口だけはないニヤァ……それにアーニヤはアーニヤだニヤァ!!年上だから「ちゃん」付けするなニヤァ!!!」

「しかしリユー姉とシル姉とは違い、明らかに子供なので」

「失礼な事をいうなニヤァ!!!」

両手を上げて威嚇をしてくるアーニヤちゃんに何故かポケットに持っていた猫じやらしをユラユラと揺らす。すると目の前に揺れている猫じやらしに反応するアーニヤは左右へと動くそれを追いかける。ある程度遊んだアーニヤはまるで意識を取り戻したように「ハッ!!」と表情をして

「アーニヤで遊ぶなニヤァ!!!」

「すみません、つい」

「ついで遊ぶなニャー!! その白髪頭も見えてないで止めるニャー!!!」

「す、すみません!!!」

「本当ですよベルベル」

「ハジメが悪いって分かってる?!?!」

するとはあーとため息をつきながらお店から出てきたリユー姉は、いまにも飛び付こうとするアーニヤの肩に手を置いて

「落ち着いてください。トキサキさんが人をからかうのは今に始まったことではないはずですよ。毎回相手していると身が持ちません」

「それはそうだけどニャー…:リユーはそんな被害がないから言えるんだニャー!!」

「当たり前です。リユー姉は僕の憧れの方なのですから」

すると普段は冷静なリユーの頬が若干赤く染まっているように見えたが、直ぐ様後ろへ向いたので本当だったのか分からない

「ちよつと待つニャー!!」



「待ちません。受け付けません。」

早く用件を言つてくさい」

「む、ムカつくニヤァ……ああもうー!!これをシルに届けるニヤァ!!!」

そういつて悪意を込めてハジメに投げつけたのは財布。それも女の子らしい財布であり、これをシル姉に届けるということとは

「お使いに行つたのに財布を忘れた愉快なシル姉、ということでしょうか」

「いえお休みを貰つて怪物祭モンスターファイリアに行つたのですが財布を忘れたようで」

「なるほど怪物祭モンスターファイリアに向かつたのに財布を忘れたドジっ子なシル姉、ということですね」

「……もう、それでいいですので渡してもらえませんか？ 私達は仕事がありますのでお願いしますクラネルさん」

「ええっ!? ハジメじゃなくて僕ですか!!!」

「……………何故かトキサキさんに渡すとトラブルに巻き込まれそうな、そんな予感しか  
しませんので」

「酷い」と言いますね」

それでは僕がいつもトラブルに巻き込まれていると言っているようですね、本当に失礼です。

「もう何処にいったのでしょうか？」

ここは闘技場の周りの一角。さっきまで一緒にいたはずのベルベルが勝手に何処かに行ってしまった。少し目を離れた隙に……

「あつ、ハジメさん」

「シル姉、こちらにいたんですか」

「ここでシル姉に会うということはやはり僕がトラブルを招くなんてないことが証明されましたね。うん。」

「こちらって…私に用があつたの？」

「ありましたがベルベルがいないと達成できませんね。ちなみにシル姉の財布を届けにきたんですよ」

「私はそんなドジじゃないですよ！ほらちゃんと……」

すると財布がないことに気づいたのかパタパタと身体中を調べ回っている。その現実に気づいたシル姉は

「…………えくと…………」

「モンスターフライデー」

「怪物祭に向かったのに財布を忘れたドジっ子なシル姉、ですね」

「事実だけと言わないでー!!」

可愛らしく真っ赤になったシル姉は両手で顔を塞いでその場に座り込む。

「可愛いですから問題ないですよシル姉」

「こ、こういう時にそんなこと言わないでください!!」

そんなやりとりをしているなか、周りがざわめきだしてきた。何事かと立ち上がったシル姉の不安は的中することになった。そして

「モ、モンスターが逃げ出したぞー!!!」

その叫び声と共に少し離れた場所で爆音と粉塵が立ち上がった。次々と何かを追いかけるように立ち上がる粉塵。

「モンスターって……」

「どうやら本当にトラブルがやってくるなんて……うーん、これは困りましたね」

「ハジメさん、安全な場所に逃げましょう!!」

「そうですね、シル姉だけでも安全な場所に行つて貰わないといけませんね。移動しましょう。」

その言葉に初めは唾然としていたシル姉だったが、その意味を理解したのかハジメの腕を取つて

「ハジメさんもですよ!いくら冒険者でも相手はモンスターなんですよ!危険ですよ!」

「すみませんがベルベルを探さないといいけませんので、あの子は迷子になっているようですし僕が見つけてあげないと」

その言葉とハジメの瞳を見たシルは分かつてしまった。きつとこれ以上何を言つても聞いてくれないだろうと。それにハジメには「アレ」があるから……なら、

「ハジメさん……：……気を付けてください」

「はい、ベルベルを見つけて財布を渡さないといけませんので待っていてくださいね」

さてさて、何処に行ったのかなベルベルは…

影の薄さがついに主人公なしでストーリーを進めます。

時間は遡り、大通りに面する喫茶店、その二階。

通りを一望できる窓際の席には長い紺色のローブを羽織っている『美の神』フレイヤと、淡色の朱髪にシャツとパンツというどこかだらしない男のような印象のロキと、鞘を収めた剣を携えロキの護衛するかのよう位置に立っている金髪金眼の少女アイズがいた

そしてこの神同士が集まっている理由は、

「率直に聞く。何をやらかす気や」

「何を言っているのかしら、ロキ？」

「とぼけんな、あほう」

ロキはその細い目を猛禽類のように鋭くフレイヤを睨む

「最近動き過ぎやろ、自分。興味ないとかほざいておった『宴』に急に顔を出すわ……………」

今度は何を企んどる」

「企むだなんて、そんな人聞きの悪いことを言わないで？」

「じゃかあしい」

視線の応酬が続くなか、おもむろにロキは脱力し、それまでの雰囲気霧散させ、確信した口調で声を打つ。

「男か」

「……」

女神は答えない、ただフードの奥で微笑を称えるのみ。

だがロキはその笑みを肯定と取ったようだ。

呆れたように長く大きなため息をつく。

「はあ………つまりどこぞの【ファミリア】の子供を気に入ったつちゅう、そういうわけか」



フレイヤの多情……いわゆる男癖の悪さは、神々の中でも周知の事実だった。気に入った異性——もっぱら下界の子供達——を見つけてはすぐにアプローチを行い、その類ない『美』を用いて自分のモノとする。そして今回目をつけたのは恐らく他「ファミリア」の構成員。

「つたく、この色ポケ女神が。年がら年中盛りおつて、誰だろうがお構いなしか」

「あら、心外ね。分別ぐらいあるわ」

「抜かせ、男神どもも誑たぶらかしとるくせに」

「彼等と繋がっておけば色々便利だもの。何かと融通が利くわ」

かつ、とロキは喉を鳴らす。

しばらく間が空いたが再びロキが

「で？」

「……………」

「どんなヤツや、今度自分の目に留まった子供ってのは？いつ見つけた？」

教えろ、とロキは口端を吊り上げる。

「……………」

「そつちのせいでうちは余計な気を使わされたんや、聞く権利くらいあるやろ」

強引な理由を振りかざすロキに、フレイヤは頬を左手、窓側に向けた。

メインストリートに行く大勢の子供達を眼下に置く。あたかも過ぎ去ったいつかの光景を思い出すように、フードの奥の銀瞳が遠い目をした。

「……………強くは、ないわ。貴方や私の「ファミリア」の子と比べても、今はまだ頼りない。少しのことで傷付いてしまい、簡単に泣いてしまう……………そんな子」

「でも、綺麗だった、透き通っていた。

あの子は私が今まで見たことのない色をしていたわ」

「見つけたのは本当に偶然。たまたま視界に入っただけ」

「あの時も、こんな風に……………」

日の光が霞む早朝、西のメインストリート。

通りの向こうから、あの少年がこちらへとやって来て。

そう、たつた今、視界の中を走り抜けていったように。

—

その銀の視線が、冒険者の防具を纏った『白い髪の少年』に釘つけとなった。

ひしめく人の群れに縫って時には減速しながら、時には足を止めながら、先へと駆けていく。

そんな中、その少年と同じように人の群れを抜けて、いや、「人が何故か避けて出来た、人と人の隙間」が並走しているように見えた。しかしそこには誰もいない。それもすぐ隙間はなくなり人で溢れる

ただの偶然だろう、とフレイヤは思った。

身を隠す物は存在し、それを使っている可能性もあるが、それがどうしても少年を追いかけていると判断出来ない。あの少年はまだ弱い。その少年ファミリアは小さく自分以外が目をつけることはあり得ないと自覚しているからだ。なので、そんな考えはず

ぐに消え再び少年の背中を見つめる

その足が向かう先は闘技場、怪物祭。周囲の流れに同伴するように少年は円形の巨大施設に進路を取る

その背中を見つめるフレイヤは、ゆっくりと、轟惑な笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、急用が出来たわ」

「はあっ？」

「また今度会いましょう」

ロープでしっかりと全身を覆い隠し、店内を後にする  
その場には残されたロキとアイズだけが残された。

「何や、アイツ。いきなり立ち上がって

ん？ アイズ、どうした？ 何かあったん」

「……いえ」

何も、と続く言葉とは裏腹に、アイズは外を見続けていた。

彼女の金の瞳は、奇しくも女神の銀の瞳と同じように、見覚えのある白い髪を追っていた。

そして女神の銀の瞳が追うのを止めた隙間も一緒に。

.....

ヘステイアはヘフアイストスから作ってもらった『ヘステイア神のナイフ』を手に、『モンスターファイリア怪物祭』が開かれている東のメインストリートに向かっていた。

しかし東のメインストリートを目前にして一気に人の密度が増したために馬車が進まなくなった。その為裏道を使いメインストリートに向かっていたヘステイアの前に

「あれ、もしかして、フレイヤかい？」

「.....ヘステイア？」

「君も怪物祭を見にきたのかい？ こんな道を通るなんて、随分と急いでいるようじゃ

ないか」

「……ええ。人通りが激しいところは堂々と出歩けないから、こうして人目を忍びながら先を急いでいるの」

「あー、『美の神』も大変だねえ」

美の化身とも言える彼女が表通りを闊歩すればそれだけで周囲は大混乱だ。

フードの下で微笑するフレイヤに、ヘステイアはうんうんと頷く。

「あつ、そうだ。フレイヤ、ボクの「ファミリア」の子達を見なかったかい？今探しているところなんだ」

「……………」

「白い髪に赤目をしたヒューマンで……………そうそう、ここう、兎っばい！」

手を振らながら嬉々とベルのことを説明するヘステイアに対し、フレイヤは一時の間笑みを消し、黙る。

だがすぐに再び微笑みを浮かべ、自分が辿ってきた道を示した。

「そういえば見かけたような気がするわ。この先の東の大通りで」

「本当かい!？」

「ええ。真つ直ぐに闘技場を目指していた様だから、この道を左に曲がれば、上手く先回り出来るんじゃないかしら」

嬉色満面にヘステイアは笑顔で「ありがとう」と伝え、彼女の言葉を鵜呑みにする。クスリと笑いヘステイアと別れるつもりだったフレイヤだが、ふっとヘステイアのあの言葉が気になり立ち止まりヘステイアに問いかける

「一つ質問してもいいかしら？」

「な、なんだい……君がそんなことを言うときは決まってる厄介事だからね……」

「そんな邪険に扱わなくてもいいじゃない。私は貴方に情報をあげた、ならわたしに一つくらい質問してもいいんじゃないかしら？」

「ぐっ……分かったよ……でもベルについては何も話さないからな!!!」

それはそれで知りたかったことではあるが、今はそれ以上のものがある。始めは気の

せいだと思っていたが何故か気になってしまったのだ。あの少年以上に……

「さつき【ファミリア】の子達って言ったわよね。この前の宴の時は一人しかいないように言っていたけど」

「ああ……いや……まあ……そうだね……」

齒切れの悪いヘステイアにフレイヤは確信した。

ヘステイアの【ファミリア】には白い髪少年以外にもう一人いることに

「別に隠さなくてもいいじゃない。冒険者ならいずれバレるのだから」

「……そうかもしれないけど……いや、あの子なら気づかれないままかも……」

その言葉に気になっていたものが一気に膨れ上がった。

今すぐにも聞き出したい思いを押さえ込み冷静に気にしていたことを言葉に出す

「教えてくれるわよね？ヘステイア」



「いつにも増して笑みに凄みがあるよフレイヤ……」

「……分かったよ、別に隠している訳じゃないし……それに教えたところでどうにも出来ないしね」

「……どうということなのかと首を傾げるフレイヤにヘステイアはふうーと息を吐いて答える」

「早くベル君の所に行きたいし簡単に言うよ。」

確かに僕の「ファミリア」にはベル君ともう一人トキサキ・ハジメという子がいる

「ただその子は影が薄くてね……僕の「ファミリア」に入って契約を結んだときに……その、なんだ、スキルが発現してね……それからは見えなくなったんだハジメ君が」

その事実には衝撃が走る。普段は落ち着いているフレイヤの表情は明らかに何かを欲している。しかしフードのお陰でヘステイアには見えなかった。自分の表情に気づいたフレイヤはすぐに表情を戻して

「いいのヘステイア？他の「ファミリア」にそんな重要なことを話しても？」

「構わないよ。そのスキルは常に発動しているから隠しようがないし、それにさつきも言ったけど誰にも見えない、認識できないからね」

「それじゃヘステイアと【ファミリア】以外は見えないわけね」

「そういうわけじゃないけど……とにかく君が知りたい事は教えたから僕は行くよ!!くれぐれもハジメ君のことは他言しないように頼むよ!!あくまでもこれは情報の交換だからね!!!」

「ええ、もちろん」

本当に頼んだからね!!と捨て台詞を吐くかのように走り去っていくヘステイア。その背が消えるまで見届けたフレイヤはフードの奥で微笑し

「言うわけないじゃない、誰にもね」

新たな玩具を手にしたような喜びが溢れ出す。まだ見たこともない少年と見ることも出来ない少年。自分のものにした衝動を押さえながらフレイヤもまた裏道から姿を消した

「はあはあ……どこに行っただろう…」

ベルは闘技場周りを走り回っていた。途中からハジメを見失っていたベルは手掛かりもなしに手探りに探し回っていた。もちろんシルも一緒に探しているがどちらかと

いうと影の薄いハジメを先に探しておきたい。

一度息を整えてもう一度探そうと考えていた所で突然に視界が真っ暗になった。

「だれーだ!!」

「え、えっ、ええ!!神様ですか?!?!」

「なんだよベル君、もう少し」「ええ、誰かな」とか戯れてもいいじゃないか」

「す、すみません……:…:というかどうかどうして神様がここに!?!」

「別にいいじゃないかベル君!それよりベル君、せつかくのお祭りなんだ僕とデ」

「モンスターが逃げ出したぞおおおおお!!!」

叫び声と共に地響きが鳴る。周りの人達も慌てて逃げ出す様子を見るととても危険な状況だと理解できる

そしてその一体、シルバーバックがどういいうわけかベル達に向かってくる

「に、逃げますよ神様!!」

「べ、ベル君!! いやデートを!!!」

「何を言ってるんですか!! 逃げますよ!!!」

「ベル君とのデートがああああああ!!!」

「!!!!!!」

きつとこれはフレイヤのせいだ!!と内心で叫びながらシルバーバックに追われる羽目になった

影が薄いからこそ出来ることがある。

ダイダロス通り

オラリオの東と南東のメインストリートに挟まれる区画にある貧民層の広域住宅街。

奇人の異名を持つ設計者ダイダロスが担当による度重なる区画整理のせいで非常に複雑になってしまい、一度迷いこめば二度と出て来れないといわれ、もう一つの迷宮と称されている。

そんな中を現在、ベルとヘスティアはシルバーバックに追われている。

「それじゃハジメ君もここに来ているのかい？」

「でも途中ではぐれてしまいました……」

「相変わらず身内でも見失う影の薄さなんて……」

「アハハ……」

格上のモンスターに追われているというのにまるで緊張感がない二人。さつきから

シルバーバックの攻撃はベルの身体ギリギリ掠めており、それが一撃となれば大ダメージを受けて立ち上がることも難しいだろう

だけど、それでも、この二人には余裕がある。

「とにかくハジメ君がくるまで逃げるんだベル君

あのモンスターを迎え撃つにしてもハジメ君が来るまでは我慢するんだ」

「はい!!」

そう、二人は待っているのだ。

ハジメが来ることを、このダイダロス通りという名の迷路だというのに、来るということに対して疑っていない。

そしてハジメが来ればシルバーバックを迎え撃つという。レベル1であるベル、ここで迎え撃つことは冒険者として「冒険」しているだろう。しかしこの戦いはまるで「勝てる」という自信があるかのようにみえてくる……

「それにベル君!!君にはプレゼントを用意してるんだ!!これさえあれば君はハジメ君に追い付けるよ!!!!」

「本当ですか!?!」

「もちろんだとも!!!あの子にも苦勞かけたんだ………今度は僕達がやるんだ!!」  
「はい!!」

.....

「どこにいったんですかねあの二人は……」

ベルとヘスティアが意気込んでいるのに、全く緊張感がない声で二人を探しているハジメ。とりあえずモンスターが出てた為に騒ぎになっている所を探しているがいまだに見つからずにいる。すると目の前にさつきよりも人が集まりガヤガヤしているのを見つけた。

人混みの周りを見渡すがその姿はなく中心へと入っていくとそこにいたのは、



「これで終わりやね」

「もう、いないですか？」

そこには『豊穣の女主人』にお得意様であるロキファミアの神ロキとアイズ・ヴァレンシユタインがモンスターを倒し終わり一息ついていたところだった。

もしかしたら二人を見ているかもと思ひ、アイズに近づいて肩に触れようとしたが

「ッ!!!」

ハジメが近づいてくるを感じたのか一瞬のうちにその場から離れたアイズ。周りからしたらいきなり行動を起こしたアイズに対して何が起きたのか分からずにいた

「どないしたんやアイズさん？」

「……………いま、誰かが私に触れようとした……」

「なんやてー!!」

誰や!!うちのアイズさんを勝手に触れようとした罰当たりな奴はあああ

ああああああ  
!!!!!!

アイズさんに触れていいのはうちだけやあああ!!!」

といいながらロキはアイズに抱きつこうとしたがスウーと避けた。その行動にロキはムスウーと頬を膨らませているがアイズはいつものことだと無視をしている。それにそれどころじゃない、全く気配がなく触られるという行動が起きるまで気づかなかつた。周りを見渡すがどこなもない、気配もない。

しかし、足元にはさつきまではなかつた地面に「溝」があつた

「どうも、こんにちは」

「……………え、えーと……………こんにちは?」

自分でもどうして返事したのか分からなかつたが、さつきまではなかつた文字があつたので何かが自分に話しかけているようだったからか……………

すると本当に会話をしているようにまた地面に文字が

「こうして話すのは初めてですね」

「あなた……………誰?」

「そうですね、『豊穰の女主人』の「ステルス」と言ったらいいですか？」

「おお!!なんやあんた喋れたんかい!!!」

ロキも気づいたようで地面に書かれた言葉に対して返事をする。

「もちろんです。今回はベルを探していましたのでこうして会話をすることにしました」

「なんやそれやと普段はしたくないみたいやな」

「したくないというか「こうして会話をする」しかないので面倒くさいので」

「確かにイチイチ紙に書くなんて面倒くさいしな」

それでもこうやって会話する方法があるなら少しは会話しろよと思うロキだが、賛同した手前口に出すことはやめた

「で、ベルって言ったか?それってあの白髪の子のことか?」

「はい、知りませんか?」

「そう言ってもな」

するとガヤの中から「そういえばやたらデカイモンスターが白髪の少年とツインテールの女の子を追いかけていったな」「そうそう、確かダイダロス通りに向かったな」と話が聞こえてくる

「どうやら分かったみたいやな」

.....。

なんだろう.....ハジメに話しかけているはずなのにどういうわけか返事がない。暫く沈黙が続く中痺れを切らしたロキは

「おい、返事せんかい!!」

「...もう、いないんじゃない...」

「だったら尚失礼や!!! なに情報だけもらって消えとるねん!!!」

イラツとしたロキはその場で地団駄を踏んでいる。その姿をどうでもいいような目で見ているアイズはその場から駆け出した。

「ちよつ、ちよつとアイズ!!! 置いていかんで!!!」

ロキの言葉は届かずアイズの頭のなかではただシルバーバックに追われている白髪の少年の安否と、さつきまでいた「ステルス」の実力を見てみたいと考えていた

(……あなたは一体、どんな戦いをするの?)

.....

「来ました神様!!!」

「あともう少しなんだ!!」

ベルとヘスティアはダイダロス通りにある隠れた空地でスティタス更新を行っていた。スティタスによる能力上昇とヘファイストスに作ってもらったヘスティア・ナイフの所有者にすること

しかし思ったより時間がかかり、すでにシルバーバックは壁をよじ登りベル達に迫っていた

「まだですか?!?!」

「上手くないかないんだよ!!」

ベル君!!?!?!僕がいない間にハジメとどれだけ一緒にいたんだい!!?!?!間違はなくベル君にも影響出てるよ!!?!?!」

「そんなことあるんですか?!?!?!?」

「それしか考えられないよ!!?!?!実際ハジメ君のスティタス更新はやたら時間がかかるからね!!?!?!って、モンスターが来たああああああああ!!?!?!」

どうやら一時停止によるものか普段の更新速度より遅い。それがまさかハジメと一緒にいただけで影響が出るなんてそんなことあるのか!?

ハジメが悪いわけではないがどうしても考えてしまう。どうしてこんなときになんてことをしてくれたんだと!!!!と。

迫りくるシルバーバックに思わず目をつぶるヘステイア、馬乗りされていたベルは起き上がりヘステイアを覆い被さり守ろうとする。二人とももうダメだと思った。

「相変わらず仲がいいですね」

ベルとヘスティアがゆつくりと目を開けるとそこにいたのはハジメだった。それもシルバーバックの拳を片手で止めている。

あり得ないことが目の前で起きている。レベル1の冒険者がシルバーバックの攻撃を無傷で、片手で、平然としているのだから。

しかしそんな異常な事が起きているのにも関わらず

「ハジメ君!! 僕のベル君に一体何をしたんだい!!!」

「いきなりですね。お久しぶりです神様。お元気で何よりです」

「ひ、久しぶりだねハジメ君……じゃないよ!!」

ベル君のスティタス更新が遅くなってるんだよ!!」



ハジメのマイペースについつい乗せられてしまったハスティアだが、それどころではないと直ぐに思考を戻して今起きている事を元凶かもしれないハジメに……

「ああ、昨日ベルの背中に虫が寄ってきたので背中を叩きましたからその時じゃないですか」

「やっぱり君かいいいいいいいいいい!!!」

「何してるのハジメ!!!」

!!!!!!

元凶だった。

それも思いつきりハジメが関わっていた。

するときつきまで突然の出来事に放心状態だったシルババックが後方へ飛んで距離を取った。目に写らない「何か」に恐怖したが直ぐ様それを「敵」と見なした

「よく分かりませんがスティタス更新しているなら、僕が時間を稼ぎますね」

「頼んだよハジメ君!!」

ということだ、そのモンスター君。

君は僕の、僕達の、「敵」として認識したよ!!」

その瞬間シルバーバックの瞳に何もなかった所から、いや、さつき「敵」と認識した場所からモヤが現れゆくりとそのモヤが消えてくる。そして現れた「敵」は真っ直ぐこつちを見ている。見えるならその「敵」は脅威ではないと判断したシルバーバックはその者に向かって攻撃を始めた。

.....

アイズが走り出して暫くすると目の前に人混みがあるのを発見した。ざわざわと隠し扉の向こう側を見ている野次馬に対して、アイズはそこに残り一匹のモンスターがいるのではないかと考えた。それと同時に白髪の少年と「ステルス」がそこにいるのではないかと。

近づくと野次馬達が何かを話している

「あれ、なにしてるんだ？」

「さあ、練習してるんじゃないのか」

「はあ、モンスターが!?ありえねえー!!!」

「だけだよ、さつきからずっと何もないとところを攻撃してるぞ」

「酒でも飲んで訳が分からなくなってるんじゃないのか!!!」

アハハ!!とモンスターがいるのに全然怖がっている様子がない。不思議だと感じたアイズは人混みをかき分けて先頭に出ると、そこにはさつき聞いた通りのことが起きていた。

シルバーバックは何もない空間を「殴る」「蹴る」「噛みつく」「引っ掻く」「押し潰す」「体当たり」「物を投げる」などなど考えられる攻撃をひたすらそこにぶつけていた

それを見ていたアイズは直感した。

そこに「あの子」がいることが分かった。

そしてあのモンスターの攻撃が効いていないことも。

何十回も攻撃しているシルバーバックが息切れを起こし、何処と無く恐怖している表情を見せている。それでも攻撃を続けているのはそれを止めた時、死が待っていると

悟っているからだろう

「……………」

見てみたいと思った。

特殊な子がどのような戦いをしているのかを…

それを目の前にしてアイズは言葉をなくした

……………

「神様くまだですかく!!!」

「もう少しし!!!」

「一分前にも同じこと聞きましたか」

「君のせいだろう!!!それにそっちは全然平気そうじゃないか」

「平気じゃないですよ、怖いですよ」

「変わらない表情で何をいつてるんだい……」

さつきから「もう少し!!」と聞いているが一向にステイタス更新が終わる気配がない。その間もずっとシルバーバックが攻撃をしているが一切効いていない。全く防御もしていないのになだ。

《魔法》「一時停止」はあらゆる事象<sup>出来事</sup>を止めることが出来る。つまりいまシルバーバックが殴ってきた衝撃を止めているのだ。「殴る」「蹴る」「噛みつく」「引く掻く」「押し潰す」「体当たり」「物を投げる」も全てハジメにとつては何一つ攻撃とはならない

そしてオート発動により自ら防御する必要がなく、当たってきた攻撃を次から次へと止めている。

「よし!!!ステイタス更新終わったよベル君!!ハジメ君!!」

「ありがとうございます神様!!!」

ハジメ、いつも通りにいくよ!!!」

「いいですよ、それではいきますよ」

ステイタス更新が終わったベルはヘステイア・ナイフを手に取り戦いの場に向けて走り出す。

ハジメはシルバーバックのパンチを片手で受け止めて懐に入る。そしてもう片手でシルバーバックの腹部近くに、掌を空に向けるように構える。

そして次の瞬間、シルバーバックは空へと吹き飛んだ。

『ガアアアアアッ  
!!!!??』

突然のことに思いっきり吠えて苦しむシルバーバック。

何もしていない「敵」が突然ノーモーションで吹き飛ばすほどの攻撃をしてきたのだ。驚くのも無理はない。

《魔法》〔一時停止〕の「停めたものを再生させる」と「再生する際は方向を変えられる」を使い、今まで受けた攻撃を掌から発するように設定したあと、止めていた衝撃を全て

シルバーバツクに返したのだ。

完全防御と100%カウンター

これがトキサキ・一の戦いである。

そして空中に飛ばされたシルバーバツクの身体は重力に負けて落下して、下で待ち構えていたベルのヘステイア・ナイフによって胸部中央を貫かれて、魔石を破碎された肉体は灰へと還り、風に乗ってその姿を跡形もなく消滅させた

『ツツ!!!』

歓喜の音が、迸った。

よく分からないが突然吹き飛んだシルバーバツクを仕留めたベルに対して、「あれもあの冒険者が何かをしたんだ」と思いベルを称えている。

ヘステイアは寝不足のためかその場に倒れ、それに気づいたベルはすぐさま駆け寄る。

「これなら……僕でもダンジョンを攻略できますかね……」

誰も聞こえない中、一人そう呟いた。

「ヘステイアには悪いことをしたけど……もう、妬けちゃうわね」

とある人家の屋上。



ベルのいる付近一帯を一望できる高台で、フレイヤは呟いた。

「おめでとう。まだまだただけど……ふふつ、ええ、格好良かったわ。」

そして……貴方も、すつごく良かったわ。」

脇目も降らず出口を目指し、通路を走り抜けていくベルとそこにいるだろう少年をアツく見つめながら、フレイヤは目を細める。

日の光を反射する銀の髪を翻し、彼女はその場を後にした。

「また遊びましょう——ベル。」

そして、ハジメもね。」

影が薄いのに何かを求められる。

「どうですか神様は？」

「恐らく疲労と寝不足だと思えます。寝ていれば大丈夫ですよ」

「ありがとうございますシルさん!!」

「さすがシル姉です」

倒れたヘスティアを『豊穣の女主人』に運び、シルに看病をしてもらった。幸いヘファイストスと一緒にヘスティア・ナイフを作った疲労と徹夜による寝不足が、モンスターを倒したときの安心感により一気に出たようだ。

「トキサキさん、ミア母さんが仕事をしろと」

「分かりました。それじゃベルベル、神様をお願いします。」

後でご飯でも食べに来てください」

「うん」

リユーとハジメは一緒に戦場<sup>仕事場</sup>に向かう。シルはベルと一緒にヘステイアを見てくれるようだ。お店を休憩場として使うため代わりにハジメが働くことになった

「トキサキさん、本当にクラネルさん一人であのシルバークを倒したのですか？」  
「そうですよ。僕はベルのサポートしただけですから」

ここに運ばれた時、何があったかと聞かれたためシルバークをベルが一人で倒したことにしたのだ。実際あの場ではベル・ヘステイア・ハジメしか本当の事を知るものはいない。周りからしたらベル一人で倒したように見えている。ならとそう伝えたのだが、

「そうですか……でも貴方も冒険者でありクラネルさんの仲間だ。そしてサポーターとしてクラネルさんの役にたったならそれは一人ではない。自分を貶めるのは止めなさい」  
「……………そう、ですね。きっとこれをベルベルが聞いたら怒りますね」

「はい、怒ります」

クスツと笑うリユートの顔にジイーと見つめるハジメ。見つめられているリユートはその行動に驚きを隠せず

「な、なんですか……」

「いえ、笑った表情が可愛いと思いました」

「なっ???  
!!!」

突然の言葉に慌て頬を赤くするリユートはハジメに見られないように顔を反らす。そして直ぐに平常心を取り戻すが追撃はまだ続いていた。リユートの反応が気になったハジメは真正面に周りその手でリユートのおでこを触った

エルフであるリユートは心を開かない人に触られたら鉄槌鉄槌がお見舞される。これはリユートだけではなくエルフ全般を指すのだが、現在はリユートを指すがそのリユートが動かない

「熱はありませんね。しかしならどうして顔が赤いのでしょうか?」

「そ、それはいいですから、手を離してください……」

弱々しく言うリユーに本当に体調が悪いのだろうと思ひ、素直にリユーの言葉通りに動いた。手が離れたことによりホツとするリユーだが、何故か物足りなさを感じてしまった。まるでまだハジメに触つて貰いたかつたような……

「体調が悪いようでしたら休んだほうがいいですよリユー姉」

「いえ、大丈夫です」

「そうですか、何か出来ることがあればいつてください。僕に出来ることならお手伝いします」

「そこまでは……」

しなくていいです、と続く言葉があつたのだがどういうわけか言葉が詰まった。その時頭に「あなたの手を握れる男が現れたら逃しちや駄目よ!」という心に刻まれた亡き知己の言葉が通り、

「……………何でも、出来ることなら、いいんですよね」

「はい、どうぞ」

「……………を……………つてくれませんか……………」

「よく聞こえなかつたんですが、もう一度いいですか？」

聞き直したハジメだが言葉を発したりユーは少しうつむき表情を隠した。それでも頬が赤くなっているのだけは確認出来た。そしてゆっくりと右手をハジメに向けて付きたし

「……………手を握ってくださいませんか？」

もしかしたら、その、こんなことを頼んで失礼なのですが、えーと、殴ってしまうかもしれませんか……」

「分かりました」

少しの躊躇いもなく差し出されたりユーの右手を両手で握るハジメ。突然すぎる行動に驚いているリユーだと思っただがどうやらそれだけではないようだ。何故か握られた手をじつと見て、その手に力を入れたり緩めたりして何かを確かめているようだ。

「……………本当に、あなたは……………」

……………あなたは、もう少し何を行動するにも考えて行動したほうがいい。

私に殴られるとは考えなかったのですか？」

「殴られてもダメージはありませんので。」

それにリユー姉は僕にとって大切な人ですから殴られようとも問題ありません」

それがトドメをさした。

ハジメほどではないが表情が変わりにくいリユーが完全に顔を真っ赤にさせて、表情もどうしたらいいのか分からないとあたふたしている。もうどうしたらいいのか分からなくなったりリユーは近くにあったモップを空いている左手で取って

「は、は、離して下さい!!!」

思いつきモップをハジメの頭にぶつけるリユー。モップはへし折れたが全くダメージを受けていないハジメ。しかし突然のこととリユーの言葉に思わず手を離してし

まった。その瞬間を逃さずにリユーは全速力でその場から駆け出した。

一体何が起きたのかと戸惑っているハジメの元へ、厨房から現れたミアが

「やつてくれたねハジメ」

「やはり何かやらかしたのですか?」

「……………いや、むしろ良くやつてくれたというべきだね…………」

……………しかしあのリユーがね……………こりゃあんたには責任を取ってもらわないとね」

「はい、リユー姉の分まで働きます」

その的外れな言葉に呆れるミアだが、すぐに豪快に笑いだしハジメの背中をバシバシと叩いて

「いまはそれぐらいが調度いいかもしれないね!!」

「それは、毎日リユー姉の分まで働けということですか?」



「ハジメがやりたいなら私は止めないよ」

「今日だけにしてください」

本気でやりかねないと悟ったハジメはすぐさま返事をして仕事場に向かう。しかし、

「そうだハジメに客だよ。料理を持って接待してきな」

「つまり話をしながら料理を注文させろということですね」

「分かっているじゃないか!! 沢山注文させなよ!!!」

「僕の影の薄さ知ってますよね?」

それでもやり方があるだろう!! とミアに渴を入れられはあくどため息をつきながら向かうことにした。

.....

「こちらのテーブルとなると……ロキ・ファミリアですか……」

料理を運ぶ場所とは探してみるとそこはロキ・ファミリアが座っていた。この前のように大人数ではなく主神であるロキとアイズがいた。相変わらずハイテンションなロキは「お酌してくれんかアイズさん」と駄々をこねており、アイズはアイズで変わらずドライな対応で話を無視して料理を食べている

そのテーブルの空いている場所に魚料理を置いてみると

「おお!!来たか「ステルス」!!!

ミアくちよつとコイツ借りていいか!!」

「私に断りいれるならドンドン料理を頼みな!!」

「今度来たとき子供達に死ぬほど食わせるわ!!」

「ならいいよ。しかしあまり時間をかけるんじゃないよ!!」

勝手に決められた感はあるがロキ・ファミリアがいると分かった時点で諦めていた。まあミア母さんから許可も貰ったのでテーブルの席に着くことにした。すると着席を確認したロキがそこへ紙とペンを置いた

「それがないと会話できんからな。

しかし席に座つとるのに本当に見えんとはな」

「ですがこちらからしたらじつと見られているので、あまり直視してほしくないのですが」

「ええやんか、これからもよう会うんやから」

どういふことだろうと聞こうとしたが先にアイズから話しかけられた

「今日の戦い、おめでとう。」

「見ていたんですか？ スゴいでしょうベルベルは」

「うん、戦いはまだただけど、いいと思う」

「それをベルベルが聞いたら卒倒しますね」

近くにいることだし後で呼びにいこうかな〜と考えていると、

「でも私は貴方に興味がある」

「はい？」

紙にこれ以上何を書いたらいいのかわからず待っている

「シルバーバックが何もないとところで攻撃していた

そこには貴方がいたはず」

「いましたね」

「姿は見えないけど恐らく貴方は無傷」

「そうですね」

「私は、その強さを知りたい」

「はい？」

何を考えているのか良く分からない。

どうして上級冒険者であるアイズがどうして僕なんかに興味があるのか、ましてや強さを知りたいなんてどういふことなのか……

「そりゃそんな反応するわな。もちろんタダとは言わへん」

「と言いますと」

これが僕のダンジョンを攻略する第一歩になるなんて、次の言葉を聞くまでは思いもよらなかつた。

「お前のところの主神次第やけど、今度の遠征に参加せんか？」

time2 始まるからこそ、何か変わる。

影の薄さとスキルを売った場合は高値になるみたいです。  
す。

黄昏の館。

ここはロキファミアリアの家であり、威容な姿はオラリオで目を引く建物として、市民に親しまれている。

その中でも主神であるロキの私室は、様々な物が置いてあり珍しい絵画や置物、机や椅子なども一級品でありさすがオラリオの中でもトップクラスのファミアリアであると納得してしまう

さて、そんなロキファミアリアのロキの私室には今お客が来ており、そのお客と対面しているのはロキとアイズ、そしてエルフのリヴェリア。

で、その三人対してお客である三人はというと

「分かりました。行きます」

「勝手に決めるんじゃない!!!分かってるのかいハジメ君!!!ロキファミアの遠征だよ、遠征!!!レベルである君にそんなところに行かせるわけには行かないんだよ!!!」

「大丈夫です、影薄いですから」

「そういう問題じゃない!!!」

君が想像できないモンスターや環境があのだンジョンにはあるんだよ!!!いくら君でもダメなものはダメだ!!!」

「……………じゃベルも一緒ならいいでしょうか？」

「バカか君はああああ!!!」

尚更行かせるわけには行かないよ!!!ベル君!!君も何か言つてやるんだ!!!」

「ア、ア、ア、ア、うわああああああ!!!」

「ちよつ、ベル君?!?!」

「逃がしませんベルベル」

「グフツ!!」

「ああつ!!ベル君!!!やり過ぎだよハジメ君!!!」

「大人しくしてもらわないと話が出来ませんので」

目の前にいるアイズを目撃してから何か様子がおかしいと思っていたが突然に脱兎の如く逃げ出そうとしたベルをハジメが襟を付かんで制止させた。もちろん襟なんて掴まれた為に首が締まって気絶してしまった。

そんなコントのような光景をさつきから黙って見ていたロキ達だが、もちろんハジメの姿が見えるわけではないのでヘスティアとベルが夫婦漫才をしているようにしか見えていない。それでもヘスティアが誰もいない場所に話しかけたり、走り出したベルが  
あり得ない感じで急停止しているところを目撃すると

「……未だに信じられない……姿を消す魔道具はあるが、マジックアイテム気配も感じられないとは



……」

『豊穡の女主人』で何度も「ステルス」を目撃をしているがそれは魔道具だと解釈していた。しかしそれは違うと主神であるロキやヘステイアに言われて改めてステルスを感じる見ようとしたが全く分からなかった

「漫才はその辺で止めてくれんかヘステイア」

「別に漫才してるんじゃないよ!!!ハジメ君が話を聞いてくれないから」

「聞いてますよ、僕がロキフアミリアと一緒に遠征に行く」

「全く聞いてないじゃないかああああ!!!」

「こっちはステルスの姿が見えへんから何を言ってるのか分からへんわ!!!」

話を進めようにもハジメは遠征に行こうといい、ヘステイアはそれをダメだといい、

ロキ達はどんな状況なのかイマイチ分からずにいる。

「まあ、正直にいうとハジメ君は遠征に行ってもいいと言ってるんだよ」

「ホンマかあ!!!なら話は早いわ実は…」

「だけど僕は認めないからな!!!」

「なんやて??」

ぬか喜びしてしまったロキだが、遠征となるとかなりの危険が伴う。ましてやハジメはレベル1であるためロキファミアのような上級冒険者がいくような場所に連れていくわけにはいかない。常識ある返答ではあるためロキも無茶なことを言っていると分かっている

「さつきも言った通りだよロキ。ハジメは遠征になんか行かせない。どうしてハジメをそんな場所に連れていくのか分からないよ」

「せやからそのレアスキルとレア魔法でうちのファミリアを守ってほしいんや。」

「なにがレアなもんか、君はハジメの何を知っているんだい」

「何も知らんわ。だけどなこっちは現場でちゃんと見てるんや!!あのモンスターに攻撃を喰らっても無傷なステルスが居たのな!!!」

実際に見えんでも分かるわ、その力はそこのレアよりさらにレアなやつや。

しかし、ええんか、うちがボロツと他の神に話しても」

「ひ、卑怯だぞロキ!!!」

ま、まあ、言った所で相手にされないだろうけどね。何せハジメは「見えない」だからね」

「く、くそが……!!!」

待たしても言い負かされたロキは悔しそうな表情でとなりにいるリヴェリアを見つめる。その瞳でナニかを悟ったのか「……だから私が呼ばれたのか……」と小声で言ったあとため息をついて

「神ヘスティア。私達が無理で無茶苦茶なことを言っていることは十分に分かっているつもりです」

「ほら見るロキ、君の子供のほうが随分利口なんだね」

「こ、このドチビがあ…!!!」

「しかし無理で無茶苦茶だからこそ、私達はそちらにそれなりことをしたいと思います」  
「例えばどういうことをしてくれるんだい??」

「どんなことを言っても断る気満々なヘスティアは軽くその話を聞くことにしたが、リヴェリアにはその意思を崩してしまふ策略を持っていた。

リヴェリアは徐おもむろにロキの机の引き出しからあるものを取り出して見せた。

「遠征が終わりステルスが無事に帰ってきたのを確認できたなら、ここにある2億ヴァ

リスを報酬としてお渡しします」

「に、に、「2億ヴァリスウウウウウウウウウウ!!!??」

何故か遠征に行くハジメではなく気絶していたベルが反応してしまった。しかし目の前の袋の中には確かに2億ヴァリスはありと確認できる。

「えっ!!!えっ!!!えええ!!!? 本当に言っているのかい2億ヴァリスだよ。2億ヴァリス!!!」

「か、神様!!!僕あんな大金見たことないですよ!!!」

「僕だっけ見たことないよ!!!」

現実離れしている金額が目の前ある事実に興奮を抑えられない二人。一方ハジメは相変わらず平然としているがロキ達には見えないため喜んでしていると解釈している

「当然報酬だと思います。レベル1であるステルスをロキファミアリアと言えども深層へ連れていくのですから。もちろん足りないというのならまだ金額は上げますが」

「ま、まだ上がるというのかい!!!?!!」

「もちろんです。私達はそれだけのことを頼んでいると理解してます」

リヴェリアの誠実な対応と貧乏ファミリアには喉から手が出てきそう大金。まさかこんなにも心が揺らぐとは思っていなかったへスティアだが

「こ、こ、こんなものじゃハジメ君を遠征になんか連れていかせられないね」

「動揺してるやんか……」

「う、うっさい!!!とにかくだ!!いくら大金を積まれても無理なものは無理なんだ!!!」

さつきまで一緒に喜んでいまベルもうんうんと頷いて否定をする。しかし本当に危なかった……これ以上衝撃があると心が持たない……

「しかし神ヘスティア、ファミリアに内緒で神ヘファイストスから借金2億ヴァリスもあるのは如何なものかと」

「に、に、に、に、2億ヴァリスウウウウウウウウウウウウ  
!!!!!!」

目の前の2億ヴァリスよりも大きな声を上げたベル。そして驚愕な表情でリヴェリアを見つめるヘスティア

「ど、どうして君がソレを!!!?」

「えっ!! 神様!!! 本当に2億ヴァリスも借金があるんですか  
!!!!!!??」

「し、しまった!!!」

「交渉するのですから相手より優位に立たないと行けません。ちなみに神ヘファイストスには今度の遠征に必要な武器類を大量に頼んでいます」

「う、裏切ったなヘファイストスめ!!!」

最初から黙っているようにと約束していなかったはずだがいまのヘステイアにはそれを思い出す術はない。ともかくまさかの衝撃が訪れたヘステイアの心は揺れに揺れていた

(ど、ど、どうする!!!まさかこんなところで借金がバレるなんて!!!もちろん借金は僕が勝手に背負ったんだからベル君達には関係ないけど………問題は………)

と、恐る恐るロキの方を見てみるとニヤニヤと笑いながらこつちを見ていた

(あの断崖神に知られるなんて!!!直ぐにでも借金を返さないと他の神に知られて僕達ファミリアは本当に貧乏ファミリアになってしまう!!!それだけじゃない、ベル君やハジメ君が僕の知らないところで嫌味を言われるかも知れない………そんなの僕は見えない!!!)



本当に困ってしまった。ハジメを遠征に行かせないという決意はまだ固いが、あの口  
きに借金を知られてしまった。このままだと近いうちにこのファミリアは地獄を見る  
ことになる。それだけは避けれないといけないのだが

(どうする!!どうする!!??)

どうしたらこの状況をひっくり返すことが出来るんだ!!!)

必死に考えるヘステイア。その決断1つで今後のヘステイアファミリアが大きく変  
わるのだ。うくと悩んでいるとさつきまで黙っていたハジメがロキ達がいる机の方  
へ向かって歩きだした。

「ちよっ!!!」と言葉にしようとしたがすでに遅く、ハジメは勝手にペンを手に取り紙にこ  
う書いた

「神様を困らせるところに僕はいきません」

それを見たロキ達は、いや、ヘステイア・ベルは息を飲んだ。まさかこんな返事が返ってくるとは思っていなかったからだ

「しかし一緒に遠征にいけば借金は無くなります」

「構いません」

「ただどなうちがうつかり他の神に話してしまうかもしれないで」

「その時は言ってくる者を全てを「停止とめさせてみせます」

「…………それはうちも入ってるんかな、この神ロキも」

「例外はありません、神だろうが僕のファミリアに手を出すなら……………全て止めます」

その文章を最後に誰もが黙ってしまった。言葉は聞こえなくても、表情が見えなくても、ハジメが本気であることはここにいる誰もが理解できた。

しばらく沈黙が流れるなかりヴェリアが

「……………大変失礼なことをしました。遠征に来てもらうためにここまでしてしまった私達を許してください」

「おいリヴェリア!!」

「これ以上は無理です。意志が固すぎる。それにこれだけ愛されているファミリアから無理矢理引き離すなんて……………ロキも出来ないと思うが」

「……………ああもうく!!!好きにしたらええ!!!」

負けを認めたロキは拗ねて誰も見えない方角へ体を向けた。その姿をみてリヴェリ

アはハア〜とため息をつき、ヘステイアは「子供か君は……」と呟いた

「しかし遠征ではなくても一緒にダンジョンに潜るのはダメでしょうか？ 私は彼のステルスの実力を見てみたい」

「…私も、見てみたい」

ここでやつと言葉を発したアイズ。その二人の誠実な思いにヘステイアはまた揺らぎ始めた

「もちろん報酬も払います。2億ヴァリスとはいきませんが5000万ヴァリスを」

「交渉成立だね!!!」

まさかの成立に思わず転けてしまったベル。しかしこんなときでも平然としているのはハジメだった

「神様〜!!勝手に決めたらダメですよ!!!」

「いいじゃないか♪始めからハジメ君は行く気満々だったんだから。あつ、さっきのはうまかつたな〜!!」

「神様〜!!」

ぐれているロキでも「アホとちやうんか……」とヘスティアをバカにしているが全く聞こえてないし気にしていない。遠征にいかずにまさかの5000万ヴアリスが手に入るのだから喜ばずにはいられない

「ハジメ君!!!僕達ファミリアの為に往つてくれるよね!!!」

「神様がいうなら行きます」

「やったああああ!!!5000万ヴアリスゲットだああああ!!!」

「まだやるなんて決まってるやろうがこのドチビ!!!」

我慢できなくなったロキはヘスティアに向かって思いつき罵声をいう。もちろんヘスティアもそれに対して

「決まったも同然だよ。ハジメ君には全く攻撃が効かないんだからね。いえーい!!これなら早く借金が返せるかな〜」

「やっぱりレアスキルやんか!!!なら遠征に行つてもええやろうが!!!」

「バカをいうじゃないよ!!!遠征には行かせない!!!ただどただの冒険ならきつちりとハジメ君の状況を見て潜つてくれる。ならハジメ君の安全は保障される。遠征みたいな団体思考より個人を見てくれるほうが安全なんだよ。!!!」

つまり、50000万ヴァリスは僕のものだ!!!」

「ふざけんな!!!ドチビじゃなくてファミリアの物や!!!」

と、また喧嘩を始めた二人に対して他の面子は無視をすることにした。

「短期間とはいえ行動を共にしますので色々契約を決めないといけないな。お互いに命を預けるわけだからある程度の情報共有をしないと」

「情報共有ですか？」

「ああ一番の情報共有はステイタス。もちろん最小限の人数しか話さない、もし漏洩した場合は賠償金や体罰を受ける」

「なるほど、そうしてお互いを信頼するのですね」

「いや、その定義は……まあ、ないとは言えないが……」

しかし本当にいいのか？ 貴方のスキルや魔法はレア中のレア。もう少し考えた方がいいかと思うのだが……」

「神様が決めたなら構いません」

「………本当に神を愛しているのだな……」

分かった、そちらがいいのならこちらも構わない。早速互いのステイタスの確認を

……って、まだやっているのか……」

せつかく纏まってきたというのに未だに神同士は喧嘩をしていた。

……

「な、なんや、これ……」

トキサキ・<sup>ハジメ</sup>一

L v. 1

力：I O ↓ I O

耐久：I O ↓ I O

器用：I O ↓ I O

敏捷：I O ↓ I O

魔力：S

9  
9  
9



## 《魔法》

## 【一時停止】

サスペンド

出来事

- ・ 全ての事象を停める
- ・ 停めたものを再生させる
- ・ 再生する際は方向を変えられる
- ・ 必要とするもの以外はオート発動

## 《スキル》

## 【カミカクシ】

・ 所有者と主神が認めるもの以外は  
存在を認識出来ない

- ・ 主神が子を思うかぎり持続する

ロキファミアリア全員が言葉を無くしている。確かにレア中のレアだと想像していたが、まさかここまでのもとは想像できなかつた……………

「なるほど……これではハジメを認識することなんてできるはずがない……」

「ありえん……なんや……このステイタス……」

「……スゴい……」

「やっぱりスゴいんですか神様？」

「当たり前だよ……こんなの神の力に近いよ……」

「……ヘステイア、もしかしてワレ……」

「使うわけないだろう!!!」

疑ってしまうのは当然かもしれない。

それほどのものが目の前にあるのにそれを持っているハジメは変わらず平然として  
いる

「とにかくこれで契約成立だな」

「とういうわけや、早速ハジメを見せろやハスティア」

「ぐっ!!し、仕方ないのか……分かったよ!!!」

「この部屋にいるロキファミリアを冒険の間君達を認める!!!!!!」

「なにもなかった所から、いや、うつすらとモヤが現れそれがゆつくりとそのモヤが消えてくる。そしてそこにはさつきまで見えなかった人物が、トキサキ <sup>ハジメ</sup>一がそこにいた

「初めまして、になるんですかね。トキサキ <sup>ハジメ</sup>一です」

「ああ、初めまして」

「初めまして」

「これからヨロシクな!!」

「……つて、さつきの冒険の間ってなんや!!!それ以外は見えないうんか?!?!」

「当たり前だ!!!あくまでも冒険だから許したんだ。君に僕のファミリアを会わせること

「自体嫌なんだ!!!!」

「なんやて!!!こっちだつてなアイズをお前所のファミアなんぞに見せたくないわ!!!!  
 険やから仕方なくだつてことを理解しとけポケエエエ!!!!」

また喧嘩を始めた神様達。

ベルとリヴェリアが「お互い大変ですね」と共感し合いハジメとアイズにいたつては特に会話することなく見守るだけだった。

影が薄いとか関係なく怒られるみたいです。

ギルド本部

昨日決まったロキファミアリアとの冒険について、アドバイザーであるエイナに話しておこうと朝から来てみたのだが、

「……どういふことなのか、もう一度、説明してくれるのよね……」

「ロキファミアリアと一緒に試しに18階層までお散歩してきます」

「キイミイはっ!!! 本当にヴァカアなのオオオオオオオ  
!!!!!!!」

綺麗な顔が台無しだなーと思いつながらエイナの説教を受けているハジメ。しかし何がダメなのかと思いつながらエイナの言葉に耳を傾けることにした

「いくらロキファミアリアとの冒険だとしても、ハジメ君はまだレベル1なのよ!!! なんてそういうことになるのよ!!!」

「ロキファミアリアの神様からお誘いがありまして、初めは「遠征」に行く予定でしたが僕の神様が断りを入れました。

そのあと……えーと、うーん、色々ありまして「遠征」から「冒険」に変更になりました」

「面倒くさいと思わないでその色々を詳しく話なさい!!!」

「神様から口止めされてますので、詳しくは話せません。どうしてもなら神様と神口キに話を……」

「……………もう、いいわ……………また前みたいになりそうだわ……………」

頭を抱えながら唸るエイナ。以前はミアと言い合いになりひどい目にあつたことを思い出したのだろう。別に困らせるようなことはしてないはずなのだが……

「……それじゃ話せることだけでも話して。安心出来ないといくら神が許そうとも私が許しません」

「……………はい」

「ちよつと待ちなさい。なに、いまの間は？」

まさか言いに来なければ良かったか思っていないわよね？もしもそのあとでバレたら……………どんな手を使ってもダンジョンに行かせないからね♪」

「了解です」

ものすごい可愛い笑顔なのだがその瞳の奥はさらにもものすごい怒りが見えてくる。これは逆らったらダメだと本能的に悟ったハジメは無意識に返事をした。

「それでどうなの？ロキファミアリアのことだからキチンと誓約みたいなのはしていると思うけど？」

「はい、お互いのステータスを確認しましてその情報の漏洩防止についても話しました。あとは基本的にモンスターとの戦闘はロキファミアが行い、僕は勝てるだろうという状況とモンスターを見極めてからの戦闘になるそうです。あと18階層まで潜って三日間の冒険になるそうです」

「うーん、聞く限り問題はなさそうだけど……」

ちなみにパーティーはどうなってるの？」

「えーと、アイズ姉にリヴェリア姉です」

「……………私の名前は？」

「エイナ嬢」

「だからどうして私だけ「嬢」って付けるのよ!!!」

机を思いっきり叩いた為に周りから視線が集まる。もちろんその視線はエイナだけであり、目の前にいるハジメはエイナ以外には見えていない。つまり「なんで誰もいな



いところで話ながらキレているんだあの人は？」と思われている。ちなみに同じ職員にはハジメがいることは知らせてある。

その視線に気づいたエイナは体全体が小さくなったと思わせるぐらい縮こまった。顔を赤くしたままさっきの話の続きをする

「……………どうして、私だけなのよ？」

「いつもお世話になってますので、誠意を込めて呼ばせてもらってます」

「……………あのね、それは非常に迷惑だから止めなさい」

「分かりました。ではエイナ姉で」

「……………だからね、どうして歳上の女性に対して「姉」を付けようとするのかな？

普通に名前でもいいのよ、ほら、言ってみなさい」

「はあ、……………エイナ姉」

「分かったわ……………言えるようになったら言ってくれたらいいわ」

「はい、エイナ嬢」

「もう!!君は!!!本当に君は!!!さっさとダンジョンでも行つてきなさいー」  
!!!!!!

最終的に、いや最初から最後まで怒られてしまったハジメは堂々とギルド本部を後にした。

.....

「というところで、明日から三日間お休みが欲しいので働きにきました」

「その心意気はいいとしてもだ、勝手に休みをいれるじゃないよ!!!」

正直に話したのにまたしても拳骨をもらってしまった。ダメージはないが。それに明日から冒険に行くことになったのはロキファミアが決めたことで僕ではない。と

言いたかったがさらに怒らせるだろうと思いい言うのをやめた

「つたく、だったら今から閉店まで休みなしの仕事だよ!!!」

「はい、了解です」

「……………あんたはちよつとは嫌がらないのかい、普通は文句の1つ言ってもいいぐらいだよ」

「はあ、でも僕が悪いので仕方ないかと」

「その自己犠牲みたいな考えた方はやめな。嫌だと思いうなら言ってもいいんだよ。全部抱えてしまうとその内に心が壊れてしまうよ」

「……………心、ですか……………」

そう言いながら胸に手を当てるハジメ。

心が壊れると言われても見えないのにどうやって壊れるのかと考えてみるが分から

ない。

それに嫌だと思っていないから返事をしただけだ。嫌ならちゃんと否定している。どうしてそんなことをいうのか？

うーん、悩むが僅か二秒程で「分からない」と結論が出たので考えないことにした。

「心が壊れたときにはミア母さんに相談します」

「あんたは……………壊れる前にいいな!!分かったかい!!!」

「了解です」

「つたく……………とにかく掃除でもしてな」

またしても怒らせてしまったと一瞬考えて、さあ掃除と切り替えたハジメはモツプを持って掃除を始める。

するとアーニャーがゆっくりと近づいてきて

「ミア母さんにあそこまで言わせるなんてよくやるニヤー」  
「何かをしたつもりはないんですけど」

「そんなこというから鉄仮面って言われるのニヤー」

「そんなこというのはアーニヤーちゃんしか言いません」

「だから「ちゃん」はやめろニヤー!!!」

アーニヤーがモツプを振り回しそれがハジメの後頭部にぶつかつた。まあいつもの通りにダメージはなかつたが今回はモツプが脆かつたのかボキツと嫌な音をたてて折れた

その折れたモツプはグルグルと回りながら、嫌な場所へと飛んで行きガツン!!とさらに嫌な音が聞こえてきた。

その直後に地震かと思わせる振動がお店全体に広がる。その振動は少しずつ近づいてきており、最も大きな振動と共に現れたのは

「何を……? やってるんだいいいいいいいい!!!」  
「ニャー!!!? こ、これは鉄仮面が悪いんだニャー!!! アイツが余計なことをしなかったら……」

「ああ!?! 何処にハジメがいるんだい?」

現実を見たくないのかゆつくりとさつきまでハジメがいた場所へ顔を向けてみると、そこには誰もいなかった。本気で現実を受け入れたくないとさらにゆつくりと、いや、ブルブルと振動を加えながらミアの方を向いて

「……ニャーも休みなしで閉店まで仕事するニャー……」  
「いい心掛けだね、だけど……」



出してきたハジメ。いまは倉庫へ逃げてきたのでとりあえず品数でも数えようと扉を開けてみると

「ここにいたんですねリユー姉」

「トキサキさん……」

ビクツ!!と肩を上げたあと振り向くりユー。ハジメの姿を確認したあと何故か視線を外してしまった。どうやらこの前の事をまだ気にしているようだ

「……何か騒がしいようですが何かあったのですか?」

「アーニャーちゃんがミア母さんに怒られているだけです」

「……………原因は貴方も関わっている、そうですね」

「一般的にはそうかもしれないませんが、僕としては巻き込まれたんですがね」

いつものやり取りにふうーと息を吐いた後、視線をハジメの元へ戻していままで通り



に話始めた

「そこまで分かっているのなら後でアーニャーに謝るべきです。キッチンと謝れば許してくれます」

「なるほど、分かりました。文句の10や20言われるかもしれませんが謝ります」

「いやそこまでは……言うかもしれないね」

「言いますねアーニャーちゃんですから」

和やかになったところでハジメも品数を数えることにした。すでにリユーがやっていたので殆ど終わっているようだ。

するとリユーがふうーと息を吐いた後、ハジメの方を向いて

「トキサキさん、この前はすみませんでした」

「????」

何のこと事なの分かっていないハジメ

ただそんなことは予想していたようにリユーは話を続ける

「モツプで頭を殴ってしまったことです」

「そういえば……どうもモツプで殴られる確率高いようですね」

「話を聞いてください。私は貴方に失礼なことをした、何か償いをしたいのですが……生憎金銭は持ってませんし私から出来ることは……ここ、ここ、この、から……」

「償いもなにも、僕はリユー姉から殴られても問題ないといいましたから問題すらないのですが。気にしないでいいですよ」

ハジメのその何気無い言葉に救われるのだろう。だけどリユーも譲れないものがある

「しかしそれでは私の気がおさまらない。私に償う機会をください」  
「と言われてましても……………あつ、それなら」

「明日からダンジョンに潜るのでお弁当を作ってください。」  
「……………えっ??」

影が薄くても目標になれるようです。

「うわあ〜……………おはようハジメ君……」

「おはようございませす神様」

まだ眠たそうな神様はその小さな手で目元を擦りながらソファアに座った。目の前のテーブルには昨日の残りであるジャガ丸くんとハジメが作ったスープが用意されていた

「おお!!!ハジメ君が作ったのかい?」

「これをベルベルと神様が作ってくれと助かるのですが」

ハジメもソファアに座り食事をすることに。ベルはというとヘステイアが起きる前に、いやハジメが起きる前に出かけたようだ。一応朝ごはんを作りおきしている

「そんなこと言わないでくれよ！ハジメ君の料理は美味しいからね」

「そういつて作るのが面倒くさいんですよね」

「な、な、なわけないじゃないか!!!」

「なら神様には帰ってきたときにご馳走を作ってもらいましょう」

「ちよつ、ちよつと待つてくれないか!!!さすがに練習なしに料理なんて出来ないよ!!僕にはバイトが!!」

「なら夜にすればいいだけです。それに二日間はベルベルと二人きり、ここでベルベルの胃袋を掴めば……」

「やるよハジメ君!!!これからのヘステイアファミリアの食事は僕に任せたまえ!!!」

こんな簡単に乗せられていいのか?と一瞬考え直ぐに消し去ったハジメは、今日から

の冒険について再度ヘステイアと話し合うことにした。誓約については問題はないよ  
うだが

「基本的にモンスターとはアイズ姉とリヴェリア姉が戦ってもらい、倒せるぞというときだけ戦闘に参加します」

「うん、そのそうがいいね。何度もいうけど君はレベル1なんだ。中層に向かう時点であり得ないことだってことは理解しておくように」

「……………了解です」

「ちよつと待つんだハジメ君!!なんだい、いまの間は!!!」

君は一時停止のせいで嘘をついているのか分からないんだよ!!正直に言うんだ!!何を隠してるんだい!!!」

ベルのステイタス更新を遅くしたり、神が子の嘘を見抜くその目が効かなかつたりと、本当に一時停止は規格外である

「中層なら何回か行ったことあります。原因としては友達欲しさに冒険者に付いてつて気づいたら中層の入り口にいてそこから何故かよく縦穴に落ちてしまい、帰りが遅くなってきました。今まで話さなくてすみませんでした」

「そうかそうか……………って、誰が許せるもんかあああああああああ  
!!!!!!」

テーブルをひっくり返しそうとしたのでその前にテーブルに触れて一時停止で固定。もちろんひっくり返そうとしたヘスティアは動かないテーブルに力を入れていたので指と腕と肩を一気に痛めた

「あ、あううううううう……………」

「ダメですよ、食べ物を粗末にしたら」

「誰のせいだと思っっているんだい……………」

本当に痛そうだったのでハジメは「失礼します」といった後にヘスティアの腕を掴ん

で揉み始めた

「な、何をしてるんだい君は!!!」

「こういうことは、神様はベルベルに触ってほしいと思いますが、いないんですから我慢してください」

「そういうことじゃなくて!!!」

「僕のせいですよ、ならこれくらいさせてもらいます」

なんとも強引な償いなんだと、思いながら言われるままハジメにその身を委ねた。なんと力加減が上手く気持ちいい〜と思いつつながら

「……これまでのことは仕方ないとしても、これからはホイホイと冒険者に着いていかないこと。もう君にはベル君とダンジョンに潜ったり、ろ、ろ、ろ、ロキファミア



と冒険することだつてあるんだ。勝手な行動すると周りが危険な目にあうんだ、よく考えて行動するように、分かったね?」

「はい、キチンと話してから行きます」

「まず、行かないことを前提に出来ないのかい君は……」

「出来たら……神様やミア母さんやエイナ嬢に怒られないのでしようね」

「分かつてやっているんだから、本当にいい性格をしてるよハジメ君は……」

はあ、とため息をつきながら「ありがとう」と緊張した筋肉をほぐしてくれたハジメにお礼をいった。いえいえ、といいながら立ち上がろうとしたところをハスティアが腕を握り引き止めた

「神様?」

「分かつていると思うけどアレだけは使わないようにするんだよ」

「ああ、アレですか」

「ハジメ君はやり過ぎる時があるからね、気を付けないと周りを巻き込んでしまうからね」

.....

神様から助言をもらい出発前に寄るところがあるとヘスティアに言い残して後片付けを頼み出てきた。向かう先は昨日約束したものを貰うためだ

『豊穰の女主人』に近づくと外で掃除をしているシルを発見した

「シル姉、おはようございます」

「おはようございます」

「早いですね、営業準備はまだ先ですよね？」

「ふふふ、ちよつとお手伝いをしてたんですけどね、追い出されました♪」

「そうですか、いま御一人ですか」

「そうなんですよ、一人なんですよ♪」

お互い含みのある言い方をしながらも通じあっているようだ。それはそうだろう、ハジメがここに来た理由、お手伝い、一人、とくれば知っているものなら予想つくだろう。

「楽しみですね」

「あんなに頑張っている姿、初めてかも知れないですね」

「それだと普段がやってないように聞こえますよ」

「そんなわけないじゃないですか♪」

「おはようございますリユ姉」

「おはようございます」

リユーがお店から出てきて失礼なことを言っていたシルを見ると、何か目で合図をしているようだったがすぐにハジメの方を見て丁寧にお辞儀をする。そのリユーの手にはここに来た理由があった

「どうぞ、上手く出来ませんでしたですがこれが私の精一杯です」

「どうもありがとうございます、お昼が楽しみです」

感謝を伝えて受け取ったそのお弁当箱を手にしてそれをどう見ても冒険には足りないバックに入れて集合場所であるバベルの前に向かおうとしたのだが、

「ちよつと待つてください。バックの中身が見えてしまったのですが…何も入ってませ

んよね？」

「はい、出来るだけ魔石やドロップアイテムを入れたいので」

「そういうことではなく……回復系のアイテムさえ入っていないのはどういうことですか？」

「そう言われても買ったことありません。それより大事なのはダンジョンでお昼ご飯です」

「……貴方には必要ないかもしれませんが、くれぐれもお弁当のために自分が危険な目に遭わないように」

「分かりました、それでは行ってきます」

全く話を聞かずにお辞儀をしてこの場から歩き出すハジメ。その後ろ姿を見てリユースは

「……本当に分かっているのかどうか……」

「気になるなら付いていったら♪」

「……これは、彼の冒険ですので……」

「なら、今度はリユーがお誘いしたらどう？」

ちよつとイタズラをしたような表情でシルはお店の中へ入っていったが、リユーはトキサキの背中が見えなくなるまでその場に残ったあと

「……私は……許されない者だ……」

「……私では……彼の隣には……」

.....

「遅くなりました」

「いや私達もさつき来たところだ」

「……………おはよう……………」

すでにバベルの前にはロキファミアのアイズとリヴェリアが到着していた。そしてその隣にはロキとヘステイアがまたしてもケンカをしている。会えば必ずしないと  
いけないのだろうか……………

「リヴェリア姉、二人を止めなくていいんですか？」

「止めてもまた始めるから無駄だ。それよりその「姉」というのは止めてくれないか？」

「私は……………このままでいい」

「……………ならリヴェリア母さん……………」

「誰が母さんだ。それならまだ「姉」のほうがいい」

なにかを思い出したのかはあくともため息を付くりヴェリア。するとさつきまでケンカをしたいたロキが

「ハジメは見る目あるな〜リヴェリアはロキファミリアのお母」

「ロキ、それ以上いうなら…分かってるな？」

「じ、冗談やでリヴェリア……なっ、機嫌治してな〜」

何か弱味を握られているのかと思うぐらい神という立場を簡単に捨てて下手に出ているロキ。そんな姿を見たヘスティアは

「神としてそれは如何なものかと思うよロキ…」

「うっさい!!!リヴェリアが怒ったほうが重要や!!」

「つまり神様がベルベルにベタベタみたいなのは、神という立場を捨ててまで重要なこ



となんですネ」

「か、関係ないと言いたいのには否定出来ないなんて……」

「分かるでドチビ、アイズさんに抱きつくときは神なんて立場なんて捨ててもええと思  
うわ〜」

「やっぱりそうかい!!! いや〜初めてだよ、ロキと意見が合うなんて♪」  
「こればかりは認めるしかないな♪」

何か変なところで意見が合った神達。お陰さまでリヴェリアは頭が痛くなったのか  
手で押さえている。

そんなことをしているとさつき話題に出てきたベルがこっちに向かって走ってきた

「良かった間に合って〜!」

「ダンジョンに行っているかと思いましたが」

「ハジメに渡したいものがあったて……」

するとベルの体で隠されていた物を目の前に差し出した。それはベルが使っているヘスティア・ナイフと同じ長さの剣を持っていた。剣と言ってもこのオラリオには珍しい「刀」であり「小刀」というものだった

「どうしたんですかこれ?？」

「この前お店の中を見ていたらこれが目に入って。きつとハジメに合うんじゃないかな  
くって!!」

嬉しそうに話すベルだが身なりはボロボロでどうやらダンジョンに潜っていたようだ。そして換金したお金でこの小刀を買ってきたのだろう。

そんなベルは小刀をハジメの前に付きだし、それを受け取ったハジメは鞘から刃を抜いてみた

「高かったんじゃないんですか?」

「まあ、ちよつとね…少しだけ足りなかったからローンを組んだけど……」

「ちよつとベル君!!!只でさえ貧乏なファミリアに更に借金が!!!」

「五月蠅いですよ、借金の9割9分である神様は黙っててください」

「真実なのは分かっているがこうも有無も言わず言われてしまったへステイアはガクツと落ちこんだ」

「無理しなくてもよかったですよ」

「無理なんて……無理なんてしてない。」

「それにこれは僕のためなんだ」

「どういふことなのか分からないがベルの瞳は真剣そのもの。ハジメは黙ってベルの言葉を聞くことに」

「僕はある人に、その強さに追い付きたい。」

「そしてハジメ……」

……僕はハジメにも追い付きたい!!」

「僕……ですか？」

僕なんてステイタスもレベルも上がらないんですよ」

「でもハジメはロキファミアと一緒には冒険に、

ううん、遠征まで誘われている。それもレベル1で……

それはきつと魔法とスキルのお蔭だとハジメはいうかも知れないけど、それはハジメだから手に入れたんだ。

それがハジメの強さだっと思うんだ。

だからその強さに追い付きたい、

横に並んで戦えるように……

でもただ追いかけるだけじゃダメだっって、

ハジメも更に強くなってほしいって思ったから……だから……」

上手く言葉に出来ずに止まってしまったベル。それを見ていたハジメは

「分かりました。これを使えるぐらいに強くなります。だからベルも頑張ってください」

「う、うん!!!」

なんとも嬉しそうな表情をするベル、そして周りは微笑ましい表情でそれを見ていた。ハジメはその小刀をベルトに取りつけた

「おお!!!様になっているね〜!!」

「……………皮剥きに使えそうですね」

「ちよつとハジメ!!!ちゃんと使つてよ!!!」

「冗談です」と言っているがここにいる誰もがやりかねないと思っただろう。話が終わったところでハジメはアイズとリヴェリアの前に立ち

「それでは行きましようか」

「そうだな、ではロキ行ってくる」

「行ってきます」

「気を付けてな〜二人とも!!」

「頑張ってくるんだよハジメ君〜!!」

「ハジメ!!頑張って!!!」

バベルに向けて歩き出す三人。後ろではまだ見届けてくれる人達がいる。そんな中、誰も聞こえない声で

「……本当の強さというのはベルみたいな……」

「なにか言った?」

「……はい。冒険が楽しみです」

「うん、楽しみ」

「ああ楽しみだな」

まるで冒険というよりピクニックにいけような感じだが、この時はまだ「あんな事があるなんて」ハジメは思っていなかった。

そう、これはただの冒険ではない。

影の薄さよりも僕が変だと思われている。

「ふっ!!」

只今第16階層である。

上層ではモンスターはまるで紙切れかのように、アイズ姉の振るデスペレートに簡単に斬られていた。なので上層から中層までは最速で到達して今に至る

「アイズ姉だけでここまで来れましたね。あんなにモンスターがいたのに」

「アイズにとつては肩慣らししかならないだろう」

「……終わつたよ」

ついさつきまで四方を囲んでいたアルミラージュの群れがいたのだがあつという間に全滅した。それも苦労というものもなく準備運動をしてきたよ、という感覚しかないのだろう。目の前でこんな戦いを、レベル5の戦いを見たことなかったので本当に「スゴ



「い」としかいいようがない。

「しかし……………本当に見えていないのだな…

ここまで来たというのにハジメは一度もモンスターに襲われていない。

それに普通は上層から中層に向かうに連れてモンスターのエンカウントが増えるというのに、減ってきている気がするのだが……………これもハジメの影響だということか??」

「だと思えますよ。影が薄いというのはその単体だけではなく周りもその影響があると誰かが言っていました」

「……………なるほど。ではずっといる私達も同じように周りから認識されなくなるのか？」

「いえ、影響があるだけです。そうじゃないと神様やベルも誰にも認識されなくなりますよ。」

「なるほど、理解した」

は  
良かったです、トリヴェリアの前を歩くハジメ。その姿を後ろから眺めるリヴェリア

(そう誰にも認識されない。それはどれくらい辛いことなのか……普通に話せる事が出来ず、目にも止められず、そこにおいても気づかずに通りすぎる……冒険者だろうか一人の人間……君にはどれだけの苦しみが……)

いくらすごいスキルを持っていようが「人が人である」というそれを無くしてしまつたら、人はそれを耐えることが出来るのだろうか……

「どうしましたリヴェリア姉?」

「い、いや。何もない。さあもう少しで18階層だ」

「ねえハジメ」

「なんですかアイズ姉」

「貴方の力を見てみたい」

「ああ、そうですね。ここまでアイズ姉がモンスターを倒してくれましたし、ここからは僕がやりましょう」

そういつてハジメはアイズとリヴェリアの前に先頭へ出てきた。確かにアイズはハジメの力を見てみたいとは言ったが

「ちよつとまで、いまの発言はハジメが一人で戦うようにしか聞こえない。確かにハジメの力はスゴいだろうがレベル1であることは変わらない。中層であるここで一人で戦うとなると契約違反になる」

契約では勝てそうな時だけ戦闘に参加する。となっている。中層でそれも一人で戦うなんて……無理にも程がある。この中層では上層とは違いモンスターの強さもそうだが数が一気に増えて出現確率も上がっている。アイズ達のようなレベル5ではない

かぎりパーティーではないと攻略できないのだ

「契約違反はいけませんね。でしたら数を減らして貰ったところで僕が戦う、というのはどうでしょうか？」

「なるほど、それならまだいいかもしれん。しかし危ないと思ったら強制的に終わらせるからな」

「僕の手を見るためなのに守ってもらっているというのは、なんか矛盾してませんかね？」

「気にするな。私も思っているが無茶はさせられん」

「それじゃ、あれでいいのかな？」

すると目の前に現れたのは先程と同じアルミラージの群れ。それを確認したアイズはゆっくりとデスクペレート抜きを抜き一気にアルミラージに近づく。そして近づくだけではなく何故か通りすぎた。立ち止まりデスクペレートを鞘に納めた時アルミラージの胴

体は切れ、中にあつた魔石さえも切られた

「スゴいですね。全く見えませんでした」

そしてさつきハジメが提案した通りにアルミラージが一匹だけ残っている。そのアルミラージは圧倒的な敵に恐れているようでその場から動けないでいる

「さて、あの一匹でも大変だが周りには私達がいる。心配せずに思いつきりやってくれ」「分かりました。それでは折角ですからベルから貰ったこの小刀《石火》の試し切りですね」

そういつてハジメは石火を抜いた。そしてアルミラージに向けて歩いていく。普通に歩いているがアルミラージにはハジメのことは見えておらず目の前に近づいても気

づいていない。そして石火をそのまま降り下ろした

「……………えっ」

「まさかと…思っていたが……」

アイズ達の目の前にはハジメが降り下ろした石火がアルミラージの体を貫く、ところではなく刃先が当たった状態で止まっていた。一時停止で止めている訳でも、無意識でスキルが発動している訳でもない。

思い出してほしい。

ハジメのスキルや魔法は確かにレア中のレアではあるがその代わり、

力：I O    耐久：I O    器用：I O    敏捷：I O    魔力：S 9 9 9

と、変則過ぎるステータスの持ち主であることを。

だからハジメがいくら攻撃しようがそれは蚊が刺した程度しかないのだ。刺されたことに気づいたアルミラージは一度距離を取って見えない敵に向かい、さつきいた場所よりも少し前に向かって飛んだ

思わず助けに行こうとしたアイズに対してリヴェリアはそれを阻止した。確かにレベル1ならアルミラージと言えども危険なものには確かだ。しかしすぐに危険な状態に陥るとは思っていなかった

そしてその予想は当たり危険なことに陥ることはなかった。アルミラージの攻撃はハジメの体に触れたとたんに停止させられていたからだ

「うーん、やっぱり武器を持っても攻撃は当たりませんか」

ハジメも当たってないよね!!と、ここにベルベルがいたらそう言っていただろうなと考えながら次から次へとアルミラージからの攻撃を防いでいる

そんな姿を見て驚いているのはアルミラージだけではない。

「本当に……本当にすべての攻撃を防いでいるというのか……」

「……スゴい……」

初めて見る光景に驚く二人。アイズとはいえアルミラージの攻撃をただ受けるだけとなると怪我をするだろう。なのにレベル1であるハジメは怪我もなく抵抗もせず、その場に立っているだけである

「この前アイズ姉が見ていた、と言いますか見るはずだった事を今からしますね」

「あのシルバーバグの戦いのこと？」

「はい、これが僕の戦いです」

未だに攻撃してくるアルミラージの目の前に右の掌を翳した。そして今まで受けていた攻撃を、止めていた攻撃を、それを全て右の掌に集結させて一気に一時停止を解除<sup>再生</sup>させた。

その攻撃が、衝撃が、一ヶ所に集まったことにより一撃では倒せない攻撃を一撃必殺に変えてしまった。アルミラージの体はその場で吹き飛び魔石も粉々になって消えて



いった

「魔法」のような攻撃。それは一時停止は魔法ではあるが、さっきの一撃はレベル1では考えられないものである。だから信じられないのだろう、いくら頭で分かっているても、冒険に誘うとき自分達が誘うほどの者だと分かっているてもだ。

そこにいる人物は何者なんだと考えてしまう。

.....

「ここでお昼にしましょう」

「いやここでお昼を？」

いまハジメ達がいるのは三人が余裕で入れる横穴の中。奥行き5メートルくらいあり休憩するには持つてこいかも知れないがここはセーフティゾーンではない。ではなぜここでお昼を取ろうとしているのかというと、その横穴の入り口全体に一時停止による空気の壁を作ってモンスターの侵入を食い止めているからだ。もちろん壁からモンスターが出現しないように壁にも一時停止で止めている。

なので、アイズの目の前では空気の壁の向こうで爪を立てて攻撃したり火を吐いたりして中に侵入をしようとしている。だが一時停止によって止められたものは再生しないかぎり動くことはない。だからハジメは安心してバックを背中から下ろしてお昼を取ろうとしている

「まさか空気さえも止めることが出来るなんてな…」

「でもこういう「柰」というのがないと一時停止出来ません」

「流石に何からなんでもというわけではないのだな」

その言葉はなんか含みのある言葉に聞こえたが、それよりお昼を取りたいというのが

優先されたため気にしないことにした。バッグからお弁当箱を取り出したところで

「……………いいな」

「持っていないんですか？」

「18階層で食事を取ろうと考えていたからな」

「……………食べますか？」

その言葉にハジメと同じぐらい表情が変わらないアイズが嬉しそうな表情になり、リヴェリアはすまないと頭を下げてお礼を言った。

元々一人で食べるつもりはなかったがこんなに欲しそうな表情を見ることになるなんて考えていなかった。お弁当箱を3人の座る中央に置いて蓋を開けると

「……………えっ」

「な、なんだこれは…………」

そこ見えたものは到底食べ物には見えない。だってそれは真っ黒な物で、形は歪で……これ「大丈夫」という言葉が出てこない

「おお、サンドイッチですか」

「サンドイッチ??!?!」

「どうしたんですか二人とも?驚いているようですが」

「これ、サンドイッチじゃないよ」

「間違いなく食べた者の体を壊すための物だ」

「失礼なことを言わないでください。これはリユー姉が作ってくれたサンドイッチですよ。そんなことをいうのならあげられません」

いや食べられません、というか、食べ物でもありません。と言いたい衝動をグツと抑える二人。無表情なハジメがどこかワクワクしているように見えるのだ。食べるのを止めるなんて……言えなかつた

ハジメはその黒色それを手に取り、なんの躊躇ちゆうちゆうもなく、躊躇ためらいもなく、それを口にした。

普通では考えられない音がハジメの口からする。それでも表情が全く変わらずにモグモグと口を動かす

「……………」

「……………どうなんだ……………」

特に変わった様子もなく口に入っていた物をゴクツンと胃の中へ流して食べ終わった。しかし一切のアクションを起こさずにまるで一時停止により止められているように動かないハジメ。やっぱりヤバイものだったのではないかと思いいりヴェリアが声をかけようとした時

「卵サンドの次は野菜にしましょうかね」

「……………ハジメって……………」

「……………味覚オンチなんだろう……………」

ハジメの新たな一面を、見たくない一面を見てハアーとため息付く二人

「そうでした、リヴェリア姉とは少し呼びにくいのでリヴェ姉と呼びますね」

「全くの脈絡もないのか……………」

頭痛が治まるまでここで休憩したことは言うまでもない。

影の薄さと二人のお蔭で18階層まで来れました。

お昼ご飯を食べて？向かうは目的地である18階層へ。しかしその前に立ち寄るのは17階層であり、そこには階層主ゴライアスがいるはずだが

「今日はいませんね」

「運がいい。もう少しで出現するタイミングだったが」

階層主は一度倒されると復活までに期間があり、その間に少人数のファミアなどはここを抜けるようにしている。もちろん階層主がいても逃げ切ってしまうが、そう簡単にはいかないのが階層主である。一級冒険者であるアイズとリヴェリアでも倒すのは大変であり、牽制しながら17階層を抜けていく予定だった

「もう少しということは明日や明後日くらいに出現する可能性があるんですか？」  
「期間的にはそうだ。安心しろ、流石にゴライアスと戦えとは言わない。完全な契約違反にあたる」

しかし17階層にもモンスターはいる。

ライガーファングの群れが現れハジメ達を襲う。デスペレートを抜き斬りかかるアイズ、自分が対象になるように攻撃をして一気に一時停止解除を喰らわせるハジメ。そしてリヴェリアは二人のお蔭でモンスターに襲われることもなく

【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を巻<sup>うす</sup>け。閉ざされる光、凍てつく大地。

詠唱を続けもう少しで終わりを向かえようとしていた。それに気づいたアイズはハジメに近づいて



「魔法が来るから、離れて」

「了解です」

と、声をかけられたハジメは今まで溜まっていた一時停止を足裏に設定して、解除をしたことで衝撃が放たれてハジメの体は浮き上がりその場からの緊急脱出をした。そして詠唱は、

吹雪け、三度の厳冬——我が名はアールヴ」

終わりを向かえた。

その瞬間17階層に、ライガーファングの群れに極寒の吹雪が襲いかかり、モンスターの動きを、時さえもいてつかせる無慈悲な雪波は一匹残さず凍りつかせた

「スゴいですね、これがリヴェ姉の魔法ですか」

「私はハジメの魔法の方がスゴいと思う」

「そうなんですか？」

「さっきのように魔法を発現するには詠唱が必要だ。強い魔法ほど詠唱は長くなる。しかしハジメの一時停止は詠唱要らずの自動発動<sup>オート</sup>。正直それは本当に「魔法」なのかと疑ってしまうほどだ」

魔法だからと、いってもいい。必ず詠唱が必要となる。例え詠唱要らずの魔法だとしてもその名を名乗ることになるだろう。しかしハジメの魔法は、それさえもない。

「魔法ですよ。ちゃんとステイタスにもありましたよね？」

「ああ、それは分かっている。しかし人は違うものを見てしまうと疑ってしまう。気分を害したなら謝ろう」

「いいですよ。それより18階層にいきましょう」

「……………そうだな」

凍りつたモンスターを通りすぎ18階層へと歩き出す。するとアイズがハジメの横に付いて

「……………さっきのは、なに？」

「さっきのはと言いますと……………あの場所から抜け出した時のですか」

「うん、普通の動きじゃなかった」

「確かに、まるで足元から何かが噴き上げて飛んだ。そんな印象だった」

「間違ってますよ。衝撃を掌から足の裏に変えて解除しました」

「……………やはりとんでもない魔法カだな……………」

「使い勝手がいいだけですよ」

大したことはないと言っているハジメだが、アイズもリヴェリアもその一時停止はただ何かを止めるだけのものではないと理解している。そしてそれはリヴェリアが持つ魔法よりも群を抜いて強いのではないかと……………

前を歩くハジメに気づかれなないようにアイズはリヴェリアに近づいて

(……………実行するの?)

(どうだろうか、正直問題はないとは思う)

(私もそう思う、ハジメは強い)

(ああ、魔法も私よりも強いだろう。そして心も。

しかし決め手がない、実行するだけの決め手が)

(……………私に、任せて)

(何か考えがあるのか?)

(……………うん)

(分かった、だが慎重にすることだ  
でない)

ハジメを殺してしまうかもしれないからな)

.....

「テントを借りたいのだが」

「いや、それより宿に……」

「テントを借りたいのだが」

「……わ、分かりました。少し待ってください」

無事に18階層に到着したハジメ達は、まず今夜の宿を決めることにした。しかしセーフティゾーンである18階層だからこそ、地上にある宿屋より値段は高く、モンズ

ターなどが襲撃でもしているのか宿屋自体もボロくマトモに休息を取れる場所ではない。なのでロキファミアリアはここに来る旅にテントを張っている。しかし今回は少数でテントを持ってきてはいない。

「す、すみませんが状態のいいテントはこのひとつだけなんです……」  
「構わない。これだけあれば足りるか」

と、テントを借りるには多すぎるお金を渡したりヴェリア。近くに宿屋があるので泊まらないのだ、これぐらいはと多く支払ったようだ

「ありがとうございました!!」

「これで寝床は問題ないな」

「いや、問題しかありません」

テントを手にしたりリヴェリアに対して間もなく答えたハジメ。しかしどうということだろうと首をかしげるリヴェリアは

「どんな問題がある?このテントは三人でも十分なスペースはある。確かに食事は自炊になるかもしれないが……」

「そこは僕がやりますので問題ありません。問題なのはそのテントにどうして僕も一緒になんですか?」

「ああ、そういうことか。ハジメは私達を襲いたいのか?」

「二級冒険者に、いえ、許可も、いえ、同意も、いえ、お互いが信じあい許しあいどんな時もその人を思い続けることが出来る相手ではないと」

「分かった、分かった。

私達はハジメと一緒にでも問題ない、後はハジメ次第だが無理というなら宿を手配する」



「いえ、お二人がいいのなら僕も構いません。しかし簡単に異性と一緒でも大丈夫だと言わないでくださいね。いくら一級冒険者とはいえ女性なんですから自分を安くみないようにですね……………」

「私が悪かった!!そこまで考えてくれるとは思っていなくてな。それに安くなってる見えない。ハジメだからいいと私もアイズも思っている」

が、  
リヴェリアの言葉にアイズも頷く。「そうですね」とそれ以上は追求してこなかった

(冒険者としても人としても申し分もない。だが決め手が見えない……アイズに任せるしかないか……)

何を考えているのかハジメには分かるはずもなく、いまは夜ご飯の為に買い出しのことを考えていた。リヴェリアから充分なお金を貰っているためこの18階層の物価が

高くてもそれなりの物は買える

「何を作りましたか……」

「ハジメ」

「なんですかアイズ姉」

「ジャガ丸くん、作れる？」

「まあ、神様がよく貰い物として食べてましたのでどの様な物かは分かりますから出来るかと」

「作って」

「いや、もつとちゃんとしたものを……」

「作って」

何か譲れないものがあるのだろう。真剣な眼差しでジャガ丸くんを作ってくれというアイズ。ハジメとしてはちゃんとした料理を作ろうと考えていたのだが

「……………分かりました。メインはジャガ丸くんにしますので後は何かありますか？」  
「特にない」

「そうですね、リヴェ姉は?？」  
「栄養のあるものを頼む。でないとアイズはそれだけしか食べないかもしれないからな」

「そんなこと、ない」と言っているがあんな眼差しでの後でそんなことを言っても説得力がない。とにかくハジメは買い出しを、アイズとリヴェリアはテントを立てた後水浴びに向かったのだった

.....

それからしばらくしてアイス達は水浴びを終えて帰ってみるとすでに料理は完成していた。そこにそこにあつたのはアイズのリクエストであるジャガ丸くんとリヴェリアのリクエストである栄養のあるものということで野菜とお肉と一緒にスープで煮たものがあつた

「おお、これは美味しそうだな」

「ジャガ丸くんだ」

「リクエスト通りに出来たと思いますが」

「正直、昼間のアレを見て心配だったが、これなら安心して食べれるな」

「それはどういふことなのかと聞きたいですが、お腹も空きましたし気にしないことにしましょう」

食事の前に感謝を込めて祈った後、直ぐ様アイズはジャガ丸くんを手にとって口に入れた。熱々だから一気に食べようとすると火傷してしまうが気にせずに進める

「……………ッ！ 美味しい……………」

リヴェリアはスープを手にとってスプーンで掬ったそれを口に入れる。

「これは美味しい。まさかここまでとは……………」

「そんなにですか？普通に作っただけですよ」

「こんなことをいうのはなんだが、ダンジョンに潜ると料理を作ると雑になってしまうんだ。皆本業は冒険者。料理など食べて栄養があれば味はとイヤが多いのだ」

「そうなんです、美味しい方がいいのに」

言っていることは分かるが食事は大切である。それこそ一日を変えてしまうほどに。心を満たしお腹も満たし次の冒険の活力となる。だからキッチンと食事をしたほうがいいと思う。

「だけどロキファミアリアにも事情というものがあるのだろう、これ以上はいわないことにした」

「しかしそれを差し引いても本当に美味しい。なにかコツがあるのか？」

「うくん、たまにミア母さんに強制的に試食で色々言われているからですかね」

「なるほど、それなら納得がいく」

「おかわり」

「はい、まだありますけど食べ過ぎたらダメですよ」

「うん大丈夫」というがさつきからスゴい勢いで食べ進んでいる。よほどジャガ丸くんが好きなんだろう。

.....

食事を終え寝ることにしたのだが、どの位置で寝るか少し騒ぎになった。どういわけかハジメを二人の間に寝てもらおうとなったのだ。だがハジメの主張は二人が並んだ隣で寝ること。まあ結局はハジメが折れて二人の間で寝ることにした

しかし寝られるはずもなく、起こさないようにテントから抜け出した。この18階層を見渡せる丘を見つけてそこに座り景色を見渡す。

結晶がキラキラと光り、それが周りを照らし出して

「綺麗ですね」

「……………うん、綺麗」

気づかなかった。一級冒険者だからだろう、気配を消して近づいてきたようだ。

「アイズ姉、ビツクリしました」

「全然驚いているように見えない」

「顔に出ないタイプなので」

「私も、言われる」

そんな些細な話から少しずつ話題が膨らんでいく。ジャガ丸くんのことや仲間のこ  
とと神様の話など、大した話ではないかもしれないが楽しいと感じている



「……………ねえ、ハジメ」

「なんでしようか」

「私はハジメの強さを、知りたい」

「前にもそんなことを聞いてましたね」

さつきまでの和やかな雰囲気から一変して真剣な眼差しでハジメを見るアイズ。

「僕の強さですか……………スキルか魔法ですか？」

「違う、知りたいのは……………」

そう言いながらアイズはハジメに向けて指を指す。正確にはハジメの胸の中央を

「その強い……心」

「心ですか？」

「うん」

「強いですね……ちなみにどの辺ですか教えてくれますか？」

「一体何が強いのか自分では分からなかった。普通にしているだけなのだから強いと言われても答えられない」

「普通はどんなモンスターでも襲って来たら逃げるか、戦うか、恐怖して立ち止まるかなのに逃げもせず、戦うこともせずに、怖がることもなく攻撃を受けている。どうしてそんなことが出来るの？」

冒険者なら戦うだろう。ヤバイと思つたら逃げることも大事であり、強敵が出てきた

ら動けなくもなるだろう。だから知りたいのだ。その強さを。

「どうしても何も、自分を信じているだけですから」

「信じている…だけ」

「普通ですよね。」

信じているといえますか「自分」ですからね、迷うことなんてありませんよ」

本当に迷いなんてないとアイズはハジメの瞳を見て理解した。曇りもなく真っ直ぐに見ている。

「それがハジメの強さ……」

「強さ、なんですかね。僕はベルベルやアイズ姉のように「強くなりたい」と「強くありたい」と思えません。もちろん冒険者ですから強さを求めますよ僕も。でも二人のよう

に高みを目指せない。僕はそれが羨ましい」

「……どうして、そんな……」

「こんなところにいたのか」

何かを聞こうとしたところでリヴェリアが現れて言葉を遮られた。どうやら二人がいなかったことに気づいて探していたようだ

「明日の為に早く寝ることだ。ほら二人とも帰るぞ」

「そうですね、いきましよう」

「う、うん……」

そういつて二人よりも早くその場から離れていくハジメ。その背中を見ながらリヴェリアはアイズに

「どうだアイズ？」

「……………何よりも自分を信じている。だから強いのだと思う」

「なるほど、疑わない強さということか……」

それを聞いたリヴェリアは何かを決意したように頷いたあと

「なら、私達はやるしかないな」

「うん」

212 影の薄さと二人のお蔭で18階層まで来れました。

「ハジメには、階層主ゴライアスと戦ってもらおう」

影が薄いからなんて言わせない。

少し時間が遡り、ここは『豊穰の女主人』

「今頃は18階層に着いているんですかね……」

「間違いないでしょう」

「気になるなら今からでも……」

「しつこいですよシル」

睨みをきかせるリユーに対して少し舌を出して可愛く誤魔化すシル。今日はベルとヘステイア、話し相手としてリユーとシルが同席している。お店は落ち着きをみせた所でベル達が入店して「休憩ついでに話してきな」と話相手は二の次で料理を注文させなという遠回しな言い方である

「でもスゴいなハジメは……同じレベル1なのにもう18階層なんて」

「ハジメ君が特殊なだけだよ」

「その通りです。ですから自分もいけるなんて考えないように」

「いえいえ!! 考えませんよそんなこと!!!」

ハジメのお蔭でエイナさんからキツク言われてますから……今日もどれだけダンジョンが危険なのか、モンスター知識とか、もう頭が痛いです……」

「お疲れさまです」

ベルにはハジメみたいにならないようにエイナはまるで英才教育のように徹底的に「ダンジョン」について教えているようだ。なので最近では無茶なことはせずに地道にダンジョンの潜っている。

「しかしそれは必ず役に立ちます。知識が有ると無いとでは大きな差がある」



「すぐには追いつかなくても地道なことが確実に1歩前進する。ってハジメ君がよく言ってたよ」

「ハジメがそんなことを……」

「いまではスキルや魔法があるけど、その前はごく普通の青年だったらしいよ。冒険者になった理由は話してくれなかったけど「友達が欲しい」って言ってたな」

「それ今でも言ってますよね？」

「ダンジョンに一人で潜る理由も友達が欲しいって」

「いま思えばそれが理由だったのかな、冒険者になりたかったというのが……」

しみりとなったところでミアが大きな皿を持って「辛気臭い顔をするぐらいならもつと食べな!!」と割って入ってきた。大きな魚の焼きたものがドンと皿に乗っており周りは香草によって飾られていて、その匂いが食欲をわかせてくれる

「まったく、いまじゃあんたらがいるんだ。昔がどうだったかなんて今が大事なんじゃないかい。そんなに心配なら契約でもなんでも見直して納得することだね」

「あ、ありがとうございます……」

アドバンスを告げたミアはまた厨房へ戻っていく。しかし美味しそうな料理ではあるが量が多い。これを食べきれぬかな〜と思いつつながら

「そういえば契約書って神様が持つてるんですよね」

「そうだよ、ちなみに今も持つてるよ」

「何で持つてきてるんですか!!!??」

「自分でいうもの嫌だけどあんな場所にこんな大事なものを置いておけるかあ!!!」

といいながら自分の胸元に手を入れて何かを掴み引き抜くとそこには折り畳まれた

契約書が入っていた。ベルはその突然のヘステイアの行動にビックリして直ぐに視線を外したが、隣にいるシルが小声で「ベルさんのエッチ……」と言われて少し赤くなっていた顔が更に真つ赤に染まった。

「何処に隠してるんですか神ヘステイア……」

「し、仕方ないじゃないか!! スリにあつても安全な場所なんてここ谷間の中しかないんだよ!!! 流石に神を襲うなんて輩はいないだろうからね、うん」

「クラネルさん、早く金庫を買い取るように」

「は、はい!!!」

「そんなにダメだったのかい!!!」

むしろ何で大丈夫だと思つたのか? と思つたがこれ以上はヘステイアが可哀想だと言うのをやめた一同。とにかく話題を変えるために契約書を広げることにした。たださつきまで谷間の中に入っていたため温もりが感じられる。それを意識したベルはまた

顔を赤くする。

「ベ・ル・さ・ん〜!!」

「さ、さあ!! 契約書を確認しましょう!!!」

強引に誤魔化したベルだが、もうすでに遅く女の子全員から冷たい視線を浴びることになる。いや一人は熱い視線かもしれないが受け取っているほうは感じてないようだ。

契約書を広げて内容を確認する

1 お互いのステータス情報を公開

だが最小限の人数だけにとどめること、もし漏洩した場合は賠償金や体罰を受ける

2 基本にモンスターとの戦闘はロキファミアが行い、トキサキ ハジメ が戦闘する

際は勝てるだろうという状況とモンスターを見極めてから行うこと

3 無事に冒険が終了したら報酬として5000万ヴァリス

4 契約違反を犯した場合は無条件の《命令》を受けること

立派な羊皮紙の枠には芸術的な模様があり、その真ん中に契約内容が書かれてある。何度も読み返したが特に問題はないと思われる

しかしそこで契約書を初めてみるリユーが何かに気づいた

「この勝てるだろうという状況とモンスターの見極めと書いてありますが、これは「モンスターを弱らせてしまえば強いモンスターでも戦える」という解釈が出来るのですが」「それはボクも気になったから聞いておいたよ。圧倒的なモンスターに限っては適用されない。つまりは一級冒険者しか倒せないモンスターや階層主との戦闘は「どんな状況であれ戦闘参加はない」と決めているよ」

「そうですか、それならいいのですが」

「まあ、気になるのは仕方ないよ。まずレベル1の冒険者が18階層を目指す自体あり得ないんだから」

「明るい感じで返しているが契約書を作成しているときはハジメの為を思ってロキに「め、目が血走ってるで…」と引かれながらも真剣に作ったものだ。そこへうーんと唸っているシルが恐る恐る声をかけた

「あのー、でもこれって階層主と戦うんじゃないんですか？」

「何を言ってるんだい？階層主はレベル1が何人集まろうとも倒せないだよ。どんなに階層主が弱っていたとしても……」

「でも、同行者二人が問題ないと判断したら階層主と戦闘になるんじゃないんですか？」

「あのね、さっきから何を言っているんだい!!何を聞いていたんだい!!!そんな契約書にも乗ってないことを勝手に」

「ここに書いてますよ」

そういつてシルは指を指す。そこは羊皮紙の枠にある芸術的な模様が刻まれている。

一体何があるのかとその指の先をじっと見てみるとその模様と同化しているかのよう  
に何やら小さな字で

《しかし2において同行者である二人が問題ないと判断した場合階層主との戦闘を認め  
る。》

「は、はあああああああああああ  
!!!!!!!」

思わず声を張り上げるヘスティアとベル。その声に奥からミアが「五月蠅いよ!!!」と怒鳴ってくる。シルはあわあわと慌てていてリユースは頭を抱えている。

確かに契約書の内容に不備はなかった。ただ契約書自体に不備があるなんて思いも寄らなかった

「な、なんだよこれは!!!」

「これってつまりアイズさん達がハジメをゴライアスと戦えると判断したら………本当にやることになるんですか!!!」

「御二人とも、ここで話している場合ではない。一刻でも早く真意を聞かないとトキサキさんの命に関わります」



その言葉を聞いた二人は直ぐに立ち上がり

「すまないけどここで失礼するよ!!!」

「お支払は……これだけあればいいですか!!?」

「ちよつ、ちよつとベルさん!!?」

「シル、悪いが私も一緒に行つてきます。ミア母さん、必ず明日の夜には帰つてきます」  
「つたく、貴重なバイトを見殺しにするんじゃないよ!!」

ミアから許可を貰い三人で黄昏の館に向かった。

.....

「……ということだロキ。明日にでも」

「頼むでフィン」

ロキの私室で団長であるフィンとロキが話し合いをしていた。その話も終わりを向かえようとしていたところで突然遠くの方から騒がしい音が聞こえドンドン近づいてきた。そのリユーは店から持つてきたデツキブラシで

「な、なんや!!」

「これは……」

その近づいてくる音にフィンはどうやら聞き覚えがあるようだ。その音と同時にロキファミアリアの冒険者の声と一緒に混ざり

「か、勝手に入っては、グハッ!!」

「な、なんだこいつは!!!」

「止めろ!!!これ以上進ませるな!!!」

必死に何かを止めているようだが止まることはなく更に私室に近づいてくる。そして大きな音と同時に私室の扉がぶつ飛び、一緒にロキファミアリアの冒険者が気絶した状態ですべて扉とキスしていた

そして次に現れたのは

「夜分にすみません」

「ちよつ、ちよつとリユーさん!!!やりすぎですよ!!!」

「いやこれぐらいしても、やり足りないぐらいだよ!!」

今回契約を結んだヘステイアとその子ベル。もう一人は「豊穡の女主人」で働いているリユーだった。そのリユーは店から持ってきたデッキブラシでそこで伸びているレベル3である冒険者を叩きのめした。リユーのレベル4ではあるが、ロキファミアの冒険者がそう簡単にやられるはずはない。それでもやられているのは

「ここに来た理由は分かっているはずだ。納得いく説明をしてもらいたい」

いまリユーはキレている。その怒りがこのロキファミアの冒険者達を簡単に倒してしまふほどの力を与えたようだ。

「こんなに早く気づくなんてなく。せやけどちよつとやり過ぎとちやうか?」

「ふざけるな。こんな騙し討ちをしてきた相手に言われる筋合いはない」

「ほうくそれをあんたが言うやね」

「ツ!!!」

ヘステイアとベルには何のことなのか分からないが、リユーが明らかに動揺しているのだけは分かった。そしてリユーが只者ではないということも……

「リ、リユーさん……貴女は……」

「悪いですがその話は後で。いまはトキサキさんのことです」

「そ、そうだ!!ロキ!!これはどういうことなのか説明をするんだ!!!」

ロキの前にある机に思いっきり叩きつけるように契約書を見せる。「知らない」とい

うかと思ったが、逆に悪気もないように

「説明も何も書いてある通りやで。アイズとリヴェリアが問題がないと判断したらハジメに階層主と戦ってもらうってな」

その細い目を開き不気味に笑うロキ。それを見たヘスティアは完全にキレてしまい、二人の間にある机を気にすることなく手を伸ばしてロキの胸ぐらを掴む

「ふざけるんじゃない!!!何を勝手にしているんだ君は!!!!ハジメ君はレベル1なんだぞ!!!それを階層主と戦わせるなんて……ハジメ君に何かあつたらどうするんだ!!!!」  
「だから何かが無いように二人の判断に任せてるんやろ。勝てる相手なら階層主でも戦わせる。それともなんやヘスティア、お前は自分の子供を信じられへんというか?」

「信じてる、信じてるよそれは!!!でもいまはそんな話をしてるんじゃない!!!!!!どうして

こんなことをしてんだロキ!!!これは明らかな契約違反だぞ!!!!

「何をいつてるんや?ちゃんと「契約書」の「中」に「契約」を書いてるんや。なんの問  
題もないで」

その言葉にさらに身を乗り出そうとしたところをベルが必死に引き留める

「放すんだベル君!!!」

「だ、ダメです神様!!!!いまはちゃんと話を聞かないと!!!!!!」

「こんな分からず屋に話を聞くなんて、いや、最初から話をするべきじゃなかったんだよ  
こいつとはね!!!」

「それでも聞かないとハジメが!!!!!!」

その名前を聞いたヘステイアはハツ表情を変えて落ち着きを取り戻した。すると今

度はリユーが

「確かに契約書としては問題はないかもしれない。だが「人」として「神」として、貴方は正しいことをしたと胸を張って言えるのですか？」

「契約の文句の次は人格の文句かいな」

「いい加減ふざけるのはやめてもらいたい。こっちは大事な人の命がかかっている」

「ほうくエルフであるあんたが「大切な人」っていうことは、ハジメはあんたの伴侶になる相手って言いたいんか」

「ここまできると流石にリユーも我慢の限界だったのだろう。1歩前に出ようとしたのだがすぐにその前にロキファミリアの団長であるフィンが立ち塞がり

「悪いけどロキに手出だしするところを黙って見ているわけにはいかないんだ。さつき



のは神同士だからいいとしてもね、侵入者である君達を「排除」する理由だってこつちにはあることを理解してもらいたい」

「なら私達がどのような思いをしているか理解しているはずですよ。それでも……それでまだまだ私達を愚弄するとあれば……」

リユーは手に持っているデツキブラシをフィンに、そしてロキに向ける。その瞬間フィンの周りから殺気が溢れてくるのが分かった。それ以上はどのようなのか分かるかと言っているように。

そしてリユーも明らかに戦う意思があると相手に示している。これにはベルやヘスティアも驚いていた。同じファミリアならば分かる話だがリユーはあくまでもバイトの仲間であり、さつきまでの話や行動を見ればハジメにそれなりの想いがあるのではと感じれるが、いま見ているのはまるで「冒険者が戦いを挑んでいる」ようである。

思い当たる事なら何度もあつた。ロキファミリアの冒険者を叩きのめしたり、ベルがある女の子を助けようとしたときにリユーが現れて追い払ったりなど……

(もしかしてリユーさんって……………)

そんなことが頭を過つた時、さつきまで殺気を放っていたフィンがそれを解き

「ロキ、もういいんじゃないか？」

「……………どうということやフィン？」

「そんなに意地悪をしなくても、だよ。いきなり自分の領地に入ってきて機嫌が悪いのは分かるが先に怒らせたのはこつちなんだ。それにロキなら契約書にそれを書いた時点でこうなることは予想していたはずだ。なら……………」

「全部言わんでもええわ。……………つたく、遊び心の分からん奴やなく」

そういつてさつきまで機嫌が悪かったロキもあつけらかんと態度を変えて、いつも通りのおふぎけた感じに戻っていた。しかしそんな展開に三人は着いてこれず、とりあえ

ずロキ達に向けたテッキブラシは下ろしたリユードが、その含みのある言い方に対して

「どういうことですか？」

「心配いらんということや。確かにアイズやリヴエリアには戦わせるようには言ってるけどな、それはあくまでも「ゴライアス階層主」にトドメを刺すとき」って言っている。せやからといって全く危険性はないと言うわけやないけど、ガチで戦うと違うから問題はないはずや」

そのトドメを刺すと言ってもレベル1が出来ることではない。それはハジメだから出来るだろうと考え、その判断をアイズ達に任せたいということ。だが、

「だ、だとしてもだ!!!契約を破るようなことはしなくても言ってくればいい話だろ!!!それにロキがハジメに階層主と戦わせる意味もないはずだ!!!」  
「ドチビに話したところでこうやって拒否するやろうが」  
!!!

「当たり前だ!! 誰がハジメ君を危険な目に」  
「そこや、ヘスティア」

名前を言いながらヘスティアに向けて指を指す。不機嫌でもお調子者でもなく、真面目な表情で語りだすロキ

「……どういふことだい?」

「確か……ベルって言ったかあんたは」

「は、はい」

「よっしやベル、質問や。初心者も一級冒険者にも必要な「冒険者として何が必要か」分かるか」

突然の質問に戸惑うべし。だが自分のやってきた冒険を思い出してその質問に答える

「つ、強さと決断と経験と心……でしようか？」

「間違っていないわ、だがまだ足りんで」

「……………敵を知ること」

「そう、どんな弱くても強くても相手を知らんことには倒すことなんてできへん。そして敵だと判断すれば必ず体で、心で、感じるもんがあるはずや」

「………恐怖ですか……………」

「!!!??」  
「ロキ、まさか!!」

「今頃気づいたんかドチビ。そうや、ハジメにはその「恐怖心」が足りてない、いや、欠けると言ってもええな。」

恐怖心は情けないもんやない、攻撃されたときどうやって防御した回避する??圧倒的

な敵と、死んでしまうかもしれない敵と戦うか?? 予想出来なかったもんが出てきたらどうやって判断するや??

恐怖心は「恐れているからこそ回避する力」や。

分かるか?? ハジメは冒険者になった時点でどんな恐怖心からでも「一時停止」や「カミカクシ」に守られとる。せやからどんなモンスターでも攻撃でも平然としてられる。それは周りからしたら「強さ」やと思うやろうけど、ウチに言わせたらただの甘ちゃんや。

もし一時停止やカミカクシが効かない奴がおつたらどうするんや。

完全に油断しとるハジメは……簡単に殺されるで」

そこ言葉を聞きヘスティアもベルも顔色が青ざめた。そう心のどこかで思っていたからだ。どんな状況でもハジメなら平気だと、一時停止やカミカクシがあるかぎり大丈夫だと……

だけど誰が一時停止やカミカクシが万能だと決めた?

誰がハジメは絶対大丈夫だと決めた?

そう、勝手な思い込みである  
ヘステイアもベルも、そしてハジメも……

「ええか、その「慢心」をどうにかせん限りハジメが魔力以外のステイタスアップやランクアップすることはまずない。もう分かるやろ、あの魔力だけ上げるといいう意味が」

そう、ハジメは完全に頼りきっている。自分の力に。

それは確かに強さではある。自分を信じられる、信じぬくことは簡単には持てないもの。

だが裏返せば恐怖を知ることもなく、1歩間違えれば「死」が待ち構えている状況にある

そしてそれは身近にいる人ほど気づかない

「それじゃハジメ君のステイタスが上がらないのは、一時停止の問題じゃなくて……」

「ハジメ自身の心にあったんや」

「そ、そんな……」

衝撃を受けているがヘステイアは前からそれに気づいていたのだ

一時停止にある因果<sup>出来事</sup>によってステイタスにも影響することは、そこに必要とするもの以外はおと発動していることを、魔力以外は必要とされないと無意識に判断していることを。

知っていたのだヘステイアは、

ハジメが自分の力に溺れていたことを。

「だからや、あのハジメに恐怖心を与えるためには階層主ぐらいの奴と戦わせんとその身に刻まれんてな。せやけどホンマに戦わせる訳にはいかへん。だからアイズとりヴェリアにまず階層主と戦ってもらうんや。「自分がどれだけ愚かな思考を、思想を持つていたのか」目の当たりにさせるためにな。そして極めつけが階層主にトドメを刺



すことや。恐怖して逃げずに戦う意思をもってもらうためにな」

やっと、やっとロキの思惑が、理由が分かった。

だけどあと一つだけ、これだけは分からなかった

「ロキの考えは分かったよ。でもどうしてだい？

自分のファミリアの子供でもないハジメに、どうしてここまでしてくれるんだい？」

「まあ、言いたいことは分かるわ。

答えは簡単や、今後もハジメを貸してもらうためや!!

なんや激レアを簡単に手放せるか!!!」

「結局はそれか!!!ロキだってハジメの力を利用する気満々じゃないか!!!」

「当たり前やボケ!!!お前の所で腐られるくらいならウチが有効活用したるわ!!!」

またガヤガヤと騒ぎ始めた神様達。というかこれが安定した状況だと感じたベルは一安心し息を吐いた。フィンはクスクスと笑っていてリユーは

「トキサキさんの安全の保証は分かりました。ですが二人で大丈夫なのですか？実力を疑っている訳ではないのですが……」

「心配する気持ちは分かるよ。でも安心してくれ。明日僕を含めたパーティーで18階層を目指すつもりだ。そして恐らく明日が階層主が出てくるはず。ハジメの身の保証はするよ。ただその際にヘステイア様には……」

「分かってるよ。迷惑ではないなら明日ダンジョンに向かう冒険者を集めてもらえるかな、僕だけでも認識を改めたら、あとはハジメ君に会って認めてもらったらいいよ」「それでは今すぐに」

そういつて部屋から出ていったフィン。ヘステイアとハジメ二人が認識しなければハジメを見ることは出来ない。つまりそれは応援しようにも出来ないのだ。だからへ

ステイアだけでもとフィンが提案した  
それを見ていたリユースは、

「神へステイア。私も明日彼らと同行させてもらいます」

「同行ということは……やはり君は」

「理由は……すみませんがまだ言えません。ですがトキサキサさんの手助けにはなると思います」

「分かったよ、それに「まだ」ということは話してくれる気はあるんだろう。それだけ聞ければ安心できるよ」

こうして編成されたメンバーは

フィン・デイルナ、

ガレス・ランドロック、

テイオネ・ヒリユテ、

テイオナ・ヒリユテ、

ベート・ローガ、

レファイヤ・ウイリデイス

そしてアイズ・ヴァレンシユタイン

リヴェリア・リヨス・アールヴを加えたロキフアミリアの主戦力達とリユー・リオン  
が、

たった一人の冒険者の為に、

その冒険者の命の為に、

ダンジョンに向けて立ち上がった。

影が薄くても怒る時は怒ります。

「いくぞオオオオオオオオオオオ」

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオ」」」」

!!!!!!!

18階層から17階層への入り口では多くの冒険者が集まっていた。誰もが武器を手にして力強く叫んでいるのは気合いをいれるため。普通にダンジョンを進むだけならここまでしなくてもいいだろう。それをするとすることは、

「もしかして階層主が現れたんですか？」

「みたいですね」

その光景を離れたら場所からハジメとリヴェリア、アイズが眺めていた。ハジメには16階層辺りでモンスターと戦ってもらうことにしていた。

実際の所は階層主との戦闘

自分達が何を言つて、何をやっているのかなんて分かりきっている。それでもやることにしたのは自分達の主神であるロキの言葉があつたからだ。

.....

「何を考えてるんだロキイイイ!!!」

「ヒイツ!!!ちよつ、ちよつと待つんやリヴェリア!!!」

「とりあえずその椅子を下ろすんや!!」

温厚で面倒見のいいリヴェリア、怒らせたらまるでお母さんに怒られているようなり

ヴェリア。しかしいまのリヴェリアは完全に冷静を失い感情に身を任せている。すぐさまガレスがりヴェリアが持つ椅子を握り

「落ち着けリヴェリア。お前らしくないぞ」

「この駄神が何を言っているのか分かっていいるのか!!？」

レベル1にゴライアスをぶつけるなどとほざいているのだぞ」

「ロキが変な事をいうのはいま始まった訳じゃなからう」

「助けるんか非難したいんかどっちなんやガレス!!!」

というよりも事実を言っているだけだと思ふところにいる皆は思っていた。

数時間前ハジメと冒険の契約をしたロキは、一級冒険者を全員ロキの部屋に集めて、これから行う計画について話したのだが

「しかしリヴェリアが怒るのも無理はない。こんなことをいうのは相手に失礼だが、僕はその子の心配ではなく「ファミリア」の心配をしているんだ」

「どういふことや？」

「分かっていると言っているのかい？ ロキファミリアが認めたレベル1の少年を18階層へ一緒に連れていく。これだけでも大変なことなのに本人にも内緒でゴライアスと戦わせるなんて……」

もしこの事がバレたら、いや、少年にもしもの事があつたらロキファミリアの信頼は失墜して、最悪は解散なんて話にもなる」

その時誰もが息を飲んだ。皆が頭のなかで過っていたこと、しかしそれを口にするとはしなかった。もしそれを口にしたら「起きてしまおう」と感じてしまったからだ。

しかしフィンはそれを口にした、誰もが拒んだことを、誰かが言わないといけないこと。だからこそいま話さなければいけない。



「そ、そんな大袈裟な……」

「決して大袈裟ではないよテイオナ。普段は意識していないかもしれないが僕たちのファミリアはこのオラリオでトップの位置にいる。

そのトップであるロキファミリアがレベル1の冒険者を階層主と戦わせたなんて知られたらどう思う？

信頼も何もかも失うだろう、ギルドから目をつけられ二度とダンジョンに潜れない可能性もある」

真剣な眼差しに観念したのかふうくと息を吐きながらロキは

「考えすぎやフィン。そうならんこと皆に手伝ってもらはんやからな」

「………どういふこと？」

「そのままの意味や。第一、階層主に単独で戦わせるわけないやんか。もちろん冒険者としての資質がないとあかん。それをダンジョンで見極めてからや。まあ問題ないやろうけどな」

「つまり階層主と戦わせる前に実力を判断して、ということか？で、誰がやるんだ？」

「アイズとリヴェリアや」

「ふざけるな!!」

すると今度はベートが反論を言ってきた。さつきまではイライラしながらも大人しく聞いていたのだが、

「なんであんな野郎のためにアイズがやる必要があるんだ!!」

「出たよ、ベートのいつものが」

「うるせえ!!! 大体なんであんな野郎のために俺達がそこまでやる必要があるんだ!!! そんなことしてファミリアを潰すつもりか!!!」

「おっ、珍しく正論を言ってる」

一回一回口出しをするティオナに「うるせえ!!」と声を張り上げるベート。しかしここに誰もがベートと同じように感じている。どうしてそんなリスクを負ってまであのレベル1の冒険者を

「そりやな、そりや納得いかんか。

しかしな、ウチはあのステイタスを見る前からやるつて決めてたんや」

「どういふことなんだいロキ?」

「ハジメを鍛えるため? ドチビに恩を売るため? いつかウチらプラスになるため? そんな違う、ウチは単純に・ハジメの成長をみたくなったんや!!!」

分かるか!! あんな力を持った冒険者子がまだレベル1共なんやで!! もしレベルが上がったら一体どうやるんや? ウチはそれが見たいんや!!!」

「……………なるほど、ロキらしい……………」

「せやろ!!せやろ!!」と言ってくるロキに対して誰もが呆れてこれ以上言葉を言えない。興味を持ってばそれを追求したくなる。面白ければさらに盛り上げる。殆どの神様が自身の娯楽を最優先に行動し人格者な神は少ないが、その中でもロキは人格者なのだがやはりロキも神様である。目の前にある楽しみを逃さないようだ

「せやけど皆に迷惑をかけるわけにはいかん。だからハジメを守りつつ階層主と戦わせてランクアップさせる!!これがウチの真の目的やああああああ!!!!!」

「……バカだ……バカがいる……」

頭を押さえて苦痛な表情を浮かべるリヴェリア。

「すでに巻き込んでおいて何が迷惑をかけるわけにはいかないだ。言っておくが私の査定は厳しいからな」

「やる気なのかいりヴェリア？」

「こうなったら聞かないだろう。それにロキがいった通りに戦いになっても私達が守ればいいだけだ」

「俺はやらねえからそんな茶番劇は!!!」

舌打ちをしながらベートはロキの私室から出ていった。

「あんなこといいながら絶対に着いてくるよベートの奴」

「ベートのことはいいとして、まず私とアイズがハジメと一緒にダンジョンに潜り階層主と戦えるか判断する。あとから来たフィン達と共に階層主との戦闘をして、トドメをハジメにしてみよう、ということでもいいのか？」

「まあ、1日目で階層主が出ても二人ならハジメを守りながら抜け出せるやろ」

「口でいうのは簡単だが、やるのはこっちなんだぞ……」

つたく……とため息をつくりヴェリア。

「しかしロキが気になる者が……」

「やっぱり強い!!!!」

「ちよつと落ち着きなさい……」

「アイズさん、気を付けてくださいね」

「うん」

「二人だからね安心してのんびり向かわせてもらおうよ」

「団長であるフィンまでそんなことをいわないでくれ……」

.....



ハジメにはまだゴライアスと戦わせるなんてことは言っていない。階層主とはどういうものか？ということで見てもみたほうがいいだろうと戦闘に参加している  
アイズはというと前線でデスペレート抜き

「目覚めよ」  
テンベスト

アイズの風属性の付加魔法エンチャントエアリアル。

発動する事で自身と武器に『風』を纏い、武器に纏えば「攻撃力と攻撃範囲の拡大」、体に纏えば触れる事すら出来なくなる。「鎧」に転じる事から攻防共に隙が無く、精神力の燃費も良い為に長期戦も可能である

そんなエアリアルを纏ったアイズはゴライアスに向かって跳躍して、デスペレートを突き出して膝に一撃を入れる。流星に貫くことは出来なかったがそのままその巨大な



足を駆け降りながら切り裂いていく。

ダメージを受けたゴライアスは方膝をつきながら怒号を放ち、アイズは後退をして再度攻撃体制に入る

しかし、アイズが攻撃することは出来なかった。正確に言えばアイズの攻撃が邪魔されたのだ。目の前にはさつきまでいたアイズの後ろで待機していた18階層にいた冒険者達。アイズが階層主を膝をつかせたのを見計らって一気に自分達の手柄にしようとしているのだ。階層主を倒せばドロップアイテムや魔石は相当なものになる。

「今だあ!!! 畳み掛けろ!!!」

冒険者達は各々の作戦、タイミング、攻撃方法でゴライアスに向かっていく。ファミリアとは違いここにいるのは18階層にいた冒険者達は協力というものは存在しない。あるものは剣を、あるものは槍を、あるものは魔法を、そのバラバラな攻撃にアイズはゴライアスに攻撃出来ずにいた。いまここで飛び出せばゴライアスの攻撃ではなく冒

険者達からの攻撃を受けてしまう

「アイツらは……」

「連帯ということ知らない、いい見本ですね」

「目の前のゴライアスドロップアイテム・魔石しか見えてない。これだとアイズは攻撃できない」

「本当に、邪魔ですね」

ハジメがその言葉を放った瞬間、アイズがこちらに向かって振り向いた。その表情はまるで驚いたものでありながら、モンスターを刈るような強い表情でもあった。

そして一瞬の間が命取りになる。

「ツ!!!  
アイズ!!!!!!  
!!!!!!」

「ツ!!!」

リヴェリアの声が届いたときにはすでに遅かった。ゴライアスのような巨大なモンスターの時近くに寄らなければ攻撃が出来ない。というよりこれはどんなモンスターでも当てはまるだろう。しかし巨大なモンスターの近くにいると分からなくなるのだ、モンスターの攻撃が。

特に腕による攻撃は上を見上げなければ分からない。しかしずっと見ていると足から攻撃がくる。そしてアイズが一瞬目を離れた時に腕による攻撃が始まった

冒険者達に迫りくる拳が次々に冒険者を撥ね飛ばしていく。回避しようにも間に合わない判断したアイズは

「<sup>テンベスト</sup>目覚めよツ  
!!!!!!!」

もう一度自身に風を纏わせて防御をあげることにした時にはゴライアスの拳がもう

目の前にあり、振り抜かれた攻撃によりアイズの体は吹き飛び17階層の壁に激突した。

「アイズウウウ!!!」

まさかのことだった。いつも冷静なりヴェリアが声を上げてアイズが飛ばされた所へ駆け出した。こんなはずではなかった。油断していたわけではなかった。ただ「戦いだから」こういうことが起きたのだ。絶対なんてあり得ない。常に勝てる相手でも一瞬のことで殺られる。分かっているのに、頭にあつたのに、後悔が止まらない。無事だという確信があるまで収まらないだろう

その場に取り残されたハジメは動けずにいた。

目の前には倒された冒険者、それを助けている冒険者、吹き飛ばされた冒険者、心配で駆け寄る冒険者。

様々なものが見えてくる。これが戦いの場と。

そんな生と死の場所で、ハッキリとしたものが目の前にいる



圧倒的<sup>階主</sup>な強者に対して

「神様と約束していたんですよね」

絶対的<sup>ハジメ</sup>な弱者が

「うーん……アレまでならいいですよね、うん。まあ流石にアレはやばいですから使わないですけど、アレなら問題ないはず、うん、よし、それでは」

一步踏み出した。

あれに挑むために、いま感じている怒りに任せて。

「倒しますか」

影が薄くても心配をかけるようです。

「大丈夫かアイズ!!？」

「うん、大丈夫」

近くに寄ってみると特に怪我をしている様子はない。魔法を重ねたおかげで助かったようだが完全に衝撃を消すことは出来なかったようで、立ち上がることは出来ずに座ったままだ。ここはさつき戦っていた場所から随分離れており、さらに先程の攻撃により周り一帯に粉塵が立ち込めて巨大なゴライアスの様子さえも見えない

「一体どうしたんだ、あんな隙を見せるなんて…」

「…ごめんなさい…」



「いや、私も油断していたところがある、すまなかった。だが、アイズらしくない。戦闘中によそ見など、こつちを見ていたようだが何かあったのか？」

「……分からないけど、何か感じたの……」

「感じた……とは？」

「殺気とは違う……けど何か鋭いものが……」

それ以上は言葉に表せなかった。感じたところのないものが背後から感じられ思わず振り向いてしまったのだ。そしてその先には、

「……ハジメから、感じたの……」

「ハジメからだど？ 私は何も感じなかったが……」

「私に、ううん、あそこにいた冒険者に向けてだと思おう。だからみんな反応が遅くなったと思う」

「一体何をしたんだ……」

殺気ではなく、鋭い何か。それは冒険者達に向けられ戦いに集中していたところを忘れさせ、迫りくる攻撃に対して反応を遅れさせた。

「リヴェリア、ハジメは??」

「す、すまない。アイズが心配で思わず駆け出してしまいあの場に……だが、大丈夫だ。ゴライアスでもハジメの姿は見えていない。攻撃をしない限りは……」

!!!  
!!

二人に何かが襲ってきた。目に見えない何かが身体中を駆け巡り抜けていく。殺気よりも鋭く、しかしそれからは殺気のような「感覚」がなく、まるで「無」というのが、全てを消し去ってしまうようなものが、静かで鋭く、人を狂わせてしまう「闇」のようなものが流れ込み抜け去った

「……ハア、ハア、ハア……大丈夫かアイズ……」

「……う、うん、大丈夫……」

耐えきれずにリヴェリアは膝をつきアイズも全身の力が抜けてしまったようだ。未だに身体の中にさっきの感覚が抜け出せていないように感じている。息を整えようとするが中々落ち着いてくれない。まるで死を間近で、いや、死を感じた、経験したような感覚に陥っている。いくら冒険者が死と隣り合わせだとしてもここまでハッキリとした感覚は初めてである

「まさか、これなのか？アイズ感じたのは」

「ううん、これは何倍も強くなっている。もしかしてハジメに何かが……」

「クソツ!!!力がまだツ!!」

「…ハジメ…」

ゆつくりと立ち上がることは出来たが万全な身体ではない。力が入らず走りたいの  
に歩くことしか出来ない状態。一体何が起きているのかと周りを見るが戦闘している  
所から離れているためどうなっているのか分からない。それでも確実に元いた場所へ  
と足を進める

.....

「なっ!!なんじゃこれは  
!!!??」

「ち、力が……」

「抜けていく……」

16階層にいるフィン率いるロキ・ファミアとリユードだが、突然襲ってきた謎の感  
覚に誰もが力が入らなくなりその場に崩れた

「落ち着くんだみんな。誰か立ち上がれるものはいないか？」

「力が入らなくて…無理です……」

「クソツが!!!なんだこれは!!!」

「不味いな、こんなところでモンスターが出てきたら……」

原因不明の症状はいま酷い状況を生み出した。誰もが力が抜けて立ち上がれない、こ  
んなところでモンスターにでも襲われたらいくら一級冒険者とはいえ無事ではすまな  
い。いや死んでしまうだろう

どうにかして立ち上がろうとする面々だが指先など動かしても腕や足には力が入ら  
ない。しかしその中で、

「……………どうやら私が来て正解だったようですね…………」

「なんで立ち上がれるの!!？」

どうということなのか、リユーだけがその場から立ち上がった。少し身体は重いが戦闘になっても問題はないぐらいはある。

「分かりませんが兎に角皆さんを一ヶ所に集めます。回復するまでモンスターは私に任せてください」

「……………ああ、頼むよ」

ロキ・ファミリア達を一ヶ所に集めながら何処からでもモンスターが来てもいいように警戒をする。だが一ヶ所に集めるのに時間がかかったのにも関わらずモンスターは襲ってこなかった。それどころか鳴き声も気配もなかった。

「どういうことでしょうか？モンスターが現れません……」

「さっきの感覚が影響してるんじゃないの？」

「そうだとしてもこんなのは初めてじゃ。一体ダンジョンで何が起きとる？」

「……………」

混乱する中リユールだけは直ぐ様でもこの場から走り出したい衝動と戦っていた。こんなイレギュラーな事が起きているならハジメも同じようになっていいる可能性がある。それと階層主との戦いの中だとしたら……

そんなことを考えたらいてもたつてもいられない。しかし、いまここで走り出したら未だに動けないロキ・ファミリアの人達は危険な目に……

そんなリユールを見ていたフィンは、

「君は先に行ってくれ」

「ちよつ、ちよつと団長!!?何を言ってるんですか!!!」

「いまここでいなくなれたら私達は!!」

「分かってている。だが僕達よりアイズ達の方が心配だ。いまもゴライアスと戦っていて同じ症状が出ていたら僕達よりも危険すぎる」

誰も動けない状況でリユーにこの場を離れられたら、モンスターが出てきても誰も戦えずにやられてしまう。しかし自分達よりもアイズ達の方が、階層主との戦いの方が危険なのも確かだ。

「……いいのですか?」

「ああ、それに僕はさつきよりも回復している。ほら立ち上がることも出来るからね」



そういうながらゆっくり立ち上がるフィン。しかしまだ体に力が入らないのかプルプルと腕や足は震えている。だがその目には闘志が宿っているのが分かる

「……分かりました。向こうで動けるものがいたら応援にくるように手配します」  
「そうしてくれると助かるよ」

では、と一礼をしたリユーはまるで風が吹き抜けるようにこの場から離れていった。その姿を確認したフィンの体は一気に崩れ落ち

「「「団長!!」」」

「アハハ……やはりまだダメのようだ……」

「いやその根性、流石だフィン」

「俺だって……くそがあああ!!!」

「ベートには無理よ、団長だから出来たの」

「うんうん」

「うるせえクソアマゾネス共がああ!!!」

根性で立ち上がろうとするもやはり力が入らない。いまだモンスターの出現はないがいつまで続くか分からない。誰もが必死になつて立ち上がろうとしている

「一体このダンジョンで何が起きているんだ……」

.....

駆け出したリューはすぐにダンジョンの異変に気づいた。すでに数分間走り続けているのにも関わらずに一向にモンスターが襲ってこない

(これは一体なにが……)

考えながら走っていると目の前で倒れている冒険者達が見えた。しかしその前方にはモンスターらしき影が見える。

(……………ここで見捨てるなど……えっ?)

戦闘体制に入ったリューだったが危惧に終わった。そのモンスター達も冒険者達同様に動けなくなっているのだから。意識はあるものの体が動かさずにいる状態であり

リユートの冒険者の中の一人に声をかける

「大丈夫ですか？」

「お、おう……体に力は入らないが問題ねえ。それより目の前にいるモンスターをどうにかできねえか？いくら襲いかからなくても不気味だよ……」

「分かりました」

それはそうだろう。敵であるモンスターが目の前にいるのだ。精神にキツイものがある。リユートは小太刀を構えてモンスターを切り裂いていく。動かないモンスターだ、簡単に倒せたがやはりこんなのはおかし

「すみませんが私は先へ行きます。どうやモンスターはいま出現しないみたいですよ。回復したらすぐに引き返すをオススメします」

「18階層のほうが近くて安全じゃねえか」

「18階層はいま階層主が出現している可能性がある。それにこの異常な時に戦うなんて死に行くものだ」

「だがあんたも行くんだろう、なんで……」

いまならハッキリ分かる。

私がかここまで来た理由も、危険をおかしても進む理由も、全て一つのことだと

「私の、大切な人がいる。だから行きます」

決意を新たにリユールは再びその足を動かして17階層へ向かい走る。それもさつきよりも断然にスピードは上がっているが本人は気づいていない

「青春だね〜」

「そんなこと言っている場合ですか!!? いつもモンスターが来るか分からないんですよ!!!」

.....

「これは.....私達だけじゃないのか...」

「.....」

周りには冒険者が倒れている、それもアイズ達が受けたように体に力が入らない状態

のようだ。意識はあるようでお互いに確認を取り合っている

「お、おい、近づくな!!あそこには階層主がいる  
!!!」

「分かっている。連れを探しているだけだ」

未だに粉塵が立ち込めていて近くにいる冒険者ぐらいしか見えない。しかしここま  
で近づけば巨大な影らしいものだけは分かる

「ならさっさと見つけろ、あそこに近づくと巻き込まれるぞ」

「巻き込まれる……だと?」

その言葉に疑問が残る。いまこの場所には多くの倒れている冒険者がいるのに、階層  
主と戦える人数も戦力もない。なのに今この冒険者は言った「巻き込まれる」と…

「おい、それはどうということだ!!!」

「な、なんだいきなり……」

「どうということだと聞いている!!」

「な、何故かは知らねえがゴライアスが暴れているんだよ。そこに何もいないのにまるで「幽霊」と戦っているような……」

「ッ!!ハジメ!!!」

すぐにその場所から走り出したらリヴェリアの後ろをアイズが追う。嫌な予感が当たってしまった。戦っているのだハジメが。レベル1であるハジメがゴライアスと戦っている。いくらレアな力だとしてもたった一人でゴライアスなんて……

「大丈夫……かな？」



「分からない、何もかも想定外過ぎて何も分からない。しかし大丈夫だと信じたい、ハジメなら大丈夫だと…」

「うん」

影が薄いとしてもその存在は大きいです。

僕は怒ってます。アイズ姉が吹き飛ばされリヴェ姉が心配で追いかけた後、一人である階層主に向かって。

僕はこのゴライアスこと、ゴーストに怒りを覚えていた。こんなにも良くしてくれたアイズ姉を吹き飛ばしリヴェ姉に不安を与えたゴーストに。

ただ完全に怒り任せでやってしまうとアレを使ってしまう。それは神様との約束で使わないことになっている。

ただアレはダメかも知れないがアレなら大丈夫でしょう。

「まずはアイズ姉が受けた痛みをお返ししないと」

今まで受けた衝撃を分割し、まず足の裏に集めた後に一時停止を解除して高く跳躍する。ゴライアスの顔正真面まで飛び上がったが相手は未だに気づいていない。やはりこの《カミカクシ》はどんなものに対してもハジメと神様が認識したものしかハジメを

見ることが出来ないようだ。

最高地点まで上がったハジメはそこに一時停止をかける。空気といつてもそこには約8割が窒素、約2割が酸素で、また水蒸気が含まれており、それらがハジメ達の周りを、ダンジョンを、オラリオを、世界中を包んでいると言つてもいい。その僅か一部を一時停止させた。

それもただ一時停止させただけでは意味がない。それらを一ヶ所に集めて足場を作る。もちろん足場を作るほどの密度を持てば重力に負けて地に落ちるだろうが、一時停止は事象さえも停めるために「重力に引っ張られる」というものさえも停止させた。

要は空中に空気を圧縮させた足場を作りその場に立っているということ。空を飛ぶのではなく立っているのだ。

そしてハジメは残りの衝撃を右手の掌に集めて、

「お返しです。受け取ってください」

放たれた衝撃はゴライアスの顔面を、顔を、上半身へと。お返しと言つても明らかに



ぶっ飛ばしたいと思うハジメだがゴライアスの攻撃が止まらず攻撃が出来ない。大きすぎる衝撃を一時停止すること自体は問題ないのだが、一緒に衝撃を放つことが出来ない。一時停止は2つ同時に停止と解除ができない。だからゴライアスが攻撃を止めるまで攻撃できないのだが、

『ツツツツツ??  
!!!!!!』

突然ゴライアスの動きが鈍くなった。これにはハジメも驚いたがこのチャンス逃さずに、向かってきていたゴライアスの拳に向かって自分の掌を向けて。

「僕の方ですよ」

ゴライアスからの衝撃を纏めた攻撃を放ち、その瞬間にゴライアスの腕は吹き飛び肩から先が無くなっていった。それでも止まらない衝撃波はダンジョンの壁に直撃し巨大なクレーターを作り出した。叫ぼうとしてゴライアスだが直ぐ様に動いたハジメがゴライアスの顎に手を当ててさつきよりも強い衝撃波を放つ。それにより吹き飛ばされた顎、これにより叫ぶことが出来なくなつたがそれでもまだ生きているゴライアス。

「止めはコレです」

そういうそういつて腰に下げている「石火」を抜きゴライアスに向ける。

.....

「……………余計なこと、だったかしら？」

「17階層と18階層を繋ぐ穴の前で、いまこの17階層で戦っているハジメを見ている。」

「それにしても……………こんなに影響されていない人がいるなんて、随分信頼しあっているのね」

「呟く声は誰の耳にも届かない。近くに、目の前に倒れている冒険者にも届かない声。いや、その姿さえ見えていない。姿無き者は18階層へ向けて歩き出した。」

「早く私の元に来てね、ハジメ」

.....

「……にも……影響が……」

17階層にたどり着いたリユーは走りながら状況を確認、やはり16階層同様に冒険者は倒れているようだが違うのは大人数であること。そして粉塵でハツキリした姿は見えないが大きな影で分かる階層主<sup>ゴライアス</sup>。恐らく今起きている現象はハジメには効いていないはずであり、これこそ当たってほしくないがハジメはゴライアスの元にいると予想している

ハジメは仲間思いであり、ハジメの同行者がこの現象にやられていた場合ハジメはゴライアスを倒すつもりで立ち向かうだろうと……

「……………」

言葉に出来ない今の気持ち。心にあるのに言葉に出すことが出来ない。その不安を言ってしまうと現実になりそうで、いまもこうして考えてしまっていることが現実になってしまうかと……

いつも間にこんなにも弱くなったのか？信じるのがどれだけ大切なのか分かっているのにどうしても不安が優先して思い浮かぶ。

(それだけ、私はハジメに……)

同僚の関係ではない。

仲間の関係ではない。

私は、それ以上にハジメを……

「おい、待ってくれ!!」

その声の方を見るとよくお店に来ていた一級冒険者、そして今ハジメと共にいるはずのアイズ・リヴェリアがそこに立っていた。他の冒険者が倒れているのに自分と同じように立っている



「なぜリユールがここに？」

もしやハジメを心配して来たのか？」

「ええ、あなた達の仲間と近くまで……しかしその人達も周りにいる冒険者同様になりまして私だけでもと……」

「それはフィンの判断だろう。なら心配しなくとも大丈夫だろう。それより私達は」  
「早くハジメの所に」

やるべき事を全員で再確認しゴライアスの、ハジメの元へ駆け出す三人。そこへ近づいていくといきなり突風と音と振動が三人を抜けていった。それのお陰でさつきまで舞っていた粉塵が消え去り、そこに見えたのは片腕を無くしたゴライアスと宙に浮いているハジメ

「無事でよかった」

「しかし宙に浮けるとはな……」

「データラメ……というのは今更ですか……」

するとゴライアスが叫ぼうとした瞬間、一気に近づいたハジメはその手をゴライアスの顎に向けて衝撃を放つ。それはゴライアスの顎を吹き飛ばしたが未だに生きている。それを確認したハジメは腰の「石火」を抜きそれをゴライアスに向ける

「その得物では、いや、ハジメの力では倒せない」

「しかしハジメが意味もなくそんな行動するとは思えません」

「きつと…何かある」

ハジメを止めるはずなのに、どうして止めに入らない。ハジメを守るはずなのに、体が動こうとしない。いや分かっている、ハジメはゴライアスを倒せる力を持っている。だから後は見守るだけだ。

.....

小刀「石火」、これだけではゴライアスを倒せない。もちろん石火以外の物を使つても無理だろう。根本的にハジメの力が無いためだ。しかしそれでもこの石火を抜いた。

石火にまず一時停止による完全防御<sup>コールドディフェンシブ</sup>。石火の外側を一時停止することにより傷を付

けることは出来ない。衣類はかけようにも一時停止による固定されるため体が動かなくなる。生物そのものにかけてしまうと同じように動かなくなる。だから使えるのは武器だけ。武器だけといっても武器としての性能自体失うのだが。そう完全防御は守っているものその物を覆い被せて「ただの物」にしてしまう。

一時停止は使い勝手のいいものではない。一時停止はあらゆる事象を止めてしまう。つまりは止めたくないものさえも止めてしまう。アイズ達が気になっていたことが一つの例である。

どうして一時停止を使いモンスターを止めないのか??

動きを止めればこれほど簡単にモンスターを倒せることはない。いや必要ない戦闘もしなくてもいい。だがハジメは使わなかった。いや、使えないというべきである。モンスターに一時停止を使えば動きを止めれるだろう、しかし同時にモンスターに攻撃を与えられなくなる。モンスターの存在自体を止めてしまうのだ。止められたものは外側から何をしようとも動くことはない。つまりはモンスターに一時停止を使えば動かなくなるが、攻撃が当たらない、倒せないモンスターになってしまう。

もちろん人に使っても同じである。守ろうとして一時停止を使ってもその人自体を

止めてしまい動くことは出来なくなる。ハジメの場合は衝撃自体を停めるために自身の体に影響はない。

ならば服はと思うが、服に一時停止をかけると「伸縮や折り曲げなどの特性そのものを止める」ために、まるで甲冑を着ているようになってしまう。

限定的にでも一時停止が出来ればいいが止める対象全てを止める。なので武器に使えば全く使い物にならない武器になってしまう。

しかしそれでも、問題ない。

「——貫いてください——」

いくら刃の鋭さが無くなり切り裂くことが出来なくなってもゴライアスを倒すことは出来る。柄に今まで溜めた衝撃を集めてゴライアスの、モンスター弱点である魔石がある体の中心に向けて、解放する。

——石火——

小刀としての役目を果たせない石火でも音速を越えるスピードなら壊れない小刀がゴライアスの皮膚に当たれば、

それを裂いて裂いて裂いて裂いて、

肉を貫き貫き貫き、

魔石を砕き砕き砕き、

そしてゴライアスの体を貫いた石火は地面に激突しクレーターを生み出してやっと停止した。

魔石を破壊されたゴライアスは両膝をつき、そして頭部から砂のようにサラサラと形が崩れていった。

「これは……大変なことになったぞ」

「ええ、もう隠しきれないでしょう」

目の前で起きた出来事

たった一人での階層主撃破。ゴライアスそしてレベル1の冒険者であること。アイズ達だけなら良かったが周りには倒れているが意識のある冒険者がたくさんいる。そう誰もが見ていたのだ、戦いの一部始終を。長年冒険者をしていればその戦いがどういふものか分

かる。そう、ゴライアス相手に一人で戦ったという事実を。

「あれが……ハジメの強さ」

.....

この功績は永遠に継がれることになるだろう。

しかし、その名は刻まれることはないだろう。

誰もが知っているのに、誰も知らない。

名の知らない冒険者、姿が見えない冒険者。

それでも誰も知ることになるだろう。

誰も知らないことを知っている。

誰も見えないことを知っている。

その冒険者は、影が薄すぎる冒険者であることを。

影が薄くても相手を困らせてしまう。

ギルドの応接室。

他の人に聞かれないように、知られないように密談するために使用している職員達。しかしその目的も忘れて、

「貴方は一体何をやっているのよおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
!!!」

机を両手で思いつきり叩きながら明らかにギルド全体に響く大声を出すエイナ。しかしこれが黙っていられる内容ではない。そんなエイナに対してハジメは相変わらず無表情で

「良かったです。応接室全体に一時停止かけておいて」

「怒られる前提で話してたのね!!!ハジメ君は私を怒らせるためにダンジョンに潜っているのよね!!!」

「いや、そんなことはしません」

「だったら毎回毎回ここに来る度に酷くなっていく報告をどうにかしなさいいッ  
!!!!!!」

もう初めに会ったときのエイナ嬢ではないな、と思いながら息を整えるまで話すのを待っているハジメ。ここへいたのはもちろんあの冒険について話をするためである。そしていまゴライアスを一人で倒したことを話したところである。

「でも今回はアイズ姉が飛ばされてしまつて怒つてしまつたので不可抗力です」

「まあ、それは分かるんだけど……いくら怒つたからつて階層主は一人ゴライアスで倒せないわよ

……普通は………」

「それでは僕が普通ではないように聞こえます」

「……………怒っていいのよね？ 大人数でも大変なゴライアスを一人で倒した人が普通だという人に対して私は怒っていいのよね？」

ブツブツ何かを言っているようだが、いま話しかけたらさつきよりも怒られられると悟つたハジメは再びエイナが落ち着くまで待つことにした。



「本当になんてことをしてくれたのよ……すでに冒険者の間ではゴライアスを一人で倒したって噂が飛び交っているのよ」

「事実ですから」

「そういうことを言ってるじゃないの!!ハジメ君はレベル1なのよ!!そんなレベル1が一人でゴライアスを倒すなんて……もしかしたら強引にハジメ君を自分達のファミリアに入れようとする所も現れるかもしれないのよ。幸いそのスキルのお陰でハジメ君ってことは誰も知らないみたいだけど……」

はあくため息をつきながら頭を抱えるエイナ。そうこの功績は正式にギルドから周りへ情報が流れる。つまりはレベル1でゴライアスを倒したハジメの名前が明るみになるのだ。

「ファミリアの名前も出るからベル君や神ハスティアまで巻き込まれるかも……つて有名になる冒険者なら誰もが通る道なんだけど……」

「通りたくないですねその道は」

「私も同じ意見だわ」

名が売れば狙われる。自分のファミリアの為だったり、自分の実力を試したかったり、倒した事により自分の名を上げたりなど、有名になるということはそういうことが起きるのだ。

「まあ、そこは追々考えます」

「気楽にもほどがあるわよ……でもそうね……やっぱりここは神ロキに相談したほうがいいわね」

「なるほど、責任を取ってもらおうということですね」

「あのね……言い方があるでしょう。でもロキファミリアに護衛してもらえらへたに手を出す人もいないはずだから聞いてみたらどうかしら？」

確かに発音したはずだ「聞いてみたらどうかしら？」と。なのにハジメはジーとこつちを見てくる。ジーっつと眉ひとつ動かさずに。

いや、これは以前にもあったような気がする。ううん、気のせいよね!!と言いかすエイナだがすでに頭の中にはもうひとつの大きな考えがあった

「よろしくお願いします」



スターを楽に倒せるぐらいまで回復した。幸い18階層以降に潜っている冒険者はおらず近くにいる冒険者は18階層へ、それ以外はダンジョンから脱出させないといけない。

脱出させるといつてもこの17階層から地上まで、一体どれだけの冒険者が倒れているのだろうか……

と、普通なら悩むところだろうがここにはハジメがいるので

『……やり過ぎ……じゃないかい？』

『見過ごすわけにはいきませんので』

『いや……他にやり方があるのではないか？』

『これが一番だと思えますが』

『じゃが、これじゃとワシら……』

『人命優先。言われた通りですよ』

『ダンジョンから抜け出すまでの我慢だ、みんな。』

彼がいなければこの冒険者達は救えなかったのだから……』

そう我慢だ。倒れた冒険者の両手首にロープで縛り、中心の一本のロープに左右に

ロープが伸びてそこに先程の縛られた冒険者がついている。それはまるでというかそのままの「芋づる式」であり、各自冒険者達を引っ張っている。

『なんでこんなこと俺がしないといけないんだああああ!!!』

『ベートうるさい!!!』

『でもこれを他の冒険者に見つかったら……終わりだわ……』

『うう……これ人さらいしか見えないですよ……』

『人助けですよ』

『うん』

この中で納得しているのはアイズだけのようだが、周りの反応が正しいだろう。まあ結局はダンジョンから抜け出すまで誰一人見つからなかつたのでみんな安心したようだ。それを思い出したハジメは正面をリユールの方に向けて頭を下げながら、

「昨日は本当にありがとうございました」

「もういいですよ、トキサキさんが無事なら」

「分かりました。あつ、お弁当美味しかったです。またお願いします」

「は、はい。お粗末様でした」

近くにいるシルは「どんな会話をしてるんだろう」と聞き耳をたてているが、持ち場を離れようとする。「ちゃんと仕事しな!!」とミアからお叱りを受けた。その周りからしたらなんとも初々しい会話をしている二人は気づいていない

「リユー姉、仕事終わったあと時間ありますか?」

「ええ、大丈夫ですが……」

「良かったらリユー姉の時間、僕にくれませんか?」

「……………へえ?」

なんともリユーからしたら可愛らしい、ちよつと間抜けた声が出た。だってそれは言ってしまうえばハジメからリユーへの口説き文句のようなもの。

「な、な、な、なにを……」

「実は昨日の出来事についてロキファミアリアの館で話し合いがありました、僕としてはリユー姉に来ていただきたいのですが」

「……はあく……分かりました。行きましょう」  
「どうしてため息ついてるんですか？」

なんでもありません。と少し感情を込めてしまったがハジメが気づくわけもなく。そのまま掃除も終わりあとは開店準備のために二人はそれぞれの持ち場に向かうのだが

「あつ、明日はリユー姉もお休みですよね、良かったら明日もお時間くれませんか？」  
「構いませんよ、明日も話し合いがあるのでですか？」

「いえ、明日はリユー姉と二人で買い物に行きますのでよろしくお願いします」  
「……………えっ？」

完全に固まったりリユーを残してハジメは何事もなくその場から去ってしまった。残されたリユーは周りから「ちよつとリユー!!! さつきのデートの申し込みじゃないの!!!?」「よくやった鉄仮面!!」「あんたら!! ちゃんと明日リユーの勝負服を選びなよ!!!」と何故か豊穣の女主人は異常なほどの盛り上がりを見せた

.....

「で、なんでその二人は疲れきっているんだい？」

「お、お気になさらずに……」

「気にして頂けるなら、そちらのファミリアの子をもう少しどうかしてもらいたいです……」

「……ああ……それはごめんよ……」

黄昏の館の近くで待ち合わせしていたヘステイアファミリアとギルドのエイナと豊穰の主人公のリユ。で、集まったのはいいのだが何故かエイナとリユはすでに疲れきっていた。まあ、ハジメがあんなことをすれば疲れも溜まるもの。エイナの主張はいたくなるのも当然である。

「ベルベル、言われてますよ」

「ハジメ君「トキサキさん「ハジメのことです!!!!!!」」

おおくと揃った声に感動するハジメだが、全員から睨まれ大人しく黙ることにしたよ



うだ。とにかくここに留まる必要もないためそのまま館に向かうことに。

ロキファミアリアの冒険者の一人がロキの私室まで案内されて部屋へ透された。そこにはすでに昨日まで一緒にいたロキファミアリアの一級冒険者達と主神であるロキがいる

「時間通りやな」

「悪かったね、昨日の疲れもあるだろうに」

「構いませんよ。僕よりリユ姉とエイナ嬢に」

「ああ、そうだね。お二人には感謝してます。………ところで「嬢」というのは……」

「ふ、触れないでください……」

そういいながらギロツとハジメを睨むエイナ。どうやらこの「嬢」というのはこれからは言わないほうがいいのだろう。うん、無理だろうが。

「それで話し合いって何を話すんだいロキ？ここにギルドの人間までいれて何を話すんだい？」

「そんなんいうたらその子が悪者やんか」

「誰もそんなことはいってないだろう。だけど気になるだろう、わざわざ呼ぶなんて……」

「わ、私も気になります。自分にいうのもなんですがここにギルドの私がいるのは……」

ギルドはファミリアにとって欠かせないものではあるが、同時に煙たがるものもある。ファミリアの為にいろいろ手助けはするが、何かあれば罰することもする。そういう所だと誰もが分かっている、もちろんギルドの人間であるエイナも分かっている。

なのにそんなギルドの人間であるエイナを呼び出した。ロキファミリアに取って不利なことを話すかもしれないこの場所に。

「なんやエイナちゃんもウチに話し合ったんやろ。なら問題ないやろ」

「そうですか……」

「それにな別に関心ないことを話すわけやないで。むしろ前向きや、前向きや」

前向きや、と言われても誰も「本当に？」というような目でジッとロキに一点に集中する。

「なんやその目は!!!」

「いや、ロキのことだからまた…」

「ぶつちやけ信用出来ないんだよ、残念だったねロキ」

「うっさいわドチビ!!!!」

ウチが話したいんは………もちろんトキサキ・<sup>ハジメ</sup>一の今後についてや」

影が薄くても話題の中心に立てます。

「それでは只今から『ハジメ会議』を始めます。司会進行は今回の議題である当人であるトキサキ 一<sup>ハジメ</sup>が勤めさせていただきます」

「いやなんでハジメ君がやってるんだい!!」

「ご指名がありましたから、こちらの神様から」

「いや〜話題の中心がやったほうがええやろ。自分の思い通りに進められるんや、言いたくないことは言わんでよくなるやろ」

「……………ただ面倒くさいだけじゃないだろうね?」

ヘタな口笛で誤魔化すロキに対してイラついているヘスティア。落ち着いてくださいと隣で宥めているベル。その隣にエイナ、ハジメ、リユーが並んで座っている。

そしてそのテーブルの向かい側にフィン、リヴェリア、アイズとロキファミリア達が並び、上座にロキが座っている。そして皆の前には紅茶とケーキが並んでおり、長時間の話し合いが行われると思われる

「ホラホラ、さっさと進めようか」

「了解です。まずは……エイナ嬢からどうぞ」

「わ、私ツ!?!いきなりなんて……」

しかしそれ以上は言わなかった。今からハジメの今後について話しをするなら、護衛については早めに終わらせたほうがいいだろうと考えた

「それでは私から。今回ハジメ君が起こした出来事成は良くも悪くもこのオラリオ全土に広がると思います。その噂はハジメ君だけではなくヘステイアファミリアにも影響があると思われます」

「影響ねえ……つまりはハジメを手に入れるために手段を選ばずにやらかす輩が出てくるって訳か？」

「はい、つきましてロキファミアリア冒険者の誰かにヘステイアファミリアの護衛をと思いまして……もちろん！噂が落ち着くまで構いませんし、断れても構いません。その時は私個人で探しますので」

「つまりはギルドの要請とは違うわけか、完全なエイナちゃんのお願いちゅうわけか」



「何を言っているのか分かってるのかいロキ!!？」

「分かつとるわ!!ウチだつて誰が好き好んでドチビと一緒に生活せんといかんや!!」

「なら言わなきやいいだろうが!!」

「アホ!!さつきも言つたけどな、ここまでしておいて後は知らへんつてウチのプライドが許されへん。ウチも我慢するんや、ドチビも己の我が儘で断るなんて言わへんよな？」

痛いところをつかれたヘステイアは分かりやすくイヤそうな表情をしている。元を正せばロキが自分の我が儘のせいだつていうのにと思いつながらも、現実ロキフアミリアという強い護衛がいるのは物凄く助かる。しかしこれだとロキが優位に立っていると考えたヘステイアは

「分かつたよ。その変わりにベル君とハジメ君に冒険者としての指導をしてくれないか？」

「なんでウチらがそんなことを!!」

「別にいいんだよ。僕はロキの所で守ってもらわなくても困らない。でもロキのプライ

ドが許さないんだろう。ならこれぐらいはいいじゃないか？」

と、強気に出ているヘスティアだがテールブルの下ではベルの手をギュツと握っている。「守ってもらわなくても困らない」な訳がない。非常に困る。だけどここで引いたらロキに負ける、という何とも小さなプライドの為に交渉している。そしてロキは本当にイヤそうな表情をしながら、口にも出したくないその口を開いた。

「……ええで。でもその変わり、ここではウチのいうことは聞いてもらうで」

「はあ!!？」

「当たり前や、ここはウチの家なんやで。それともなんや、ドチビのプライドの為に子供の強くなるきっかけを潰すんか」

やったらやり返す。今度はヘスティアが本当にイヤそうな表情をしている。あのロキのいうことを聞き入れるなんて考えただけで身体中が拒否反応を起こしている。しかしベルやハジメのことを考えたら、

「……僕だって…僕だって嫌々だけど、二人のためだから……仕方なく…仕方なくなん



だぞ!!」

「決まりやな」

結局ロキが優位に立ったまま決まった。ベルやハジメに取っては良いことづくめだろうが、ロキはプラマイゼロであり、ヘステシアにいたってはマイナスになってしまった。

「まあ、あんなことを言っていたが無理なことなら例えロキの言葉でも断ってくれて構わない」

「ちよつ、リヴェリア?!?!」

「分かっていると思うが今回の出来事は完全に私達が悪い。こちらとしては全面的に支援しなければならぬんだぞ。」

「そうだね、リヴェリアの言うとおりだ。僕達ロキファミアリアは全面的にヘステシアファミアリアを支援させてもらいます」

「フィンまでなにいつてんねん!!」

「代わりというわけではない、お願いといつてもいいが今の僕達にそんなことも頼めない。だから気が向いたらでも、興味をもつただけでも構わない。」

……トキサキ <sup>ハジメ</sup> 一君、僕達の遠征に来てほしい」

その言葉に誰もが驚いた。一度アイズやリヴェリア、ロキがその言葉を口にしたが今回はロキファミリアの団長であるフィンが直接口にしたのだ。いや口にすること自体いけないと分かっている、それを口にするほどの思いが彼にはあった

「僕達はいま先陣を切つてこのダンジョンを攻略しようとしている。それはとても過酷なもので一瞬の油断、迷い、判断が生死を決める。本当の「強さ」を持ったものしか進むことの出来ない場所に足を踏み入れている。そして君はその「強さ」を持っていると僕は思っている」

その真剣な眼差しに思いが籠った言葉に誰もが息を飲んだ。誰もが言葉に出来ない中、クスツと笑つたのは意外にもリヴェリアだった。

「それはもう勧誘というものだぞフィン」

「ふふ、そうだね。すまないがさっきのは忘れてくれ。君達の安全は僕達が保証しよう。元を正せばロキが契約を破つたようなものだからね。これぐらいは最低限させてもら

わないとこちらが困るんだよ」

「あ、ありがとうございます…」

その言葉にベルが頭を下げながらお礼をするがさつき言ったようにこれは罪滅ぼしみたいなもの。ベル達がお礼を言わなくてもいい。しかしベルだからこそそうやってお礼をいうのだろう。そう、ベルだからこういうことが言える。つまりは他の二人は、

「そっだ契約だあ!!5000万ヴァリスだよ、5000万ヴァリス!!!」

「神様、がめついですよ」

「正式な契約なんだよ!!ほらロキ!!!出すものを出すんだ」

「お見苦しいものを見せてすみませんリユ姉、エイナ嬢」

「い、いえ…」

「アハハ……」

ヘステイアファミアは神様を入れて三人と少ないファミアだとは理解していたが、まさか神様がここまでお金に執着しているなんて思わなかった。てか見たくなかった。そんな周りの視線なんか気にしてないのか、気づいていないのか知らないがロキに

まだ嘸みついている。痺れを切らせたロキは、

「もうくうっさいわ!! 言われんでもちちゃんと5000万ヴァリス払ったわ!」

「なにいつてるんだよロキ! 僕はもらっ」

「誰がドチビに渡すか、アホ。全額へファイストスに渡しといたわ」

「なんてことをしてくれただロキイイイイ!!」

あのお金は僕達のお金なんだぞ!!!」

「あれハジメとの契約や、渡したとしてもハジメに渡すわ。せやけどハジメが借金を返したいって言ってきたんやで。本当にええ子供やな」

ワナワナと震えているヘステイアは、次の瞬間にギロツとハジメを睨む。それも泣きたくなるほど悔しそうな表情をしながら。

「少しでもと手元にあるとどんどん使う金額が上がるんです。まずは借金を返してからあるお金で慎ましく生活を」

「イヤだ!! 折角貧乏生活から抜けられると思ったのに!!!」

「皆さん本当にすみません。こんな残念な神様をお見せしまして」

それぞれ違った反応をしている。展開についてこれずに呆けてあるもの、苦笑いしているもの、ため息をついているもの、共感しているものとバラバラな反応していたが、あつただけは全員同じ思いだった。

『どのファミリアも神様に苦労しているな』と。

.....

ひとまず用意された紅茶とケーキで一息ついた所で、

「さて、本題に入りたいと思います。

「謎の集団脱力感」についてなんですが、エイナ嬢」

「いまダンジョンに調査隊を派遣しております。安全が確保できるまでは入ることは出来ません」

「まあ、しゃあないやろうな。どれぐらいかかるんや?」

「原因が分かりませんのでハッキリとは...」

あんな現象がまたダンジョンで起きてしまえば、今回みたいに誰もが動けずに、もしかしたらモンスターに殺られてしまう恐れがある。そんな不確かな状況でダンジョンに潜らせるわけにいかない。

そんな話をしているなか突然ベートが、

「原因もなにもソイツに決まってるだろうが!!」

「おい、ベート。いきなり何を言い出すんだ?」

「何を言い出すだあ?リヴェリア、てめえが一番分かっているんじゃないか?」

あんな芸当が出来るやつはステルスしかいねえだろうが!!」

言いたいことは分かる。あのタイミングであの現象、起こせる人物がいるとすればそれはハジメしかいないだろう。すると主神であるヘステティアが

「ちよつと待ってくれ!!そんなことをしてハジメ君にメリットがあるとは思えないよ」

「だったら教えてくれよ。なんで三人だけ何も起きなかったのか言ってみろよ!!」

「うう…」

「……」  
「……」  
「……」

問いだされたヘステイアもハジメが起こしたかもと疑われる原因である三人も何も言えなかった。ハツキリとハジメは違うと言える。だが否定出来るものが何も無いために論理的に証明されそうになっている。

興奮したのかベートを突然立ち上がり、

「何も言えねえじゃねえかよ！ 大体最初から俺は反対だったんだよ！！こんな得体もしれねえやつはよ！！あの時もこいつはインチキしたから俺に勝ったに過ぎねえだろうが！！」

ソイツはな、ただのインチキ野郎だあああああ！！！！」

その瞬間、ベートの横を何かが通り抜けていった。あのベートが気づかずになんかが通りすぎたのだ。ベートの頬には新しい切り傷が出来ており、その切り傷を作った物が壁に突き刺さっていた

「インチキとは聞き捨てなりませんね。私やそちらの二人がトキサキさんを弁護できなかったのは認めましょう。肯定も否定も出来ないのですから。しかしあの勝負は正々堂々で行いました。それを今ごろになってトキサキさんをインチキ呼ばれなど……ふざけるのも大概にしろ」

ベートに向けてフォークを投げたのはリユーだった。その目は完全にベートを敵と認識しており、すぐにでも戦う意志がある

「本性を見せやがったなエルフが」

「ベート!! いい加減しろ!!!」

「ウルセエ!! こんなレベルの雑魚がゴライアスを倒せるわけがねえ!! どうせてめえの勘違い」

「いい加減にしてベート」

アイズの鋭く冷たい言葉がベートの言葉を止めた。いやそれだけではなく冷たい視線を向けている。まるで敵を見ているようだ



「……おいおい、マジかよ……こんな奴の為に仲間敢意に牙を向けるのか…アイズ……」

「ハジメは、倒したよ。ゴライアスを」

「認められるか!!こんな奴が!!!」

「いい加減にせえベート!!!」

ロキの激怒した声に流石のベートも口を閉じた。誰もか聞こえるような大きな舌打ちをして乱暴に椅子に座る。

「すまんハジメ、ベートにはちゃんといい聞かせとくわ」

「いいえ、僕よりリユー姉に」

「そうやな。すまんかったな、今度お店に貢献したるから勘弁してな」

「……トキサキさんが許すのなら」

これでなんとか收拾ついたかと思われたが、納得してないベートは明らかな態度でテーブルに膝をつき、掌で頭を支えながら皆とは違う方向を見ている。そんな姿にロキが注意をしようとしたがそこにハジメが、



「喧嘩なら外でしましょう。前回は気に入らないならもう一度すれば納得しますよね？」

「ああ!!? テメエ本気か？」

「そうしないとずっと不機嫌じゃないですか。納得してくれるならやりますよ」

「おもしれえ、今度はテメエをぶつ潰す!!」

すぐさまベートは部屋から退室し、そのあとをリヴェリアやアイズ達が追いかける。しかし口キだけは未だに残っていてふつと立ち上がったあと右手を上げて

「すまんかったなハジメ」

「いえいえ、構いませんよ。ああしないとずっと不機嫌でしょうから」

「アハハ!! ベートのことよう分かっつとるな!!」

ほな、アイツを適当に扱しいてやってくれや」

手をヒラヒラと振りながら先に退室した口キ。

それを確認したヘステイアは、残ったメンバーは直ぐ様ハジメに駆け寄り

「何してるんだよハジメ君!!!」

「相手はロキファミアアなんだよ!!!」

「無茶をし過ぎです!!!」

「なんで毎回毎回問題を起こすのよ!!!」

「そんなことを言われましても今回はあつちが悪いですよ。それに僕はあんな風に人を見下す人は嫌いですから、お仕置きをしてやろうと思いました」

「相手はロキファミアアの一級冒険者なんだよ!!!」

「大丈夫ですよ、所詮は野良犬ですから」

「一級冒険者を野良犬扱いって……」

相当怒っているのだろう。ここまで毒舌を吐くなんて……それでも心配そうな表情をするヘスティアに対して

「大丈夫ですよ、それにアレの実験台になってもらいましょう」

「うわあ……」

そこにいる誰もがアレが何のことなのか分からない。分からないが分かることがあ

る。

この喧嘩、勝敗が決まっていると。

## 影の薄さで再び野良犬を倒しましょう。

### 黄昏の館、訓練所

新人の指導から上級同士の試合など己を磨くための場所ではあるが、たまにファミリア内の喧嘩を決めるためにここで戦うことがある。それがまさにいま、ここで行われようとしていた。

すでに訓練所にはロキファミリア、ヘステイアファミリア、エイナ、リユーが集まっているのだが、どうやらこの中で1人だけまだ来ていない者がいる。その者はこれから戦おうと意気込んでいたベートをイラつかせる人物

「なにやってるんだアイツは!!!」

「ドチビ、なんでハジメが来とらんのや?」

「ちよつと用意したいものがあるって……」

「もう1時間待たされてんやで!!何しとるんや!!!」

ベートだけではなかった。ここにいる全員が未だに現れないハジメに対してイラつ

き出している。気の短いベートはもう血管が切れそうなほどイライラして、さつきから貧乏揺すりが止まらずにいる。

「お待たせしました」

その言葉と共に現れたハジメは背中に大きなリュックを背負って訓練所に現れた。そのリュックは中に入りきれずにお玉や木の枝やズボンなどが見える。

「遅えんだよ teme エ!! ってか何だそれは!!?」

「ベートを倒す武器、になるかもしれないものです」

「…ピン…風呂敷……糸屑……」

……ふ、ふざけるのも大概にしろよ teme エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ !!!!

襲いかかろうと一歩踏み出そうとすると、

「準備しますのでちょっと待ってくださいね」

と、こんな状況にも関わらずにマイペースにリュックを下ろして中身を取り出し始めた。出鼻を挫かれたベートが大きく舌打ちをしが大人しく待つことにした。ここで襲撃することは簡単だが、徹底的にハジメを潰すならこの準備さえも無意味だと分らせる必要がある。どんな準備をしようがレベルが一級冒険者に勝てるはずがないとその身に刻み込ませるために。

「何を企んでいるかは知らねえが、小細工で俺に勝てるでも思っているならさっさとここから出ていけ」

「至って真面目なんですけどね」

そんなことをいうがリュックから出てくるのは明らかにガラクタばかり。小さな木箱や複数のビンの中に様々な色の物が入っていたり、小さな銀色の球体までも出てきた。これでどうやってベートに勝つつもりなのか？

「……おい、ドチビ。ハジメ何がしたいんや？」

「ボクも知らないよ。でもふざけてやってるようには見えないのは確かだよ」

「なら、意味があるっていうわけか。楽しみやで。これでハジメの実力が見れるや、ベ-



トには感謝せんといかん」

そんな呑気なことを言っているロキだがベートはその意味不明な行動にもう怒りが爆発しそうになっていた。それはそうだろう、目の前ではただリユックからガラクタを出しているだけ。そんな姿を見ていたらそれは怒りも蓄積していき、

「……………いい加減にしやがれ!!!」

我慢出来なくなったベートは跳躍し、そのフロスヴィルト、特殊金属「ミスリル」を加工したミスリルブーツでリユックを踏み潰した。跳躍からの攻撃でリユックの全身は弾け飛びガラクタが更にガラクタになる始末。

「ベート!!何をやっている!!!」

「うるせえクソエルフ!!!こんなゴミを出しているのを待っていても何も変わらねえよ!!!」

いつものように誰に対しても毒づくベート。しかし今回はやめて方が良かった。こ

ここにはエルフが1人だけではないのだから……

「……トキサキさんといい、彼には一度痛い目にあつた方がいいかと」

「……ハジメ君は意味のない行動なんてしません。なのに勝手に決めつけて、エルフだとバカにして……」

「……ここはどちら側にも付くつもりはなかったが……」

「『その（無礼者）（狼人）（ベート）を泣かしてください!!』」

よほど頭に來たのだろう、声ピツタリに合わせる三人。それに答えるようにハジメはベートの目をじつと見てながら、

「了解です」

「はあ？ 雑魚が俺を泣かすだと……やれるならやって見やがれ!!」

ベートの上段蹴りがハジメの頭を襲う。その一撃はもちろん手加減しているが、喰らえばハジメの身体は簡単に吹き飛び訓練所の壁も貫くだろう。しかしハジメの一時停

止の前では無意味、手加減しようが本気だろうが全て停止させるのだから。

「チイツ……うらあああああああ!!!」

予想外、というわけではない。でも舌打ちをせずにはいられなかった。話しには聞いてはいたが本当に攻撃を止めるなんて想わなかったからだ。しかしこうやって目の前でやられたからには対策を打つ必要があると考えていたのかベートはハジメに拳と蹴りの連打を繰り返す。だけどこんなことをしても全て一時停止により止められてしまうので意味がない。

しかし、その意味のないことをやるということに意味がある

「なるほど、考えたねベートは」

「どういうことですか、団長？」

「闇雲にやってるんじゃないんですか？」

「そうだね、ハジメの一時停止の前では攻撃は無意味だろう。だけど一時停止には意味があるんだよ」

「……なるほど、そういうことか!!」

ベートは一時停止の多用による精神疲弊マインドダウンを狙っているのか!!!」

ベートの考えはこうだ。どんな攻撃も一時停止により止めてしまいう万能な魔法かもしれないが、魔法であるかぎり必ず底があると考えるのだ。いくら攻撃を止めても精神疲弊すればハジメを守る盾はなくなる。

「精神疲弊すればハジメに攻撃せずに勝つことが出来る」

「一時停止が凄くて「魔法」だったことを忘れてました」

「でも、それならハジメに勝てる」

そんなことを言っている間にもすでに100回以上の攻撃をしている。それでも未だに攻撃の手を緩めないベート。対してハジメはまだ精神疲弊の兆しはない。

「アレだけの攻撃を喰らっても顔色一つ変えないとは…」

「流石レア魔法といったところか」

「でも、レアならむしろ消費が激しいんじゃないか…」

「必ずしもそうとは限らない。現に僕達はいま一時停止というものを目にしている。だ

けどどんなレアでも魔法は魔法だ。必ず精神疲弊はくる」

そう魔法を使用するかぎり底が尽きる。身体を動かし体力が尽きるように魔法を使い精神力が尽きる。いくら体力があろうが精神力がなければ気絶してしまう。ペートはそれを狙っている。この無敵といつていい一時停止に対抗するにはこれしかないと判断したのだろう。

.....

「.....はあ、はあ、はあ.....くそが.....」

「うそ.....でしょう.....」

あれからどれだけ時間が過ぎたのだろう。1分かもしれないし10分かもしれない。それだけ濃い時間が流れたのだが目の前の現実には残酷な真実を突きつけるだけ材料にしかならなかった。

「もう終わりですか？ 粘ったほうですけど、それだけじゃ足りませんよ」

「……………ふざけやがって……………」

「いえいえ、ふざけてませんよ。やり方は間違ってますんですけど、ただ足りないだけですよ」  
「……………くっ……………」

ケロツとした表情でハジメはベートに語りかける。それだけじゃ足りない、ただ足りない。つまりハジメにも精神マインドダウン疲労弊はある。だが、

「あれだけやって……………まだなのか……………」

「ドチビ!!お前まだウチらに隠してることがあるやろう!!!」

「……………あるよ。だけどこれは本当の秘密だ。打ち明けるつもりはないよ」

「こんだけのことをしてまだそんなことをいつ」

「だからこそだ!!」

君なら分かるだろロキ。いくら契約を結ぼうが明かせない秘密があるってことを。全くないとは言わせないよ」

それを言われたロキは黙ってしまった。いくら契約を結んでも全て明かすことなんて出来ない。ましてやファミリア内でも明かせないこともあるのだ、自分の都合で明か

るほど軽いものではない。

「じゃ次は僕の番でいいですよね。リヴェ姉、ベベートに体力回復薬を渡してください」

「テメエ!!ふざけてるのか!!!」

「いや、正々堂々とやるために…」

「これは喧嘩だあ!!テメエの施しなんているかああ!!」

未だに肩で息をしている状況でもハジメを睨み付け吠えるベート。その姿に諦めたのかハジメは近く落ちていた小瓶を手を取った。

「それじゃ遠慮なくいかせてもらいますよ」

「いちいち聞くんじゃない!!」

「まだまだ元気ですね。それでは」

そういつてハジメは小瓶の蓋を取り、右の掌に小瓶の中にある液体を流し落とす。その中身はどす黒いものであり掌に触れた途端に液体から固体へ、まるで屋根に出来る氷柱がその掌から生えてくるように高く高く積み上がっていく。そして小瓶の中身がな

くなつた時にはその黒い棒はメートル近く出来上がつていた。

ハジメはそれを握りベートに向けて走り出す。ベートは未だに動くつもりもなく、いや逃げるつもりもないだろう、ただその場に立っている。そう完全にハジメを舐めていゝのだ。それでもハジメはベートに近づきその黒い棒をベートに向けて殴り付ける。

「はっ！遅せえよ!!!」

— その場から動くことなく身体を最小限で動かすだけでハジメの攻撃は当たらない。単純な戦いで一級冒険者にハジメが勝てるわけがない。そう単純な戦いなら。

ハジメはベートがこの攻撃を避けることは分かつていた。だから避けた瞬間が狙いだったのだ。ハジメのこの一撃だけを避けたことによる体勢。それからもう一度避けることは難しい。例え避けれたとしても広範囲の攻撃を避けることが出来るだろうか。

ハジメは黒い棒にかけていた一時停止を解除する。それと同時に黒い液体になつた物に一時停止で止めていた衝撃を放つ。それにより黒い液体はハジメやベートを巻き込んで広範囲に撒き飛んだ。

その一瞬がベートに見えたのだろう。無理やり身体を動かして黒い液体から距離を置こうと飛び逃げた。その一瞬の判断、黒い液体がヤバイものだど直感で感じ取つた為



その場から逃げ出した。そしてそれは正解だった。

「な、何なのアレ!!?」

「床が……溶けているのか……」

黒い液体は床に当たった瞬間にそれを溶かし始めた。グツグツと気泡を立てながら溶かしていく。床も天井も柱も何もなかも。ヘステイア達は訓練所から出て観覧席から見ていたために液体が飛んでくることはなかったが、

「ベートがあれ避けなかったら……」

「ああ、危なかっただろう……」

現に避けたベートの服にも液体が付いたようで溶けて穴が空いている。あと僅かでもズレていたら、僅かでも投げるのが遅れたらその身体に穴が空いていた。

「……て、テメエ……」

「安心してください、穴空いてませんよ。」

それにベバートなら、これくらい避けられると分かってやったんですから、問題ないですよね？」

グツ！とそれ以上は言えなかつた。これで「危なかつた」と言えばベバートはハジメを「強者」と認めることになる。今でも「弱者」だと思っているベバートがその言葉を言うわけがない。

「さて次にいきましょう。ここにはベバートを倒すための色んな物がありますから」

今でもベバートはハジメを「弱者」だと思っている。しかしその「弱者」の中でもこいつは「強者」だと認めてしまった自分にイラつきを覚えながら、これから始まる喧嘩に集中することにした。知らずに「弱者」ではなく「強者」だと気づかずに。

影が薄くても攻撃の術は持っています。

次に床に落ちている物を、その手に取ったのは僅か0.5mmの小さな鉄の塊。それも掌に収まりきれないほどの量を手にしている。それを見たフインは思わず叫んでしまった。

「今すぐに物陰に隠れろ!!!」

それと同時にハジメはベートに向けて鉄の塊を投げた。それもただ投げただけではない、衝撃を加えた鉄の塊が音速に近いスピードで飛んでいった鉄の塊はベートを襲う。すぐにその場から逃げようにも逃げられない。掌に収まらないほどの量を投げられ広範囲に広がり向かって来るのだ。逃げ切れないと判断したベートは咄嗟に脚を上げて向かってくる鉄の塊を蹴りだした

「うおおおおお!!!」

飛んでくる鉄の塊は目に見えている。あとはそれを捌ききれるかだろうか。ベートはすでに疲れきっているのだ、さつきまで全力の連続攻撃をしていたのだから。体力回復薬を拒んだベートにはいまの力でどうにかするしかない。

まずは顔面に迫ってくる鉄の塊を蹴り落とし、そのまま右肩に迫ってくる鉄の塊を蹴り落とし、腹部、左足、胸、次々に襲いかかる鉄の塊を蹴り落としていく。

だが最後の最後で、身体を支えたい脚にガタがきたのか、力抜けてしまい左肩に迫っていた鉄の塊を蹴り落とすことが出来ずにその身体に受けてしまった。幸い鉄の塊はベートの身体を貫き留まることはなかったが、その勢いで飛ばされたベートの肩からは血が溢れ出ている。

「あ、危なかった……」

「コラー！ハジメ君!!危なかっただろうが!!!」

物陰に隠れたヘスティアは誰も怪我はなかったが、物陰となった壁や柱は小さな穴とヒビが入っていて、これを受けていたらベートのように血を流していただろう。

「アイズ姉やリヴァ姉の一級冒険者の方々がいたので大丈夫かと思いましたが、思いつき

りやらせてもらいました」

「やり過ぎだよ!!」

確かにアイズなら簡単に捌ききることは出来ただろう。しかしあんな風に攻撃をするなんて予想出来なかった。そんな状態で本当に鉄の塊から守りきれたのかどうか……

「でしたらそちらに被害がないように訓練所全体に一時停止をかけおきましょうか？」

「出来るなら最初からなんでしないだよ!!!」

「言われなかったのので」

「君って奴は……」

その答えに頭が痛くなつたヘステイア。隣にいたベルもただ苦笑いするしかなかつた。ハジメは床に手を置いて訓練所全体に一時停止をかけた。訓練所という空間から離れているヘステイア達はそこから眺めることは出来るが中に入ることとは出来ない。逆も同じでハジメ達も訓練所から出ることとは出来なくなつた。

「それでベベート、まだやりますか？」

「……上から話してるんじゃないえ!!!」

怪我をしているので、といえば良かったと思ったがすでにベベートはハジメに向かって走っていた。そしてベベートが床に散らかっている物の一つ、木箱を踏んだのを確認したハジメは、

「あつ、それアウトです」

指を鳴らした瞬間にベベートの足元が爆発した。それも訓練所全体が簡単に吹き飛ばす火力と爆風がベートを襲った。突然のことでベートは避けることも出来ずにモロに喰らい、宙を舞うベートの身体は弧を描き地面に叩きつけられた。

「ベート!!!」

「ちよつ、直撃したよ今の!!!」

いくら一級冒険者とはいえ間近で爆発を、直撃しなくとも確実にダメージを受けるだろう火力。それをハジメは指を鳴らすだけで、

「何ださっきのは!!？」

ハジメの指で鳴らした音で木箱が爆発した!？」

……新しい魔法が顕現した? いや、マジックアイテムなのか?」

困惑をしているロキファミア。もちろん同じファミアであるヘスティア達も何が起こったのか分かってない様子。すると爆煙が晴れた向こう側には相変わらぬ無表情で怪我もなにもないハジメが立っており、ベートは傷ついた身体を動かしながら立ち上がるうとしていた。

「さすが一級冒険者です。結構強めだったんですね」

「……な、なんだ……さっきのは……」

「今まで使っていた一時停止の応用編ですよ。僕に与える衝撃を一ヶ所に集めて手や足裏から放出しますけど、今回は「衝撃」や「炎」や「氷」などを一ヶ所に集めて木箱に詰めて、後は一時停止解除。これでビックリ箱の完成です」

「ふ、ふざけ…………るな…………」

ビックリ箱、要はビックリ箱<sup>リモート爆弾</sup>である。木箱に入れているのは中身が見えないようにするため。そうしないと色とかで推測されてしまうからだ。ちなみに炎や氷はダンジョンにいつて冒険者が使っていた魔法を一時停止にしてきたもの。もちろんもらった魔法の代わりにモンスターを倒した。何とか立ち上がったベートだがいくら一級冒険者でもかなり体力が奪われているようだ。

「さつきから…………なんだテメエは…………」

「どうしたんですかベート？」

「なんで攻撃してこねえんだ、あああ!!？」

「はい?!」

言っている意味が分からなかった。さつきからというのは今までの攻撃が攻撃ではないところを言っているのか?!でもその攻撃を見事に喰らっているのはベートであり、どうしてそんな事をいうのかさっぱり分からない。



「攻撃当たってますよね？大丈夫ですかベート？頭の打ち所が悪かったんですかね？」

「攻撃だあ？はっ、こんなのが攻撃とは言わねえ!!」

攻撃つてのはな、拳や武器や魔法を使って、身体を、経験を、知識を使って敵をどうやってぶちのめすのか、ぶつ殺すのかを、全部出しきることだ。だがテメエはなんだ？そんな魔法道具しか使えねえ奴が、喧嘩の最中に道具一時停止しか使えねえ奴が攻撃なんて言ってるんじゃない!!」

そうベートが一番気に食わなかったのは、レベルや人物や性格ではない。ハジメが一時停止しか使わないこと。まるでそれが唯一の攻撃だと主張していることが気に食わない。

「そんなこと言われましてもステイタスを見ているから知ってるはずですよ。僕の力は0。攻撃にならない攻撃を出しても勝てないなら魔法しか、一時停止をうまく使つて戦うしか」

「試したのかよ！その攻撃をよ!!!」

やってもねえ奴が、努力しねえ奴が、力もねえ奴が、冒険者を名乗るんじゃないやねえええええ!!!」

その言葉に黙ってしまったハジメ。ベートが言うことが分からない訳ではなかったから。何度も試したがダメだった。力が、魔法以外のステイタスが上がることはなかった。だから諦めたのだ。そして一時停止で戦うことを選んだ。その判断が間違っているとは思わない。だけどあの時諦めなかつたらと考えたら……すると外野から、

「君にハジメ君の何が分かると言うんだい!!!」

「か、神様……落ち着いてください!」

ヘスティアが必死な悲しそうな表情でベートに食いかかる。隣ではベルやエイナが止めようとするが止まらず叫び続ける。

「何が分かるって言うんだい!!どれだけダンジョンに潜っても上がらないステイタス、誰にも見られない孤独感。それでも冒険者としてやって何が悪いと言うんだい!!!」

「うるせえ!!神ごときが冒険者の何が分かるってんだ!!!」

「ベート!!! 貴様なんだその発言は!!!  
今すぐにとり……け……せ……せ……せ……」

ベートを叱るリヴェリアの大きな声が掠れて聞こえなくなっていく。目の前で起きてくる出来事があるにも有り得なかったからだ。

「………僕の、僕の悪口は構いません」

無表情でも明るさのあったハジメ。だがいまは凍りつくような眼差しでベートを見ている

「ですが僕の大切な神様の悪口は、」

そしてハジメの足元から霧が、いや冷気がハジメを中心に訓練所全体に広がっていった。それを見ていたヘスティアの表情は豹変して

「止めるんだハジメ君!!アレは使ったらダメだあああ!!!」

しかしヘステイアの言葉は届くことはなかった。

「許しません。」

刹那、瞬間に訓練所は真っ白な空間へと変わった。ヘステイア達の目の前にはキラキラと氷の結晶が舞っている。

この一時停止の向こう側は極寒の世界が生まれていた。そう、ヘステイア達の目の前には生き物が生きれない環境が目の前にあるのだ。

影の薄さは周りの人によつては必ずではない。

…

…

…

…

あれはヘステイアとハジメが出会いファミリアとなつてから何日か過ぎたある日のこと。

このときはヘステイアはダンジョンへ向かわせることを禁じていた。魔力以外0であるハジメをダンジョンに向かわせれるハズがない。例え一時停止があつたとしても子を心配する親なら簡単に行かせれるわけがない。しかし一人から二人に増えたことにより食事も増えることになり、それはお金が必要となる。ヘステイア一人のバイトだけでは足りない為、仕方なくハジメもバイトをすることにした。だが、そう簡単に見つかるわけもなくこうやって街中を歩き回っていた。

夕方となり夜になりそうな夕方、結局バイトは見つからなかった。ヘステイアのバイ

トもそろそろ終わる頃だと思いいえに向かったハジメだったがそこに、

「ああ!?!金が足りねえだと?!」

「そうだよ、ちゃんとボクは君達にジャガ丸くんを3つ渡したよ。でもここにあるお金は2つ分しかないんだ。キッチンと代金は払ってもらおうよ」

「テメエが落としたんじゃないかねえのか?それに俺達が2つ分しか渡してない証拠があるのかよ!!」

「知っているはずだよ、神様に嘘は効かないってことは。君達は嘘ついている、それは自分がよく分かっているはずだよ」

二人組のゴロツキに対して一歩も引かずに支払いを要求するヘステイア。目の前にいる神様を侮辱していることになって罰当たりなと思いつながらヘステイアに近づき、

「大丈夫ですか神様?!」

「ハジメ君、ああ問題ないよ。さあキッチンと代金を払うんだ」

「……うるせえな!!こんな物のために誰が払うか!!!」

そういったゴロツキの一人が持つていたジャガ丸くんを地面に叩きつける。それを見たもう一人のゴロツキも同じように叩きつけた。

「なんてことをしてるんだ!!」

「さつきからウザいんだよ!!神だからってな、なにもできねえくせにいい気になってるんじゃない!!」

これは後から知ったことだがこのゴロツキ達はい最近ファミリアから追放されたようだ。ファミリアの掟を破った罰として追放されたのに、自分達は悪くないと追放した神様へ逆恨みをしていたのだ。

だからこうしてヘスティアに対して暴言を吐いた。まあヘスティアは怒りはするがきつとそのあと許してくれるだろう。しかしヘスティアの隣には、

「……訂正してください」

「ああ??さつきからなんだテメエは!!関係ねえやつは何処かに言ってる!!」

「……訂正してください」

「うるせえんだよ!!何回も言ってるよ!!!」



何にもできねえ神が、モンスターを倒せねえ神が、冒険者に逆らってんじゃねえ!!!」

無表情。喜怒哀楽が分かりづらいハジメだが今は間違はなく「怒」である。そしてハジメもそれが分かっている。こんなことを改めて言うのはおかしいが、周りが思っている通りハジメ自身も自分が感情を表に出すことはないと理解していた。だからこそなんだろう、自分の大切なものを傷つけられた時その感情がハッキリと分かる。そしてだからこそ、その感情を抑える術を知らなかった。

「……………僕の……………」

「ああ!!?なんだ、ハッキリ言いや……………!!??」

小さく誰にも聞こえない声だったが、見えてしまったハジメの目がゴロツキの言葉を止めた。その目は明らかに人を殺める目だと、そしてそれが自分達に向けられていることを。

しかし、逃げることも叶わなかった。いや、逃げるといふ考えすら持てなかった。その恐怖を感じていたときにはすでにゴロツキ達は意識がなかったのだから。

「……な、何を……したんだい……ハジメ君……」

何が起きたのか分からなかった。確かについさつきまで変わらない景色だったのが、瞬きをした時には景色が、世界が変わってしまった。

ハスティアとハジメを中心に周りが凍りついていた。ジャガ丸くんもお店も地面も草も、そしてゴロツキ達も、周りにあつたものすべてが一瞬にして変わってしまった。そうゴロツキ達はまるで氷の彫刻のように完全に凍りついてしまっていた。

「こ、凍りついている……詠唱も言わずに魔法を……」

こんな広範囲で強力な魔法を無詠唱で使えるなんてありえない。どんなレアな魔法やスキルでも詠唱無しなんて……それこそ神ではないかぎり……

そんな状況に戸惑っている間にもハジメはゴロツキに近づき、その右手を握りしめて振り上げた。

「ちよつ、ちよつと待つんだハジメ君!!そんな事したら彼らが!!!」

しかしヘスティアの制止を聞かずにハジメはその右手を降り下ろし、周りに砕けるような音が響き渡った。

.....

.....

.....

.....

「な、なんやこれは……」

ロキの目の前には一瞬にして訓練所が真っ白な世界へと変わってしまった。柱や床や天井は凍りつき空間は未だに冷気が漂っている。

そしてすぐにその冷気は消えていき、その先に見えたのはこの状況を作り出したと思われるハジメと、

「べ、べーとト?!?」

訓練所と同じように凍りついてしまったベートがそこにいた。ただそこにある人形のように、色白く生きていると感じさせない。

そんな中いつの間にかベートの近くにあったハジメは、右手を握りしめ拳を振り上げた。

それを見ていたフィンはハジメが何をしようとしているのか分かった。

「や、止めるんだハジメ!!ベートの敗けだ!!さっきの言葉もキチンと謝罪させる!!!だからその手を降ろしてくれ!!!」

その言葉に誰もがこれから何が起きるのか理解できた。特にリヴェリアは身に覚えがあった。

『ウイン・フィンブルヴェトル』

その魔法で凍りついたモンスターを叩けば瞬く間に粉々にくだけ散る。モンスターの体の芯まで、細胞一つ一つを凍らせてしまえばたった少しの衝撃でもその原型を壊してしまう。

そしてそれがいまベートに向けられている。凍りついてしまったベートが生きているかは正直分からない。分からないがいまこれを止めなければ生きていく可能性さえ

もなくなってしまう。

しかしフィンの言葉は届くことなくその右手は降り下ろされる。

「やめろおおおおおおおお!!!」

必死に壊すこと出来ない見え<sup>一時</sup>ない壁<sup>止</sup>に全身全霊を持つて拳を叩きつける。何度も何度も殴り付ける。だが一時停止を壊すことは出来ない、そしてハジメの右手はベートの頭部へと落とされ、何もかも奪ってしまう無情な音が響き渡った。

「ツぷは!!!て、テメエ何し…ってなんだこれはオイ!!体が動かねえ!!!」  
「おつ。目覚めも早いですし、すぐに状況把握。さすがベベート」

砕けたのはベートの頭部だけであり未だにその下は凍りついたままである。何とかその氷から抜け出そうとするベートだがまるで鋼を身にまとっているようで動かない。というか寒すぎる、というか痛すぎる、というか死んでしまうほどヤバい。すでにベートの顔色は青白くなっていく。

「……………こ、これを…溶かし…やがれ……………」

「神様に謝ってからですよ」

「……………り……………」

「はい？」

「……………ワリ……………」

「ベベートにしては及第点ですかね」

そしてハジメはベートの胸部を叩く、すると下半身だけを残して氷は砕けた。それと同時に訓練所周りにかけていた一時停止が解け、フィン直ぐ様ベートの元へ駆け寄り無事であるか確認した。

「…無事、みたいだね」

「つたく…ヒヤヒヤさせて…お前は……」

「これは一体どういうことや？ベートは凍りついてヤバかったんやなかったんか？」

凍りついた体はまるでシャーベットのように細胞一つ一つを凍らせて衝撃を与えれば砕けてしまう。なのに氷が砕けてもその体は無事でありすぐに意識を取り戻した。

「凍りつく前にベートの周りに一時停止をかけました」

「なるほどな、だから凍りつかんかったんか…？つてか、なんやさっきの魔法は？!!詠唱無しとかレアにもほどがあるわ!!!ドチビ!!ステイタスに細工したやろ!!!」

「なわけないだろう!!それにこれに関してでは完全にトツプシークレットなんだ!!!見てしまったことは仕方ないとしてもこれ以上話すつもりはないよ!!!」

これに対してなんやて〜!!と反論しようとしたがフィンが割り込んできた

「ロキこれ以上はやめておこう。さつきも見たはずだ、彼が大切に思うものに対してのアレを」

「……分かったわ……」

フィンとロキも周りもそれ以上は何も言わなかった。怒らせるとベートのように凍らされることを。詠唱もなく防ぐ術もなく、一瞬に終わってしまうその力を。その目で見て分かってしまったのだ。『絶対にハジメを怒らせたらダメ!!』だと

「オイテメエ!!!残りの氷も砕きやがれ!!!」

さつきから下半身の氷を砕こうとしていたのだが、一級冒険者の力を持つてもその氷を砕くことが、欠片を出すことさえも出来なかった。分かりましたと返事をしようとしたハジメだったがその言葉をリヴェリアが被せてきた。



「いやベート。しばらくそのままでもいい」

「何言ってや…」

「今回!!今回こんなことになったのは全てお前が原因だ。どんな原理かは知らないがずっと溶けないわけではないのだろう?」

「はい。凝縮した氷ですから初めは解けません、半日ぐらいしたら溶け始めますので」  
「だそうだ。反省としては短い気がするがその氷による拘束を考えて半日で許してやる」

「ツギけんな!!!」

全然反省するつもりのないベートを見たファミリアの仲間はハアとため息を付きながらベートから離れていく。普通なら氷の中で数時間いるだけで凍傷するのだが、一級冒険者の耐久力ならギリギリ大丈夫だろうという判断だ。なので全員ベートに反省してもらおうべく、いや反省しろということは無視することにした。

「今回といい前回といいハジメには迷惑をかけてしまった。君達がよければ気がすむま  
でここで生活してくれ」

「……正直反対したいところやけど…仕方ないか……」

「ありがとうございます」

なんだいその態度は？とか、うっさいわボケ!!とかまた神様の喧嘩が始まったのだが、こう何回も見ていたら「もう無視していいんじゃないか？」ということスルーすることにした。

「代わりというわけではないがあの日起きた出来事「脱力感」について調査をしようと考えているのだが、それに参加してくれないだろうか？」

「元よりそのつもりなので、よろしくお願いします」

これで一通り話が纏まり、早速ベルやヘステイアの元にロキファミリアの冒険者が集まり「館の案内をするよー」とか「お部屋を案内します」など共同生活の話が進んでいる。ハジメはここまで付き合ってくれたエイナとリユ一の元へ行き、

「二人とも今日はありがとうございました」

「ううん、いいのよ。これで安心できるわね」

「何かありましたらいつでも言ってください」

帰る二人を見送ろうとハジメは一緒に黄昏の館の外まで着いていった。エイナはそのまま家に帰るということで近くまで送っていかうと提案したのだが「私の家は近いからいいわよ」とさつさと帰っていった。残された二人は何となく「豊穰の女主人」の近くまで歩いてきた。

「ここです、ありがとうございます」

「いいえ、明日はお迎えにあがりますのでよろしくお願いします」

その言葉に何か納得していないような表情のリューに、

「どうしたんですか？」

「……どうして私なんですか？他の女性と違い愛想もなければ好意を持たれることもない。私はトキサキさんに……好かれる要素を持ち合わせていない」

ここまでハッキリと言うとは思わなかったのかハジメにしては珍しく放心状態になっていた。だけどそんな状態はたったの1秒ぐらい。

「リユー姉だからですけど、何か？」

「いや何か…って、あのですね…」

「僕はリユー姉だから誘ったんですよ。だからそれが全てです。それではよろしくお願  
いします」

一礼をしたハジメは呼び止めようとしたリユーの仕草をスルーしてその場から離れ  
ていった。残されたリユーはどうしたらいいのか分からずにしばらく立ち尽くしてい  
た。

影が薄くても買いい物を、デートをしたいのです。

ベベート氷付けから次の日、今日は冒険日和と言いたくなるような暖かい陽気であり、気のせいか街の皆も明るい雰囲気を出していた。

そんな中、ここにもいつもより明るい雰囲気を出しているように見えるハジメが歩いていた。もちろん無表情であるため見た目では分からないが、普段一緒にいるヘステイアやベルなどからは「なんかいいことあったの?」と言われるほど明るい感じである。

それはそうだろう。なにせ今日はリユーとのお買い物、いわばデートである。いくら無表情であろうと無関心というわけではない。それこそ「えっ、興味あったの?」と言われるほどハジメという人間は周りからそんな風に見られているのは間違いない。でも確実にハジメは今日のリユーとの買い物は「デート」だと分かって向かっている。

その場所は「豊穡の女主人」であり、リユーの住んでいる場所から近くて集合場所には持つてこいである。まあデートするのにアルバイトしている場所が待ち合わせなんてセンスがないと思われるだろうが、どうやらこの「デート」を意識しているのはハジメだけではなく「豊穡の女主人」の皆も分かっている。もちろんリユーも分かっているだろうが意識しないようにするだろう、つまりは服装も普通の服装かもしれない。い

や、もしかしたらウエイトレス姿かもしれない。

なので今回本日はリユースの服装はシルやアーニャーなどが担当しているのだが、

「おはようございます、リユース姉」

「……お、おはようございます……トキサキさん……」

そこに立っていたのはいつも見慣れたウエイトレス姿のリユース……ではなく、いつもとは違い白いレースの膝上までのワンピースに、腰周りが細くなっている緑のカーディガン、踵の高さが低い茶色のヒールを身に纏っているリユース。

その姿はいつものクールな感じではなく、そこにはリユースの可愛いらしさが分かる。というかモジモジしながらチラツとハジメを見てくるリユースの姿に「リユース可愛い!!」「あれ誰かニャー!?!リユースの皮を被ったリユースだニャー!!!」とか後ろで盛り上がった豊穣の女主人のウエイトレス達。

「お似合いですよリユース姉」

「………本当のことを……言ってください……」

「こんなのは私らしくない。シル達は似合っているというがやはり私には……」

自信無さそうに話すリユーだがハジメも後ろから様子を眺めているシル達も、その服装がとても似合っていると思っっている。

「リユー姉は自分のことになると弱気になりますよね。いけませんよ、自分を悲観したら服を選んでくれたシル姉達に失礼ですから」

「……………そうですね…………」

理解はしたが納得はしていない、そんな表情だった。

自分のことは自分がよく分かっている、と言いたかったようだがハジメから注意され、特にこの姿を誉めてくれたことを何処と無く否定したくない。否定的な感情の片隅では嬉しさがあるがそれを出せずにいる。

「それではいきましよう」

「そういえば何を買われるつもりなんですか？」

「武器になりそうな安い物をです」

「……………はい？」

.....

ここはヘステイアがバイトをしているお店の地域にある商業エリア。日常雑貨からちよつとした冒険者のためのアイテムなどが売られている。そしてこのエリアは他の所に比べると品物が安い。

「うーん、もう少し薄いものはありますか？」

「これなんてどうだ」

「おお、これは。これを30枚買いますのでさつき原値段にしてくれませんか？」

「おいおい、いくらなんでもそれは無理だぜ」

「なら50枚」

「.....いいだろう!!その代わりにまた買いに来いよ!!!」

そんなやり取りを少し離れた場所から眺めたいるリユウの周りには沢山の買い物袋が置いてある。食料品から雑貨品、中にはゴミじゃない?と思わせるものさえも。



「いい買い物が出来ました」

「それはどのように使うのですか？」

「投げやすいように長方形に切り取って、手首のスナップで飛ばします。その時一時停止して硬直化させて衝撃解放によるスピードアップで攻撃力をアップ。これなら厚い皮膚も貫通するはずですよ」

「なるほど……そのためにこのような薄い紙を大量に買ったんですね」

「はい、持ち運びが良くて攻撃性が高い。ベートとの喧嘩で学んだことです。さすが一級冒険者ですよ」

ベートが言いたかったことはそれではない。とは言えるわけもなく、足元の荷物を手に持ち移動する。ハジメからは買い物に付き合ってくれているのに悪いですと言われたが、

「私はトキサキさんの買い物に付き合っているのです。でしたら荷物持ちも含まれる、違いますか？」

「……確かに、そうですね。ではこの二つだけお願いします。」

あつ、そうですジャガ丸くん食べませんか？奢らせてください」

「いえ、キチンとお金は払います…」

「神様がバイトしているのだから女性にお金を支払わせるところを見せたら怒られますので気にしないでください」

荷物を持ってもらうなんて本当はさせたくない。しかしリユーも一度いつたら変えない頑固な所がある。なので比較的軽い荷物だけを持ってもらうことにして、これ以上言われぬように何かを思い出したように話題を変える。

その何とも強引な話の変え方から、話を終わらせたハジメはそのままヘステイアがバイトしているお店に向かった。そのお店の近くまで来たのはいいのだが、何故だかお店の周りの人だかりが出来ていた。

「アレは……なんででしょうか？」

「ジャガ丸くんが大ブームになったならいいんですがね」

きっとそれは違うだろうと分かっているのだが、それならこの人だかりは一体なんだろうと近づいてみる。するとそこには一生懸命にジャガ丸くんを売っているヘステイアと、

「あぁー、忙しそうですねアイズ姉、レフィーヤ姉」

「本当に忙しいですよ!!なんで私がこんな……」

「……でも、楽しいよ」

「アイズさんが楽しんでるならいいですけど、私達へステイア様の護衛ですよね?」

「いいじゃないか!ただ護衛するだけならバイト手伝ってくれても。ちゃんと給料払うからさ!!」

忙しくバタバタしているようでハジメ達に構ってられないようだ。これ以上はお邪魔になるだろう思ったハジメは、

「ジャガ丸くん二つください」

「こんな忙しい時に畳み掛けしないでください!!」

「鬼!!ハジメは鬼なのかい!!」

「……あつ、三つでお願いします。アイズ姉の分も」

「つて、目を離している隙に!!!アレほど商品を食べたらダメだって言っただろう!!!」

「……お腹減った……から?」

「もうー!!君は!!!全く君は!!!」

と、本当に忙しそうだと判断したハジメ達はさつきとジャガ丸くんをもらってその場から離れた。しかし流石オラリオが誇る一級冒険者である。あんなに人を引き寄せるほど名が知られている。でもそれは同時に常に目をつけられていると同じであり、そうなる今回巻き込まれたハスティアとベルには申し訳がないと感じていた。

で、そのベルはというと、

：

……

……

……

「ほら、脇が甘いよ」

「腰構えが悪いわ!!」

「何チンタラ動いてやがる!!!」

「ひええええええええええ!!!」

フィンとガレスとベートにしがこかれていた。

ロキファミアがヘステイアファミアに対して支援することの1つ、ハジメとベルに冒険者としての指導することになっていた。で、さつそくベルはその洗礼を受けていた。ベルの戦い方は独学でそれが悪いというわけではないが無駄な動きや力の入れ方などをいま徹底的に体に叩き込まれている所なのだ。

そしてそこへ分厚い本を持ったリヴェリアが訓練所に現れ、

「まだ終わらないのかフィン？」

「もうそんな時間かい。それじゃ最後にさつき教えたところを一通りしたら終わりにしよう」

「……は、はい……」

「ベル、30分休憩したら次は17階層までのモンスターの名前と特長と出現する階層について覚えてもらう。こういうのは繰り返し頭に入れることで反射的に言えるように……」

「待ちやがれ!!その兎は後で走り込みをやるって決めてるんだ!!さつさと終わらせろよ!!!」

「なにをふざけたことを言っている。冒険において大切なのは知識だ。それを今のうちに叩き込まなければならぬ」

「ああ!? 知識なんぞいるか!!! スピードさえあればどんな敵でも関係ねえ!!!」

「聞き捨てならんな。敵を一撃で粉砕する力。弱肉強食の世界は力が必要じゃわい」

「そんなことはない。確かに知識もスピードも力も必要だが、戦いを目の前にして必要なのは経験だ。どれだけ戦いに身を投じてその体に刻み込むかが肝となる」

「しかしいくら経験を積もうが知識がなければ…」

「知識があろうが捕まったら…」

「んなもん関係なく力で…」

「ただ力を振り回せずにその経験を生かし…」

「どうやらベルの教育方針が上手く纏まらずに言い合いを始める一級冒険者達。ここから逃げるつもりはないが心ではものすごく逃げ出したい。そうしないといけないと本能が告げており、そしてその本能は正解だった。」

「なら一時間ずつ時間を分けて、最終的にどの指導が良かったか決めてもらおうというの



「うん?」

「どうかしましたか?」

「いえ、誰かに呼ばれたような気がしましたが……まあどうせベルベルがベート辺りにしごかれているところなんでしょう。で、僕に八つ当たりをしているじゃないですかね」

「こういう時のトキサキさんの勘はよく当たる。大丈夫なんでしょうかクラネルさんは」

「大丈夫ですよ、ベルベルですから。」

そしてこの「大丈夫です」はあまり当てにならないことも知っている。

現在二人はジャガ丸くん以外にも食べ物を購入して軽い昼御飯を取った。そして現在にはリユウの提案で防具を見ようということになりバベルの根元まで来ていた。ちなみに大量の手荷物はギルドに置いてきた。正確にはギルドにいるエイナに預けた。「な、何なのよこの荷物!!……はあ? 預けるって、ここはそういうところじゃ!!」と何かを言っているようだったがすぐに他の冒険者が現れて対応することになってしまった。そしてハジメの軽くなった手はそのままリユウの手を繋ぐ……ことはなかった。



気持ちとしては握りたい。これはデートなのだから。そういう行動をとってみたい。こんな言い方だとまるでその行動だけをしてみたいと聞こえるだろう。

その通りだ。もちろんリユーが異性だから、大切な人だからというのはある。しかしその行動理由は試したいという思いだった。

以前にリユーに頼まれて手を握ったときモップで殴られたことがあった。あのあとミア母さんから「良くやってくれた」と言われて、あの行動は正しかったのか？と疑問を持つようになった。その後リユーの手を握ってみようとは思ったが突然握ると間違はなくまた攻撃をされて逃げてしまう。そうならないように手を握って確認したかった。このデートで握る機会があると思ったとき試したくなった。

「良くやってくれた」という意味を知りたかった。

知りたいといっている手を握ったらデートはそこで終わる可能性がある。なら今日デートが終わり時に実行するのが一番だろう。そう考えていたのかいなかったのか表情では全く分からないハジメに対してリユーは、

「何か悩み事があるのですか？」

「……………やっぱり防具は必要ないかと思ってまして」

「一時停止を、自分の力を信じることはいいと思います。ですが万が一ということを考えるべきです。この世に絶対なんてありませんから」

「……………そうですね」

確かに絶対ということはないだろう。少なくともリユーが知っている情報ならそう思うだろう。

とにかく品物を見なければ話は進まないということと、「ヘファイストス・ファミリア」バベル支店に向かうことにした。ここには一級の武器や防具が売っているが、駆け出したばかりの者達が作った武器や防具も売ってありうまくいったら掘り出し物が見つかるともある。エレベーターから降りた二人はその安い物が売っているお店を目指そうとしたのだが、

「待ちかねたわよ」

「……………あ、あの……………」

「始めまして、リユー・リオン。そして…見えないけどいるのよね、トキサキ」

ハジメ

その言葉にリユーは呆然となった。この人を、この方を知っている。しかしどうしてここにいるのかが分からない。そしてハジメの方を見ると、

「……あの人、やってくれましたね……」

どうやら心当たりがあるようだ。むしろ心当たりがなければハジメ達が、ハジメがここにしていることを知るはずがないのだ。

「紹介が遅れたわね、私はヘファイストス。貴方の主神ヘステイアと同じよ」

大勢の鍛冶師<sup>スミス</sup>を育成し、一級品の武器を製作してオラリオに留まらず世界中にその名を知らしめる鍛冶師系ファミリア「ヘファイストス・ファミリア」の主神がそこにいた。

影が薄いから対話に苦勞します。

「そんなに警戒しなくてもなにもしないわよ」

「……………」

「まあ、あんなところで私がいたら警戒もしたくなるのでしようけどね」

自己紹介が終わり「悪いけどちょっと着いてきて」と言われハジメはすんなりと着いていったが、リユーはヘファイストスに対して警戒をしている。説明も無しにただ着いてきてと言われたらそれは警戒するのが普通だろう。ただハジメが着いていったので黙って付いてきただけなのだが、

「なら理由を話して頂きたい」

「もう少し待って。部屋を押さえてあるからそこで話しましょう」

それならとリユーもそれ以上はなにも言わなかった。そしてヘファイストスの言うとおり直ぐにお店に入った。1つ1つの武器が圧倒的な存在感を放ち、どれもこれも並

みの冒険者では手が出ないほどの金額が書かれてある。

ここで話を戻すがヘファイストスとハジメが初めて出会った時はハジメの姿は見えていなかったが、すでにヘステイアから「ハジメを認識」出来るようにしてある。なのでとはハジメだけだったのていまではハジメの姿が見えている。

で、お店に並んである武器に驚かせるのが普通なのだがハジメは驚きも見向きもしない。その姿を見たヘファイストスは思わずため息をつきそうになった。

(全く……自信無くすわね……)

ヘファイストスファミリアの中でも団長である椿の作った物が多く置いてあり、言ってしまえばヘファイストスが一番と認めていると言つていいだろう。それをいくら話があるからと言つても目に入れば魅力され凝視してしまう。元より武器に興味がなくとも引かれていきいつの間にか見ていたということが起きるのだがハジメにはそれがない。

かといつて見なさいよなんて言うのはありえない。なのでそのまま店の奥へと案内する。そこには客間があり購入するさいに手続きをする場所だと思われる。客間に通しソファアーに着いた二人と向かい側にヘファイストスが座った。するとこのお店の

店員が飲み物を持ってきて、その場から離れたところで話し合いが始まった。

「さて、改めて自己紹介するわね。私はヘファイストス、貴方の主神であるヘステイアとは……まあ腐れ縁よ」

「昔から神様がお世話になってます。いえあのダメ神が本当にご迷惑をかけて申し訳ありません。つきましては計画的に借金の方を……」

「ちよつと待つて！別に借金の催促をしている訳じゃないの。……まあ、ヘステイアにはハジメから話してもらいたいわね」

否定をするのが現実問題この借金は金額が多過ぎであり、二人ともヘステイアの性格を知っているからこそお互いに申し訳がないという気持ちがある。

「でもハジメには感謝してるわ。それにロキにも。ヘステイアに大金を渡したらどうなっていたのか……」

「無くなります」

「いや、金遣いが荒いつて訳じゃないでしょう……」

「ですがヘファイストス様に全額返すとも思いません」

「ああ……否定できないわ……」

何かを思い出しているヘファイストスはそこでため息をついた。なんか大変なことがあったのだろうと思いい追及するのはやめた。

「まあ借金のごことは……良くはないけど今はいいのよ。私があの場合にいたのはロキから聞かされていたからなの」

「ロキ様から？ですがここに来るなんて言ってますんが」

「今日買い物していたんでしょう。自分でいうのもおかしいけど冒険者ならここに立ち寄るものよ」

「なるほど、今まで武器や武具を買ったことも「買う」という概念もありませんでしたからその発想はありませんでした」

「冒険者が武器や武具を買わないって……ロキやヘステイアに聞いた通りの鍛冶師泣かせね……」

ここでまたため息をついたヘファイストス。鍛冶師は武器や武具を作る。それは己自身を磨くためでもあり冒険者を危険から救うことに繋がる。もつと言えば専属鍛冶

師となれば冒険者のオーダー通りに作りダンジョンに向かう。その武器や武具のお陰で命を落とさずにすむ。鍛冶師はオーダーに応えるためにそれを作り、ダンジョンから帰って来た冒険者を見て自分の力を確認する。

もちろんそれだけだとは言わないがコレが冒険者と鍛冶師の関係といえるだろう。そんな中武器も武具も付けない冒険者がいたら、それはただの無謀な奴か、または鍛冶師に信頼を向けていないか

もちろん後者なんていないだろう。しかしヘファイストスは知っている。ハジメはただ無謀にダンジョンに言っている訳ではない、己の力を信じているからこそ武器や武具を使わない。両方とも当てはまらないが鍛冶師泣かせには間違いない。

「でも鍛冶師を泣かせだからあの子が惹かれたのかもね」

「それはどういう……」

リユーがその質問を投げ掛ける前にノックの音がしたあと客間の扉が開き

「失れ……おお!!主神様!!!もしかしてそこにトキサキがおるのか!!?」

「落ち着きなさい椿。あなた興奮しすぎよ」



見えているわけではないようだが、事前にヘファイストスから話を聞かされていたのだろう。リユールの右側が空いている場所にハジメがいると思えば、観察するように近づいて凝視する。

「ごめんなさいね。この子普段は冷静なのだけど…」

「構いませんよ」

やっと満足したのか椿はやっとヘファイストスの隣に座り

「いやいやすまぬな。名は椿・コルブランド、ヘファイストスファミリーアの団長をしてやる」

「トキサキ ハジメです」

「……………と言ってます。私はリユール・リオンです」

「うむ、人伝の会話は変な感じがするの。お主には悪いがよろしく頼む」

リユールの顔を見ながら喋る椿に軽く首を縦に振る。もとよりそうしなければハジメ

と会話することは難しいだろう。前にやったように何かに文字を書けばいいがそれはあまりにも効率が悪い。ということまでこれからのハジメの言葉をそのまま椿に伝えることになったリユウは、さっそく発した言葉を椿に伝える

「僕にどんなご用件でしょうか？」

「まずはお主らに謝らんといいかな。デートの邪魔をして悪かったな」

「なっ!!?ち、ち、ち、ち!!」

「それは最後に言うつもりだったのですが」

「最後とは一体どういうことですか!!!今日は買い物をすると言っていましたよね!!」

「……主神様、一体何を言っておるのだ？」

「ハジメはこのデートのことを隠していたみたいよ」

椿にはハジメが見えていないがリユウの顔が少し赤くなり動揺している姿をみて、ハジメとは気が合いそうだなと感じた。

「話を進めてもよいか？」

「す、すみません……どうぞ」

「要件は簡単じゃ。主の為の武器を作らせてくれんか」

その言葉にリユーは目を見開き、そのあとハジメの方を向いた。ヘファイストスファミリアの武器といえばオラリオが誇る一級品武器を作る。その中でも椿は己が作った武器を試し切りするためダンジョンに向かいレベル5まで登り詰めた鍛冶師。その椿が自ら武器を作らせて欲しいと言ってきた。数多くの冒険者が求める武器が、力が、手の届くところにあるのだ。

「先程お主らが店内に入った来たのを見てのう、まさか全く武器に興味を示さないとは思わなかったぞ。だが、だからこそお主の」

「椿、ちよつと待ちなさい」

「なんじゃ、まだ話しておるだろう」

「まだ肝心なことが言えておらずにムツとする椿。だが目の前にいるリユーがどういうわけかまた顔を赤くしていることに気づき改めてヘファイストスへ視線を向けた」

「ハジメが「そういう話はやっぱりキッチンと顔を合わせた時にしたいので、明日改めて話してください。今日はデートなので」って言っているの」

「そうじゃった、そうじゃった！主らはデート中じゃったな！！明日でもいつでも話を聞いてくれるなら手前は構わぬ」

改めて「デート」という単語を意識してしまったりリユーだった。

.....

「良かったのですか？聞きたいことがあったのでは？」

「そうですね、まあ明日来てもらうことになりましたのでいいですよ」

バベルを出るまでリユーの顔が赤いままだった。今は大分落ち着いたがやはり「デート」と単語はリユーにとっては心を大きく揺らすものだった。

しかしハジメとしてはこのデートが優先させるもの。聞きたいことがあってもそれは後回しにする。例え重要なことだとしても、今はこれが重要なことなのだから。

気づけばもう日が落ち始めており、そろそろデートも終わりに近づいていた。リユー

は今日仕事をお休みにもしてもらっていたがやはり人気のある所は常に人手が足りなくなる。特にリユウのように優秀な作業員なら抜けた穴は大きいものだ。

「すみません、私が防具を買いにいこうと言わなければこんなことには……」

「気にしてませんよ。まあ予定外なことはありましたがこれはこれでいいと思いますので」

「……………トキサキさん、貴方は一体何を考えて…………」

「あつ、そうです。実は最後に寄りたいたところがあるんですがまだ時間はありますか？」

「明らかな誤魔化しだが「大丈夫です」と返事を聞いたハジメはリユウと一緒にこのオラリオを取り囲む外壁の最上部へと向かった。ここからは街を全体から見渡すことが出来て、

「やっぱり夕日が一番綺麗に見えます」

「……………綺麗です」

オレンジ色に染まる街が、ゆっくりと黒へ変わる空が、ポツポツと夜の為にその人の

生活が感じれる優しい灯りが心を打つ。

だからなのか……いままで聞けなかったことを、言いたかったことを言葉に出してしまったのは、

「……トキサキさん、どうして貴方は……こんな私に構うのですか？」

「どうして、といいますと？」

「前にもいいました。他の女性と違い愛想もなければ好意を持たれることもない。私はトキサキさんに……好かれる要素を何一つ持ち合わせていない。

……それに何故私があの時ダンジョンにいたのか、その意味が、その行動が、その背景がすでにお分かりになっていきますよね」

ここでリユーが言おうとする「何故ダンジョンにいたのか？」は、ハジメが心配だったからを指している訳ではない。

もちろんあの時はそれが一番ではあるが今は、

《ただのウェイトレスがどうしてダンジョンにいるのか？》

《どうして18階層まで降りてこれたのか？》

《どうして冒険者のように強いのか?》

そして、もしリユースが冒険者だったのなら、

《どうして冒険者なのに「冒険」をしていないのか?》

その全てを分かった上でハジメは何も言わなかった。そしてそれを分かった上でリユースはあえてその答えを口に出した。

「私は、私の名は、ギルドの要<sup>ブ</sup>ラック<sup>ク</sup>リス<sup>ト</sup>ト一覧に載っています」

影が薄くてもその手を握ることは出来ます。

リユールは元々「アストレア・ファミリア」と呼ばれるファミリアに所属しており、宮探索以外にも違法行為を取り締まっていた。それは正義として行う正しい行いだつたのだが、同時に対立・敵対するものも多かった。

そしてある日、ダンジョンで複数の敵対ファミリアによる怪物進呈パス・バレードにより、ファミリアは自分だけを残して全滅してしまった。

その復讐を果たすために主神のアストレアを都市外へ逃がし、

「仲間を失った私怨から、私は仇である「ファミリア」に一人で仇討ちしました」

そう、敵対ファミリアへの闇討ちをたった一人で敢行した。

「あれはもう正義ですらなかった。復讐に突き動かされた私は、彼の組織に与する者、関係を持った者、疑わしき者全てに襲いかかりました」



これがギルドのブラックリストにも載ったことの顛末。行き過ぎ報復行為は一般人も含めて多数の無関係の人間も闇討ちした事で冒険者の権利を剥奪されてしまった。

「復讐を果たした私は、力尽き、誰もいない、暗い路地裏で」

多数の追っ手との戦いで瀕死の重傷を負って、

「血に濡れて、汚泥にまみれ……愚かな行いをした者には、相応しい末路でした」

復讐をやり遂げ、主神も、仲間も失った彼女を「生」に繋ぎ止めるものはなく、

「けれど……」

——大丈夫？

あの日シルのその温かい手が、汚れ切った彼女の手を取った。その後シルがミアに頼み込み豊穡の女主人の店員として向かい入れられた。

「詰まるところ、私は恥知らずで、横暴なエルフということです。」

だから私は、トキサキさんの好意を受け取るわけには、受け止めるわけにはいきません。このまま貴方の隣にいればいつか必ず私は貴方を不幸にしてしまいます。この手は、この身は、もう汚れきってしまった。だから——」

「むかし、むかし」

突然割り込んできたハジメに、一体何をと言おうとするがそれさえも言わせまいと話を続ける

「といってもそんなに時間は経ってませんが、ある少年とその家族がいました。」

その語りにリユーは言いかけた言葉を忘れてしまった。何故いまこのタイミングでと問いかげよとするがハジメは続けてこう語る。

.....

「その家族は貧しい生活を送ってはいましたが、いつも幸せでした。いつものように父が叱り、母が慰め、姉がちよっかいを出す、ありふれた家族で、大切な家族でした」

「姉はいつも言います。「いつまでも私に付いてこないの!!あんたも自分で「友達」を作りなさい」とまるで口癖のように言ってきました。それでも離れたくはなかった。姉のような人に少年はなりたかったから」

「しかし、ある日姉が夜遅くになっても帰ってきません。前日少年と姉がいつものように喧嘩をしました。そしていつものように姉から叱られました。だから何でしょうか、次の日になると少年は姉に付いていかなかったのです。

心配になった両親は必死で姉を探しました。少年も一緒になって探しました。どうして姉に付いていかなかったのかと後悔しながら。しかし姉は見つからずにただ時間だけが過ぎました」

「二週間後、ある冒険者がいいました。「もしかしたらあの女の子が……それならダンジョンで見かけた」と。ありえない話でした。姉は冒険者ではなく一般人だったから。しかし情報がない今それにすがるしかありません」

「両親は家にある全財産をその冒険者に渡して「娘を探してください」と頼みました。初めは渋っていた冒険者ですが姉の搜索を手伝ってくれることになりました。ただその冒険者と姉だという確信もありませんでしたので、両親が荷物持ちとして一緒にダンジョンに潜ることになりました」

「その冒険者の所属するファミアは大きく、大人数での搜索をしてくれました。両親から留守番するように言われた少年でしたがあの時の後悔をしない為に、自分で姉を見つげるために、見つけて喧嘩のことを謝るために、荷物に隠れて一緒にダンジョンへと向かいました」

「冒険者が見かけたのは16階層。もしかしたら18階層にいたのではないかということでした。それでもダンジョン内部を広範囲で搜索してくれました。しかし目撃した16階層でも姉に繋がるもの一つさえも見つかってませんでした」

「そして17階層へ到着した少年の前には」





……

……

……

「それからは本当に地獄絵図でした。何人も何人も冒険者が無惨にも死んでいくなか、両親は少年を連れて必死で走りました」

「だけどやはり一般人。冒険者とは違い18階層への穴にたどり着く前にゴライアスが冒険者を殺し尽くしたあとに3人へ攻撃を始めました」

「力無きものがそれを喰らえば、いや余波でさえも死んでしまうその攻撃が向かってくるときはもうダメだと思いました。しかし両親は諦めませんでした。息が切れて身体がボロボロでもう倒れそうな状態でも、最後まで諦めませんでした」

「結果からいうと少年だけは助かりました。攻撃が当たる直前に穴へ投げられた少年は無事に18階層へ到着したのです」

「だけど両親は、少年を投げた両親はその時優しい目をして「お姉ちゃんを頼んだぞ」と言い残して土煙に吞まれました」

.....

「それから少年は18階層で生きていきました。誰にも見つからないように息を潜めて、冒険者が食べ残した残飯で命を繋ぎ止め、冒険者やモンスターに殺されないように木の上で寝て、姉が見つかるまで18階層で生き続けました。

しかし何年たっても手がかり1つ見つけられませんでした。それを意識してしまった少年は絶望に襲われ自殺まで考えるようになりました。

「ただどしなかった。少年にはある言葉があった。両親と、そして姉からもらった言葉が少年を「生」へと繋ぎ止めました」

『いつまでも私に付いてこないの!!あんたも自分で「友達」を作りなさい』

『お姉ちゃんを頼んだぞ』

まるで姉が自分がいなくなっても、少年を支えてくれる人を見つけるようにいつてく



れたように。

両親が絶望ではなく、僅かな光でもそれを希望として生けていけるように。

少年はこのダンジョンに来たと同じように冒険者の荷物に紛れて数年ぶりに地上へと戻ってきた。しかしその数年が我が家を壊して、思い出の場所も建物などが建ち面影さえもなくなっていた。

それでも少年は諦めなかった。姉が言っていたように友達を作るために、両親が言っていたように姉を見つげるために。

その少年は、冒険者になったのだった。

その壮絶な少年の話にリユーは何も言えなかった。いや口出すことが出来なかった。それでも辛うじて言い出せた言葉は、

「……どうして、どうしてそんなに強いのですか？」

「強くないですよ。それに僕がそんな風に見えるならリユー姉もその強さを知っている。だったらリユー姉も強いです」

「そ、そんなことはありません。私は、私の心を抑えることが出来なかった。激情から

れて復讐という許されないことをしてしまったのです」

「だから僕と一緒にいられない、ですか」

自分で告げたことだというのにハジメから言われた言葉に衝撃を受けてしまった。しかしこれでいいのだと言いかせ

「私は罪人つみびとです。この罪を背負って生きていけません。この罪があるかぎり私は幸せになつてはいけません。私は」

すると突然ハジメはリユウの頬を両手で挟み込んだ。それによりうまく発音出来なくなつたりユウは戸惑いどうしたらいいのか分からなくなつていた。

「そんなことを言わないで下さい。シル姉はミア母さんはきつとリユウ姉が幸せになつてほしいと願つてます。そのツライ過去があるからこそ人一倍に幸せにと。それでも自分が許せないなら、やっぱり幸せになるべきです。」

罪を背負い意識して生きることは辛いですが、でもさらに幸せを噛み締めたうえでその罪を背負うことはもっと辛いです。厳しいことを言っていると思いますが罪を背負

うだけならリユー姉が所属していたファミリアの皆さんは納得しないと思いますよ。

罪を忘れるなんて、その手で殺めた人を忘れるなんて、過去を忘れるなんていいません。ただその手で幸せを、シル姉がリユー姉の手を取ったように、リユー姉が手に取りたいものを取ってもいいんですよ」

ハジメはその両手を頬から離して、そのままリユーの両手を握った。冒険者だったとは思えない小さく守りたくなるような手。その手を握られたリユーは

「……いいんでしょうか、こんな私が」

「はい」

「幸せを、温かさを求めても」

「はい」

「私は、私は一人で生きなくてもいいんですか。シルやミア母さんと一緒にいても……トキサキさんと一緒にいても」

「はい、いってください。」

そして、リユー・リオン。僕は貴方の傍にいます」

不思議と涙は流れなかった。こんなにも嬉しいというのに、トキサキさんの腕の中で感情が高ぶって瞳から溢れそうになったのに流れることはなかった。きつと心の何処かでこうなることを望んでいたのかもしれない。私の大切な人の傍にいたいという、この幸せを手にしたいと望んでいたからと。

.....

「すみません、こんな時間まで」

「いえ、ここで大丈夫です」

結局夕日が沈み空が闇に染まるまであの場所にいた二人。すっかりと夜になり少し離れた場所からでも聞こえるほどにすでに豊穰の女主人は賑わっているようだ。

「今日は本当にありがとうございました」

「いえ、なんかデートらしいことは出来ませんでした」

「なら良かったのでわ？ 私は買い物に付き合っただけですから」

「そうでした、今日は買い物でしたね」

お互いに苦笑をする。変わらずに無表情なハジメだが気持ちは自分と同じだと思っ  
ている。

「それではリユー姉、また明日」

そういつて去ろうとするハジメの手を、リユーは温かさに触れたその手でハジメの手  
を掴んだ。

「リユー姉？」

「私が最初に手を振り払わなかったのは、貴方で三人目です」

——なに、名前はリユー？ 言いにくいわね、今日からあんたのことをリオンって呼ぶ  
わ！——

一人目は、自分を「ファミリア」に誘った活発な少女の冒険者。

——大丈夫？——

二人目は、冷たくなっていく自分に温もりを、居場所を与えてくれた心優しい酒場の少女。

そして、三人目が……

——はい、いてください。

そして、リユー・リオン。僕は貴方の傍にいます——  
私に幸せを教えてくれた、いつまでも傍にいてくれると言ってくれた無表情な少年

「私のことは、「リユー」と呼んでください

私は「ハジメ」と対等でありたい」

「リユー姉」だとハジメと同じ道のりを歩けない。一緒に歩くのならとまずは呼び方からだと考えたようだが、

「はい、「リユー」。明日は早めに出勤してきますから一緒に買い物にいきましょう。確か「リユー」が言ってきた物が無くなりそうでしたから。そうです、お店が終わったら今度は僕が「リユー」の為に料理を作りますね。二人ともお休みが会ったときは今度は

デートをしましょうね「リユー」

まさかの連続で名前を言われると思わなかったリユーは今までの中でも一番の真つ赤な表情で、

「貴方はもう少し遠慮ということを知るべきです!!」

前のように殴るわけもなく、本当にただの女の子のようにピイツと視線を外して、身体を豊穡の女主人へ方向へ向けて歩きだした。

その姿をただ眺めていたハジメはリユーの姿を見えなくなるまでその場に立ち尽くしていた。

time3 変わったものを無くさないように。

影が薄くても出会いのキツカケってこんな感じみたいです。

サポーター。ダンジョンの探索時における非戦闘員。

主に魔石やドロップアイテムといった戦利品を回収し、地上に無事に運び届けることが役目。

前線でモンスターと戦うパーティーに負担をかけぬように、バックアップの全般を担う裏方役。

詰まるところ、サポーターとは、荷物持ちだ。

「おい、何してやがる！ とつととしろ！」

「荷物を運ぶくらいでちんたらしやがって、能無しが！」

膨れに膨れた大荷物を背負い、僅かに遅れた足取りを、冒険者である男は唾棄するよ



うに責めた。

ただの荷物持ちと非難する、傲慢な言葉は横暴な暴力にも変わる。常に上の立場にいる彼等は下敷きにされる者に痛痒つうようなどは覚ええない。

冒険者はサポーターを顧かえりみない。

ましてや、専門職せんもんしやくのサポーターなど嘲弄ちやうろうの対象でしかありえない。

「碌に仕事もこなせねえ足手纏いに、くれてやる報酬かねなんぞねえぞー！」

「いいか、モンスターに囲まれた時くらいはしっかり仕事しろよ——サポーター役立たず？」

いざとなればモンスターの囿かこにちようどいい。

サポーターのありがたみを、サポーターの存在が冒険者の負担を軽くする一役を買っていることを、そんなことを一抹でも理解してくれる冒険者が、認識してくれるような殊勝な冒険者が、一体どこにいるのだろうか。

(なるほど、なるほど)。

本当に、見限るのに困らない奴等かたがただ。

冒険者というのは)

.....

黄昏の館、ロキの私室。

そこには神であるロキ、ヘステイア、ヘファイストス。

そして各主神のファミリア代表、フィン、ハジメ、椿。

いまからここで話し合う課題は、

「ハジメ君の武器を作ってくれてくれるって本当かいヘファイストス!!!」

「私じゃないわよ、作るのはこの子」

「だとしてもやヘファイストスじゃないとしても団長が作る武器やで。レベルーやというのに……ホンマにハジメは規格外やなー」

神である三人は元々知り合い・腐れ縁なのですぐに打ち解けるだろうが、

「ふむ、こう姿を見えるとなんとも普通だな」

「はい、普通が取り柄みたいなものですから」

「……………君が普通というのは僕には到底思えないよ……………」

なんか妙な空気の中でも普通に会話しているように見えるが、フィンにいたっては普段はしないツツコミ側に周りすでに疲れている。

「でもいいのヘステイア？この話はロキに教える必要はないはずよ。いくら居候しているとはいえ、ファミリアに関わる話になるのよ」

「別にええやないか、口外することはせんよ」

「ロキ、そういう問題じゃ……………」

「うちらの子やつて結構な情報を教えたんや。お互いに口外しないならええやろ」

「あなたね……………」

頭をおさえるヘファイストスにヘステイアが苦笑いでフォローをいれる

「いいだよヘファイストス。ロキはともかくこつちの団長さんは信用出来るからね。もしもの時はキチンとしてくれるよ」

「ヘステイアがいいなら構わないけど……………」

でも気を付けることよ、いくら信用出来ても「ファミリア」関係に絶対はないから」

「せっかくまとまったところにいらんことを言わんでもええやないか〜」

「そんな風に軽いから言わざるをえないのよ」

「「確かに」」

「おい」

「ここで一致団結したことで「なんでうちだけが除け者なんやー!」と騒ぎ立てていたが、ヘファイストスはもう止めるのも面倒くさくなつたのか無視して話を進めた。

「改めてトキサキ・<sup>ハジメ</sup>一。貴方の武器を「ヘファイストス・ファミリア」で作らせてくれな  
いかしら?」

「どうしてツバツキーは僕の武器を?」

「おい、ツバツキーとは手前のことか!!?」

「はい」

「……もう好きせえ……」

あまりにもハツキリと言われて拒否するのも馬鹿馬鹿しくなつた椿はため息をつい

た後、気持ち切り替えて話を進める。

「それでどうして僕に武器を？」

「ど、どうして……じゃと……」

手前が、手前が自身を言うのも可笑しいが手前は主神様の次の腕前じゃ。それをどうしてとは……分かっていたとしてもこれは……」

自分の力量をキチンと分かっているからこそ、こんなにもハッキリと言われると堪える。そんなことを知らずにハジメは――

「どうしましたか？」

「……普通なら一級冒険者でもなかなか手が届かない手前の武器を……手前自ら作ってやろうと言っておるのだぞ！」

そうなんですか？と聞こうとしたがその前に椿が「これでもか!!」と言わんばかりに持ってきていた大きな袋の中からあるものを取り出してテーブルの上に置いた。

「これを見てどう感じる?」

それはごく普通の短剣のように見えるが、誰もが見ても超一級武器だということはここに誰もが分かった。派手な装飾はなく、しかし短剣から伝わる存在感が、下手に扱えば己さえも切られるような殺気を感じる。

だけど誰もの中にはハジメは含まれていなかった。

「短剣ですよね」

「他に言うことがあるじやろう!!」

「……………普通ですよね」

「お主は本気で言っておるのか!!!」

いくらハジメが武器に対して無関心だとしてもこうも反応がないと腹が立つ。理屈ではなく感情が、プライドが許さないのだ。

「落ち着きなさい椿。最初から分かっていたことでしょう」

「し、しかし……これは……これは、あんまりではないか……」

「もう……だから止めなさいって言ったのよ……ほら、これから見返せばいいのよ。樁の武器が最高だって言わせればいいのよ」

「……………そうじゃな。よし!!絶対に見返してくれるわ!!」

まずはハジメに合う武器を見つけ出さなければならんな!!」

改めて意気込んだのはいいが樁は大きな袋から次々に武器を取り出した。武器に興味ないハジメがどの武器が合うか分からない今はとにかく手当たり次第に触って経験してもらうことが一番いい。だが樁はまだ知らない。ハジメに合う武器を探しても、いくら一級武器を作ろうが……ハジメには意味がないことを。

……………

「な、なんじゃそれは…………」

「あ、あり得ないわ……本当に鍛冶師泣かせじやないの…………」

樁・ヘアアイストスが目の前の現実を受け止められずにいた。そこには樁の傑作と言える武器が、長剣・短剣・大剣等やブーツや籠手などのあらゆる武器が勢揃いしている

なかでその全てが輝きを失っていた

「安心してください。触れてさえいなければ一時停止を解けますので元に戻ります」  
「…なるほど、これじゃ武器や防具が意味を成さない」

ハジメが手に取る武器全てがその存在を止められた。触れば何もかも切り裂くような剣も、硬いものでも粉碎する籠手でも、その武器にある力のようなものが、輝きが、その存在が止められていた。

「これは見事にガラクタになつとるなー」

「武器を必要としない。ではなく必要と出来ないというわけか」

「無意識による一時停止スキルが働いているので、僕にはどうしようも出来ません」

「……………それはホンマか？」

ロキの瞳がハジメを捉える。何かを確信しておりそれを確かめようと、それを聞き出そうとしているそんな鋭い目をしている。



「確かに無意識よる一時停止やからどんな不意打ちでも対応出来る。無意識やから触れたものは一時停止させてしまう。意識しとるわけやないから原因は分からない。せやけど全部が全部一時停止させとるわけやない。さっきまで飲んでいた茶は一時停止しとらん。それは自分に危害がないから一時停止が働かなかつたとちゃうか。なら自分に危害を与えない武器ものにどうして一時停止が働くんや??」

「ハジメはそれを知っているハズや。いや理解している、本能で感じとるはずや。無意識というの意識しとるより質が悪い。意識なら自分でどうにかできるけど無意識は自覚がない。つまりは本能で動いとるわけや。反射神経がいい例えやな、無意識に身体が動くてそれを意識して止めることは出来ん。つまりは、」

答えを告げようとするロキに割り込んで、本人であるハジメが口を開いた

「無意識で武器を一時停止させている、つまりは心の奥底から武器を必要としていない、もしくは武器そのものを否定しているということですよね」

「お疲れさまです」

「随分と早かったじゃないか。今日は遅れるんじゃないのかい？」

「原因は分かっただけですけど、それをどうすればいいのかわからない。そんな状況になりましてどうすればいいのかわからなくなって保留になりました」

「なんのことかわからないけど、その分わからないことが大切なものならちゃんと解決しな。さあ、さっさと着替えて働きな!!今日のリユーは使い物にならなくてこっちは困ってるんだ!!」

そういいながら豊稷の女主人のミアは厨房へと戻っていった。

ハジメが触れた武器全て元通りにはなっただが、その後話し合いは続かなかった。根本的に武器を拒否している、そんなことを告げられた鍛冶師の二人はシヨックを隠せなかつた。

ハジメがベルに貫つた短剣も刀身は死に、ゴライアスを倒したときも短剣ではなく<sup>一時停止</sup>力業で倒した。ベートと戦ったときも武器ではなく<sup>一時停止</sup>道具を使った。ハジメは一度と武器を必要としていなかった。

「お疲れさまですハジメさん」

「シル姉、お疲れさまです」

「ねえ昨日リユーになにしたの？ずっと上の空で何回も仕事をミスしてるの。絶対に昨日のデートで何かあったと思って聞いても核心的なことを話してくれなくて」

「それは…」

と、言おうとした時シルとハジメの間にお盆が物凄いスピードを上げて通りすぎ、そのまま壁にめり込んだ。そのお盆が飛んできた先にいたのはいつものリユー、いや何か威圧感があるリユーがそこにいた。

「すみません。手が滑りました」

「リ、リユー??これ手が滑ったところの話じゃ…」

「すみません。手が滑りました」

これ以上深追いするなど言っているように、「すみません。手が滑りました」という短い言葉に強い警告を込めている。それを感じ取ったシルは「わ、私仕事に戻るわね…」とその場を離れていった。

「お疲れさまです、トキサキさん」

「お疲れさまです、リユース姉」

その言葉だけを交わしてリユースは仕事に、ハジメは着替えに向かった。まるで周りに見せつけるように、昨日は何もなかったと印象づけるように。

だが逆に周りからは「ちよつ、ちよつと二人かなりヤバイんじゃない!!」「なんで険悪な雰囲気出しててるニヤー!!」と仲が良くなるどころか悪くなつたと思われることになつたが、そんな二人に周りはどう聞き出したらいいのかと分からずに開店時間を迎えていつも通り慌ただしい仕事が始まつた。

.....

仕事が終わリハジメはいつも通りに帰宅していたが、その隣には落ち込んでいる人が、いつもよりよそよそしかった人がいた。

「今日はすみませんでした。どうも仕事場では、その、ハジメとは呼びづらくてですね

……」

「大丈夫ですよリユー。それよりシル姉とミア母さんが僕達二人がケンカしてるのでは  
と思ってますよ」

「私的にはいまはその方が……いえ、仕事に私情は禁物。……明日私から話しておき  
ます」

そこでため息をつくりユー。昨日の出来事が影響していることは明らかだがそれを  
言葉に出すのは恥ずかしく、つい高圧的な態度に出してしまったリユー。それを分かつて  
いた上でリユーに乗ったハジメもこれ以上刺激しないように昨日ことは話さない  
ようにしている。

「それでハジメの武器はどうなったんですか？」

「うーん、どうなんでしょう？ 作ってくれるようですが僕が使えるかは話が別みたい  
な感じですよ」

「……それだけでどんな事があつたか想像出来ませぬ。やはり一時停止は良くも悪くもハ  
ジメに大きな影響を与えたのですね」

それ以上はお互いに言葉を出さなかった。「一時停止」がどういうものか、リユーにもハジメにもおおよその検討はついていた。だがそれを言葉にすることはしなかった。お互いに分かっているからこそ踏み出す必要はないと感じれたから。

すると路地の曲がり角からふっと小さな影が目の前を通り過ぎた。一瞬だったので、なんだったのかは分からなかったがリユーにはそれが見えたように、

「あれは…小人<sup>バルウム</sup>族??」

「よく見えましたね……」

すると今度は同じ所から冒険者らしき人物達がさつきのパルウムを追いかけるように通り過ぎた。どうやら何かトラブルがあったようだ。こういう時は関わらないようにするのが一番なのだが、

「数人で追いかけて回すなんていけませんね」

「…やっぱいいかれるんですね」

はあーとため息をつくりゅー。知り合いでもない、もしかしたらファミリアのいざこ

ざかもしれない。ここは関わらないのが一番だが、ハジメが動き出したら止められない。それこそ一時停止をもつても止められないだろう。

影が薄いといっても女の子の部屋に無断侵入はいけません。  
ん。

「追い付いたぞ、この糞。パルウム!!」

「手こずらせやがって!!」

「もう逃がさねえ!!」

路地裏の行き止まり、運悪く追い込まれたパルウムの子は冒険者達に囲まれて怯えていた。体格のいい比較的大きい剣を背負っている男が三人の真ん中に立ち、左右はごく普通の体格だがそれでも短剣などの武器を持っている。

「もう逃がさねえからな………ッ!」

今にでも襲いかかりそうなほど怒り悪魔のごとき表情をしていた。それでも襲いかからないのもう追い詰めたと分かってなのか、それともじつくりと恐怖をあたえるためなのか、それは分からないが男は目の前で怯えているパルウムの子に手をあげようと



迫る

「止めなさい」

が、その手がパルウムの子に届くことはなかった。

芯のこもった鋭い声が、場に割って入ってきたのだ。

はっと振り向いた男の目に映ったのは「爆裂」だった。

「う、うわあああああああ!!!」

とつさに腕を顔の前で重ねてそのまま座り込んだ。見たものは木箱が爆発している瞬間だった。反射的に体が動き少しでもダメージを生き残る為の手だてをと動いたのだが、一向に衝撃が、爆音が、痛みが襲ってこない。

もしかしたら気づかない内に死んだのかと思い恐る恐る目を開いてみると、

「……はっ?」

一瞬の出来事が、死さえも覚悟した光景がなくなっていた。木箱も爆炎も爆音も衝撃も何もかもなくなっていた。

一体何が起きたのか？と呆然としている間、5分弱の間は追い詰めたはずのパールウムの子がいなくなっていることに気がつかなかった。

.....

「上手くいきましたね」

「あんな使い方もあったのですね」

「これが本当のビックリ箱です」

相も変わらずに無表情だが何故か今はそれがどや顔に見えてしまい、これ以上何かを言ったら負けだと思ったリユーはこの話を切り捨て、何が起きたのか分からずに放心状態であるパールウムの子に話しかけた。

「大丈夫ですか？」

「.....は、はい.....」

「今は動揺して的確な判断は出来ないでしょうが、貴女はもう助かりました」  
「……あ、ありがとうございます……」

助かった現実を言ったことにも関わらずにパルウムの子はいまだに放心状態だった。それもそうだろう、冒険者達に追い詰められ暴行されると思った瞬間に「爆裂」を見てしまった。死を覚悟したパルウムの子は目を力一杯に閉じて、迫り来る恐怖、現実から逃れようとした。

だがいつまで経ってもいまだに現実にいる感覚があった。ゆっくりと力一杯に閉じた目を開けてみると声をかけてきたエルフがいた。

そのエルフからもう助かったと言われても何がどうなったのか、何が起きたのかと頭の中がぐちゃぐちゃになり上手く整理がつかない。

「良ければ何があったのか教えて下さい」

「い、いえ……大丈夫です……」

「しかし……」

「本当に大丈夫です!!ありがとうございます……」

そういつてパルウムの子は逃げるかのようにその場を去った。そしてそれがリユーに更なる疑問を増やす。

(冒険者に複数で追われることなど、そしてあの態度。必ずしもあの冒険者が悪だとは言い切れないということですか……)

リユーの考えはあのパルウムが冒険者達にキレられ追いかけて回されるほどの何かをしたということ。そしてそれは他者には知られたくないということ。リユーから見た被害者であるパルウムでさえも。

「どうしましょうかハジメ?」

後ろへ振り向くとそこにいるはずのハジメはおらず、変わりに壁に置き手紙が、正確には一時停止で硬化された紙が壁に突き刺さっていた。リユーはそれを引き抜き書かれた内容を確認する。

「あの子が気になりますので追いかけます。この埋め合わせは近い内にしますので。」

そしてそのカードの裏面には「どんなことがあってもこれを出せば何よりも優先させます。」と書いてある。それを見たリユーはクスツと笑い

「こんなことせずとも私は気にしてませんよ」

誰もその声は届かない、聞く人はいない。それでも無意識にその声をその人に伝えたかったのかもしれない。

.....

「…何だったんでしようか、あのエルフは……」

月の光も、街の明かりも、部屋の灯火さえもなく、荒れた部屋の片隅で座り込んでい

る。  
あまり覚えてないがあのと誰の声か聞こえたあとに爆発が……

それを思い出すと体が恐怖で震える。これが夢だったなんてやっぱり信じられない。

「ただあの爆発の中自分はどうして無事だったのか？例えあのエルフが助けてくれたとしても無傷なはずがないのに……」

「なにも分からない。あのときは無我夢中だったが冷静になったいま、あの冒険者にやられそうになったことや突然の爆発が……思い出せばこれまでどうしてこんなにも辛い目にばかり合わないといけないのか……」

「どうして自分だけがこんな目に合うのか……どうして、どうして、どうして、どうして……」

「……もう……いや……」

「頭の中がぐちゃぐちゃで、何もかも投げ出したくて、でもそれが出来なくて……誰もいない部屋で一人、膝を抱えてすすり泣きが、静か深く部屋に響き渡る。」

「……………っ、いつの……………間に……………」

いつの間にか寝ていたようで頭が覚醒しないままリリは目を開けようとしたが何故か瞼の向こうが眩しい。それでもゆっくりと開いた瞳が見たのは闇を切り裂くような光だった。だがリリの部屋には元々外からの光が届かない。なのにどうして……………

「……………エッ??!」

何が起きたのか理解出来なかった。いま自分がいる場所が、あの廃墟と言っているほ

どの部屋が、普通の部屋に変わっていることに。

すぐさまリリは玄関を出て自分が置かれている状況を把握することにした。もしかしたら誘拐でもされたのかと過つたからだ。しかし玄関を出た外の景色は変わらずに、振り替えればやはりリリが住んでいる廃墟と化した建物だった。しかし自分の部屋に戻ってみるとやはり綺麗になっているごく普通の部屋。

「何が……起きたんでしょうか……」

これは夢じゃないかと頬をつねるが痛みはあり現実でもあった。ではこの部屋の変わりようはどう説明すればいいのだろうか??一通り部屋を見渡し調べてみたがりりの物は全てあり、それどころか必要最低限のものさえも用意されてあった。

「こんなことをして……何が……」

何が目的なのだろう??と言葉にしようとしたがその時フツとテーブルに置いてある用紙を手にとった。



「女の子がこんな部屋で生活するなんていけません。勝手だとは思いましたが部屋をキレイにさせてもらいました。P. S. 失礼かと思いましたがダンスの中を整理させてもらいました。で、あまり背伸びせずに年齢に応じた下着を…」

「余計なお世話です  
!!!!!!」

用紙をぐしゃつと丸めて床に叩きつけるリリ。さつきまで悩んでいたことが一気にぶっ飛ぶほどの怒りが沸き上がってきた。今日は色々あったはずだったのにいまリリの中ではたった1つしか思い付かない。

「…何処の何方か知りませんが絶対に一発殴ってやります  
!!!!!!」

影が薄くてもその反応が薄いのはおかしい。

ダンジョンの5階層は1階層から4階層までとは異なりモンスターが産まれる間隔インターバルが比べ物にならないほどに短くなり、4階層までで緊張感が揺らいだ多くの駆け出しの冒険者が屍と化す。

物足りないといつて易々と下層へ進出してはならない。冒険者の素養となる経験や武装や機転などあらゆる面全て求められるのだ。

つまりは駆け出しの冒険者にはまず地道な力の蓄えが求められる。

「……………ふっ!!」

それが新米冒険者であり普通なのである。

いまこのダンジョンの7階層で一人の冒険者もまた新米冒険者。

そんな冒険者が戦っているのはキラークラント。4本の足に2本の細い腕、赤一色に染まってるその姿は蟻を連想させ、体を覆ってる外皮は鎧のように堅く、ゴブリンのような低級モンスターとは比べものにならない攻撃力を持つ。そのため冒険者の間では『新

米殺し』と呼ばれている。

そう、いま新米冒険者が戦っているのは新米殺しと呼ばれるキラアアントであり、それも1匹ではなく4匹も出現している。それもこの新米冒険者はパーティーを組んでいるわけでもなく一人でダンジョンに潜っていたのだ。

一人で7階層など自分の力を過信しすぎたバカなのか、または自殺願望者なのか。どちらにせよこのキラアアントに出会ってしまったら逃げることに。例えなんとか1匹倒せたとしてもすぐに出現するのだ。

そんなキラアアントに囲まれた冒険者。このままでは殺られるのも時間の問題だと思われる。

「……………まずは、間接部分を……………」

しかしこの冒険者は冷静にキラアアントの細い腕の間接部分を短剣で、襲いかかるその腕からスピードを生かした回避行動をした後にまるで大岩を割るような力強い攻撃を打ち込んだ。すると鎧のような外皮は破れ細い腕ごと切り落とした。切られた痛みによるものなのか、切られたことに対する激怒なのか、耳を塞ぎたくなるような騒音がキラアアントから放たれる。

「……………落ち着いて、次の行動を……………」

冷静を保ったまま冒険者はキラアアントの足をスピードとパワーで切り落とし、ぐらついた一瞬を狙ってキラアアントの首に目掛けて短剣を振り落とし、

その一撃によりキラアアントは絶命し、風化した後に残ったのは魔石だけになった。

「ふうー。後は……………これを軸にして攻撃を……………」

独り言をいいながら襲いかかってきたキラアアントの攻撃を最小限の動きで回避し、さっきの力強い攻撃ではなくキラアアントに与えられる最小限の攻撃力で首に攻撃を行い倒してみせた。

「……………よし、これなら大丈夫そうだ……………」

自分の力を確認したように掌を閉じたり開いたりして、もう一度同じ行動をしたあと、ジリジリと近寄ってくるキラアアントに目を向けた。ゆつくりと息を吸って吐いたあ

と新米冒険者は「ベル・クラネル」は走り出した。

.....

「ベルベルが7階層ですか……」

「ああ、私達が保証しよう。いまのベルなら12階層までなら問題なくいけるだろう」

黄昏の館の庭にはオシャレなテーブルと椅子があり、そこには一番似合うだろうリヴェリアと、真逆に似合うどころか周りからは姿が見えなず感想も言ってもらえないハジメが座ってお茶をしていた。

「リヴェ姉にそういつてもらえるなら心配はいりませんね」

「しかし、ハジメといいベルといい……」

「なんですか？」

「いや、何でもない……」

それ以上は言葉に出来なかった。ハジメの一時停止にはリヴェリアや他の皆も驚か

さればつなしだ。だがヘステイアファミリアにはもう一人いたことに気づいた。

ベル・クラネル

ヒューマンにしても小柄でありあの性格と容姿は誰も一目では冒険者なのかと疑うだろう。だがリヴェリアは知ることになったのだ、この前の訓練の中でどれだけ成長したのかを

(あれは…あれは普通の成長ではない。確かに私やベート、ガレスやフィンが指導をしたが…それだけで、たった数時間でlevel2近くまで成長するなど…ありえるのか??)

初めは何ともいえない素人感が分かる戦い方だった。それでもスピードがあったので今までやってこれたと見ていた。だがベルを指導を初めて数時間後、どれだけ教えたことを吸収出来たかとテストしてみれば……

(経験はステイタス更新しなくともすぐにでも応用出来る。だがそれだけであのベートの攻撃を受け流すことなど出来るのか?)

あの時は誰もが驚いた。本気ではないとはいえベートの攻撃を避けただけではなく受け流したのだから。もちろんそれにムカついたベートはベルに一撃を加えたのは言うまでもない。

これはリヴェリア達も、ハジメもベル本人も知らないことだがベルのスキルリアリス・フレゼ憧憬一途は、誰かを想う限り驚異的な速度でステイタスの上限すら越えて成長させてくれるレアスキル。しかしあの時はステイタス更新もしておらず成長するわけがない。そうあの時のベルの成長は…

(……うらやましい限りの才能を持っている……)

スキルでもなくベル自身の力。だからこそ驚かされる。ベルといいハジメといい、スキルだけでなく自分自身の手で成長していくことがともうらやましく思える。

余談ではあるがその訓練後にステイタス更新をしたヘステイアはあまりにも成長した姿数値を見て気絶したという。

「どうしたんですか??さつきから嬉しそうな表情をしていますが……」

「いや、私も負けていられないと思ってな」

ハジメ達と出会ってから何度驚かされたことか。アイズやベート達もいい刺激を受けているようであり、少なからずリヴェリア自身も気持ちが高ぶっている。ある程度levelが上がれば急激な成長をすることもなく、その時の喜びを忘れていたのかもしれない。

ステイタスだけが成長ではない。それを自分がよく分かっていたつもりだったが、いやまだまだだと再認識させられた。

「あつ、そうです。リヴェ姉に聞きたいことがあつたんですが」

「聞きたいこととは?？」

「年齢に応じた女の子の下着を選びたいのですが、アドバイスしてくれませんか?」

「……………」



数時間後、ダンジョンから帰って来たベルが目にしたのは黄昏の館の周りに大量の火柱が上がり、そして本当の柱のように聳え立っている景色だった。

そして必死に謝っているリヴェリアの姿と、聳え立つ火柱を見て呆然としているロキと、この火柱を有効活用出来ないかと考えているハジメの姿はまさにカオスだったという。

.....

「何を間違えたのでしょうか？」

「間違えだらけだよ!!」

「しかもセクハラ紛いなことをよりによってリヴェリアに聞くとは……」

「俺はこんな奴に……」

あの火柱をそのままにするわけにもいかず、火柱の周りを改めて一時停止で囲み火柱にかかった一時停止を解除。これにより入る火柱は黄昏の館を焼くことはなかったが、リヴェリア自身はかなりの精神的ダメージを受けていた。「まさか……私が……」と呟きながら仲間を支えられ部屋に戻っていく姿はレアだとも見たくないと誰もが呟いた。

女性陣はリヴェリアを見てもらうことにして、男性陣は事情聴取ということで集まったのだが

「でもなんでそんな事を聞いたのハジメ??」

「昨日パルウムの女の子の自宅を掃除・リフォームしていたんですが、その時にこの下着はこの子には合わないと思ひまして……」

「ちよつ、ちよつと待つんだ!!」

「……………それはその子の了解を得ているのかい??」

すると無表情なのに、何故かキョトンとしたように見えたのはこんな台詞を放ったからだ。

「僕、影が薄いですから」

空気が、凍った。

「無断侵入したの?!?!女の子の部屋に!!!」

「……………ダメだ…これは女性陣には聞かせられない…………」

「てめえマジでふざけんよ!!!」

「なかなか肝っ玉が据わつとるの」

あまりにも異常な行動に頭を抱える二人と、俺がこんな奴に負けたなんて…ふざけんな!!とキレている者と、まるで酒のつまみのように余興を聞いているように笑っている者。

これを見て自分が何を仕出しかしたのかやつと分かったようで、

「分かりました。これは経験あるリヴェ姉ではなく同じ年齢ぐらいの」

「女の子に聞くこと自体が間違ってるの!!!」

そして無断侵入はもう犯罪だから!!!」

「……………ああ、なるほど。親切にしたつもりでしたが大きなお世話だったわけですか」

「間違つてはいないが…反省する点はずれている……」

本当に理解しているのかと疑いたくなる。

すると「あつ」と何かを思い出したベルは気になることを話し出した。

「そういえば今日シアンスローフ犬 人の女の子からサポーターはどうですかって言われたんだけど、

ハジメにサポーターしてもらってるし相談してから決めるから明日またバベルの前で

会おうって約束したんだけど……」

「断らなかつたんですか?」

「だつ、だつて…なんか困つてたから……」

「相変わらずベルベルは優しいですね」

そう、ベルは優しいから誰だって助けようとする。だから周りの人は巻き込まれるのだ。それもこの先厄介なことに発展するなんて思いもしなかった

「だから……ええーと、ハジメにも会ってほしいんだけど……」

「……………はい？」

影の薄さが暗躍には向いてます。

「あれベル様？今日はベル様のお仲間を紹介してくださいるのでは？」

「それが……逃げられて……アハハ……」

「そうなんですか、そのお方照れ屋さんなんですネ」

「そ、そうかも……アハハ……」

ベルはバベルの前で待っていた犬シアンスロープ、人の女の子、リリルカ・アーデにハジメを紹介するつもりだったがここにハジメはいなかった。

「まあ、それなら仕方ありませんね」

それで今日はどこまで進みますでしょうか？」

「そうだね……昨日結局9階層までしかいけなかったから、今日は11階層まではいきかない」

その言葉に営業スマイルのリリの表情が固まった。それに気づいたベルは自分が「あれ？おかしいこといったかなー？」と不安になってきた。案の定リリはその固まった表

情のままにベルに聞き直した。

「すみませんベル様。ちよつと疲れていたのか上手く聞き取れませんでした。何階層まで進まれるんですか？」

「……え〜と、出来たら1階層まで……」

「ちよつ!!何を考えてるんですかベル様!!?」

「ひいっ!!」

まさか女の子からこんな風に怒られるとは思っていなかったベルはリリの迫力にビックリした。一体何を間違ったのかと思ひ恐る恐る聞くことにした。

「ど、どうして……怒っているの?」

「どうして?どうして……って何を言ってるんですか!!」

ベル様とリリはまだlevel1なんですよ!それを1階層なんて自殺行為にし受け取れません!!

いいですか、1階層にいくとするなら少なくともパーティー3人以上でlevel2が一人いないといけません。それを二人でいくなんて……何を考えているんですか!!!」

確かにlevel1が11階層になんていくのはおかしい。せめてlevel2がいなければいけないのに、いくら二人でもその階層にいくのは自殺行為に等しい。

「いや、リヴェリアさんとかフィンさんから大丈夫だって言われてるし……」

「言われたから行くなんて何を考えてるんですか!!」

「だって…ロキファミリアの一級冒険者からのお墨付き……」

その言葉にさらにリリの表情が険しくなり

「べ、ベル様!!それ騙されてますよ!!オラリオ上位のファミリアの人が私達みたいな下位の人に何かをするなんてありえませんか!!ああいう人達は私達をバカにしてるんです!!利用するだけして利用していらなくなったら捨てるんですよ!!」

「いや、そこまで言わなくても……」

「現実を見てくださいベル様!!」

必死に訴えてくるリリにベルはそれ以上言葉を出せなかった。



「ご、ゴメン。それじゃ9階層なんてどうかな？」

「それでも不安要素はありますが…ベル様の戦い次第でしょうか？」

「ええーと…よく分からないけど、リリ今不機嫌だったりする？」

「そう思うなら聞かないでください!!!」

「ご、ごめんなさい!!!」

ふん、とそっぽを向いてサポーターが冒険者を置いてダンジョンへ向かう。サポーターならそんなことはしない。冒険者のサポーターであるなら後方を歩くものだ。だがいまのリリにそんなことを考える余裕はない。

(これも昨日のアレが悪いんです!!もう本当に腹が立ちます!!!)

昨日のことを思い出して更にイライラしているリリ。その後ろにベルが付いてきているが、なにやら小声で何かを、誰かと話している。

(どうしてこうなったんだろう……)

(ベルベルがおかしいことをいうからですよ)

(ハジメだけには言われたくないよ!!)

(心外ですね。まあ、心当たりはあるんですが)

(そ、そうなの?)

(教えませんけど)

(教えてよ!それが分からないと冒険中ずつと気まずい状態が続くんだよ!!)

(そんなことを言われましても今のリーリのことじゃないので)

(それってどういうこと?ってか「リーリ」って……)

「なにゴチャゴチャ独り言を言ってるんですかベル様!!冒険者なんですからリーリより前を歩いてください!!!」

「は、はい!!!」

サポーターなら冒険者に対してそんな事をいうのか?とベルの頭にはなく、直ぐ様リの前に移動して先導することにした。そんな二人の後ろを気配もなく、音もなく、一定の距離で歩いている姿は見守るように付いていく。

「ハアアツ!!」

ダンジョンの9階層、そこにはベルとリリの周りにキラアアントが5匹集まっていた。二人でのパーティーなら直ぐにでも逃げるべき状況なのだが、それに対してリリは意見を述べなかつた。

この目の前で起きている戦闘は安心出来た。

襲いかかるキラアアントを最小限の動きで、それもとてもしeveeのスピードではないと思われる動きで背後を取り、その小さな体に合わないパワーでキラアアントを一刀両断。

そんなベルの背後から別のキラアアントが襲いかかってきていたが、まるで後ろに目があるかのように腕だけが反応してキラアアントの攻撃をナイフで受け止めた。そしてキラアアントの間接部分を的確に攻撃し動けなくなつたところにトドメを討つ。

その流れるような戦闘にサポーターであるリリは全く動けずに、働かずにいた。この場合サポーターはベルへ死角からの攻撃をさせないように援護したり、攪乱させたりして冒険者により良い環境を作るのだが…

(ま、全くの必要なしですか…)

バベルの前で声をかけたときリリのようなサポーターを知らずにいたようだった。それにオドオドしたその態度に間違いなく駆け出しの冒険者だと思ったのだが、この戦闘を見てしまうとその考えは全否定することになった。

(本当に駆け出しの冒険者? こんな動きlevel2じゃないですか!!?)

こんなことを考えているとすでにキラアアントを倒し終わったベルが魔石を拾い集めていた。それを目にしたリリは表情が固くなり

(そうです。別にlevel2だったとしても関係ない。リリはやることがあるんです!!)

そのためにもまずはこの冒険者を、ベル様を油断させないといけない。あの腰にある<sup>ヘステイター・ナイフ</sup>ナイフを手にするために。

するとそこへダンジョンの壁からキラアアントが産まれようとしているのを見つけたリリは、キラアアントの眉間にボウガンの矢を突き立てた。一撃では倒れなかったキラアアントは悲鳴に似た声を上げる。聞くにも耐えないその声を止めようともう一度矢を突き立てるとやつと絶命したが、

「ありがとうリリ。全然気づかなかつたよ」

「いいえ。生まれ落ちたとしても今のベル様なら何の問題もないじゃないですか。むしろ壁にぶら下がった状態にしまつて、魔石が取りにくくなりました」

「これなら……うん、僕が届きそうだから大丈夫だよ」

そういいながらベルをハスティア・ナイフを手に取りキラアアントから魔石を取り出そうと近づく。これはチャンスだと判断したりりは

「ベル様ベル様。そちらよりこっちのリーチの長いナイフを…」

と、言おうとした瞬間にベルが持っていたハスティア・ナイフが一瞬ぶれたように見え、そしてそれと同時にキラアアントが大きな音を立てて爆発した。

何が起きたのか分からなかったリリは呆然とした表情で瞳をパチパチさせながら

(な、なんですかきつきののは!!?)

魔剣でもないのにキラアアントが爆発したなんて、いやそれよりもモーシヨンが全く見えませんでした!!! 本当にこの冒険者はlevel1なんですか!!!)

騒然としているリリのその姿を見て、仕掛けた張本人として、これは裏があると睨んだ。但しその瞳は、視線は届くことはない。例えどんな視線を送ったとしても。

.....

「…なるほどね、ベル君にサポーターか。」

それも犬シアンスローフ人の女の子って……君達は女の子に出会うために冒険者になった訳じゃないかと疑ってしまうよ……」

「ええやんかドチビ、出会うためにダンジョンに潜る。これも立派な動機と違うか?」

「無責任なことを言うじゃない!!! 第一ベル君には僕がいるんだああああ!!!」

「分かった分かった、うるさいから黙れこのドチビ。周りの客に迷惑やる、ホンマにうる

さいやつや」

「なんで二度もうるさいって…ウゴツ」

「神様、それ以上はミア母さんに怒られますので」

神だろうが客に変わらないのだろう。ジツと睨み付けるミアの視線にシユンと黙りこんだヘスティア。そんな姿を着に酒を飲むロキ。

流石に神二人だけではない。少し離れた場所にはフィン・ベート・アイズが席を取り食事していた。

今日は二人、いや三人と話がしたくて集まってもらった為、このお店を貸し切りにしてもらっていた。

機密というわけではないが他言無用ということでミアやハジメ、リユウ、シルの少人数で対応している。

すると、そこにもう一人の神が現れた。

「へえ、いいお店じゃない」

「いらつしやいませ、ヘファイストス様」

ここに集まったのは神の集会でも滅多に揃わないメンバー。ついこの前その滅多に  
が起きたばかりだが、

「しかしこうして三人が集まるなんて奇跡やな」

「ああ、ロキに賛同するのは癪だけどね」

「私はそうとは思わなかったわ。ハジメがヘステイアのファミリアで、そのファミリア  
がロキの所で一緒に住んでいるなんて。それだけで奇跡のようなものだからこう  
して三人で会うなんて必然みたいなものよ」

「そんな必然はいらないよ（へんわ）!!!」

ほら、息ピツタリ。とヘファイストス言うと睨み合いながらお互いこれ以上は無意味  
だと分かり、フン！とお互いそっぽを向いた。

「それで私達を集めた理由はなに？」

「今日ベルベルがサポーターであるリーリとダンジョンに潜ったんですが、どうやら  
リーリの目的はベルベルの神ヘステイア・ナイフのナイフを盗むためみたいです」

「な、なんだいそれは!!？」



「なかなか大胆なことをする奴やな」

驚くヘスティアにそのサポーターに興味を示すロキ。

そしてヘフアイストスは何かに気づいたようで

「なるほどね、だから私が呼ばれたわけね」

「??どういうことやヘフアイストス？」

「悪いけどこれについては話せないわ。だからロキ、席を外してくれない？」

「おいちよつと待てや!!うちやってハジメに呼ばれたんや!!聞く権利はあるやろう!!」

「はい、ロキ様には後で聞きたいことがありますので。」

「それではロキ様、ご退場です」

するとアイズが席を立ち此方に近づいてきて、ハジメから袋を手渡しされた

「よろしくお願いします、アイズ姉」

「……………うん」

そしてその袋には「ジャガ丸くん」と書いてある。

「賄賂か!? 賄賂なんか!?!」

「……………何のこと?」

「かわええ!!」

首を傾げながらジャガ丸くんを頬張隠蔽つてロキを立たせて強制退場を執行。しかしなかなか見られないアイズの表情にメロメロなロキはそのままテーブルから離された。

「いいの? あんな扱いして」

「いいんじゃないのかい、ロキは喜んでいるみたいだし」

「それではお願いします。リーリが何故あの武器を狙うのか、そしてソーマ・ファミアについて教えて下さい」

影が薄くても許せないものがあります。

「それじゃどうして神のナイフヘステティア・ナイフを狙うかというのだったかしら。まあそれは私が作った武器武器子供だから」

ヘファイストス・ファミア

大勢の鍛冶師（スミス）を育成し、一級品の武器を製作してオラリオに留まらず世界中にその名を知らしめる鍛冶師系ファミアであり、「ヘファイストス・ファミア」の主神がこのヘファイストスである。

そのヘファイストスが作る武器、売りに出回ることもなく、ましてや作られることさえないとされるその武器

腐れ縁であるヘステティアだからこそ実現したと言っても過言ではない幻の武器である。ならそんな武器を持つベルが狙われるのは必然というべきなのだが、

「と言いたいところだけど素人が見ただけじゃ、いいえ、一級の鍛冶師でも私の武器だつて分かる者は少ないわ。ましてや持ち主以外には「なまくら」になるんだから………本

当になんて物を作らせてくれたのかしら」

「いや〜ヘファイストスには頭が上がりないよ」

「それも折角大きな返済チャンスが来たのに返す気なかったのでしょうか。いい加減にしないと利息つけるわよ」

「ちよつ、ちよつと待つてくれないかヘファイストス!!返すから!ちゃんと返すからそれだけは勘弁しておくれ!!」

必死なのは分かるが神様が利息のために土下座をするなんて、それと子供ハジメの前でやるなんて。それを遠くから見ていたロキが

「うわあくプライドはないんかいアイツは…」

「プライド?はっ!!プライドでお金が減らないなら、増えるなら、プライドなんて要らないよそんなもの!!!」

「格好いい感じで言ってますが、クズってますよ神様」

その言葉にぐうの音も言えないヘステイア。「利息取らないからさっさと頭を上げなさい」とヘファイストスに言われるまで頭を上げなかった。

「ならどうしてベルベルが、ヘステイア・ナイフが狙われるんですか？」

「そうね……憶測だけどベルが普通のlevelの冒険者とは違うからじゃないかしら。」

「ああ……あれだけ一級冒険者にしごかれたらステイタスも上がるよ……」

「やつぱりステイタス上がっていたんですね。なんか大きいアリを次々に斬り倒してましたよ。」

ベルのステイタス、それはビックリするほど上がっていた。まあフィン、ベート、リヴェリア、ガレスにしごかれたら嫌でも上がるだろう。ましてや憧憬リアリス・フレゼ一途の効果、その効果対象が手に届かないと思っていた相手がこんなに近くにいる。やる気も沸いてくる。

そんなベルのステイタスはというと、

ベル・クラネル

L v . 1

力：H118↓B726

耐久：I 99↓A830

器用：H162↓B771

敏捷：H193↓A835

魔力：I 0

《魔法》

《スキル》

二

「つてか、上がりすぎている……」

「そんな頭をかかえるほど上がったの？」

「いい加減に見せろやドチビ。いくら成長期つてもあの吸収力はハンパないわ。普通はあんな簡単にものに出来へん」

「見せるわけないだろう！普通ならハジメ君のステイタスを見せるだけでもあり得ないんだから!!」

なに食わぬ顔でいつの間にか離れたテーブルから元に戻ってきたロキはチイツと舌打ちをした。しかしロキの気持ちも分かる。ハジメ達を自分のホームに住まわせるこ

とになったあの日、売り言葉に買い言葉でハジメやベルに訓練をつけることになった。そして一級冒険者による指導がベルにどれだけ影響を与えたのか気になるだろう。

「まあええわ。よく聞こえんかったけどベルのサポーターがなんや悪さしたというわけか」

「はい。よく考えたら誰が見ても「お人好し」という言葉を全身に被っているようなベル<sup>人物</sup>ベルですから、リーリ的には簡単に盗めるだろうと思っただんじやないかと思いません」

「なるほどなく。そりやソーマファミアの子ならやりかねんわ」

一人納得をしながらロキは目の前にあるお酒を手に取り一気に飲み干した。ぷはつと爽快感を感じながら「もう一杯!!」と注文した。そんなロキの発言が気になったハジメは

「どういふことですかロキ様？」

「ソーマファミアならやりかねないとは?」

「そうやな。」

……ハジメは酒はどういうもんやと思つとるか？」

「日頃のストレスを発散させるための飲み物です。b y 神様」

「なんで僕で例えるんだい!!!」

「いや間違つてへんやろうがドチビ。」

楽しく飲んだり、嫌なことを忘れるために飲んだり、人が変わったようになつたり、ようは人それぞれ飲み方は違うわ」

リユーが持つてきたお酒が目の前に置かれると直ぐ様に手に取りそのまま口に運ぶ。グビグビと半分まで飲んだロキはその酒を置いて続きを話す

「だけどや、ソーマファミアが作る酒は違う

あの酒は「酒に依存せせられる」酒なんや」

「酒に酔わされる酒?ですか…」

「そうや。簡単にいうと「ソーマ」という酒に依存してしまうんや。たつた一口飲んだだけでその美味さに理性が壊れてただ飲みたいという欲求の為だけに駆り立てられる。ソーマの所の子が必死になつとるのはその「ソーマ」を飲みたいという欲求のためや。まあソーマ自体酒以外には興味を持たんみたいやからな」



「……それは、どう意味ですか?」

この場にリユーがいなかった。いや厨房にはいるのだがこの話の場になかったのが不味かった。この後に起こる出来事を早めに止めることが出来たのに。声のトーンも表情も変わらない、だが変わったハジメにロキが気づくこともなく

「子がどんなことをしてても見向きもせんやろうな。ソーマは酒を作ってくれたらそれだけでええんや。だからそれ以外のこととは無関心という訳やな。かといってやりたい放題させとるわけやないし、今回の話はちよつとしたイタズラでええとちやうか」

「何を勝手に終わらせてるんだロキ!!こっちは被害が出そうになつたんだぞ!!」

「そうはいうけどなドチビ、お前そのパルウムに罰を与えるつもりか?そんなことしてみい、お前頃なんて簡単に潰されるで。第一うちらは手は貸さんからな、全く関係ないことまで関わらへんわ」

「くっ!!だ、だけど…」

「いりませんよ、神様。

僕に任せておいてください」

そんなことをいいながらハジメは立ち上がりお店の出口に向かって歩き出す。それを見たロキは

「ちよつ、ちよつと待たんかい!!何をするつもりやハジメ!!」

「簡単ですよ。ソーマ・ファミリア、壊滅させます」

「なっ!!?」

「何バカなことをいつてるんやお前は!!たった一人でそんな事、いや、その行動をするなんて馬鹿げとるわ!!」

「大丈夫です、僕の姿は見えませんか。突然一夜にしてソーマ・ファミリア消滅。いやこれこそ「神隠し」という感じに何もかも消しきります」

その異常とも思われる言葉にロキはアイズやベートやファイに視線で合図を送りハジメを止めるように促す。そして真つ先にベートがハジメを止めようと

「出来もしねえことをいつてんじゃねえ!!」

その手で肩を掴んで止めようとしたのだが、止められたのはベートの方になってし

まった。ベートがハジメに触れた瞬間にまるで人形のように固まり動かなくなってしまうのだ。ハジメの肩に触れようと伸ばした手から顔を残した全てを【氷<sup>停</sup>付けに<sup>め</sup>られた】

「ベート!!!」

「何しやがるテメエ!!!」

「邪魔しないでください」

「ちよつとハジメ君!!待つんだ!!!」

ベートが稼いでくれた僅かな時間の間にヘスティアはハジメの前に立つことが出来た。ただそれだけでも充分にハジメの足を止めることが出来た。だが未だにハジメの心を止めることは出来ていない。

「今回は僕達には被害はなかったんだ。だから無茶なことはしないでおくれ」  
「神様のお願いで無理です。」

僕はベルのことについては気にしてません。

ですがこのソーマファミリアについてはそうはいきません、あまりにもイカれてま

す。たかがお酒の為に子をまるで道具のように扱うなんて許せません」

その言葉にヘステイアは言い返せなかった。ハジメが言っていることは間違つておらずヘステイアもそう感じているからだ。だがそれでも、

「だからといってどうしてハジメ君がそんな事を!!」

「僕がそうしたいからです。理由なんてそんなものです」

それにはヘステイアもどうしようもなかった。ハジメが一度決めたら止まらないことは知っている。だからと言って物理的に止められることは出来ない。むしろこちら側が止められるだろう。どうすればいいのかと顔が歪みそうな時

「何をしてるんですかハジメ」

「……リユウ……」

料理を運んできたリユウがこの現状を見てハジメが何かをしたのかと話しかけてきた。そのリユウの考えは当たりで現れたリユウを見て少し一歩引いた感じに見えた。

「何か騒がしいと思えば……」

手に持っていた料理をテーブルに置いてリユーはハジメの前に立ち、

そして空いた手でハジメの頬を叩いた。

もちろんハジメにはダメージはなかったが、そんな事は今はどうでもいい。あのリユーがハジメに手をあげた事実が信じられなかった。そしてそれを受けたハジメはかなり驚いている

「私は、私はハジメのやること対して止めるつもりはありません。ですがいまハジメがやろうとしていることは子供のワガママです」

「そんな事はありません」

「あります。そのやり方は誰も幸せにはなりません。」

ただ感情に任せたその先には何もありません。残るとするなら後悔と罪、それも一生背負い続けたいといけません。

それを、私にあの言葉を言ってくれたハジメが、それを背負うとするなら私は刺し違えてでもハジメを止めます」

本気なのだろう、リユーからは殺気に似たものがハジメに向けられていた。そしてそれを受けとるハジメもリユーの真剣な瞳を見つめていた。

「……………」

「……………」

そしてそれを周りは見守るしかなかった。

いまこの状況で発言出来るものはいないだろう。例え神だとしても許されないような空気が漂っている。

そしてゆっくりと空気を吸い、何かを決めたようにゆっくりと息を吐く

「それは嫌ですね。リユーとやり合うつもりなんてありません」

リユーが叩いたその手を、ハジメを叩いたその手を、

「しかしリユーがこんなに積極的になるなんて僕は嬉しいです」

両手でゆっくりと優しく包むこんだ。

初めは睨み付けていたリユーだったが、いま自分が置かれている状況を理解していくにつれて顔が真っ赤になっていき

「ち、違います!!何をバカなことを!!」

「照れてるんですか?可愛いですよリユー」

「かわッ?!?変なこと言わないでください!!!それにいい加減に手を離してください!!!」

いつの間にかハジメのペースに呑まれたリユーは、なかなか離さないハジメの手から必死に振りほどこうとする。しかし一時停止によるものか全く離れない。

「ハジメ!!離してください!!!」

「離すとソーマファミアを潰しに行ってしまういそうなので離せません」

「それは私が言うことであり!!」

「離してくれないんですね」

「ッ!! 離しません!!!離しませんから離してください!!!」

「なんかややこしいですね」

「貴方<sup>ハジメ</sup>のせいだと自覚しなさい!!」

それを見ていたヘスティア達はホツとして力が抜けたように席についた。ソーマファミリアへ奇襲をかけることよりリユートの戦<sup>喧嘩</sup>いが無くなったことが一番ホツとした。

「ホンマにハジメにはヒヤヒヤさせられるわ」

「でもこのままにしておくといつか襲撃するわよあの子」

「そんなこと言わないでくれよヘファイストス…」

一先ずは安心出来たが恐らくハジメはソーマファミリアへ襲撃するだろう。もうベルのことだけではなく「ソーマファミリア」自体をどうにかしなければ解決出来なくなつた。



影が薄くても調子に乗っている奴はムカつきます。

「そう。また強くなったのね」

壁一面をまるまる占領する長方形の硝子。その窓際に立つ人物の立ち姿を、スポットライトようにはつきりと浮かび上がらせた。

黒く薄いナイトドレスに包まれた、細身でありながら豊満な体つき。

冷たい月の光を浴びて一層神秘さを帯びるきめ細やかな白皙はくせきの肌

腰まで届こうかという銀の長髪は、氷の結晶を散りばめたかのように輝いていた。

「それでいい。貴方はもっと輝ける……」

巨塔バベルの最上階。

塔の中でも最上品質にあたる一室で、部屋の主である彼女フレイヤはベルを見下ろしていた。

「もっと、もっと輝いて？　貴方には、私に見初められた故の義務がある……」

フレイヤには、『洞察眼』というべき下界の者——『魂』——の本質を見抜く瞳がある。

「より強く、より相応しく……それが貴方の義務」

「私も強い男は好きよ？」

ベルを目にしたのは偶然だった。

ある日の早朝。メインストリートを歩む彼の姿を、その銀の瞳が捉えたのだ。

——欲しい。

一目見た瞬間、そう思った。

ベルはフレイヤの眼が今まで見たことのない色をしていた。透明の色だ。

これからのような色に変わるのか、それとも透き通ったままでいるのか、『未知』を前にした神の興味がつきることはない。

「楽しみだわ。貴方がどこまで強くなるのか、どこまで輝けるのか……どんな色に変わるのか」

しかしフレイヤには一つだけ気に食わない事があった。成り行きとはいえ今ヘスティア・ファミリアはロキ・ファミリアのお世話になっている。そしてここ最近ベルの成長が一段と上がったのはそのロキ・ファミリアの一級冒険者によるもの

「強くなってくれるのは嬉しいけど……ロキの手でというのは気に食わないわね」

とは言ってもロキ・ファミリアと、同格の相手と荒事を構えなくなかった。しかしそれでも自分のオモチャがとられたという感覚にイラつきはあった。

だが、その成り行きは悪いだけではなかった。

そう、フレイヤにはもう一人、興味をもった者がいた。

それこそ『未知』であり、フレイヤの『洞察眼』でも見ることが叶わない。

ただドハツキリと捉えたその存在を、見えずとも感じる事が出来るその存在を。

それを考えるとベルとはまた違う感覚に襲われるフレイヤ。まだ見ぬ宝石を求めたいような、それを手にしたときに感じるだろう幸福感を、想像すればするほどに堪らなくなる

「……ああ……どんな姿をしているのか、どんな強さなのか、どんな本質いづろをしているのか——  
見てみたいわ」

フレイヤはその蠱惑こわく的な唇に折り曲げた人差し指を含め、甘く噛む。

扇情的で強く濃い香りが一瞬で辺りを満たした。

間違はなく近くに男が、いや、女でも、性欲あるものなら全て虜になる。

フレイヤの魔性の美に逆らえる者は、存在しなかつたのだ。

(へステティアには悪いことするけど……もらうわね、あの子達)

すぐにも取り込んでしまっても良かった。

しかしそれをしなかつたのは、少年のバックにいる神の存在を確かめていなかったた  
めか——その無邪気な笑顔を見て毒気が抜かされてしまい、気が乗らなかつたからか。

何にせよ、今回は趣向を変えて影ながら見守るのも悪くない。フレイヤはそう思う。

所詮、そこは自分の箱庭だ。

いつでも手出しはできる。

「貴方達を私のモノにするのは待ち遠しいけど……複雑ね、来ないでほしくもある。今この時こそが、一番胸の踊る時なのかもしれない」

しかしフツと何かを思い付いたような表情を見せたフレイヤは

「……でも、そうね。『魔法』はそろそろ使えてもいいのかもしれない」

フレイヤの『眼』は他神による「ステイタス」の正体を看破できるわけではないが、色と輝きの具合を見ておぼろげながら見当をつけることはできる。

見るに、ベルの『魔力』は加算されていない。フレイヤにはそれが少し頼りなく見えた。

早速、手出しすることにする。

「これがいいかしらっ？」

部屋の隅に鎮座しているのは本棚だ。幅は広く、高い。彼女の体を容易に覆いつくすほどだ。

細い指が柵の中段に伸ばされ、ある分厚い本の背表紙に引っかけられる。コトンと音を鳴らして倒れ込み、彼女の手の中に収まった。

頁をめくり中身を確認すると、フレイヤは満足そうに頷いた。

そしてその隣と同じ本も取りだし、

「……ふふつ、楽しみだわ」

.....

「聞いてよハジメ！」

今日二人で56000ヴァリスも稼いだんだよ！」

「そうですか、それなら今日はベルベルの奢りですね」

「うん、なんでも頼んで!!」

「……調子が狂いますね……嫌がって貰うためにも、【豊穰の女主人】の為にも高いお酒を買い取りして……」

「やめて!!嫌がらせでそんなことしないでよ!!」

リリとパーティーを組んでから稼ぎがよくなったらしく、今日は一段と稼ぎ気分が良  
いベルはハジメに晩御飯を奢ることにした。

ヘスティアはというとバイトがまだ終わらないらしく先に初めることしたのだが、

「なんですか、僕と組んでいたときよりも稼ぎが良いというアピールさせられているこ  
とは嫌がらせではないというんですか？」

「うっ……ご、ごめん……」

「いいですかベルベル。調子が良いのは分かりますが乗りすぎるのは如何なものかと…  
」お待たせしました、当店における最高級のワインです」

そういつてリユーが持ってきたのは豊穣の女主人が置いている中でも一番高いお酒。  
それを見たベルは口を開けたまま固まりハジメは満足そうにしている。

「ありがとうごさい…」

「ちよつとなんでそんな高いお酒を頼んじやっているのハジメ!!!」……はあ、五月蠅いで  
すよベルベル」

「五月蠅くないよ!!」

なに勝手に頼んでるのさ!!!

「嫌がらせです」

「素直に言えば良いっていうことにはならないからね!!」

頭をペコペコと下げながら持つてきた高級ワインをリユーに下げさせた。その際に「僕が買い取りますので後で一緒に飲みませんか?」と声をかけるハジメ。その問いにリユーは「ええ」と嬉しそうな表情をしていたのだが、このやり取りはテンパっていたベルは気づかなかった。

何故なら高級ワインを下げるタイミングで大量の料理が運ばれ、明らかにベルが予想していた金額を越えておりパニックに陥っていたのだ。

「ちよつ、ちよつとハジメ!!!」

「はいはい、頼みすぎと言いたいんですよね。」

大丈夫です、全部食べれます」

「その問題じゃないよ!!頼みすぎだよ!!!」

「ベルが「なんでも頼んで」といったので頼んだですよ。どうして文句を言われるのか分かりません」



「常識を考えたら分かるよ!!」

「人の、ましてやベルの常識を僕に当てはめないでほしいですね。あつ、これ美味しいです  
すね」

「僕が調子に乗ったのが悪かったから本気で僕を困らせようとしなさいで!!!」

「はいはい」と軽く受け流しながら新メニューである料理はどんなものかミア母さんに聞いているハジメ。それに対して「……悪いことしてないのに……」と凹んでいるベルと「フアイトですベルさん!」と応援しているシル。

「今日は割りとツイていると思っただのに……」

「そうだったんですか?」

「今日はサポーターのリリって子と一緒にダンジョンに行っただんですけど、昨日よりも順調にモンスターを倒せたんで今日の稼ぎはいいなと思っただですよ。そして実際に換金したら今までの中で一番高かったんですが、その時にエイナさんに「ナイフはどうしたの?」って言われたときはビックリして焦って探し回って……」

「それで私達にあったんですね」

「はい。本当にシルさんとリユーさんには感謝してます。もうナイフを無くしたら僕どうしようかと……」

「……ナイフを、無くしたって……言いましたかベル??」

そのハジメの言葉にビクツと肩が上がり、額からは汗が滝のように流れる。シルは「あつ、ごめんなさい♪」とお茶目な表情でその場を離れ、リユーはハジメに「ほどほど

にしてあげてください」と言い残して厨房へと戻った。

そうここにはハジメとベルしかおらず、もう完璧にベルが悪い状況のなかで最後の足掻きとして

「今度からは浮かれても持ち物検査はキチンとします」

「はい、素晴らしい回答です。」

では……覚悟はいいですね」

「全く何をしてるんですかね」

「まあ、そこら辺で許して上げてください。

本人も深く反省しているようですから」

「……………す、すみませんでした……………」

何事もなかったように目の前にある料理を食べるハジメと休憩時間になりハジメの隣でお酌をしているリユウ。

そしてその足元にはボロボロになり横たわっているベルと介抱しているシルの姿があった。

「今度無くしたら……………永久冷凍ですからね」

「その際には是非是非ベルさんにはこの店の保冷体になってください」

「これで食材が腐らなくてすみます」

「やりませんからね!!!」

皆さん酷いです……と割りとは本気で落ち込んでいるベルをやり過ぎたとシルが慰めている。もちろんそんなベルをハジメが気に止めることはなく今まで通りに食事をしている。

「鬱陶しいですよベルベル。食事中なんですか落ち込むぐらいなら出ていってください」

「その原因となったのはハジメだって分かってるよね!!」

「はいはい、正しい言葉を使えるように書物を読んだ方がいいですよ。例えばあそこにある本とか読んだら頭が良くなるんじゃないんですか？あつ、でもベルベルですから効果は五分以下かもしれないませんが」

「……この先絶対無くさないのので許してください」

「……仕方ありませんね……」

（とうとうクラネルさんが折れましたか……）

ハジメは完璧に遊んでいただけのようですが……）

そんなことを思いながらハジメが言っていた二冊の同じ本を手を取ったりリユーは、

「しかし本読むことはいいと思います。知識は大いにあった方がこの先にも役に立ちますから」

ということでもトキサキさんも読んだ方がいいかと」

「僕はいいんですがその本、忘れ物じゃなかったんですか？」

そうリユーが持ってきたのは本が置いてあったのはお客が忘れ物をしたときに一時的に保管しておく所だった。保管とはいうがただ置いてあるだけでありお客が勝手に持つていくことが出来る。

そしてハジメとリユーの会話を聞いていたミアが入り込み

「持つていきな。そんな物を忘れた奴が悪いんだ、読まれても文句を言われる筋合いはないよ」

「ですが……」

「いいのではないですか？お店の店主であるミア母さんがOKを出したのですから」

「いうじゃないかリユー。それじゃまるでいざとなったら私が責任を追うみたいじゃな

いか」

「その責任はお客様にある、と言われたんですから責任は取らなくてもいいのではないですか？」

違いはないね、と少し不機嫌になりながら厨房に戻っていったミア。許可も降りたところでリユーは二人に一冊づつ本を渡した。

「分かりました、明日にはお返しします」

「あ、明日って!!明日ダンジョンに行くから読む暇は無いよ?」

「なに言ってるんですか?今から読むんですよ、徹夜してでもこの本は明日までにはお返ししないとイケませんから」

「ちよつ、ちよつと!!!」

「お客様にご迷惑をかける気ですか。さあ帰って読みますよ。お代はここに置いておきますね」

「僕まだ夕御……ちよつと待ってよ!!!」

強制的にベルを連れて帰ったハジメの姿を見て、リユー達は皆「ハジメがいうことか

486 影が薄くても調子に乗っている奴はムカつきます。

な……」と小さく呟いたという。



影が薄くても何か変化が起きようとしています。

黄昏の館に戻ったハジメ達はそれぞれ自分の部屋に向かい貸してもらった本を読むことにした。もちろん最後まで抵抗したベルには<sup>衝撃波</sup>飴と<sup>衝撃波</sup>鞭を使い大人しくさせて部屋にぶちこんだ。

本来ならヘステイアファミリア一人部屋に三人が住まう形だった。ロキファミリアという格上のファミリアの元へヘステイアファミリアという格下のファミリアが宿を取ろうとしているのだ、周りからしたらそれ事態があり得ないことであり、ロキファミリアとしても威厳が損なわれると考えるものもいるだろう。

だがフィンが、リヴェリアが、アイズが口を揃えて「客人」として招くようにと申し出たのだ。確かにハジメが起こした功績を考えれば当然かもしれないがヘステイアファミリアではない。だからこそベートが反抗したのだが、

「そんなベートさん、キライです」

とアイズの一言で陥落した。

「まあ身内であるヘステイアも反抗したのだが、「一人部屋がいいです!」とベルの一言でこちらも陥落した。」

ということでも静かに本を読める環境の中でテーブルの上に本を置き、そのとなりワインを入れたグラスを取りそれを口に含む。舌で味わい喉ごしを味合ったところで豊穡の女主人で買い取った高級ワインの事とリユーと一緒に飲む約束を思い出した。

「明日謝らないといけませんね」

軽くため息をつきもう一度ワインを飲む。グラスを置き本に手を伸ばしてページをめくる。

『魔法は先天系と後天系の二つに大別することが出来る。先天系とはいわずもながら対象の素質、種族の根底に関わるものを指す。古よりの魔法種族<sup>マジックユイザー</sup>はその潜在的長所から修行・儀式による魔法の早期取得が見込め、属性には偏りが見られる分、総じて強力かつ規模の高い効果が多い』

共通語<sup>コイネー</sup>で編纂<sup>へんさん</sup>されているためかろうじて読めるが、一文一文の間に細かく走っているこ

の文字は……数式みたいなもの……

『後天系は『神フアルナの恩恵』を媒介にして芽吹く可能性、自己実現である。規則性は皆無、無限の岐路がそこにはある。【経験エッセリア値】に依るところが大きい』

一つとして共通した形のない複雑怪奇な記号群。

文体に……文字の海に、引きずり込まれる。

『魔法とは興味である。後天系こうしやにこと限って言えばこの要素は肝要だ。何事に関心を抱き、認め、憎み、憧れ、嘆き、崇め、誓い、渴望するか。引き金は常に己の中に介在する。『神フアルナの恩恵』は常に己の心を白日のもとに抉り出す』

【絵】が現れた。

顔がある。目がある。鼻がある。口がある。耳がある。人の顔だ。

真つ黒な筆跡で編まれ描写すれた、瞼の閉じた人の顔。文章の絵。

『欲するなら問え。欲するなら砕け。欲するなら刮目せよ。虚偽を許さない醜悪な鏡は

『ここに用意した』

違う。【僕の顔】だ。額から上が存在しない自分の顔面体。

違う。【仮面】だ。自分のもう一つの顔。自分の知らない、もう一人の本心<sup>しぶん</sup>。

『じゃあ、始めましょう』

瞼が開いた。僕の声が聞こえた。

文字で綴られた何の関心のない瞳が見てくる。

短文で形成された小さな唇が言葉を紡ぐ。

『僕にとって魔法とは何でしょうか？』

自分の身を守るためのものですね

あらゆるものから、痛みや、苦しみから

そして守りたいものを守るもの

『僕にとって魔法とは何でしょう？』

あの日から止まった時を動かしてくれるもの  
何も出来なかった自分を変えてくれたもの  
大切な人に巡り合わせてくれたもの

『僕にとって魔法はどんなものですか？』

さあ、分かりません

いま持っているものは…「拒絶」ですから

あの日から僕は僕を「拒絶」した

だから生まれた魔法だと思ってます

『なら僕はどんな魔法を望むのですか？』

僕と同じ思いを無くすための魔法を

取り返しのつかないことが起きないための魔法を

過去も今も未来も守れるための魔法が欲しい

『随分と強欲なことをいつてきましたね』

分かっていきますよね。

トキサキ <sup>ハジメ</sup>一とはそうなんだということは

『そうですね、だからこそ「僕」なんです』

「……………メ……………ハ……………君……………ジメ……………」

誰かが呼ぶ声が……………あれ、確か僕は……………

「……………メ君……………ハジ……………ハジメ君!!」

目を開けてみるとそこにはドアアップに写し出されたヘスティアの姿があった。お互いに至近距離で見つめ合いながら数十秒後

「……………はあ」

「なんだいそのため息は?!!」

「いえ、なんでもないですよ」

「君は何もなくため息をつくのかい!?それもボクの顔を見ながら!!」

「自意識過剰ですよ神様。ただ僕の目に写ったのがリユー姉なら良かったなど、ちよっ

と考えただけです」

「原因はそれだよおお!!!」

朝から大声を出して元気だなーと思いつながらへステイアの事をスルーしてグラスに手を向ける

「ちよつと何を飲もうとしてるのさ!!」

「いいじゃないですか飲んで」

「君は朝からお酒を飲むつもりかい？それに今日はバイトがあるっていつてたじゃないか」

「……朝……」

もしかしてと、嫌な予感を感じながらもいつも通りの落ち着いたスピードで窓まで移動してカーテンを開けてみる。すると開いた隙間から光が差し込み、窓の向こうは明らかに夜の顔ではなく朝の清々しい顔だった。

目の当たりにした現実にはジメは、



「……今日は休みましょう」

「ダメに決まってるだろう!!」

.....

「という事で遅刻しました」

「ふざけるんじゃないよ!!!」

問答無用でミアに殴られるハジメ。もちろんダメージはないのだが目の前にいる鬼のような表情と威圧感は一時停止でも止められない。

「つたく、飲めない酒を飲むからこういうことになるんだよ」

「いつもは一時停止である程度でしか酔わないですけど……」

「魔法頼りにしてるからだよ。冒険者ならもつと体と酒に強くなりな!!!」

冒険者に酒は関係ないですよ。と言いたかったが【豊穡の女主人】で働いている以上そんなことをいっただらヤバいなと判断して言うのをやめた



見事に転倒し宙に舞う複数のコップ。不幸中の幸いなのか飛んでいった方向がハジメやリユー達のいる方向であった。シルが少し慌てたようにコップを取り、リユーは冷静に何個もコップを掴み、ハジメは立っているだけでまるで磁石のようにハジメに当たったコップはくつついた。

しかしすべて拾えたわけではなく一つのコップだけがハジメ達の頭上を通りすぎてそのまま地面に吸い込まれるように落ちて砕け散った。

「あんたは何をやってるんだい!!!」

「ニャアアアアアアア!!!」

背後から現れたミアの拳骨を思いつきり喰らったアーニャはその場にうずくまった。その拳骨から聞こえてきた衝撃的な音は他の者にも効果があり

「何ボーとしてるんだい!!さっさと仕事しな!!!」

その一言ですぐさま仕事に取りかかる。もちろんリユーもすぐに仕事に戻り残され

たハジメはこの割れたコップを片付けようとしたのだが

「……………うん？」

一体何が起きたのだろう。割れたコップの残骸の上に何故か「5」と数字が浮かんでいた。さつきまでこんなものはなかったのにこれは…

「ハジメもさつきと仕事しな!!」

「あの、この数字ってなんですか？」

「はあ? 何いってるんだい。いいからさつきと着替えてきな!!!」で、あんたは早く後片付けしな!!!」

「はいニャー!!!」

ミアの圧に怯えているアーニャはホウキとチリトリでさつきと割れたコップを片づけて離れていった。あの数字は一体何だったのだろうと思っただが、まあ仕方ないなということに気がしないことにした。

影が薄くても他人を悩ませてしまう。

カキン、カキンと甲高い音が鳴り響く。真つ赤に燃え上がった鉄の塊が鎚に叩かれ姿を変えていく。何度も叩かれち鉄はまた業火の中に入れられ後、再び鎚に叩かれ鍛えられその姿を「刃」へと

椿はあの日からずっと工房で作業を続けている。

「……………」

あの日以来、すっかりと自信をなくしてしまった…ということにはならなかった。確かにこれまで積み上げてきたものが全て崩し落とされた。だけどそこにはただの瓦礫ではなく次に繋がるための土台があった。

そしてその土台にいま必死に「自信」を積み上げようと抗っているのだが、

「……………ダメじゃ……………」

途中でこのままだとダメだと分かってしまう。まだ完成もしない鉄の塊はただの鉄屑となつてしまった。そうやってすでに何百個の失敗作が樁の周りに広がっている。

思い出してしまふ…

自分の自慢の武器子に興味がないと、あの「無」しか移らない瞳を。

あの輝いていた武器子があつという間に光を無くしたことを。

それを思い出してしまうとどうしても自分の武器に魂を打ち込むことが出来ない。全て拒否しているあの力を、あの少年の似合う武器を、この手で作り上げるイメージが出来ない。

そんなことが頭を過つてしまい手が止まってしまうのだ。

「またダメだったみたいね」

「主神様……」

振り向くとヘファイストスが立っており、その手には2つのコップを持っていた。その一つを樁に渡して口に含むヘファイストス、それにつられるように樁もコップを口に運んだ。

「もう、よく分からぬ……ハジメという者を考えるとどうしても出来ぬのだ」

「今まで見たことのないタイプよね」

「一体……どうしたらよいのだ……」

「……………」

いつも生き生きと武器を作る椿がこんなにも自信を無くし迷っている姿は見たことがなかった。どんなに辛くとも自分を信じ打ち続けた椿だが、その信じてきた自信はあの時の、武器から光が消えてしまったあの光景が、全く武器に対して興味を示さないあの瞳が浮かんでできてしまう。

ヘファイストスもその光景を見ている。見ているからこそ下手なことは言えなかった。あくまでもハジメの武器を作るのは椿であり、そこにヘファイストスがアドバイスをしてしまうとそれはもう違う武器に変わってしまう。それを一番嫌う椿に発言するつもりはない。

だが、ここまで自信喪失した椿を見たことはなかった。故に発言をしないのではなく、かけるものが浮かばなかったのだ。

だから武器に関してではなく、椿に対してアドバイスをかけることにした。

「迷っているのならちよつと外へ出なさい。

気分を変えるだけでも違うものが見えてくるわよ」

「……それで打てるとは思えぬ……」

「だからといってここに籠つても変わらないわよ」

「そんなことは分かかっておる!!!」

大声を出しながら持っていたコップを地面に叩きつける。ハアハアと息を切らす椿。それだけでも追い込まれていることはハッキリと分かる。

「す、すまぬ……主神様……」

「いいのよ。私もこんな時にごめんなさいね」

今は一人にした方がいいと工房から去ろうと動き出すヘアリストス。扉に手をかけて工房から出ようとした時ふつと思つたことを口にした。

「……もしかしたら、ハジメという人を知らないから打てないのかもしれないわね……」

「……………」



「冒険者のレベルに違いがあっても本質的なものは変わらなかつたけど、ハジメの場合  
はそれが見えてこない。なら、自分で見るしかないと思うのよね。まあ、思い違いかも  
しれないけど」

.....

最近、リリはおかしいんじゃないかと思う。

いつものように冒険者に媚を売ってサポーターとして雇ってもらい、物のように扱われながらも最後には武器やドロップアイテムを盗んでお金に変える。たまに危険な目に合うときもあるが「シンダー・エラ」により姿を変えているため見つかることはない。だから今回も同じようにするつもりだったのに……

どうしてダンジョンで稼いだお金を独り占めしないのか？

どうしてそんな当たり前のように簡単に大金を渡せるのか？

どうしてリリを他の冒険者のように「物」として扱わないのか？

不信があるのにどういうわけか未だにあの冒険者、ベル・クラネルの元でサポーター

をやっている。一度武器を奪うことに失敗したのに、逃げることもせずここに居るのは、こうして確かな収入を手にすることが出来るから？それともお人好しすぎるあの人が甘えてしまっているのか？

あの優しい笑顔が目には浮かび、否定するように首を左右に振って現実に戻る。とにかく明日はまたあの人とダンジョンに向かうことになっている。準備をするために買い出しに言っていたリリは明日に備えて早めに就寝しようと家に帰って来た。扉を開こうとドアノブに手を伸ばしそうとした時あることを思い出した。

(そっかえば……あれはなんだったんだろう……)

ベルのサポーターになる前、突然酷かった部屋が綺麗になり置き手紙にかなり失礼な事が書いてあったあの日。

それからというもののずっと警戒をしていた。特に下着は鍵がついた引き出しに入れるようにしていたのだが、あの日から全く変化がなかった。

一体何が目的であんなことをしたのか？

ただの嫌がらせにしては意味が分からない、かといってリリに恩を売るためにしたとは思えない、むしろあの置き手紙は喧嘩を売っているとしか思えない。

(気にしても仕方ありません……とにかく明日も稼いでもらわないと……)

気づかないうちにリリは「盗む」という目的から「稼ぐ」に変わっていた。どちらともお金は手にはいるが無意識に心が痛まない方へ向かっていた。だけどそれももう終わりを告げることなんてまだ知らない……

.....

「……………コレは、グリモア魔導書じゃないか」

「ぐ、ぐりもあつ？」

な、何なんですか、ソレ……………」

「簡単に言っちゃうと、魔法の強制発現書……………」

『発展アビリティ』なんて言ってもわからないと思うけど、とにかく『魔道』と『神秘』ついでいう希少なスキルみたいなものを極めた者だけしか作成できない、記述書なんだ……………」

へステイアの手にあるのは昨日持ち帰った一冊の本。半分も読まずに寝てしまい、へステイアに起こされるまで熟睡していたようだ。「ベル君は勉強が苦手なのかな♪」と弄りながら今日ダンジョンに向かうベルのステイタス更新を行うと提案した。

ダンジョンでは何が起ころのか分からない。特にいま怪しいと感じているあのサポーターには気を付けたほうがいい、そう直感が囁いている。

そうやってベルを説得してステイタス更新を行ってみると、

## 《魔法》

「フアイアボルト」

・速攻魔法

とついこの前までなかったステイタスに新たに魔法が追加されていた。これにはベルもへステイアも驚き今にも使いそうなベルを止めてお互いに落ち着かせた。

ダンジョンで試し撃ちにするにしろいきなり使うのはマズイ。かといって使うなど言っても使うのが男の子何だろうな〜ともう一人の男の子を思いださう説得しようかと悩んでいたところで、この本が目にとまり何気なく本を開き読んでみたところ、とんでもないことが発覚したのだった。

「君の魔法の発現はこれが理由か……。ちなみにベル君、この魔導書は一体どういう経緯で今ここに存在しているんだい？」

「知り合いの人に、借りました。……誰かの落とし物らしい、デス……」

「……」

「ネ、ネダンハ……」

「ヘファイストス・ファミリア」の一級品装備と同等、あるいはそれ以上……

ちなみに、一回読んだら効能は消失する。使い終わった後はただ重いだけの奇天列書ガラクダ

「……」

それを聞いたベルの額には大量の汗が、いや身体中に冷や汗が流れていた。見た目はそんな風に見えないのにこれがそんなスゴいものなんて……。それも持ち主に返すことも出来ないなんて……

「い、今すぐに謝って……」

「何を言ってるんだいベル君!!」

聞けば落とし物なんだろう、その落とし物とした人が悪いんだよ!!!」

「で、でも……」

「よく聞くんないベル君!!落とした人もそうだが、それを持っていつていいと言った者も悪いんだ。言うならばベル君は三番手であつてまず罪には問われない」

「流石に都合がよすぎますよ神様!?!」

あくまでもベルには罪がないと言っているヘステイア。それについてはもちろん嬉しいが真面目なベルからしたらそれは罪悪感が残りどうしても人のせいに来ない。

本を手に取り謝りに行こうとするが、その本をヘステイアが掴み離さない。もちろんベルの方が力がありどんどん引きずられているヘステイアだが絶対に離そうとしない。

「……………何してるんですか?」

「は、ハジメ!!本から神様の手を外して!!」

「ダメだよハジメ君!!ベル君を止めるんだ!!その本を持っていかれる訳にはいかないんだ!!」

その痴話喧嘩みたいな状況を見たハジメは「ハァー」とため息をついて

「それでは終わったら教えて下さい」

「なんで立ち去ろうとしたの!!」

「君はこの状況を見て何も思わないのか!!?」

「それを分かっているならちゃんと言合えばいいだけですよね。」

「バカらしいことに巻き込まないでください、僕もその本を早く読み終わらないといけないんですから。今日返す予定がまさか本を読みながら寝てしまうなんて……失態です。神様がこっそりとお店のジャガ丸くんを食べてしまっぐらい失態です。ベルがサポーターを信じるあまりに任せていた分け前を誤魔化されてそれに気づかないほどの失態です。」

「出鱈目なことを言わないでよハジメ!!」

「リリが、神様がそんなことするわけじゃないですよ!!」

「そ、そうだよハジメ君! 神である僕がそんなことを……というか、ハジメ君。さつき君「その本を早く読み終わらないと」って言ったかな?」

「言いましたけど、なにか?」

その時のヘステイアの表情は、口をポカーンと開けた間拔けな表情はしばらく脳裏から離れなかったという。



影が薄くて仕方なく話してしまうのは罪ですか？

結局昨日はヘスティアが寝込んでしまいダンジョンに向かうことが出来なかった。ベルはヘスティアの看護を行いハジメはヘスティアの変わりにバイトに向かった。

そして今日になってもうなされているヘスティア。ベルはリリとダンジョンに向かう約束をしているためハジメにヘスティアを任せてバベルの前まで来たのだが、

「ベル様？」

「!? あっ……り、りり、おはよう」

ヘスティアの容態と看護を任せたハジメのことが気になってリリに声をかけられるまで気づかなかった。そんなベルを気にも止めずにニコニコしていた。

「ベル様、今日は10階層へ行きませんか？」

「えっ、でも10階層はダメだって……」

「ここ最近のベル様の實力を見させてもらいましたが、本当に10階層にいつでも問題

ない実力の持ち主！

でしたら躊躇う必要はありません。もちろんちゃんとした準備や注意をしないと簡単にやられてしまいますが、そこはこの私がしっかりとサポートさせてもらいます」

その押しの強さに思わず頷いてしまったベル。いつも押し強いリリだがなんだか今日は一段と強い感じがする。何かあるのかと気になったがそれを聞く暇もなくリリから話しかけてくる。

「心配なさらないください。さつきも言いましたがベル様は十分に10階層に行けるほどの実力はあります。それにリリは何度か10階層へ行った経験があります。それにあくまでも経験を積むのが目的ですのですぐに9階層に戻れるように入り口近くだけです」

「……………リリがそういうなら……………」

「はい！それでは行きましょう!!」

先頭を切って歩き出すリリの後ろを置いてかれないよう歩き出すベル。リリのその

やる気に満ちた後ろ姿はどういうわけか何かに焦っているように感じられた。

.....

「うう……ううう……」

「なんやなんや、まだ寝込んでるのか」

「はい、よほどシヨックなことがあつたみたいです」

額には置かれた濡れタオルを新しい物に取り替えていたところで、明らかにヘステイアをからかいてきたロキが現れた。

その後ろにはアイズも一緒のようだが部屋に入ってきたのはロキだけであり、アイズは部屋の外で待機しているようだ。

「何かあつたんですか？」

「何かあつたのはそつちやろ、昨日はずいぶんと騒いどつたやないかないか。こちらは遠征前にドチビの様子見にきたんや」

「遠征……ですか。それはまた随分と急ですね」

「前から決めとったやつやし、それに直ぐに帰ってくるからな」

そうなんですか、と話し合っていると不意にアイズと目があつたのでゆつくりとお辞儀をしてみると、向こうも返事するようにお辞儀を返してきた。でもその表情はちよつと不満そうな顔である。どうしたのだろうと思っているとそれに気づいたロキが、

「アイズさんは今回の遠征から外したんや。それやからチョイと拗ねとるんや。それはそれでかわええやけどな!!」

「それはどうでもいいんですけど、どうしてアイズ姉を外したんですか？」

「どうでもいいってなんや！アイズさんはもうめちやくちや可愛いやろ！ジャガ丸君を食べれなかったときのアイズさんの表情はもう最高やで」

「…………とりあえず、ロキ様もなかなかのお人だということとは改めて分かりました」

「なんや誉められとる気はせんな。まあアイズさんはそのドチビの護衛や。ハジメやベルと違って神達は一般人並みやからな。それにドチビの護衛ならジャガ丸君も食べられるっていったら機嫌直してくれたしや」

ああ、だから不満そうな顔をしてる割にはしっかりと護衛のスタイルをしているの

か。その姿に本当にジャガ丸君好きなんだなと思っていたら「う、うう……」と魔うなされながらハスティアがゆつくりと目を覚ました。

「……………」

「なにベタなことをいつてるんですか神様。

しつかりしてください。昨日のことは覚えてますか？」

「き、昨日……」

「……………あつ！ベル君!!ベル君はいまどこにいるんだい!？」

まさかあの本を持ち主に返したんじゃない!!」

「大丈夫ですよ。とりあえずは保留にして起きましたから」

「そうかい、なら良かったよ。

「……………つて良くないよ!!ハジメ君、君も読んだのかい!？」

「はっ」

それを聞いたハスティアは頭を抱えて苦しみだした。

なんのことなのかと気になったロキはハジメに聞こうとしたが、

「ハジメ!!手前と一緒にダンジョンへ向かうぞ!!」

「突然どうしたんですかツバッキー」

その突然現れた椿に驚きもせず平然としているハジメだが、その椿の後ろには「勝手に入ってもらっては困りますよ!!」とロキファミアの団員が息を切らしていた。どうやら許可もなくここまで突っ切ったようで、現れた椿に対してロキも驚いているようだ。

「あまり好き勝手にしても困るで。いくら友好関係にあつても限度ちゆうもんがあるんや」

「それはすまぬ」

といいながら全く謝った感が出ていない椿。それを見たロキはハア〜とため息をついて「ここはええから戻つとき」と団員に下がらせた。

「それでどうしたんですか？

武器が出来たから試し切りみたいなことをするんですか?」

「いやまだ武器は出来ておらぬが…」

「だからこそお主とダンジョンにいかなければならぬのだ」

「すみません、どうも意味が分からなくて…詳しく教えてくれませんか?」

「簡単な話じゃ。手前はおぬしのことが知りたいんじや」

周りから聞いたらある意味告白に取れるセリフを簡単に言ってきた椿。案の定ヘスティアは「なっ!?!」と驚いている。ロキはなんか面白そうだなと楽しんでいる表情をしてアイズとハジメは変わらずな表情でいる。

「僕のことを知ることと武器を作ることは関係あるんですか?」

「分かん!」

「またハツキリと言いましたね」

「分からんもんは分からんのだ。ただ普通に武器を作っていただけでは作れぬというところが分かっておる。なら少しでもおぬしの側で見続ければ何か分かると思つての」

「はあ…そんなものなんですか……」

曖昧な回答に戸惑うハジメだが、まあ一緒にダンジョンに向かうことぐらい問題ないだろうと考え、

「分からないならやってみないと分かりませんね。神様ももう大丈夫そうですし」

「一緒にいつてくれるのか？」

「はい」

「そうか！そうか！とハジメの手を握りブンブンと上下に振る椿。その姿に面白くないと感じたのだろうヘステイアが頬を膨らませながら、

「椿君といったかな？いくらハジメ君の武器を作ると言っても、ハジメ君がいいと言ったとしても、主神である僕がいる前でよくも堂々と」

「うむ、それは失礼した。ヘステイア様にはこれを見せれば素直に応じると言われておったので気にしていなかったのな」

なんのことを言っているのだろうか疑問に思ったヘステイアだが、椿が取り出したあ



る一枚の紙を見たときに表情が一変した。

「なっ!?!」

「我が主神からの伝言からは「普通ならこれだけの金額をタダにするのだから協力しなさい」だそうだが」

「こんなの脅迫じゃないか!! 大体武器を作ってくれなんて頼んでないし、そっちが勝手に……」

「そんなことを言い出したときはコレを見せろと」

「なあっ!!?!」

「なんでヘファイストスがそれを!!」

さつきまで強気でいたヘステイアが一変して弱々しくなり苦笑いしながら、

「……………ハジメ君、よろしく頼むよ……………」

「そうですね。これ以上神様はクズだといわれなないようにしないとですね」

「ぐう!! よろしくお願ひ…します……………」

これが神様なのか？と思うぐらいの姿に、ロキは若干引いてる。

.....

「さて、ハジメも行ったことやし」

「……なんか用があるのかい？」

「そんな嫌な顔をするなや、こつちやて好きで話したくないわ。」

しかし今回はそうはいかんのや。ちゃんと説明しろやハスティア。なんでそれを持  
つとるんや」

部屋にはロキとハスティアだけとなっていた。

ハジメと椿はダンジョンへ、アイズには二人で話し合うために部屋の外で待たせるこ  
とにした。

真剣な表情のロキが指を指したのはハスティアが倒れる原因となった魔導書<sup>グリモア</sup>。それ  
は一級の武器が買えるほどの貴重品。それはハスティア達借金持ちが手に入るもので  
はない。

「こ、これはハジメ君達がバイト先から借りきてきた物らしいんだけど魔導書とは知らずに読んだらしくて……」

「けして盗んだじゃないよ!!それにベル君もハジメ君も魔導書だって知らなかったわけだし」

「そんな所まで聞いてないわボケ!!」

「……あの色ボケ女神が、狙いはこれやったんか……」

その悪口でヘステイアもそれが誰のことなのか、そしていま何が起きているのか分かったようで、さつきまで焦っていた表情がさらに険しくなった

「ちよつ、ちよつと待つんだロキ!!」

「狙いつてなんのことなんだい!!君は何を知ってるんだい!!!」

「うるさい、先にウチの質問に答えろ。あとからちゃんと話したるわ。」

自分、いつハジメのことを話したんや?」

「たしか……怪物祭の時だったような……」  
モンスターファイリア

「ちいつ!あのときか……」

「このドチビが……一体どこまで話したんや自分は!!」

「は、ハジメ君のことは姿が見えないってことぐらいで……し、仕方なかったんだよあの時は!! それに見えなきや大丈夫だろうって……」

「アホか自分はああ!!!」

あの色ボケ女神が神の興味<sup>ハ</sup>をひく<sup>メ</sup>奴を見逃すわけがないやろうが!!!」

「ご、ごめんなさい……と自分のフアミリアでもないロキに激怒されて凹んでしまったヘステイア。しかしそんな姿を見ようがいつこうに怒りがおさまらないロキ。

魔導書を手に取りそれを自分の顔の近くに持つていき三秒、何かを確信したように目を開き

「ご丁寧にウチだけに分かる香水を吹きかけとる……」

「ど、どうということなんだい……」

「この香水はな、あの色ボケ女神と話し合いで会ったときに付けとったもんや。それをわざとつけとるということは……」

その真意に気づいたロキは魔導書を地面に叩きつけた。古いものなのだろう、背表紙は折れ曲がれ数ページは破れて飛び散った。

「面白いわ、実に面白いわ。なんでウチにケンカを売つとるかは知らんけど、ケンカを売つとるなら買ったるわ!!」

「ちよつと!勝手に完結しないでくれよ!!!」

「安心せいドチビ!!もううちらは完全に自分らを100%サポートしたるわ!!!誰にもあの二人を渡したらあかんで!!!」

「気持ち悪い!!気持ち悪いよロキ!!!そんなことをいうなんて君じゃない!!!」

影の薄さはきつと、色んな影響を与える。

「本当、余計なことをしてくれたわ……」

暗く暗く、漆黒の闇よりも暗く、

深く、深く、抜け出せない闇の中で、

何も、誰も、生命そのものがない中で、

小さく、小さく、響くこともなく、消え行く声

その姿を見えることはなく、現すことなく、

ただ一人、ある人を思う。

「あの子は、強くなる。きつと私よりもずっと」

だから許せなかった。あの子の力で成長する過程を異物魔導書によって変えられたことが。

あの子の器はすでに昇華できる。しかし、その芯たるものが見えてこない。まるであの子のカミカクシススキのような……

そしてその原因を【私】は知っている。それをどうすればいいのかも【私】は知っている。

だけどそれは、あの子が見つければいけないもの。そうじゃないとこれまでのあの子のやって来たことが無駄になる。

だから見極める必要がある。

あの子に身に付いた魔法が成長させる起爆剤になるのか、それとも成長の妨げとなる足枷になるのか。もしも後者なら、

「神と言えども異物と一緒に潰してあげようかしら……」

微かに微笑む表情、しかし微笑むといってもその顔は無表情そのもの。そうまるでハジメのような感じである。一步、二歩と歩みを進めていき、抜け出すこともない闇の中を歩き続ける。

そして突然開けた明かりの下に出てきた者。まるで闇から光へ空間が変わったように。

そこはダンジョンであることは間違いないようだ。何故ならその場所には、目の前には一体のモンスターがいたからだ。

「あら、もしかして17階層辺りに出たのかしら？」

目の前のモンスターには見覚えがあった。そのモンスターはミノタウロス。その者との差は明らかでありミノタウロスが振るう拳が少しでも当たれば絶命するぐらいの力の差がみえる。

『ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

ミノタウロスの咆哮。レベル1の冒険者なら怯み体が動かなくなるほどの威嚇。その者も逃げることもせず、その場を立ち尽くしてしまっている。

『ヴオオオオオオオオオオオオウツ!!!』

そしてミノタウロスはそれを嘲笑うように拳を振り上げてその者へと拳を下ろした。



「やっぱりダメね。モンスターには品がないわ」

『ヴウオ!?!』

そんな言葉が今度は確実に届いた。届いたといつてもそこにいる地に這ったミノタウロスに届いただけである。何が起きたのかミノタウロスは分かっているまいだろう。ただその者は自分に向けられたミノタウロスの拳を2度触っただけだった。一度でも触れただけで絶命するだろう拳に対して2度触れた。

その2度触れたことがミノタウロスを地に這うことにさせたのだ。1度触れた時に体に異常を感じ、2度触れたと感じたときにはすでに地面にいた。

得体の知れない恐怖に恐れたのか、みつともない姿を去らせ出しているのにも関わらずにミノタウロスはその者から離れようと必死にもがいている。

「モンスターいえども【生】にすぎるのね。

……そうだわ、それならその【生】をもっと感じさせてあげるわ」

もがくミノタウロスにゆっくりと近づくと近づくその者はさっきの立場が逆転したように、ミノタウロスに対してその手をミノタウロスへと向ける。

「生きたいのならもつともがいてみなさい。

あの子が味わったことを、皆知るべきなのよ。

そして願わくは、あの子の成長への糧にならんことを」

『ヴツ、ヴオ、ヴオオオオオオオオツ!!!』

!!!

無情にも響き渡るミノタウロスの咆哮は、まるでこれから始まる惨劇の合図だと後に

知ることになる。

.....

「何か聞こえたリリ?」

「いえ、私には何も。それよりも前から来てますベル様」

「今度は9匹か……」

順調にダンジョンを進んで9階層、すでに前回の半分の時間でここまでこれた二人の前には現れたキラアアント。しかしすでにキラアアントはベルにとっては準備運動にしかならなかった。

まずは先頭のキラアアントを一撃で仕留めたあと左右から攻めてきたキラアアントの足を即座に切り落とす。動けなくなった所で確実に急所を狙い仕留める。残り6匹は少し離れておりこれならとベルは右手をキラアアントに向けて

「ファイアボルトオオオ!!!」

掌から放たれた炎雷は目の前のキラアートをあつという間に殲滅させた。本来魔法とは詠唱を行った後で発現するもの。しかしベルの「ファイアボルト」は「速攻魔法」であり、その魔法の名を唱えただけで発現する魔法。

リリに話したらやはりこんな魔法は初めて見たようで、この魔法の威力とどのように使うかを定めるためにあえて魔法を使っている。

「やっぱり唱えるだけで発現する魔法みたいですね。すごいですよベル様。これなら不意打ちで魔法を使えるので奇襲にもってこいです!!」

「なんかそれは悪いような……」

「何を言ってるんですか!! ダンジョンで良いも悪いもありません!! それにこの魔法はベル様にとつての「切り札」です。不用意に使わないようにしてココだ! っていうときに使えるようにしないとイケません。そのためにはまずこの魔法に慣れて、まるで手足のように使いこなさないと……」

「なんかリリって、本当の仲間みたいだよね」

ベルの何気ないその言葉にリリの体がビクツと揺れた。その言葉を言われて気がついたのだ。どうしてここまで私が真摯になつて考えているのかと。そしてベルから言

われた「仲間」という言葉はリリの心の奥へ突き刺さる感じがした。

「な、何を言ってるんですかベル様は。私達はあくまでも契約の元で一緒にいるだけですよ。それにベル様もつと強くなったらさらにダンジョンの奥へ行くことも出来ます。それはつまりお金をもつと稼げるんです。私とベル様は利害が一致しただけの関係です。本当の仲間がお望みでしたら他の方を探してください」

「ご、ごめん……リリ……」

明らかに落ち込んでしまったベルに対してやり過ぎたと後悔するリリ。しかし言ったことは本当のことだ。私はベル様を騙して稼いだお金を誤魔化して盗んで、そして今日はベル様と決別すると決めたのだ。

しかし逆を言えば今日までのこと。いまここで士気を落とされて危険な目にあうのは困る。そう結論に達したりリリはベルにも分かるようにため息をつき、

「しかしいまは私がベルの仲間です。お互いの命を預けあつて一緒にダンジョンに潜つてこうして進んできたんです。ベル様はそれだけでは「仲間」とは呼ばないのですか？」

「そ、そんな事ないよ!!改めてよろしくねリリ!」

「はい、こちらこそよろしくお願ひしますベル様」

簡単に機嫌が治ったベルは10階層へ向けて歩き始める。その後ろをリリは歩きながら

(ベル様が悪いです。リリにあまりにも深く入ってきたから……だからこれでいいんです……)

その決意は揺るがない。今までの冒険者と同じだと言ひ聞かせてその冒険者の背中を追いかける。

.....

「もうー本当になんだったんだロキのやつは!!!」

「……ごめんなさい」

「いやヴァレン某君が悪い訳じゃないんだよ……つていつの間に僕は僕のベルを取ってしまうだろう相手に話しかけてるんだ……」

「??」

これまでがあまりにも衝撃が強すぎた為に、恋敵であるヴァレン某と普通に話していた。いつもならその姿を見るだけで警戒するのだけど……分かってしまったのだ。黄昏の館で住んでから常に警戒して少しでも欠点がないか観察していたのに

「くそーこんなに、こんなに良い子だと分かってしまったら……否定しようにも出来ないじゃないか!!」

はっ!!?もしかしてこれもロキの策略なのか??あの貧乳め……」

「……大丈夫ですか?」

「いや大丈夫だよ。君とこう話してるのもあのロキのせいだと分かったからね。けどね!絶対にベル君は渡さないから覚悟しておくんだよ!!!」

「……………はっ」

よし!!と宣戦布告して満足なヘステイアだが、アイズは訳も分からずに返事しただけである。伝わっていないことに気づいていないヘステイアはアイズと共にお昼からのバイトに向かって歩いていた。

すると目の前からこちらへ向かってくる一人のエルフ。それも見覚えのある姿にヘスティアをジーッと見つけてすぐそばに近づいた所で

「ここで会えて良かったですヘスティア様。それにアイズさんにも会えるなんて……」

「確かエイナ君だったね。どうしたんだこんなところで？」

「ベル君は今日ダンジョンに行ってますか!？」

「それは行ってるけど……ベル君がどうしたんだい？」

「先ほど偶然に聞いたんですけど……」

そこで語れたのはソーマファミリアの会話だった。そこにはベルのサポーターであるリリが同じファミリアからお金を催促されていること。そしてそのリリが今日ある行動に移すだろうということ。

「一体何をするのかは分かりません。ですが間違いなくベル君に何かが迫っていると思われれます。私ではクエストを頼めません。ですからこうしてヘスティア様の元へ急いでいました」

「……何かあるとは思っていたけど……ベル君……」



いくらロキファミアリアの訓練を受けていようが不意打ちをされたらどうなるのか分からない。何よりもベルは純粋である。そこに漬け込まれた結果だと知ったらベルは……

そんなことを考えているとエイナはアイズの方へ

「こんなことをお願いするのはおかしいと分かっています。ですがお願いします。ベル君を助けてくれませんか!!」

勢いよく下ろされたエイナの頭に思わず目を開くアイズ。それを見たヘスティアは

「僕からも頼むよヴアレン某君!!ベル君を助けてくれないか!？」

「でも、私はヘスティア様の護衛を……」

「ベル君の為ならバイトだって休むさ!!黄昏の館で大人しくしている。なんならロキと仲良く……するように努力だってするさ!!だからお願いだ!!ベル君を助けてくれないか!!!」

その勢いのまま頭を下げようとしたヘステイアの前にアイズが

「分かりました。私も心配だから」

「本当ですか?？」

「ありがとうヴァレン某君!!」

「それじゃ、行ってきます」

流石一級冒険者というべきなのだろう。あつという間に走り去ってしまったアイズ。その走り去る前、表情が軽く微笑んだように見えたが気のせいだろう……

.....

「アイズには悪いことしたな」

「仕方ない、これもヘステイアファミアリアを守るためのことだ。それにバイトでジャガ丸くんをつまみ食いするのが目に見えている」

「アイズはアレには目がないからの!!」

ロキファミアの遠征。

構成員とし一級冒険者のみが選抜されたこの遠征は「ダンジョンの調査」をするためのものだった。すでに50階層まで進出したロキファミアだが未だにその階層全てを見回ったわけではない。もしかしたら新しい道、新種のモンスター、珍しいアイテム、セーフティゾーンが見つかるかもしれない。

普段なら遠征のためにヘファイストスファミアの一級鍛冶師と共に遠征へ向かい武器や防具の調整などをしてもらうのだが、あくまでも今回は中層の調査をするためなのである。なので少人数で一級冒険者である彼らが選ばれたのだ。

「チイツ、なんで今さら中層の調査なんか……」

「未だに「あの時の現象」が何なのか分かっていない。ギルドに要請はしたが調査は難航しているようだ。ならば経験者である私達がというのが今回の調査だ」

「でもそれならなんでハジメはいないわけ?」

「言っておくがハジメはまだレベルだ。いくらゴライアスを倒せる実力があってもそう簡単には中層に連れていくわけにはいかない。フィンは調査に連れていくようだったが私がそれを止めたのだ。それとも何か?何か意見があるなら話を聞くが……」

「う、ううん。何にもありません!!」

リヴェリアの凄みにティオナはそれ以上何も言わない方がいいと判断した。これがよくロキが言っていたお母さん力かあーと感じながら

「今日はベルもダンジョンに行ってるんだよね。フィンにリヴェリアにガレスにベト、四人の先生から訓練されてるんだから10階層ぐらい楽勝なんじゃない」

「そういう油断が命取りになるって知ってるわよねティオナ」

「もう！揚げ足とらないでティオネ!!」

でもベルつてもうレベルアップしてもおかしくないよね。どうしてレベルアップしないんだろう?」

「どうなんだろうね。確かに器は出来上がっている。しかし何か足りない…いや妨げているというべきなのか……」

「フィンも同じように感じていたのか。訓練中どうしても「何かから抜け出せない」という感じが見えていた。恐らくそれが原因だろう。しかしそれはベル自身が抜け出すしか、乗り越えるしかない」

「そうだよね。ああ、ベルもハジメも早くレベルアップしないかな」

そんな事を言っていると遠くからざわつき始めた。なんだろうとティオナが振り向くと道の奥から土煙を上げて近づいてくる何かが……

「……アレって、アイズ？」

「なに??まさかヘスティア様の警護を無視して遠征に行くつもりか？」

リヴェリアも振り向いてみると向こうからアイズがトップスピードで近づいてくるのが分かる。だがさつき自分が口にした遠征に付いてくるとは何かが違うように見えた。

「なんじゃい、なんか必死になつとるように見えるぞ」

「そのようだね。おいアイズ、どうしたんだい？」

アイズもフィン達に気づいたようでトップスピードから減速をして合流をした。トップスピードで走った割には汗一つかいてないとは流石一級冒険者だといふべきだろう。

「おい、アイズ。いくら遠征に行きたいからってトップスピードで走ってくるなんてなに…」

「もうベートうるさい!!どうみても違うでしょうが!!」

「そうですよ!!アイズさんは遠征に行きたかったのにキッチンとヘステイアの護衛に勤めたのです!!ここに来たのだから誤解があるんですよ!!そうですよねアイズさん!!」

レフイーヤの熱の籠った言葉に一瞬「あつ」という表情になりかけたがグツと堪えて本来の目的を話すことにした。いまベルと共にダンジョンに向かっているサポーターが何かを起こす気だということ。そしてそのサポーターはソーマファミリアであり、金銭的にかなり困っており追い詰められているようだということを話した。

「ロキから話は聞いていたが…」

「そのサポーター、バカじゃねえのか?あの兎の奴から俺達がいるって聞いてねえのか??それとも分かってやってるのか??」

「ああ、それ多分分かってないよ。この前ベルと話したんだけど「全然信じてくれなかったんですよ!!」って嘆いていたもん」

「ベルみたいに純粋な子なら騙されている、なんて考えるわよね。それもロキファミリ

アから訓練を受けているなんて話したら、同じ立場だったら信じてないわよ」

「なるほど。やはり普段のダンジョン探索から一人でも護衛につけるべきだったか。ベルという人柄を含めるべきだった」

「そんなこと言っている場合ではないぞフィン。ベルがダンジョン向かった時間を考えると恐らく10階層に到着しているはずだ。あそこは霧が出て視界も悪い、不意討をかけるならそこが一番適している」

その話を聞いたアイズは一目散にバベルへ入っていった。後ろから声が聞こえたがそんな事は気に止めなかった。いまアイズの頭の中ではベルの安否しかなかった。

(無事でいて……)

.....

「なんていう奴じゃ……」

「これでは本当に武器も防具も必要ではないではないか……」

「ですから初めから言っていましたよ?」

椿と共にダンジョンに潜っているハジメは先ほどまで『オーク』『バッドバット』『インプ』の群れを相手していた。椿としてはここでハジメの【本質】を見極めようとしたのだが失敗に終わった。

理由は簡単である。何一つ参考にならなかつたからである。

モンスターから攻撃は全て一時停止のより完全防御。そして喰らった衝撃をそのままお返ししているだけ。周りから見たらただ佇んでいるハジメにモンスターが群がり自滅しているようにしか見えない。

まるで光に集まる虫がその光の熱に殺られているのと同じだと感じた。

「しかもその「石火」という短剣。完全に使い物にならない筈なのにモンスターに貫通しておるし……」

「力業なんですけどね」

「何なんじゃおぬしは!!これでは手前は何も作る必要がないではないか!!」

「ですから作らなくてもいいといたんですけど」

「ふざけるではない!!そんな事したら手前のプライドが許さぬ!!絶対に作ってやるから覚悟しておけ!!!」



「ということはまだ潜るんですね」

やっと帰れるかと思いきやまだ諦めていない様子の椿の姿を見ながらため息をつき、次にハジメ達が向かうのは9階層。

「もうベル達に会っても良い頃なんですけど……どうやらかなりのペースで進んでますね」

「それをおぬしがいうのか？おぬしこそ本当にレベル1なのか疑わしいぐらいのペースで潜っておることに気づいておるか？」

「そうなんですか？ベルと一緒にの時は合わせて潜ってましたし、アイズ姉の時は同じスピードだったので特に気にしてませんでした」

「いや一級冒険者と同じペースの時点でおかしいと……思わんからこうしておるんじゃないかな……」

あの時はアイズもリヴェリアも特には何も言っておなかつた。それもそうだが、あの時はハジメの一時停止に驚いており、尚且つハジメのようなレベル1と一緒にダンジョンに潜る機会もない。なら普通に付いてくるハジメに疑問を持たないのは当然ではないか。

椿は武器の試し切りなどでこういう機会もあったからこそ言えるのだが、それでも初めは普通のペースで潜っていたために気づくのが遅かった。

「しかしどうしてベルと一緒にいかぬ。おぬしの実力なら三人でいけば中層へもいけるだろう」

「それは無理ですね。リーリが隠し事している間は一緒にいけません。というか僕の姿は見えませんか」

「確かそれがおぬしのスキルだったの。なるほど信用に値せぬものと共に行っても三人ではなく二人になるの」

「はい、まあベルにはある意味いい勉強になると思ってリーリと一緒にダンジョンに潜ってもらってますが……さて、そのソーマファミアはどうしてくれましょうか……」

「な、なんじやい、おぬし……なんか急に雰囲気が変わったぞ……」

「すみません、ちよつと苛立つことを思い出しまして」

平然としているように見えるハジメだが、未だに頭の中ではソーマファミアを文字通りに「消し去ろう」と考えていた。だがリユーに嫌われたくないという理由が今のハ

ジメをとどめている。

もし、そのとどめているものが決壊したら恐らくソーマファミアは……

「!!!」?

突然何かを感じたハジメ。殺気や視線、虫の知らせとは違う、何かを忘れていた大事なモノを突きつけられたような感覚が……

「どうしたんじや手前。よく分からんが気分が悪そうに見えるの」

「大丈夫です。ちよつと何かを感じたような気がしたので」

「特にはなかったが……気を付けた方がええかもしれんな。大体こういうのは生死に関わることが多い。おぬしではなく周りかもしれないの」

「……ならツバッキーも危ないですね」

「そうじゃな!!しかしおぬしの武器や防具を作るためじゃ!多少の危険なぞ知ったことか!!」

高笑いしながら先頭を行く椿。その姿を見ながらさつきき感覚についてハジメは何

か思い出しそうとしていた。しかし何か引つかかりそれ以上思い出せないと感じたハジメはそれを頭の片隅に残しダンジョンの深みへと歩みを進めた。

.....

「ふふふ、面白くなってきたわ」

『神の鏡』と呼ばれる、下界で行使を許された『神の力』<sup>アルカナム</sup>がある。本来は天界から下界を覗くための千里眼めいた一方通行の能力。

神が催しのみしか使用を許されていない、バレたら即刻天界へ強制送還である。

しかしそれでもフレイヤは『神の鏡』を使用していた。

周囲にいる神を誑しこみ『今日1日限り』『どの「ファミリア」にも不利益をださない』『ダンジョンの一部分』という誓約のもと、リスクを承知で一本の抜け道を作り出していたのである。

「さあ、私に見せてあなたの輝きを。あなたの魂の輝きを」

これから始まるだろう一戦。  
見逃すわけにはいかない。

全てはベルの魂が、その魂の輝きを見るために。

影が薄いからこそ登場シーンがカッコいいです。

「霧……」

「気を付けてくださいベル様。離れると合流が難しくなります」

「うん、リリも気をつけて」

10階層

深くない、けれど視界を妨げるには十分の白い霧がダンジョン中に立ち込めていた。

10階層のダンジョンの作りは8〜9階層の形態をそのまま引き継いでいる。

(それにしても…案外としつくりとくるなあ、コレ)

見失わないようにリリの気配を割くのと並行して、手の中にある《バゼラード》を見やっつた。

使い勝手は上々で、リーチの長さあり安全地帯から楽に攻撃を仕掛けられる気分になる。しかし威力はやっぱり《神様のナイフ》ほど見込めないが十分である。

ベルが《バゼラード》に意識していることに気づいたらリリは、

「ソレ、気に入ってもらって良かったです」

「うん、ありがとうリリ。でも良かったの貰っても？」

「はい、言ってしまうえば慰謝料みたいなものですから」

「慰謝料って、なにを……」

「ベル様!! 来ました!!」

リリの言葉の真意を聞こうとしたがモンスターは待つてはくれない。低い呻き声とともに大型級のモンスター『オーク』が姿を現した。

「はあ……大きいね……」

「逃げてはいけませんよ、ベル様？」

「もちろん、ここで逃げたらガレスさんに怒られるよ!!」

そうガレスさんが言っていた、いつかは当たるだろう大型級のモンスター。一度怯んでしまうと懐に踏み込むのに躊躇してしまい、その一瞬が命取りになると。

そしてリヴェリアが教えてくれた。この10階層のオークは『迷宮ランドの武器庫フォーラム』を使うということ。迷宮の自然の一部を武器に変えてしまうダンジョンの厄介な特性を。そして『迷宮の武器庫』を使わせる前に倒すか『迷宮の武器庫』事態を破壊するという  
ことを。

だからベルはまず距離的に近い『迷宮の武器庫』を破壊することにした。《バゼラード》で一閃による攻撃で『迷宮の武器庫』は半分になり追い討ちをかけるように連撃をする。その間に近づいてきた『オーク』はベルに近づこうとするがリリがボーガンによる牽制をして近づかせないようにしている。

その状況を見て判断したベルはオークに近づき、首筋に深く切りつけた。全く反応出来なかったオークは訳も分からないまま絶命した。

「ありがとうリリ、助かったよ」

「私は何も……」

「そんな事をないよ。よし！今のうちに『迷宮の武器庫』を減らせるだけ減らして……」

そう言いながらベルは周りの『迷宮の武器庫』を破壊しようと動き出す。もちろんリリとの距離を考えて範囲を決めて



(……やはりベル様は、他の冒険者とは違う……)

あの状況でまず『迷宮の武器庫』を壊すことはしない。壊している間にさっきのようにオークが近づいて攻撃をしてくるからだ。ならまずはオークを倒して『迷宮の武器庫』を破壊するのが定石である。

しかしベルは違った。まるで「リリを信用しきっている」ようだった。さつきまでいた8〜9階層とは違いこの10階層は初めてなのだ。出てくるモンスターも初めて。なのに完全に任せただりりに。

(……だから、ダメなんですよ……ベル様……)

ベル様は今までの冒険者とは全然違う。冒険者としても、人としても……

だから辛かった。私がしていることが知られたらきつと幻滅する。いや、それならまだいい。一番耐えられないのは……

(……私を、恨んでもいいです……ですから……)

.....

「ふうー。これだけ削れば」

「お疲れさまです、ベル様」

粗方の『迷宮の武器庫』を破壊し、その間に出てきたオークはまず機動力を削ぎとつていった。そして後で脳天を《バゼラード》で貫つていった。普通は頭蓋骨もあり簡単ではないが、力の入れ方・角度などでかなりやり易くなる。絶命したオークの後には魔石が残り回収をしようと思つていたが

「ちよつと休憩しませんか?？」

「魔石はリリが回収しますので、少し休んでいてください」

「でもまだオークが……」

「離れた所にはいきません。ベル様が見える範囲内だけですから」

「そういつて魔石を回収に向かったり。ベルは近くの岩に腰かけてダンジョンに入

る前にリリから渡された飲み物を手に取った。

流石に疲れて喉がカラカラだったのかその飲み物をイッキ飲みして喉を潤した。その間もリリが遠くに行っていないか気配を感じながら視界に入れながら注意をする。

(今日のリリ、なんか様子が変だよな……)

こうして休憩して思った。

モンスターと戦っていたときは気づかなかったが、何だか自分から避けているように感じてきた。いつもは自分の近くで戦っていたのに複数との戦いになると一番遠いモンスターと戦おうとする。その時はリリの元へいち早く向かおうとして《ファイアボール》を使い一掃したり、スピードを生かしてリリの近くに向かい一緒に戦うことにしていた。

でもそんな事をリリがするなんておかしい。

そんな効率の悪いことをするなんて……

ましてやサポートが、冒険者のサポートを避けているみたいで……

(……あ、あれ……??)

すると突然眠気がベルを襲う。

疲れたといっても軽い運動が続いた程度。眠気が襲うほど身体も心も疲れていない。

(…………ど、どうして…………)

考えもできずにベルはそのまま眠りに落ちた。

そしてそれを見計らってリリがベルの元へ戻ってきて、大胆にベルから『神様のナイフ』を抜き取る。ついでに金目になるものは全部抜き取り、『バゼラード』と防具だけの状態になってしまった。

「…もし、これでもまた会えたら……………」

それ以上の言葉は言わずにリリはその場にベルを残して9階層へと戻っていった。

……………

「……な、何だ……この臭い……は……」

何かしらの強い異臭により目が覚めたベル。それは本当に運が良かったとしか言えない。あの【睡眠薬】を通常の二倍に濃くされたモノを飲んだのに関わらず短期間で目覚めたのだから。

そして目覚めて脳が未だに覚醒してない中で、細めた目で見えたものは拳を振り下ろそうとした【オーク】だった。

「!!?」

頭で考えずに反射神経で行動出来るようにとベートから仕込まれた緊急回避。何が起きたのか頭で考えるよりも早くに身体が動きだし【オーク】からの攻撃を間一髪で真横に転がり回避した。

やっと思考が追い付いて来たときには状況が最悪であることに気づいたベル。周りには10体以上の【オーク】がベルを狙って来ていた。いやベルではない、正確にはベルの足元にある生々しい血肉。狩りの効率を上げるためにモンスターを誘き寄せるトラップアイテム……。

そうこれがここに集まった【オーク】を引き寄せたのだ。

—

こんな最悪な、死にも繋がる状況。

それでもまだベルは絶望はしていない。

すぐに自分の持っているものを把握する。

どうやら持っているのは防具とこの《バゼラード》の2つだけ。金品もドロップアイテムもマジックポーション

も、そして『神様のナイフ』も持っていなかった。

それでもまだ絶望はしない。

【オーク】は10体以上いるが全て倒す必要はない。いまはここにいないリリを探し出すことが先決である。ならこの場から逃げ出せばいい。そして【オーク】の周りには『迷宮の武器庫』はなく天然武器ネイチャーウェポンを持っている【オーク】もない。

なら、まだ絶望よりも希望が大きい。

フィンがよく言っていた。どんな絶望があっても小さなものが大きな希望にもなりえる。だから常に頭を働かせて僅かでも見過ごしではいけないと教えてくれ

た。

「…………ど、け…………」

手に持った《バゼラード》を強く握る。

朝からリリの様子がおかしかった。でもそれを知らないフリしていた。例えこういう状況がリリが起こしたとしてもそれは自分が止められたことははず。

ならリリはきつと苦しんでいる。苦しまなくてもいいのにきつと苦しんでいる。ならそこから助けないといけない。もうリリを苦しませないためにも僕は、

「そこを、どけええええええええええつ!!!」

リリの元に行かないと行けないんだ!!

……………

「人が良すぎですよ、ベル様」

リリは9階層へ戻り一人呟いていた。

荷物の中にはベルから盗んだ金品とドロップアイテムと『神様のナイフ』が入っている。これを質に入れればきつと目標金額に届くはず。

リリは最初からベルのお金と『神様のナイフ』が目当てだった。いまいる環境から抜け出すために、ソーマファミリアから脱退するために売り払い金を集めていた。

それならひつたくりだけでいいのだが、自分をこんな風に陥れた冒険者に仕返ししがたくてあえてサポーターとよそい盗みを働いていた。

しかし、ベルと出会ってしまい罪悪感が生まれた。

どうしてリリを蔑んだりしないのか？

どうしてリリをもの扱いしないのか？

どうしてリリをこんなに信じてくれるのか？

一緒にいればいるほどその罪悪感は募っていき、もうリリの心は限界に近かった。だから選んだのだ、ベルから離れようと。ただのお別れではなくリリを恨んで憎んで殺してしまいたいと思われるやり方を選んで。

「これで、良かったです。こうしないとリリは……」



「何が良かったんだよ、この糞パルウムよ!!」

突然の声に振り向いたりりの身体に衝撃が走る。どうやら相手から腹に向けて殴れたようであまりの痛さにその場に踞ってしまった。

「そろそろあのガキから離れるころだと思つてよ。てめえが使える道は限られている。仲間と綱を張っていたがオレの所に来てくれるなんてな。」

「……………」

「コレも旦那が色々教えてくれたお陰ですわ」

その冒険者の視線の先、リリも苦しみながらも向けた視線の先を見つめるとそこには

「よお、アーデ。元気にしてたか?」

「……………カヌウ様……………」

そこには同じソーマファミアである中年の獣人カヌウだった。そう全てバレていた。ベルから盗みを働くのもそしてリリがどうして盗みをしているのかという理由も。

「最近えらく調子いいみたいだな。だからよ、オレにもちよつと分けてもらえねえか？」  
「リ、リリは別に調子いいわけじゃ……」

するとカヌウは無も言わずにリリの腹におもいつき蹴りを喰らわせた。喘ぎ声も出ないほどの苦痛にのたうち回るリリを尻目にカヌウは持っていた荷物を奪い取り

「ほう、なかなかの金額じゃねえか。それもこんなにドロップアイテムもある。これのどこが調子が悪いんだ、ええ?」

「……か、かえ……」

「それにてめえ魔剣まで持ってやがったのか!!これどうしたんだ?冒険者から盗みとったのか!!」

次々に持っていかれる荷物にリリは何も出来なかつた。

いつの間にか他の冒険者も集まっており、どうやってもどうすることも出来ない。そんな中冒険者同士で山分けを始めており、それを見たりりはあるものだけは守ろうとし

た。

まだ気づかれていない。ただあれだけは、この懐にあるナイフだけは渡せない。そう力んでしまったのかナイフがある所を無意識にギュツと握ってしまったリリの姿を冒険者が見てしまった。

「旦那、こいつまだ何か隠してますぜ」

「だろうな。おいアーデ、お前が溜め込んだ大金どこにある？」

「な、なんのこと……」

するとリリから奪ったボーガンを手にしたカヌウは、リリの肩に向けて矢を放った。あまりの激痛に声を上げるリリに対して静かにさせようと再びカヌウがリリの腹を蹴り上げる。

「惚けるんじゃない、こっちは分かっているんだよ。てめえがソーマファミアから脱退するために貯めている大金があることをな。そうじゃなきゃわざわざめえみたいなパルウムの相手なんざしねえよ!!持っているだろ、大金を隠している鍵をよ。さっさとだせ!!!」

出すわけにはいかなかった。確かに鍵は首からかけて持っているがこれを渡したら今までの苦労が……

「なるほどな、出さねえつもりか。ならこっちにも考えがある」

そういつてカヌウが大きな袋からあるものを取り出してリリの元へ放り込んだ。それはキラアアントの子供でありすでに死にかけていた。ただそれだけならなんの脅威にもならないがキラアアントにはある習性がある。

瀕死のキラアアントは仲間を呼び寄せる。

「分かっているだろう、もう少しでここにキラアアントの大群が現れる。どうやってもてめえじゃ勝てねえ。さていまここで俺達が離れたらどうなるか分かるよな？」

「……そ、そんな……」

「さあ出せアード。別にてめえが喰われた後にキラアアントを片付けて鍵を取ってもいいんだぜ。それをあえてこうして選択させてるんだ。答えは分かるはずだ」

そうリリに残された選択は1つしかない。

それを逃したら間違ひなく死んでしまう。

震える手で首からかけた鍵を外してゆつくりとカヌウへと渡す。

「それでいいんだよ、アーデ。所詮てめえは道具なんだからよ」

「ッ！」

「ほらよアーデ。これでてめえは助かるぜ」

そういつてカヌウはもうひとつの袋をリリの前に放り込んだ。それはここから抜出すためのアイテムかと思つたが、それはカサカサと音を立てて動いている。

「ま、まさかこれって……!?!」

「助かるぜ。もう何にも縛られなくてすむんだからな!!!」

袋の中身を見なくても分かる、この中身は瀕死のキラアアント。ただでさえ大群がくるといふのにその二倍がいまここに向かっているのだ。

「長居は無用だ。さっさと離れねえと巻き添えをくらうぞ」

「そうですね旦那」

「リリを!!リリを助けて下さい!!!なんでもしますから!!お金も何とか渡しますから!!!」

「そりや魅力的だが、もうパルウム<sup>道具</sup>には用はねえよ」

その言葉で気づいた。最初からリリをここで殺すつもりだったと。その絶望に血の気が引くリリの表情を見て笑い出す冒険者達。

いつもなら悔しくて恨んで憎しみで心が張り裂けそうになるのに、もうなにも考えられないくらい頭が真っ白になっていた。

そして笑っていた冒険者達の一人があることに気づいた。さっきまでいたカヌウがいないことに。

「お、おい。旦那はどこにいった!!」

「し、知らねえよ!!」

「やべえぞ…もうキラアアントが近くまで来てるはずだ」

「に、逃げろおおお!!!」

突然慌てて駆け出す冒険者達。この冒険者達もカヌウ無しではキラアートの群れから切り抜けないと言うことが分かっていたようであり、そして走りだした先で

「ぎ、ぎやあああああああ!!!」

「や、やめがあああああ!!!」

「誰か助けてくれ!!!」

「……………だれ……………か……………」

断末魔が聞こえてきた。ついさつきまでリリをバカにしていた冒険者が次々に死んでいったのだ。そしてカサカサと多くの重なりあつた音が近づいてくる。

「……………」

声もあげられなかった。目の前に大量のキラアアントがいるのにも関わらずに。もう少して死んでしまうかもしれないというのに不思議と恐怖がなかった。

そういまリリが感じているのは恐怖ではなく、諦めだったから。

「……やっぱり、天罰ですかね……そうですよ。こんな悪いことをしたりリリが……最後を向かえるには丁度いいかもしれませぬ……」

自分の死を受け入れていた。これまでやってきた悪行を考えると仕方ないと、受け入れるしかなかった。

ただひとつだけ後悔があった。

この懐にある『ナイフ』、そしてこの持ち主に対してどうしても後悔しか思い浮かばないのだ。

「……べ、ベル様……ごめんなさい……リリは……リリは……とても悪いパルウムでした……でも、でも、もう一度……会えたら……生まれ変われたら……リリは……」

リリの周りを取り囲むキラークラント。すでに狩れる範囲まで迫っていた。リリは死を覚悟して目を瞑り、

「……もう絶対に嘘は……つきませぬ……裏切りませぬ……だから……リリをもう一度……」



キラアートの牙がリリの身体を、

「……仲間とよんでぐれませんか……」

「なら本人に聞いてみないといけませんね」

声が聞こえた。まだ身体に痛みはこない、まだ死んでない。誰かは分からないがその声が気になってゆっくりと目を開けるとそこにはキラアントが襲いかかろうとしていた。

「き、きやあああああ!!!」

命が助かったと安心したため、襲いかかろうとするキラアントに対して命が欲しくなったリリは本能的に離れようと後退する。しかし後退してもキラアントは襲ってこない。それどころか襲いかかろうとしたところで動いていないのだ。

「……一体、なにが……」

よく周りを見るとキラアアントの群れの一番前の個体だけが同じように固まっている。まるで作り物のように。

「僕の姿は見えないと思いますが声は聞こえますよね」

「だ、誰ですか!!あなたがこれをしたんですか!!」

なにが目的ですか!!リリのお金ですか!!」

「さっきまで死にかけていた人がいう割には元気がありますね。意外や意外にベルベルは人を見る目があるんですね」

「……ベルベル……つて、……もしかしてベル様……」

姿は見えない。見えないけど確かにいることは感じる。そして何故だがそれに対して恐怖心がない。もしかしてベル様の関係者だから……

「初めまして。ヘステイアファミリアのトキサキ ハジメ 一といます」

影が薄くても仲間の為に行動します。

「ヘステイア…フアミリア…」

確かにそう名乗った。ベル様と同じフアミリア。

いつかベル様が紹介してくれると言ってくれた仲間

その人がいま、見えないけどいまここに、いる。

するとキラアアントの群れの向こうから声が聞こえてきた。

「こらー!!!儂を置いて先に進むではない!!!」

「すみませんツバツキー。後始末はよろしくお願いしますね」

「ふざけるではない!!!あぁーもうー!!!手前ら邪魔じゃー!!!」

椿は手に持った刀でキラアアントを切り裂いていく。

先ほど殺られた冒険者とは違い、苦戦することもなくただ邪魔だから切るといふ発言  
道理に動作をしているだけ。

(す、スゴい……キラーアントを簡単に……)

今まで冒険者と一緒にダンジョンに潜ってきたがあんなに強い人は見たことない。ならいまこつちに向かつてきているのは、

(……一級冒険者……それもツバツキーって…何処かで……)

そんな事を考えているとキラーアントの群れを一直線に切り開いてきた樁は、はじめが停止させたキラーアントを飛び越えて安全圏へと入ってきた。

「どれだけキラーアントを呼び寄せとるのじゃ！」

儂とてあれだけの数は骨が折れるぞ!!」

「ご苦労様です。ですが後ろ見てください」

「なっ!?!」

この安全圏を作った防波堤停止したキラーアントの上を器用に登ってきたキラーアントは、その足をう

じゃうじゃと動かす姿が丁度視線の高さにあるため、もうなんかちよつと、

「き、気持ち悪い!!」

「もう少しリーリと話すことがあるので少しの間よろしくお願いします」

「それを後回しにして手伝わんか!!」って、無視をするな!!」

ハジメの姿が見えないのでどういことが起きているのか分からないが、どうやらこの女の人を無視してリーリ??<sup>私</sup>の方を見ているみたいだ。確かに異様な視線が前からある気がするのだが全く見えない。

無視をされた椿は「覚えておれ!!」と叫びよじ登ってくるキラアートを左右に移動しながら安全圏に侵入されないように撃退している。

「足が、足が気持ち悪いのじゃ!!はよ、話すことを話して手伝え!!」

「了解です。」

さてリーリ、君には聞かないといけないことがあります」

この状況下でハジメがリーリに聞きたいこと。

なんとなく、いや、言われることが想像出来ていた。

きつとここにいないベル様ことだと。

ならどうしてここにいないのかと。

何故一人でいるのかと。

それを聞かれたらもう素直に話すしかない。

誤魔化してその場をやり過ごそうが、正直に話そうがきつとどちらとも同じ罰を受けることになる。

なら、ここは正直に話してしまおう。

そう決めたリリはゴクリと唾を飲み込みその言葉を待った。

「リリ、君は、





は!!!

「重要ですよ?」

「下らない事とは何ですか?!?!この人は人の部屋に無断で入って来たんですよ!!!それも勝手に乙女の部屋を物色して下着まで見られたんですよから!!!」

「女の子が住むにはあまりにも酷かったもので」

「酷いのは手前の頭じゃ!!!」

「酷いのは貴方の頭ですよ!!!」

正直殴ってやりたかったが攻撃が効かないと分かっている椿は、考えも無しに安全圏からハジメをキラーアントの群れに向かって投げ飛ばした。

姿が見えないリリだが、椿の動作を見てそこにハジメがいることは分かっていた。しかしそのハジメが椿の手により投げ飛ばした動作を見てしまうと流星に血の気が引き

「な、な、何をしているんですか貴女は!!!」

確かに死に値することをしましたけどキラーアントの群れに投げなくても!!!あのままだと死んじやいますよ!!!」

「…なんじゃ、手前は優しいの。」

あれぐらいのことをせんと腹の虫が収まらぬと思っておったが」

「し、下着を見られたのは嫌でしたが…部屋はもう快適になりましたので………つて、言っている場合ではないですよ!!!はやく助けないと!!!」

「心配入らぬ。あれぐらいで死ぬなら儂は苦勞しとらんわ」

それはどういう意味なのかと思っていると飛ばされた位置から突然に土煙が上がり、次の瞬間にはキラアアントの群れの一部が直径三メートルの穴を開けるように潰れた。

比喻でもなんでもない。言葉の通りにキラアアントの群れが何かに押し潰されたように倒されたのだ。

そして次から次へと同じように群れが潰され丸い穴が空いていき最終的にすべてのキラアアントが潰された。

嘩然としていたりりの近くに何が落ちてきた音がし、そこへ椿が近寄っていき、

「手前、一体何をしたのじゃ？」

あんな倒し方見たことがないぞ」

「空気を一時停止させた後にその上から止めていた衝撃を解除させてました。するとまる

で階層主級に潰されたみたいになります」

「……全然参考にならない戦いじゃ……」

はあーとため息をつく椿。だがリリはそれどころではなく、

「く、空気？一時停止??衝撃???

一体何を話しているのですか??」

「リリは知らなくてもいいですよ」

「いや、あんなの見せられて!!」

「それより言わないといけないこと、ありますよね?」

それには思わず身体がビクツと反応した。さっきの衝撃的な発言で忘れていたがリリにとっては未だに危機から逃げていない。仲間であるベル様を置いてきたなんて、それも盗むことを目的として近寄り、自分の身が危ないと感じてベル様を窮地に追い込んだなんて……

「そ、それは……」

「でも僕に話しても何も解決しませんし、こういうのは本人に話さないといけませんね。というところでベルベルがいるところまで案内お願いします」

「えっ??で、でも…ベル様は……………」

「何をしたかは聞きませんよ。聞くとしても僕の目でリーリの目で確認してからです。まあ、大方こんな風に大量のモンスターをベルにぶつけたってところじゃないですか

「??」  
「!!!??」  
「」

凶星に身体がまたビクツと震えた。いやそれだけではない。いま自分の身に起こったことを自分がベルにしたという現実が襲いかかってきた。あの恐怖を孤独をベルが味わっていると思うと、罪悪感や孤独感や恐怖が頭や心を埋め尽くしていく。

だから気づかなかった。その言葉を聞いてビクツと震えただけではなく今もずっと全身が震えて顔が青ざめていることに。

「あら?当たってしまいましたか」

「んな呑気に言っている場合かあ!!」

手前の仲間は手前とは違い普通の冒険者レベルじやろうが!!」

すると椿はリリの胸元を掴んで吊り上げ

「言え!!はよ行かなければ並みの冒険者では死ぬぞ!!」

「……もう……無理……ですよ……」

「!!手前はあ!!!」

思わず手を出してしまう椿に対してリリは目を瞑らなかつた。こうなることは分かっていた。リリはダメな子だから仕方ない。それにベル様を殺してしまったのだから暴力されても……

「はい、ダメですよツバツキー」

「なっ!!?止めるなハジメ!!!」

何をしたのか分からないが当たるハズの拳が途中で止まっていた。それも拳を受け止めて止めたようには見えず、まるで拳そのものを、攻撃を、動きを止めてしまったような止まり方をしている。

「こんな事をする前に確認です。」

確認しないことには何も始まりませんから」

「手前はそれで良いのか!!」

間違いなくこの手前は仲間を裏切り、さらに何かの方法でモンスターを大量に呼び寄せて一人にしたのだぞ!!」

それがどういふことか、手前でも分かるはずじゃ!!」

なのに何故そんな冷静でいられる!!?手前は仲間ではないのか!!!」

そうだ。この姿の见えない冒険者はおかしい。

仲間が死んだかもしれないのに、こうしてその原因が目の前にいるのにどうして冷静にいられるのか?」

あのベル様のお仲間ならきつとベル様を大事にしていると思っただのに……

「大丈夫ですよ。今日ステイタス更新したそうですから。それに時間的に解除されてますから。」

「確かにステイタス更新すれば強くはなる。だが、」

「とにかく行きましょう、見てみれば分かります」

その自信満々な言葉と冷静な態度に椿はこれ以上は言わなかった。もしかしたら何かあるのかと思つてしまったのか、呆れてものが言えなくなつたのか……

何も言わずに掴んだ手を離してリリを解放した。

それと同時に椿の腕自体も動くようになったようだが、リリはそれどころではなく未だに顔が青ざめていた。

すると何処からか声が、見えない冒険者から、優しい声が、

「ベルベルなら大丈夫ですよ。」

なにせフィンフィンにリヴェ姉にガースにベバートから徹底指導されてましたから」

「……………誰ですかそれ……………」

その声は、更なる不安しかなかった。

……………

「そ、それでは貴女はヘファイストス・ファミリアの団長なのですか？」

「そうじゃ、団長の椿・コルブランドじゃ」

10階層に走りながら自己紹介をしてもらったリリは衝撃を受けた。ヘファイストス・ファミリアといえばヘファイストスが主神であり、鍛冶の神としては他の追隨を許さないほどの技術を持っており、それに裏打ちされたヘファイストス・ブランドは冒険者の間で最も信頼が厚いと言われている。

その中でも「ヘファイストス・ファミリア」の頂点に君臨するのが椿・コルブランドであり名実ともにオラリオ最高の鍛冶師。ダンジョンで自らの武器の試し斬りを行ったことで強くなり、鍛冶師でありながら第一級冒険者級の戦闘力を誇ると聞いたことがある。

そんな凄い方がどうして名も知れないファミリアの、それも聞いた話だとレベル1の冒険者と一緒だなんて……

「どうして椿様が、その……えーと……」

「言いたいことは分かるわい。しかし手前もさつき見たはずじゃ、あれはレベル1ではありえん力だと」



「そ、それは……」

「まあ、一番の理由はそんな規格外の奴の武器や防具を作ってみたくなったのじゃ!! それだけでは理由としては弱いかの?」

「い、いいえ! そんなことはないです!!」

それだけの理由とはいうがきつとそれは自分では想像できないほどの思いがあるのだらうとリリは感じた。

実際椿は規格外すぎて何をどうしたらいいか分からなくなっている。だなんて言えない。言う必要がない。

そこからしばらく黙ったまま走っていたが、

「リリと、申したな。儂はまだ手前を敵だと思っておる」

「は、はい……」

「それでもこうして一緒におるのはベル坊の安否を確かめるためじゃ。もし最悪、いや、冒険者としての生命が絶たれておったら……儂は手前を切る」

「ッ!!」

分かっていた。分かっていたがこうもハッキリと言われると恐怖で身体が動かなくなりそうだった。恐怖で息を止めてしまえばいいそうだった。それでも心の何処かでベルの無事を信じている希望があるからなのか…その足を止めずにすんだ。

「何を言っているんですかツバッキー」

「手前は黙つとれ。」

手前のファミリアの問題だということは分かつとる。

しかし儂は手前のように冷静ではいられぬ。この感情を押し殺したままではおられぬ。やったらやり返すなどと子供じみたことだとは分かっているもお儂は……」

「ツバッキーはいい人ですね」

「な、なんじやいきなり?!?!」

大体手前が罵声の1つでも言わんから儂が!!!」

「……そこまでいうのでしたら1つ」

何故だろう。さつき椿様が怒ったような恐怖の感じではなく、冷たく、痛く、まるで氷のようなものがリリの周りを……

「この先、また同じようなことをしたときは止めます」

「……えっ、それは……どういう……」

「言葉の通りですよ。止めます、永遠に」

分かった。分かってしまった。

これは殺気だった、それも氷ように冷たく、肌にヒリヒリと感じる、本当にヒリヒリそのものが終わってしまうんじゃないかと思わせる殺気が伝わってたのだ。

それを感じた時にはリリの足は動かなくなり、呼吸さえも忘れてしまい、その場に倒れてしまった。

「お、おい!!!」

「……やっぱりやり過ぎましたね……」

「なんじゃさっきの殺気は?!?!」

「うまいですねツバツキー。「さつき」と「殺気」をかけたんですね」

「て・ま・え・はー!!!」

「すみません。どうも昔から感情をコントロールするのが難しくてですね。とくにこういう感情を出すときがやり過ぎてしまいました」

だから抑えていた。

なんて言葉では簡単だが感情をそうも簡単には抑えることが出来るのか?!そしてコントロール出来ないほど強い感情を持っているということなのか?

しかしそれ以上は聞かなかった。

そこからはプライベートなことであり、きつとハジメも聞かれたくないだろう。そう思いとにかく倒れたりりを背中で担ぎあげた椿は

「しかし手前が起きんと正確な場所が分からんぞ」

「……そうでもなさそうですよ」

小さな声で言ったハジメに何かあるのかと言葉を止めて静かに耳を澄ませてみた。すると遠くの方からザザザと何かが駆けるような音と、ザスツと肉を裂くような音が響いてきた。

「どうやら近いみたいですね」

「急ぐぞ!!」

その音は恐らく10階層の入り口から聞こえて来るものだろう。そしてその音は恐らく……

音が聞こえてくる距離だからだろう、10階層に近づいてきたようで二人の視界では遠くの方に小さな光が見えていた。

洞窟を走り抜けて拓けた所に出てきたら突然に眩い光が視界を奪った。あまりの眩さに一時見えなくなっていたが少しずつ視力が戻ってきた。そしてそこで椿が見たものは、

「い、これは……」

そこには恐らくオークと思われる真つ黒に焦げた三体の死体があった。そしてその前には息を切らしているベルは未だに戦闘態勢を崩さずにいた。そうまだ周りにはオークが複数存在している。

「ぶ、無事であったか!!いま手助けに」

「ダメですよツバッキー。手を出さないでください」

「な、何を言っておる!!?もう立っているのもやつとではないか!!」

「ダメです。いまベルベルは戦っているんです。

そしてそれは……リーリがキチンと見ないといけないことなんです」

その言葉に椿の背中で動きがあった。それを感じた椿は何も言わずにしゃがみこむとリリはゆつくり背中から降りた。未だにその目で映る光景が信じられないのか確かめるように一步一步ともつと見える場所へと歩きだす。

「……うそ……です……」

信じられなかった。確かにそこいらのレベル1よりもベルは強いと思っていた。だが、それでもレベル1の枠から離れているなんて思っていなかった。そしていま息を切らしながら再びオークへ駆け出すベルは

「…あの方は…本当に…本当にレベル1なんですか……」

「そうですよ。間違いなくレベル1です」

「でもあの動き、スピード、判断、力どれもレベル1なんて思えません!!!」

「それはそう感じますよね。ステイタスには戦い方のコツが良くなつたなんて書いてませんからね

あつ、ステイタスに影響してないというわけではないですよ。ただですね、いまのベルの戦い方は間違いなくレベル1ではないでしょうね」

そんな屁理屈で……と思うが現に、今現在ベルはオークと戦っている。そしてそのオークを

「………圧倒している………」

囲まれた状況にも関わらずにベルはまるで何処から攻撃が来るのか分かつているかのように回避して、そのままスピードを上げて確実な急所を狙い攻撃が当たる瞬間に力を一気に加えて致命傷を与える。それを繰り返しながらあつという間に囲んでいたオークを全滅させた。

しかしまだ正面には五体のオークが近づいていた。

そしてベルはもう倒れそうである。あれだけ動けばもう倒れ込んでもおかしくないのにまだ立っている。

「……………こを……………け……………」

何かを言い一歩、一歩とオークに向かって歩く。それを見ていたりりも思わず駆け寄ろうとしたが何かに遮られた。

「なっ!?ど、退いてください!!もう十分じゃないですか!!ベル様はもう」

「いえ、まだです。ベルベルはまだ立っています。そしてまだ戦おうとしています」

その言葉にりりはもう一度ベルの方を見る。未だにベルはオークに向かって歩いている。もしかしてベルは「逃げる」という選択肢が見えていなく「オークを倒す」と言うことしか見えていないのか？

「……………そこを……………どけ……………」

「……………えっ……………」

違う。ただ倒すだけならそんなセリフは言わない。



ならどうしてオークが何かに対して遮っているかのようなことを……

「……リリを……リリを助けるんだ……」

「……べ、ベル……様……」

自分の名前を言われてやつと分かった。

一体なんの為にわざわざオークと戦っているのかを

「……リリは苦しんでいるんだ……苦しまなくてもいいのに……苦しんでいるんだ……」

「……私の……私……は……」

逃げてもいいのに、ベルはオークから逃げない。

逃げたらリリを助けられないと思っているから。

すでに満身創痍で思考もまともに働いてなくても、ベルはただリリを助ける為に、

「……だから……だから僕は……そこから助けないといけないんだ……もう……リリを苦し



影の薄さを忘れるほど出来事です。

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

あれからどれくらい時間が経っただろう。

ギリギリの戦いをしてきたベルは最後の力を振り絞り、掌から放たれた炎雷えんらいを最後のオークに命中させる。魔石の回収などいまのベルにはなかったのか、「ファイアボルト」の威力が強すぎたのか、オークの上半身は吹き飛び絶命した。

それを見届け力尽きたのかベルはその場に倒れ、近寄ることを我慢していたりりや椿が駆け寄る。

「ベル様!!ベル様!!」

ダブルボーション  
「二重回復薬じゃ!口を開けい!!」

その声に反応したのか僅かに開いた口の中に無理矢理飲ませる。二重回復薬は体力と精神の両方を回復させるものでありベル達にはあまりにも高い一品である。

「いいんですかそんなものを飲ませて。言つときますけど僕もベルも買い取るお金ありません」

「んなことを言つとる場合か!？」

「言っている場合です。別に大した怪我もありませんので自然回復させとけばいいんですよ」

「……手前、本当に仲間なのか？」

「当たり前ですよ」と平然と返してくるハジメに「お、おお……」としか言えなかった椿。その返しにそういうものなのかと逆に考えてしまい、よく考えるとハジメの言ったように別にそこまでしなくても良かったのかと自分のやったことに少し疑問を持つてしまふ。

レベル1がオークを複数、それも一人で相手して生き残った。その奇跡といえる光景を目の前にして椿も興奮したのは確かだった。だからいてもたってもいられなくなつたのだろう。

ちよつと冷静に考えているとベルが意識をハッキリさせたようで、

「……あ、あれ、ハジメ？」

……今日は神様と……一緒にやなかったっけ？」

「僕のことはいいいですから、ほら隣の子に意識を向けてください」

目の前にいたハジメが気になり話しかけてきたのはいいが、今までなんの為に戦ってきたのかとツツコミそうになったハジメ。しかし少なくとも混乱もしていない、そして頑張ったご褒美として優しく誘導してあげることにした。

ハジメに言われて視線を横にずらすとそこにはさつきまで会いたかった人物がいた。

「……あつ……」

「べ、ベル様……わ、わたし……」

視線が合い、思わず外してしまったり。どうしたらいいのか分からずにいると突然身体に衝撃と何かに包まれた。

「無事で良かったよリリ!!!」

「べ、ベル様!!!」

「突然いなくなつたから心配したんだよ!!もしかしたらオークになんて思ったけど、無事だつたんだね本当に良かったああ!!!」

「ベル様!!ちよつと痛いですよ!!!」

感動で力加減が分からなくなっているベルにハジメは持っていた【石火】でその頭を叩いた。鈍く痛そうな音が鳴り響き思わずリリを抱き締めていた手を離して頭へと回す。

「はい、やりすぎはダメですよ」

「ツ!!!……ぜ、絶対にハジメのほうがやりすぎだよ!!」

「僕は人に応じて対応を変えています。ちなみにベルにはまだ物足りないぐらいです」

「僕がこういうのはおかしいけど、今まで戦っていたんだから優しくしてもいいと思うけど!!!」

流石二重回復薬は違うなーと感心しながら適当にベルの愚痴を聞き流すハジメ。すでに蚊帳の外に出されてしまつたりは何と話しかければいいのか分からずじつと

待っていたが、

「……………あ、あの…ベル様……………」

「だからハジメは!!!って、ごめんリリ、どうしたの?」

「……………ご、ごめんなさい!!!」

勢いよく頭を下げるリリに対してちよつと驚くベル。一体何について謝っているのかと思っているとリリから話始めた。

「り、リリは悪い小人族バルウムなんです!!私は報酬金の山分けを2/5を3/5に誤魔化していたり、ベル様が大事にしていたナイフを盗んだりしたのです!!!」

そういつてリリは懐から神様ヘステイア・ナイフのナイフを取り出した。リリから貰ってついさつきまで一緒に戦った《バゼラード》は刃がボロボロにかけてしまい使い物にならなくなっていた。

もしリリが神様のナイフを盗まずにいたらきつとベルはここまで窮地に立たされることはなかっただろう。

そしてリリは震えだしそんな身体を必死に押さえつけ、一番謝りたかった罪深いことをベルに告げようと言葉を、

「そして私はベル様をこ」

「もう帰ろうっかりリ。流石に疲れたよ」

言いかけたところでベルが遮ってきた。どうしてと頭にあつたが言わないといかないと思いうう一度、

「私はベル様を」

「ハジメはどうするの？一緒に帰る？」

「……ベルが帰るなら帰りましょうか」

「……儂もただの付き添い、異存は無いわ」

まるでそれ以上言わせないようにこの場を去ろうとする。でもリリはキチンと言わないといけない。あんな酷いことをしておいて何もなくて終わるなんて出来ない。



「聞いてくださいいベル様!!私はいベル様を」

「……知っているよ、リリ」

「そうですか……リリは」

「誤って道具を落としたんだよね。そして道具を拾うとしたけどオークが近くにいて僕も爆睡していて。なんとか近くに冒険者がいないか探してくれたんだよね。でもやっぱり霧があるから道に迷ってちよつと遅くなったけど無事だったんだから気にしないでいいよリリ」

「…違う、全然違う。」

あの道具、トラップアイテムはわざと置いた。冒険者を探しに行っていない、リリは逃げ出した。遅くなった訳じゃない、助けなんて、迷うことなんて、探そうなんて、

「…違います……リリは、リリは……リリはいベル様を!!」

「ありがとうリリ。仲間になってくれて」

その言葉にリリは固まった。

どうしてそんな言葉がいま出てくるのか分からなくて、優しい表情でリリを見てくる

ベルが分からなくて。

「リリがいたからいっばい稼げたし、ハジメとは違うサポーターだったからなんか新鮮で楽しかったし」

「……………そうでした、サポーターでしたね」

「なんで手前本人が忘れておるのだ……」

最近ではベルのサポーターしなくても良かったので、と隣で言っているのが聞こえるが、いまはそれどころではない。

「言いましたよね!!リリは誤魔化していただきます!!」

たまにはベル様より多くお金を取ったり、何度もこのナイフを盗もうとしたんです!!!」

「うん、でもそれは僕の危機管理が足りなかったから。」

それを知れたのはリリのおかげだから」

「何を言っているんですか!!貴方はバカなのですか!!」

リリは盗人なんです!!罪人なんです!!なんで優しくするんですか!!リリが子供に見

えるからですか!!! こう見えてもベル様の1つ上なんですからね、このロリコン!!!!  
「えええ!!!」

「えええ!!!? つてどういうことですか!!」とちよつと路線が外れて話し合いになっており、  
「なるほど、だからあんな下着を…」「手前は黙つとれ!!!」と隣ではちよつとしたコント  
をしていた。

「だからこんなリリを仲間だなんて……何を考えてるんですか!!!」  
「何をつて……僕のサポーターはリリがいいんだ」

ううん、違う。サポーターじゃなくても、リリは僕の仲間なんだ」

サポーターじゃなくてもリリがベル様の仲間。

それを聞いただけで嬉しさが溢れて涙が出そうになる。

それを必死に押さえ込んでリリはベルに問いかける。

「リリは、リリはいつかベル様を裏切るかもしれません。ベル様の命を奪うことになる  
かもしれません。それでも……それでもリリをまだ仲間っていうんですか?」

自分でももうそんなことはしないって分かっている。分かっているけど聞いておきたいのだ。いまベルがどんな風に思っているのかを、リリを本当に仲間だと思っているのかを。そしてその返事もリリは分かっていた。

「それはしてほしくないけど……でもやつぱりリリは僕の仲間だよ。だから僕はリリを信じるよ。違うかな、リリが信じられるように僕は頑張るよ」

そのあとのことはよく覚えていない。ただ大泣きをしたりリリを二人が慰めてくれたことは覚えている。だけでもう一人、姿を見えないあの人は何をしてたのかは分からなかった。

.....

「リリはベルベルに任せておいていいですね」

ベルの言葉を聞きやつぱりベルベルはベルベルだと思ったハジメは10階層の、ベル

達から離れた場所を歩いていた。

ダンジョンを降りていた時に感じたアレがどうもここから感じる。何かは分からない、だけどそれは何かを思い出すきっかけのような、気が……

「思い……出す……僕は何か忘れている……」

僕の過去の記憶は全部覚えている。なのにどうしてそんなことを思うのか？よく分からないがこの霧の先にその答えがあると思えば歩いてきたのだが、

「いいのよ、まだ思い出さなくても」

遠くから、この霧の向こうから聞こえたきた声。そしてゆつくりと霧に映るシルエツトが見えてきた。

「誰かは知りませんが、僕のことを知っているんですか？」

「それは知りたいでしょうね。でもそれはダメ。あなたはこれから更に強くなってもらわないといけないの。だからダメなのよ」

「なら、言わせるまでです」

「強気ね。いつもの貴方でもここまで強くない。やっぱり知りたいのね自分のことを」

徐々にハッキリしてくるシルエット。

間違いなくあの感覚はこの人である。

そしてこの人は僕の何かを知っている。

「追加です。貴女が何者か知りたくなりました」

「……ふふふ、いいわね。なら予定を変更しましょう。アレは貴方に当ててるつもりだったけど、私が直々にお相手してあげるわ」

するとその人型のシルエットとは別に遠くから何か近づいてくる。それもかなり速くあつという間に人型のシルエット抜き去って現れたのが、

「ミノタウロス!?!」

まるで意志があるように、目の前にいるハジメの横を通りすぎて何かに向かって走り

去った。そしてその先にはベル達がいる。

「一体何を考えているんですか?？」

「さっきのモンスターを貴方に当てるつもりだったの。でも久しぶりに戦ってみたくなった、だからアレは貴方のお仲間<sup>に</sup>当てるわ。いい経験になるわよ、苦手なんでしょう。ミノタウロスが」

それを聞いたハジメは有無を言わずにシルエットに向けて衝撃波を放った。霧はその衝撃波により飛散していく。そして衝撃波はその人物に当たったのだが、どういうわけか全く効いていない。防御の姿勢もせず<sup>に</sup>まるで自分が使っている一時停止のよう<sup>な</sup>ことが……

「酷いわね。でも冒険者としては間違つてないわ。容赦なんていらぬ。少しでも甘えを見せたらやられてしまう。少しは身体に残つていたのかしら?？」

「……さっきから何を言つて……」

「気にしなくていいのよ。でも知りたいなら……」

霧が晴れたその先にいた人物。身体を覆うマントからでも分かる華奢な体つきで、顔が見えないほど深くフードを被っている。

それなのにどうしてなのだろうか？なぜ会ったことがあると、この人を知っていると感じているのだろうか？

「向かってきなさい。」

ただし、今までの戦い方で勝てると思わないことよ」



影が薄くて再び主人公無しのストーリーです。

「全く…何処にいったのじゃ手前の相棒は？」

「スキルがなくてもハジメを探すのは難しいですよ…よくダンジョンで離れ離れになることが多くて……」

「なんか笑い話になつとるようじゃが、ダンジョンでは命取りであることは分かつとるのか」

「それは大丈夫です。今まですつかり忘れていたんですけど、僕ハジメにこれを持たされているんです」

ベルの容態も良くなり地上へと戻ろうと思つたのだがいつの間にかハジメがいないことに気づいた。とりあえず周辺を探しているのだが全く見当たらずにハジメへの愚痴を言っていたところで、ベルが何かを思いだしポケットから小さな箱を取り出した。

「何ですかそれは？」

「ええーとね、赤いマークがあるからこれが爆発物で、こっちの黄色が閃光弾だったか

な」

「……………すみません、言っている意味が分かりません」

「あはは…僕も同じ反応したよ…」

苦笑しているベルを見て適当に言っている訳では無いことは分かったが言っていることは分からない。それをさせているのがハジメと分かっている椿は頭を抱えていた

「でも便利なんだよコレ。同じ階層で光を遮るものがなければ閃光弾で知らせるし、爆発物は…あまり使いたくないけどコレはコレで音とか振動とか凄いから」

「ハジメを見つけるのに大層なものを…」

「あつ、爆発物は階層主にダメージを与えられるぐらいはあるっていったような……………」  
「手放せ!!それ危険なものじゃ!!!」

ハジメはおかしいと思っていたがもしかしたらベルもその影響を受けておかしくなったのか……………

まるでコントをしている三人が一齐に何かを感じ取った。

「!!!?」  
「!!!」  
「なつ!!!」

それは死に直結してしまうような圧倒的な殺気が、この霧の奥から襲ってきたのだ。その殺気に耐えきれずにリリは気を失い、ベルはやつとのことで意識を保っているが力が抜けて片膝を付いてしまい体が上手く動かせずにいる。椿は流石だというべきだろう、脂汗をかいているが体も動きおり現に気絶したりりの元へ駆け寄った。

「つ、椿さん、こ、これは…」

「分からね!!じゃがこの階層にいるべき存在がおるのは確かじゃ。逃げるぞ!!いくら手前が動けても勝てぬ!!!」

それは椿を含めてその気配敬に挑んでも勝てないということ。一級冒険者がそんなことをいうことは間違いなく……

「何をしておる走るのじゃ!!」

「は、はい!!!」

リリを背中に乗せた椿は先頭をきつて霧の中を駆ける。その後ろをベルが追いかけるがゆっくりと離されていく。

(やはりまだ体力が回復しきれておらぬのか……)

このままでは追い付かれ……!!?)

ベルの様子を見るため振り向いた椿はその先に迫り来るものを見た。アレがもうベルの近くまで近づいていた、それもものすごいスピードで未だにベルは気づいていない。もう考えている余裕などない!!

雑ではあるが背負ったリリを走りながら背中から落とし身軽になったところで一気にベルとアレの間に入り込んだ。

そこでベルも何かが起きたことに気づいたようだが、次の瞬間には目の前にいた椿は姿を消していた。

「……………えっ?」

何が起きたのか分からず動きを止めてしまったベル。周りを見渡すといつの間にか吹き飛ばされ壁に激突している椿。口から血を流しておりビクリとも動かない。

椿の元へ近寄ろうとした時、頭ではなく体が勝手に反応したのだろう。何故か倒れるように姿勢を低くしたベルの上を何かが物凄いスピードで横切った。

それを感じ取ったベルは身体中から冷や汗を流した。すぐさまその場から離れて距離を取った。そしてそこで気づいた、椿は戦闘不能にさせてベルを襲ってきたものは……

「……………ミ、ミノタウロス……………」

その目に映るミノタウロスにベルの身体は震え始めた。甦る記憶、迫り来る恐怖と死を連想させる対象がいま目の前にいる。そして一級冒険者を一撃で戦闘不能に落とすほどの異常性。

(な、なんで……………こんな……………ところに……………!!?)

思考が上手く回らない中ミノタウロスは先程の猛スピードではなくゆっくりとベル

に近づいてくる。まるで恐怖というものを時間をかけて味合わせるように。

しかし恐怖はあるものベルは少しだけ心を落ち着かせ考ええる時間を手に入れた。昔のままのベルなら何も出来ずに殺られていただろう。しかし混乱の中、ある言葉がベルの心を落ち着かせることに繋がった。

……

……

……

……

……

(いいかいベル、人は恐怖する生き物だ)

ある訓練の休憩中だった。フィンから突然そんな話を振られた。いま思えば突然ではなかったのかもしれない。

(人が人である所以といつてもいい。だから恐怖することを恥じることはないだ。怯え

て、逃げ出しても、それは思考を働かせているからね)

ロキ・ファミリアの主力メンバーとの訓練。何度死ぬ思いをしたか覚えていないほどやりあった。向こうからしたらただの訓練なんだろうがベルにとってはまさしく自分の命を刈ろうとする恐怖の対象しか見えなかった。

特にベートが殺気を放ってくるのだ。何度逃げ出したくなかったか……

それをフィンは感じ取ったのだろう。だからこうしてベルにアドバイスをくれたのだろう。

(だけどその恐怖に負けて思考を停止させてしまっただけではない。たった一秒でもそれをしてしまったら死に繋がることもある。

だから恐怖を受け止めるんだ。心に深い傷を負うとも、現実から逃げ出したくとも、思考を止めなければ少なくとも最悪を回避することは出来る)

そしてベートの殺気は本物ではない。未だに経験していない本物の殺気を、恐怖をベルが味わった時にそこに誰もいなかったら間違いない。ベルは殺られるだろう。

それを見越したのか、予知したのか、フィンは告げたのだ。

恐怖をから逃げるな。恐怖を受け止める。と

…

…

…

…

…

(お、落ち着け!!とにかく落ち着くんだ!!!)

震える身体、頭で分かかっていても心が、体が目の前のミノタウロスという恐怖に怯えている。それでもその恐怖から逃げたら間違ひなく三人は殺られる。

(どうすれば…どうすればいい!?!)

考えろ!考えろ!!考えろ!!!思考止めたらダメだ!!!!  
生き残るんだ!こいつから、このミノ恐怖タウロスに勝って神様のところに帰るんだ!!!



必死で考える中ミノタウロスはあと2、3歩というところまで近づいている。攻撃範囲内に入ったら危険なことは分かっているがそれでもベルは動かない。少しでも一秒でも思考を巡らせて生き残る手段を見つけるために。

（持つてるのは神様のナイフに閃光弾と爆発物。不意討ちの攻撃を避けたということとはスピードは僕に優位なはず。それを生かして攻撃を……いや椿さんがやられたときは見えなかった!!過信して突っ込むと殺られる!!）

自分が持っているもの、自分の生かせるもの。それを最大限に活用して勝つしかない。

（違う!!こいつに勝たなくてもいいんだ!!）

まずは椿さんとリリを安全な場所に!!!）

方針が決まりすぐさまベルは手札の一つを使うことにした。あと一步、ミノタウロスの攻撃範囲に入る前に小さな箱をミノタウロスの顔面目掛けて投げた。

もちろんミノタウロスはそれを防ごうと手を出すがそれは攻撃系ではない。

防ごうとした小さな箱はその手に触れた瞬間に眩い光を放った。まるで太陽を直視するかのよう。

地下にいるミノタウロス達モンスターはこういう明るいところにいることはないため、わずかな光でも敏感に反応する。

だからそれを逆手に取った方法。

地上にいるベル達でも眩しい光をミノタウロスに直視させてまずは視界を奪う。

『ヴオオオオオオオオオオウツッ!!!』

突然の出来事にミノタウロスは狼狽え我を忘れて暴れまわる。その被害はベルにもありいくら目を瞑っていても至近距離からの閃光は視界を奪ってしまう。バックステップでミノタウロスから距離を取り視界が戻ってきたところで椿の元へ駆け寄る。

「っ、椿さん!!」

「……………あ……………」

何かないのかと椿の体をまさぐるベル。すでに自分の手元には回復材はない。でも

椿さんならと思いい失礼だと分かって、後で殴られる覚悟で女性の体を触る。

もちろんわざと胸や尻など触らないようにしているが今は緊急事態。未だに混乱しているミノタウロスがいつ襲いかかってくるか分からない今早くしないと!!

焦りながら数回胸に触ってしまった手がようやく何かを見つけた。ポケットから取り出すと安物の体力回復材。瀕死の椿に使っても大した効果はないかとしれないが、少しでも遠くへ逃げられるならと思いいピンの蓋を開けて椿の口へ無理矢理流し込む。

「……………くっ……………」

「…っ、椿さん!!」

「……………て、手前は…無事じゃな……………」

「僕の為に……………椿さん、逃げて下さい。」

僕が、僕がミノタウロスを足止めします」

「……………な、何を…言っておる……………」

瀕死から回復したといえども、未だに大ダメージは残ったまま。力の入らない手でベルの胸元を握り必死に言い聞かせる。

「に…逃げるのじゃ…アレはマズイ…」

……一級冒険者言えども…あれはマズイのじゃ…

それを…手前がどうか…出来るはずがない…」

「分かってます。でも全員が生き残るには…」

「…生き残るじゃと…」

「そうです!!まだ爆発物がありますからコレを使って…」

「…手前は…手前はまだ分からぬのか!!」

「!!??…全員生き残るじゃと??…!甘えるな!!」

「!!」

軋む体を無理矢理動かして気力を振り絞り樁は襲いかかるようにベルに詰め寄る。  
それをベルは驚きながら戸惑うしか出来ない。

「儂らを切り捨てろ!!すれば手前だけでも助かる可能性がある!!」

「な、な、何を言ってるんですか!!?みんなで生き残るですよ、そ、そうですよ!!」

それにハジメを見つければみんな助かります!!」

「……手前は……」

…なら、なぜ助けに、ハジメはなぜ助けにこんのじゃ!!使ったんじやろう閃光弾を!!!」  
「そ、それは……」

「甘えを切り捨てるのじゃ!!」

考えたくないのは分かる、じゃがハジメが来ないというきとはそういうことじゃ!!!

よいか!!!今は手前だけでも助かる方法を優先せい!!!」

一番考えたくなかったことを言われ動揺するベル。

そう閃光弾を使ったのだ。それなのにハジメが来ない。それはハジメがこの階層に  
いなければ意味はないがあの短時間で抜けるとは思えない。

なら、ハジメが来ないのは……

(ち、違う!!ハジメが…ハジメに限って!!)

「儂が時間を…稼ぐ……」

あの娘は……抱えてゆけば重りに、重荷になる…

……冒険者となった時から分かっているはずじゃ…儂らは……いつか……こうなる  
ことを……」

(ダメだ!!……諦めるな!!……思考を…思考を止めるな!!!)

「なら一番助かる可能性のある手前が生き残るのが筋じゃ……ヘファイストス様に……世話になった」だけ言ってくれ……」

(……生き残るんだ……生き残るんだ!!)

みんなで……みんな一緒に……)

「……頼むぞ……ベル・クラネル……」

(生き残るんだああああ!!!)

椿が一步踏み出した瞬間、ベルはその倍を、いや数倍先を進んでミノタウロスに突っ込んだ。

「やめるんじや!!!」

椿の必死の訴えも聞かずに未だに視界を奪われ暴れまわるミノタウロスの攻撃範囲に近づく。

いま出来る事を、全員が生き残るために、ベル持っている手札で、活路を見出だす。

暴れまわるミノタウロスの、じたばたさせる手足を、一度でも当たれば致命的になるその攻撃を、ベルはこれまでにもなく集中を行い、

(少しでいい!!懐に、ミノタウロスの懐に入れば!!!)

僅かな、ほんの僅かな隙を見つけたベルはその体を無理矢理押し込めるイメージで突っ込んでいった。もちろんその隙はミノタウロスの手が足が動き回る僅かな隙間。

直撃とは言わなくとも掠めた攻撃はまるでオークの攻撃をマトモに喰らったような  
衝撃

「ぐっ!!!」

グツと堪えたベルは上手くミノタウロスの懐に入り込むことができた。しかし流石のミノタウロスも自分の懐に入られたりすれば視界を奪われても攻撃は出来る。

つまりさっきの混乱の攻撃ではなく、死を与えるための攻撃がベルに向かってくる。だがその前にベルを片手をミノタウロスの腹部に向けて大きく息を吸い込みあの言

葉を叫ぶ。

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

掌から放たれた炎雷えんらいは至近距離からミノタウロスの腹部へ直撃する。それにより攻撃をしようとした手は、体はその衝撃に耐えきれずに吹き飛ばされる。もちろんベルも衝撃に耐えきれずに吹き飛ばされるがゴロゴゴと地面に叩きつけられながら勢いを殺して、体が止まったところで再びミノタウロスに向かって駆け出した。

ベルがミノタウロスに追い付いた時には、ミノタウロスの体は丁度地面に仰向けの状態で叩きつけられたタイミング。マウントポジションを取るためにミノタウロスの頭部へジャンプをして、

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

噛み千切られると分かっているながらベルのミノタウロスの口へとその手を突っ込み、その瞬間に魔法名を叫んだ。

先程の腹部にぶつけた時とは違う。分厚い肉の塊でダメージが通らない訳でもない。



外がダメなら内側から

咄嗟に機転を効かせたのだ。マトモにやれば負ける。

でも自分にはこのスピードと魔法があると。

思った通りベルの放った魔法はミノタウロスの内側から壊していった。顎を、喉を、鼻を、目を、耳を、あらゆる箇所から炎雷が飛び出て、そして最後は頭部全てを吹き飛ばした。

「……………はあはあ……………ぐっ、はあはあ……………」

ふらふらになりながら何とか立つことが出来ているベル。そしてその姿を、まるで夢を見ているかのような光景を椿が目撃した。

「あ、ありえん……………なんじゃアレは……………」

……………あれが本当に、駆け出しの冒険者というのか……………」

話は聞いていた。ベルがフィンやガレスなどの一級冒険者に特訓をつけてもらって

いたことを。

だが本当にそれだけで、一級冒険者でも危険と感じたミノタウロスを倒すことなんて出来るのか??

…………ベル・クラネル、そして、ハジメ…………

一体この、このファミリアは何なのだ…………

戸惑う椿の共へベルはゆっくり近づいてくる。

そしてたどり着いたところで力尽きたように倒れこむベルを咄嗟に椿が受け止めた。

「……、これで、みんな……………帰れます……」

「て、手前は…………手前は…………バカじゃ…………」

「…………ハジメよりも…………ですか…………」

「…………いや、ハジメ方がバカじゃ……」

「…………そうかもしれない…………」

「ですから…………生きてますよ…………ハジメは…………」

「……………なら、探さなければっつっつっつ  
!!!??」

何かおぞましいものを見たかのような衝撃と表情をする椿。その直後ベルも感じた、背後から甦るかのように殺気が充満していることに。

恐る恐る背後にある何かを確認するために振りかえるが頭ではあり得ないと考えているが、心ではずつと警戒音が鳴り響いている。

そしてその警戒音は正解となした。

ぶっ飛んだはずの、ベルのファイア・ボルトで跡形もなくぶっ飛んで死んだはずのミノタウロスが、

ミノタウロスの上半身が起き上がっていた。

確かに体は、全身地面に付いていてそして殺したはず。なのにいま目の前にはミノタウロスが首なしで上半身だけ起き上がっているのだ。

それだけでもあり得ない筈なのに、まるで生きているかのように、不自然さも無いかのように立ち上がったのだ。

そして無いはずの首から嫌な音が、不快に、気持ち悪くさせるような音が。

そして無いはずの首から吹き出す血が、マグマのように、冷えて固まるかのように、何かを形成するかのよう。

その異常な出来事に時間が経つのを忘れてしまったのか、目の前で起きている出来事なのにいつの間にか無くなっていたはずのミノタウロスの頭部が生えていた。

「……なつ、なんで……」

「再生するモンスターは知っておったが……あり得ん!!頭部が再生など、ましてや、こんなにも早く!!」

動揺を隠せない二人に対してミノタウロスは意識がハッキリしたのか二人を視界に入れると威嚇するかのように激怒し雄叫びをあげる。

『ヴオオオオオオオオウツッ!!』

そして体力も気力もない二人はその場から動けない。

ミノタウロスは生まれ変わったためか先程のダメージなど関係無いかのように、そし

てベルを襲うとした時のように恐怖を与えるためにゆっくり行動するわけでもない。

ライオンがウサギを刈るかのように、

全力で目の前のものを殺るために、

一瞬で、刹那で、気づいたときには振り下ろされる拳。

椿は未だに抵抗するかのように目を見開き、ベルも諦めずにこの現実を受け止めるの  
ように目を見開いて、迫り来る攻撃を受け止めた。

「…大丈夫?？」

しかしその攻撃は当たらなかつた。

キチンと目を開いていたから何があつたのか分かつていた。それでもこれは現実なのかと疑っている自分があるが、

「ア、アイズ…さん…」

「もう、大丈夫だから。あとは、まかせて」

確かにこの目に映る人は、ベルが憧れているアイズ・ヴァレンシユタイン本人だつた。

影が薄いつてことはいない状況が続いても話が成立する。

「どうして……( )に……？」

ベルの目の前にはアイズ・ヴァレンシユタインがいた。

どうしてこんな所にいるのか？遠征はどうしたのか？と考えているとベルの肩にトーンと何が触れた。その方向へ視線をやるとそこにはフィンとリヴェリアがそこにいた。

「遅くなってすまないベル」

「フィンさん、リヴェリアさん……」

「後は私達に任せてベルは休んでいなさい」

そう言いながらリヴェリアはハイ・ポーションと取り出してベル渡した。そして体を動かすのが難しい椿には瑞からハイ・ポーションを飲ませてリリの元へ連れていきレフィーヤと共に前線から離れた。

その時ベルが見たのはロキ・ファミリアの一級冒険者の面々がそこにいた。

「皆さん…」

「あー派手にやられたみたいだね」

「でも無事で何よりだよ」

「てめえが殺られたら教えた俺も下で見られるってことを分かってのかてめえは!!!」

「すまんの、ベートは素直に心配だったと言えないからの」

テイオナにテイオネが両サイドからベルの腕を取り立ち上がらせ、ベートがベルに接近して睨み付けたあとガレスがそんなベートを拳骨してベルに謝る。

こんないつものやり取りみたいな雰囲気があるのに、次の瞬間には全員がミノタウロスに向けて戦闘体勢に入った。こんな会話をしている中でもアイズはすでにミノタウロスを討伐してついさっきミノタウロスの胴体が真つ二つに別れて絶命したところだったのだ。

「!!!??」



しかし次の瞬間にはベルと椿が感じ取ったあの異常な殺気が放たれたのだ。そして別れた筈の胴体から吹き出す血がまるで糸のように別れた胴体を繋ぎ始めた。そしてまるで磁石に引き付けられるように再び重なった胴体。その切口はグツグツと血が溢れては肉となり凄まじい勢いで切口を塞いでいく。完全に元に戻るまでに5秒ほどかかったというのに何倍もの時間を過ごしたと錯覚した。

思わずその光景に固まるアイズ。だがすぐに思考を変えて再びミノタウロスの懐へと入る。ミノタウロスもすぐさま攻撃を仕掛けるがやはりアイズの方が上手であり、振り落とされる腕を切り落としすぐさまミノタウロスの頭部を切り飛ばした。

そしてすぐさま距離を取り様子をみようとする、ベル達が見たように切られた腕と首から血が溢れては肉となりあつという間に元の姿に戻った。そして再生を繰り返す度に凄まじい殺気が膨れ上がる。

「フィン、これって……」

「間違いなく突然変異したミノタウロス。しかしこの再生速度は見たことがない。だが、もしかして……」

そこで考え込むフィンの姿にリヴェリアもいま自分が考えている事を口にした。恐

らく考えていることは同じであると確信して。

「今回の遠征に関係がある。と言いたいのかフィン」

「ああ、そう感じるんだリヴェリア。全く関係出来事だけど、何か裏で繋がっているような……」

「この手の勘はよく当たる。しかしあつちは大人しくしてくれそうにもないようだが」

「ミノタウロスはここで討伐する。元より……捕らえるなんて冒険者には似合わないからね」

冗談を言っているような口調だったがその目は間違いなくミノタウロスを刈る目だった。

それを見て聞いたティオネとティオナはアイズの隣に立ち、ベートとガレスはいつでも追加攻撃出来るようにすぐ後ろで控えている。

「アイズ、ティオネ、ティオナ。普通ミノタウロスと思わないようにするんだ。あれは未知のモンスター、まだ何かあるのかもしれない、油断せずやってくれ」

「大丈夫ですって団長！私がサクッと倒しますから!!」

「ちよつとティオナ!!？」

ニコツと笑いながら大剣を手に駆け出すティオナ。「ああーもうー!!」と愚痴りながらもすぐさまティオネも走りだし後ろからアイズも追いかけるように走り出す。

そしてこの異常なミノタウロスも普通のミノタウロスではあり得ないスピードでティオナ達に向かって駆け出し

『ヴォオオオオオオオオオオウツッ!!!』

雄叫びを上げながらミノタウロスはまず先頭にいるティオナにその拳を振り下ろした。

確かに普通のミノタウロスよりも速い攻撃ではあるがティオナはその振り下ろされる右の拳をギリギリで避けたあとすぐさま機動力である足を切断させた。

そしてティオネは繰り出された右手の腿けをズタズタに切り込み、アイズは怯んだミノタウロスの頭部に強烈な突きを放ち粉碎させた。

「よし、このままやつちゃ……」

普通なら一級冒険者にとってミノタウロスは簡単に倒せる相手。例え普通ではなくとも三人も束になれば楽に殺れるだろう。しかし普通でも普通ではなく、異常なミノタウロスは先程のスピードよりも早く受けた傷を再生させた。

腱は一瞬で、足は1秒で、頭部は3秒で。

異常ではあるが余裕で倒せると思っていたティオナ達。あまりの再生速度に驚いていた所をミノタウロスは一番早く再生した腕を使い間合いにいたティオネを吹き飛ばした。次に再生した足を使い強烈な一撃を、地面を踏みだことにより地震のような揺れが起きてティオナはその場から動けなくなってしまう、そこへミノタウロスは足蹴を喰らわせてティオナを吹き飛ばす。

アイズはすぐにミノタウロスの四肢を切り落として攻撃をさせないようにしたあと距離を取るために後退するが、更に速まった再生速度により切り落とされ宙に浮いている両腕を再生した手が掴みそれをアイズに向かって投げ込んだ。

これには流石のアイズもあり得ない状況に頭が追い付かずに防御した取ることが出来ずモロにミノタウロスの両腕が激突した。

吹き飛ばされると思っていたアイズだが後ろで控えていたガレスがアイズの肩を掴み飛ばされないように止めてくれた。同様にティオナ・ティオネも壁に激突することなくガレスが止めてくれたようで大した怪我はなかったようだ。

しかし、アイズが吹き飛ばされ正常でいられなくなった奴がいる。

「このくそ牛が!!!」

そう、ベートである。

怒って我を忘れているようだが頭の中は冷静なようで真つ正面からではなくミノタウロスの周りをウロチョロと動き周り隙を伺っている。

そこでガレスも加わり、ガレスは正面からやり合うために真つ直ぐに突き進む。それを利用しようとベートも範囲を両サイドと背後に絞り動き回る。

しかしまたそこで予想外のことが起こる。

残っていた自分の足を手に取るミノタウロス。さっきのように投げつけてくると思い警戒する二人だったのだがその足はぐねぐねと形を変えていき、

その足は、大剣と姿を変えた。

「!??!」

僅かな動揺が、動き回るベートの体に影響を与えた。

ミノタウロスは自分の周りに動き回るベートを刈るかのように大降りで、大剣を横殴りの攻撃として打ってでた。ベートもそれをギリギリで避けることは出来たのだが回避直後、思いもよらない行動に体がついていかなかった為か僅かな時間足が硬直してしまった。そこを逃さなかったミノタウロスは大剣の先をベートに向けて大砲のような突きを放ってきた。

その一撃を喰らったら無事ではすまない。死ぬ可能性がある一撃をだと判断していたのかガレスは、自分の斧を盾にベートの前に立つ。そしてミノタウロスの突きはガレス、ベート共にかつて無いほどの衝撃が撃たれて吹き飛ばされた。

「ガレス!!ベート!!!」

「なんだアレは……自分の体を……武器に変えただと……」

只でさえあの再生速度に驚かされていたのにまさか『迷宮の武器庫』ランドフォールドを、迷宮の自然の一部を武器に変えてしまうダンジョンの厄介な特性を、自分の切り落とされた体の一部を武器に変えるなど誰が予想出来ただろうか。

壁に叩きつけられヒビが入り崩れ落ちた瓦礫が二人を襲う。その姿にフィン、リヴェリアは近づこうとするが瓦礫に埋もれた二人はすぐさま出てきた。だがその体は明らかにダメージを受けていることが分かった。

「……………くそ、が……………」

「やられたわ。まさか自分の一部を武器に変えるとは……………」

まだ戦うつもりである二人を理解したのかミノタウロスはすぐさま二人に向かって駆け出す。

しかし、進行方向を妨げるようにアイス達が妨害しようとするがミノタウロスはそれにより更に興奮しているようだ。大剣を振り回し防御するアイス達も吹き飛ばす。

「アレは……………本当にミノタウロスなのか？一級冒険者があそこまで追い詰められるなど

……」

「突然変異にしても異常すぎるね……さて、どうしたものか……」

追い詰められる。という表現の割にはその場から動こうとしないフィンとリヴェリア。その後ろにはベルや椿がいるため離れないというのもある。しかし勝てないかもしれないというだけで負けるかもしれない考えはなかった。

だからミノタウロスを倒すための算段を考えているのだがあの再生速度を上回る攻撃をするためにはどうすればいいのか？

リヴェリアの魔法を使えばと思ったが即死レベルの攻撃でないという意味がないだろう。ならいま無駄打ちをするわけにはいかない。それにあのスピード、避けられる可能性が最もある。

次にアイズ達の総攻撃でミノタウロスを微塵に切り落とす考えもあつた。だがさっきのように己の一部を武器にするならただ敵に攻撃手段を与えるだけになる。それにまずまず攻撃速度を増してきたミノタウロスを微塵に出来るほどの余裕はない。

決定的なものがないまま戦闘は続いている。

攻撃が当たらないわけではないのに、その攻撃された箇所は急所ではないかぎりすでに瞬時に治る。



そんな様子を見ていたベルや椿、そしてリリを見ていたレフィーヤから声がかかる。

「リヴェリアさん。ベルがミノタウロスの倒し方があるようで……」

「本当か!!?」

ベルに詰め寄るリヴェリア。普段はこんなことをしないリヴェリアに驚きあたふたするレフィーヤ。それもそうだろう、リヴェリアはベルの顔に近づいてその唇と唇がくっつきそうにみえるのだから。

だからベルの顔も真っ赤になり離れようするがダメージは回復しておらず離れることも出来ない。

「リ、リヴェリア!!!ち、近いです……」

「す、す、すまない……」

「珍しいね。リヴェリアがそこまで取り乱すなんて……」

「こんな状況の中でも冷静すべきなのだろうが、私もまだまだ甘いな……」

「反省は後にしよう。それでベル、ミノタウロスの倒し方とはなんだい?」

「コレを使えば……倒せると思います」

ベルが差し出したのは1つの小さな箱。

フィンやリヴェリアは一体何を言っているのかと疑問を持っていたがそれを見た椿は驚いた様子だった。

「お、おいそれは!!?」

「椿さん、これしかありません。」

フィンさん、これはとても扱いが危険なものなんですけど…」

「……状況が状況だ。どういふものか分からないがこの状況を続かせるわけにはいかない。手段を選んでいる場合ではないだろう」

影が薄いなー。主人公いらずでボス倒しました。

「な、何を考えてるんだ!」

「で、ですけど、これしか…」

「いま自分が言ったことが分かっているのか!?

それをやったら間違いなく無事ではすまない!!」

「ですけどあのミノタウロスを一撃で仕留めるにはそれしかありません。

リヴェエリアさんの魔法でも一撃は難しいんですね?」

「くっ!」

だが、だがそれとベルが負うリスクが…」

作戦内容を説明したベルにリヴェエリアは真つ向から反対した。それはあまりにもベルが負うリスクが高すぎる為だ。

しかしリヴェエリアにもその作戦しかないということには分かっている。だが納得が出来ないので。

「ならその役目は他の者にやらせよう。

満身創痍とはいかなくともベルの体調は万全ではない。

そんな状態でやらせるわけには……」

「これは僕にしか出来ません。

どういふわけかあのミノタウロスは僕を殺そうとするのではなく、痛め付ける傾向にあるんです。

油断している間にやるにはこれしかありません」

「だ、だが……」

その作戦は利にかなっている。

だがそれは人として同意するものではない。

死ぬかもと分かっているのにそれに挑む愚か者。

まさにベルはそれをしようとしているのだ。

「リヴェリア、君も分かっているはずだ。

そして僕もベルと同じ立場なら同じ選択をしていた。

そして君はそれを止めようとは思わないだろう」

「当たり前だ!!」

ベルはまだ冒険者として」

「だがもう冒険者だ」

「!？」

「それに僕はこれがベルへの試練じゃないかと思っている。

ならベルの成長の為、僕達が後押しするものじゃないか？」

痛いところをつかれて黙ってしまったりヴェリア

「冒険者」になつたなら必ず訪れる試練

それはフィンもリヴェリアも体験したものである。

それがいまベルに向けられた。

それから逃げることは「冒険者」として終わりを意味してしまうだろう。それはリヴェリアもここにいる者達も望まない。

だからいまリヴェリアが出来ることは

「……分かった。ベルを信じよう。」

だが、ギリギリの判断は私が決めさせてもらう。いいなフィン」

「ああ、リヴェリアに任せる。

だからベルは思いきってやってくるんだ。」

「はい!!」

「リヴェリアはベート達にこの事を伝えたくれ。

僕はアイズ達に伝えてくる」

アイズ、テイオナ、テイオネは吹き飛ばされたベート達からミノタウロス近づけないようにと交戦しているが、致命的な攻撃が当たってもすぐに再生してしまい体力だけが削られている。

そこに近づいてきたのはベル。

それによりミノタウロスの目標がベートやアイズ達よりもベルが敵としての対象が上となった。

「来い!!ミノタウロス!!!」

ベルの声と共に駆け出していくミノタウロス。

何かが始まったとしか分からないアイズはとにかくベルの援護に周り、ティオナとティオネはフィンも元へ戻り何が起きているのかを確認する。

そして説明が終わったタイミングでベート達もリヴェリアから説明を受けて戻ってきた。

「そんな無茶なことをベルに!!」

「それしかないと思う。」

現に致命傷を与えても傷が治るミノタウロスには確実に一回の攻撃で殺らないと復活するだろう。

それに今もベルに対しては攻撃の手を緩めている。

それがミノタウロスの意識かどうかはともかく、その隙を狙うが一番だと思う」

ベルがミノタウロスと対峙しているときは、死に至る攻撃をしているが「当たれば絶対に死ぬ」ものではない。

そしてフォローに回っているアイズが来ると全力の攻撃をしている。

「で、要は俺達は何をすればいいだフィン」

「アイズと一緒に援護に回って出来るだけミノタウロスの機動力を削いでくれ」

.....

「はおはあ……くつ、はあ……」

間違いなくミノタウロスはアイズさんと比べて手加減をしている。

それでもマトモに攻撃を喰らえばもう立ち上がれない力はある。

僕を簡単に殺さないようにしているのか？

それとも何かの意図があるのか？

それは分からない。

分からないけど、そのミノタウロスの行動を利用して倒すしかない!!

駆け出すベルはミノタウロスが振り下ろす大剣をギリギリに避けたあと腹部に目掛けて更に加速した。

とにかくさつきと同じようにミノタウロスを仰向けに持っていく作戦なのだが、それはただのミノタウロスなら通ったのだろうがこのミノタウロスは違った。



その体型からはあり得ないスピードでバックステップをして距離を置いたミノタウロスは、天井にある氷柱のような形をした岩をジャンプしてつかみ取った。

(や、ヤバい!!!)

ベルの本能が叫んだのと同時にミノタウロスの掴んだそれはすぐさま形を変えて大剣となり、地上にいるベルに向かって投擲してきたのだ。

反応が出来ず動けないベルの元へアイズ、そしてベートがとっさに飛んで来る大剣に衝撃を与えて軌道を反らした。

しかし大剣が突き刺さった瞬間の衝撃は消すことは出来ずにベルは吹き飛ばされる。

飛ばされたベル方向へ向かい地上に着地したミノタウロスは駆け出す。

体勢を立て直せないベルの援護にティオネ、ティオナ、ガレスが行く手を阻もうとするが、

「なっ!!!」

誰が声を出したのか分からないがその驚いた声の通りのことが起きた。

先ほど突き刺さった大剣により盛り上がった岩盤をミノタウロスが殴ったり蹴ったりしてティオナ達飛ばしてきたのだがそれが巨大な矢じりとなって飛んで来たのである。

流星に回避に間に合わないかと判断した各々はその矢じりに対処する羽目になり、その間にミノタウロスが駆け抜け突き刺さった大剣を手にとつてベルに向かつて突き進む。

しかし先ほどのミノタウロスの行動が、その走りから足止めに割いた時間がアイズとベートが追い付く時間として足りた。

「このくそウシがあああああ!!!」

「行かせない」

アイズが両足を目にも止まらぬスピードで切り裂き、ベートが大剣を持った腕に向かつて渾身の一撃を叩きつける。

それにより僅かな時間動けなくなったミノタウロス

しかしすぐさま再生能力が働き、二秒もかからず治りかけていた。

だがその二秒がミノタウロスにとって更に追い詰められることになる。

その僅かな二秒の間にアイズはミノタウロスの足から背中にかけて切り刻み付け、ベートはそのまま頭部や肩周りを蹴りで打ち付ける。

そして矢じりを対処した三人も加わり、腕、足、腹部と一体のモンスターに対しては一級冒険者が五人も攻撃を仕掛けている。

まるで階層主との勝負のように。

だが、明らかに階層主よりもその再生スピードは上回っている。

現に五人で攻撃をしているのにも関わらず受けた攻撃はすぐさま再生をしており攻撃をしている意味を感じなくなる感覚が出てきてしまう。

それでも攻撃をしているのは足止めをするため。

体勢を立て直しているベルのために一級冒険者が全力で援護に回っている。

「さっさとしやがれクソ兔がああ!!!」

「ベルならきつと大丈夫だよ!!」

「団長が認めたのだからしつかりね」

「コレぐらいの試練、さっさと終わらせんか」

「……頑張つて、ベル」

その声援もありベルは立ち上がった。

もうボロボロでナイフ持つにも限界がきている。

しかし倒れるわけにはいかない。

こうして皆が助けてくれているから。

「アイズさん!!」

皆が離れて、僕がたどり着く時間を」

稼いでください!!」と言われる前にアイズは一旦ミノタウロスから距離をとり

「目覚めよ」  
テンベスト

エアリアル

エンチャント

風属性の付加魔法を唱えたアイズは全ての魔法をデス・ペレートに集中させて

「リル・ラフアーガ」

エアリアルの風を纏って放つ突撃による刺突技をミノタウロスの腹部に向けて喰らわせた。

とつさにミノタウロスから離れた面々は巻き浴いになることなくミノタウロスのみ吹き飛ばされて壁へ激突した。

粉塵が舞いミノタウロスの様子は見えないが間違いなくミノタウロス腹部には大きな穴が空いているはずだ。

そしてその粉塵へとベルが駆け出す。

（気を付けてねベル…）

.....

アイズの予想通りミノタウロスの腹部には大きな穴が空いてあり、魔法の影響のためか再生速度が落ちている。

しかしなんの障害もない。

穴が空いていようが体は動く。

首吹き飛ばされた時も動いたミノタウロスには腹部に穴が空いていようが関係はない。

立ち上がりこの粉塵から抜け出そうとするミノタウロスの元へ

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオ!!!」

ベルの掌から放たれた炎雷は再びミノタウロスの腹部へと直撃する。

これにはさすがのミノタウロスも悲鳴を上げてもがく。

その間にベルは一気にミノタウロスに近づいて《バゼラード》を突き刺さるだろう眼

球に突き立ててもう一度魔法名を言い放った。

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオ!!!」

剣に魔法が伝わりながらミノタウロスの脳天に魔法が放たれる。

地獄以上の苦しみを味わいながら頭部が吹き飛んだミノタウロスと共に消し炭となった《バゼラード》は形を崩していく。

頭部がなくなったミノタウロスは未だに腹部と頭部の再生をしようともがいているが、ベルはその傷口にある異物を埋め込んだ。

その異物を取り込むように傷口は、その細胞は異物を覆い被さろうと動いている。

そしてその傷口が塞がる前にベルは掌をミノタウロスの腹部に向ける。

取り込まれる前に、この位置で、このタイミングで、魔法をその異物に放つ必要がある。

その異物とは「ゴライアスを一撃で仕留めることの出来る爆発物」である。

「うおおおおおっ!!」

それもミノタウロスには2つも爆発物が埋め込まれてある。

その1つにベルの魔法を打ち込めば間違はなくミノタウロスは倒せるだろう。

しかし至近距離からの魔法を打てない状況にあるベルにはその凄まじい爆発を

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

その身に受けることになる。

しかしただその爆発を受けるわけではない。

ファイアボルトが爆発物にぶつかり破裂、凄まじい衝撃と爆風が飛び出した瞬間にも  
う一度放つたのだ。

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」



相殺するとは出来ないが爆風と衝撃を、

ファイアボルトのぶつかり合いによりベルの体は爆発物によるものに巻き込まれる前に吹き飛ばされた。

そしてその凄まじい爆発はダンジョンの内壁を大きく崩して吹き飛んだミノタウロスの真上へと降り注いだ。

吹き飛ばされたベルはアイズにより壁へ叩きつけられることはなかったがもう見る限り体はボロボロ。

ファイアボルトを放った腕に関しては酷い火傷を負っている。

それでもベルは、嬉しそうな表情で、

「……や、やりました……よ……アイズさん……」

「うん、よく頑張ったね」

満足そうな表情をしてベルは気を失った

そんなベルの頭をアイズはゆっくり優しく撫でた。  
その姿は姉が弟を介抱しているかのようにだった。

影が薄い、と言われていた主人公がピンチです。

「う、う……………ん……………」

「ベル様!?ベル様!!!」

「……………り、りり……………」

ボヤける視界、その先には涙をボロボロと溢しているりりの姿が見えた。体を起こそうとするがまるで鉄のように重たくて指一本動かせない。

「無理しない方がいい。」

ついさつきまで生死の境をさまざまに迷っていたんだ。

いまはゆっくり休むといい」

確かにいまベルは何も出来ない。

だけどまだ、まだ、やることがある。

「ハ、ハジメを…ハジメを探さないと……」

「気持ちには分かるがいまは安静だ。」

ベート達がハジメを探している」

「だけど……」

「とにかく見つかるまでは安静することだ。」

それにいま君が行ったところで何が出来るんだい？」

「………分かりました……」

理解はしたが納得していない。

それは明らかに分かっていた。

だが、いま行かせるわけにはいかない。

「フィン、その指……」

「ああ、かつてないほど震えているよ……」

………この階層でなることはまずない。

ならいまハジメがここにいないことと関係していると思っ間違いないだろう」

「それほどの敵と……」

その瞬間、いや刹那、ダンジョンの壁が大きな音をたてて爆発し、衝撃に目を開けて  
いられないフィン達の横を何がものすごいスピードで通りすぎた。

それは壁にぶつかり止まったが、そこにいたのはさつきまで探していた

「ハジメ!!??」

「……くつ、べ、ベル……」

そこにいたのはダメージを受けているハジメだった。

あり得ない状況だった。

ハジメが吹き飛ばされたというだけでも衝撃的なのに、あのハジメがダメージを受けているなんて…

「おい!! なんださっきの爆発音は!!!」

「ハ、ハジメ!!?」

ええ!!? もしかして怪我してるの!!」

「信じられない……」

「ハジメが……ケガ……」

爆発音で戻ってきたベート達はケガをしているハジメを見て驚きを隠せないでいた。それはそうだ。

いままで一回も攻撃が通ることもなく、ましてやケガなんて見たこともなかった。なのにいま目の前にはケガしているハジメがいる。

「アイズ姉にべべート……」

……皆さん……ここから……逃げてください……」

「おい!!何があつ……」

最後まで言葉を言い終わる前に先ほどハジメが飛び出てきたダンジョンの壁が、瓦礫の山が吹き飛ばされ粉塵の中から何かがちらに近づいてくるのが見える。

そして粉塵も晴れていき少しずつ姿が見え始めると、その者は身体を覆うマントから

でも分かる華奢な体つきで、顔が見えないほど深くフードを被っていた。一体誰なのか分からないが近づいてくるその者に警戒していたのだが、誰かが近づこうとしたのか、後退りしたのか分からないがその一步が世界を変えた。

「なっ!!?」

「これ、つて…」

「……………き…ました…」

世界が遅くなった。

いや、違う自分達が遅くなったんだ。

それに気づくにはそんなに時間はいらなかった。

何故なら経験しているからだ。

ここよりも深い階層で、こんな風に経験した。

「だ、団長……………」

「…あ、ああ……………」

「こいつは…キツイの……」

「以前よりも…強い……」

フィンやベート達と同じようにあの時動けたアイズとリヴェリアさえも今動けずにいる。

指一本動かすのにも出来ない状況。

そしてそんな中をフードを被った者は何事もなかったように歩いている。

「……あれが……」

「……元凶って…わけね…」

「……くそ…が……」

「………うう……」

誰もが動けない中をフードの者はハジメに近づいていく。

阻止をしようにも動けない体を動かそうとするが筋肉の痙攣さえも起こせないほど動かない。



「無理に動かない方がいいわよ。」

一時停止とは違って停止しているわけじゃないから無理矢理なら動けるけど、皮膚が、血管が切れるほど力をいれないと無理だから止めることをオススメするわ。」

とはいえ、そんな事が出来るわけもなく相手を睨み付けるしか出来ない。

フードの者はそのまま進みハジメの前に後何歩かというところで、

「……………くっ……………」

「……………べ、ベル……………?？」

……………何を……………やっ……………」

ふらふらになりながらもベルを神様ヘステイアのナイフを手に取り、フードの者に向けて背後にいるハジメを守ろうとしている。

「この影響化でも……………」

……………そう、貴方がその子と同じファミリアなのね」

何か考える顔をしている仕草だったが表情はフードによって見れない。  
ベルも警戒を緩めないようにしてきたのだが

「でも、いまは邪魔よ」

手を前に、ベルに向けて、でも掌は完全向けられてはおらず、どちらかというど地面に向けているかのように……

そんな動作をした瞬間にベルの体がまるで地面に押さえつけられるかのように、上から何かで押さえつけているかのように叩きつけられた。

「ガアッ!!!」

体を動かさそうにもアイズ達とは違う力がベルの体を動かさなくしている。

そしてフードの者はその掌を右へと向けるとベルの体もそれに合わせるかのように、地面を抉りながら壁に激突するまで吹き飛ばされた。

「…べ、ベル……」

もう限界だったベルは壁に激突したあとまだ押さええつける力に抵抗したが力尽き気絶してしまった。

ベルの事を気にかけていた間に2つの大きな音が聞こえてきた。  
その方向を見るとハジメの近くにいたアイズとベートも壁に吹き飛ばされた。

「…く、くそが……なんだ、これは…」

「……うごけ、ない……」

一級冒険者でもその力に逆らえない。  
それでも必死に動かそうとするが更にその力に押し潰される。

「邪魔しないでほしいわ。」

私はまだこの子に用があるの」

そういつてフードの者はハジメに近づくと。

そしてハジメも力を振り絞って立ち上がろうとするが、体はふらふらしており立ち上がるのさえも限界ではないかと思わせる。

「手足の骨を粉々にしたのに…」

そういう使い方は上手いみたいね」

「……舐めないで…ください…」

分かっている。

戦っている時に何度も何度も骨が砕ける音が、衝撃がきたことを。

それでもすぐに一時停止で無理矢理繋ぎ止めているが骨が繋がっているわけではない。体を自由に動かさないでいる。

そして激痛は自動による一時停止で止めているが体力的にも精神的にもハジメはもう限界に近かった。

それでも立ち向かうのは冒険者だからなのか？

自分でも答えを見いだせないがいまは戦うだけだと、ポケットから薄い紙を取り出した。

「……はあ、無意味って分からないかしら？」

相手が言っていることは分かるが抵抗しないわけがない。

紙を一時停止で硬直させて手首のスナップで相手に向けて飛ばす。

その衝撃を解除させて回転とスピードを強化された紙はあらゆる物に突き刺さり、物によっては切り裂き貫通させるほどのもの。

だが、

「私は貴方と同じような力を持っているのよ」

紙はフードの者に近づくとつれてスピードを落として行く。  
そして一メートル手前で、僅かに動いているだけ。  
空中で、回転しながら、ゆっくりと。

影の薄さと、この想いは、反比例しています。

「……な、んだ、あれは……」

「……止まっては、いないのか……」

フードの者に当たると思われたカードはまるで一時停止のように空中で止まっている。

いや正確には空中から地面に落ちずに、そしてゆっくり回転しながら近づいている。

「ふうふう。」

それはそうよ、一時停止とは訳が違う。

でも似ているとも思っているのでしょうか？

じっくり観察して推理すればいいわ。

分かったところでどうしようもできないのだから」

フードに隠れて見えないが微笑みながらさらにハジメに近づいている。

ハジメは抵抗するかのように更にカードを投げつけるが全て止められて、いや、速度を落とされている。

「無駄だと分からないの？」

意地になっているのか次から次へとカードを投げつけるが、しかし全てのカードは速度を落とされてしまっている。

「いや、違うわね。

諦めて自棄になっているわけじゃない。

そんな人のする目をまだ貴方はしていない」

そう、自棄になってカードを投げていたわけではない。

カードを投げた際にそのカードによってフードの者に見えないタイミングである方向へ投げていた。

それはフードの者の周囲を囲むように四方八方に散らばっており、そのカードを起点に一時停止の展開したハジメはポケットから小さな箱を両手合わせて6個取り出して



投げ込んだ。

その瞬間に大爆発が起きた。

投げ込んだそれはベルが使った爆発物。

ゴライアス階層主を一撃で仕留められるものを6個も使ったのだ。

ものすごい爆発が起きたが取り囲むカードによる一時停止により周りには影響は出なかった。

しかし地面には一時停止がかかっていなかったようであり、そこには大きな大穴が空いており下が見えないほどの深さ。

一体どれだけの階層まで縦穴が空いたのか分からないがそれほどの大爆発だ、流石にこれならフードの者も無事ではいられないだろうと誰もが思っていた。

粉塵で見えなかったが少しずつ薄まっていき現場の状況がハッキリと見えてきた。そしてそれと同時に誰もが絶望した。

「ハッキリいって失望ものよ。」

「こんな攻撃が通るなんて本当に思っていたの？」

炎で出来た球体が現れた。

そして次の瞬間にはその球体もまるで何もなかったように消えてしまい球体の中からフードの者が現れた。

「どうして分からないの？」

貴方と似ている力ならこんな攻撃効かないってことが。

そして理解しなさい。

私の攻撃は貴方に通じるということを」

宙で浮遊しているカードを一枚手に取るフードの者。

そしてそのカードをハジメに向けて

「さて、そろそろ終焉としましょうか？」

そして軽く手首を振るった。

そう、ただそれだけだった。

なのにその刹那、持っていたカードが無くなり、  
そして、同時にハジメの体から左腕も無くなった。

「ッ!!!??」

正確には切り離された。

飛び散る血はまるで噴水かのように吹き上がる。

すぐさま一時停止により出血を抑えたが、気力も体力も尽きたのか、腕を無くしたことに  
により体内感覚が狂ったのか。

ふらふらとふらつきながら二歩、三歩と千鳥足のあとに座り込んでしまった。

「ここまでできたというのに何も変わらなかった。

いえ、変わろうとしなかった。

だったらもう、必要ないわ」

大穴が空いているのにも関わらず何もなかったように宙を歩きゆつくりと近づきな

がらフードの者はその手をハジメに近づける。

誰もが分かった。

あの手が触れたらハジメは死んでしまおうと。

どんな原理、理屈かは分からないが直感が警告している。

誰もが無理矢理体を動かさそうとしている。

完全に止められてないため抵抗出来るが、その代わりに血管が破ける程の力を入れて

やつと少しずつ動く位なのだ。

それでも皆はハジメの為に動く。

「……………」

一体何をしているのだろうか？

ハジメが今、置かれた状況とこの目で見える光景でそう感じた。

目の前に迫ってくるフードの者が自分の事を知っている。

そしていま僕を殺そうとしている。

知りたかった、自分の事を。

一体このフードの者は何を知っているのかを。

だから自棄になって自分らしくもなく頭に血が回っていた。

だけど腕を切り落とされて血が浮き出て血の気が引いた為かいまは頭がスツキリして何でも考えられる。

そう、今は、今は一番優先することを考えるんだ。

間違いなく負けるだろう相手にこれ以上挑む必要があるのか？

答えはNOだ。僕は僕なのだから今すぐ僕を知る必要はない。

ならここまでやられて黙って終わられる事が出来るか？

出来る、つまりはYESだ。

別に負けることが恥だなんて思わない。

なら、いまは生き残る事を考えろ。

ここにいる皆を助ける事を考えろ。

帰るべき地上に、待っていくれている人の元へ。

『私は、私は一人で生きなくてもいいんですか。』

シルやミア母さんと一緒にいても……トキサキさんと一緒にいても』

『はい、いてください。』

そして、リユー・リオン。僕は貴方の傍にいます』

帰らないといけない。

僕はある人の元に帰らないといけない。

「さよなら、ハジメ」

フードの者が伸ばす手を、手首を掴み取った。

その行動に驚いている感じはしたがすぐに元に戻り

「なに、まだ抵抗するの？」

「……か……ない……」

よく聞き取れないと顔を近づけようとしたフードの者だったが何か違和感を感じた。  
足元が動かない。

そしてどんだん体が、下半身から動かなくなっている。

一時停止ではこんなことはならない。

「……僕は、帰らないといけません……」

フードの者を動かなくさせているのは氷。

そう氷付けにしているのだ。

一時停止によるこの現象は空気中の分子を停止させることによって対象物を氷付けにさせる。

そしてさらに今回は氷になると同時にその分子に一時停止をかけているためまず溶けることがない。

あつという間にフードの者の体は頭部を残し凍りついた。

「……出来る……じゃない……」

「…アイス…ゼロ……」

なんの事を言われているのか分からなかった。

いや、分からなくても良かった。

フードの者を最後まで凍りつかせたハジメは地面に衝撃を与えて大穴の縁を更に広げた。

それにより凍りついたフードの者は瓦礫と共にダンジョンの底へ落ちていった。

それを見届けたハジメは視界が歪む中、自分の名前を呼び駆け寄ってくるアイズ達に「…大丈夫ですよ」と声になったか分からないままその場に倒れた。



.....

「……見ていたかしらオツタル……」

「はい」

『神の鏡』と呼ばれる、下界で行使を許された『神の力』<sup>アルカナム</sup>がある。本来は天界から下界を覗くための千里眼めいた一方通行の能力。

それにより全てを見ていた。

もちろんハジメの戦いも、姿は見えずとも、そこにある魂だけは微かだが見えていた。フレイヤには、『洞察眼』というべき下界の者——『魂』——の本質を見抜く瞳がある。

恐らくハジメの瀕死の状況により『カミカクシ』の力が弱まったと思われるが、それ

を確かめることは出来ないだろう。

それでも確かに、僅かではあるが見えたハジメの魂。

いや、それも見えたという表現も当てはまるか分からなかった。

「……………あれは、なんなのかしら……………」

……………あんな、魂……………見たことがないわ……………」

何故なら魂そのものを確認出来ただけなのだ。

ベルのように純粋な魂とかそういうものではなく、そこに魂があるだけしか分からなかった。

だからこそフレイヤは歓喜していた。

自分に見れても分からない魂。

そんなものがあるなんて天界にいたときでも見たことがなかった。

「……………いいわ……………すごいいいわ……………」

歓喜から恍惚へと移ろわせるフレイヤ。

一人の魂はフレイヤの瞳を焼くほどに輝きながらも、その色は澄みきった透明色。  
一人の魂はフレイヤの瞳でも確認出来ず、それでも確かに存在する霞かかった魂。

汚れも穢れも知らない、純然な意志。

二人の中で、『可能性』が芽吹いた。

影を薄くしたい思ったのは初めてです。

「そこに正座してください」

「正座ですか？」

「そうです正座です。」

どうやら一度キチンとダンジョンという脅威とそれについての基礎をハジメにはしっかりとお話をしないとイケません」

「なるほどですね。」

でもバイトの方もしないといけません」

「それは大丈夫です。」

無理を言って三時間程、時間を頂きました。

さあ、話し合いましたか。

いや一方的になると思いますが覚悟してください」

……………後日談である。

どれから話をしたらいいのか迷うところだがまずはあの戦いの後について話をしよう。

フードの者がハジメによる撃退により全員の拘束が解けた。

しかし重症であるベルとハジメはその時の記憶がない。

あとから聞いた所によるとベルにはハイ・ポーシオンを2本3本必要としただけですんだそうだが、

「だ、団長!!」

ハイ・ポーシオンが効きません!!!」

「……無意識に一時停止によって効果を消しているのか……」

「こんなときまで一時停止つてあるの!!」

どうやらハイ・ポーシオンを飲ませようとしていたが一向に傷が治ることがなかった

ようだ。

切れた腕からの出血を一時停止で止めていたのだが、その作用が効いているとその時は判断してとにかく地上に戻ろうということになった。

.....

「……まさか、ハジメが怪我というか重症で帰ってくるなんて思わなかったわ……」

「それほどの敵だったよ。」

正直僕らが束になっても勝てなかっただろうね。

ハジメだからこそ倒せた敵、というところだったよ」

「チートやチートやとは思ったけど……」

「……まあその敵は倒せたんやからしばらくはあの現象はないと考えてもええな」

「ああ、大丈夫だと思おうよ。」

それよりもまだ目覚めないハジメが気がかりだよ」

「せやな。

腕一本無くしとる状態の瀕死でハイ・ポーションも受け付けんって……良いも悪いも話題には尽きん男やな」

軽く口を叩いているがかなり心配している口キ。

それもそうだろう。

今まで怪我一つ負わなかったハジメが重症、それも片腕を無くしている状態なのだ。

ヘスティアに至っては「は、ハジメ君!? しっかりするんだああああああああ!!!」と顔をぐちゃぐちゃにして付き添いながら今も看病をしている。

「……で、士気は大丈夫なんか?」

「正直空元気といったところかな。

全く手も足も出なかつたんだ……

しばらくは冒険を控えようと考えているよ」

「それがええやろうな。

ハジメが回復して宴会やったら元に戻るやろ!!!」

「そうだね。」

皆にもそう伝えておこう」

見るからにフィンも空元気の状態だった。

それはロキも分かっている。

だけど口にはしなかった。

戦いの話を聞いただけでもあり得ないというのに、それをまじまじと味わったのだ。

守るはずのハジメから守られた。

あのフードの者は始めからハジメだけだったようだが、もし自分達が狙われたら誰も手が出せずに殺られていたいただろう。

それをすぐに割りきることなんて出来ない。

だから今は時間が必要なんだろう。

そしてハジメが意識を取り戻す時間も……

「フィンもしっかり休んどき」

「ツ!!？」



……バレて……たか……」

「何年一緒におると思つとるのや？」

……焦つても何も出来へんで……」

「分かったよ、少なくともハジメが意識を取り戻すまではね」

そういつてフインは部屋から出ていったあとロキは深くため息をついた。

ハジメと同じような者。

そして圧倒的な力の差。

それは今まで培ってきた経験や自信を無くしてしまう。

それはこれからの冒険にも支障が出てくるだろう。

だから焦りも出てくる。

不安も出てくる。

恐怖も出てくる。

それでもそれを押し退けて、時には受け止めて、やっていくしかない。

だけど今は休息の時だ。

「……………ホンマに話題の尽きない男やな……………」

……………

それから一週間が過ぎた。

まだハジメは目覚めない。

当初と比べればロキ・ファミアも明るくはなったがどこことなく何か欠けている感じであった。

そしてそんな中、一人の小人族バルウムが現れた。

「……………この度は……………私のせい……………」

「それはいい。」

……………とはいえないね。

今回君がやったことは許されないものだ」

「……………はい」

ここにはヘステイアとリリ、ベルに屋敷の主であるロキがいる。

ロキはあくまでも同席というだけで口を挟まないことになっている。

「ハジメ君の事に関しては仕方ないとしてもベル君のことは許されないってことは分かっているよね」

「神様!!」

それについては僕は」

「ベル君!!」

いくらベル君が優しくしてもケジメをつけないといけないことはあるんだよ。

いままさにこれがそうなんだ」

リリの手は震えている。

どうなるのか分からない恐怖もあるが、いまは後悔の念が押し寄せてくる。ベルはそれを見て心苦しくなっている。

「……………はあ、これだと僕が悪者みたいじゃないか……………」

「ええやんか。」

そのままファミリアしてベルとハジメをウチにくれんか!？」

「やるわけないだろう!!」

「ってか、口を挟まないんじゃないのか!!!」

また口喧嘩が始まった二人にリリはどうしたらいいのかと見ているとベルが二人が宥めている。

……………謝罪に来たのにどうしてこうなっているのか……………



これは贖罪なんだ、しつかりやること、いいね？」  
「はー!!」

その姿にベルはホッと胸を撫で下ろした。

それと同時にやっぱり神様を選んで良かったと心の底から思った。  
涙を拭うリリの姿にヘステイアが慰めようと近づくと

「……これからはキッチンとベル様とずっと一緒にいますので安心してくださいいねヘステイア様??」

「……ダンジョンだけで大丈夫だよリリ君。  
ベル君は僕の家族なんだからね??」

小声で何を言っているのか分からなかったが何故か二人がバチバチと睨み合っている。

え、ええーと…どうしたらいいのかと悩んでいると

「こちらはいずれキツチリと話をつけるとして。

私はハジメ様にもお礼を言いたいのですがどちらに？」

「そうか。」

「君はあれからの事を知らなかったんだね」

「どういふことですか…」

「……ハジメ様に何かあったんですか!!？」

「それは……」

「すみません。」

腕が見つかからないんですけど、何処にあるんですか？」

「「「ぎやあああああああああ

!!!!!!

「「「

突然部屋の隅に現れたハジメ。

それもまだボロボロの状態で当然現れるものだから完全にホラーである。

ちなみにリリは、ハジメの姿は見えませんが真後ろから言われたのでかなり驚いていたということでした。



影が薄いはずなのにしつかり怒られます。

「君は全く!!」

「本当に君は!!!」

「何を怒ってるんですか神様?」

「君は! 君は!! 君はああああああああ!!!」

「もう止めたってな。」

「流石にウチもドチビが可哀想に見えてきたわ」

まだ回復していないハジメをソファで横にさせてへステイアはさつきからずっとハジメを怒っているのだが全然聞く耳持たないどころかへステイアを弄っている。

その姿は流石に可哀想に思えてきたロキは、ハジメに止めるように声をかけてきた。

「リリーも無事だったんですね、良かった」

「は、はい……」

「……ええーと、いま酷い状態なんですよね？」

「そうですけど？」

「姿が見えないので声しか聞こえないんですけど……」

「……声だけなら普通なのかなーと思ひまして……」

「見ますか？」

「神様に頼んだら見れますけど……」

「い、いえ……」

「なんか今は止めたほうがいいよな気がしますので……」

「ボロボロと言っても冒険者なら必ず通る道である。」

「まあ、腕がないというのはそうそうないのだろうが。」

「それでもリリーがハジメの姿を見たくなかったのは直感的に嫌な予感がしたのだろう。」

「でも、そんな状態ならなんでポーションを使わないんですか？」

「使わないじゃないくて、使えなかったんだよ」

「ああ、やつぱり一時停止が作用しましたか」

「しましたかって……自分のことなんだよハジメ君……」

どうしてこう自分の事を他人のように話せるのか。

明らかに自分の事を言われているのにだ。

それがハジメだからと言われたら、まあそこで話が終わってしまうのだが。

「それで意識がある今ならポジションの効果は表れるのかい？」

「大丈夫だと思えます。」

意識がないときは防衛本能といいますか、とにかくあらゆるものからシャツ一時トダウン停止するようになっているみたいですので、今なら必要とするものならキチンと作用すると思えます」

「ならちよつと待っててな。」

ハイ・ポジションとハジメ腕を持ってきてくるわ」

そういつてロキは部屋から出ていった。

それを見計らってなのかハジメがリリの方を向いて

「リリー、あれからソーマ・ファミアとはどうなりましたか？」

「リリは行方不明か死亡扱いの状態になっています。」

あのダンジョンには他にもソーマ・ファミアの冒険者がいたようで、リリはモンスターに殺られたようになってまして……」

「なるほどですね……」

「…それでこれからリリーはどうするんですか？」

「それについてはさっき話しあったよ。」

この子の犯した罪を償う為にベル君とハジメ君のサポーターとしてこれからも一緒にダンジョンに潜ってもらおうってね」

「なるほど。」

「それはいい償いになりますね」

その言葉を聞いてホツとしたりり。

もしかしたら拒否をされるのかと思っていた。

でもこうやって受け入れてくれて少し頬が緩んでいるのを感じていた。

コンコンとドアがノックされたあと、部屋に入ってきたのはハイ・ポーションを持ったロキとハジメの腕を持ってきたアイズだった。

「持ってきたで〜」

「ハジメ…良かった…」

「心配をかけてしまったようですね」

腕を持ってきた。

と言ってもそれはリリには見えていないようでアイズが何かを持っている姿しか見えな  
えない。

それでもヘステイアに頼んでハジメの姿を見てみたいという気にはなれなかった。

見てしまうといまこうして恩を感じている自分がいなくなりそうだから。

実際そんなことにはならないとは分かっている。

分かってはいるがハジメと他の人達のやり取りを見ていると間違いなく自分はハジメに翻弄されるだろう。

いまは姿が見えてないので恐縮しているが見えたら絶対に容赦なく言葉が出てくるだろう。

さつき言っていることと矛盾している。

きつと後者のほうが自分なんだろうと。

そう、私はハジメを見たらツツコミをいれてしまう。

「リリ、どうしたの？」

難しい顔をしてるけど…」

「なんでもありませんよベル様。

ただこれから大変だろうなーと思っていました」

もちろん、この大変というのは冒険ではない。

まあそれをわざわざいいう必要はないだろう。

これも償いの一つと考えるべきなのだろう、ベル様やヘステイア様達の苦勞を少しでも和らぐのならと。

「さてハジメ。

その腕どうする気や？

まさかくつ付ければ治るとか言わんやろうな」

「えっ?」

「思ってたんかい!!?

…まあ、キレイに切られとるし一時停止のお陰で腕やその傷口が腐る事がなかったことが幸いな。

腕をくつつ付けて一時停止を解除した瞬間にハイ・ポーションを大量にかければ……  
まあ治るちゃうか?」

「曖昧ですね」

「そんなん言ってもこんなことは初めてや。

それでもフィンがこうして腕を回収してくれたんから良かったんやで。  
あとでフィンにはお礼を言っておき」

.....

ということ、腕は元通りに戻った。

キチンと手首や指も動いた。

以前と同じように動いている。

もちろんハイ・ポーシオンを飲んだことにより体の傷も治った。

これはスゴいなーと思いつつながら早速バイトに向かおうとしたら「ふざけるのも大概にしろおおおおお!!」と怒られたのでその日は休むことにした。

そして翌日



久しぶりにバイトに向かい休んだ理由も聞かずにミアに怒られて、落ち着いたところで事情を話すと今度はリ्यूが正座しろと言ってきた。

そして正座して三時間後。

「貴方はもつと自分を知るべきです。

何もかも一時停止という守られた戦い方をしたためにこのような事が起きたのです。いいですか、冒険者に慢心は必要ありません。

常に最悪を想定すること、もちろん生き残る為のプラスとして考えることです。

そして勝てないかもしれない敵と戦わないこと。

それでもやらないといけないことがあると思います。

なら、勝つために、守るために、生きるために戦うべきです。

私情で命を落とすことは愚かなことだとは思いません。

ですが私情で仲間を危険な目にあわさることは愚かなことだと思いません。

ハジメはそんな愚かな人ではありません。

仲間のために戦う人だと私は知っています。

だからこそ今回貴方が取った行動は許せません。

ハジメは私の傍に居ていいと言ってくれた。

そんなハジメが居なくなるなど私は認めません、許しません。

どうしても譲れないものがあつて命を落とすことになるとしても生きてください。

貴方の命は貴方だけのものではありません。

その命には私がいいます。

貴方が死ぬというなら私も死にます。

いいですか、私はまだ死にたくありません。

ですから私を生かすためにもハジメは生き抜いてください」

「はい」

「なのでまずは防具を買いましょう。」

確かに一時停止によって防具としての機能は無くなるかもしれませんが、ただの服装

よりも防具ほうがいいのは分かりますね？

しかし甲冑のようなものでは動けなくなりまずし、部分的に防具を着けるにしてもまずは防具を着けても自由に動けるように体力をつけないといけませんね。

明日から走り込みをしましょう。

そうですね筋力もつけたほうがいいですね。

いや一層、基礎という基礎を叩き込んだ方がいいのかもしれない

「はこ」

「大体いくらステイタスを更新して変わらないとしてもそこで何もしないというのが間違いです。

いいですか、いくらステイタスが更新しないとしてもハジメの基礎というものは変わっていくんです。

一時停止に依存してないとしても、それでハジメが何もしなくてもいいという理由にはなりません。

それです、基礎が上がればやれることも増えてきます。

戦いも変われば、考え方も変わって、それによつて一時停止の使い方も変わるかもしれません。

それにはまずはハジメが変わらないといけません。

ステイタスによるものではなく、ハジメ自身が変わっていくのです。

そうすればハジメはきつと強くなります。

今の強さとは別の強さを持つんです。

それが色んなことからハジメを守って、大切なものを守って、何者にも負けない強さを持ちます。

私は、ハジメにそうなってもらいたい」

「はー」

こんな感じで三時間もの間、こうして話し合いがあつていた。

お店も忙しくなり「手伝いな!!」と言おうときたミアもこの状況を見て何も言わずに去るほど今回のリユールはかなりキレイにいたようであり誰もリユールを止められなかった。

time 4 無くすことを恐れず、突き進むために。  
影が薄い時でも人は何か為に頑張れる。

カンカン

カン高い音が部屋全体に鳴り響く。

何度も打ち付ける鉄は赤く時間が経つに合わせて黒く染まる。

しかしその前に業火にその鉄を入れ込み、また真つ赤に染まった鉄を金槌で打ち込む。

それを何度も繰り返し、繰り返し、繰り返し。

いつ終わるのかときが遠くなるほど時間を費やしてもまだ打ち続ける。

そんな中、コンコンとドアを叩くが聞こえた。

その音で誰が来たのか分かったとしても振り向かずはまだ打ち続ける。

「なんじゃい主様。

もう一週間も経ったと言うのか？」

「そうよ。」

ずっと打ち続けていたのね……」

一週間前。

椿は工房へ籠るとヘファイストスに告げていた。

それはたった一人の為の武具を作るために。

その為には誰にも邪魔をされずに集中する必要があった。

かといっていつ終わるか分からない作業を見過ごすわけにも行かずにこうして一週間後のこの日に様子を見に来たわけである。

「打ち続けなければこの鉄は死ぬからの」

「分かっているとは思うけど、もう貴女も限界なのよ。」

「一緒に心中するつもりじゃないわよね？」

「なわけがあるか。」

……しかしもう少しなのじゃ……

「やっこの鉄に馴染んできたからの」

「そう。

ならこれ以上は言わないけど私も見届けさせてもらおうわ」

そういつてヘファイストスは椅子に座り椿の作業を見守る。

カンカン、カンカン

止まることない一定のリズムを刻みながら打たれる鉄に、少しずつ少しずつある素材を加え続けていた。

それは赤く鉄が含まれた素材。

それは燃えている鉄に触れるとまるで時間が止まったようにその部分が動きを止める。

椿をその場所を叩き続ける。

何度も何度も叩き続ける。

すると少しずつ、ほんの少しずつではあるが鉄に染み込んでいく。

「なかなか厄介な素材みたいね」

「素材の元がアレだからの」

「ったく、こんなに先が見えぬ物を作るのは初めてじゃ」

「そういうながらも椿は嬉しそうに鉄を叩く。

「今まで経験したことのないもの。」

「それは鍛冶師<sup>スミス</sup>として心踊るもの。」

「出来上がったものが一体どんなものになるのか打っている者すら分からない物。だが間違いなくそれは今までの中で最高のものが出来ると確信している。」

「手前は、これを打ち抜く」

「ええ」

「あやつを守るものはこれなんだと言わせる、思わせてやる」

「そうね」



鍛冶師としてプライドをズタズタにさせられた。

しかしそれ以上に見返してやりたいと思った。

今までは頼まれたもの以上のものを作ったり、自ら思い作った物を試したりした。

しかしこんなにも悔しくて、こんなにも高揚したことはない。

だからこの鉄は、この鉄を、最高の物にするために。

「手前を最高の鍛冶師スミスと言わせてやる!!!」

.....

「おはようございます」

「おはようございます」

黄昏の館、門の前。

日も昇らない朝早くからハジメとリユーは待ち合わせをしていた。

リユーに説教されてから毎日トレーニングをしている。

ロキ・ファミアでもトレーニングは出来るのだが、真面目にふざけるハジメを制御出来るのはリユーしかない。

正直リユーとしてもこうしてハジメと入れる時間が増えて、心なしか嬉しい様子であるとバイト仲間から話が上がっているが、そのことは絶対にリユーの耳に入らないように細心の注意を払っている。

バレたらツンデレ所ではない。

真つ赤になった顔が元に戻るまでモツプを振り回して周りを壊してしまう。

ということ、こうして二人で誰もいないだろう時間を見計らって集まっている。

「今日は東側を走りましょう。」

そのあとはいいつも通りです」

「分かりました」

自分でもこの症状行動をどうにかしないといけないことは分かっている。  
分かっているがこれはどう鍛練すればいいのかさっぱり分からない。

その前に鍛練でどうにかなるものなのか？

鍛練をするにしても精神的に鍛えるものなのか？

こんな風に悩み始めると周りが見えなくなるなり、ハジメが呼びかけるまで瞑想して  
いた。

.....

「ふはあく………」

「おはようございませす神様」

「おはようベル君………」

……ハジメ君はまだ帰ってきてないのかい？」

「みたいですね」

寝ぼけ眼で起きたきたハスティアに挨拶をするベル。

そこにはまだ朝の運動に出掛けたハジメの姿はなかった。

するとそこに勢いよく扉が開き、近くにいたハスティアを吹き飛ばして入ってきたのは

「ぎゃあっ!!!」

「おはようさん!!!」

「……なにしてんのやドチビ?」

「お前が僕を吹き飛ばしたんだよ!!!」

「なんだい朝から喧嘩でも売りにきたのかい!?!」

「そんな暇なことはせんわ。」

「ウチは親切に教えにきてやっただけや」

そういつてロキは一枚の紙をハスティアに見せた。

そこには2つ名を決める会議が開かれると書いてあった。

「……うわっ」

「おいおい。」

「いまドチビの顔が酷いことになつとるで」

「いや、ベル君がレベル2になつたことで来るとは分かつていたけど……」

「なんや。」

「そんなに2つ名が付くのが怖いんか??」

「まあ、悪いようにはせんわ」

「あははは、と笑うロキだがヘステイアは浮かない顔のままである。」

「ベルもベルアツプした時に聞かされており、正直ウキウキしていたのだが、ヘステイアの様子を見て何かあるのかと不安になり」

「か、神様……」

「……そんなに酷い2つ名になるんですか……」

「それは僕が全力で阻止するよ!!!」

「ならどうしてそんな顔をされてるんですか？」

「……いや、これで間違いなくターゲットにされるんだろうなーと思うと……胃が……」

それは2つ名が付くぐらい実力も付き、さらにベルはあのアイズ・ヴァレンシユタインのレベルアップよりも早くレベルアップしたのだ。

これからは狙われることになる。

それもいまよりも、色んなものに狙われる。

それは元より覚悟はしていた。

ベルが冒険者になってから考えていた。

だが、それでも想定出来なかったことがある。

いや、想定することをやめていたことが起きた。

ヘステイア・ファミリア

ベル・クラネル

レベル1↓レベル2

ハジメ・トキサキ

レベル1↓レベル2

「……痛い…胃が……痛い……」

「か、神様!!?しっかりしてください!!」

「まあ、しゃあないか…」

「ウチも望んどったけど…これからの事を考えるとな……」

さて、何でこうなったのか……

それはハジメが全快して次の日、ステイタス更新から始まる。

影が薄い、でも個性は強い人はいる。

「もう、一度……いいかな？」

「はい。」

僕とベルベルはレベル2になりました」

朝のギルドは騒々しかった。

基本的に朝からダンジョンに向かうための話し合いなどで色んな人が集まっている。そんな中をベルとハジメはエイナに報告のために来ていたのだが、まあどうせ騒がしくなるだろうとギルドの人達が気をきかせて個室を用意してもらったのだが

「レ、レ、レ、レ、レベル2ううううう  
!!!??」



大正解だった。

ご迷惑をかけないようにハジメが部屋全体に一時停止をかけているので防音対策はバツチリである。

しかし毎回のことだがよくもこう驚くことが出来るなーと思っていたハジメにエイナがまだ呆然としながら話しかけてきた。

「ええーと、ごめんなさいね。

…流石に1ヶ月半で「ランクアップ」はね……

……ちよつとまだ、整理出来ないというか……」

「いいですよ、待ってますから」

「……なんかバカにしてない？」

「どうしたらそうなるのか分かりませんが、ベルがこんな成果を出したんですから当然かなと思っただけですよ」

それでもエイナはジトーとした目で見てくるがすぐに視線を外して深呼吸を始める。

ハジメはハジメで首を傾げているのだが、ベルからしたら普段の態度だよとツツコミを入れたかった。

「……ふう、もう大丈夫よ。」

えー色々と話があるかもだけど、先に私の方から聞いてもいいかしら？

「このあとも仕事もやらなきやいけないし」

「はい、僕達は報告に来ただけですのぞ」

「エイナ嬢も大変ですね」

「何でかな？」

ハジメ君にだけはそれを言われたくないわ……」

それにはベルも同意してウンウンと頷いている。

「それじゃ今日までの冒険者の活動記録を教えてほしいんだ」

「えつと………？」

「大雑把でいいよ。」

どんなモンスターと戦ったとか、こんな冒険者ケ依頼エをこなしてみたとか」

羊皮紙と羽根ペンを用意されながらそう告げる。

冒険者の質の向上に繋がるならば、ギルドは各「ファミリア」に不都合が生じない範囲で情報を公開する。

今回のベルの場合は特に周りから注目されるため、その「経験値」エクセリアの傾向が焦点となってくる。

もちろん名前は伏せられて他の者の目に晒される。

で、二人共最近あった事を書いているのだが、なんかどんどんエイナの顔色が悪くなってきた。

「ちよつ、ちよつと待って……」

…ひ、一つずつ整理させてくれないかしら？」

「だ、大丈夫ですかエイナさん？」

「私のことはいいいから、ちゃんと答えてねベル君。」

このミノタウロスって……あのミノタウロスよね？」

「……は、はい……」

「で、この異常な再生速度を持ったミノタウロスを……」

……ロキ・ファミアリアに協力してもらいながら倒した……」

……これ、本当なの？」

「……は、はい……」

激しい頭痛が……

グラグラと頭がふらつく中で必死に情報を整理する。

只でさえミノタウロスはレベル1のベルでは倒せないのに、それを異常な再生速度で持ったミノタウロスを倒したって……

いくらロキ・ファミアリアが協力したとしても……

これだけでも異常だというのに……  
まだこれから聞かないといけないことがあるのだ。

「……ハジメ君。」

この正体不明の人を倒したらランクアップしたのよね？」

「そうだと思います。」

あと他でランクアップするものはないはずですよ」

「……でもね、これに書いてあるのが本当なら……」

……あのロキ・ファミリアが誰も手も足も出なかつた相手を一人で倒したことになるの  
だけ……」

「そうですけど、ダメでしたか？」

ダメかイイか、どちらかと言えばダメに決まっている。

いや、ロキ・ファミリアが全く歯が立たない相手を一人で倒すなんて……

それでいて今回やっとレベル2。

あ、あり得ない……………

「べ、ベル君はともかく……………ハジメ君の情報だけは隠さないといけないわね……………」

「やっぱりそうですよね……………」

「そうなんですか?」

「むしろなんで大丈夫だと思えるわけ?!?!?」

いつも思う。

どうして僕に対して言うときだけこんなに息ピッタリで声が揃うのかと……………

はあ、とため息をついているエイナとベルだが、ベルはそこで何かを思い出したよう  
で

「あつ、エイナさん。

一つ相談したいことがあるんですけど……………」

「なにかなベル君？」

「その、『発展アビリティ』のことで……」

「そうか、そうだったわね……」

二人共、レベル2になったんだもんね。

それじゃあ、もしかして選択可能のアビリティが複数出てきちゃったのかな？」

「はい。」

神様とも話し合ったんですけど、エイナさんの意見も参考にしてから慎重に選んだ方がいいって……」

今回二人はレベル2になったことよって発展アビリティが発現した。

一度の「ランクアップ」につき得られる項目は一つで、発現はあくまで任意なのだ。

発展アビリティは「ランクアップ」を経た「ステイタス」上に発現したのだが、厳密に言えばまだ二人はレベル2に到っていない。

今のアビリティを選ぶ為の猶予期間。

最後の能力更新を終えて、後はヘステイアの手で「ステイタス」が一新されることを残す、いわば保留の状態だ。

「選択可能なアビリティはいくつ？」

「3つですね。」

それでちよつと、よく分からないアビリティがありました……」

ベルが羊皮紙に書いたものをエイナは確認してみる。

そこには『耐異常』『狩人』『幸運』と書かれてあった。

『耐異常』『狩人』は見たこともありベルに説明出来るのだが、最後の『幸運』というものは見たことがなかった。

おそらくレアアビリティだろう。

その事も含めてベルと話し合い、最終的にベルの考えで『幸運』を選んだ。

「どつちのアビリティを選んだって間違いじゃない。

だから、ベル君が自信をもって決めてごらん？」



その選んだアビリティが、きつと今のキミに必要なもののはずだから  
「……はいっ、ありがとうございます」

いくらレベル2に上がろうとベルはベルのままだと分かったエイナは嬉しい気持ち  
になった。

しかしそのあとこれからあることを考えて一気にテンションが下がる。

「……もしかしなくてもハジメにも発展アビリティが発現したんだよね？」

「そうですけど、さっきと表情が変わってませんか？」

「き、気のせいだよっ!!」

で、ハジメ君はいくつ選択可能のアビリティが発現したのかな？」

「同じ3つですネ」

「……なら、まだ大丈夫かな……」

と、甘い考えだったなと思いいるのはハジメの羊皮紙を確認し書かれている内容を見  
てしまったためだった。

『再生』『拒絶』『削除』

一体何だこれは??と何度も見直した。

もしかしたら見間違えかもしれないと思ったが何度見ても書かれているのは同じ。

「……………ナニコレ?」

「やっぱり見たことありませんよね」

「イヤイヤ!!」

見たことないけど明らかに恐ろしいのがあるんだけど!!?」

「僕的には『削除』を」

「絶対にダメエエエ!!」

「……………ベルベルと言っていたのと反応が違うんですけど…………」

3つとも初めてみるレアアビリティ。

しかし絶対にこの『削除』だけは選んではダメだ!!

これを選んだら、狙われるどころではなく正直何をやらかすか怖くて選んでほしくない!!

「僕もハジメには『削除』は選んで欲しくないな……」

「二人共なんでそんな事を言うんですか？」

「とにかくダメだからね!!」

「……………分かりました。」

……………他の人にも聞いてみます」

（全然諦めてない!!?）

せつかくの発展アビリティだ。

もつと悩んで決めた方がいいかもしれないが…

……………どうしてだろう…この『削除』は怖い気がする。

二人は祈った。

絶対に『削除』を選ばないようにと。

影の薄さはこういう時、厄介である。

「そうかー」

「やつとハジメもレベル2になつたんか〜」

「元々ハジメ君はレベル1では収まらない器はあつただけだね。」

「やっぱりあの一時停止は良くも悪くもハジメ君に影響を与えすぎるよ」

黄昏の館の中庭で二人の神がお茶をしていた。

以前は目を会わせるだけで喧嘩をしていた二人だが同じ屋根の下で生活をすれば無意味なことは無くなるらしい。

それでも意見がちよつとでも合わなければすぐ喧嘩をするというのは、やはりいふべきなのだろう。

「まあ、ここうしてレベル2になつたんやしええやんか。」

「そ・れ・よ・り・や!!!」

「どうやったんやステイタスは!!?」

「べ、別に普通のレベルアップだったよ…」

「嘘はあかんで」

あのハジメがレベルアップしたんや。

普通のステイタスなわけがあるか!？」

「そ、そういつても……」

「これからも持ち持たれつの関係なんやからな!!」

それにレベルアップしたことでこれから更にベルやハジメは狙われることになったんや。

もちろん護衛は変わらずにやってやるわ」

「……つまり代わりにステイタスを教えろって言うのかい?」

いつかはレベルアップすることで起きることは予想していた。

だけどきつとヘステイアの予想以上の事が起きる可能性はあると思っっている。

そのためにはロキ・ファミリアのようなものが護衛してくれたらそれは心強い。

……だからと言って簡単ステイタスを教えることは……

「……はあゝ」

どうせハジメが相談しにくるだろうから、発展アビリティぐらいは教えてもいいかな」

「やっぱり発展アビリティが発現しとったか。」

「一体いくつ、いやどんなもんが発現したんや?」

「3つだよ、それもどれも聞いたこともないものばかりのね」

その言葉にロキの目はギラリと光った。

明らかに面白そうなオモチャを見つけたような瞳である。

それを見たヘスティアはこれだから嫌だったんだと後悔をしながら諦めてロキに話すことにした。

「分かっていると思うけど他の人に話すのはダメだからね」

「分かっとなるわ。」

「そんな面白そうな事を他の者にいうか」

「やっぱり楽しんでいた……」

「はあくため息をつきながら続きを話す。」

「ハジメに発現したのは『再生』『拒絶』『削除』の3つだよ」

「なっ!!?」

「……聞いたこともないわ……」

「というか、それホンマに発展アビリティなんやろな?」

「僕だってそう思ってた程度も見直したよ。」

「でも間違いなく発展アビリティだったよ」

「二人共そこで黙ってしまった。」

「だってそんな発展アビリティなんて聞いたこともない。」

というか、名前からしてヤバイのが含まれている。

「……おい、ヘステイア」

「……なんだい、ロキ」

「絶対に『削除』だけは選択させたらあかんで」

「もちろん分かっているよ。」

「そんなものを選んだら……」

「選んだらどうなるんですか？」

なんか突然入ってきた声の方を見てみると、すぐ近くにハジメが立っていた。

「ハ、ハジメ君!!?」

「なんや!!」

「いつからいたんや!?!」

「ついさつきですよ。」



先ほどエイナ嬢にお話ししてきました」

「そ、そうかい……」

……で、彼女なんて言つてたんだい？」

「『削除』はダメだと言われました。」

でも僕は『削除』がいいんですけど……」

「絶対にダメだあああ!!!」

見事にシンクロした二人。

それにちよつとムツとしている感じに見えるハジメは

「どうしてダメなんですか？」

この中で一番面白そうなのは『削除』なんですよ」

「キミは面白さで選んだらダメだよ!!」

ちゃんとダンジョンでハジメ君の身を守るものにしないと!!!」

「そりゃで!!」

例えば『拒絶』とはどうや?!

攻撃とかを一切受け付けへんもんかもしれへんで」

「一時停止がありますので大丈夫です」

確かにその通りである。

「なら『再生』ならどうや?」

恐らく怪我した時にでも元に戻す力が」

「確かにこの前は怪我をしましたが、その時にポーションを飲めば治るようなので大丈夫です」

一理ある。

「せやかて『削除』はな……」

「そうだよ。」

わざわざ危ないかもしれないものを」

「そうですか？」

僕的には自分が入らないものを『消す力』がある思うんですけど。

これなら邪魔なものは一気に消し去ることができるんですよ」

予想通りなことを言っている!!!??

と、二人は同時にそんなことを心の中叫んだ。

まさにヘスティアとロキ、エイナが恐れているのはそれである。

何度も目の当たりにしたことがある。

自分よりも他人が傷つけられたとき、ハジメは周りが見えずに突き進んでしまうことに。

もしハジメが『削除』を手にして、予想通りの効果だった場合

(手当たり次第に消されるうう  
!!!!!!)  
(

それは大袈裟かもしれないがハジメの逆鱗に触れば消されるなんてことは想像がついてしまう。

だからそれだけは、それだけは阻止しないと!!

「せ、せやけどな、そういうのはもつと考えて決めた方がええで」

「そ、そうだよ!!」

ハジメ君は一度決めてしまうと突き進む傾向にあるからね。

今回みたいなのは慎重に選ぶべきだよ」

「……そうですね。」

確かに二人の言うとおりですね」

どうやら納得してくれたようで安心してしていると

「なら皆さんに聞いてみます。

もちろん僕は他の人に口外しないようにしときますので」

「間違つてないけど、間違つてるよ!!!」

「あかん!!」

もういなくなった!!!」

煙がフツと無くなるようにその場から消えたハジメ。

一人でも『削除』を選ぶようなら間違いなく、もう梃子でも動かなくなり『削除』を選んではしまう。

二人の神はとにかくハジメを、というかハジメに関わりのあるものに余計なことを言わないようにと走り回る羽目になってしまった。

.....

「ダ・団長、いまいいですか？」

「ハジメ、いま団長の前に余計な「ダ」を入れなかったかい？」

「「THE」を入れるとまさに団長になりそうですけど、それだと個性がなくなりそうなのが、気がしましたのでここは思いきって「ダ」を入れました」

「そ、そうかい……」

（ここはツツコミは入れないほうがいいかな……）」

そこにはフィン・リヴェリア・ガレスの3人がいた。

ハジメの発現にリヴェリアは笑いそうになり、ガレスは豪快に笑っていた。

ここで余計に首を突っ込むと酷くなると考えたフィンはそのあだ名を受け入れるしかなかった。

「それですね、発展アピリテイが発現しまして『再生』『拒絶』『削除』のうちどれが僕に合うと思いますか？」

「なっ!!??」

「これはまた……」

「とんでもないもんが発現したの……」

今度はリヴェリアが一番驚いていた。

博識なりヴェリアでもそんな発展アピリテイは聞いたことがないのだろう。それともその3つの異常性を早くも見つけた為か。

「その様子だとリヴェリアも聞いたことがないようだね」

「ああ……」

……しかし、またとんでもないアピリテイを……」

「お主は本当に話題に尽きない男だな!!」

「ハジメ、少しそこで待ってくれないか？」

三人で話してみたいから」

「分かりました」

という事で、フィン達は部屋のスミに集まって会議を開くことに。

相談をするということはすぐに決める訳ではない。

だが、発言を間違えるとハジメがとんでもない「力」を手にして抑えられない事態がくると全員が考えていた。

「間違いなく『削除』は無しだね」

「勿論だ。」

しかし残り2つも怪しいぞ」

「なら『再生』を選んだらどうだ。」

『拒絶』よりもずっと安全じゃ」

「それは僕も考えたけど、ハジメのことだ。」

何かの拍子でモンスターを再生するなんてことが…」

「いやフィン、それは考えすぎだ。」

いくらハジメとはいえモンスターを再生するメリットがない」

「しかし再生というのは必ずその行為を指すわけではないかもしれない」



……正直、さつきから親指の震えが止まらない……  
……どれを選んでも僕達の想像以上のものが現れるはずだ……」

それを聞いて誰もが悩み黙った。

下手に選ぶ訳にはいかない。

そんな状態に気づいたのか遠くからハジメが

「僕は他の人にも聞いてみたいと思ってますので、また後で聞き来ますね」

「ああ分かつ……つて待ってくれ!!」

「あやつもうおらんぞ!!!」

「追いかけるぞ!!」

誰もが思う。

こういう身勝手にというか、周りの目を気にしないというか、悪意がないからどういっただら理解してくれるのかと頭を悩ませる。

とにかくいまは他の者に余計な事を言わせない為にも、ハジメの追跡者はさらに追加した。

影が薄くても望み通りに行くことと、行かないことはあるものだ。

①アイズ、レフイーヤ

レフイーヤ姉の部屋でお茶をしていたアイズ姉とレフイーヤ姉に話を聞くことにしたのだが、何故かレフイーヤ姉がものすごく睨んでいる。

僕が一体何をしたのか、よく分からないがとにかく話を聞いてみよう。

「アイズ姉、どれがいいと思えますか？」

「うーん………削除……かな??」

流石アイズ姉である。

このスキルならさらに強くなれると思う。

「アイズさん!!」

それは絶対に危険ですよ!!!」

やっぱりレフィーヤ姉はダメだって言ってきたな。

「それじゃレフィーヤ姉はどれですか？」

「うーん………再生かな？」

「この中でもマトモそうだし……」

「きつと……マトモなもの……ないと思う」

「それを言ったらダメですよアイズさん……」

失礼である。

②ガレス、ベート

訓練場にいたガレジイとベベートがいた。

今度はベベートが睨んでくる。

「一体僕は皆に何をしたというのだろうか？」

「ベベートはどれですか？」

「あっ!!？」

俺に聞くんじゃないやねえ!!勝手に決めやがれ!!!」

それもキレられた。

何故かベベートの時はよくキレられる。

今にも飛びかかりそうな勢いである。

「やっぱりカルシウムが足りないんですかね……」

ガレジイはどうですか？」

「……その一時停止がなかったらぶん殴つとたわ……」

……そうじゃのー、拒絶というものは興味があるの。

「一時停止とは違うものなのか見てみたいわい」

あれ？

なんかガレージからも睨まれている。

とにかくここから離れたほうがいいみたいである。

③ ヘファイストス、椿

ヘファイストス・ファミリアの応接室に来ている。

ツバツキーが工房にいると聞いたので向かおうとしたらヘファイストス様に止められた。

それも三時間も応接室で待たされたあと、なんかボロボロなツバツキーが現れたのだがその理由は教えてもらえなかった。

まあ、今日は発展アビリティの事を聞きにきたので問題はない。

「ヘファイストス様、どうでしょうか？」

「……あ、あのね、そんなに簡単に自分のステータスを教えたらダメよ……もう……」

なんかヘアアイストス様はお疲れのようである。

まあ三時間もお話をしてくれたのだから、疲れもみえてしょうがないのかもしれない。  
い。

元々神様なのだから、僕の知らない所で色々忙しいのだろう。

それでも僕のために時間を裂いてくれた。

本当にありがたい話である。

「でも聞かないと分かりません。」

それにヘアアイストス様とツバツキーは大丈夫だと分かっていますので……」

「……そうね、再生かしら。」

それ以外は……選んで欲しくないわね……」

やっぱり「再生」がいいのだろうか？

「ツバツキーは？」

「……手前も再生かの。」

どの程度の…ものが再生……するかは知らんが…それは…きつと……いいものだと  
思うぞ……」

ヘアアイストス様よりもつと疲労しているツバツキー。

もしかして二人とも疲労してマトモな判断が出来ないかもしれない。

よし、さらに意見を聞いてみよう。

#### ④リユウ、シル

今度は豊穰の女主人。

バイト休憩中のリユウとシル姉に話を聞くことにした。

何故かミア母さんから鉄拳制裁を受けたのだが、まあ一時停止で痛くないのでスルー  
することに。

で、リユウに発展アビリティを話したのだが



「前にも言いましたがハジメが手にしたいのもでいいと思います。  
私はハジメを信じてますので」

と、流石リユードだなーと思った。

僕の事を一番信じて、知っていると。  
するとシルが少し頬を赤くさせて

「リ、リユード……」

……もう……私の前ならノロケるのも平然としてるのね……」

「……ノロケ、なんででしょうか？」

その言葉がどう言うことなのか分からずに言ったようだ。  
リユードはそんなちよつと抜けている所がカワイイ。

「はいはい、ご馳走さまです」

「ちよつ、ちよつと待ってくださいシル  
!!!??」

私そんなことしてませんよ!!!  
そうですよねハジメ!!!」

訴えてくるリユーだが、僕もキチンと思っていることを言わないと失礼だなど思い

「……まで思ってもらえて光栄です」

「そこは「好き」とか「愛している」とか言わないとリユーには伝わらないですよ?」

「……う、う、うわあああああ  
!!!!!!」

久しぶりにリユーの真っ赤な表情を見て、僕もシル姉も満足した。

⑤ リリ、フィン

豊穰の女主人からの帰り道。

まさかの組み合わせに遭遇。  
それもフィンとリリが手を繋いでいる。

「ああ、デートの邪魔でしたね。

すみません、それではお幸せに」

「ち、違います!!」

転びそうになった所を助けてもらったただけです!!」

「僕はそれだけではなかったけどね」

「と、いつてますけど」

するとウツ?!と何かを隠していたようである。

話を聞いてみるとどうやら結婚を前提に付き合ってくれないかと言っているようだ。

どこかの姉妹の片割れが聞いたら発狂しそうですね。

「確かに色々言われましたけど……」

私はベル様がいるんです!!

でもフィン様が聞いてくれないんですよ!!!  
!!!」

「同じ小人族、それもこんなにも意志が強く美しい女性はそう巡り会わない。

僕は未来のバルウム達のためにも君を諦めるわけにはいかないんだ」

そんな話を前に聞いた……ような気がする。

「それでは私はベル様のものなんです!!!」

「確かに彼は強い。」

これから先もきつと、この冒険に必要な存在になるだろう。

それでも僕は諦めないよ。

君が望むなら僕は何だって出来る」

「そんなものはありません!!!」

いま私に必要なのはベル様だけです!!!!!!」

なんか夫婦漫才をしているしか見えない。

ここはお邪魔かなーと思い

「……………お邪魔しました……………」

「ああああああつ!!!

お願いですから二人きりしないで下さいハジメ様あああああ  
!!!!!!」

最後のこれは何だったのだろうかと思いつつながら、途中で走っていた神様二人に捕まり  
黄昏の館に連行された。

.....

.....

.....

.....

.....

……

……

……

……

……

「ということで、結論です。」

「神様、とりあえず「再生」をお願いします」

「そ、そうか……「再生」を選んで……」

「………とりあえず、つて、どういふことかな？」

「次のレベルアップの時に「削除」にします」  
「……………」

あつ、神様が白目向いて気絶した。

「……………あかん……………」

……………この……………フラグ……………間違いなく回収されるわ……………」

影が薄くたってお祝い事には参加したい。

「「「かんばーい!!!」」」

ジョッキのぶつかる音が鳴り響く。

今日はレベルアツプ初のダンジョンだった。

そこではベルの「英雄願望」アルゴノウトの力が発揮された。

・アクティブアクション能動的行動に対するチャージ実行権。

これはベルが持っていた「ファイヤボルト」のチャージすることを意味していた。

お陰で滅多にでないモンスターを一撃で仕留めることが出来た。

そんなベルとサポーターであるリリ、そして今回から新しくメンバーになったヴェルフ、そして椿が席を囲んでいた。

「まさかあのヴェルフが、ヴェル吉がパーティーを組むなんぞ……手前は嬉しいぞ」



「うるせえー!!」

「ってか、なんで椿がここにいるんだよ!!!」

「祝いの席なのだ、構わんだろう?」

「てめえ……」

「いい、いいじゃないヴェルフ!!!」

「こういうのは多いほうが楽しいよ!」

「……ベルがいいなら……いいけどよ……」

それでもまだ納得していないヴェルフ。

椿はバイトをしているハジメを待ったために豊穰の女主人にいたのだが、後からきたヴェルフをみつけてこうして相席をしている。

「しかしまさか椿と知り合いだったんで……」

「知り合いというか、ハジメの武器を作っているんですよね」

「ふむ。」

今日はその武器と防具が出来たのでな。

しかし、手前はヴェル吉がベルの専属になるほうが驚いたぞ」

「色々あってな……」

「ってか、椿が執着していた冒険者がベルの仲間だったことがビックリしたぜ」

「執着というか鍛冶師としてのプライドだろう。」

「あんなもの目の前で見せられたら鍛冶師は黙ってはいられないだろう。」

「……というか、私は ベル様と二人が良かったのに……」

「何か言ったりり？」

「な、なんでもないで」

「ベルベルと二人がいいと言ったんですよりリイは」

「うわああああああああ!!!」

突然現れたハジメにビックリするベル。

しかしもう一人ビックリしたものがいた。

「な、な、なんださっきのは!!!?」

突然声がし……」

「余計な事を言わないでくださいハジメ様!!!」

ヴェルフの後ろの方を見ながら叫ぶリリ。

それに一体何が起きているのか理解していないヴェルフ。

「気にするなヴェル吉。

そのうちに慣れる」

「いや、慣れるって……」

「どうして毎回毎回リリにちよっかいをかけるのですか!!？」

「ちよっかいのつもりはないのですがね」

「たちが悪すぎです!!!」

一体誰と話しているのか……

リリの向いている方角には誰もいない。

しかし確かに誰かと話している、声も聞こえる。

「あ、あれかマジックアイテムってやつか……」

「そんなもんだと理解としておけばよい」

「含みがある言い方だな」

「今のヴェル吉では無理な話ということじゃ。」

まあ、しばらく付き合えば見えてくるじやろ」

「どういふことなのか聞こうとしたがこうなった椿が話すことはないと分かっている  
ヴェルフは聞くことを止めた。」

「ええーとね、ヴェルフには見えないだろうけどここに仲間のハジメがいるんだ」

「初めましてトキサキ ハジメ 一です」

「お、おう……」

見えないが会話をしている不思議な感覚に戸惑うヴェルフ。

それを見て誰もが「そんな時期があつたな……」と思い返していた。

「今日はすみません。」

どうしてもバイトから抜けられないもので。

もう少ししたら休憩にはいりますので待っててください」

「分かったよハジメ」

「手前は元よりハジメに用事があったから構わぬ」

「ベル様がいいのなら私は文句はありません」

「い、いいんじゃないやねえか……」

ヴェルフ以外普通に会話をしているためなんかのけ者感が凄い……

「な、なあベル。」

「まだ……その、いるのか?」

「ハジメのこと?」

「見えねえからな……どうなんだ?」

「もうキツチンに戻ったけど」

「そ、そうか……」

「……はあ、なんか見えねえと妙に緊張するからよ」

「それについてはヴェルフ様に同意見です。」

ハジメ様はもつと他人との付き合いについて知っておくべきです!!!」

「あれでも良くなつたほうなんだけどな……」

「絶対に嘘だああ!!!」

そんなに息びつたりにつつこまなくても……

苦笑いをしているとシルとリユールが料理を持ってやって来た。

「この度はレベルアップおめでどうございます」

「ありがとうございます!!」

「本当におめでどうございます!!」

今日はジャンジャン注文してくださいね!!」

「アハハハ……」

シルのいうジャンジャンはとんでもない量になるので、想像しただけで苦笑いになつてしまう。

「それで今日がレベルアップ初のダンジョンだったのですよね?」

「はい、思っていた以上にスキルが良くて!!!」  
「そうですか。」

ハジメも早く試したいと言っていました。  
今度はハジメも一緒に連れて行って……………つてどうしましたかクラネルさん？」

驚いた表情をするベルに疑問を持ったリユ一。  
するとベルの手助けをするかのように隣にいたシルがリユ一に耳打ちをする。

「リユ一、また「トキサキ」から「ハジメ」になってるよ」

「なっ?!?!?!」

……………し、仕事に…戻ります……………」

頬を少し赤めた状態でキッチンに戻っていったリユ一。  
その様子にリリ、椿はどういうことなのか悟った様だが

「おい、ベル。」

なにか変なことでもいったんじゃねえか？」

「ええっ?!?!」

そんなことはないはずだよ!!ねえリリ!!!」

「乙女心が分からないベル様は知りません」

「じゃな」

「私もちよつと……」

「ええー!!!」

すぐさまヴェルフの方を見たが知らぬとばかりに視線を外す。  
どうして僕だけど落ち込んでいると休憩上がりのハジメがやってきた。

「早かったのハジメ」

「リユーが代わりに仕事をするから早めの休憩をと」

「……ねえ、リユーさん怒っていた?」

「……怒っていませんが、いま怒らせるようなことを言ったと白状したのでベルベルは罰ですね」

「なんでそうなるの?!?!?!?!」



問答無用で衝撃入のチョップを喰らいもがくべル。  
それにはその他の人達も同情したという。

「そういえば今日が神デナトウの会合の日なんですよね」

「そうじゃの、手前の神へファイストス様も行っておる」

「僕の神とロキ様は喧嘩しながら行ってきました…」

「本当に犬猿の仲ですよね……」

……………

「調子に乗るなやドチビく!!!」

「そつちこそ過去の栄光にいつまで浸っているんだいく!!!」

隣り合っている二人は言い合いをしていた。

それを眺めていた神々は関わりたくないようにと離れて様子を見守っておりそこに

「何してるのよ貴女達は……」

「ヘファイストス!!」

「このボケがまるで自分の手柄のように言い寄ったからや!!」

どう考えてもうちのアイズたん達のお陰でやろうが!——!——!」

「何いつてるんだい!!」

手も足も出なかつた相手に僕のハジメ君が倒したんだ!!!」

むしろ足を引つ張つたんじゃないか!!!」

「なんやて!!!」

「なんだよ!!!」

「はあ………」

一緒に住んでいるのにどうしてこう喧嘩をするのか?

お互いがお互いを助け合う。

きつとこの言葉を知らないだろうなーとヘファイストスは思っているとまだ奥のほうで騒がしくなってきた。

そこにはまだ席に付いていない男共を誘惑し集まっていたことの道を開けさせてこちらに向かつて歩いてくるのは

「ずいぶんと仲良くなったのね」

「どこをどう見たらそう見えるんだい!!」

「その目は節穴か!!!」

「いまは関わらないほうがいいわよフレイヤ」

そうみたいね、とクスリと笑うフレイヤ。

するとそこで暑苦しいあの神が席をたった。

「俺がガネーシャだ!!」

さっそくだが、2つ名を決めたいと思う!!!」

「うおおおおお!!!」

そして更に暑苦しくなった。

いつもは少し話してからなのに今日はいきなりなんて…とヘステイアは頭をかかえた。

そうヘステイアのファミリアには二人レベルアップした。

そして一人は世界最速として話が流れており、一人はあのロキファミリアが手出し出

来なかったものを倒したと大きな話になっている。

そのためか他のフアミリアの2つ名をつけるのにどうも気が入っていないようで、適当につけられた2つ名に崩れ落ちる神が続出していた。

それを見て震えていたヘステイアにとうとう出番がくる。

影が薄い……よね？最近、悩んでしまう。

「はあ、はあ、……なんとか、マトモなものが……」

アイズを抜き世界最速として話題になったベルの2つ名はいい的になり、それは様々な神が自分の娯楽のためにそれはヒドイ名前を上げた。

それでもなんとか勝ち取った名は

リトル・ルーキー  
未完の少年

無難な名だとは思うがこれ以上神経をすり減らすのはキツイ。

何故ならこれからが本番なのだ。

今の今まで、スキルと本質のお陰で影が薄く神でさえも見つけられなかったトキサキ・ハジメ。

その男が隠しきれないことをやらかした。

ロキファミアリアの一級冒険者でも手足も出せなかった敵をたった一人で倒したという事実。

その噂はあつという間に広がり今ではハジメとは何者かと騒ぎだしている。

それはそうだろう。

ベルのように見えればいいが、ハジメはハジメ自身とヘスティアの許可がなければ誰であろうと見るのできない。

ハジメ一人でやつと声が聞こえる程度であるが、余計な事をするなどヘスティアから釘をさされたので大人しくバイトをしているのだ。

だが、そんなことは神には関係ない。

これほど話題性があり面白そうなネタを弄らないわけがないのだ。

「それでは……おまちかねのトキサキ・ハジメだあああああ  
!!!!!!」

「「「「「「「「「「「「「「!!!!!!」」」」」」」」」」」」」」

「頼むから、マト……」

「楽しむぞおおおおお!!!!!!」

「「「「「「「「「「「「「「!!!!!!」」」」」」」」」」」」」」

「楽しむな!!!」



「神でも見えないなんて……ふふふ。」

そんな心を動かす子を見逃すわけがないでしょう」

なっ!!?と驚くヘステイア。

いや、ヘステイア以外の神も驚いている。

あのフレイヤが動く、と。

「じゃフレイヤ様からも一言!!」

ルージング・ヴァージニティ  
「女神の初体験ってのどうかしら?」

「ふ、ふざけるなああああ!!!」

誰がなんの初めてを奪ったっていうんだ!!!!

「だってこんなにも釘付けにされたのは初めてだから……」

「だとして君なんかに渡すかあああああ!!!」

や、ヤバい……!!!

あんなことを仕出かしたのだから覚悟はしていたが、こんなにもフレイヤに目をつけられたなんて……



というか、この2つ名決めはやばい!

絶対にマトモなものが出ない!!!

すると隣からすうーと手をあげるヘファイストス、

「へ、ヘファイストス!!!?

君もかい!!?

「私も困らせられたのよ、一言言わせてもらおうわ。

………鍛冶師泣かせなんてどう?!

「間違つてはないかもだけど、2つ名にはしないでくれええええええええええ!!!」

まさかの伏兵にとうとう胃までも痛くなってきた。

ど、どれだけ周りに影響を与えるんだ……

さっさといい2つ名を出してもらって即決しないとヤバイ…本当にヤバイ………

すると、今度はロキがバツと手をあげる。

一番言つてほしくない奴かと思つていたが、なにやら真剣な表情にヘステイアは制止

するのをやめた。

「……普段やったらうちもふざける側に回る所やけど、今回はハジメに助けられたさかい……マトモな言つたる」

その真面目な表情に誰もがちよつかいを出さずに見守る。

あのロキが真剣な表情なのは珍しいのもあるが、こんな状態のロキがどんな名前をつけるのか興味がある。

「<sup>サスペンデッド</sup>続行不可能」

誰もが停止してしまった。

「サスペンドは一時停止で、デッドは死や。」

一度停止させれば死ぬことさえもするされへん、相手も自分もな。そんな誰も干渉できへんやつにはピッタリやと思うけどな」

ヘステイアとしてなんて事をバラしてくれたんだ!!と言おうとしたが、誰もが言葉を失い静寂が広がっていた。

一体何が起きているのかと心配していると

「……う、うおおおおおおお!!!」

「サスペンデッド!!サスペンデッド!!!」

「つてか、なんだその力!!?」

マジでそんな超ーレア持つてるんか!!!」

「一体どんな力なんだああ!!!?」

「お、お、落ち着……落ち着け!!!」

「ロ、ロキ!!なんでそんな……」

そんな事を言ったんだ!!と問いかけようとした。

しかしロキの目を見たとき悟った。

あのキラリと光る目は明らかにこれを狙っていた。

つまり、

「は、凶つたなーロキイイイイイイイイイ  
!!!」

「言いがかりや。」

それにええ2つ名が出来たからええやろ」

それからは2つ名どころではなく、ハジメの一時停止の説明に追われた。

なんとかかふんわりと説明だけですんだが、「相手を停止させる」というだけでもかなりの衝撃を与えることになった。

誰もがこれで2つ名が決まったと思いきや、突然会場の扉が開き怒濤が声が響いた。

「ヘステイアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!」

「あ、アポロン!!?」

血相を変えて入ってきたアポロン!!

一体何事かと誰もがざわめく中でアポロンはずかずかとヘステイアの前まで歩いてきたが、その前にロキが進路を防いだ。

「なんやアポロン？」

姿を見せんかと思つたら血相を変えてヘステイアに求婚でも求めでもきたんか？」

「ああ、ロキよ。」

いまは君を相手している暇がない。

そしてこの下らない催し物も中止だ!!」

その一言に神々が騒ぎだした。

せつかく面白く楽しんでたというのに。

トキサキ・ハジメに2つ名を付けたというのに。

なんの権限で中止にするのかと騒ぎたてるとアポロンがテーブルを思いつき叩いて騒動を止めた。

「ヘステイア」

「な、なんだい、アポロン？」

「私の…私の可愛い子が君の子に酷く傷つけられた!!」

その言葉にさつきとは違うざわめきが広がった。

いきなりのことにヘステイアは戸惑いながら

「なっ!!?」

そんな事するはずっ!!」

「言い訳は無用だ!!!」

現に傷つけられたのは私の子だ!!!」

いきなり何のことを言っただけなのか分からない。

しかしそんな事をするはずがないと分かっているヘステイアは

「するもんか!!!」

僕のファミリアにそんな子はいない!!!」

「言っただけな。」

確かにヘステイア、そんな子はいないと言っただけな。

しかし現に私の子はやられ、面子は丸つぶれだ…

それでもなお、違うと言ひ張るか?」

「くどい!」

だいたいそんな証拠ないことを言って!!!」

端麗な容貌には相応しくない嫌らしい笑みを深め、口角をつり上げた。

「ならば仕方ない。

へステイア——君に『戦争遊戯』を申し込む!」

——『戦争遊戯』

対戦対象の間で規則を定めて行われる、派閥同士の決闘。

眷族を駒に見立てた盤上遊戯のごとく、対立する神と神が己の神意を通すためのぶつかり合う総力戦。

「アポロンがやらかしたア——!!」

「すっつげーイジメ」

「逆に見てみたい」

などと、周囲の神々はにわかになぞわついていた。

それはそうだろう。

娯楽好きの神様達はこういうのが大好きであり、誰もがニヤニヤと笑いだし、面白く  
なってきたとばかりに囃し立てる。

「詳しいことはまた明日、この場所で話す。

ヘステイアも一度状況を確認したいだろうからな」

そういつて出ていったアポロン。

しかし未だに騒ぎ立てる神々と、呆然としているヘステイア。

「な、なんなんださっきのは!!!?」

「まさか『戦争遊戯』ウォーゲームを仕掛けてくるなんてね……」

「冗談じゃないよ!!!」

「見覚えのないことで受けるわけが」

「ほんまか?」

そんな声が出した方を見ると細い目を開けてヘステイアを見てくるロキ



「どういふことだいロキ？」

返答次第では君だつて許さないよ」

「ちつと頭が血が流れすぎとるわドチビ。」

「……考えてもみい、あのアポロンがなにもなくあんなこと言つてくると思ふか？」

「……………」

「こんなところで騒いでいるよりもしつかり確認した方がええとちやうんか？」

そんなロキの言葉に動かされたヘステイアは礼も言わずにその場を後にした。

残されたロキ、ヘファイストス、フレイヤは

「貴女にしては優しいことをいうのね」

「他人事……ではすまなそうやからな……」

「……ヘファイストス、確認しておくのはヘステイアだけやなさそうやで……」

「……………」

ロキとヘステイアはその後一言も話さないまま会場を後にした。

そして残されたフレイヤはさつきからあることを考えている。

(……………そういうことね。

……………アポロン、貴方は手を付けてはいけない物に手を付けたようね……………)

その人を惑わす妖艶と微笑みは、黒く光り闇へと惑わせてしまうようなものだった。

影が薄い奴は、とバカにするのはいいが仲間は許さない。

時間を少し戻し豊穡の女主人ではハジメを含めてお祝いをしていると、そこに見覚えのある人達がお店へと入った来た。

「いたあー!!」

「おーい、ハジメーベルー!!!」

「あつ、ナナ姉とネネ姉」

「……あのね、その呼び方やめなさいって言ったわよね?」

「無理だつて言いましたよね?」

「あ・ん・た・ね〜!!!」

「落ち着きなつてティオネ!!!」

「でも可愛いじゃんネネ姉つて♪」

「「ネ」の数が多いのよ!!!」

「あんたはいいわよね!!!」

「ナナ姉つてほうが可愛いし!!!」

そうかなくと照れながら歩いてくるティオナにイラツとしているティオネ。  
そしてそれを見て固まる一人の男。

「マジでロキ・ファミアアと知り合いなのか…

ってか、フレンドリーって感じだな……」

「分かりますよヴェルフ様…

……私だって初めは信じられませんでした」

共感するリリは思いっきり否定していた。

そんな事あるはずがないと言っていたが…

「でもハジメ様を見ていたらどんな人でもあんな風に引き込まれる気がします……」

「それは間違いねえな。

しかしリリ助はリーリだろ…

俺はヴェルフオードってなんか本当の名前よりカッコよくなつて気持ち悪いんだから……」

「よかったじやありませんか、ヴェルフオード様？」

「喧嘩か？ 喧嘩を売っているのか？」

今まで変わっているあだ名ばかりだったのに、何故かヴェルフだけは「ヴェルフオード」と名前負けさせてしまったあだ名を付けられた。

カツコいいかもしれないが言われる度に恥ずかしい気持ちになり、いまだに呼び慣れないようだ。

「ねえねえ、一緒に食べてもいい!？」

「やめなさいティオナ。」

ハジメにはハジメのパーティーがあるのよ」

「えええー!!」

「いいからこっちに来なさい。」

ハジメと食事なら後からでも出来るでしょうが!!」

引つ張られるティオナは「またあとでね」と元気よく手を振り離れた席へと連れていかれた。

.....

「出来上がったですか？」

「うむ、やつとな。」

今まで打ってきた中でも一番大変じゃった……」

やつと今回の二つ目の本題に入った。

一体どんなものが出来上がったのか正直楽しみにしていたハジメの前に武器がお披露目となった。

「これは……」

「こっちの短剣がタイムシーター「時喰い」で、こっちがガントレットがタイムアウター「時止め」じゃ」

そこには2つの武器があった。

1つは赤と黒で禍々しい姿をした短剣「時喰い」

1つはモノクロ口でありながらも透明感のあるガントレット「時止め」  
2つとも見たこともない、対照的な2つ。

「どうして2つも？」

てつきり短剣のみかと思いましたが……」

「それはこの「時喰い」に原因がある。

「時喰い」は名の通りに時を喰ってしまふ、あらゆる時を、な。

それはハジメが一時停止したもののさえも」

「おお」

「しかしそれは強すぎた。

時を喰らいということは寿命を喰らうのじや。

つまり、ハジメいえどもこいつを使えば時を喰われる、寿命が喰われるのじや」

それを聞いたハジメは無表情だったが周りは息を飲んだ。

使うだけで寿命を削られる、そんなのは魔剣、いや邪剣と言つてもいいだろう。

「それを防ぐために作ったのがこの「時止め」じゃ。

対照的に常に一時停止を張り続けるため「時喰い」を使っても時を喰われることはな  
ら」

「でもそれなら常に一時停止を張ればいいのでは？」

「何をいつてるのだ!!!」

常になど!!そんな事をすればすぐに精神疲弊するぞ!!!!  
マインドダウン

そう、いくらハジメが一時停止というチートな魔法を使えたとしても必ず精神疲弊は訪れる。

「時喰い」から時を喰われないようにしようとすれば精神疲弊が訪れて倒れてしまう。

「正直、この武器ではなく普通の武器を作りたかったのじゃが……

ハジメのその一時停止が全てを邪魔する。

いまの手前ではこれが精一杯の武器じゃ……」

「そう、ですか……」

つまり椿でもハジメの為の普通の武器は作れなかった。



やはり普通では無理なのだろうと、誰もが少し重たい空気を漂せる中で

「それでもありがとうございます。」

武器を持つてるといっのは嬉しいです」

「お、おお、おおっ!!!」

そうか! そうか!!!

なら作った甲斐があつたわ!!!」

そういつてハジメの背中をバシバシ叩くが一時停止によりもちろんダメージはない。

「お代はおいくらなんですか?」

時間はかかるかもですが必ず払いますので」

「いや、いらん」

「……………いや、いらんと言われましても……………」

「いらんもんはいらん!!!」

強いていうならその武器の使い心地や改良点を言ってもらいたい。

……………安心せい、ヘファイストス様にも許可は貰つとる」

「そうですか……では、使わせてもらいます」

ここまでやってもらっているのならとハジメも素直に武器を手に取った、するとまるで欠けていた自分の一部が戻ってきたような感覚に襲われ思わず椿の方を見て

「ツバッキー……これって……」

「お主の体の一部、「血」をその鉄に混ぜ打ち込んだのである。

しかし鉄と馴染もうとせんからの……馴染むのに随分と時間が必要じゃった」

「「あああ〜」」

「なんですか、その「やっぱりな」みたいなリアクションは」

不服そうな感じを出しているハジメだが周りからしたら、ハジメの化け物じみたことに対してああ〜と納得してしまうのだ。

そんな事をしていると近くの席から声が出た。

いやしたというか、明らかにこちらに対して、椿に向けて話しかけてきた。

「そいつはいいな」

なら俺の武器もタダで作ってくれよ!!」

「……なんじゃ主は?」

いきなり失礼な事を言ってきた男はどうやら冒険者のようであり、その冒険者がつけていたエンブレムが『アポロン・ファミリア』だということはすぐに分かった。

「アポロン・ファミリアか……」

……主らでは話にならない。

手前が打ちたい物しか打たん」

「つまりはその低俗冒険者よりも俺達が落ちぶれていると言っているのか?」

「……何が目的で挑発しとるのは知らんが、主らが手前が打った武器の持ち主が見えてからの話じゃ」

「はっ。」

魔道具を使っておいて何を言ってるやがる。

知ってるんだぜ、ハデス・ヘッドをな。

装備した物を完璧な『インビジブル透明状態』する。

どこで仕入れたは知れねえがてめえが使うにしては勿体ないぜ」

その言葉にベルが立ち上がろうとするがヴェルフがそれを止める。

こんなところで喧嘩を売ったら何を因縁にされるか分かったものではない。

所詮は酔っぱらいのうわ言だと言いつき聞かせる、

しかし相手はベルの行動を見逃さない。

「なんだ、本当のことを言われてムキになったのか??

てめえリトル・ルーキーだよな?

お前こそどんな手を使ったかは知れねえがインチキなんざしてんじや

.....」

その瞬間、刹那。

その席に座っていたアポロン・ファミリアの冒険者が全員凍り付いた。

ハジメが席を立ち、アポロン・ファミリアの一人の肩に手を置いて、瞬間的に、刹那の時間で凍りつかせたのだ。

「アイス・ゼロ」

「ちよつ、ちよつとハジメ」

「このバカ!!やり過ぎた!!!!!!」

「何してるんですか!!!!!!」

「お主ってやつは……!!」

.....

「という感じで凍りつけにはしましたが、1日もあれば溶けます………つてどうしましたか神様?」

「………そういえば君はそういう子だったことを忘れていた僕がとてつもなく情けないなーと思ってるのさ………」

「大丈夫です神様。」

「知ってましたから」

「殴っていいんだよね!!？」

いくら子だからって殴ってもいいんだよね!!!!」

「止めときドチビ……」

……なんでウチが止めに回らんといかんのや……」

影の薄さがここにきて裏目に出ました。

「これ……大丈夫かな……」

「えらい弱気やな……」

……まあ、向こうから仕掛けてきたんや。

こつちには証言者もおるしな」

気が重い。

向こうが仕掛けてきたとはいえ、手を出したのはこちらである。

確かにアポロンの言うとおりに手を出してしまったかもしれないが、こちらにも証言者がいるからイーブンにはもっていけるはず。

ここには第三者の証言者としてテイオナとテイオネ。

加害者としてハジメとベル。

そしてその神様親であるヘステイアとロキ。

昨日行われた会場に向かうために歩いているのだが

「大丈夫なんですか？」

第三者の証言者としてありがたいですけど、これ間違いないく身内扱いにされますよ」  
「そんな事はないと思うで。」

だってウチ、ドチビ、キライやからな」

「うっさい!!!」

僕だって嫌いだよ!!!」

「なんや気が合うな!!!」

そうなら近づかんでくれんか!?!」

「そっちこそ距離を取ってほしいね!!!」

言っておくけどこれで恩を売れるなんて考えないことだね!!!!」

「なるほど。」

「これなら大丈夫ですね」

(……僕だけなのかな……不安なのは……)

ティオナとティオネは二人でおしゃべりをしている。



ヘステイアとロキはにらみ合い、言い合いをしている。

それを横で観察しているハジメ。

そしてそんな中で一人にツツコミ役を<sup>強制的に</sup>引き受けて<sup>やる</sup>しまうことになったベル。

ここにもう一人いたらきつとこういうだろう。

カオス!!!と。

.....

「来たようだなヘステイア」

「ああ」

そこには昨日と変わらずに神様達が集まっている。

変わっているとするならヘステイア・ロキ・アポロンの元に眷族がいるということだ。

ある。

「ということとは分かったのだろう。」

ヘステイア、君の子が私の子を傷つけたことが」

「……否定はしないよ。」

「だけど仕掛けてきたのそつちだ!!」

「手を出したというのにそんな事をいうのか?」

予定通りにアポロンが手を出したことを言ってきた。

だがこちらには証言がある。

「こつちの非は認めるよ。」

「だけどアポロンも認めるべきだ!!!」

こつちには証言者としてロキ・ファミリアの眷族を連れてきたんだ!!!」

「証言します。」

「私ティオネ・ヒリュテはアポロン・ファミリアが先に喧嘩を仕掛けたことを見ました」

「テイオナ・ヒリユテも見ました!!!」

その言葉に神様達はそれが真実だと知った。

いまの神様には大した力はないが本当か嘘か見極めることができる。

これは確実な承認となる。

「ほう、あのロキがヘスティアを手助けか…」

「変な掻い潜りはやめてもらおうかアポロン。」

言っておくけど基本的にはウチはドチビがキライや。

しかし子が親に頼まれたんや。

ウチの意地で無視するわけにはいかんやろ」

最もらしいことを言っているが、来る前に「やつぱり止める!!」と言ったロキを「いい加減にせんか!!!」とリヴェリアお母さんに怒られたのだ。

そんな事は誰も知らずに、ただロキの評価が上がる中でアポロンがまるで計画通りに進んでいるようであり嬉しくなったのか口の端が上がっていた。

アポロンが一人の眷族に、「太陽の光寵童ホエプス・アポロ」ヒュアキントスを顎で指示して、扉の向こ

うからある人を引っ張ってきた。

そのものは同じアポロン・ファミリアであり、全身が包帯でぐるぐる巻きになっており、苦しい表情と歩き方でこちらに向かっている。

「しかしだ、ここにいる我が子は凍結して大怪我をしている」

「なっ!!!」

「そんな訳がないだろうが!!!」

「何を否定している？」

「現にこうして大怪我しているだからな」

「ハジメ君がそんな加減知らずな訳がないだろう!!!」

するとさらにアポロンの口角が上がった。

それに気づいたロキはすぐさまにヘステイアに助言をしようとしたが遅かった。

「ほう、ならばそのトキサキ・ハジメを呼んで是非確認させてもらおうか？」

「ツ!!!??」

(アポロンの奴……それが狙いやったわけか……)

そういくらここでテイオネやテイオナやベルが発言しようとも、実際手を出したハジメではなければ確認できないことがある。

アポロンは大怪我ではないことを知っておりながらわざと演技をさせて、ハジメをその目で確認するためにこうして罠を張ったのだ。

「そ、それは……」

「知っているぞヘステイア。」

貴様のところのトキサキ・ハジメは、姿が見えない事を。

そしてヘステイアとハジメの両方の承認がなければ誰一人見ることが出来ないレアスキルを持っていることをな!!!」

「な、なんでそれを知っているんだアポロン!!!」

テーブルを叩いて抗議するヘステイア。

周りの神様は「マジかよ!!」「レアスキル!!」「てか、俺達にも見えないなら超レアス

キルだ!!!」などと騒いでいるがそんな事はどうでもいい。

誰にも明かしていないことをどうしてアポロンが……

……ッ  
!!!!?

「ロキツ!!!」

「う、ウチやない!!!」

「へフアイストスツ!!!」

「わ、私も違うわよ!!!」

いま知っているのはこの二人ぐらい。

もちろん自分の子の可能性もあるかもだが、そんな事をするメリットがない。

つまりは、誰がこの情報をリークしたのか分からない。

「……どこだい、アポロン。」

それを……一体どこで聞いたんだああ!!!」

「それを知りたければ戦争遊戯ウォーゲームを受けるんだなヘステイア。

まあ、こんなことせずともこちらはヘステイアに受けてもらうことが出来ると思うの

だかな」

完全に嵌められた。

イーブンに持ち込み、和解に引き込むつもりが完全にアポロンに持っていかれた。

それもハジメのカミカクシが何処からか漏れてしまっている。

ただバレたならまだいいが、このタイミングで知られたということは完全に仕組まれたことを意味する。

この2つに挟まれたヘステイアに選択する余地はなく

「……………分かった、受けるよ。

アポロン、僕は戦争遊戯ウオーゲームを受けるよ!!!」

その言葉に一気に神様達が沸き上がった。

『ギルドに戦争遊戯ウオーゲームの申請をしろ!!』

『臨時の神会テナトウスも開くぞ!』

他の神々ヤッラも召集だ!!』

『ほとんど来てるぜ!!!』

『ヤツハアアアツ!!』

漲まつりってきた——ツ!!』

『久々の宴まつりや——!!』

これでヘスティアは逃げることは出来なくなつた。  
するとアポロンは看破いれずに

「我々が勝つたら……君の眷族、ベル・クラネル。

そしてトキサキ・ハジメをもらう」

「なっ?!?!」

……最初からそれが狙いかつ……!!」

「何を言っている?」

「さあ、ヘスティアは何を望む?」

「……………」

「まあいい。」

臨時の神会テナトウスまでに決めてもらえばいい。



こちらとしては要求は何でも呑むつもりだ」

これを聞くだけならアポロンは何てバカげたことをとなるが、むしろそれぐらいしないと割りが合わない。

それぐらいアポロン・ファミアとヘステイア・ファミアには差があるのだ。

「ベル君、ハジメ君、一週間だ」

「えっ？」

「戦争遊戯ウォーゲームが開催されるまで、一週間、ボクがなんとしてでも時間を稼いでみせる。

その一週間の間に、ベル君、ハジメ君、出来る限り強くなってくれ!!!」

「は、はい!!!」

「分かりました!!!」

決意したヘステイアはアポロンの方を向いて叫んだ。

「いいかいアポロン!!!」

絶対にこんなこととして申し訳なかったと頭をすり減らしても、どんなに謝っても許さ

ないと分からせるぐらいに徹底してやってやるからなああああああ  
!!!!!!  
「

影の薄さのせいでまた怒られました。

「ええー!!!」

リリが連れていかれた!？」

「すまねえ……」

…ソーマ・ファミリアの奴らにな。

こっちの言い分も聞かずに……くそがつ!!!」

戦争遊戯ウォーゲームが決まりただでさえ戦力が必要なヘステイア・ファミリアに取ってリリが連れていかれたことは大きな痛手になった。

いま黄昏の館ではヘステイア・ファミリア、ロキと一級冒険者、ヴェルフと椿が話し合っていた。

「どうするんやヘステイア?」

まあ、あのパルウムパリウムがいたところで『改宗』コンバージョンせな参加も出来んかったけどな」

「そ、それは…そうだけど……」

かといって、リリをそのままに出来るわけがない。

しかしいま出来ることはないだろう。

するとハジメが立ち上がり部屋から出よう歩きだすのをロキが制止する。

「待て待て!!」

ハジメどこにいくつもりや!!!」

「散歩です」

「見え透いた嘘をつくな!!」

いまソーマ・ファミリアの所にいつでも何も出来へんで!!!」

「関係ありません。」

……前から気に入らなかったんですあのファミリアは。

いい機会です、誰にも気付かれずに壊滅させてきます」

「待ったあああああ!!!」

出来るからこそ止めえええええ!!!」

そうだった。

間違いなくハジメが本気でやれば誰にも気付かれずにソーマ・ファミリアを壊滅することは出来るだろう。

しかしそれは

「いまそんな事をしたらギルドに間違いなくバレる。

これはハジメのカミカクシがあるからなんて関係ないで！

この戦争遊戯ウォーゲームは間違いなく仕組まれとる！

それもおそらく、パルウムパルウムが連れていかれたことも」

その言葉にハジメはロキの方に振り向いた。

リリが連れていかれたことは仕組まれていた。

そしてソーマ・ファミリアに何かあればギルドに連絡がいき間違いなく不利になる。

「……………つまりは正攻法ではないと無理だということですか」

「その正攻法がないから困つとるんやろ

言っておくけどな、ウチは金は貸さんで。

ただでさえこんな風に作戦会議しとるだけでもヘステイア・ファミリアに加担してるんやからな。

この戦争遊戯ウォーゲームはあくまでもヘステイア・ファミリアとアポロン・ファミリアやからな」

そうだからなのか。

さつきからロキ・ファミリアの一級冒険者は誰一人として言葉を発することがなかった。

参加するにはヘステイア・ファミリアに入る必要がある。

つまりはロキ・ファミリアを抜けるということだ。

そこまですてヘステイア・ファミリアを助けるとなると天秤はどちらに傾くかは簡単に分かる。

「……ヘステイア、分かってたはずやで。

明日の神会で有利に条件が飲めたとしてもウチらが手を貸すことは出来へんということはな」

「……ああ」

「まあいつも通り部屋は貸したる。

せやけど、それだけや。

戦力として考えてもらっても無理やからな」

「……分かつてるよ」

分かつていてもその事実を突きつけられると落胆する。

いまの現状、戦力はベルとハジメだけ。

いくらハジメが強くても限度がある。

強くても、無敵というわけではないのだ。

するとベルが意気込む表情で

「フィンさん!!ガレスさん!!ベートさん!!アイズさん!!

僕に……僕と戦ってもらえませんかっ!!!」

その言葉にヘステイアは驚いた。

いつもなら稽古をつけてもらっていると聞いていたのに、いまハッキリと戦ってもらえませんかと言ったのだ。

稽古と戦いとは全く違う。

それを分かってベルは発言したのだろう。  
そしてその思いはフィンに届いたようで

「……君がそこで稽古と言っていたら何もするつもりはなかったよ」

「それって……」

「時間がない。」

ベル・クラネル、限界を超えてもらうよ

戦いというなら全員に一撃ぐらい当てられるようにね」

「は、はい!!!」

ベルとベルに呼ばれた者達は部屋から出ていった。

その時のベルの顔はいつもよりも意気込んでいたのが分かった。

「……タダの冒険者というわけやなかったみたいやな」

「当たり前だ、ベル君なんだから」

戦争遊戯ウォーゲームに参加することも手助けも出来ないロキ・ファミリア。



でも、ロキ・ファミリアの冒険者と戦うことは別である。

その裏に気づいたベルはもう昔のベルではない。

するとヴェルフが何かを決めたような表情で立ち上がり歩こうとしたところで椿に腕を掴まれた。

「……よく考えたんか」

「ああ。」

戦争遊戯ウォーゲームが決まったときから考えていた……

……考えて考えて、考え抜いた答えだ」

「……そうか。」

でももう少し我慢せえ」

「椿つ!!!」

「手前に考えがあるんじゃ。」

ええから少し待て、ヴェル吉にとつても悪い話じゃないわ」

そのいつもの弄ってくる椿とは違うことに気づいたヴェルフは素直に頷いた。

「そういうことだな、ヴェル吉は借りていくぞ」

「元々ヴェルフオードはヘファイストス・ファミリアですのぞ」

「アハハハツ、そうだったの!!」

バチツバチツとヴェルフの背中を叩きながら二人も部屋から出ていった。

椿の考えとはどんなものか気になるがハジメには考えないといけないものがあつた。

「ハジメ君。

正直、君を強くするために何が出来るか僕には分からない」

「せやな。

ウチも多くの眷族はおるけどサツパリ分からんで

お母さんはどうなんや?」

「誰がお母さんだ。

……全く想像がつかない。

ベルと同じように誰かと戦わせるのが一番なのだろうが……正直なところ誰も相手にならないだろう」

それを聞いたティオネもティオナも思わず頷いた。

相手にならないというのは勝てないということではない。

戦つても無意味なことだと分かっているからだ。

確かに戦闘経験を積ませれば変わるかもしれない。

しかしそれではハジメにとつて経験するものが一生では足りない。

誰もがそう感じているのだ。

一級冒険者さえも手も足も出なかった相手を倒したハジメに対して。

するとハジメはいつも通りの表情であることを頼んできた。

「僕としては博識であるリヴェ姉とネネ姉、ナナ姉には協力してもらいたかったです  
が」

「私達に？」

「でも何も出来ないわよ？」

「そんな事はありませんよ。」

僕なりに強くなれる？かは分かりませんが、この状況を変えられることが出来るかも知れないことを思い付きました」

.....

「どうしてこのようなことを……ザニス様……」

「一つはアポロン派から依頼を受けたのだ。

報酬を約束する代わりに〔ヘステイア・ファミリア〕との抗争に協力してほしいとな。

そして一つは……アーデ、お前だ」

それを聞いたリリは悟った。

リリは死んだことになっていたが、何処かで生きていたことに気づかれたのだろう。

そして未だにリリはソーマ・ファミリアの一員。

そんな一員がヘステイア・ファミリアに唆されたと言えば……

大義名分が出来上がってしまっている。

それはリリのせいでヘステイア・ファミリアひ、ベル様に迷惑をかけてしまう。

「……お願いです、ザニス様……」

「なんの事だ？」

「……ベル様には、ヘステイア・ファミアにはこれ以上……」

リリは、ソーマ様の元に戻りますので……」

「……ああ、アーデは俺達の仲間だ」

正直そんな言葉は聞きたくなかった。

その言葉はベルやハジメから聞きたい言葉。

でもなにも出来ない自分が情けなくて波だが溢れてきそうになる。

連れてこられた部屋に入れられたリリは抵抗することなくそのまま部屋に鍵をかける。出て出られなくなった。

それでもいいと思った。

リリさえ動かなければこれ以上みんなに迷惑を……

すると扉の格子の向こうからザニスが不適な笑顔で

「仲間だからこそ、こんな風にされたアーデのためにヘステイア・ファミアは潰さない

とな」

「そんなッ?!?!」

「約束が違います!!!」

「分かっているアー!デ。」

私達を氣遣つてくれているのだろう。

それは大丈夫だ、ソーマとアポロン……2つの派閥にかかればすぐに終わらせれる」  
「違いますッ!!」

待ってください!!ザニス様!!!」

リリの制止の言葉は届くことなくザニスは闇の向こうに消えていった。

「……ベル様……ハジメ様……」

届かないその名を呟くりり。

自分が出ることはもう祈ることしか出来ないのかと……



いつきり説教されるなかで叫び声に気づいたソーマ・ファミリアの団員を見られる前に  
アイス・ゼロで凍らせて黙らせたなら、またそのことでリリに説教を受けることになり  
……

「……リリの……リリの悲しみにくれた時間を…返してください……」  
「僕でもそれは無理ですね」

ハジメのペースに乗せられてしまい、さっきまでの時間はなんだったのかと後悔する  
リリであった。



影の薄さってこんな時に厄介である。

「な、なんだいっ!!!」

このめちやくちやな戦争遊戯の内容はっ  
!!!??」

「何を言っているヘステイア?」

次の日、緊急の神会デイナトウスが開かれたのだが、アポロンが羊皮紙に書かれた戦争遊戯ウォーゲームの設定が非常識すぎた。

「これはヘステイアが眷族の勧誘を怠慢し、ロキ・ファミリアという後ろ楯に甘えた結果だ

もちろんヘファイストス・ファミリアも同じ理由だ」

「だ、だからって……」

「言っておくがギルドに抗議しようとも無駄だ。

あちらには大義名分がある。

そしてその原因は、ヘステイア・ファミリアである」

「ぐっ!!」

羊皮紙に書いてあつた内容は

---

・ 今回の戦争遊戯<sup>ウォーゲーム</sup>における対戦は、ヘステイア・ファミリア対アポロン・ファミリア、ソーマ・ファミリアとすること。

(ソーマ・ファミリアにはリルカ・アーデという眷族をヘステイア・ファミリアに無理矢理サポートとして雇われていた為である。)

・ ヘステイア・ファミリアは現在ロキ・ファミリアとヘフェイス・ファミリアとの深い繋がりがあつた。今回の戦争遊戯に2つのファミリアから手助けがあつた場合ペナルティを要求する。

(ペナルティはヘステイア、ソーマの合意の上であることとする)

・アポロン・ファミリアが勝利した場合、ベル・クラネル、トキサキ・ハジメをもらい受ける。

・ヘステイア・ファミリアが勝利した場合、2つのファミリアは要求を何でも呑むこと。

・戦争遊戯の方法は『攻城戦』とする。

・ヘステイア・ファミリアに手助けするファミリアは許可するが、負けた場合はその眷族はアポロン、もしくはソーマ・ファミリアに入ることとする。

---

あり得ない条件だ。

確かにアポロンの言い分は分かるが

「リリ君はソーマ・ファミリアに苦しめられていた!!」

彼女は自ら僕達のファミリアのサポーターになったんだ!!!」

「そんな言い訳、誰が聞くというのだ?」

事実はリリルカ・アーデはソーマ・ファミリアの眷族であり、そのリリルカ・アーデは死んだと偽りヘステイア・ファミリアのサポーターをした。

これが事実ならソーマ・ファミリアが参加する理由は十分にある」

なんともめちやくちやな事を言っている。

そしてソーマときたら一言も喋らずにアポロンだけが発言している。

「百歩譲ってソーマ参加は分かったとしてもどうして勝手に功城戦になっているのか説明してくれるんだらうね」

「はあくへステイア……」

……失望させてくれるな、簡単なことだ。

我らアポロン・ファミリアとソーマ・ファミリアが集まるのだぞ。

そして誰もが戦いを望んでいる。

親にとってその願いを叶えるのは当然だろうか？」

「何が望みだ!!!」

そつちから仕掛けておきながら!!!」

「それについてはもう終わりだへスティアよ。

いくら話しても平行線だ。

さあ、これで戦争遊戯ウォーゲームを始めていいな？」

強引なアポロンの言葉攻めに何を言ったらいいのか分からず言葉が出ないへスティア。  
しかしこのままでは間違いなく悪条件で戦う羽目に

「発言、いいかしら??」

「……珍しいなフレイヤ」

妖艶な笑みに周りの神々男共が魅力されている中で、フレイヤがとんでもないことを発言した。

828 影の薄さってこんな時に厄介である。

「その戦争遊戯ウォーゲーム、参加するわ」

「なっ?!?!?!」

「はっ?!?!?!」

「!!!はあああああああああああああ!!!?!?!?!」

あり得ない、考えられないことが起きた。

あのフレイヤ・ファミリアが戦争遊戯に参加する。

それもヘスティア・ファミリアという弱小ファミリアの為に。

「何を考えているフレイヤ!!!」

「たまにはこういうのも参加したくなったのよ。」

それともなに? この戦争遊戯の内容通りに参加することはいけないというの?」

「言わずとも分かっているだろう!!」

フレイヤの眷族には猛者おっしやがいるのだぞ!!!」

唯一のlevel 7、猛者オツタル。

この者が一人入っただけで戦力は一気にひっくり返る。勝てるの見込んでいたアポロンが焦るのも無理はない。

「だから?!

アポロン、貴方が勝手に決めたことに従ってやっているのにどうして文句を言われる筋合いがあるのかしら?」

「…そ、それは……」

完全に想定外。

まさかフレイヤ・ファミアが参加するなど思ってもいなかった。

ヘステイア・ファミアに誰も参加させないためにペナルティをつけたというのに

……

まさかフレイヤ・ファミアが戦争遊戯に参加することでこんなにも猛威になるとは

……



どうかしようと思死に考えるアポロンの表情に思わず笑みを溢したフレイヤに

「何がおかしいフレイヤ!!!」

「ふふふ、ごめんなさい。」

あまりにも必死に考えているようだったからつい…」

「貴様ツ…!!!」

「そんなに怒られても私は何も悪いことはしてないわ。」

でもそうね、貴方の言うとおりパワーバランスが悪くなるというなら、引いてもいい

わよ」

「ほ、本当か?!?!」

「ええ、ただしヘステイアにも優位になることを一つは提示させてあげること。」

もちろんアポロン、貴方が許可することが条件というのはどうかしら?」

破格な条件だ。

いくら無茶苦茶なことをいってもアポロン自身が許可しなければいくらでも優位に

たてる。

「いいだろう。」

ヘステイア、何かあるなら聞こうではないか」

あまりにも態度が急変したアポロンにイラつきはあるが顔に出さずに考えるヘステイア。

「こちらが「止める」というまで戦争遊戯を止めないというのはどうかな？」

「は、はっ、ハハハハハハハハハッ！！！！」

そんなものでいいのか!!?!

もう取り消しはきかんぞヘステイア！！！！

「ああ、構わない」

「諦めずにやれば勝てるでも思ったのか!!?」

ヘステイア、君はもつと賢いものだと思っていたのだがな  
!!!!!  
それでは一週間後、楽しみにしておくぞ  
!!!!!

大笑いしながら去っていくアポロン。

周りの神々も『こりやある意味見ものだな』『どっちにかけるよ』などと既に賭け事に花を咲かせていた。

「良かったのヘステイア？」

「いいんだよ。」

それよりもありがとうフレイヤ。

君のお陰で希望が見えてきたよ!!」

「いいのよ。」

私としては参加してもいいのは本当だったんだから」

「そ、それは、凄いことになってただろうね……」

それじゃここで、とフレイヤも去っていく、残されたヘステイアの元へロキとヘファ  
イストスが近づいてきた。

「時間無制限か……」

ドチビ、なんか策でもあんのか？」

「ない!!!」

「だろうと思つたわ……」

「分かつとるのか!!」

「負けたら二人連れていかれるんやで!!!」

「分かつてるよ!!」

「でも後は、信じるしかないじゃないか……」

「そう後は信じるしかない。」

「ヘスティアに出来ることはこれからは祈ることと、信じることしか出来ないのだから。」

……

「という感じでベルベルもヴェルフォードも頑張ってますよ」  
「分かりました。」

分かりましたが……どうしてまたここに来たんですか  
!!!??」

捕らえられているリリ。

しかしハジメにはそんなものは関係ない。

見えないということはそういうことが出来るのだ。

「いや、気になるかなーと思ひまして」

「心遣いありがとうございます!!」

でもハジメ様もこうしている間にも強くなられたほうが」

「僕、どうやってもステイタス向上しないんですけど」

「そうでした!!すみません!!!」

なんでこうキレられているのか分からない。

でも元気で良かったと思っただけとはあくため息をしたりりは

「本当にこんなことして大丈夫なんですか？」

「いくらハジメ様がステイタス向上しなくてもやれることはあると思うのですが……」  
「それは大丈夫ですよ。」

「明後日にでも僕のほうは準備できますので」

「そうなのですか？」

「はい、なので準備しておいてくださいいね」

「準備、ですか？」

影の薄くても皆に支えられています。

「な、なんで怒ヨルムガンド蛇アマゾンに、大切断ナイン・ヘル、九魔姫がこんなところにツ  
!!!!??」

「ちよつとね、ヘステイア様にお願ひされてね」

「ソーマ様にお会いしたいのだけど」

「もちろん通してくれるのだろうな」

大きな風呂敷を背負うティオネとティオナ。

そして少しびくつくヘステイアの側に立っているリヴェリア。

そのメンバーに圧倒された門番の男はすぐさま屋敷に向かい、その屋敷の前に立っているのはこの5人である。

.....

「それで…今日はどうしたのだへステイア？

そんな護衛を連れて何か大事な用か？」

「ああ、そうだ。

今日ここにきたのはサポーター君、いやリルカ・アーデを『コンバージョン改宗』するため  
にきた」

それを聞いて壁に拳をぶつけたのはザニスだった。

何かあるのではないかと同席をしたのだが、予想通り、いや予想以上の事を言ってきたことに思わず力が入ったようだ。

「何を言っているのだ!!!」

たかが小人族バルウムのために『コンバージョン改宗』を申し入れると言うのか!!!」

「そうだよソーマの眷族君」

「ふざけるな!!」

あんな奴にそんな価値はない!!!!」

その言葉にテイオナが思わず攻撃をしようとしたところをテイオネが制止させる。



そう、一番怒りを感じているのはヘステイアであり

「なら『改宗』コンバージョンは問題ないようだね」

「ふざけるなッ!!!」

あれは我らの物だあ!!!

勝手な事を言うのならこちらとて…」

「勝手な事を言っているのは、そちらですよね」

その刹那、ザニスは氷付けになった。

そんな事が出来るのはただ一人。

「なんだ…それは…」

「……それにこの声は……」

「ヘステイア様、お願いします」

「ああ」

「僕は貴方を承認する」

するとソーマの目の前に靄がかかり、そしてゆっくりと姿が現れた。

「初めまして、トキサキ・ハジメです」

「お前が…あの…」

自己紹介も済みハジメはティオネとティオナの元に近づきながら

「先程も言いましたがリーリを『改宗』コンバージョンさせてください。

もちろんただとは言いません。

そちらに有利になるものを持ってきました」

そういつてハジメが二人に風呂敷を結び目を外してもらおう。  
するとその中に入っていたのは

「ハ、ハ、これは……」

「これだけあれば十分に『改宗』コンバージョンの条件に似合うと思いますが、どうでしょうか？」

そこにあつたのは大量の骨が現れた。  
それも尋常ではないほどの量が……

「な、なんだ……これは……」

「ええーと、ウダイオスでしたっけ？」

その骨ですね、大変でしたよ！日で集めるのは」

「な、何を言っているのだ……」

ウダイオスは37階の迷宮モンスターレックスの孤王 なのだぞ……

それをこの量を……たった1日だと……」

嘘は言っていない。

それは神であるソーマには分かる。

分かるからこそ理解しがたいのだ。

ついこの前アイズ・バレンシユタインがレベルアップしたと聞き、その時倒したモン  
スターがそのウダイオスと聞いていたのだ。

それをたった、1日で、大量のドロップアイテムを……

「一体何をしたのだ……」

「それは教えられませんよ。」

それは『改宗』とは関係ありませんよね？

それでいいですよ、リーリを『改宗』させてもいいですよね？」

……………

「俺に……魔剣を作れっていうのかあ  
!!!??」

「そうじゃ。」

ヴェル吉に魔剣を作れとっておるのじゃ」

ヘファイストス・ファミリアの作業場にいる二人は言い合っていた。  
それもヴェルフが椿の胸元を掴んで睨んでいる。

「ふざけんなっ!!!」

俺は魔剣を作られねえ!!!」

「クロツゾ家の末裔であり《魔剣血統》のスキルにより作製することができるのになぜ作らぬ?」

「知ってるだろう!!」

魔剣は主をおいて先に逝ってしまふ

剣は持ち主を守る為の武器だ!!」

「だから言っているのだ。

守るために作れと、なぜ拒む必要がある?」

それを言われて言葉を閉ざすヴェルフ。

頭では分かっている。

勝つためには必要なものがこの手にかかっていると。

それでも魔剣を作ること拒んでしまふ。

「お主が守りたいのは…プライドか？仲間か？」

「お、おれは……」

……

「はあ……はあ……はあ……」

両膝をついて呼吸を整えようとする。

しかしすぐさまベートがベルの腹部を蹴り飛ばした。

吹き飛んだベルは肺にあった酸素を無くし必死に呼吸をしようとする。

しかし飛んだ先にはガレスが待ち構えており、このままだと斧で真っ二つにされる。

空中で体制を変えて振られた斧がギリギリで神様のナイフで防げた。

だが刃こぼれがなかったとしてもそのパワーはベルの身体全体に襲いかかり再び吹き飛ばされる。

壁に激突したベルはそのままずれ落ちて気を失ってしまった。

そこへフィンがポジション入りの水をベルをぶっかける。

すると軽い傷口は塞がっていき青く変わった皮膚も赤へ戻った。

「起きるんだベル・クラネル」

「……………」

「まだ足りない。」

君が求める強さにはまだ足りない」

「……………は、はい……………」

自分から願い出てなんだがこれは拷問に近いと感じていた。

吹き飛ばされ、殴られ、蹴られ、刺されて、気絶をしたら水をかけられて動けなくなつたところでポジション入りの水をかけられる。

それを繰り返し繰り返し、何度も何度も行う。

正直気が狂いそうになる。

それでもやらないといけない。

やらないと……自分はヘステティア・ファミリアの抜けることになる。  
それだけじゃない、ハジメも一緒にいなくなる。

それだけは絶対にダメだ!!

ハジメにはまだ何も返せていない!!

ずっと助けられてばかりで、何も出来なくて……

だから絶対に強くなつて……

「お、お願い、します!!!」

「ああ、いくよ!!」

僕がこの状況を変えるんだあ!!!

.....



「自分の立場が分かってないのかい？」

「いえ、十分に分かっていきます」

「……………」

豊穣の女主人ではミアがリユーを睨み、シルは黙って成り行きを見ていた。

こうなったのはついさっきの話である。

突然リユーがミアに休みがほしいと話したのだが、理由も言わずに言ってきたミアがリユーに問い詰めた。

そして素直に話したのだ。

ヘステイア・ファミアリアがアポロン・ファミアリアに喧嘩を売られたと。

そしてそのゲームに参加をしようと思っていることを。

するとミアがああ言葉をかけてきたのだ。

「なら、どうしてそんなリスクを負ってまで参加するんだい？」

ただあの小僧ベールのためなんじゃないんだろう」

「言わなくとも分かっていると思いましたが」

「分かっているも聞かないと分からないもんだよ」

分かっているであえて理由を話せという。

その決意を確かめたいのか、その想いは本物なのかと知るために。

「……ハジメのためです。」

ヘステイア・ファミリアやベル・クラネルは二の次です。

薄情者だと罵られようが、私は私のために動きたいのです。

トキサキ・ハジメのために私は動きます。

何を言われようとも揺るぎません」

「……リユー」

「……」

真つ直ぐな瞳はミアの瞳に映る。

そしてはあくため息をついたミアはリユーに背中を向けて

「戻って来たらハジメと一緒に倍、働かせるから覚悟してくんだね!!」  
「はい!!」

影が薄くても準備に余念はありません。

「いや、『コンピュータジョン改宗』はさせない」

「なっ!!?」

どうしてなんだいソーマ!!

君にとつても悪い条件ではないはずだ!!!」

まさかの返答に驚くヘスティア。

ティオネ、ティオナも驚いているなかでヘスティアがソーマに理由を聞こうと躍起になる。

「これだけのドロップアイテムがあるのに……」

「あつたとしてもさせられない。

リルルカは私の眷族だ。

それだけで十分ではないのか?」

それを言われると何も言えない。

きつと同じ状況におかれたら同じ事をいうと思ったのだ。

そしてそれだけ眷族を愛している。

だがソーマは違う!!

なんて言葉を並べてもそれは証明出来ない。

もしかしたら眷族を……と思うと何も言えなくなる。

するとソーマがゆっくりと立ち上がり

「しかしそれではヘスティアも納得しないのだろうか？」

「あ、ああ……」

「リリルカに聞かないと分からないが、もし抜けたいとリリルカがいうなら……ある条件で『改宗』してもいいだろう」

.....

「えっ？」

「言った通りだ。

リリルカ・アーデ、ヘスティアの元へ『改宗』コンバージョンしたいのか？」

突然現れたソーマとヘスティア達に驚いているリリは、さらにソーマからの言葉に驚きを隠せないでいた。

「そ、それは……」

「正直に話すんだリリルカ・アーデ」

「……ヘスティア・ファミリアにいきたいです」

「理由を話してもらおう」

何が目的なのか分からないがどうせ神様の前では嘘は分かってしまう。

なら自分が思っていることを話そうと決めたリリは

「私は、私はベル様に、ハジメ様に救われました。

バルム小人族と、サポーターいうだけで蔑んだ人達と違い、私を見て私と話してくれて、私を助けてくれた。」

リリはそんなヘステイア・ファミリアの元へ行きたいのです!!  
お願いです、ソーマ様!!

リリをヘステイア・ファミリアの元に行かせてください!!!」

思いのこもった言葉をソーマにぶつける。

するとソーマは無言で部屋から出て行き、少したったら何かを持って戻ってきた。

「これを飲み、同じことが言えるかりリルカ・アージェ」

「へ、これは、<sup>ソーマ</sup>神酒……」

神の名が付くほどの名酒。

そのほどここの酒は人を狂わす。

一口飲んだだけで酒に酔い何もかも捨ててでもこの酒を飲もうと躍起になる。

そしてそれは命を落とす結果になろうともだ。

ソーマ・ファミリアはこの神酒を基盤に動いている。

誰も彼もが酒を飲みたいがために動いている。

そんな酒をリリが飲む。

人を狂わせる酒を飲めとソーマが言う。

これを飲み、同じような言葉を、思いを言えるか？

人を狂わせる神酒の飲み意識を保てるか？

そんな無謀なことをリリにさせようとしている。

しかし飲まなければ何も変わらない。

なにより自分を変えるために飲むしかない。

そう決めたリリはソーマから神酒を受け取り、杯に酒をつぎ

「頂きます」

酒を口に含んだ。

次の瞬間、全身からこの神酒を飲みたいと求める欲求と酒に溺れてしまうほどの幸福感、意識を保てなくなるほどの目眩が一気に襲いかかってきた。

どうしようもなくふらつく身体を必死に堪えて、深い霧で抜け出せなくなる位に意識を持つていかれそうになる。



(…………リリ……は、…………リ、リは…………)

それでも意識を保とうするのは消え行く意識の中にベルとハジメの顔が浮かんできたか。

それを掴もうと必死にリリはもがいて、足搔いて、手を離してしまいそうになる意識を繋ぎながら、

手を伸ばす二人の手に向かって、その手を伸ばして

「……い、か……」  
「!!?!」  
「……行かせて……ください……」

はつきりと聞こえた、リリの思いが。

神酒に打ち勝ちいま求めている思いをソーマへと。

「……………ヘステイア」

「なんだい、ソーマ」

「これは取引だ。」

私はヘステイアが持つドロップアイテムが欲しい

代わりにヘステイアが望むリリルカ・アーデを差し出そう」

「……………いいのかい、ソーマ？」

何も言わずに頷く事をみて安心したのかりりはそのままだ倒れこんだ。

すぐさまティオネとティオナが介抱に向かい、ハジメはリリのもとではなくソーマの  
前にたち

「もう一つ取引をお願いします」

「まだ私から奪う気か」

「いいえ。」

僕がやってしまった貴方の眷族への仕打ちを帳消しにして欲しいだけです。もちろん、僕もその神酒を飲みます」

そういつてソーマから神酒を奪い取り、瓶ごと一気に口に流しこんだ。

「何をやっているんだ!!」と止めるヘステイアを無視してハジメは最後の一滴まで神酒を飲む干した。

ハジメの行動に驚き言葉も出せずにいたソーマへ

「意外に甘い感じなんです、神酒というのは」

平然と、ただ水を飲んだように、言葉を放った。

その姿に思わず笑いだしたソーマ

「アハハハハハッ!!!」

「ソ、ソーマ……」

「面白い眷族を持ったものだなヘステイア。

いいだろう、我が眷族への仕打ち手を引こう。

しかし、間違いないく戦争遊戯ウォーゲームは参加し仕返しと狙ってくるぞ。

それを分かって提案しているのだな？」

「元々戦うわけですので問題ありません」

「そうか、ならばもう言うまい」

そういつてソーマは部屋から出ていこうとしたが立ち止まり振り向かずにリリへと

「いままで、悪かったなりリルカ」

「……ありがとうございます、ソーマ様」

.....

「規格外だとは思ってましたが想像以上でした。

まさかあんないっぱいドロップアイテムを集めるなんて……

それに神酒をイッキ飲みして平気なんて……」

「普段お酒飲むときは無意識に一時停止解除してますけど、流石神酒というだけのものですね」

なんで上から目線なんですか!?!とツツコミを入れたかったが、入れたら負けだと思いがグツと堪えた。

「しかしどうやってあんなに沢山のドロップアイテムを集めたんですか?」

「集めたのは私達だからね!!」

「そう、ハジメはただモンスターを倒していただけ」

「いやいや、ただモンスターではなくウダイオスは迷宮モンスター・レックスの孤王ですよね!!?」

テイオナに背負われて帰宅している四人。

ヘスティアは用事があると一人でどこかへ向かったがすぐ近くだからと護衛をつけずに走り去った。

そしてドロップアイテムの経緯を聞いたら本当に想像以上のことで頭が痛くなるリである。

「……ああ、そうだったねー」

「……なんか、ハジメといると全部ただのモンスターに見えてくるのよねー」

「遠い目をしないでください!!!」

現実逃避はダンジョンでは命取りですよ!!!」

「大丈夫大丈夫!!」

ほら、攻撃がきても全然痛くないし」

「私達はただドロップアイテムを集めれば……」

「ハジメ様!!!」

お二人に何をしたんですかあああああああ!!!!!!」

間違いなくこの姉妹にトラウマ的な何かが生まれたと言える。

……

「どうしたのかしら、ヴェルフ?」

「お別れを告げにきました」

ヴェルフはヘファイストスのいる部屋に入り、用件を手短に確実に伝わるように言い放った。

それをヘファイストスは分かっていたように驚きもせずゆっくりと立ち上がり、ヴェルフの前に立ち問いかける。

「来るとは、思っていたわ。」

「でもそんな事許すとも思う?！」

「ここで行かなければ貴女はきつと叱りつけてくるでしょう。」

俺を「ヘステイア・ファミリア」にの元へ行くことを許してください」

改めてハッキリと口に出して告げた。

それに対してわざと聞かせるかのようにため息をついたヘファイストスは

「どうしてそこまでするの?」

今回の戦争遊戯は『改宗』ウォーゲーム コンバージョンせずとも参加することが出来る。

どうして私も元を去ってまでいく必要があるのか説明してくれるのよね？」

負けた場合のペナルティを差し引いても、『改宗』コンバージョンする必要はない。

ヘファイストスの問いにヴェルフは笑い、

「友のため」

断言された言葉に、ふっとヘファイストスも笑みをこぼす。

「いいわ。許しましょう」

ヘファイストスはいくつもの金槌ハンマーが並べられた棚に近づく。

自身の髪、そして瞳の色と同じ、紅の鎚を彼の眼前に突き出す。

「餓別よ。持っていきなさい」

鍛冶師スミスの魂ぶんしんを差し出し、送り出すヘファイストスに、ヴェルフはもう一度笑みを浮かべ



「お世話になりました」

ヴェルフは迷いない足取りで部屋を後にし、崇敬する女神のもとを発った。

.....

「もっと渋るかも思ったがの」

「趣味が悪いわよ椿」

ヴェルフが去ったあとに入ってきたのは椿。

そしてヘファイストスはどこか嬉しそうに微笑んでいた。

「それは悪かったの。」

「聞くつもりはなかったのだが」

「それだけじゃないでしょう。」

あの子、目に迷いがなかったわ。

今までずっと迷い苦しみ、もがき続けたあの目が輝いていた。

一人じゃあの迷いは抜け出さなかったはずよ」

「それはヴェル吉をバカにしすぎじゃ。

あやつならきつと自分自身で越えれた壁。

手前はちよつと後押ししただけじゃ」

「そういうことにしてあげるわ」

.....

「ほ、本当かいタケミカツチ!!!」

「ああ、助けてもらった礼だ。」

全団員とはいかないが一人、どうしても恩を返したいと言ってくるものがいてな」

狭い街路に面して建てられた古ぼけた集合住宅。

そこには六名の団員達と慎ましやかに暮らしている派閥の本拠ホームの中で、ヘステイアは一人である交渉にきていた。

「今回の戦争遊戯ウォーゲーム、『改宗』せずとも参加出来る。

もちろん同じように団員を奪われる可能性がため、人数は限られてくるがそれでもいいのか？」

「もちろんだ!!!」

「そうか、では命!!!」

「はい、タケミカヅチ様!!!」

立ち上がった女の子はタケミカヅチ・ファミリアは、ついこの前というよりも昨日ヘステイア・ファミリアに助けられたのだ。

「ハジメ殿に救われたこのご恩、精一杯やらせてもらいます!!!」

多くのモンスターに囲まれていたところをハジメが助けた。

本人としては「何かあったのかな？」と興味本位で助けただけなのだが、命にとっては大恩義を感じているのだ。

「それじゃよろしく頼むよ命君」

「はい、よろしくお願ひします!!」

「ヘステイア、人数も必要だが勝てる秘策などはあるのか？」

「どうなんだろうね。」

でもなんだろう、ハジメ君なら何かしてくれるだろうと思ってるんだよね」

影が薄くとも作戦会議は発言しましょう。

「み、見ないうちに変わったな…ベル…」

「そ、そうかな…」

ベルを見るかぎり生々しい傷痕がいくつもあつた。

一体どれだけ追い込んだらそんな風になるのか…

そして一方でヴェルフも変わっていた。

「で、でも、スゴいねヴェルフ…」

そんなに凄そうな魔剣を作るなんて…」

「やるからには勝たないとな。

といつてもこの一振だけじゃ心元ないが我慢してくれ」

「そんな事ないよ!!」

「僕たちの為にありがとうヴェルフ」

ニコツと笑うベルに微笑み返すヴェルフ。  
すると寡やっれて現れたのは

「な、何なんですかあの人は……」

「あつ、……お疲れリリ」

「大変だったみたいだなリリ助」

「……ベル様、リリは改めてベル様を見直しました。

あんな訳の分からない人と一緒にいられるなんて……」

「ああ……」

二人とも遠い目をする。

何せリリがこんなにも疲労した相手というのが

「言いがかりは止してくださいリーリ。

ただ僕はもつと子供じみたものを……」

「それが余計なお世話なんです!!!」

リリはハジメ様よりも歳上なんですよ!!!

なんでこんなフリフリのスカートを履かないといけないんですか!!!??  
!!!」

「大丈夫です。」

スカート中は下着が見えないように薄いズボンのようなものを」

「そんなことをいつてるんじゃないやありませんこの変態ツ!!!」

怒り任せに物を次から次へと投げが全て一時停止に止めれる。

完全に弄ばれていると分かっているながらも、抵抗せずにはいられないのだった。

「リリ!!」

やりすぎだつて!!」

「止めないでくださいいベル様!!!」

「に、賑やかですね……」

「正直にバカらしいっていつてもいいんだぜ」

「いえ、そんなことは!!!」

ただ、こんな風に笑いあえることは滅つたなと思ひまして……」

リリを止めようと離れたベル。

そして残されたヴェルフの元へ命が近づいてきた。

「ハジメに助けられたみたいだな」

「はい。」

初めは異形の者かと驚いていた私が恥ずかしいです」

「気にすることはねえ、俺も驚いた」

「ですが、それだけではないのです。」

あの圧倒的な力の前で私達は力の無さを知ったのです。

それからどうしてもその光景が離れずに……」

誰もあの光景を見ればそう思うだろう。

だけど

「いまはそれでいいじゃねえか？

きつと通る道だったんだ、それが早かっただけのこと」

「……ヴェルフ殿……」



「どうせ明日の戦争遊戯ウォーゲームでとんでもないことをやらかすぞアイツは」  
「……そうですね」

.....

「まさか自分から志願してくるとはな……」

「ご冗談を。」

「貴女は私の行動を読んでいた」

「買いかぶりすぎや。」

「何かの形でやるとは思ったけどな」

リユーはロキとヘステイアから話があると呼び出されていた。

そこは3人だけで誰もここに入らないように話してある。

「それで私に用とは」

「これや、一応設定上はオラリオ外からの参加にしとるからな。

そこに書かれとる内容を覚えておいてくれ」

ロキから渡されたのは戦争遊戯に参加するにあたってリユートの身分をどうするかというものの答えだった。

リユートはギルドからブラックリストとして目をつけられている。

こんなオラリオ全体が見るなかでリユートのまま出ることは自殺するようなもの。

なので、仮面を被り偽るつもりだったのだが「それだけじゃ足りんわ！」ということ  
でロキが用意したものだった。

「細かく書かれていますね」

「何を聞かれても答えられるようにな。」

「これなら神やないかぎりは誤魔化せるやろ」

「私から志願をしたというのに、どうしてここまで…」

「間違いなくハジメは暴走するで」

その言葉にリユートの眉はピクツと反応し、ヘステイアもハァーとため息をついた。

「なるほど。」

私はハジメのストップパー役ということですか」

「そんなつもりはないで

でも、何かやらかすのは間違いないやろ」

「そうですね。」

そして止められるのは、自惚れではないのなら私しかいない。

最初から私を参加させる気だったというのは間違いではなかったようですね」

そこでニヤリと笑うロキに睨みをきかすりユー。

分かったいたとはいえここまでコケにされるのは正直に腹が立つ。

しかしどうしようもなくハジメを助けたいという思いからハアアとため息をついて

「どちらにせよ、ハジメの力になる。」

それなら道化になり操られてもやることには変わりません」

「ほな、頼むで」

一礼をして部屋から出ていったリユーを見ていたヘステイアは、すぐさまロキに近づいて

「このバカロキ!!!」

どうして喧嘩を売るようなことをしたんだい!!!」

「い、いや〜軽いジョークのつもりやったんやけどなー

なんかついスイッチが入ってしまっただけ……」

……

「リ、リヴェリア……」

「どうしたフィン？」

「ええーと……椅子に座ったらどうだい？」

「大丈夫だ。」

「私はいま、立っていたい気分だな」

「そ、そうかい……」

どうしてフィンが気遣つてリヴェリアを席に着かせようとしたのだが、余計なことをしたかもしれないと思うほどいまのリヴェリアに落ち着きはなかった。

ずっと同じ場所を行ったり来たり、そして立ち止まり考えて閃いたと思いきや悩んで、また歩き出して行ったり来たりを繰り返す。

初めはそんな姿にベートが「うつとおしいんだよババツ!!!」と発言した瞬間に地に伏せて死んだ姿をそこにいるメンバーが目撃してからはフィンが話しかけるまで30分近く沈黙が続いたのだ。

「それじゃその状態でいいから話を聞いてくれないか?」

「ああ、始めてくれ」

「それではまずはベル・クラネルだが……あの子はレベル2として頂点に達したと言つてもいい」

その言葉に予想していたが改めて聞いたことで驚いているメンバー。  
フィン、ガレス、ベート、アイズの徹底的指導があつたのだ  
かなりステイタス向上するとは思っていたが

「ねえ、流石に向上しすぎるんじゃない？」  
「私も。」

団長、ヘステイア様から何か聞きましたか？」

「流石に無理だった。」

でも否定はしなかった。

それだけでも何かあると想定してもいいだろう」

「言っておくがそれ以上の詮索は不要だからな」

リヴェリアの睨みを効かす言葉にまた沈黙が降りた。

ハジメとのダンジョンから帰ってベルの様子を見に来てからずっとこんな風に過保護のようなものが進行している。

ティオネやティオナも訓練のときは異常に攻撃的になったり、防御など忘れてしまっ

たかのように突き進める攻撃に誰もが恐怖するぐらい変わっていた。

……間違いなく、ハジメが何かをした。

だが、直接的にしているわけではなく一緒にいたことによる影響だと思う。

「ええーと、リルルカ・アーデはウダイオスのドロップアイテムの取引により『改宗』コンバージョンすることが出来た。

さらにヴェルフ・クロツゾもヘファイストス・ファミリアから『改宗』コンバージョンをした。

そしてみんなも知っているように彼はあのクロツゾの家系だ。

魔剣の一本を仕上げて戦争遊戯に参加すると聞いている」

クロツゾの血筋

希少かつ非常に強力な『魔剣』を製造することが出来たことから、クロツゾの一族は『鍛冶貴族』として高い地位を得ていた。

しかしすでにクロツゾの血筋はヴェルフを残して途絶えた。

そしてそんな貴重な血筋を拒否していたヴェルフは友のために再び魔剣を打つこと

にした。

「タケミカツチ・ファミリアから命、そしてオラリオ外から仮面の冒険者の二人が参加することになった」

誰もが知っている。

そしてその名は使わないと決めた。

向こうもこちらも、たった一人のために。

「そしてトキサキ・ハジメだが……」

……彼は間違いなく暴走する」

「ああ……」

「だよね」

「ワシは知らんぞ」



「問題ない」

全員がこの言葉だけで納得する。

すでに戦争遊戯前日になる今日まで沢山の準備をしてきた。そしてその準備は普通の冒険者がする準備ではない。

皆が止めた。

彼は聞く耳を持たなかった。

皆が制止しようとした。

止まることなど彼の意思しか無理だと悟った。

一番の理解者に頼んだ。

見事に丸め込まれてさらに状況が悪化。

ということ、結論。

(((((死なないといいいけどな……)))(((((

相手に同情するというおかしなことになっていた。

.....

「というのが作戦です」

「「「「「.....」」」」」

それはとても作戦とは呼べるものではなかった。

初めからハジメが考える作戦の時点でマトモではないとは予測したが、これは.....

「うわあ.....」

「死んだなこいつら」

「私も流石に...同情します.....」

「.....えっ、これ、やるのですか?」

「やりますよ。」

「これぐらいしないと、神様とその眷族の皆様には罰を与えることは出来ないかと思いましたが、思いつきやりましょう」

影が薄いという前提がなくなるとこうなります。

『あー、あー！！えーみなさん、おはようございますこんにちは。

今回の戦争遊戯<sup>ウォーゲーム</sup>実況を勤めさせて頂きます【ガネーシャ・ファミリア】所属、喋る火

炎魔法ことイブリ・アチャーでございます。

2つ名は【<sup>ファイアー・インフェルノ・フレイム</sup>火炎爆炎火炎】。以後お見知りおきを』

待ちに望んだ戦争遊戯当日。

ギルドの本部前庭では仰々しいステージが勝手に設置され、実況を名乗る褐色の肌の青年が魔石製品の拡張器を片手に声を響かせていた。

『解説は我ら主神、ガネーシャ様です！』

ガネーシャ様、それでは一言！』

『——俺が、ガネーシャだ!!』

『はいっありがとうございました!!』

白亜の巨塔『バベル』三十階。

戦争遊戯を誰よりも楽しみにしていた神々は、多くが『バベル』に赴いていた。代理戦争を行う両主神ヘステイアとアポロン、ソーマもこの場で待機している。

「ヘルメス様……本当に私がこの場にいてもいいのですか？」

「ああ、構わないよ。」

「固いこと言うやつはこの場にいないさ」

神ヘルメスと、眷族であるアスフィ。

男神女神の中に一人だけ交ざるアスフィは居心地悪そうにしていたが、ヘルメスは笑い飛ばす。

するとそこに現れたのは

「ヘルメスやないか。」

「なんや何してたんやお前！」

「やあロキ。」

「ちよつと野暮用でね。」

しかし知らないうちに大騒ぎになっているね。

聞いているよ、ヘステイアを匿っているって」

「言い方が悪いわ。

うちが興味あるのはハジメだけや。

ヘステイアはあくまでもオマケ」

「誰がオマケだ、誰が!!」

そこには今日の主役であるヘステイア。

そして隣にはヘファイストスが一緒についてきた。

「ヘファイストス。

君も関わっているんだってね。

まさかこの3人がこうして集まるなんて昔じゃ考えられなかったよ」

「そうかしら?」

私はあるんじゃないかと思ってたわよ」

「冗談じゃないよヘファイストス!!!」

君には悪いけどこのロキと仲良くなんて出来るか!!

すぐにハジメ君を引き合いにだして脅してくるこの貧乳とは!!!

「うるさいわドチビ!!!」

お前もハジメを使ってウチの眷族を使い回しとるやろうが!!!」

また言い合いが始まり全く緊張感がないと感じてしまう。

そんな様子をヘファイストスとヘルメスは苦笑いしながら見ていると、少し真剣な表情でヘファイストスに問いかけるヘルメス。

「…………ハジメという子はそんなに神々を引き寄せる子なのかい?」

「…………そうね、少なくとも私は…魅せられたかもね」

冗談のようにフフフと笑うヘファイストス。

納得したような表情をしているヘルメスだが

(…………トキサキ・ハジメ…………)

……彼が………)

そんな事を考えながら服の懐に手を伸ばして取り出した懐中時計を確認する。

時計は正午に控えていることを告げていた。

ヘルメスは顎を上げ、宙に向かって話しかける。

「それじゃあ、ウラノス、『力』の行使の許可を」

空間を震わせた彼の言葉に、数秒を置いて応える声があつた。

「――許可する」

ギルド本部の方角より、重々しく響き渡る神威のこもった宣言を聞き届けたかのよう  
に。

オラリオオ中にいる神々が一齐に指を弾き鳴らした。

瞬間、酒場や街角、虚空に浮かぶ『鏡』が出現する。



『~~~~~!!』

都市に至る場所で無数に現れた円形の窓に、人々が色めき立った。

下界で行使が許されている『神の力』——『神の鏡』。

千里眼の能力を有し離れた土地においても一部始終を見通すことができる。

『では鏡えいぞうが置かれましたので、あらためて説明させていただきます！

今回の戦争遊戯ウォーゲームは「ヘステイア・ファミリア」対「アポロン、ソーマ・ファミリア」、形式は攻城戦!!

両陣営の戦士は既に戦場に身を置いており、正午の始まりの鐘が鳴るのを待ちわびております!』

酒場や大通りなど場所に合わせて大きさが異なる円形の窓には、太陽の旗エンブレムを掲げた古城、そして平野が映しだされている。

そしてここでもう一つ。

『それではここで神ヘステイア様に皆さんが視覚出来るようにして頂きます』

誰も何が言っているか分からなかった。

しかしヘステイアは納得したようで、ヘステイアの鏡だけ映像が変わりそこに映し出されたハジメに問いかけた。

「ハジメ君、いくよ」

『分かりました』

二人のタイミングが合わさり鏡見ているもの全てにこの声が届けられた。

『戦い終わるまで許可をする』

すると鏡の映像がヘステイアの見ていたものに変わり、ただ平野だけが映る中でモヤ

がかかり、徐々に何かか形を成していき、そしてそこに現れたのが

「来ましたああああ!!!」

あれがオラリオの幽霊であり、今回の2つ名がついた「サスベナンデッド続行不可能」の——トキ

サキ・ハジメだああああ!!!」

『うおおおおおおお!!!』

そのパフォーマンスをみて歓喜が上がる。

この世に姿を消せる物があると知っているものもいるだろうが大半はそれを知らない。

つまりこれはパフォーマンスとして最高のもの。

突然現れたハジメに誰もが驚き、言葉にしている。

『さっきのはなんだ!!』『どこから現れた!!!』『無表情にもほどがあるだろう!!!』などと。

そんな中、一人の女神が無意識に妖艶を放ち周りの男共を落としていく。その頬を赤め物欲しそうな瞳はたった一人の魂とその姿を焼き付くすかのように見つめる。

(いいッ!!いいッ!!いいわッ!!!!)

何にも捕らえられないほどの無垢で透明な魂!!

欲しいわ、トキサキ・ハジメ、欲しいわ!!!!

欲望を必死に抑えるフレイヤ。

ずっと見てみたいと思ったいたが、見れたのは霞にかかった薄い魂だけ。

ヘステイアから教えてもらったハジメを見るためには何かあると思っていたが、

(……………ヘステイアには悪いけど…手に入れるわよ、あの子は…………)

その姿を、その表情を見られないように会場から離れていったフレイヤ。そんな中、別の盛り上がりが始まっていた。

「もういいかアー!？」

賭けを締め切るぞ!!」

実況の声が外から響くなか、街の数多くの酒場では、商人と結託した冒険者主導で賭博が行われていた。

「アポロン、ソーマ派とヘステイア派、50対1ってところか……」  
「【ヘステイア・ファミリア】の予想配当が50倍以上……むしろよく賭けるやつがいるな」

胴元の冒険者達が金と賭券を集計し賭博の状況を確認する。

流石に名のある2つのファミリア対、無名に近いヘステイア・ファミリアではどうしてもこうなってしまう。

それでもヘステイアにかけているのは異常とっていいほどのバカキャンブラーな神々だろう。

そんな中にアポロンがソーマを連れてヘステイアへと近づいてきた。

「よく逃げ出さずにきたなヘステイア」

「……………」

「ベル・クラネルとは別れを済ませてきたかい？」

「……………」

ち  
あくまでも無言を通すヘステイアに代わりロキが口を出すためにアポロンの前に立

「ヘステイアに加担していると思われるのは癪やかな、忠告しといたるわ」

「なんだいロキ」

まさか負けるかもしれないから注意しろというのか？」  
「ああ、その通りや。」

「いまからでも掛け金を変更したほうがええで」  
「バカにしないでもらおうか。」

ハッキリいつてこの戦力差で勝てるっても？

むしろ追加してあげるよ!!

負けた時はソーマ・ファミリアにも同じ条件で取引することをな!!!」

その言葉に一気に神々が騒ぎだした。

強気の発言に揺らいだ神々はヘスティアに賭けていた賭金をアポロン側へ変更し始めた。  
めた。

慌てて止めようとするがその時にはほとんどのものがアポロン側へ賭けることになりヘスティアの予想配当が75倍にはねあがった。

「知らんで。」

「ウチは忠告したからな」

「ああ、構わないよ。

それより負けたときの言い訳でも考えておくんだな」

そういつて高笑いしながら離れていったアポロン。

一方ソーマはまだその場に止まり

「ええんか、あんな勝手に決められて」

「……………ああ。」

……………それが償いになるなら…構わない……………」

アポロンとまではいなくても余裕ある表情をしてもいいソーマだが、終始強ばった表情でいた。

それを見ていたロキやヘファイストスはため息に似たものを吐き出したあと



「……分かっていて、やるつもりなのね」

「ええんやないか。」

実際、勝負は最後まで分からんもんや。

ただウチらと他のものもの考えと情報が違うからな。

あの一<sup>ハジメ</sup>本槍がどれだけ引つ掻き回すか。

あとはやってみらんと分からんわ」

「その割にはヘスティアに賭けているのね」

ロキの手には賭券が握りしめられていた。

あそこでロキが言った意味はこうして合法として賭けるためでもあったのだ。

それにはヘスティアは知っていたが、

「当たり前や!!!」

お前も賭けんかヘファイストス!!!

ええかヘスティア!!絶対勝てや!!!」

「言われなくても、あの子達は負けなよ!!!」

いまはそんな事はどうでもいい。

ベルとハジメ、いやあそこにいる皆のために出来ることはこうして見守ることしか出来ない。目の前に出現している自身の『鏡』だけを見つめる。

『それでは、まもなく正午となります！』

冒険者が、酒場の店員達が、神々が、全ての者の視線がこの時『鏡』に集まった。

『ウォーゲーム戦場遊戯——開幕です！』

号令のもと、大鐘の音と歓声とともに、戦いの幕は開けた。

そして、次に映った映像には城壁だけではなく城の1／4が巨大な氷によって潰されたところだった。

『……………はっ？』

誰もが理解出来ない中で、誰もが呆然とするなかで、氷の上に立つ影が一つ。その者は無表情であるがゆえに見下ろされているものからみたらただの恐怖の対象しかない。

「さて始めましょうか。」

挨拶は不要ですよ、先ほどの映像で皆さん分かったと思いますから。

それでは徹底的にやらせてもらいますのでどうぞよろしく願います」

影が薄いからこそ暗躍出来るのです。

「な、何の音だああ!!」

「ツ!!?」

慌てているソーマ・ファミリアのザニスと、アポロン・ファミリアのリーダーであるヒュアキントスは先ほどの騒音と揺れに驚いていた。

すると慌てた様子で部屋に入ってきたのはソーマ・ファミリアの眷族の一人だった。

「ほ、報告しますッ!!!!」

巨大な氷の塊が城壁と城の一部を押し潰しました!!!!」

「なっ!!!!?」

何を言っているのだッ!!!!」

「……………」

同様しているザニスに比べてヒュアキントスは冷静に状況を確認するために小窓から外を確かめる。

するとそこには報告通りに巨大な氷の塊が、この戦場の1/5を押し潰しているのが見えた。

「一体どんな手を使ったか知らないが、魔剣であんなことができるとはな……」

冷静に分析して可能性を考えた。

魔法ではルール違反となる。

なら魔剣によって作られたと考えるべきだろう。

もしくは何かを既に仕込んでいたと考えたがそんな事はないとすぐに切り捨てた。

.....

「……すげえな……」

聞いていたけどよ、こうして目の前でやられると驚くしかねえな」

「同感です。」

あの人の異常差は知っていたつもりでしたが…改める必要がありますね」

「これから同じファミリアなんだから、これくらいは慣れないと持たないと思うよ……」

ヘステイア・ファミリアの3人は冷静に分析をしていた。

もちろんテーマはハジメについてだ。

この奇襲作戦はハジメから聞いていたがまさかここまでとは思わずに驚いている。

それでも少し離れたところで固まっている命を見ればまだマシなほうである。

そしてもっとも冷静に対応しているのが

「それではクロツゾさん、魔剣の方を」

「あ、ああ……」

「貴女は驚かないんですね…」

「ハジメはやると言ったことはやる人です」

「確かに……」

「なら私は信じるだけだ。」

そして作戦通りに進めなければいけません」

そういつて魔剣を手にしたリユーは城へ向かって歩きだした。

その背中を見つめるベルは「スゴいな…」と呟いてしまうほどリユーのハジメに対する想いの強さに驚いていた。

いつもいるベルとはまた別のものなんだろうと感じていると、リユーが魔剣を構えて、そして振り下ろした。

魔剣から放たれた業火は巨大な氷を砕き、砕かれた氷は城全体へと砲撃のように吹き飛ばされた。

氷の散弾は城内まで届き次々に冒険者を倒していく。

「よ、容赦ないですね……」



「だな……」

戦力がある程度減るまではリユーとハジメ以外は待機することになっていたが、これでは減るところか終わるのではないかと考え始めた。

しかしそこは上手くはいかない。

相手も対抗するためにアポロン・ソーマの冒険者が魔法を一齐に詠唱し初めてた。そしてタイミングをずらしての複数による連続魔法はベル達の方へと放たれた。

しかしそれらの魔法はリユーが振るう魔剣により次々と相殺される。

いや相殺どころか影響は敵陣地に及んでおり、少しずつ押され始めている。

規模では魔法の方が大きいというのに押されているのは、止まることをしらない魔剣からの猛激である。

「一体いくつ魔剣を持ってるのだ!!?」

「い、いいえ!!」

相手は魔剣を……たった一振しか使っていません!!!」

「ふ、ふざけるなッ!!!」

魔剣は数回使えば崩れ消えるものなんだぞ!!!」

一向に止まない魔剣の追撃について逃げ出した冒険者達。

リユーの手はそれを止めることなく、直撃はせずとも外観を破壊することにより隠れる場所を無くして追い詰めていく。

それでもその仲間の魔法の中から襲撃を成功させ辛うじてリユーに届いた攻撃は、フードに僅かに切口をあたえて一瞬あらわになる木の葉のように尖った長い耳が、同胞である冒険者に目にうつりそして激怒した。

「き、貴様あ!!?」

<sup>エルフ</sup>同胞でありながらよりによってあの忌々しき魔剣を手にするなど、恥を知れツ!!!」

怒りに身を任せて振り下ろされる短剣を簡単に交わしたりリユーは、短剣を弾き落としたりのち

「生憎、一族の怨襲おんしゅうより私には大切なものがある」

間近で魔剣を振り下ろして冒険者を吹き飛ばした。

直撃ではなく、地面に向けて放ったことにより五体満足ではあるが戦闘不能となった。

「……大切な人のためなら、その恥、受け入れましょう」

誰にも届かない小さな声。

それでもその決意を持ってリユースはさらに進撃していく。

……

「反則……ですよね……」

「俺が作ってなんだが……同意するぜ……」

「僕達、出番ありますかね……」

「どうなんでしょうか……」

未だに待機している四人。

いま、たった二人で城を攻めておよそ1/3の戦力を削ったと思われる。

「しかし本当に崩れないのですね」

「ああ。」

ハジメからアイデアをもらったときは「何いつてやがる」

と思ったが……アイツのお陰で踏ん切りがついた。

まだ、一人では作れねえが……いつか壊れない魔剣を作ってやる!!!」

いまだに壊れない魔剣はあるアイデアにより原型を留めていた。

ハジメからのアイデア。

魔剣に一時停止をつけるという方法だった。

触れただけですべてを止めていたハジメだったがこの度レベルアップによりコントロールが可能となり、止めるものと止めないものの区別が出来るようになったのだ。

しかし無意識に行う一時停止においては制御は出来ないため、自分自身への一時停止はコントロール出来ないようである。

それでもコントロールが出来るようになり、ハジメは魔剣の崩壊する現象を一時停止することにした。

しかしいきなりその現象のみを一時停止することなど出来ることではないため、いくつもの魔剣を試していた。

その魔剣はロキ・ファミアが提供してくれたが、全て無くなるまで続けてしまったためにロキが嘆いたことがついこの前の出来事である。

そしていまその損失を補うために賭け事をしているのだが、後でリヴェリアに怒られるのは……またの話となる。

とにかくそのお陰でこうして猛攻が出来ているのだが一向に出番のない四人の元に、空に放たれた業火が光放ったのだった。

「うしッ!!!」

「やつと出番がきたぜ!!」

「いいですか、作戦通りをお願いしますね」

「分かりました」

「それじゃ、行きましよう!!!」

走り出した四人はバラバラに城に向かって駆け出す。

そして各自その手にはある物が持たされており、これが更なる城の崩壊へと繋がることになる。

.....

「前線は終わったようですね」

ハジメは氷の塊が砕けたあと城内を散策していた。

見かけた冒険者は手当たり次第気絶させているが、どういうわけか見えている筈なのに至近距離まで来ないと気づかないようである。

その他にも氷の犠牲になった冒険者、魔剣で吹き飛ばされた冒険者を含めて、半分近くの冒険者が倒されているがそれでも未だに勢いは止まらない。

それを止めるためにハジメは四人にある作戦を伝えた。それが終わればあとは最終決戦になるだろう。

なのでそれまでにもう一つ、仕掛けを施す必要があつた。

だから城内を散策している間もこうして壁に手を当てながら歩き回っている。

すると広々とした部屋にたどり着いたハジメ。

そこには顔を知っている二人の冒険者がいた。

一人は訳の分からない恐怖に怯え、一人は冷静を装っているが冷や汗をかいていた。二人もまたハジメの存在に気づいていない。

【カミカクシ】の影響がなくなるともハジメは影が薄いということが改めて分かる。

かといって近づけば気づかれる、そしてあの二人を倒すのはベルである。

ハジメはあくまでも「サポーター」として今回の戦争遊戯に参加しているのだ。

なぜならハジメがメインで行うなら、

すでにこの城は完全に最短で、

落とされているのだから。

「この部屋だけは影響がないようにしておかないとですね」

そういう部屋に一時停止をかけたあと誰にも気づかれずにハジメは離れていった。



影が薄くても計画通りに進みます。

「しかし、やるとは思ったけど……やりすぎや…」

「……ロキ、これはまだ序の口だよ…」

「……これ以上酷くなるって……」

神々が集まる所では大騒ぎ、いや、各地が大騒ぎになっていた。

圧倒的な戦力差だったのに追い詰められているアポロン・ソーマファミア。

そして対するこの三人の神は他の神よりかは落ち着いているが、それでも起きている事に対して現実逃避をしたくなっている。

そこに離れていたヘルメスが近づいてきて

「な、なんだいあの子は……」

「傲慢の子だよ、ヘルメス」

「それは分かるが……」

……あの巨大な氷を詠唱なしで作り出したように見えたんだが……」

「なら大丈夫だよ、あれはハジメがやったから」

「言っておくけどな、それ以上はマナー違反やで」

その口振りからロキはその出来事がどのようになったのか知っていることに勘づいたヘルメスだがそれ以上は聞かないことにした。

誰もがあの光景を目の当たりにして『なんだあれはあああああああ!!!』と叫び、ヘステイアに詰め寄ろうとした。

しかしそこにロキやヘファイストスが睨みをきかして庇ってくれたお陰でこうして観戦できている。

そこで一人だけ、いや、ロキの言うとおり他のファミリアの情報を聞くなんて論外である。

『ヘステイア・ファミリア、残り四人も参戦するようですよ!!』

『ここまでの戦況、どう思われますかガネーシャ様?』

『俺がガネーシャだああ!!』

『聞いたこちらがバカでした!!』

.....

「いたぞ!!リトル・ルーキーだあああ!!」

4方向へ分かれたベル達はそれぞれの持ち場に向かっていた。

これはハジメがたてた作戦なのだが、成功させるには一人一人が目的地に到着しなくてはいけない。

つまりは目の前にいる敵を倒さないといけない。

ベルはヘステイア・ナイフのナイフを抜いて一気に敵の懐に駆け込む。

相手は五人、向こうもまさか突撃するとは思わず一瞬怯んだがすぐに戦闘体制に入った。

一人の冒険者が弓を使い矢を放つ。

真つ正面から飛んでくる矢をベルを正面から弾き落とした。



「はああああああ!!!」

「なっ?!?!?!」

飛んできた魔法を神様のナイフで真つ二つにしたあと、そのまま冒険者の元に駆け込む。

しかし倒した筈の二人目の冒険者が立ち塞がる。

振り抜かれた斧はベルの体を引き裂こうと迫り来る。

しかし反射神経とすべきなのか本能なのか、それとも今までフィン達に叩き込まれたお陰なのか、気づいたときには斧の真下を滑り込んでいた。

この行動に冒険者は反応しきれずにベルは相手の懐から一気に立ち上がり、顎に強烈な一撃を喰らわせた。

残り一人の冒険者は自棄になったのだろう。

持っていた杖をふりおろしたのだが簡単に避けられて気絶させられた。

「……………ふう」

汗も欠かずに一気に五人を倒した。

今までなら考えられないことなのだが、今のベルはそれさえも当たり前のような気分  
でいた。

あの地獄のような特訓。

自分から志願しておきながらも二度としたくなく感じるほど恐ろしかった。

それのお陰でこうして汗もかかずにこれたのだが、

「やっぱり派手に動く……………そうなるよね……………」

一息つく暇もなく次の敵が現れていた。

しかしこれは作戦通り。

敵を一掃するためには多くの冒険者をおびき寄せせる必要がある。

ただしその代わりに大勢と戦うリスクが発生するのだが

「これぐらいあのとくに比べれば!!!」

.....

「チッ!!」

分かってはいたがこんなにウジャウジャと来やがると!!!」

ヴェルフの周りには冒険者が次から次へと現れている。

しかしそれはたった一人に対して一気に終わらせるためではない。  
敵はヴェルフを恐れていた。

「な、な、何なんだアイツは!!!」

「あんなもん見たことねえぞ!!!」

「とにかく使わせるな!!!」

ヴェルフの持っている物に警戒しながら近づくと冒険者達だが、ヴェルフは地面に向けて別の物を叩きつけた。

その瞬間に眩しい閃光が放たれ視界を奪われた。

「う、うわあッ!!!」

「ま、眩しいッ!!!」

周りの冒険者は視界を奪われ踞っている。

その隙にヴェルフはもう一つ持っていた物を投げつけた。

その瞬間に爆発が起きて敵は吹き飛ばされる。

これはハジメが作った閃光弾と爆発弾。

さすがに爆発弾はゴライアスを倒すほどの物ではないが、並の冒険者なら簡単に倒してしまうほどの威力はある。

早めに回復した冒険者はヴェルフに襲いかかろうと剣を振りかざしたが、瞬間にヴェルフは敵の前から消えた。



「こつちだツ!!!」

声が聞こえた方へ顔を向けると空から落ちてくるヴェルフが大刀で冒険者の頭を打ち抜いたところだった。

不意打ちによる攻撃に冒険者は倒れこみ、ヴェルフ以外の冒険者は全員ダウンしてしまった。

「つなんつう物を作ってるんだアイツは……」

ハジメに緊急に渡していた物を使ったのだがそれはヴェルフの体を瞬間に移動させるものだった。

足元にあるものを投げつけた瞬間に衝撃波が発生してヴェルフの体を上空へ飛ばした。

お陰で奇襲には成功したがトラウマになるんじゃないかと思うほどビックリしたようである。

「これが終わったなら文句いってやるからな……」

.....

【掛けまくも畏かしこき——】

「いたぞおおおお!!!」

走りながらの詠唱を唱える命を追いかける冒険者。  
迫り来る冒険者の攻撃を避けながら詠唱を続ける。

【いかなるものも打ち破る我が武神かみよ、尊き天よりの導きよ。】

命一人でこの人数を相手するにはこの長い詠唱を唱える必要がある。  
しかし相手もその詠唱を止めようと躍起になってくる。

走り回る命に対して接近しようにも逃げ回り捕らえられないため少し距離をおきな  
がら矢は放つ。

降り注ぐ矢はすでに命の体には無数の切り傷があるのだが、それでも致命傷にはい  
たっていない。

しかしそれでも痛みと疲労の中で詠唱を続けるのはキツイ

【卑小のこの身に巍然たる御身の神力を。】

それでも詠唱を続ける命に冒険者達は警戒していた。

詠唱が完成した際に起きる魔法を。

それがどのようなものかを。

【救え浄化の光、破邪の刃。払え平定の太刀、征伐の靈劍。  
今ここに、我が命において招来する。】

だからここは叩くべきだと命を取り囲む一斉に命に近づく。

一方命は立ち止まり詠唱を続けていた。

これなら間に合うかと思いきや

【天いたより降り、地すを統すべよ——  
神武しんぶとうせい闕征】

命の目が見開いた。

マズイと武器を振り下ろすのではなく降り投げた冒険者。

これなら詠唱前にやれるかと思っていたが

【フツノミタマ】

先に詠唱が完成した。

天に現れた光の剣が地面に向かって落ちてくる。

しかしこのままだと光の剣が落ちてくる前に投げ飛ばされた武器が命の体を貫く。

(これで、終わりだッ!!!)

武器を投げつけた冒険者達、誰もがこれで仕留めたと思った。

しかし突然目の前にいた命が消えた。

そして目の前には細い鉄が螺旋を描き何かの動作を行ったように上下に動いていた。

その訳の分からないものに目を捕らわれている間に光の剣が地面に刺さり中心に半径10mの重力場のようなものを発生させた。

「ぐうわあああああ!!!」

押し潰される冒険者達は誰も立てずに地面に膝をついており、立ち上がろうとも降り注ぐ重力場に動くことは出来ない。

苦しんでいる冒険者達の一人が空から何が落ちてくるものを見た。

それはこの重力場から逃れたようで立ち上がり、こちらに向かって振り向いた。

「…………お、お前……は…………」

「すみませんがしばらくそこにいてください」

そういつて命はその場から離れる。

追いかけてようとするが重力場により動くことが出来ない。

冒険者達はたださりゆく命を見るしか出来なかった。

走りながら目的地に近づく命は残っている冒険者から逃げながらさっきの出来事を考えていた。

（先ほどのものは……）

……いや、深く考えない方がいいでしょう……）

すぐに考えるのを止めた命。

ハジメから仕込まれたアレの説明を聞いたのだがどうしても理解出来ない。

緊急的に逃げる事が出来ることは分かったが、どうしてそれを思いつき作ることが

出来るのか…

そしてそれをいまさつき思い付いた素振りだったのだから尚更驚いた。

だから思わず聞いてしまった。

そしてその答えを聞いてしまった。

「僕は凡人なので色々考えないといけないんです」

いや、絶対に凡人ではない。

ツツコミを入れたかったが今はそれどころではないと思いつまった。

そして強制的に仕込まれたアレが役に立つなんて思わなかった。

「これが終わったらお礼を言わなければ……」

ヴェルフとは違いこちらは感謝の気持ちがある。

といってもヴェルフがおかしいわけではない。

ハジメという人種がおかしいと聞く人全員がいうだろう。

もちろん感謝している命もその一人であるのは間違いない。

.....

(面白いように上手くいつてますね)

リリはアポロン・ファミリアのルアンというものに姿を変えていた。

ルアン本人とは四日前、昏倒させ街外れの倉庫に閉じ込めている。

正確には氷付けしているので倉庫に閉じ込める必要はないのだが念のため。



「城外西にいるぞ！」

「向かえええええ!!!」

ルアンに変身したりりは敵の冒険者達を上手く分散させて戦力を有利に向けていた。

これにより城の中にいる冒険者はほぼいなくなつた。

残っているのはヒュアキントスとザニスと僅かな冒険者のみ。

そしてその者達はみな同じ場所にいる。

「準備完了」

りりは持つていた赤い筒を地面に叩きつけると中身が弾け飛び空へと羽上がつた。

そしてそれは空で爆発を起こして赤い閃光が夜空を彩つた。

そしてそれを確認して5秒数える。

それと同時に出来るだけ城から離れるリリ。

何が起こるか分からないが指示通りに行動を起こしているのだが、あと3秒後に手に持つている黒い球体を城に向けて投げる算段になっている。

そして3秒経ち黒い球体を城に向かって投じた。

リリ的には嫌な予感しかなかった。

それでもこれなら勝てるというハジメの話を信じて。

そして壁にぶつかった黒い球体は、

大爆発を起こした。

「予想通りですかあああああああああ  
!!!!」

ルアンに変身していたということを完全忘れて素が出てしまっているりり。

もしかして、いや、そんな、でも、まさか、とか何度も思っていたがそんな不安を押し退けて投げたというのに大正解。

それも大爆発はここだけではない。

同時に三ヶ所から大爆発が起きている。

そうこれをベル、ヴェルフ、命も持っており、閃光を合図に球体を投げたのだ。

ツツコミと同時に爆風に吹き飛ばされてしまったリリはもう一つ持たされていた白い球体を、自分の体が壁にぶつかる前に叩きつけた。

すると破裂した球体の中からモコモコしたものが現れてリリの体を包み込み衝撃を吸収。

何処から集めてきたのか大量の羽毛があったことは知っていたけどこんな風を使うなんて……

「あの人は……やっぱりおかしいです……」

目の前では大爆発で吹き飛び消えてしまった城の後。

唯一残ったのは元の城の三階まで続く道と一つの部屋だけ。

ハジメの一時停止により宙に建っている建造物はこの世ではまず見れない景色となっていた。

影が薄い、のにやる気満々です。

「……スゴいね……」

「……スゴいな……」

「……スゴいですね……」

「……スゴすぎます……」

城が大爆発を喰らい芸術的なオブジェに変わり果てた姿を四人は呆然と眺めていた。あの球体を持たされた時点で何かが起きると思っていたがまさか……城がほぼ壊滅しているものを目の辺りにすることとなるとは。

その光景はもちろんオラリオ全てに流れていて、予想していたはずのヘステイアさえも開いた口が塞がらなかつた。

と、まあ異常すぎる光景に圧倒されている四人の元へハジメとリユウが近づいていた。

「こういう風にやるなら最初からやれば良かったのでは」

「今回は徹底的が目的ですのでまずは戦力差というものを見せようかと」

「なるほど。」

ならこの魔剣を使用し圧倒させながらも城へ攻め込まない理由が分かります。

ですが、始めの氷はいりませんかよね？」

「あれは、ノリです」

「なら仕方ありませんね」

「仕方ありません」

そんなカップルのような会話をしている二人に、この目の前の惨状について聞いた。

「ハジメ、これはやり過ぎじゃ…」

「まだ足りませんよ」

「だがな、わざわざ城をほぼ崩壊させる必要は…」

「あります」

「しかしもし他の冒険者がいたら」

「それを防ぐためにこうして派手に暴れてもらい情報操作で城から特定の人達以外を出したんですが」

「だとしてもどうしてリリ達に話さなかったんですか!!?」

「……………あつ、話してませんでしたね。すみません」

その言葉に脱力感を感じる四人。

頭が物凄く痛い、どれだけハジメと接してもその人柄が掴めない。

隣にいるリユーはなんかハジメという色に染まってきたようで、「話忘れないかと確認しましたよね?」「抜けていたようです」「……………気を付けてください」と強く言ってくれない。

しかしこれ以上何かをいうと話が拗れる。

特にリユーがハジメに甘いという内容をいえば否定をする行動の際に恥じらいで暴れる可能性がある。

無意識にいちやついている事を意識させたときには周りに被害が及ぶことはすでに経験済み。





内心ヒユアキントスは焦っていた。

定期連絡する筈の冒険者が来ないところからおかしいと感じていた。

例え倒されたとしても周りのやつがくるはずだ。

なに、いくら待とうとも誰も来ない。

それはザニスも同じように感じ取っており、自ら出撃しようと扉に手をかけた時にやつと異変に気づいた。

叩こうが、蹴ろうが、魔法を放とうがビクともしない。

扉だけではない、この部屋全体が同じようにキズ一つ受けないのだ。

まるでこの部屋だけが周りから拒絶されたように。

考えられることは一つ。

(トキサキ・ハジメ……)

やはり、アイツがこの勝敗のカギとなるのか……)

倒すべき相手、そして未知なる相手。

どうい魔法を使えばこんなことが起きるのかは分からないが、あの男を倒さないとこの戦いが終わることはない。

直感的にそう感じているとき、突然体が宙に浮くような感覚に襲われる。

「な、なんだッ!!?!」

「ッ!!?!」

体が宙に浮いているわけではない。

これは落ちているのだ。

城内いるというのにこれは間違いなく落ちている。

得体の知れない恐怖に声を出してしまいそうになる前に、視界は真つ暗になり全身に強い衝撃が走った。

.....

「.....ねえ、ハジメ」



現れたのはザニスであり完全にぶちキレている。  
ふう、とハジメがため息をついて

「あれは僕が相手します。

ベルベルはヒュルヒュルをお願いしますね」

「……ハジメ、ヒュアキントスですよ」

「アハハ……」

うん、分かったよ」

「皆さんはベルベルのサポートを。

まあ、よっぽど追い詰められてない限りは一人でいいので」

「だろうな」

「ベル様も、ハジメ様も負けるイメージが出来ませんし」

「ご武運を」

皆に見送られながらハジメはザニスの元へ。

向こうもハジメが近づいてくるのに気づいたようで、ぶちギレたザニスは走りながら、ハジメを歩きながら、二人はベル達から少し離れた場所へと向かった。

そしてザニスがいた場所から爆発がおき、粉塵の中からヒュアキントスの姿が現れた。

「……………俺をよくもコケにしたな……………」

「貴方の相手は、僕です」

「……………レベル2が、レベル3に勝てると思っているのか!!」

「勝ちます」

冷静を保っていたヒュアキントスはとうとうキレて、ベルに向かってくる。

ベルも駆け出してヒュアキントスへと。

こうしてそれぞれのファミリアの中核が激突する。

影が薄いために終わりを迎えるのに気づきませんでした。  
た。

ヒュアキントスは驚愕していた。

この目の前にいる男はつい最近レベル2になったばかりのはずだ。

なのに、どうして自分の攻撃についてきている？

打ち出す攻撃を防ぎ、受け流し、回避している？

私はレベル3なんだぞ。

なのに少しづつ私が押され始めている。

攻撃の速度が上がってきている。

——誰だ？

攻めていたはずの攻撃はいつの間にか攻守交代しており、私が攻撃を防いでいるなんて。

——誰だ？

そして小さな傷を受け初めて、それが少しずつ大きくなり、だんだん急所を狙われ始めていた。

——誰だ？

なんなんだ、これは？

これはまるで私よりも強いものが手解きをしているような……ありえない!!

「私は、レベル3なんだぞ!!!」

「はい。」

「……なので全力でいかせてもらいます」  
「ツ!!!??」

ふ、ふぎけるな……

これが全力ではないというのか……

私が、レベル2に弄ばれていたというのか……

「ふざけるな!!!」

……

「圧倒的ですな」

「いくらレベルが高くても、いまのベルを止めるのは骨が折れるだろうな」

ハジメが言っていたように近くで援護できるように待機しているが、どうみてもその必要はない。

初めはヒュアキントスの实力を見るために攻撃を受けていたようだが、少しずつ攻撃に出始めたベルは今では完全を押ししている。

「あのロキ・ファミアの一級冒険者に手解きを受けたのです。

そしてそれにしがみつき、自分の力の糧にしたベル様にあの人が勝てるとは思いません」



「だな。」

まあ、俺達はベル達の邪魔になる奴等を片付けるとするか」

リリ・ヴェルフの二人の視線の先にはさつきまで気絶していた両ファミリアの冒険者が起き上がり、いまにもこの戦いの邪魔をしようとしていた。

「命様は3時の方を、ヴェルフ様は9時の方を、私は12時の方を対処します。」

後方は、まあハジメ様がいまずし問題はないと思いますがリユー様お願いします」

「分かりました」

「任せとけ!!」

「……………」

それぞれの返事を聞いて全員が散り散りに別れて対処することに。

しかしリユーに至ってはその場を動かずにベルの後方、リユーからして正面で戦っているハジメの姿を見ていた。

もちろんハジメの戦いにも邪魔をしようと両ファミリアの冒険者が攻撃を繰り返しているが、相手はハジメなのだ、攻撃が効くはずがない。

それでも例外がついこの前あったばかりだ。

ハジメも油断はしていないだろうだが、すぐにでも援護出来るように神経を尖らせている。

.....

「なんだこいつは!!?」

「攻撃が効かないなんて!!?」

「魔法だ!!魔法を放て!!」

「効きません!!塞がれてます!!」

「この防御も無限じゃないはずだ!!やり続ける!!」

ザニスに当たらないようにハジメのみの攻撃が続いている。

しかし一向にハジメにダメージを与えられている感触はない。

それでもいつか来るだろう限界を信じて攻撃を続けているが

「くそが!くそが!!くそがあああつ!!!」

!!!

「言葉使いが悪いですね。

こんなに一人対複数の戦いでも文句も言わずに戦っている僕に対してもう少し配慮を……」

「黙れッ!!」

その訳の分からない防御壁を破ったときは貴様にこの世では生きられないと思わせるほどの地獄を見せてやる!!」

「丁重にお断りします」

必死にハジメに攻撃を当てようとするが、等の本人は呑気な表情で……いや、相変わらずに無表情で様々な攻撃を受けながらも平然としている。

それがザニスの怒りを買ったのだろう。

さつきからどれだけ自分が隙だらけの攻撃をしているか。

一撃の攻撃力は確かに強いかもしれないが、なにせ大振りで攻撃をしているため、戦闘に関しては低いハジメでも狙ってカウンターを喰らわせれるぐらい雑なのだ。

まあそんなことしなくてもたつた一撃で倒せるだけの力はすでに溜め込んでいるのでいつでも攻撃可能なのである。

ならなぜさつきと勝負を決めないかというと、

(……どうやら僕の脅威になる人はいないみたいですね……)

リユールと同じようにこの多い冒険者の中からハジメに攻撃を喰らわせることが出来る者がいないか確認していたのだ。

今まではどんな攻撃でも防ぐことが出来ると自負していたが、あの戦いでその考えは変わった。

どんな相手でもどんな攻撃をして、どんな力を使っているか、一時停止を対処出来るものがあるのかどうか確認する必要がある。

しかし両ファミアリアの冒険者の中にはいないようだ。

それさえ分かればザニスと戦いもこれで終わらせても問題ない。

「これ以上、状況も変わらないようですし、終わらせましょうか?」

「戯れ言を!!」

「こつちにはまだ奥の手があるツ!!!」

.....

【我が名は愛、光の寵児。ちようじ】

我が太陽にこの身を捧ぐ。」

平行詠唱を始めたヒュアキントス。

この戦いで勝てるとするならばこれしかない。

完全に押されている状況の中で、ベルから距離をとり詠唱を始めたのだが、

【我が名は罪、風の恠気。りんき】

一陣の突風をこの身に呼ぶ。」

もちろんベルがそれを許すはずはなくヒュアキントスを捕らえようと駆け出してくる。

いまのベルの速度ならあつという間にヒュアキントスとの距離を縮めることが出来る。

しかしその時、ベルの前に複数の冒険者が現れた。

そうヴェルフ達が食い止めていた冒険者が数人突破してきたのだ。

いまのベルにはこの人数ぐらい問題なく捌くことは出来るのだが、その僅かな時間がヒュアキントスの詠唱を完成させることになった。

【放つ火輪かりんの一投

—— 来れ、西方せいほうの風】!!

倒した冒険者をすり抜けてヒュアキントスに向けて左手を突き出した。

【アロ・ゼフュロス】!!

【ファイアボルト】!!

西風の火輪。

太陽光のごとく輝く、大円盤はとつきに放たれたベルの魔法を打ち破りそのままベルに向かつていく。

ギリギリで避けたベルだが、そのヒュアキントスの魔法は自動追尾型であり、弧を描いてベルの元へと戻ってきた。

そこでベルは立ち止まった。

それはヒュアキントスにとって好機であり、諦めたにしろ避けるにしろ防ぐにしろこれで勝つたと悟った。

いまからどうしようともあの魔法の圈内にいる、間違いない仕留めることが出来る。

アロ・ゼフュロスは自動追尾の他にもう一つ。

「<sup>ルベレ</sup>赤華」!!」

瞬間、円盤は眩い輝き放ち、大爆発した。

それに巻き込まれたベルの姿は見えず、誰もが終わったと思っていた。

だが、

「あれぐらいでベル君が終わるはずがない」

「やな。負けるわけがないわ」

「こういうときのための剣を、あの子は持っていて、そしてそれを正しく使う子なのだか

ら、問題ないわね」

3人の神は慌てる様子もなく、ただ映像に映るものではなくベルを信じ、

「ちいつ!!」

「あれ、ベート何処に行くのー」

「うるせえ!!俺の勝手だろうが!!」

「……………ダンジョンね」

「間違いないだろうな」

「ワシも体を動かしたくなつたな!!」

「それじゃみんなで行こうか」

「……………うん」

あるファミリアはむしろこれで勝利を確信したかのように、いま映る映像から目を放してダンジョンへと向かい、

「さて、宴会の用意をするよ!!」



「気が早くないですか？」

「なに言ってるんだい!!」

これから大人数がこの店に来るんだ、さっさと用意しないと地獄をみるよ!!!」

あるお店では勝利を確信したのと同時に、確実に来るとは分からないお客のために料理を作り始めて、

「終わったな」

「終わりましたね」

「終わりですね」

「…これで終わりのようですね」

同じ戦場にいる仲間は、ただ一言だけ。

それで全てが終わると、周りの敵を一掃することに専念する。

ベルを知っているものは誰も負けるとは思っていなかった。

むしろその行動がこの戦いを終わらせるものだった。

ヒュアキントスはベルにトドメを刺そうと一歩踏み出そうとしたのだが、その瞬間身体全身が震えだした。

まるで何かを警戒、いや、「死」というものに逃れるための本能的な警告が、本能的にとつさに反応したような……

曇りが晴れたその先に、傷ついたはずの、絶望しているはずの相手<sup>ベル</sup>が、右手をこちらに向けて、集束する白光がベルを照らしている。

たった3秒。

しかしその僅かな蓄力<sup>チャージ</sup>を与えたヒュアキントスはそこで終わりを告げたのだった。

「ファイアボルト」

………

「……あ、ありえない……」

いまヒュアキントスが倒された。

それも相手のレベルはレベル2だったはず。

なのにどうして無傷で立っている。

そして目の前にいる相手も無傷で立っている。

「……ありえない……ありえない……」

こんなことがあって言い訳がない。

あんな弱小ファミリアがこんなに強いわけがない!!

「ありえるわけがないツ!!!!」

「ありえない、ことなんで、ありえませんよ」

「ツ!!!」

気づかないうちに、いや、さつきまで離れていたはずのハジメが目の前にいる。

目を離れた覚えはない、間違いなくずっと見ていた。

なのに、どうして、目の前にいる  
!!!??

「何なんだお前らはあああああああああ!!!」

「貴方たちがバカにしていたヘステイア・フアミリアです。ちゃんと覚えておいてくださいね」

ザニスが奥の手があると云っていたがそんな事は関係ない。

ハジメはただザニスに触れるだけでいい。

それだけでザニスは再び凍りつき、この戦いは呆気なく終わりをむかえたのだった。

影が薄くても簡単には終わらせられません。

オラリオオの上空に、大歓声が打ち上がった。

古城跡地で打ち鳴らされる激しい銅鑼の音と共に、決着を告げる大鐘の音が都市全体に響き渡る。

観衆である多くの<sup>デミ・ヒューマン</sup>傭人が『鏡』の中に立つ少年二人へ興奮の叫びを飛ばした。

「エイナ、やったあー!？」

「ベル君……ハジメ君……!？」

ギルド本部前庭では、エイナがミイシヤに横から抱き着かれた。

『戦闘終了~~~~~っ!？」

<sup>ジャイアント・キリング</sup>これは大判狂わせにもほどがあるぞ!!!

<sup>ウォーゲーム</sup>戦争遊戯の勝者は「ヘステイア・ファミリア」———!？」

そして舞台上、何故か主神ガネーシヤが雄々しく姿勢ポーズを決める横で、実況者イブリが身を乗り出して真っ赤になって拡声器へ叫び散らす。

『『『『ヒヤツハア——ツツ!!』』』』』

酒場では、ヘスティア達に賭けていた神々が勢いよく立ち上がり勝利の歓声を上げる。

『『『『ちくしよおおおおおおおおおおおおおおおおっ!?!』』』』』

一方で、アポロン達に賭けていた冒険者達は無数の賭券を破り捨て頭上に放り投げた。

「「「ツしゃあー!」」」

西の大通り『豊穰の女主人』ではアーニヤ、クロエ、ルノアの定員娘達が三人一緒に手の平を叩き合う。他の従業員や厨房の猫キャットピブル人達も手を取り合い笑い合った。

「……………ベルさん……………」

……………リユー……………良かったね……………」

シルもまた、薄鈍色の瞳を細め、唇に喜びの微笑を浮かべていた。

「……………勝ちやがった」

ホームの外から響いてくる歓声を耳にしながらベートは不機嫌そうにそう言い捨てる。

「ベート、どこに行くんだい？」

「どこだっていいだろ」

た。  
団長であるフィンの問いにまともに取り合わず狼<sup>ウエアウルフ</sup>人の青年は応接間から出てい

「ダンジョンか」

「ダンジョンじゃのう」

「ダンジョンだな」

「ですね……」

フィンとガレスが苦笑を浮かべ、リヴェリアは両目を閉じ、ティオネも呆れた顔を作る。  
る。

しかし気持ちは分かる。

いま『鏡』の向こうで喜んでいるのは強くなるためにロキ・ファミリアの訓練を耐え抜いたものだ。

そしてその少年は、力の半分も出さずに勝利をもぎ取った。

それにはもちろん、もう一人の少年が関わってるのだが……



「しかし規格外だとは知っていたが……なんだあの氷の塊は……」

「しかもあれは魔法ではなのだろう。呆れるわい……」

「……是非、ロキ・ファミアに欲しい人材なんだけど……梃子でも動かないだろうね彼は……」

分かっていても言葉に出してしまう。

それほどハジメの起こしたことは大きかった。

「………やったねっ」

「うん………」

つい先ほどまで喚び続けたいたティオナがゆっくりと振り返り、にししつ、と満面の笑みを浮かべる。

頷き返すアイズは、駆け寄ってくる仲間に囲まれるベルとハジメの姿を見て、顔を綻ばせた。

「おめでどう………」

.....

「な……………が、あ……………？」

お祭り騒ぎの中で一人、アポロンは顔を真っ白にして立ち尽くしていた。

己の子供達が力なく両膝を地につけている『鏡』の光景が、彼を現実から逃避することを許しはしない。

二歩、三歩後退する彼の頭から、ぼろりと被っていた月桂樹の王冠がこぼれ落ちる。

「——ア〜ポ〜ロ〜ンツ」

そして、ゆらあ、と。

ここまで沈黙を貫いてきたヘステイアが、不気味な動きで近づいてくる。

うつむき加減の前髪の奥、瞳から邪神と見紛うような眼光を放ち、茫然自失とするアポロンに近付いた。

「ひ、ひいつ!?」

「覚悟はできているだろうなあ?」

尻餅をつき後ずさるアポロンはゆっくりと近づき壁まで追い詰められた。  
そして必死にこの状況を打開しようと

「ま、まで!! 軽い出来心だったんだ!!」

もう二度とお前らファミリアには手を出さない!!

だから許してくれ!! 俺とお前の仲だろうツ…」

「だ・ま・れ」

「ツ!!!?」

このままでは何もかも失う。

するとアポロンの頭の中で電閃気が駆け巡った。

「じよ、情報だ!!」

見逃してくれたらヘステイアが知りたかった情報をやるッ!!」

それを聞いたヘステイアの顔が一瞬動揺をみせた。

これはチャンスだと睨んだアポロンは一気に畳み掛ける。

「知りたかったのだろう、あの情報を!!」

どうして漏れないはずの情報が漏れたのか!!」

「……何が、望みだい?」

その言葉に流石のロキやヘファイストスも驚きを隠せずヘステイアに駆け寄った。

「待てやヘステイア!!」

そんなもん、いまからアポロンに命令すればええやろうが!!」

「そうよ!!」

ヘステイアが勝ったときはどんな要求も出来るのよ!!」

「言っておくがどんなことされようが私はこの情報だけは吐かないからな」

完全にやられた。

完璧に有利に立っていたというのにアポロンの持つ情報一つで状況が変わってしまった。

アポロンも明らかな悪い顔をしているがヘステイアは気にもせずに、

「いいから言うだけ言ってみてごらんよ」

「簡単だ。」

……再戦を求めろ」

その言葉に全体がざわついた。

あれだけやられたというのにまだ戦いを求めている。

それだけ自信があるのかは分からないが

「あかんでヘステイア!!」

「こいつ何を考えとるか分からんで!!」

「そうよ。」

「こころは情報は諦めて終わらせるべきよ」

しかしこんなめちやくちやな要求にも関わらず即答しないヘステイア。  
するとヘルメスの方を向いて

「ヘルメス、ハジメ君と繋いでくれないか？」

「あ、ああ、いいよ」

突然の指名に困惑をしたが何かあるのだろうと思ったヘルメスはハジメの方に受信側の『鏡』を送った。

これで互いに会話が出るのだが一体何を話すつもりなのか……

「ハジメ君聞こえるかい？」

「はい聞こえます」

「プランBだ。準備は出来ているだろうね？」

「問題ありません。じゃ本気の徹底的を行いますね」

まるでこうなることを予知していたのか二人の間にはすでに作戦があったようだ。

しかしそれはベルや他の仲間も誰も知らず一体何が起きるのかと不安になってきた。それはそうだろう。

だつてあのトキサキ・ハジメなのだから。

プランとか知らされていない時点で絶対にマトモではない。

それを感じ取った二人の神はそうーとヘステイアに

「何を考えとるかには知らんが止めとき……」

絶対にマトモなことやないやろう、なあ??」

「そうよヘステイア。」

怒っているのは分かるけどこれ以上は……」

すると俯きながら「ふふふ……」と笑いだしたヘステイアにこれは不味いと悟った。

そう、ヘステイアは完全にキレている。

あれだけ好き勝手に言われて負けた途端に我が儘を言い出して再戦しろ。

これを聞いて穏やかな心のまままでいられるわけもなく

「そうだよハジメ君。」

今回は特別に許可するよ。

見せつけてやるんだ、君の力を!!!」

するとハジメは左手人差し指をつきだして反時計回りにゆつくりと円を描いていく。すると人差し指の先端から光が現れ、徐々に光の円が作られていく。

そしてそれと同時にある現象が起きていた。

「な、なんやこれは……」

ロキが見ている『鏡』には映る映像に驚愕していた。

何故なら倒壊した筈の古城のガレキはなくなり、倒れていた支柱もなくなり、一瞬、刹那で崩壊した古城が復元されたのだ。

そして驚くのはそれだけではない。

倒れていたアポロン・ファミリア、ソーマ・ファミリアの冒険者達の傷も治り、一体何が起きているのか周りの人や本人達も理解はしておらず恐怖している。

それはそうだろう、さつきまでいた冒険者の過半数がベル達の前から消えたり、逆にいなかった冒険者が現れたりしているのだから。



「な、なによ…これ…」

「発展アビリティ『再生』の力だよ」

「ちよつ、ちよつと待てやツ!!」

「発展アビリティはこんな魔法みたいなもんやない!!!」

そう、発展アビリティはいわば補助的であること。

例えば《耐異常》は毒を始めとした様々な異常効果を防ぐ

例えば《魔導》は威力強化、効果範囲拡大、精神力効率化。魔法を使用する上で様々な補助をもたらす魔法円（マジックサークル）を作り出すことが出来る

つまり身体や魔法等の補助的な役割を持つのだが、ハジメの《再生》は補助どころではなくメインのような働きをしているのだ。

「僕だって驚いたよ。」

でも間違いないよ、発動条件もあるし、すべてがすべて再生できる訳じゃないからね」  
「それでも……異常よ、これは……」

「今更だよヘフアイストス。」

……ハジメ君に常識はないって知っているだろう……」

「……そうやったな……」

3人の神が遠い目をしている。

現実逃避したいのは分かるけど目の前に起きているのは現実ですからねー

するとベル達の方でも何が起きているのか分かっていないようで皆がハジメに駆け寄ってくる。

「こいつは一体何なんだよ!!」

「徹底的に潰すためにですけど」

「そんなことは聞いてません!!」

また非常識なことをしていることについて聞いてるんです!!!」

「神様に許可が降りたのでやりました」

「あのですね、結果についてはなくこの現象を聞いているのですが……」

「発展アビリティ《再生》です」

「皆さん、ハジメにこれ以上聞いてもマトモに返事が返ってくるとは思いません」  
「ちよつと失礼じゃないですか」

「普段の行いのせいだと思うよハジメ……」

しかし誰もが説明を求めているだろう。

だっていまこの状況はほとんどゲーム開始直後と変わらないのだから。

「さて、第2ラウンドにいきましょうか」

影が薄くても倍返し、いや10倍返しをしたいのである。

ハジメが使った再生には次のような制限がある。

- ①無機物、有機物関わらず再生出来るが『死』を迎えたものは戻せない。
- ②使用者が『一時停止』を使用中に再生に必要な触れる<sup>マーカ</sup>を付けなければならぬ。
- ③マーカ-の効果は1日24時間、ただし日にちが変われば効果は時間内でも消える。

④マーカ-は使用者が取り除かないかぎり付いたままである。

マーカ-が付いてれば『死』さえ迎えていなければその時点に戻ることが出来る。

### 『再生』

生物学なら身体の一部が損傷、破壊してしまつた組織や身体部位の再成長。

それ以外だと何かを記録したものを視認するため行動と言われる。

しかしこれはそんなものとは違う。

まるで過去に戻りやり直すような、現実を拒絶し抗うために行っているような……

……

『これはどういったことでしょうか!!?』

崩壊したはずの古城やアポロン、ソーマ・ファミアの冒険者達がまるで戦いの前の状態に戻っております!!!

いえ、まるでではなくまさしく『時が巻き戻されております!!!』

その言葉にさつきまで映像を見て騒いでいた者たちは静まり返った。

それはそうだろう、いま起きていることはまるで『神の力』ではないか。

それをただの冒険者が一人で……

『これは……一体どういうことなのでしょう……』

……まるでこれは……神様の力ではないかと……

……どうなのでしょうか、ガネーシャ様??』

『……俺がガネーシャだああ!!!』

『はいっ聞いたのが間違いでしたッ!!』

しかしこれは問題ないじゃないのか?というレベルではない。

この現世では神様は力を使ってはいけなさと決まっている。

そしていま見ている『鏡』もウラノスが許可をしたからこそ使える力。

その力はギルドからの制限もあるようだが、どうやらそれだけではない。しかしそれがどういふことなのかは未だに分からずにいる。

なのでこれがもし神様の力なら、ギルドから厳罰がくるはずなのだが

「――問題は、ない」

どこから聞こえてくるウラノスの声。

つまりこれは神様の力ではなく、インチキなものでもなく、キチンとした発展アビリティであること。

『ぞ、続行です!!』

再起不能となったはずの2つのファミリアと古城は元に戻りましたので『ウォーゲーム戦争遊戯』

を続行ですツ!!!  
』

こうして二度目の戦争遊戯が開始された。

.....

戦争遊戯の再開を待つ間にハジメは仲間らに『再生』について話したのだが、

「.....規格外過ぎるよ、ハジメ.....」

頭を抱えるベルとそれぞれ呆れてものが言えない面々。

それを見てハジメが一言。

「でも、これで徹底的にやれますよね?」

「「そんなことについて今は言ってません!!」」

と、全員から一喝をもらい流石に黙りこんだハジメ。

とにかく状況とこれからのことを話すためにリリが仕切り始める。

「とにかくなくなってしまったことは仕方ありません。

いまはこれからのことです、相手もそうですが戦略を見られていますので同じ手は通じないと見るべきです」

「ええ、その認識でいいと思います。

そしてさらにハジメに対しての警戒が強くなったはず」

「加えてこの隠し玉もバレているってわけか……」

「……状況は不利だが……やれるだろう!!!」

「そうかもしれないませんが、ここは相手の様子を見るべきでは？

なにやら相手には奥の手があるようでしたので……」

「ならそれごと潰せばいいですね」

さも当たり前のように発言したハジメに誰もがハッ？と呆気にとられてしまった。

その間にハジメは勝手にリリのバックパックを中身を漁り始めた。

「ちよつ、何をしてるんですか!!」



「こんな時のために入れておいた物を取り出そうと」

「なんでリリのバックパックに勝手に物を入れてるんですか!!」

??

「パーティーを組んでいきますので必要なものはバックパックに入れますよね？」

「はい、それは間違つてません。」

「間違つてませんが一言ぐらいりに言つても……」

「あつ、ありました。」

「あと替えのした……」

「これ以上言うならぶち殺しますよっ  
!!!!!!」

滅多にキレないリリを「気持ちには分かるが飽きらめろ」とヴェルフが宥めて、ハジメはそんな事を気にせずに取り出した大量の「紙」を破き始めた。

「……………えー、ハジメ殿。」

「これは何をしているのですか？」

「紙を破つてます。あつ、良かったら手伝つてくれませんか？」

「構いませんが……何をするつもりなのでしょう？」

「あつ、リユー。」

「この紙を古城上空全体に飛ばせますか？」

「それは出来ませんが……まさか……アレをするつもりですか!？」

「そうですね。」

「こつちのほうが手間もかかりませんし」

「………分かりました。」

「だが、キチンと加減をするように」

「ちよつと待つてください!!!」

「お二人で納得されても私が分かりません!!!」

と、命が言っているのだがそんな事は二人の耳に入るはずもなく、リリが命に「すでにあの人はハジメ様の影響を強く受けてますので……」と言われて諦めるしかなかった。

リユー本人は絶対に否定するだろうがすでに遅し、もうハジメに侵食をされて染められている。

それを一般的には恋や愛の力だというのだろうが、そのリユーの相手があこのハジメであることから、一般的な目で見られるわけもない。

まあ、本人が問題ないのなら周りごとにかくいう必要はないのだが、

「……なんででしょうか…普通に二人で紙を破いているだけですのにこのモヤモヤ感は何…」

「気にしたら負けだリリ助」

この戦場でイチャイチャ感を出されては周りがイライラしてしまうことは仕方がないのだ。

そしてそれは向こうも同じなのか、圧倒的な勢力がハジメ達に向かって走り出していた。

「ハ、ハジメ!!」

早くしないとこっちに来てるよッ!!!」

「せつかちですね。」

まあ、これぐらいあれば問題ないですね

それではリユーお願いします」

4つの袋に破れた紙を沢山詰め込みそれをリユーに渡す。



不規則に舞う紙くずはその言葉に従うように一直線に地上に向けて降り注いだ。

この紙くず全てにハジメの一時停止を付けていた。

停止させ、方向を変えて、相手に返す。

停止させた力を己のタイミングで放つ。

それを今回は紙くず一つ一つに力を止めた一時停止を貼付したのだ。そして紙くずを地上に向けて放つように一時停止を解除すれば出来上がりである。

もちろん狙いを定めて放つのは無理なので大量の紙くずが必要であり、あくまでも地上に向けてなのでいくら敵陣の上空だったとしてもハジメの方にも飛んでくるわけで

「なっあって恐ろしいものを使ってやがる!!!」

「被害がこちらにもあるじゃないですか!!!」

「皆さんなら問題ないと思いましたが!!」

「「だったとしても前もって言えええ!!!」」

リリとヴェルフはツツコムが他のもの達は言っても聞いてないだろうなーと諦めて降り注ぐ紙くずを払い落とす。

敵陣のほうも半分以上が不意打ちにより倒れたがまだ立ち向かってくる。未だに心

折れてはいない。

「やっぱり格上の方々には無理でしたか。

なら圧倒的なものをぶつけますね」

そういつてハジメは前線に立ち掌を地面に付けた。

そしてある「衝撃」を、階層主の一撃を放った。

グランド・クラッシャー  
「大地の怒り」

それは圧倒的な衝撃を停止させたものを敵陣に向けて、それも大地を変形させるほどの衝撃を放った。

地面は揺れ盛り上がり、亀裂は走り裂け目が現れ、水柱のように大地が天に向かい伸びる。

それと同時に衝撃波が襲いかかり一気に敵陣は壊滅させられた。

「ふうー、スッキリしました」

その光景は味方であるはずのベル達にも恐怖を覚えさせた。

圧倒的な力の差、それはハジメだからと割りきっていたがこんなにも見せられるは思ってもいなかった。

『あつ、圧倒的だあああああ!!!』

たった一人でこの戦争遊戯を終わらせ』

「では、再生つと」

『るつもりはないいいいいいい!!!』

悪魔です!! あれは人間の皮を被った悪魔ですうううう!!!』

そして誰もがハジメが悪魔だと感じた瞬間だった。

影が薄い、それだけで人を判断するのは愚かだ。

それからどれだけ時間が経ったのだろうか……

もう一層殺してくれと何度思ったか……

それでも繰り返し、繰り返し、繰り返して、繰り返して、繰り返して、繰り返して……

何を間違えたのだろうか、その原因さえも思い浮かべることが出来ないほど疲労していた。

復活すれば圧倒的な攻撃で全滅させられ、すぐさま元の状態に戻る。もちろん色々な戦術や攻撃パターンを変えて対処していた。

いたのにアレはその全てを簡単にねじ伏せていく。

戦術も攻撃も全部止められ、何をしても無駄ではないかと心が折れるまで永遠にやらされるのではないかと思うほどに。

主神のために、ファミリアのためにやっていたはずなのに……本当に何を間違えたか、こんな悪魔に手を出してしまうのだろうか……



しかしそんな絶望している中でもハッキリ分かるのは、まだ我らのリーダーヒュアンキトス様は諦めていないということだ。

.....

「粘りますね。降参、もしくは負けたと宣言してくれたら終わりますよ」

「.....ふ、ふざけるな.....」

そんなこと.....言える...はげがないだろうが.....

第一、まだ...負けてないツ  
!!!!!!」

ソーマファミアはすでに心折れており、ザニスヒュアンキトスの隣で膝をつき頭を垂れていた。

「ザニスツ!!!立てええ!!」

このガキを殺るまでは終りではないぞお!!!」

「.....くっ.....」

「こんな屈辱を受けて終わらせるのか!!

こんな底辺の奴らにいいようにさせていいのか  
貴様はこんな男に、やられたままでいいのかツ  
!!!!!!

ヒュアンキトスの叫びが届いたのかゆつくりと立ち上がるザニス。その瞳はまだ闘志がある。

「お前に、言われなくとも……」

「だったらさっさと立て。」

でなければ私が先に倒すぞ」

「ほごくな、倒すのは俺だ」

周りからみたら友情が芽生えたように見えるが、その二人に対峙しているハジメからしたら

「いや、もう諦めてもらってもいいんですけど」

正直な感想であつた。

この戦い誰がどう見てもハジメ達、ヘステイアファミアの圧勝だということとは。

それでも『再生』で戦争遊戯を続けるのはこの二人から「負けた」や「ごめんなさい」という敗北宣言をさせること。

一番はザニスガリーリに、ヒュアンキトスというよりもアポロンファミア全員に謝つて貰いたいのだ。

しかし、この二人の心が折れない。

さつきから敗北宣言すれば終わりますよ、と説明しているのに未だに立ち向かつてくる。

これではこつちが悪者のように見えるかもしれないが、仕掛けてきたのも原因を作つたのも向こう側である。

謝れば許すとかなり優しい条件のはずなのにどうしてこう頭が、プライドが高いのか……ハジメには理解出来なかつた。

もうすぐで0時を、1日が終わつてしまう。

すると『再生』に使うマークが消えてしまう。

そうなるともた付けなおさないといけない。

別にそれをやることは問題ないのだが、この戦争遊戯に関わっている人達皆が精神的に疲れていないだろうかと考える。

いつまで経つても終わらない戦争遊戯。

この戦争遊戯を見ている人達もまだ終わらないかと待っていると思うのだ。

だって現場にいる仲間も、いや、ハジメを除く仲間はすでに疲弊しているのが分かるのだから。

あのリユーも疲れの色が出ている。

それは戦闘によるものというか、いつくるか分からない敵を前にして緊張がずっと続いているのだ。疲れないわけがない。

ハジメ？

無表情でそんな表情が分からないだけだと思うだろうが、本当にハジメに関して心配はない。

「……仕方ありませんね」

するとハジメはヒュアンキトス達に背を向けて仲間の元へ戻っていく。

もちろん後ろから攻撃しようとザニスは一步踏み出そうとしたがそれをヒュアンキトスが止める。

すでに小細工しても勝てないと分かっている。

かといって正面からいっても勝てる可能性が上がるわけではない。それでもそこだけはいらぬプライドの中でも僅かにマトモなプライドがそうさせているようだ。

そんなことも知らずにハジメはまた何も言わずにリリのバックパックをあさりはじめた。

「ですから私のバックに勝手に入れないでください!!」

「大丈夫です。もう私物を入れてませんので」

「聞いてますか？私の話を聞いてますか？」

「なにかイライラしてますか？」

長い戦いに疲労が溜まるのは分かりますが相手に当たるのは間違いですよ」

「その…その…その原因がハジメ様だということがどうして分からないですかあああああああ!!!」

「お、落ち着けりり助!!」

「怒ったら負けだよりり!!」

「離してください!!!」

「今日という今日はこの唐変木にハッキリと分からせてやらないと気がすまないんです!!!」

「気持ちは分かるがやめろ!!!」

「相手はハジメだよ!!」

「話を聞くわけがないんだからやめた方がいいよ!!!」

「リーリを止めるためかもしれないかもしれませんが何気に酷いことをいいますねベルベル」

「自分が悪いと自覚しろおおおおおお!!!」

何をいつても分からないと分かっているのに言わないとやってられない二人だった。

そんな様子を命はアワアワと見ており、リユーに限っては全く見ておらずいつ襲いか

かると警戒しながらヒュアンキトス達を見ていた。

「大丈夫ですよリユー。」

もう色々々小細工しても無駄だつて分かっているようですので

「その慢心がいつかハジメに襲いかかると思いますが」

「慢心というより、事実だと思えますけど？」

「……ハジメなら大丈夫だと分かっていますか……」

言葉が途切れるリユー。

その様子にハジメはリユーの隣に立ち

「ありがとうございます。心配してくれているんですよね」

「……私は、もう……何も失いたくない……」

「……ただの怖がりになってしまったのです……」

「それはいいことですよ。それがあれば立ち向かうことも出来るんですから」

無意識にハジメはリユーの手を取って

「僕の方も怖がってください。」

それはとても辛いかもしれませんが、その代わりに僕は絶対にリユウの隣に戻ってきますから」

「……ハジメは卑怯だ。」

そんなこと言われたら……耐えるしかなくなるじゃないですか……」

リユウもハジメの手を握り、強く握り、そして離れた。

別にこの戦いでハジメが負けることはない。

それでもこれから先のことは分からない。

そう、万が一この戦いだって負けるかもしれない。

そんなことを考えると不安がドンドン募っていくリユウにハジメが約束をする。

特別なことをしたわけではない。ただ戻ってくると言っただけ。確かめるように手を握っただけ。

それだけでリユウの心は晴れた。

「早く終らせて戻ってきててください」



「はい、分かりました」

.....

「別れの挨拶は終わったか？」

「それ、敗北フラグですよ」

「ふん、そんな風にしていられるのも今だけだ」

「ですから敗北フラグ立ちますよそれだと」

とにかく強気に出ようと考えているのか、さつきから完璧に負けてしまうようなお決まりセリフを吐く二人。

もしかしたら本当に大逆転するものを持っているのかもしれない。

だが、そんなことはどうでもいい。

なぜならハジメが本気でこの二人の心を折りにかかるからだ。

「いまさらそんな武器を持った所で何も変わりはない!!」

「そうですね、ずっと負けてますからね」

「負けを認めるなら手荒な真似はしないが」

「いや、すみません。それ今から僕が言おうとした言葉だったんです。」

変わらずどうしても負けを、自分達が不利だということさえも認めない。

そしてハジメがこのタイミングで手にした武器さえも一切警戒していない。

その高すぎるプライドさえなければこの先に待ち受けている現実を受けることはなかったのだろう。

「それですすね、本当に負けを認めることはしないんですよ」

「ふん、認めるもなにも敗北受けるのは貴様らだ!!」

「あつ、もういいです。分かりました。」

全く認める気はないということなので実力行使に移らせていただきます」

ハジメは持っていた武器を、短剣を構えて二人に近づく。

もちろん二人はその攻撃に対して警戒していた。

しかし、気づいたときには終わっていた。

さつきまで近づいたハジメの姿が突如消え、気づいたときには二人の背後にいた。

すぐさま方向転換して攻撃を仕掛けようとしたが、もう遅かった。

「忠告はしましたからね、恨まないでくださいね」

何を言っているのか分からなかったがとにかく背中を向けている今を!!と足を動かそうとしたが

「なっ!!?」

どういうわけか足が重い。

それどころか両手両足が重くなっている。

麻痺効果のあるものをつけられたと思った。

実際ハジメが背後に現れた直後に両手両足に一太刀受けていたのだ。それでもちよつと傷が入っただけだと思いきや特に気にしていなかった。

だがそれが絶望の始まりだった。

「僕は昔から影が薄かったのでこうして認識されずに攻撃は出来るんですよ」

その傷口から麻痺効果のあるものを受けたと思っていた。たがその傷口が徐々に大きくなっている。

「ただ、攻撃しても意味がなかったんですよ。」

攻撃が全くない僕が攻撃しても意味がありませんから。

一時停止の攻撃も別にこうして見えなくなる必要ありませんし、正面からぶつけられればいいだけだったので」

火傷のようなものかと思った。

しかしいつまでたっても収まらず、それどころか痛みは酷くなり傷口も大きくなっていく。

「ですけどこの攻撃なら意味があります。」

止められてもいいですけど、目的はその部分を止める<sup>終わらせる</sup>ことが目的ですから」



「タイム・イーター  
時喰い」

お二人の傷口、その進行に対する時間をこの短剣に喰わせました。

普通ならあつという間に治る傷口でも、治るといふ進行を止めてしまつたら、そして傷口の悪化をしてしまうだろう先の未来の時を奪われたら……ということですよ」

誰もが言葉が出てこなかった。

確かにすでに圧倒したハジメの戦いだったが、それでもここまで残忍なことはなかった。だが、これは……

「か、かえせ……………」

「無理ですよ。」

「マーカーさえもこの短剣が喰らいましたから」

「ふ、ふざけるなああああああああ!!!」

「いいましたよね。」

「負けを認めるだけでよかつたんです。」

「今までのことを許すとはいきませんが、少しは配慮があつたはずですよ。」

でも貴方達はそれを捨てたんです。  
あとはどうなるか、分からなかったんですか？」

そうハジメが言っていることは間違っていない。

この戦いはそういうことが起きてても文句が言えない戦い。

それを回避させようと何度も忠告したのに一切聞かなかつた二人が悪い。

しかし、それでも、これは……

「僕がどう思われようとも構いません。

ただ僕の大切なものに手を出すということとはこういうことだと分かつてもらいたかつたので」

それはこの二人に向けたものなのか。

それともここにはいない、この様子を見ているものに向けたものか。

それはハジメにしか分からないが、

『し、終了〜!!!!』

ソーマ、アポロンファミリア両者のリーダーが戦闘不能ということでの勝負はヘスティアファミリアの勝利ですッ  
!!!!!!  
』

この戦いで、トキサキ ハジメという者がどういものかが知られることになった。



影が薄い、という認識はここまで。そして…

「……アツ……アツ……アア……」

徹底的に圧倒的な程に徹底的にやられたアポロンファミリア。その主神であるアポロンは放心状態になっており、口からヨダレを垂らして目が白目をむいて完全にやられていた。

「聞こえているかいアポロン？」

まあ、聞こえてなくてもここで言わせてもらおうよ、僕達の勝ちだ」

ヘステイアのその声は届いておらず様子も変わらないのを見て先にもう一つのファミリアの主神の元へ向かった。

「ソーマ、僕達の勝ちだ」

「ああ、そのようだな」

「あまり驚いてないみたいだね」

「もともと勝ち目がないと分かっていた。しかしここまでとは……驚いてはいる」

それでもあの戦いを見て、当事者としてここまで落ち着いていると何かあるのかと思ってしまうほど。

それを見て冷やかすようにロキが近づいてきて、

「あれやろ、ソーマ。」

「お前ファミリア解散させるつもりやろ」

「ほ、本当かいソーマ？」

「あんなの見せられ、あの子達子供達は体験したんだ。もう冒険者としてやっていけないだろう」

「それはあまり自分のファミリアを信じなさすぎと違うか？」

「……ファミリアというより私が私を信じれないというべきか……」

そんな姿を見てどう言葉をかけるか分からなくなった。

いままでソーマは神酒ソーマを使いファミリアの士気を上げていた。

だが、それは必ずしもいいことだけではなく神酒のために汚いことにも手を出していた。そしてそれをソーマは見ても見ぬふりをしていたのだ。

リリが抜けたことにより、そして戦争遊戯によつてとれだけのことをしてきたのか理解したソーマはもう何を信じればいいか分からなくなっていた。

「確かに君がリリ君のしたことは、子供達にしたことは間違っている」

「……………」

「だけど僕は解散させるほど怒つてはないよ

むしろこれからのソーマファミアを見せてくれないかな？」

「……………へスティア……………」

そんな様子を見てロキは明らかにバカにしたため息をついた。

「なんだいロキ。僕の判断に不満があるのかい？」

「それはあるわ。」

そこにちゃんと神酒ソーマを作るように付け加えてもらわんとな!!」

「ロ、ロキ……………」

しかしわたしはそれが原因で……」

「それやからさらに管理を徹底させたらええやんか!!」

言っておくけど、ウチはあの酒がめっちゃ好きなんや!!

勝手に無くなせるなんて許させんからな!!!」

その言葉に涙を流すソーマ。

もう出来なくなると思っていた神酒もファミリアもまだ続けることが出来るなんて想像していなかったのだから。

「……お、恩に、きる……」

「まずは一週間の合間に神酒を10本……」

「なんで君が決めてるんだ?」

「ええやんけ!!」

こうなったら一蓮托生やろうが!!!」

「だとしてこれに関しては口を出すな!!!」

「なんやと!!!」

「なんだよ!!!」

また子供みたいなケンカが始まった二人。

それを見ていたソーマはどうしたらいいのか分からず立ち尽くすしかなかった。

.....

とりあえずケンカが収まり次に未だにトリップしているアポロンの頭に大量の水が入った水を頭から一気にかけるロキ。

「さっさと戻ってこんか!!」

「ひやあツ!!!何をするだいロキ!!?」

「じやかわしいわ!!」

「アポロン!!僕は君に色々聞きたいことがあるんだ。

だから正直に答えるんだ、君達は負けたんだ僕には聞く権利がある!!!」

その言葉に苦虫を噛むような表情をするアポロン。

今から聞かれることがどういふものなのか分かっていからだろう。そうヘステイ

アがもつとも聞きたかったこと、それは

「どうして君はハジメ君のことをそんなにも知っている!!？」

「ッ!!？」

そ、それは……」

「答えるんだアポロン!!!」

「言っておくけどな、言うまで逃がさへんで」

さらに苦悩する表情を見せるアポロン。

しかし明らかな敗北に難癖もつけられない。

顔が歪むほど苦しむアポロンは、遂に観念したのか地面に腰を下ろして頭も項垂れた。

「………つい最近のことだ。

私の前にあるフードを被った人ヒューマンが現れた」

『初めまして神、アポロン。』

貴方に耳よりの情報を持ってきたのだけかどうかしら？』

『それを私に教えて貴様に何の得がある？』

『あるわ。あの子の成長。』

やっと動き始めたあの子の成長をもっと進めたいの。  
そのため情報、自由に使っていいわ。

……………どうかしら、お役にたちそう？』

『……もちろん役にたつ。

たつがそれを教えたら私がハジメを物にすると考えなかったのか？』

『別にどこに付こうが関係ないわ。

私とあの子の間は何があろうとも切れないの』

『ならばハジメは私がもらい受ける』

『お好きにどうぞ』

「それだけだ。



「私がその者に会ったのはその一度だけだ」

その話に覚えがあるのか、ヘステイア、ロキ、ヘファイストスは真剣な表情であることを思いだろうとしていた。

「もしかしてだけど、そのフードの者って…」

「間違いないやろうな…：チツ！やっぱ生きとったか…」

「ということはこの街に、いるってことなの？」

「そう考えるのが妥当だろうね。ロキ、ヘファイストス」

「言われんでも分かっとなるわ。」

せやけど動かせるのはウチらだけやで。

「こんな曖昧な情報でギルドが動くわけやしな」

「とにかく情報が必要よ。」

「少なくともそんなに日にちはたってないはずだわ」

「でも、ハジメ君でもギリギリ勝てた相手だよ。」

迂闊に接触なんてしないように…」

「んな分かつとるわ!!!」

「……………今は情報集めと、嚴重警戒をするしかないな…………」

「と、いつてももう相手もこの近辺にはいないでしょうね。安全が確保するまでは仕方ないかもしれないけどね…………」

「はあ、とため息をつく三人。」

「周りの神々は一体何の話をしているのかついていけない。」

「しかし三人の中では話は終わったのでさらにアポロンに詰め寄る。」

「さて、ハジメのことはまあ、ここまででええな」

「ま、まだ、あるのか…………」

「それはそうでしょう。」

「確か何でも言うことを聞くんでしよう」

「そ、それは…………」

「無かったことになんてしないよアポロン。」

「さて、僕からの要求は4つだ!」

「よ、4つもツ?!」

驚いているようだがそんなことはヘステイアには関係ない。なんかヘステイアのほうが悪者みたいなの、本当に悪い表情で要求を告げる。

「まず1つ目、君が保有している財産を全て引き渡すこと！」

「なっ?!」

「2つ目はファミリアの解散だ!!!」

「ま、待ってくれ!!!」

「ま・た・な・いッ!!!」

3つ目はアポロン!!!君はオラリオからの永久追放だああああああああああああああ!!!  
ああああああ!!!

「イヤだああああああああああああああああ!!!」

ヘステイアの容赦ない要求に耐えられなかったアポロンはまた気絶してしまった。

しかしまだあと1つある。なのでヘステイアはさらに容赦なくテーブルにあった水の入ったコップを手にとって頭からアポロンに水をかけた。

「……………も、もう、やめてくれ……………」

これ……………以上……………私が支払うものは……………」

「残念ながらまだあるよ。」

最後は要求というよりも、命令だ。いや、強制、決定事項、アポロンに与える罰だよ」

怯えるアポロン。

そしてヘステイアの告げる言葉は正に神を死を与えるものだった。

「最近ねハジメの一時停止の解除を時限式に出来るようになったらしくてね。」

アポロン、君の身体中に一時停止で止まっている衝撃をつけさせてもらう。段階的にちよつとずつ衝撃が大きくなるんだけど……………さて、アポロン。君はどれだけの衝撃でその肉体は……………」

「イヤだ、イヤだ、イヤだあああああああああああああああ  
!!!」

恐怖のあまりに逃げ出すアポロン。

しかし流石にそんなことは許されるわけもなくすぐに捕まったが、その時にはすでに

廃人のようにブツブツと呟いていた。

「……イヤだ……イヤだ……イヤだ……イヤだ……」

「……ちよつと……やり過ぎたかな……」

「ようそんな出鱈目出てきたな」

「そ、そうね……これはちよつと……」

「だってこれさえいえば絶対に相手は落ちる。ってハジメ君が……」

「それも本人からかい!!？」

「……あいつのことや、ホンマは出きるかもしれんな……」

「さ、流石にそれは無いんじゃない？」

「だってそれもう神殺しよ……流石に……」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

「こうして遊戯戦争は終了した。」

しかしこの遊戯戦争から再びあのフードの者と出会うのはそんなに時間は掛からなかった。

そしてその出会いがハジメの「時」を大きく変えることになる。

time5 突き進もう、その棘道を。

影の薄い、きつとそれが一番怖い気がする……

都市はざわめいていた。

「……一ヶ月?」「本当かよ……」

冒険者達は、ギルド本部巨大掲示板に張り出された、とある羊皮紙しらせを唾然と見上げる。

「あの野郎共ツ……!!」

「ちよつとベート、早く見せてよー!」

とある第一級冒険者は、仲間の催促の横で、ある記事が書かれた情報紙を握り潰す。

「ひひひつ、本物だあ〜」

そして神々は、とある冒険者の公式昇格ランクアップの報せに、盛大にニヤけ、はしやぎ回る。

戦争遊戯ウォーゲームの興奮とある恐怖が醒めやらない中、多くの者達を騒がせる情報が都市中を駆け巡った。

——ベル・クラネル、L.V. 3到達。

そして、トキサキ・一ハジメ、L.V. 3到達。

……………

「……………はあ〜」

「ため息はやめたほうがいいですよ、幸せ逃げますから」

「誰のせいだ、誰の!!」

「あまりからかうのはやめなさい。自分の神様なのですよ……」

またはあくため息を着きながら街中を歩く神ヘステイアとハジメとリユー。

あの一件からヘステイア・ファミリアの面々はフードの者を警戒するために必ず二人で行動することになった。

ヘステイアとハジメとリユー、ベルとリリ、ヴェルフと命がペアになっている。



命はヘステイア・ファミリアではないが公に晒されたことにより狙われる可能性があるという事で安全が確保されるまでヘステイア・ファミリアで過ごすことになった。

リユーに関しては変装しており身元はバレていない。

ただ何かあったときのためのストッパー。そうハジメの暴走を止めるために共に行動している。

「神様ですけどキチンと言わないといけませんよね」

「だとしてももう少し言い方があるはずです」

「……確かに。ありがとうございますリユー」

「そ、そんなお礼を言われるほどは……」

「??どうして顔が赤くなって……」

「ち、近づかないでください!!大丈夫ですので!!」

「神ヘステイア様、リユーの体調が悪いようなのですがどのようにしたらいいのでしょうか?」

「ちよつ!!ちよつと少し離れてください……」

「なんで君らのデートに付き合わないといけないんだよおおおおお!!!」

そう、これはデート。

リユーは絶対に「ただの買い物です!!」と言い張るがこれはデート。そんな中でヘステイアも一緒って……これは拷問に近いものがある。

……………

「それでハジメ様とリユー様の『デート』にヘステイア様が同行していると……

私としてはザマアーですが、どんな仕打ちを……いや、この場合は天然で仕出かしたんですよね……………」

「アハハ……………」

ベルとリリは黄昏の館へ向かっていた。

あの一件からロキ・ファミアとヘファイストス・ファミアの二大勢力であるフリードの者を捜索・警戒をしている。

今日は現状報告を聞くために向かっているのだがリリの足取りは重い。

「どうして私達が出向かないといけないんですか？」

明らかにこうして出歩くほうが危険なのに……」

「まあまあ、つい最近まで外出禁止だったんだからちよつとでも出歩いたほうが体にはいいよ」

「……確かに未だにダンジョンの許可も下りませんから……少しは体を動かしたほうがいいかもしれませんが……」

「あつ、どうせならリリも一緒に訓練つけ」

「お・こ・こ・と・わ・り・し・ま・す・す・す・す!!!」

あんな一級冒険者との訓練なんてしたらリリの体が動かなくなってしまうだろう。そんな大きな声に気づいたのか離れた所からこちらに向かってくる二人組。誰が見ても明らかに合わない二人ヴェルフと命だ。

「なに大きい声を出してるんだリリ助??」

「なにかあったのですか？」

「お二人でしたか。いまベル様からあの地獄の訓練のお誘いがあったのですがお二人は……」

「結構です。」

「……強くなれるんですけどね……」

その言葉にあの頃のベルはもういないと全員が悟った。どういいうわけか戦争遊戯が終わってから狂ったようにロキ・ファミリアの訓練に参加するようになったベル。

レベルアップもあり一段と訓練に付いてこれるようになったかもしれないが、それでもまだ一級冒険者には追いつかない。なのに、その姿勢は、吸収力は一級冒険者も迫る勢い。

そんな地獄の訓練に巻き込まれたら……ダンジョンで死ぬより先に死ぬ。

「それでまた沢山買い物されたんですね」

「おお、世話になってるからな。」

ツマミぐらいはと思っただが

「どうせなら晩御飯をと思ひまして。」

ヴェルフ殿が私の国の料理を食べたいと言っていましたので」

「あつ、それリリも気になります」

「だろ!!」

確かハジメも命と同じ出身なんだよな。二人なら大人数の料理作れるだろうと思つてよ」

「しかしハジメ様つて料理作れるんですか？」

.....

「はい、これが肉じやがになります」

「う、うめええええええええええ!!」

「なんだよ、この優しくて、それでいてしっかりした味はああ!!」

「ホクホクしてて、それでいてメチャクチャ酒に合う!!」

「おかわりや!!どんどん料理と酒を持ってこい!!」

もう大盛り上がりだった。

それはそうだろう。リユーではないにしろあの豊穡の女主人で働いているのだ。そ

してその主人であるミア母さんに認められるほど毎日の賄いを作っていた腕前。  
そしてそんな中、面白くないと拗ねているのがヘスティアである。

「つたく、ヴェルフ君は余計なことをしてくれたよ……」

「す、すまねえ……」

「そういえばちよつとだけヘスティア・ファミリアで食事をいただきましたけど、てつきりへスティア様が作っているものかと……」

「ぼ、僕だつて本気を出せばこれぐらいッ!!」

……でも、この味をあのおロキには知られたくなかつたんだよッ!!!」

「本気で悔しがってるんですね……」

もうやけ酒になつているけどそれでもちちゃんとハジメの料理を食べている。

ちなみにメイがハジメ、サポートで命とリユーが。

えっ、なんでリユーがいるのか？

今日のお買い物<sup>デパート</sup>はキッチンと休みを取っているからです。ハジメに至つてはあのミアが「もう勝手にしな……」と匙を投げ出した。

「なんやヘステイア。こんな上手い飯毎日食ってたんか!!」

「そうだね……君がハジメ君に目をつけなければ僕は毎日楽しく美味しい料理を食べていたんだ!!!」

「なんや、まるでウチが邪魔みたいな言い方やな?」

「まるで、じゃないよ。事実だよ」

「……………」

「やるんかい!! ああ??  
!!!」

また始まった下らない喧嘩。もうそれは名物となりそれを肴に酒を飲んでい

流石のリヴェリアも呆れてもう楽しんだもの勝ちと一緒に酒を飲んでい

止めるのはもうあの男で十分だからだ。

「はいはい、喧嘩は駄目ですよ」

「そこを退けやハジメ!!!」

「ハジメ君退くんだ!!!」

酒を飲んでいるからもうこの絡みがウザい。

これを毎回毎回リヴェリアが相手していたのだがもう大丈夫!!なぜなら

「いい加減にしないと『加工』しますよ」

「す、すみませんでしたああああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

速攻土下座をするヘステイアとロキ。

それを見ていた冒険者達は「いいぞハジメ〜!!」と盛り上がっているが

「これ以上五月蠅いと『加工』しますよ」

「す、すみませんでしたああああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

と、もう脅迫並みに効果がある。

そうハジメはレベルアップにより発展アビリティが発現した。出てきたのは『拒否』

『削除』『加工』



もちろん『削除』はもつてのほか。『拒否』も響きが怖い。なので前回と同じように一番安全そうな『加工』にしたのだが……これが一番怖かったのだ。

その内容はのちほど。

とにかく恐ろしいというのは分かってもらえたと思う。

「……なんか見慣れた光景になりましたね……」

「だな」

「これ、慣れていいんでしょか？」

「確実にハジメの影響を受けてますね」

「……リユーさんが、一番かと……」

「なにか言いましたかクラネルさん？」

「い、いえ!! 何もありません!!」

有無を言わせない。これは似た者カップルなのかな？

「また変なことをいったんですかベルベル??」

「少くともハジメよりはマトモだよ」

「最近言葉にトゲがつくようになりましたね」

「それはハジメのお陰だよね、つとうに!!」

「さて明日はいよいよお屋敷の完成ですか」

「その話を無視して進めるの止めてくれない!!?」

「??あれ、もう根を上げたんですか?」

「……もう、負けだから……やめて……」

「ハジメ。ハジメの相手は私ですからもうやめてあげてください」

「そうですか。ならやめてあげましょう」

「……ありがとうございます……」

この場においての勝者はこのカップルです。

影が薄いといゆつたりとお酒を飲めるのです。

「最近の前よりも一段と騒がしくなったのに、明日には出ていくのか」

「なんか染々に言ってるとおジサンに見えますよ」

「ふふふ、まあ年齢としてはそうだろうね」

寝静まった真夜中。

フィンとハジメはサシで飲んでいた。

前からフィンがハジメを誘っていたがその度に断っていたのだが、どういう風の吹き回しなのかいまはこうして対面して飲んでいる。

「でもどうして今日は一緒に飲んでくれるんだい？」

君の性格上なら最後まで飲んでくれないと思っていたけど」

「どうしてですかね。気まぐれですよ、たぶん」

「そんな事いふとなにか裏があると思うよ」

「どうなんですかね」

妙にはぐらかすハジメにフィンは違和感を持っていた。

しかしこうして飲んでくれるのだ、無料なことは聞かないようにと話題を変えた。

「発展アビリティ、本当に毎回君には驚かされるよ……」

「余談ですけどこの前御披露目した内容よりさらに使いこなせるようになりましたよ」

「……あまりこういうことは言わないけど、君を本当に敵に回したくないものだよ。勝てる気がしない」

「それ本当に言わないほうがいいですよ。ダ・団長を慕っている人が聞いたら、僕に襲いかかってきますよで」

「ハジメなら問題ないだろ」

「問題あるなしの話じゃないですよ」

返しもいつもの刺が強いものではない。

人をおちよくるような返しでもない。  
やはり今日のハジメには違和感がある。

「……聞かずにいようと思ったけど何かあったのかい」

「何がですか？」

「気づかないと思ったのかい？明らかにいつものハジメじゃないよ」  
「??」

「あれ？本当に気づいてないのかい？」

「……そうですか、違いますか……」

どうやらハジメ自身気づいていなかったようだ。

フィンに言われてやっと自身の違和感に気づいたようで

「ダ・団長も普段言わないことを言いましたので自分も言ってみましょうか」  
「何を……」

「これでも緊張してるんですよ僕、この空間に」

「……………君が、緊張……………」

「まあ、意外だと思われれると思いましたがけど。」

「そんなに驚くことですか？」

「君は神の前でも、それこそどんな危険な場所でも緊張なんてするとは思っていませんからね……………」

本当に驚いているらしくフィンは無意識にワインをイツキ飲みして気持ちを落ち着かせようとしていた。

「いや、あの神に緊張する意味が分かりませんし、危険な場所に行っても一時停止がありますから」

「さりげなく自分の神をデイスるのはやめたほうがいいよ」

「ですけどダ・団長はどうしてか緊張するんですよね。」

正直僕自身もどうしてか分からないですけどね」

「それは僕が怖いということかな？」

「あつ、それはないです」

「ハッキリいうな……」

「多分ですけど、きつと僕はダ・団長を自分の上司的な感じで見てるかもしれませんがね。こんなスゴいファミリアの団長にいるダ・団長のスゴさに緊張してるのかもですね」

「それは……ありがたいことだね……」

そんな風に思ってくれていたなんてフィンはなんかすぐつたい思いだった。少くともハジメが他人に対してどんな風に思ってくれているのか分かりずらかった所があるからこうして言われると何だかすぐつたいのだ。

「こんな時間にまだ飲んでいたのか？」

「リヴェリア」

「リヴェ姉、どうですか一緒に」

扉が開き顔を覗かせたのはリヴェリア。

二人がサシで飲んでいる所をみて珍しそうな表情をしていたリヴェリアは

「どうやら貴重な時間のようだ。私は失礼するよ」

「気にしなくていいよリヴェリア。」

「せつかくだ、君もどうだい？」

「何か話があったんじゃないのか」

「いや、ちよつと意外なことが聞けたからね。今日はそれで十分だよ」

そういいながらクスクス笑うフィンに少し機嫌が悪そうに見えるハジメ。何かあったのか気になったところだが掘り下げないほうがいいだろうと何も聞かずにフィンとなりに座る。

「ついに明日か…寂しくなるものだな」

「別に会えなくなるわけではないですよ？」



「それでもあんなバカ騒ぎが聞こえなくなるのも、その時は嫌でもいざとなると寂しくなるものだ」

「ああ、リヴェ姉はツンデレでしたね」

「ツ、ツンデレ??…なんだそれは？」

「気にしないでください、誉め言葉ですので」

「……………絶対に違うな、意味は分かんが…………」

まったく…といいながらもそれ以上追及はしなかった。

三人ともここからしばらく会話をせずにこの空気を惜しむかのようにゆっくりとお酒を飲みながら過ごした。

そして次に言葉を出したのはハジメだった。

「……………本当にお世話になりました。」

色々返さないといけないものはありますので引き続きよろしくお願ひします」

「そんな事を改めて言わなくてもいつも通りに来るだろ君は」

「来ますね。またベバートの相手をしてあげないといけませんから」  
「まだ絡んできているのか……あれはもう向上心というよりもただのやけくそになつてないか……」

「そうですね、昨日は『死ぬえコラアアア!!』としか言わなかったの。いつもは『ぶつ殺すぞコラアアア!!』なんですが」

「いや、それ何も変わってないしむしろいつもそんな事いつていたのかい……」

ここにきて仲間の不手際に頭を痛めるフィン。

リヴェリアは「アイツはいつもこんな感じだ」と分かっている止めなかったようだ。まあ暴走してもハジメならという安心感はあるが

「あまり苛めないでくれよ……あれでも他の仲間の見本となるんだ」

「……………ハッ、冗談ということに気づかずにはリアクションが出来ませんでした」

「よくー分かったよ。君がベートに対しての態度が……」

「というか、どうしてベートに対してはそこまで毒つけるんだい君は……」  
「ハッキリいえば合わないです、酷い表現だと生理的に無理です」

「……そ、そうだろうね……」

「……まあ、大丈夫だと思いますよ。」

あれだけやられてもむしろ燃えてくるタイプですから。

それを見ている皆さん、なんかやる気に満ちてましたし、それに実際に強くなってるんじゃないんですかね？多分？」

「その疑問系はなんなんだ、まったく……」

そこまで嫌がっているのにハッキリと「嫌い」とは言わないハジメに、つくづく優しい奴だと思ふフィン。ベートは口も悪ければすぐに手を出す性格の悪さ。そこでハジメが嫌いにならないのが少しでも後輩や実力者、成長の兆しがあるものには手を差し得るというか優しくなれるというか……言葉にするのは難しいが根っからの「悪い人」だとは思っていない。

だから暴言を吐かれてもそうそう怒ったりはしない。たまに神様やリユーについて

吐いてしまうときは徹底的に指導するので問題はない。

「あと一つダ・団長にお願いがありました。せっかくですのでリヴェリア姉にも」  
「なんだい？」

するとハジメはここに来るときに一緒に持ってきた袋を取り出して中身を出す。そこには前回使った短剣「時喰い」<sup>タイム・イーター</sup>とガントレット「時止め」<sup>タイム・アット</sup>だった。

「これを預かってくれませんか？」

必要な時は使ってもらっても構いませんので」

「……理由を聞いてもいいかな？」

「いやガントレットを使わずに短剣を使ってしまったってツバッキーに怒られました。「寿命を減らすような真似をするでない!!」と。一時停止を使っていたのですがそんな分かっていてもヒヤヒヤするからと結局怒られました」

「それは間違いないなくハジメが悪い……」

「なのでしばらく預かってもらえませんか？

あつ、もちろん時喰いを使うときは時止めを装備してくださいね。あつという間に生氣や寿命を奪われますので」

「……………本当に恐ろしいものを……………」

……………分かった、預かっておくよ……………」

時喰いと時止めを預かったフィンは時止めを装備して時喰いを手にした。興味本心だったのかもしれない、それが間違いないだった。その鞘を抜いた瞬間

「ッ！！！！??」

自分自身がその刀身に吸い込まれる感覚に襲われ、フィンの全てを、これまでの人生や存在全てを持っていかれるような感覚が襲ってくる。本能的にすぐさま鞘に納めた。しかし力が抜け全身に冷や汗をかき呼吸が荒くなる。

「どうしたフィン!!?」

「……………なんだい……………さっきのは……………」

「すみません、どうやら時を奪う相手もおらずに短剣を抜いたのでダ・団長に狙いを定め  
たみたいですね」

「い、意思を持っているというのか……」

「いえ、それは流石に。」

でも時止めを持たないと簡単に時を奪う短剣ですから……あまり無闇に抜かないほ  
うがいいかもです」

「ああ、……身をもって分かったよ……」

こんな恐ろしいものを椿が作った。いやハジメの血が、存在がそれを作ったといった  
ほうがいい。つまりはこの武器はハジメの分身のようなもの。

(改めて……分かった……)

ハジメを野放しにするわけにはいかない。最低限今の状況を保たないと……もし、ハ  
ジメが時を奪うと決めた時は……)

簡単にその命を、時を奪われるだろう。

この時喰いや時止めがなくてもハジメ一人でも簡単に。

「それではお願いしますね」

そういつて部屋を出ようとしたところをフィンが慌てて引き留める。

「ま、待ってくれ！」

「……どうしてこれを渡したんだい？」

「?? さっき言った通りですが」

「君がそれだけでこれを、危険なものを預ける訳がない。まるで自分を止めるための行動に思えてくる」

ハジメ、君は一体これから何をしようとしてるんだい??」

その問いかけにも振り向こうとせず背を向けたままハジメはこう答えた。

「明日は新しいホームに行くわけなのでまずは心機一転、新しいことにチャレンジですかね」

「あと、それは前金ですかね？」

それじゃと言いつ残し扉が閉まり、残された二人をしばらく言葉が出なかった。そして始めに話始めたのはフィンだった。

「……どう思うリヴェリア？」

「確証はないが……今まで以上の事が起きる……と考えたほうがいいかもしれない」

「……まだ他の団員には話さないようにしよう。」

憶測で動くにはまだ早い」

「そうだな……」

……

「フィン!!リヴェリア!!!  
!!!」





影が薄い、でも見えてる人には苦労しかないかもです。

「こ、これが新しい僕達のホーム……」

ベル達の前にそびえ立つのは旧アポロン・ファミリアの館を改装した拠点「竈火（かまど）の館」

さらに、エンブレムも作成し、描かれていたのは「重なり合った炎と鐘」であり、炎がヘステイアで鐘がベルという意味が込められている。

実際はハジメを印象づける影も刻もうとしたのだが、それでは「影」の意味をなさないとエンブレムから外された。実際はもうハジメの事を知らないものがないので「影」というイメージもないためこちらでいいかも知れないが

「うーん、やっぱりエンブレムに「影」いれても良かったんじゃないかな。ほらそしたら立体的でカッコよくなるし、なによりここまでファミリアが成長したのはハジメ君の功績が大きいだから」

「いやです。なんでそんな見せ物にならないといけないんですか？僕は静かに過ごした

いので却下です」

((なら、あんな目立つ行動しなければいいのに…))

心で思っても絶対に言葉には出さない。

そんなことを言ったら絶対に面倒くさいことになる。うん間違いないなる。

「そうかい。でもその分内装は期待してくれよ!!」

「そうですね。ゴブニユ・ファミリアは間違いないですし」

鍛冶と建築を司る主神ゴブニユ率いるこの派閥は依頼があれば建設作業も受け持つ都市でも珍しいファミリアでる。

そんなファミリアに改装の依頼をして約一週間。

外装も素晴らしく一流の腕だというのが分かる。

「さてさて、どうなってるんでしょうかね」

.....

「おおっー!!」

そこには大きな十人は軽く入れそうな大浴場、極東式の檜風呂があった。

新品の木材の香りが帆のかに漂ってくる中、じやく、という音をたてて湯口から温かなお湯が流れ込んでくる。

このお風呂は何でか懐かしさを感じる。

遠い昔、家族で過ごしていたとき一人用の木材で作った五エ門風呂と呼ばれるのには入っていた。それを連想されるお風呂だけど明らかにこの檜風呂は凄い。

どういうわけか無性に入りたくなるのを我慢していると扉がガラツと勢いよく開き物凄い勢いで檜風呂に近づいてきたのは、この檜風呂の発祥である極東出身の命だった。

「こ、これはツ?」

「懐かしいですよ。昔僕の家では五エ門風呂?というのがあったのでそれに近くて大きいお風呂をつけて言ったらこんな風になりました」

「檜風呂ツ!!!まさかこんなところでこれが拝めるなんて……………」

感動しているようでハジメの言葉は耳に入っていないようだ。四つん這いになり水面を眺めている命にこれ以上何を言っても無駄だろうなーと思いこの場から去ろうと歩きだした。

なんとなくこのままいると男してはラッキー、しかしハジメとしては死亡フラグが起きそうだと何となく直感が働いた。

そのあと再びお風呂の近くを通った時「はあああ〜」と気持ち良さそうな命の声が聞こえてきて、本当にあの場から去って良かったと思った。

……………

「どうですかヴェルフオード?」

「……………なあ、名前負けしてしまうあだ名やめてくれねえか?」

「イヤです」

「清々しいほどハッキリだなクソツ!!!」

新しく出来た自分の工房で感動していたヴェルフだったが、そこに現れたハジメによつて感動は消え去った。

というか、間違いなく面倒事を持つてきたと分かつていたのでテンションが下がったのだ。

いや、だつてハジメの手には物騒なものがあるから。

「で、なんだそれは？」

「これはリヴェ姉の魔法を止めた物です」

「……………そつちは？」

「これはゴライアスの衝撃波を詰めた物です」

「……………で、何のようだ？」

「これで武器を作つてください。希望的には遠隔操作ができ  
「るわけあるかあああああああ  
!!!!」

思わず鎚を投げつけてしまいそうになったヴェルフ。

そんなところを見てもあつけらんにしてはいるハジメ。というかどうしたの？とよ

く理解できていない…

「いや、実際僕は簡易的ですが作れましたよ」

「それは自分の能力だからだろうが!!!」

俺じゃ勝手が違うんだよ!! ってか殺す気かあ!!!」

「いや、一時停止してますから破裂的なことはありませんよ」

「んなもんテメエだけが言ったも信用出来るかッ!!!」

頑なに拒むヴェルフにハジメはハァーとため息をついて。

「使えませんね」

「おい。喧嘩売ってるなら買うぞ。勝てなくてもな買うときには買うんだぜ!!」

「じゃ、軽くて簡単に攻撃が出来るような物を。」

もちろん一時停止を使つて出来るような物で」

「……勝手に話を変えやがって……」

で、一時停止を使った武器だあ?? どうか椿の武器はいま預けていたな」

それについては考え始めたヴェルフ。

突拍子もないことだがそういう道なるものに対して好奇心が溢れてくるようだ。

「確かに面白そうだが…これ鍛冶師としてこれは武器とはかけ離れている気がするんだが……」

「人が使つて相手を倒すもの。武器ですよね」

「間違つてないが……はあ、考えさせてくれ」

頭を抱えているが少し楽しそうな顔をするヴェルフ。

変わった武器、普通なら断る事ができるがヴェルフ自身が見たあの光景に心が動かされたのだ。武器とは剣や籠手などだけではないと。

……………

「大体部屋が多すぎです…これでは掃除にどれだけ時間がかかるか……」

リリは館の状況を確認していた。で、アポロンファミリアが使っていたこともあり部



屋数は多くいまの団員だけでは余るのが現状のようだ。

しかしその部屋も何もしなければ埃がたまる。

そんなのはリリとしては嫌なのでどうにかしたいが部屋を省いたとしても館としても広いので掃除だけでどれだけ時間がかかるのか……と悩んでいた。

「掃除をしてくれる人を雇いましょうか……ですがそれではお金がかかりすぎ……」

神ヘステイアから話を聞いたところ昔は本当に貧乏で、ハジメが入ってから少しずつではあるが楽は出来たという。それでもこの館を維持出来るほどの財力があるかといえればそれは今後の働き次第。

「しばらくは自分たちでやってから、見通しがついてからでしょうか……」

このファミリアには金勘定出来る人間がない。

なら自分がやるしかないと思っていたが、予定していたよりも大変そうだと自覚した。

そんな事を考えながらまた一つ部屋を見て、次の部屋へと事務作業的に見て回ってい

ると。

「ここは思っていたよりも散らかってますね。まずはここを片付けますか」

その部屋には無駄だと思われる大量の紙とよく分からない物、酷くいえばゴミがありこれは徹底してやらないといけないなーと思ひ扉を閉めて次の部屋と移動。

「……………うん？」

いや、なにかおかしい。

そう直感したりりは再びさきほどの部屋の扉を開いた。

そこにはさつきみた紙があつたが、よく見るとそれはこの前見た気がする。

「……………は、は、ハジメ様あああああああああああ

!!!!!!」

怒鳴つた。それはもう館全体に響くほどに。

すると一分も経たずにリリの元へ来たハジメは何でしょうかと何もわからない表情

で

「どうしましたかリーリ？」

「……何ですかこれは？」

「武器です」

「これはゴミって言うんですよッ!!!」

「ってか、こんなに入らないでしょうがッ!!!」

「!!!」

そう紙一枚がいくら安いとしても、床から天井まで重なったものが複数もありそれが部屋の半分も占めていたらそういいなくなるだろう。

「いや、この武器は消費するのでストックを」

「この前は5〜6枚を破って使ってしまったよね」

「ダンジョンでは大型やモンスターの大量発生に役に立ちます」

「その前にこんなもの使わなくても対処できますよね」

「……マンネリ化は良くないと思います」

「ただ使いたいだけですよねッ!!!」

珍しくハジメが論破された。

そうハジメとしては一時停止した衝撃を放つというのに飽きた。だからこうしてバリエーションを増やそうと思ったようだ。

「あのですね、やりたいからだといって限度というのがあるんです!! 一体これにどれだけお金を使ったんですか!!!」

「使つてませんよ。」

これ神ロキがいつも間違つたと捨てようとした紙ですから」

「……あつ、本当ですね。ここもここも間違つてる」

「よく間違えてリヴェ姉に怒られていましたね。」

もちろん他の団員の物もありまして、これをただ廃棄するのも勿体なかつたので貰いました」

リサイクル精神。そうだと分かると強くは言えない。

そう紙以外のゴミもハジメから見たら武器になる。

そんなことを言われたら強く言えない。ぐぐうと押し殺すように喉から出ようとし

た言葉をやめた。

「……………ではしばらくはこの紙を使ってください」

「はい。ダンジョンにロキファミアの汚点を振り撒く。了解です」

「言い方ツ!!! つてそんなこと分かっているなら最初から貰ってくるなツ!!!」

「リーリにこれを言わせたい為に貰ったきたので。」

「ちゃんと処分しますよ。」

「もうツ!!! 貴方はもうツ!!!」

「!!!」

ちなみに一時停止で囲んだ空気の檻の中にゴミを入れてリヴェリアの炎魔法をぶちこんで廃棄したそうだ。

……………一体魔法をどんなものだと思っっているか……………

影が薄いと、きつと普通の入団試験はクリア出来ない。

「本当にスゴいですね神様ッ!!」

「そうだろう、そうだろう!」

「別に神様が何かしたわけではなく、頼んでここまで仕上げてもらったので感謝するからそちらにいうべきではないかと。ちなみに無駄遣いしないように管理したのは僕とリーリですが、そこに関してはいうことはありませんか?」

「……ありがとうございます!!」

館内を散策して全員が集まった大広間。

気分よく誉められたと思ったら横から大きな落とし穴に落ちていき気分が落ち込んだヘステイア。

実際この館にかかった費用はヘステイアがバカみたいに金をつぎ込んだ金額の約1/3は削減されたのだ。本当に感謝してもらいたい。

そしてその残りのお金は

「しかし…ハジメ様が気づいてくれて助かりました…  
まさか…1億50000ヴァリスもあるなんて……」

「そ、それは個人的な借金だから…」

「何を言ってるんですかッ!!」

神ヘステイアはこのヘステイア・ファミリアの顔になるんですよ!!いくら個人の借金でも周りからしたらファミリア全体の借金だと思われるぐらい分からないんですかッ!!!!」  
「リリッ!!落ち着いて!!」

キレても仕方ないと思う。

「はあはあ……はあく……」

…本当にハジメ様に感謝してくださいね。全部返済しきれなかったとはいえ、一般的な借金の金額まで減ったんですから」

「……ねえ、ヴェルフ。一般的な借金の金額っていくら?」

「したことねえから……」

「そこッ!!!いまそんな問題じゃないんですから私語は謹んでください!!!」

「はいっ!!!」

リリはいままで貧しい生活をしていたのでとってもお金のことに關してシビアになっている。それを見込んでハジメがお金の管理をしてくださいといったかは分からないが…いい方向へ向かってよかったなーと感じていると

「あのですね、のんびりと聞いているようですがハジメ様。

豊穡の女主人で頂いている給料はどうされているんですか？」

「必要に応じて使ってますが」

「必要に応じてですか…そうですか、そうですか…」

「なら聞きますが…」

スタスタと部屋の扉の奥へ消えたりリリは、ガラガラと何かを引きずりながら部屋に戻ってきたのだが、その引きずりながら持ってきたものは

「これは、なんですかッ!!!??」

「リリの洋服一式。季節別パージョン」



「これが、無駄遣いだと、分からないんですかッ!!!」

そこには彩りの洋服があり、その洋服一点一点がいままでリリが着たことのない良いものばかり。もちろん高額とはいわず一般的より少しいぐらいだがそれでも数が多い。50着以上はあるんじゃないかと思うぐらいに。

「リユーやシル姉、エイナ嬢に聞いたのですが女性は着飾ってやつと一人前の女性になると聞きました。」

「リーリは早く大人になりたいといっていました。だから僕はお手伝いを」  
「余計なお世話です!!!」

あれ?と首を傾げるハジメ。

本気で悪いことをしたと思っていない。

「でもよく買い物をしているときによく服屋さんの前で立ち止まって最近の流行りである服装を見て……」

「だあああああッ!!!」

分かりました!!分かりましたからそれ以上言わないでくださいー!!!  
!!!」

はあはあと息をつかせるリリ。

深呼吸をして気持ちいを落ち着かせたあと

「……まあ、ハジメ様が働いて稼いだお金です。

ダンジョンとは別の収入ですし、とやかく私が言うべきではなかったかもしれない。

ですが……服を買うときは私に一言言ってください

私にも、好み、というものがありませんので」

「分かりました」

（（買ってもらって嬉しいんだ……）（））

表情に出さないようにしているが誰が見ても嬉しき爆発しているように見える。これまでちゃんとした服を着れなかったから尚更だろう。

「とにかく当面は借金をコツコツと返していきましょう。あとは入団希望者ですかね……」

そういいながらカーテンを開けて窓の外を見ると門の前に人だかりがあつた。そうこれはヘステイア・ファミリアに入団したいと希望している冒険者達。

実はロキ・ファミリアにいたときにも数名ぐらいヘステイア・ファミリアに入団したいと言つてきたバカがいたのが、そんなやつにはハジメとヘステイアが直々に説教かつ二度と来るなど言つておいたので来なくなつた。

それはそうだろう。

ロキ・ファミリアの敷地なのだ。そしていくらヘステイア・ファミリアがああ戦争遊戯で活躍したとはいえロキ・ファミリアは格上である。そんな格上であるロキ・ファミリアを差し置いて「ヘステイア・ファミリアに入団したい」なんていつてくるやつ。どこのファミリアも入団させたいと思わない

と、ハッキリ言つてやつたそうです。

で、こうして館を手にしたことでこんなにも入団希望者が集まつたのだが手放しで喜べない。

いまこうして入団希望者は「ハジメがスゴい」という一点しか見てない。そうベルやリリ達もいるのに全く見えていない。

それでは入団したとしてもチームとして成り立たない。

ということだ、



1 チーム目、先生「ベート」

「酒やツ!!!絶対に酒に決まっとする!!!」

ウチはダンジョンに入れんが絶対にダンジョンに究極の酒を作るための材料があるはずや!!!

ええか、絶対にベートよりも早く見つけてこいー!!!」

「二」は、はいいいいいいッ!!!」  
「二」

2 チーム目、先生「ロキ」

「……階層主、倒すから……」

「……う、う、う、うおおおおおっー!!!」  
「!!!」

3 チーム目、先生「アイズ」

「……ナニコレ？」

「入団試験ですけど」

ダンジョン入り口前で困惑するヘステイア。

それはそうだろう。ハジメが「入団試験、いい方法を思い付きました」といつてさつさと出ていったのだ。

追いかけてみればいつの間にか見慣れたもの達が、それぞれチームの先生というかリーダーとして気合いを入れている。

「いや、なんでロキがいるのさ?」

「僕達が審査するとなると甘くなる、というのがロキ様の発言で、なら審査お願いします、一つ出来ることを叶えますよと言ったらアイズやベートも寄ってきたので、ならチーム対抗にしよう……ノリで」

「ノリでツ!!?」

……もう、ここまできたら仕方ないけど……」

仕方ないですむんだなくと呑気に考えているリリとヴェルフ。そしてさつきから気になっていた命がいる。

「……あの、命様。どうして貴女様は今日の朝からまるで同じファミリアのようにいるのですか?」

「そ、それは……タケミカツチ様から「しばらくへスティアの元で修行してこい」と言われまして……私も強くなりたいと思っただけ……」



「なので朝からお風呂に入ったと」

「……すみません……」

「いいじゃねえか。別に」

「まあ、ハジメ様の行動に比べたら……そうですね」

そんなことを考えているとどうやら入団試験が始まるようだ。

「あと、僕以外の団員からこの赤いハンカチを取れたら入団を認めますので——!!!」

「「「ふ、ふざけるな——!!!」」」

勝手に試験に組み込まれた三人。

ベルはちよつと放心状態だったので安静のためにそのままにしていたが、このとんでもない言葉のせいで目が覚めたようだ。

そして自分は巻き込まれてないとホツとしている命に

「あつ、命さんもよろしくです」

「いやややややあああああ!!!」

巻き込まれた。簡単に。

こうして10分前にダンジョンに入ったベル達。

そして10分後にダンジョンに入る入団希望者と先生。  
そしてそれを見守るヘステイアが一言

「……やっぱりナニコレ？」

「ですから入団試験ですよ」

「いや、大丈夫なの!!ベル君達は!!??」

あれ間違いない無くしてしまう!!  
単独で行動してるよ!!!

ダンジョンで一人なんて!!!」

「僕もよく一人でしたよ」

「君とベル達を一緒にしないツ!!」

「ですけど、普通に中層手前までなら楽勝ですよ。

といますか、普段から個人で動き回ってますし」

「……僕の知らないところで……強くなりすぎだよ……」

正確にはハジメが作ってくれた武器（規模の低い爆弾とかよく切れる紙とか）を持っているので楽勝なだけでまだ個人で中層前までいくには早すぎるのだ。

それでも文句の一つも言わないで（??）行くのはベル達もずいぶんハジメに染められたようだ。

影が薄いのは他の人が濃いせいではないのか？

「ふっぎけんなッ!!!」

「ひひひひ!!!」

「たかがミノタウロスの角程度であのファミリアに入れると思ってるのか!!! やり直しだ

ああああああ!!!」

「はひひひひひひ!!!」

せつかくの冒険者がミノタウロスの角を持ち帰ったのにそれを握力のみで砕いたベート。その姿にビビリ腰を抜かしながらも必死にダンジョンへと逃げていく冒険者。

正直ここよりダンジョンの方が安全と直感したのだろう。

現在ベートの頭の中は「他のチームより先にお題をクリアしてハジメとの再戦をすること」で一杯になっている。

なのでいつもなら「チッ」と舌打ち程度ですんでいたことも敏感に反応してしまう。例えばコレ。

「ならこれだよね」

「……おい、てめえ……」

次に現れたのはキザな冒険者。

その冒険者の手元には大金があつた。

「ふっ、素晴らしい回答だろう。」

あのファミリアは少なくともお金に困ってるはず。

ならこの私のポケットマネーで……」

「こんな紙切れで入れるほど甘くねえんだよおおおおお!!!」

「パ、パパのお金がああああ!!!」

見栄をはった冒険者はベートの怒りの鉄拳によりその札束が吹き飛ばされて、泣きながらその札束を追いかけていった。

なんだかんだいってベートはヘステシア・ファミリアを、ハジメを好評価しているのだ。ただそれを言葉に顔に出さずに、むしろ逆の事を言ってしまうというツンツンして



なので周りの人は大変だと思いがベートにはベートのままでいてもらうしかない。自分で自分のことに気づくのはまだまだ先の話である。

「てめえ…軽い気持ちでこのファミリアに入るつもりか?!今までがどうだったかは知らないが、このファミリアに入りたかったら…少しはマトモな思考をしてからやり直してきやがれ!!!」

「な、な、何なんですか!!?」

別に貴方には関係ないですよね!!!」

「ああ。関係ねえな。」

だから手抜きしろってか、ふざけんよ!!

そんなことしてみろあのくそ野郎に「ああ、その程度でしたか。程度だったの間違いかもしれませんね」とか言われてみる!!!俺はテメエを生きることの後悔させるほどギタギタにしてやるぞ!!!」

「で、でも……」

「でもそもねえッ!!!!!!」

あのバカはバカでも見る目はあるんだよ!!!!!!





「最高の酒を作るや。今まで使っていたような素材を使ってどうして最高の酒が出来る  
と思ってるんや!!!」

「で、ですが…こういうのは素人が」

「誰が素人やツ!!!」

ウチはなどれだけ神酒ソーマを飲んだと思つとる!!! そんなウチやからこそ出来る酒がある  
んや!! 文句言わずにもう一回探してこんかあああああ!!!」

こつちはこつちで面倒くさい。

キッチンと冒険者はお酒の素材を持ってきているのだ。

なのにどうしてそれが駄目なのか。

簡単である。

「おい、ロキ!! それ新築祝いに持ってきたお酒じゃないか!!!? なんで君が飲んでるんだ  
よッ!!!」

「ええやんか。どうせ一緒に飲んむや」

「……キミ、ここに来る前から酔ってるね」

「……だって、だって……」

……だって寂しいんやもん!! ハジメ達がおらん館はもうごっつい寂しいんや!! アイズたんも落ち込んでるし相手してくれん、リヴェリアに至っては上の空で全く相手にならん……そうになったら酒しかないやん!!!」

「まあ、良くも悪くもハジメの影響はスゴいからね……だとしてロキそれは飲み過ぎたよ……」

あのヘステイアさえも心配になるくらいゲゲゲデになってるロキ。まるで愛娘が家から出ていった親父のように寂しがり屋と化している。

そのおかげでロキのチームの冒険者達はクリア出来るはずが全くクリアできない。

「……はあー僕がキミのお酒に付き合うからちゃんとか点してあげなよ」

「失礼やな。いくら酔っていてもちやんとしてるで」

「でもさつき持ってきた素材ってなかなかの物じや」

「あかん。それじゃあかん。」

なかなかぐらいやったらそこら辺の酒ぐらい簡単に出来る。ウチの目指す酒はハジメの新たなる門出に相応しい酒なんや。最低でも神酒ソムマと同じぐらいはないとな」

「……ロキ、キミは……」

「そして一緒に飲むんやツ!!!」

「ロキ、キ・ミ・は!!!」

どうしてそんなことしか考えられないんだ!!!とか、うるさい!!何も考えたらんお前よりはましや!!!とかいつものように喧嘩しだした神二人。

これを止めるものはおらず、ロキのチームはただ収まるまで待つしかなかった……

そして残りチームはというと

「ぐわっ!!!」

「後退しろッ!!!」

「魔法を打てッ!!!その間に体制を立て直せ!!!」

ゴライアス。その階層主と戦ってます。

それも普通は連携の取れるファミリアや良く相手を知っているもの通しでやること。

それを全く知らない者通しでやれば……苦戦するのは当たり前。

というか入団するために来た冒険者達だ。

大したレベルもあるわけでもない。

それなのにいまでもどうしてゴライアスと戦っているかというと

「……………上から、くるよ」

「た、退避ッ!!!」

アイズの言葉にすぐさま逃げまどう冒険者。

いった通りにゴライアスの拳が振り落とされた。

その衝撃波により何人かは吹き飛ばされてしまったが直撃しなかったただけでもよかった。

「ア、アイズさんッ!!!!」

どうして手伝ってくれないんですか?!?」

「ハジメは、強い人、選ぶと思うから」

「だとしてもこんな無茶苦茶なッ!!!」

「えっ。」

……私たちのところ、普段やってるけど？」

とんでもないカミングアウト。

「に、逃げろおおおおおおおおおおおお!!!」

「あつ、ちよつ……」

アイズはダンジョンでひとりぼっちになる。

「ベルなら……やってくれるのに……」

あいつはすでに規格外です。

という感じで誰もクリア出来るやつはいない。

でもあと一つ方法がある。そうダンジョンに散らばったベル達を見つけて赤いハンカチを奪うこと。

大半がそれを狙っているが、こつちもこつちで大変そうだ。

影の薄さって、日々を過ごせば濃くなる。(byベル)

「結果発表―」

全員脱落、お疲れ様でしたー!!」

「ふざけんなツ!!このクソ野郎がツツ!!」

結果、誰もヘスティア・ファミリアに入ることにはなかった。

ベート、ロキ、アイズの課題は難問で最後の方は誰も残っていなかったのだ。ということ中には「これじゃロキ・ファミリアの程度が知れるな」とほざいた奴が現れてそいつは、その後ロキ・ファミリアの三人に連れられて消えていったという。

ちなみに、帰る間際に

「もう二度とこんなことで呼ぶんじゃねえぞ!!!」

「また極上の酒、よろしくな」

「……また、ね……」

と、口々に言ってから帰っていった。  
ベートンに関してはツンデレと化している。

…言ったら即否定で手を上げるだろうなー

「せ、せつかくの…入団者が…」

「ちよつ、ちよつとハジメ様ツ!!」

落ち込んでいるヘスティアに、流石に気の毒と感じたりりはハジメを引っ張りだし

「なんであんなことしたんですかッ!!」

入団者0つて、やりすぎですよツ!!!」

そう、やり過ぎである。

しかしリリは分かかってなかった。

だって、その入団試験にはもちろんリリやベル達も関わっていたのだから。

そしてもちろんそこをハジメは、どうして誰も入らなかったのか、知っているのだ。





「し、仕方ないじゃないですかッ!!」

こつちだつて簡単に捕まるわけにはいかないですよ!!

混乱させるのは戦略的なものであつて、魔剣に至つてはヴェルフ様の加減が悪いんです!!!」

「お前ッ!!」

ストレス発散をするかのように「みんな困つてしまえばいいんですよ!!」とかいつてたじゃねえか!!!」

「うわああああああ!!!」

ヴェルフに飛びかかり「この口ですか!!塞いでほしいのはこの口ですかッ!!」と針と糸を取り出して縫い合わせようとするリリ。それは流石に不味いとベルが止めるが抵抗しながら

「離してくださいベル様!!!」

あの口の軽さは一度ギュツと縛り付けたほうがいいんですよッ!!」

「それだつたらハジメにもやれよなッ!!」

「出来るわけじゃないですよ!!!まず針がもつたいいんですよッ!!」

ちよつと失礼なことを言われた気がしたがスルーすることにした。で、あつ、と思いついて出してもう一組のことも話してみる。

「ベルベルもいけませんよ。」

相手が赤いハンカチを取れそうになるたびに超加速して逃げて、取れそうになると逃げて、取れそうになると逃げて、もう希望と絶望を交互に与える。もうDSの境地ですね」

「ち、ぢがううううううッ!!!」

もう真つ赤な顔をするベル。

他の皆は一步二歩と下がった。流石のベルの性癖にドン引きである。

「だ、だって!!簡単に取られるわけにはいかないでしょう!!!僕だって必死だったんだから!!」

「なるほど。つまり楽しんだと」

「言っていないッ!!?」





たようには見えなかった。なのに変なあだ名がないなんて納得いかないのだ。

そしてその答えは

「えっ。一応「みこっちゃん」や「みこりん」とかあったんですけど可愛すぎて合わない  
ので」

「「「……………ああ……………」」」

「なんか…納得いきません……………」

普通は嫌がるものだけど、この反応や可愛すぎて合わないという言葉に、どうしても納得いかない命。

別にあだ名が欲しいわけでもなく、可愛いと言われたい訳でもない。でも……………どうしても納得いかないのだった。

……………

「それでハジメ君、どうして誰もいれなかったんだい？」

混乱が治まり新しい新居に各々やりたいことをやろうとバラバラに散った。そしてハジメはどうしようかなーと悩んでいるとヘステイアから呼ばれて誰もいない客間でこんなことを聞かれた。

「試験に合格出来なかったからですよ」

「それもあるだろうけど、君は何かを隠してる」  
「そうですね。神様には話しておきますね」

そういつてヘステイアの正面に座り

「しばらくここを離れようと考えてます」

「ツ!!ど、どうしてツ!!?」

「僕を狙っているフードの者。」

どんな形で僕の前に現れるか分かりません。

もしかしたら神様やベルベル達も狙われるかもしれない」

「それは分かっているだろう!!」

だからロキの所の子供達に護衛を」

「そうです。」

でもいまここで余計な新入団員を増やしたら……もしかしたらそれがフードの者  
だったら?」

「!!?……そこまで……」

へスティアも警戒はしていた。

しかしこの入団試験に紛れているという考えまではいたらなかった。新しい新居や環境に誰もが浮かれていた。そこに間違いはない。

そんな中でもハジメは、危険を排除しようと無理難題な試験を用意したのだ。

「でも、この試験を突破する異常なやつはいませんでした。ということは内側ではなく外側から攻めてくる。なら分かりやすいです。僕がこのファミリアから離れれば大丈夫です」

「なにを言ってるんだいッ!!!」

君だって危険なんだ!!そんなこと認められるか!!!」

「でも、過信でなければあれを倒せるのは僕だけ。」

他の人は巻き込まれてしまったら…死んでしまう可能性があるんですよ」  
「ッ!?!…それでも…それでもダメだッ!?!」

ハジメの言っていることは分かる。

それでも大切な子でもあるハジメを危険なところに送り出すことなんて…出来るわけがない。



「すぐには離れませんし、勝手にいなくなりません。

少なくともベルベル達が僕なしでも大丈夫と思えるまでは」

「……………僕は認めないよ……………」

そっぽをむきハジメを見ようとしな。

それでも自分の思いは伝わったと頭を下げたハジメは部屋から出ていった。

「……………出来る、わけ……………ないじゃないか……………」

誰にも聞こえない声は、静かに、部屋に広がり消えていった。

……………

「うん?! チグーに命さん?」

千草と命が玄関先でなんか慌てたように話していた。

その瞬間ハジメの頭の中で「面白いことかも！」と閃いたの。”カミカクシ”で二人の認識を解除したハジメは堂々と二人に近づいた。

そんな二人、もちろんハジメに気づくわけもなく秘密の話を続けていた。

「ほ、本当なのですかッ!!」

「わ、分からない…でも…特徴は…スゴく似てるよ……」

「確かに…あの方の種族は珍しい……」

何のことか分からないが続きの話にハジメの興味がある言葉が出てきた。

「でも…”歓楽街”に…本当にいるのかな？」

「分かりません…しかし無視出来る話ではない」

「そうですねー」

「ねえ、命。一緒に来てくれない？」

「そうですね。一人であそこには…危険です」

「そうですねー」

「ありがとう命！」

「いえ。私も知りたいたいのです。本当にあの場所にいるのか？」

「それじゃ行きましょうー」

「……………えええええッ!!?」

途中から存在を認識出来るようにしたのだが、話に夢中で全然気づかれなかったハジメ。何度か会話に入ってやつと気づいてもらったが、時すでに遅し、二人が聞かれない人物に聞かれてしまった。

「ハ、ハジメ殿……、これは……」

「ちよつと待つててくださいね。」

「流石に場所が場所なので、リ्यूに話してきますのでー」

「絶対にダメえええええええええッツ!!!」

そんなこと聞くわけもなくハジメは去っていった。

ただ二人は祈るしかなかった。

ハジメがダンジョンよりも命が消えるかもしれない所へ向かったことに、僅かでも生

きて帰ってくるようにと………

影が薄いと周りにも影響を及ぼす。

「ここが歓楽街ですかー」

ハジメが来たのはギルドも手出し出来ない場所、歓楽街

そこは男が夢を見て、女がそれを貪る場所。

さらに言えば……

「ここはいわば……」

「ダメですツツツ!!!」

口を二人から塞がれるハジメ。

ここには命と千草もいて真つ赤な表情でハジメに詰め寄る。

「なんてことをツツ?!なんてことを言おうとしてるんですかッ!!!!」

「自然の摂理みたいなものですよ?! 恥ずかしがる必要は……」

「だとしても言葉に出さないでツ!!」

強く二人に言われたので言うのをやめる。

しかしここまで大声を出したのに誰もハジメ達を見ていない。

「…しかし、凄まじいものですね…」カミカクシ」というものは……」

「うん。誰も私達を見てない」

「いいですか。僕から離れたらダメですよ。」

お二人は僕の側にいるので”カミカクシ”の影響を受けてないだけなので、少しでも離れたら僕が見えなくなりますからね」

ハジメのカミカクシによって誰にもバレずにここまでこれたのだ。レベルアップにより新たに見つけた機能みたいなもの。ステイタスには乗ってないがどうやらハジメの近くに入ればその者も一緒に消えることが出きるようだ。

「で、どこにいるか分からないんですよね」

「はい。見かけたとしか…」

「特徴は『狐人』<sup>ルナール</sup>ですか。

確かに珍しい人種ですよね」

歓楽街に来たのはいいがどこにいるか宛がない。

分かっているのは命達と同じ出身地で狐人という珍しい人種ということだけ。そして名前が

「春姫。まあ聞き込めばすぐに見つかるかもですけど」

「流石にそれは……」

「うん。私達場違いだし……」

「ですから僕が聞き」

「ダメ。絶対にダメ」

今度は大声ではなくもう冷えたような声で言ってくる。

相当怒っているのだろうとそれ以上言わないことにした。

ということを手探りで探すことに。

しかし右を見ても左を見ても娼婦がいっぱい。

もちろん女性を相手するために着飾った男性いて商売しているようだがほとんどが娼婦が多い。

春姫を見つけるためとはいえ周りを見ると娼婦を目にすることになる。命も千草もそんな娼婦を見て顔を赤くしているようだが

「いませんねー」

「……流石ですハジメ殿。全く動じぬとは」

「だって僕にとつては変わらない普通の女性ですよ」

「……それ、絶対にこの者達に言わないでください……」

娼婦としているのに”普通の女性”なんていつたらどんな目に合うか……本当に規格外な人だと改めて思った命だった。

それからしばらく探し回ったが全然見つからず。

歓楽街とはいえ規模は大きく、それも命も千草もハジメから離れることは出来ないために実質一人で広範囲を探しているようなもの。

それをハッキリと分かったのか命が



「ハジメ殿。今日はありがとうございます。」

明日からは私と千草で探します」

「手伝いますよ」

「いえ。こうして全体を見渡したお陰で二人で行けると分かりました。もちろんフ・ードで顔を隠していきますので」

「……………」

その言葉にあのハジメの表情が僅かだが変わった。

それでもよく見ないと分からないもの。

現に命と千草にはそれを気づけなかった。

「……………そうですか。でも気をつけてくださいね」

「ありがとうございます」

「でもベル達に見つからないようにしてくださいね。」

きつと見つかったら追いかけてくるかもですし、その時は僕も参加しますよ  
ベルをこの歓楽街になんて……………ふふふ」

「ゲスいですよハジメ殿」

おっと。とちよつと想像してしまった事が表について出ってしまったようだ。気を付けないと。

.....

「ハジメツ!!!こいつを持っていきな!!」

前回の戦争遊戯でハジメどころかリユーまで参戦し”豊穰の女主人”の売上を下げたとミア母さんから怒られ、減らしてもらっていた仕事が無通りになってしまった。

なので今日は1日中こちらでお仕事。

「さつさと動きなツ!!ダンジョンに潜りたいならあと一週間分の貢献をしていきな!!!」

「なんか厳しくないですか?」

「当たり前だ!!そいつはリユーの分も上乗せしてるからね。男なんだから女の分までやりなツ!!!」

「なるほど。分かりました」

リユートの為。それなら納得する。

しかしそれを納得出来ない人もいる。もちろんリユート。

「ミア母さん。私のことは私が……」

「しつこいよりリユート!!私がいいと言ってるんだ!」

それにあんたの男もいいと言ってるんだ、文句は言わせないよッ!!!」

「わ、わ、私とハジメはそ、そ、そんな関係ではッ!!!」

いや、何を今さら。とここにいる誰もが思った。

あんだけイチヤイチヤしていて恋人ではないなんて……

きちんとこれから共に生きていこうとプロポーズをしたというのに……

「そうですよ。まだキッチンと告白してOKもらってませんからまだですよ」

「……よつと、ちよつと待つニヤ!!」

リユートとハジメはこれからずつと一緒にいるって約束したニヤよなッ!!!」

「あれ??アーニヤちゃんに話しましたっけ?」

「それ……リユーが口を滑らせたの……」

シルからそれを聞いたハジメはリユーを見るとそっぽむいている。いるが耳が真っ赤になっていて恥ずかしそうにしていた。

「なるほど。でも”永遠の誓い”と”プロポーズ”と”告白”ってどれも違いますよね？」

「違うわね」

「ですから正式には最初の恋人でもないんです。

でもずっと一緒にいますからリユーがこういうのを少しずつ慣れてからだと考えていたんですよ。」

「見てください。こんな話をしただけで全身が真っ赤になるぐらいに……」  
「も、もうやめてくださいッッ!!!／／／／」

「んなことより、仕事をしなこのバカ共ッッ!!!」

……………

「……すみません。口を滑らせてしまいました」

「いいですよ。でも珍しいですね」

仕事も終わりリユーを家へ送る途中。

もちろんリユーに限って悪いやつらから狙われても返り討ち出来るけど、「女性を家まで送るのが男性です」とハジメが押しきりずつとこうして送っている。

「……少しお酒を……」

「確かそんなに強くは……」

「ないです。ですがシルから進められて……で、つい……」

「話したことには全然気にしてません。」

「でもシル姉から言われてもお酒を断るかと思っていました」

「そう、そこが意外なのだ。」

「いくら親友から進められてもリユーなら断るかと思っただが」

「……………しくて……………」

「えっ。なんて言いました?」

小さな声でいうリユー。

聞き取れなかったハジメはリユーに催促するが、下へうつむき耳を赤くした状態で

「……………あの時の、言葉が嬉しくて……………」

…そ、の……………その日に……………／／／／

それを聞いて納得した。

リユーとあの日、ずっと一緒にいようと約束したあの日。

「リユー姉」から「リユー」と呼び方を変えて畳み掛けるように連呼し怒って帰ったあの日。

実はシル達に捕まり根掘り葉掘り聞かれたのだ。

そしてその時シルにお酒を進められてやらかした。

「かわいいですねリユー」

「からかわないで下さいッ  
!!!」

「事実なんですけどね」

それでも堪らなく嬉しくなったハジメは、珍しくリユーに断りも入れずに手を握った。

普段はそんなことすればハジメでも投げられる場合がある。これはただ単に恥ずかしいからなのだが。

リユーの手を握ったときビクツと反応したが、その手は優しく力を入れて握ってくれた。それからリユーの家まで何も放さなかったがたまにキュツと強く握ってくることに嬉しさをお互い感じていた。

.....

「ありがとうございます」

「いいえ」

リユーを家まで送り帰ろうとしたハジメ。

しかしその足は途中で止まり不思議に感じたリユー。

「どうしました？」

「………止められましたが、やっぱりリユーには隠し事したくないので」

そういつて振り向きリユーと向き合う。

「すみません。いま命さんの友達を探しに”歓楽街”に行ってます」

「ツ!!?!」

「もちろん友達を探すだけです、そんな所に行っているだけでもいけないということ  
は分かっていますし、行く前にリユーに話すべきでした。すみません」

頭を下げて謝るハジメ。

もしかしたらもの凄く怒られるかもしれない。

もしかしたら嫌われるかもしれない。

もしかしたら軽蔑されるかもしれない。



そんなことがハジメの頭の中を巡るなか

「そうですか。早く見つかるといいですね」

「……リユウ……」

「……すみません。ハジメが友人のためにしていることは分かっています。分かっています  
が……気持ちを抑えられないツツ!!!」

とても苦しい表情をするリユウ。

素っ気なく放った言葉に、自分が許せなく。

それから溢れくる思いにどうも制御できなくて苦しくて……

ハジメはリユウにそういう思いをさせなくなかった。

だけどそれでも自分が選んだことだった。

あの話を聞いて知らぬふりなんて出来なかった。

でもそれでリユウが苦しんでいる。

だから、いま、出来ることを。

ハジメはリユウをゆっくりと抱き締めた。

「……本当に、すみません……」

「何度言われると……私が悪くみえる……」

「違いますよ。いつも軽率と言われますが……今日のは一番酷いと自覚してます」

「……本当です……」

ハジメの腕の中でゆっくりだが落ち着いてきたリユー。

それでもまだ胸の痛みは消えない。

「……まだ、苦しいですよね……」

リユーの首がゆっくりと縦に降った。

だからハジメはリユーの顔が見えるように肩に手を置いて距離をあけて

「だから今日は、リユーの苦しみが無くなるまで一緒にいます」

「……………えっ」

「いまはまだ隣で寝ることしか出来ませんが、それでも良ければ今日は一緒に居たいんです。どうですか?」

その言葉に顔を真っ赤にして口をパクパクして動揺するリュウ。しかしハジメの真剣な表情に少しづつ落ち着きを取り戻し小さく息を吐いたあと

「……何かすれば……斬ります……」

「何もしませんよ」

「それは、それで……ちよつと……」

「すっかり乙女ですよね」

そういうことをいうからまたリュウに睨まれるハジメ。

しかしそれは落ち着かせようとした言葉だと理解したリュウはそれ以上何も言わずハジメの手を握り自宅へと招いた。

「……男性では……貴方が初めてです……」

「光荣です」

……

「絶対になにかあったニヤ、あれは」

「それしかないニヤ」

「うん。凄く嬉しそうな表情してる」

翌日、ハジメと一緒に会社してきたリユーはお昼休みまた嵐のように質問攻めにあつたそうだ。

何を答えたかは……また、お話することに。

影が薄いのですが、神様に怒ってもいいですよね??

「ロキ様に、ですか？」

「ああ。最近来ないと思ったら酒を飲み過ぎて謹慎を受けているみたいだね。その謹慎を出したリヴェリアも飯くらいはって頼み込んできたのさ。

こっちは出前とかしてないけど常連のよしみだ、ハジメが持っていけば元気になるよ」

ここ一週間。

未だに命さんの友人は見つからず、ベルもまだ動きを見せないためにのんびりとバイトをしていたそんなある日。

ミア母さんからそれを聞かされて確かに来ていないなーと思ったが、まさか謹慎とは……

いや、あれだけお酒を飲めば言われても仕方ない。

それに一週間前にロキと会っている。あの時は上機嫌で帰っていったけど、そのままテンションを下げずむしろ上げて飲んだのだろう。

「仕方ないですね。ここは1つ濁を入れてきます」

「あはははッ！ハジメが言えば聞くだろうね!!

荷物も多いからリユーも連れていきな」

という事でリユーと一緒に出前を持ってロキ・ファミリアへ。

.....

「で、この惨状はなんですか、クソ神」

「ヒドッ!!!

……い、いやー謹慎食らって酒も飲めなくてな。で、今日ハジメが出前持ってくる1つて聞いたら……つい……」

館に入りロキの部屋にたどり着いたのはいいが、部屋を開けてみればすでに酒の空き瓶が散乱。ロキもぐでぐでに酔っていて……

「部屋、片付けるまで没収。

早く片付けないとアイズ達と一緒に全部食べてしまいますから」  
「ちよつ、ちよつと待って!!!せつかくの出前がツ!!!」

そんなの知らない。ロキ様が悪い。

叫ぶロキ様を無視して大広間へ向かうとそこには紅一点、上級冒険者である四人の女性達がいた。

「お邪魔してます」

「あつ、ハジメ」

「来てたんですね」

「いらつしやい」

「ヤツホーハジメ!!」

それぞれ挨拶を済ませたあと、とりあえず手前を置いて一言。

「あと昨日から正式に”彼女”となりましたリユー・リオンです」

「ハ、ハジメツツ!!!」

「「えっ?…ええええええええツ!!!?」」

大声で叫ぶ三人。うるさい。

アイズは首を軽く傾げるだけ。うん、君はそのままでもいいよ。

「いや、正式につて…まだ付き合ってもなかったの!!?」

「あれだけイチャイチャしておいて!!?」

「うわわわわわッ」

ティオネもティオナもハジメとリユウのイチャつき否定に疑問を持つ。

どうしてレフィーヤ姉だけ慌てているのかしいけど、そんなにイチャイチャしてたかな?とハジメは

「してましたか?」

「してた!」

「してましたか?」



「……（コクンコクン）」

「してましたかね？」

「どうして私に振るんですか／＼／＼／＼」

最後に振られた質問に顔を赤くして怒るリユウ。

それを見てティオネやティオナは「はいはい、お熱いことで」と冷やかす。

「それで、それはナニ？」

「ロキ様への差し入れみたいなもの。だったんですが部屋が汚いので片付けるまでお預けになった料理です。」

皆さん、どうですか？食べませんか？」

「いや、それダメでしょう……」

「いいんですよ。だらしのない神なんて神じゃないですから」

「うわあ……ハジメだから言えるセリフだ……」

「言つてやらないと分かりませんからね。」

あと躰のために料理を減らそうと思ったのでどうぞ」

「……美味しい」

「ア、アイズさんツ?!?」

流石アイズ姉。すでに食べ始めていた。

それを見たレフィーヤ達も遠慮しながらも食べ始めた。

「にしても、なんか精進料理みたいね…」

「お肉は入ってませんから」

「えっ。これお肉じゃないのツ?!?」

「工夫すればお肉に近い食感とか出来ます」

「と、いつでもミア母さんが作ったので」

「ハジメが作ったような言い方だったよ…」

何気ない会話をしながら黙々と食べ続ける。

そこにドタバタと足音が聞こえてきた。そして扉が勢いよく開き

「ああッ!!!ウチの料理があッ!!!」

「速かったですね。もしかしてクローゼットや収納スペースに詰め込んだとかじゃ

……」

「舐めたらあかんで。よく母ちゃんから言われていたからな。片付けは手慣れとるんや」

「それを最初からしろ」

ぐうの音も言えず、ハジメの周りの女性からもウンウンと頷かれて誰も助けてはくれなかったロキだった。

しかしそれぐらいでめげないのがロキ。

すぐに気持ち切り替えて料理へ手を伸ばした。

「なんやこれッ?!肉は?ウチの肉は?」

「元々入ってませんよ。ミア母さんはどうせ隠れて酒飲んでるだろうから胃に優しいものって作ってくれたんですから味わって食べてください」

「そんな〜。久しぶりに食べれると思ったのに〜」

どうやら謹慎中は肉も食べられずにいたようだ。

さすがリヴェリアである。ちゃんとしている。

「というか、謹慎中にまたお酒飲んで大丈夫なんですか？リヴェ姉に見つかったら断酒に断食もあり得ますよ」

「大丈夫大丈夫!!キッチンと片付けたから問題ない!」

こんなに自信があるということは…展開的にバレるかなと内心期待してしまったハジメだった。

……………

「おや、ハジメ。来てたのかい」

「はい。もう帰りますけど」

食事も終えて帰ろうと部屋を出たところでフィン、ガレス、リヴェリアに出会った。

「どうやらロキも満足したようだな」

「ですね。文句をいいながらも良く食べてました」

「たまにロキが子供に見えるわい」

「子供ですよ。頭の中もがい…」

「五月蠅いわボケツツ!!!」

よく悪口が聞こえたな〜と。感心する。

扉閉まっていたから聞こえないと思ったのにどこで聞いていたのか扉を開けてハジメの頭を叩きながら叫んだ。

「それ以上いうならいくらハジメでも許さんで!!」

「分かりました。デリカシーというやつですね」

「ハジメの手綱ちゃんと握つとけや!!!」

「す、すみません……」

何故かりューにまで当たるロキ。

それになにか違和感を覚えたリヴエリアはそう〜とロキに近づき「匂い」を確かめる。

「…ほう。酒で謹慎を受けていたのにも関わらず…酒、飲んだのか?」

リヴェリアはロキの頭を片手で掴み持ち上げる。  
その姿、鬼のよう……

「リ、リヴェリア……そ、そんな……して……」

「なら何故酒の匂いがする?」

「し、しらん……そんな、しらん……」

ぶるぶると震えるロキ。しかしリヴェリアは許さない。

「言っておくがハジメには指定したものを一時停止出来るようになったと聞いている。ならそれでロキからする酒の匂いを止めた匂わなかったら……」

「な、なんやそれツ!!? そんな聞いてないでツ!!!」

「そういつて思わず自分の匂いをかいで本当に匂いがするか確認するロキ。しかしそれが悪かった。」

「な、わけがあるか。そんな都合のいいものが」

「り、リヴェリア!!」

「しかし自分の匂いを嗅いだということは、酒を飲んだ自覚があるからだ。つまりロキ、酒を飲んだことになる」

「だ、騙したなーッ!!」

……というか、誰もロキが酒を飲んでいることに気づいていた。リヴェリアが言うとおりロキの近くにいれば酒の匂いがハッキリとするのだ。それだけ飲んでいいるということが分かるぐらいに。

しかしリヴェリアはそれを敢えて追及した。

じゃないとこの神は同じ事を何度もやるからだ。

「ということでお仕置きだ。」

「部屋の酒全て没収する」

「待つて!!やめてくれーッ!!!」

アイアンクローを食らわせたままロキの部屋に向かうリヴェリア。それを見えなく

なるまで眺めていたハジメは

「帰ります」

「……本当にいい性格してるよ……」

と、フィンに厭きられたという。

……

それから何事もなく一日が過ぎようとしていた。

バイトも終えてリユースと一緒に帰宅している途中の出来事

「……あれは命さん……?」

なにやらコソコソしながら歩いている命。その後ろを千草も追いかけている。

「その後ろにクラネルさん達もいますが」



リユーが指す方角には命達を追いかけられるベルとヴェルフとリリの姿。どうやら命の行動に疑問を持ちやつと行動を開始したようだ。

影が薄いって、こういう時に実力を発揮します。

「ベルベル達が帰っていない？」

「何してるのか……ちよつと心配でね……」

夜になり夕御飯の時間も過ぎたのにも関わらずにベルが帰ってきていないと神様から嘸を聞いたハジメ。

今日はダンジョンに行くとは聞いていないし、買い物などの話も聞いていない。だからこそ心配だという神様に対して

(ということとは、まだ彼処から帰ってきてないと……)

何してるんだと思ひ頭を抱えなくなる。

確かにベルベルがああ場所に行けば面白いことが起きるとは期待したが、神様を心配させてまでことではない。

だといって『いまベルベルは○○○○に行ってます』と言えば驚くを通り越して気絶、もしくは大暴走してその場所にいく。

どのみち嫌な予感しかしないためそれは伏せることにして

「じゃ、探してきましょう。僕はこういうの得意ですから」

「ゴメンよハジメ君。ベル君をよろしく頼むよ」

自分で探したほうがマシである。

しかしそうなると、キチンと話を通さないといけない人がいる。

.....

「ということなのですが、着いてきてくれませんか?」

「事情は分かりましたが……正直首を縦に振りたくないものですね……」

仕事の休憩を狙ってリユーに○○○……面倒臭さい、歓楽街にベルベルが行っていると思うので連れ帰ようと思いますので着いてきてください。と説明をしたところ。

「でも、リユーは僕にその場所には行ってほしくないんですね。」

それでも僕は帰りの遅いベルベル達を迎えに行かないといけない。

なら、心配してくれるリユーが僕と一緒になら。と思ったのですけど」

「頭では理解出来ているのですが……すみません。わがままをいって……」  
「???

彼女が彼氏にわがままをいうのは当たり前ですよ」

「なっツツ!!?!?!?!」

一気に耳の先まで真っ赤にするリユー。

あれ?なんでそこで顔が赤くなるのだろうか……??

「アハハ…容赦ないわね……………」

「シル姉。僕悪いことしましたか？」

「天然なところが悪かしら？」

「天然と言われても普通なんですけどね」

何処から聞いていたか知らないが苦笑いしながら話しかけてきたシル姉にリユーの様子がおかしいと聞いてみたのだが…結局答えは分からなかった。

「そんな風にメロメロにさせてるんだし今日ぐらいは一人で言っても大丈夫よ」

「えっ。しかしですね…」

有無を言わせる前にシル姉がリユーの方を指差すと

「……………そ、それは…そういう…か、かんけい…には……なりましたけど……もう少し…いや、…いやでは…ないん…ですけど……その…／／／／／／／」

うつむいたままボソボソと何かを言っている。

そして表情は満更でもないような、幸せそうな…

それを見たハジメも「ああ」と納得して

「では行ってきますね」

「はい。いつてらっしゃい」

未だにトリップしているリユーの手を取って変わりに手を振ってくれた。可愛い

リユウの姿をまた一つ見つけた日となった。

.....

「さて、どこにいったのやら……」

歓楽街に入ったのはいいが一つの大きなファミリアが取り締まっている場所。なので無駄に広く、そして多くの建物とお店が顕在している。

ここからたった一人。ベルベルを見つけるとなると……と考えていたがすぐにそれは消された。

「まあ、ベルベルですから何かやらかすでしょうし、騒ぎが多い場所に行けばいいですね。」

と、完全に自分のことは棚にあげていうハジメ。

しかしその予感は的中することになるのだった。

「……………つて!!!……まえろッ!!!」

「おつ。さつそく騒がしくなってきましたね」

こんな予感は当たってほしくないが、ここにはそれをツツコミを入れる要員がないために、ただ更なるトラブルメイカーを引き寄せる形となった。

余談だが、前回の戦争遊戯においてハジメに劣らずベルも多くの人に知れ渡ったのだ。つまりそんなベルを狙う娼婦（お宿）は多くいるものだ。



いつまで経つても帰ってこないから神様が心配してましたよ」

「わ、わりい……でもよベルがッ!!」

「大丈夫です。そちらは僕に任せて帰ってください」

「しかしですね……」

「こんな大人数が移動するなら目立ちます。」

さらに僕は隠れますからね。問題ありません」

「えっ?でもそれなら……」

と、千草が余計なことを言おうとしたのでニコツと笑って制止させた。ヒイツ!!と声を出して言うのを止めた千草に命が心配しそうに声をかけるが何も言わなかったので許してあげましょうと満足そうな表情したハジメに

「ヴェルフ様……これ、絶対になにかやからしますよ……」

「だな。でも止める方法、あるか?」

「ありませんね……」ということで諦めたヴェルフ達はハジメの言うとおりにこの場から逃げ出すことにした。

そして残されたハジメは未だに声が上がっている方向へ振り向き

「さて、ベルなら何処かに身を潜めようとするとして……」

ベルがどんな動きをするか頭に過らせながらこの街の影に消えたハジメだった。

.....

パリンッ

高い、高い塔の一室。

その広い一室の中でグラスが割れた。

謝ってグラスを落としたのでない。

ある出来事に我慢できずに八つ当たりのように壁にその手に持っていたグラスを叩きつけたのだ。

グラスに入っていたワインは壁に添って床へ向かって伝って落ちていく。それはまるで血のように……

グラスの割れた音に気づいた一人の冒険者は主の元へ馳せ参じ

「どうかなさいましたかフレイヤ様」

「この前の戦争遊戯で、牽制したつもりだったのだけど……」

フレイヤの側に常にいるオツタルでさえも萎縮してしまいそうになるほどいま神・フレイヤはキレていた。

フレイヤが見ていたのは水晶。

そこに映るのは遠くにいる者の行動を見るため。

そしてその目的である二人。ベル・クラネルとハジメ・トキサキ。



すぐにオツタルは分かった。

その二人のどちらかが、もしくははどっちもが、奪われそうになっている。もしくは奪おうとしていると。

「すぐにとこのならばいつでも」

だからオツタルはいまフレイヤが一番望むことをいった。

それはフレイヤ様が気になる二人を奪おうとする者を……

「いえ。それはいいわ」

するとまさかの答えにオツタルは一瞬驚いた。

何もかも手にしようとする神。そして奪われそうになるなら全力をもってそれを阻止しようとする。

なのにも関わらずに、その命令を出さない。

しかしすぐに何か考えがあるのだろうと頭を切り替えたオツタルは

「では、如何様にしますか？」

「そうね。ロキといつでも話せるようにしたおいて。もちろんへステイアもよ」

「かしこまりました」

何を考えているのか分からない。

しかし神様のためにとオツタルはすぐに行動するために部屋から出ていった。

そしてまた一人になったフレイヤは  
「いまはまだ時期じゃないわ。」

なら、共有財産所有者であるあの二人に恩を売ってもお釣りがくるわ」  
ふふふ。と笑うフレイヤはこの状況を利用しようと考えたのだ。

すぐにでも手にしたい気持ちを抑えてまで、この先のことを見据えて。

影の薄い人がいるといい雰囲気は台無しです。

イシユタル・ファミリア

歓楽街を牛耳るファミリア。

そしていま、ベル・クラネルを狙おうとしているファミリア。

「さっさと捕まえなッ!!イシユタル様に献上するんだよッ!!」

「というわけで、逃げるなりトル・ルーキーッ!!」

「いやあああああああッッ!!」

未だに逃げまとうベルと、それを追いかけるイシユタルのアマゾネス達。

戦争遊戯で目撃し、その”強さ”を知ったアマゾネス達はベルを”味見したい””食べたい”と胸が高鳴り興奮した。

そしてそのベルがこの街に、目の前にいるのだ。

どうにかして手に入れたいと望むのは本能である。

しかし神・イシユタルに引き渡すということもありいまは神の為に動いている。

しかし圧倒的な数で追い込もうとしているのにも関わらずに未だに冒険者一人も捕まえられない。

その逃げ足の速さもあるが、動物的本能、なか畧を仕掛けてもギリギリで気づかれて回避されてしまう。

だからいまもこうして屋根の上を走ったりしているのだが

「アイシャツ!!このままだと埒があかないよツ!!」

「だったら、向こうから来てもらうように」すればいいのさ」

その言葉の意味を理解したアマゾネス達は一斉に行動した。

アイシャ・ベルカはイシユタル・ファミリアのNo. 2。

信頼できる人物だからこそ、誰もが疑わずに動いた。

そうしてアマゾネス達は「ある場所」へ誘導するために隙間なく逃げ道を塞いでベルを誘導する。それに気づいていないベルは目論見通りに動いておりそれを見ていたアイシャは呟いた。

「さあ、楽しませてくれよ。リトル・ルーキー」

.....

「離してツ!!離してくださいッ!!!」

まんまと罠に引つ掛かったベルはとある屋敷に飛び込んだ。

逃げる道を一点に絞られたベルは仕方なくその屋敷に飛び込んだのだがそこには追いかけていたアマゾネス達が待ち構えていたのだ。

すぐに逃げようとするもすぐに押さえられたベル。

必死に抵抗するも相手はアマゾネス。

それも複数に取り押さえられては動けない。

「ベル・クラネル。いい顔してるわね」

その美しい声にその場にいたアマゾネス達は一斉に黙った。

さつきまでベルを“味見したい”“食べたい”などとベルにとって恐怖しかない言葉を発していたアマゾネス達が黙った。

その声の先には階段から降りてくる麗しき女性。

そしてこの世のものではないかと思わせるその美貌。

ベルは直感した。この人は神・ヘステイアと同じ存在だと。

「嬉しいわ。こんなにも早く会えるなんて」

ドンドン近寄ってくるイシュタル。

このままでと不味いと本能が告げておるのだがどうしても逃げ出せない。そんなことをしていると迫ってくるイシュタルへある人物が声をかけた。

「イシュタル様。”終わったら”その男を私に贈れよ」

フリユネ・ジャミール。

おかつぱ頭の2メートルを超える巨女の戦闘娼婦（バーベラ）。大きな目と裂けた口、

短い手足と顔と胴体がずんぐりと太っており、モンスターと思われるでも無理のない体格をしていて一目見たベルが思わず声に出して悲鳴をあげたくなるほど。

そしてこのフリユネがイシユタル・ファミリアのNo. 1。

「ふざけんじやないよフリユネッ!! あんたに捕まったら男はみな、再起不能に乗るだろうがッ!!」

「うるさいねアイシャ。

こんな上玉をみすみす逃せというのかい？

こいつは私が”食べるんだよ”ッ!!!」

その口論が他のアマゾネス達まで広がりがりパニック状態に。

イシユタルもはあくため息をつきどう收拾するか悩んでいた。

そんな中、一瞬の気の緩みかベルを拘束していた手が緩んだ。

それを見逃さなかったベルは捕まっていた手を払い、自由になった手で拘束されている手を全て払いその場から一気に駆け出した。

「何をやってるのッ!!!」

「逃がすんじゃないよッ!!!」

ベルはさつきイシユタルが降りてきた階段を一気に駆け上がる。

後ろからはアイシャとフリユネから激を食らったアマゾネス達が追いかけてくる。

もう一度捕まったらおしまいだ。

ベルは必死になって階段を駆け上ったあと廊下を走り抜け、ジグザグに、追手から逃げるために、“迷う”という概念を取っ払って走り抜ける。

そしてとある一室に飛び込み、アマゾネス達がその場から離れていく音を緊張しながら聞いていた。

幸いベルの入った部屋にアマゾネスは立ち寄らず足音も聞こえなくなった。

ひとまず安心したベルはあくどため息をついた。のだが。

「あの、どちら様でございましょうか？」

そこにはこの部屋の主がいたのだった。

.....

「見つからないだあ？ふざけんじやないよッ!!!」

報告したアマゾネスを理不尽に殴り付けるフリユネ。

この屋敷をくまなく探しても見つからず、外に出たのかと探しているのだがいまだにベルを見つけれずにいた。

「この街は封鎖してらんだッ!!何処かに隠れてらんだよッ!!!」

さっさと見つけて私の所に持つてきなッ!!!」

「なにいつてるんだいフリユネ。あのリトル・ルーキーはイシユタル様に渡すんだよ」

「いいじゃないかい。ちょっとぐらい」味見「してもさ」

「あんたの”味見”は男を”殺す”と”同義”なんだよ」

「……さつきから舐めた口ばかりだねアイシヤ。」

どっちが上なのか、ハッキリさせようか？」

「私はイシユタル様为上だと思ってるわ。」

それとも、そんなこととして後でイシユタル様に怒られてもいいってわけなの？」

睨みあう二人。

自分勝手に動き回り男を再起不能にするレベル5のフリユネ。

アマゾネス達から信頼がありフリユネを除けばNo. 1になれるアイシヤ。

互いが互いを煙たがっている。

だからこそ、そんな二人を止められるとしたら一人しかないのだ。

「2人とも止めなさい」

それはもちろん神・イシユタルしかない。

あのわがままなフリユネさえもイシユタルの前では大人しいのだ。

「フリユネ。アイシヤが言った通りにまず私の所に連れてきなさい。その後は、貴女の

好きにしたらいいわ」

「イシユタル様ッ!？」



「ありがとうございますイシユタル様」

その言葉に満足したのかフリユネはその場から悠々とした表情で去っていった。納得できないアイシヤはイシユタルに

「どうしてそのような事を。フリユネに取られればリトル・ルーキーは再起不能に」

「私はね。誰も一人だけを狙ってる訳じゃないの」

その言葉にアイシヤは理解した。

ベルは囧。もちろんベルも欲しいのだがあのファミリアにはもう一人魅力的な男がいる。

「続行不可能。<sup>サスベンデッド</sup>あの子が一番欲しいのよ」

.....

「それではベル様も英雄譚がお好きなのですね」

「はい。まさか春姫さんも好きだなんて」

突然現れたベルに春姫は「客」として迎えた。

しかしベルの「鎖骨」を見ただけで気絶してしまい何故かベルが春姫を介護するこ  
とになった。

その後春姫に誤解していると話し、ベルがここにいること。追われていること。話をしている内に打ち解けあい、世間話をするほどになっていった。

話していて思った。春姫はあのアマゾネス達とは違うと。

こんなにも優しく、見ず知らずの自分を受け入れてくれたのは。

そのことを考えていると春姫が

「とりあえず朝になるまでここにいてください。」

そうすれば人も少なくとも私が知っている抜け穴からこの街の外へ抜け出せます」

「……どうしてそこまでしてくれるんですか？」

「私は娼婦です。この身はすでに穢れてます。」

でもそんな私を貴方様は一人の“女”として見てくれた。看病してくれた。

それは私にとってはとても、とても嬉しいことなのです」

ニコリと笑う春姫。しかしベルはその笑顔に曇りがあると感じた。きつと何かを抱えている。助けを求めていると。

何か出来ないかとベルはその口を開けようと

「帰りますよベルベル」

「ツ!!ハ、ハジメツ!!!」

突然二人の間に現れたハジメに驚くベル。

春姫も突然のことで後ろへとお尻から倒れてしまった。

「いい雰囲気を壊すのは野暮かもしれませんが、このまま朝待つとベルベルの貞操がな

くなりそうですし」

「な、な、何言ってるのハジメツ!!!／／／／」

「おっ。そこは理解しているんですね。よかった。

ということで、神様に怒られたくないのでベルベルは連れて帰りますね」

「は、はい……」

驚きはしたがハジメかベルの仲間だと知って安心した春姫。

そんな春姫にハジメは手を差しのべてきた。そこで自分が尻餅をついていることに気づいた春姫はちよつと慌てながらもその手を掴み起こしてもらった。

「先程は失礼しました。ベルベルと同じファミアのハジメです」

「サ、サイジヨウノ・春姫です……」

「なるほど。狐人ルナールですか……」

……まさか、ベルベルを探してもうひとつの探し物に会うなんて……」

「どういうことなのハジメ？」

命や千草から名前は聞いていなかった。

しかし特徴のある狐人、そしてこの歓楽街。

探していた人物だとするなら、ほぼ間違いはないだろう。

「ハルルは……」

「ハ、ハルル？」

「ハジメツ!!!いきなりすぎるよツ!!!」

「ハルルは、命さんやチグーを知ってますよね？」

.....

『ハルルは、命さんやチグーを知ってますよね？』

『どうして命様のことを!?それにチグーというのはもしかして千草様では』

『言いましたよね？』

『言っていないから……いきなりあだ名は分からないよ……』

そんな声が部屋の中から聞こえた。

すぐにでも中へ入りリトル・ルーキーとサスペンデッドを捕まえるつもりだった。しかしサスペンデッドがいったい名前前は以前に春姫から聞いたことがあった。

ここより遠くの国、そこで友達だった二人の名前。

その時のことを話すときは何よりも笑顔で話していた。

だからこそ、いま春姫はその名前が出て来て驚いている。

『この歓楽街まで探しに来てましたよ。ハルルに会いに』

『お二人が……こんなところに……』

『ハルルも一緒に行きましょう。二人が待ってます』

その言葉にアイシヤは思わず部屋に突撃しそうになった。だが、まだ春姫の言葉を聞いていない。

無理やり連れていかなかったという点で、アイシヤはまだハジメをただの”お人好し”程度の認識ですんでいる。

しかし無理やりでも連れていこうなら…と考えていると

『……それは出来ません』

『どうしてですか?』

『私は娼婦です。私がこの街から出るときは”死”か”身請け”だけです。……』

その言葉を聞いてアイシヤは安堵した。

と、言っても春姫は”娼婦”ということをやつたことがない。いつもすぐに気絶してしまいそういう経験がないのだ。それでも自分をキチンと娼婦として分かっている。

安堵したと同時に何とも言えない感情が湧いてきたのだが

『身請け、ですか。ならばベルベルが買いますよ』

『ちよつ、ちよつとハジメツ!!!』

『なんですか? 困っている女の子を助けられないのですか??』

そうですか、そうですか。そんなにへタレだったとは。仕方ありませんね。では僕が

「買いましようか。リニューに激おこされるかもしれません。が話せば分かって……」

『それは絶対ダメツ!!!!』

『ベルベルに止められる筋合いはありませんよね?』

『突然だったからビックリしたただけだよッ!』

……春姫さん。僕は貴女を買ってここから外へ連れ出しますッ!!!!』

言ったね。リトル・ルーキー。

……

ベルが春姫を身請けすると口にした瞬間

「ずいぶんと、ウチの春姫を高く買っているみたいだね」

そこにいたのはさつきまでベルを追いかけていたアイシヤ。

すぐにベルは戦闘体勢に入る。春姫は未だにベルの言葉にクラクラ来ているのか上の空。

「でも分かってるのかい? 身請けにどれだけ金がかかるのか?」

「そこらの娼婦とは訳が違う」

「金額はその5倍だ」

その金額に驚くベルだったが絶対に払えない金額ではない。

「……払えます」

「そうかい。でも、残念だ。その子は身請けさせられない」

「どうしてですかッ!!?」

「簡単さ。その子はフアミリアにとって必要な存在なんだよ。もうすぐ満月。その子はその日に大事な使命があるのさ」

「それが終わったら、身請けしても……」

「構わないよ。過ぎればその子は用はない」

「……分かりました」

「ならさつきと帰りな。イシユタル様には悪いけどリトル・ルーキーよりその子のほうが大切だからね」

そういつてアイシヤは塞いでいたドアから身体を離れた。

本当にここから出てもいいということなのだろう。

「春姫。途中まで案内してやりな。」

「それと”殺生石”は手に入つたとイシユタル様から伝言だよ」

「ツツ!!?………分かりました」

驚く表情を見せ悲しい表情へと変わった春姫。

春姫が先に部屋を出てベルが警戒しながらそれに続く。

ハジメも一緒に出ようとしたが

「あんたはダメだ」

「ハジメツ！」

部屋出ようとしたハジメをアイシヤは肩を掴み止めた。

それにベルは近づこうとしたがハジメが手を上げて制止する。

「イシユタル様がお呼びだ」

「つまりベルベルがこの街から出るには僕が言うことを聞いたほうがいい。というわけですか」

「そういうことだ」

「ベルベル。先に行つててください」

「でもッ!!!」

「いいから。真つ先にリユーに帰るのが遅れるつて伝えてくださいいね」

その言葉にベルは悔しそうな表情をしながら頷いた。

いま自分が人質になっていることを理解している。

そしてここで抵抗するならばきつとハジメに迷惑をかける。

いま出来ることはすぐにでも神様のところに帰ることだ。



「すぐに、戻ってきますッ!!」

「期待してますよ」

そういつて春姫をお姫様抱っこして駆け出したベル。

そつちの方が速いのかもしれないがお陰で春姫の顔は真っ赤になっていた。

「ずいぶんと聞き分けがいいね」

「どのみちハルルを身請けにしようとも改コンバージョン宗を神・イシユタル様をお願いしないといけ

ませんからね。

それにマトモに身請け出来るどうかも怪しいみたいです。でそこら辺も詳しく聞こうかと」

「へえー。頭もかなり回るようだね」

付いてきな。とアイシヤに言われその後ろを付いていくハジメ。

この先何が待っているのか、というか僕の知らないところで色々起きそうだなーと軽く考えている。

しかし、ハジメの予想よりも遥かに上だった。

誤算はハジメ自身がどれだけの価値があるのかということを理解していなかったためであった。

影が薄くても心配してくれるのは嬉しいことです。

「やはり私達もベル様を探しにッ」

「いったところでどうなる？ハジメの邪魔になるだけだ」

「…………ハジメ殿…………ベル殿…………」

ハジメに言われた通りに大騒ぎになる前に歓楽街から抜け出したリリ達。しかしそれでも二人を心配しファミリアには戻らずにここを通るだろう帰り道で待っていたのだ。

すでに何時間も経っている。

ハジメに対しての無事は心配していない。

あんな規格外をどうにかできる人などいないと信用している。

しかしそれでもそこにはベルもいる。

ベルの無事も心配はしていないが、なにかやらかしていないかと……………いや、どちらかといえばこれはハジメの方で…………

「皆様!!あれをッ!!」

そう心配して視線が下に向かっていた所を命が呼び掛けた。

すぐさま視線をあげるとこちらに向かつてくる一人の少年。

その姿はボロボロでありながらも、それでもしつかりとした足取りで走ってくるベル・クラネルの姿であった。

「ベル様ツツ!!」

「ベルツ!!!」

「良かった!…ベル様……」

「はい、良かった、です……」

別のファミリアである千草もベルの姿を見て安堵する。

しかし走ってくるベルの表情はどこか、追い詰められているようで……そしてそこにはいるべき人物かいないことに気づいた。

嫌な予感がした。自分達の元で止まったベルに問いかけた。

「おい、どうしたんだベルツ!!それにハジメは一緒じゃ……」

「ハ、ハジメが僕の代わりにイシュタル・ファミリアにツツ!!」

「そ、そんなツツ!!」

息を切らしながらベルは早口になりながらも事の顛末を説明した。

自分がイシュタル・ファミリアの、それも神イシュタルに目をつけられたこと。

一度捕まり逃げ出したこと。そこで春姫に会ったこと。

そして、ベルを逃がすために追いかけてきてくれたハジメが捕まったこと。

それを聞いたヴェルフはその拳を壁に叩きつけながら

「ふざけろッ!!!」

「イシユタル・ファミリアはバカなんですかッ!!! そんなことしたら…あのロキ・ファミリアが攻めてくる可能性があるんですよッ!!!」

ヴェルフはハジメを捕まえたイシユタル・ファミリアに。

リリイはそのイシユタル・ファミリアの軽率な行動に激怒している。

「春姫殿……ッ!!!」

「身請けって、そんなお金……」

そして春姫を知っている二人はせっかく見つけた春姫の現状に困惑していた。

これからどうすればいいのか? まだその段階に到っていない段階で、この状況をさらに悪くしてしまう人物がのらりくらりと現れた。

「どうやら大変なことになったみたいだね」

「ヘルメス様ッ!!!」

やあ。と胡散臭い笑顔で現れたヘルメス。

先ほどの話を全部聞いていたようで

「さっき言っていた”殺生石”

ベル君はこれがどういうものか知っているかい？」

「い、いいえ……これは一体何なんですか？」

「殺生石。狐人専用のマジックアイテムで、その石に狐人を、その魂を封じ込めることによつてその狐人の魔法を誰でも使えるようになるんだ。

そして、その石の破片を持つものすべてが魔法を使えるようになるつてわけさ」

「ま、待つてくださいますッ!!!」

魂を封じ込める……それに、欠片つてッ!!!??

「ああ。殺生石を砕くんだよ。

その欠片を持つているだけでいいんだからね」

「そ、そんなッ!!!」

それは春姫の命を使いその殺生石を使おうとしているのだ。

あまりのことに千草が膝から崩れ、すぐに命が支えに入ったがその命も顔色が悪い。

そして、さらに追い討ちが、その酷い現実がその耳に入つてくる。

「それとその儀式だけど”満月”にやるんだ」

「ちよつ、ちよつと待つてくださいますッ!!!」

それつて!!今日じゃないですかッ!!!???

「ああ、そうだね。このままだと……!!!」

淡々と喋るヘルメスにキレたのか、ヴェルフがヘルメスの胸ぐらを掴み

「なんでそう平然としてられるんだッ!!!」

「ヴェルフ様ッ!!!ダメです!!!」

すぐにリリイがヴェルフを止めようとするが、ヘルメスは胸ぐらを掴まれたまま

「…ファミリアの向上のために一人の狐人が犠牲になる。

確かに人道的には恐ろしいものだ。

「だけどファミリアが決めたことに他のファミリアが、ましてや個人がどうにか出来る  
と思っっているのかい?」

そう。これはファミリアが決めたこと。

それを覆そうとなると重たい処罰が待っている。

それだけじゃない。その出来事は広まり生きにくい生活が待つことになる。

もちろんそんなことほヴェルフにも分かっている。

「ただ改めて突きつけられた現在。」

それを分かったヴェルフはその手を離し悔しそうな表情をするなか

「助けます!」

そんな所にベルが真つ直ぐにヘルメスを見つめて言い放った。

それを分かっていたようにニヤリと笑ったヘルメスは問いかける。

「分かっているのかい?!

そんなことをしたら君だけじゃなく、ファミリアにもヘステイアにも迷惑がかかるってことを」

「だからといって見捨てるぐらいなら、ここにいる皆に、他の人達に責められても構いません!!」

それに…あそこにはハジメもいるんです! 助けないと!!」

その言葉にヴェルフの顔色も変わり、いやそこにいる誰もが決意し

「だなッ!!! 行くぜヘルメス様よッ!!!」

「仕方ありませんね。それにイシユタル・ファミリアに向かいにいかないとはジメ様が何をやらかすか……」

「そうですね…どちらかというところちが心配です……」

「二人とも助けましょうッ!!!」

一致団結となったヘステイア・ファミリア。

それを見て満足したのかヘルメスはその場から去る…と、したところヘルメスの肩にガシツと手がかけられ、とんでもない握力で握られた肩は悲鳴を上げ、ヘルメスは額から汗をダラダラをかきながら肩を握ってきた人物の方を見てみると

「何処に行くつもりだい? ヘル・メ・ス」

「へ、ヘスティア……つて、ロキに……フレイヤまでツ!!!」

これから傍観しようとして決めていた所にまさかの神三人が現れたのだ。そしてその中でも驚いたのはフレイヤの存在だった。

男も女も”魅力”し惑わすフレイヤは深めのフードを被っているがそれでもヘルメスを魅力してしまうほどの美貌を持っていた。

そしてここにもう一人いる男であるヴェルフは無条件にリリと命に反対側を向けられて魅力されずにすむ。

「なに、ヘルメス。私がいたらダメなの?」

「い、いや……ダメってわけじゃないけど……」

その美貌と妖しげな瞳に思わず一步引いてしまうヘルメスに、グイツと近づいてくるのは不機嫌なロキ。

「なあヘルメス。さつき、あれだけこの子らを持ち上げておいてまさか、関わりらんつもりなんか、お前は?」

「ロ、ロキ……しかし、僕のファミリアはそんなに強くは……」

するとズシン!ズシン!と足音が聞こえてくるようにヘルメスに近づくとヘスティアは二言、こう言った。

「へ・ル・メ・ス。来るんだ!」



「……………はい……………」

完全に参加決定したヘルメス・ファミリア。

しかしいきなりの展開に他の誰もついていけない。

その中でもすぐに冷静になれたリリが

「ち、ちよつと待つて下さいへステイア様ツ!!!!!!」

まさかロキ・ファミリア、ヘルメス・ファミリア、それにフレイヤ・ファミリアまで

参戦するつもりなんですかツ!!!!??

といいますか、どうして事情を知っているのですかツ!!!!??

「あ、ああ……これはフレイヤからの情報だよ。」

一体どこでこんなことを知ったのかかなり興味はあるけど、いまはそれどころじゃないからね。

イシュタルは昔からフレイヤに因縁をつけていてね、今回の事はイシュタルがフレイヤに喧嘩を売るためにやったことらしい。それでそんなフレイヤを潰すために”殺生石”を使うつもりだったみたいなんだ」

「潰すつて……一体どんな魔法を……」

「そこまでは知らないようだよ。そうなんだろうフレイヤ」

「ええ。流星に調べても出てこなかったわ。」

でも、ハジメをモノにしようとしてはだけは分かっているわ」  
するとロキが「ヨッシャー!!」と気合いを入れて

「それだけ分かれば十分や!!」

なに勝手にウチのハジメを……」

「ふぎけるなツ!!!」

ハジメ君は僕のファミリアの一員だあああああ!!!!!!」

「そうよロキ。ハジメはいつか私の元にくる大切な子……!!」

「ハジメ君はずつと僕のファミリアしかいませんんんんんんんんんツ  
!!!!!!」

要は、ハジメが捕まった。

それだけで、いや、それだからこそこうして集まったのだ。

「ハジメさんって…凄く人望に長けた方なんですわ……」

「……………どうなんだリリ助?」

「……………勘違いなのでは?」

「……………好き勝手にやるお方だけは間違いないですね……」

「み、みんな……」

あまりのハジメに対しての評価の低さに千草は疑問をもった。

これだけのファミリアを動かしているのに信用がないなんて、一体何をどうすればそ

うなるのかと……

「とりあえずや。流石にウチとフレイヤは全団員を投じるわけにはいかんからな。最大限の人数”3人”でどうや？」

「ええ。構わないわ」

「ドチビは手助けしてくれる人を集められるだけ集めてこい！」

イシユタルがハジメを拐って救出するためということならギルドからの罰も少なくなるやろう！」

「わ、分かったよ！」

「ってか、なんでロキが仕切るんだよッ!!!」

「うっさいわドチビッ!!!」

「ええな!!一時間後にここに集合やッ!!!」

.....

「私が、いく」

「私もいくぞ」

「俺もいつてやる」

ロキは自分の屋敷に戻り主要メンバーにいま起きている状況を話したところ、アイ

ズ・リヴェリア・ベートが参加すると言ってきた。

「なら、僕とガレスはギルドにいつて少しでも罰の軽減を図ってみるよ」  
「頼むで。ウチはフレイヤとドチビと一緒にいくからな」

その言葉に一瞬誰もが固まったが

「な、なに言ってるんだロキツ!!!?」

「心配するなや。フレイヤの所で守ってもらえれば安心やろ」

「だがッ!!」

「あのフレイヤがただ情報をウチらに回すだけやと思うか？」

絶対なにかやらかす。それもハジメ繋がりだな」

「……神フレイヤもハジメを狙っているのかい？」

「だからこそドチビも一緒に連れていくんや」

ハジメを救出と思いきやまさかの伏兵。それもあのフレイヤ。

どうにも嫌な予感がするフィン

「……分かった。ならフレイヤの護衛として僕は付いていくよ。すまないがガレス

……」

「こっちは気にせんでいい」

いつものようにハジメを中心に動き出す。

そして今回も同じことが起きたが

(……………どうしてか……それだけで収まらない気がしてならない……………)

長年の冒険者としての勘か、それともずっと収まらない親指の疼きか……

影が薄くても必要なら強行手段です。

パリンツ

その音が店内に響き渡った。

普段は賑わう店内も必死に駆けつけたベルを見てバカ騒ぎが収まり、そしてベルから語られた言葉に辺りが騒然として、そしてその中心にいたリユーが持っていたお皿を落としてしまったのだ。

ここにいるものなら誰でも知っているイシユタル・ファミリア。

そしてその神であるイシユタルにハジメが捕まったという事実。

そのことを告げたベルは続けたこう話した。

「で、でも、安心してください!」

ロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアがハジメ奪還に協力してくれることになつたんですツ!!!」

「!!!「なっ!!なにいいいいいいッ!!!??」!!!」

今度は店全体がその驚きに満ちた。

あのフレイヤ・ファミリアが急上昇してきたファミリアとはいえ団員も経験も少ない

弱小ファミリアを、たった一人の者の為に”最強”と言われる二大巨頭が手助けするなんて……

そんな前代未聞な出来事に一気に客達は騒ぎ

「五月蠅いよツツ!!!」

だそうとしていたが、ミア母さんの一言で一気に静まり返った。

そしてそのままベルの前まで歩くと、ベルの頭に手を乗せて

「つたく、逃がすにしても自分のことも考えろって話さ。

あんたはよくここまで帰ってきたね」

「い、いえ、僕は……」

「素直に受け取りな。まあ、ハジメには迷惑料として飯をおごってもらいな。もちろん

ここだよ」

「はいッ!!!」

ベルの頭を強く撫でたあと放心状態のリューの元へ向かい強くその背中を叩いた。

「ツ!!!な、なにをツ!!!」

「さつさといきなッ!!!」

「し、しかし……私は……」

「今回はハジメもリューも被害者さッ!!」

それでも店を抜けるのに躊躇いがあるなら帰ってきてからこき使つてやるよッ  
!!!!!  
その言葉に少しだけ生氣を取り戻したのか顔色が良くなったりユーは

「……いえ。ミア母さんのこき使いは修行よりもキツイ」

「だったらさっさとあのバカを連れ戻してきなッ!!」

はい!とその場で前掛けを外したりユーは改めてミア母さんに一礼をした。そのタ  
イミングで、まるでリユーが助けに行くのが分かつていたようにいつの間にかいなく  
なつていたシルがリユーの武器を両手に抱えて持つてきた。

「これがないと。でしよう?」

「シル……ありがとう」

「顔が割れたらダメなんだニャー。このコートと布も持つていっくニャー」

「助かります」

アーニヤからはウエイトレス姿を隠す為の丈の長いコートと、顔を隠す為の布を渡さ  
れた。すぐさまそれを身に纏い

「——クラネルさん。先に向かいます」

「えっ。ちよっ」

突然の、いや、予測はしていたけどこんなにも速く飛び出すなんて予想出来ずに  
リユーを引き留めることが出来なかつたベル。



しかしそれを見てミア母さんとシルは

「つたく……リユーをこんな風にしちまって……」

「ええ。責任、とつてもらわないといけませんね♪」

「いいかいあんたらッ!!!ここで話したことを他言してみなッ!!!二度とこの店、いや、他の店でも飲食出来ないと思いなッ!!!」

その一言で一瞬静かになってもの、すぐさまに元の活気に戻った店内。まるでなにもなかったかのように……

するとシルは店の奥に向かい戻ってくるとその手にはバスケットが、それをベルに手渡して

「何処かで食べてください。無事に皆さんが帰ってこれることをここで祈ってますね」

「ありがとうございます!行ってきますッ!!!」

……………

「というわけじゃ」

「い、いくらトキサキ氏を奪還のためだとはいえそれはッ!!!」

「んなもんは分かっとなるわ。」

ワシらのファミリアも、フレイヤ・ファミリアも罰を受けることを分かっても協力すると決めたんじゃ。

それでもちつとは軽くなるためにと、報告する必要があるとこうしてきたんじゃないだろうか」

いきなり現れたロキ・ファミリアのガレスに誰もが驚きビビる中で真つ正面から対応しているのだが、正直こんな大物が目の前にいるだけでエイナもかなりビビっている。

それでも冷静にいられるのはそれは担当しているハジメがイシュタル・ファミリアに拉致されたからである。

正直なところハジメなら大丈夫だと思うが、相手はイシュタル・ファミリアである。フレイヤ・ファミリアのフレイヤが持つ“魅力”は無くともその美貌はどんな男も落としかねない。

しかしそれはそれとしてファミリアによる抗争はギルドにおいて禁止されている。もしあるとするなら以前行われた戦争遊戯をすることになっているのだ。もし勝手な行動によって抗争が始まるとするなら……

「だ、だとしてもギルドとしては見逃せませんッ!!!」

「ああ。なら構わん。

報告はした、それだけじゃ」

そういつて立ち去ろうとするガレスに「待つてくださいい！」とエイナは引き留める。振り返るガレスに息を飲みながら

「……どうして他のファミアリアである貴殿方がトキサキ氏を……」

「それだけの価値がある男。ということじゃ。」

それはお主も分かるはずじゃと思うがな」

するとエイナは決心したような表情でガレスに向き合い

「……トキサキ氏を、ハジメ君を、よろしくお願いします……」

「ああ。任せとけい!!」

真つ直ぐに正した姿勢からお辞儀をして、ギルドではなく、個人的にガレスにお願いをした。何も出来なくてもその言葉だけでガレスは満足したのかその場を後にした。

………

「なんやドチビ。戦力はそれだけなんか?」

「五月蠅いなッ!!これでも集めた方だよッ!!」

そこにいたのはヘスティア・ファミアリアからヴェルフ・リリ・命。タケミカツチ・ファミリアから桜花・千草。ヘファイストス・ファミリアからは椿。ロキ・ファミリアからアイズ・ベート・リヴェリア・フィン。そしてフレイヤ・ファミリアから”最強”と呼ばれるオツタルがこの場にいるのだ。

「……ここで最強と呼ばれるオツタル殿に会えるとは光栄じゃ!」

「………」

「やめろ椿ッ!!! 目的は同じだが馴れ合う感じじゃないぐらい分かるだろうがッ!!!」

「五月蠅いのヴェル吉は。ちよつとした挨拶じゃ」

「頼むから大人しくしてくれよ……」

怖いもの知らずなのかあのオツタルに話しかける椿に、急いで引つ張つて連れ戻したヴェルフ。同じようにリリリ達もハラハラとしてここで何か始まるんじゃないかと恐怖さえ覚えた。

「ごめんなさいね。オツタルは少し人見知りなの。」

それに私達は直接イシユタルに会いに行くわ。ロキもヘステイアも一緒に行くんでしよう?」

「読まれてたか……ああ、いくで。こっちはフィンをつける」

「ふふふ。まさかそちらもトツプを出すなんてね……」

「敵地に乗り込むんや。これぐらいはいるわ。」

「そつちとこつちが入ればヘステイアのほうは出さんでええやろ?」

「もちろん」

「聞いた通りや。ヘステイアはハジメ奪還に戦力を使えばええ」

「ああ。よろしく頼むよ」

後はヘステイア・ファミリアの戦力が全て揃えばと思つているとこちらに向かつて

走ってくる人影が……一気に駆け抜けて抜き去っていった。

「……おいおい。さっきのは……」

「はい。間違いなくリユー様です」

「あつ。ベルさんですッ!!」

そのあとを追いかけるように走ってきたのはベル。

こちらも全速力で走っているのだろうが、さっき駆け抜けたリユーのスピードには全く追いつけなかったようだ。

「お、お待たせしました……」

「ベル様。さっきのはリユー様でしたが……」

「た、体力が切れる前にポジションで回復させながら……常にトップスピードで走って……追いつきませんでした……」

「後先考えずにやつとるな」。

まあ、ハジメが捕まったんや。動揺せんほうがおかしいな」

……

「お、おい……なんだアレ……」

「こつちに向かってくる、わね……」

逃げ出したベル・クラネルを探しているイシユタル・ファミアリアのアマゾネス達。出

入口付近で見張っていたのだが一向に見つからずにどうしようかと悩んでいたところであった。

土煙が上がるほどのスピードで迫ってくる何か。

それが人影だと分かったアマゾネス達は武器を取り警告した。

「これ以上来るんじゃないよッ!!!」

「いまはここに誰も入れ…」

「私の、邪魔を、するな」

一瞬の内に懐に入られ、その声を聞いた時にはすでに彼女達の体は宙に浮いていた。気付かれない内に、持っていた武器で吹き飛ばされていたのだ。そしてそれを理解したのは気絶して二時間後の話である。

.....

「来てくれて嬉しいわ」

「そうですか。僕もお話したかったので」

ハジメの目の前には妖艶な姿をした神イシュタル。

普通の男なら同じ部屋の中、至近距離にいられたら恐れ多い神だとしても、その人間の、動物的な性的本能に抗うことは出来ずに押し倒しそして行為に及ぶだろう。

しかし目の前にしても一向に変わらないハジメの態度に内心動揺するイシュタル。そしてそれと同時にハジメが欲しいという欲求と高揚感に包まれていた。

「私の美貌に靡かないなんて……あの子と同じなのね……」

「ベルベルと一緒になんて心外です」

「同じミアミアなんじゃないの？」

「だからといってヘタレベルベルと一緒にしてもらいたくないですね」

「へえー。ならヘタレじゃない貴方は私を……楽しませてくれるのかしら？」

ゆっくりと、ゆっくりと、近づく。

焦らして焦らして、向こうから飛び付くように。

いくら欲求に耐えようとも全快で攻めてくる「美の女神」に抗うことなんて出来ない。  
い。

骨の髄まで魅力し、行為が終わったころには、指一本動かすにもイシュタルの指示があるほどに……

しかしハジメの顔色は、いや、眉一つ動かさない。



これはあまりの魅力に体が動かなくなるほどに心奪われたのか、それとも……  
真相が分からないとイシユタルはゆっくりとその手をハジメの顔に……

カンッ!!カンッ!!カンッ  
!!!

突然鳴り響く鐘の音に引き戻されたイシユタル。

そしてそこでいま自分が何をしようとしていたのか?

いや、無意識に何をしようとしていたのか?と疑問に思った瞬間に一気に全身から寒  
気と冷や汗を感じ取った。

(い、いま…何をしようと、したッ!!?)

……私はこの子を、み、魅了しようと……

それなら…どうして……音が聞こえるまで気付かなかったッ!!?)

無意識にやろうとしていたことに動揺したイシユタルは一步、二歩と後退をする。  
それを見たハジメは首を傾げながら

「どうしましたか?顔色が悪いようですが」

「き、貴様……私に、何をしたッ!!!」

「何もしてませんけど……」

「嘘をいうなッ!! 神である私に嘘なんて……ッ?!?!」

そう。ハジメは嘘をついていない。

何もしていないのだ。何も。

それなのにまるでイシユタルがハジメに”魅了”されたような…

そのことが頭を過つた瞬間、急にハジメの存在が怖くなり、そして自分が、女神である自分が、魅了しようとした自分が逆に落とされかけたことに恐怖し始めた。

「な、なんなの…何者なの…お前はッ?!?!」

こんなものにフレイヤは…手を出そうとしているというのッ?!?!」

「こんなものとは、失礼ですね」

全く底が見えないハジメにイシユタルは完全に怖じ気づいた。

そしてそんな二人がいる部屋に突然イシユタルファミリアのアマゾネスが慌てて入っていた。

「た、大変ですッ!!!」

「な、なんなのいきなりッ!!!」

「す、すみませんッ!!!」

し、し、しかし、いまこの歓楽街に侵入者がッ!!!」

「侵入者ぐらいでこの部屋に……ッ!!!」

許可もなく入ってきたアマゾネスに、さつきから溜まりに溜まっていた不安や恐怖などのストレスを発散させようと、その手をアマゾネスの頬に……

「たった一人のエルフに街が壊滅状態なんですツツ!!!」

「な、……………な、なに……………」

あり得ない言葉に耳を疑うイシユタル。

すぐさま街が見える窓に移動して外を見るとそこには

「……………な、なんなの……………これは……………」

華やかで、活気に満ち溢れていた街は、叫び声と、真つ赤な炎があちこちで見られ、冒険者の、男共の樂園と呼ばれる街は、戦場と化していた。

「それに、あのロキ・ファミリアとフレイヤファミリア、そして最近話題となったヘステイア・ファミリアが各所で暴れまわってますツツ!!!!!!」

「……………は……………は……………」

今頃になって、気づいた。

自分がとんでもないものに手を出したのだと……

しかし時既におそい。街は壊滅状態。

そして自分は、手を出そうとしたものに、逆にやられそうに……

それを理解した瞬間に味わったことのない恐怖感が体を駆け巡り、みつともなく転ん

で倒れて、それでも立ち上がりながら、瞳に涙を貯めて声にならない奇声をあげながら逃げ纏うように部屋から逃げ出した。

「い、イシユタル様ッ!!!」

突然のことにアマゾネスは驚き動き出すのに遅れたがすぐさま追いかけた。そして残されたのはハジメだけ。

「なるほど。やっぱリユーを怒らせるのだけはダメですね」

うんうんとこんな状況でも冷静に判断し、暴れているリユーを止めようと部屋から出ていったハジメ。

メラメラと燃えゆく街並みと風もないのに揺れるカーテンが二度と誰も戻ってこないだろうという静けさが残った。

影が薄い。それは時に、一波乱起こすことになる。

「こ、これは……」

「暴れまわってますね……」

「いいか。お前ら。あの人の前でハジメを敵に回すなよ」

「り、リユーさん……」

ベル達が歓楽街に来てみればすでに街は大惨事になっていた。

建物は崩壊し、燃えあがり、そして複数のアマゾネス達は倒れている。

これをたつた一人で、リユーが一人でやってのけたのだ。

「……確か、あのエルフは……」

「ミア母さんのいる店の従業員だ」

「どつかのファミアリアに入ってる。わけやないな……」

「今は詮索はしないほうがいいだろう。それよりも……」

「せやな。フレイヤのやつ勝手に行きよって……」

いくでドチビ。イシユタルに引導を渡すんやろ」

「ああ、その通りだ。ベル君、くれぐれも気をつけてね」

「はいッ!!」

ここでヘステイア達はイシュタルの元へ。

ベル達はハジメ救出と春姫の奪還へと向かう。

.....

「なんだいッ!! 一体何が起きてるんだいッ!!?」

フリユネはイシュタルからベルを貫おうと向かってる最中だった。突然街の方から轟音が聞こえ次々に街が赤く染まっていくのだ。

原因が分からないいま、フリユネは近くにいたアマゾネスに聞くが

「分かりませんッ!! 風が吹いたと思ったら次々に仲間が倒れて……」

「ふざけた事を言ってるんじゃないよッ!!」

そのアマゾネスに手を上げようとする瞬間、別の者が現れフリユネにこう進言した。

「た、大変ですッ!!!」

ロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアが襲撃してきましたッ!!!

「なっ!!!」

流石のことにフリユネも驚きを隠せない。

しかしすぐさま表情を変え、ニヤリと笑いながら

「いい度胸だね。ここに足を踏み入れることがどういふことか教えてやるよッ!!!」

.....

「……春姫。言い残すことはないかい?」

「いえ。あの人に会えましたから。それだけで……」

「……………そうかい。始めるよッ!!」

街が炎に包まれようともアイシヤは儀式を始めようとしていた。

これはイシユタルからの命令。逆らうことなど出来ない。

いくら街が焼かれようが、これから手に入る力があれば何度でもやり直すことは出来る。

それが春姫の命を捧げることになるとしても。

自らの意思でそれを止めることは出来ない。

そう、これを止める英雄が来ない限りは……

「春姫さんッッ!!!」

「ッ!!? ベル様ッ!!!」

「来たかいリトル・ルーキー」

ベルを初め、リリ、ヴェルフ、命など春姫を助けるために集まったメンバーがそこに来ていた。

それを見たアイシヤは周りにいるアマゾネス達にアイコンタクトで指示を出しベル

達に襲いかからせた。

ベルもそれに対して戦闘態勢をとるがヴェルフが片手をベルの目の前に上げて

「コイツらは任せろ」

「ですね。ベル様は春姫様を」

「お願いいたしますベル殿」

「分かりました！お願いしますッ!!!」

アマゾネスの攻撃をくぐり抜け、それを追いかけてようとする者達をヴェルフ達が阻止する。

「わりいが行かせねえよッ!!」

「貴女達にはリリ達の相手をしてもらいますッ!!!」

「ご覚悟をッ!!!」

戦闘が始まり残されたのは儀式に捕まった春姫と、それを守るアイシャ、そして春姫を助けるために立つベルだけだった。

「……そこをどいてください」

「できないね」

「春姫さんを失うことになるんですよ」

「その代わりに力が手に入る」



「そんな力、僕は認めないッ!!」

「認めなくてもそれがあるんだよッッ!!」

言葉を交わしても平行線で、どちらかが譲ることはない。

決めるには、戦って倒すしかないのだ。

「来な、リトル・ルーキー。春姫が欲しいならね」

「……春姫さんを、助けますッ!!」

……

「はあ……はあ……はあ……」

何処に逃げているのか……それさえも分からなくなっていた。

ただフレイヤが気にしていたものが欲しかった。

美の神である自分よりも、フレイヤがもてはやされているのが我慢できなかった。

だからここにベル・クラネルが来た時は心が踊った。

そしてそれに釣られてトキサキ・ハジメも来たことに歓喜した。

ハジメは先の戦争遊戯でとんでもない力を見せた。

欲しかった。フレイヤに取られる前に奪いたかった。

だから魅了し、身も、心も、全て自分の物にしようとした。

だというのに……なんだ、アレは……

魅了が効かず、さらにいつの間にか、自らがハジメを求めていたなんて……  
そしてあの目の奥に潜む、何か……

(あんな……あんな化物……何を考えてるのフレイヤはツツ!!!)

間近にしたからこそ知った。ハジメの奥底にあるだろうナニかを。

女神である自分でも全く分からず、ただ恐れるものを……

「…手を、出しては、いけなかった……アレは……アレは……ツツ!!!」

ロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリアが攻めてきたという恐怖なんかより、もつと恐ろしいものをみたイシユタルの頭の中にはそれ以外の事は考えられなかった。

だから……気づかなかったのだろう。

階段ア段の差に迫るまで、目の前に立つ者に。

「ツツツ!!!」

気づき驚き反射神経により後退しようとしたその体。

しかし体と頭の反応とは別に、その場から動けなかった。

動かせるのは首から上だけ。そしてその目には写っていた。

フードを深く被った者がそこに現れた。

「な、なんだ貴様は……ツツ!!!」

「それは、貴女が気にすることではないわ。」

そして、もう何も、気にしなくてよくなるのだから」

.....

「さて、騒ぎが大きいほうに向かうべきなんでしょうけど…」

すぐにでもリユウの元へ向かいたい。

そんな気持ち溢れているのに、どうしても気になることがある。

胸騒ぎというべきか、何か、呼んでいる気がする。

そんな曖昧なものに振り回されずにいけばいいのだが、そのちよつとした考え込む時間のせいでハジメはリユウとの再会が遠くなってしまった。

「こんな所にいたのかい」

「……………あつ」

ヒキガエル

そして嫌な人ヒキガエルに会ってしまった。

見るだけでも気持ち悪いという、ある意味奇跡的な人物を目の前にしたハジメは

「さようなら」

「おいッ!!!どこに消えたッ!!!隠れるんじゃないよッ!!!」

初めて、このスキルに感謝したハジメだった。

.....

「ガバッ……………ハア…ハア……………」

「へえ。神様って頑丈なのね」

イシュタルの全身はボロボロになっており、着ていた服ももう大事な部分だけが隠れているだけの布切れと化していた。

「自分が、何をやってるか……分かってるのツツ!!!?」

「まさか、神様だから。なんて言わないでよね」

「絶対に許さない……天界に返させられてもお前をツツ!!!」

「そう。それは面倒ね。でも……」

イシュタルがその神の力を使おうとしたのだろう。

しかし何も起きない。

それにイシュタルは何が起きてるのか分からなかったがすぐに再度試そうとする

が何も出来ない。

「ど、どうしてツツ!!!??」

「神様は、万能。なんて思っていたのかしら??」

いまの貴女はただの人にしか過ぎないのよ」

そういういながら手を横に振るうとイシュタルの両腕が裂けた。

激痛に悲鳴をあげながら倒れ込むイシュタルに近づくフードの者。

「……あ、ああ……ああああ……ツ!!!」

「まさか、神様が命乞い?! 無様ね……」

ハアとため息をつきながらもゆっくりとその手をイシユタルへ向ける。もう恐怖しかないイシユタルには逃げることも逆らうことも出来ずに、ただ涙を流しこれからくるだろう死を受け入れるしか……

「なにを、しているのですか??」

その言葉に、手を止めるフードの者。

そしてその言葉がする方に視線を向けるとエルフがそこにいた。

「……貴女……」

「お見受けしたところ、その方は神様ですよね。」

……その神様に、何をしようとしていたのですか??」

自分の最も大切な人を探しに、助けにきたエルフ。

どんなことがあっても優先して向かわないといけないのに、それを見てしまったエルフは立ち止まるしか無かった。

(……)で、見過ごしたら……あの人に顔向けできませんね……)

気持ちの問題なのかもしれない。

しかしその大切な人の前では嘘を、薄情な者でいたくなかった。

たとえ、そこに立っただけで実力の差が明確だと、絶望を覚えるほどの差があること

を思い知ったとしても。

止まらない冷や汗、緊張でなかなか動けないエルフに

「そう……そうなのね……」

ふふふ。と、静かに笑い出したフードの者は徐々に声を大きくしていき、そして

「ア、アア、アハハハハハッツ!!!」

まさか!!まさかこんなところで会うなんてツツ!!!

これこそ神様の導きというべきなのかしらあッツ  
!!!!!!」

周りを気にせずには高笑いするフードの者。

一体なにがあつたのか分からないが今のうちにと

「……早く、ここから去ってください……」

「お、お前は……」

「私のことは気にせず。」

それに貴女には別の方がしつかりとその罪を償わせる。

ハジメを、私の大切な人に、手を出したのだから……どんな人でも、例え神でも……

私は、それを許さない」

ハツキリとイシュタルの目を見て、殺気に似た凄みを乗せて圧力をかける。何者か知らないイシュタルは、目の前のエルフ、リユーに怯えて切られた手をだらりとさせなが

らも必死に逃げ出した。

その間にも笑っていたフードの者は、リユールが深呼吸して落ち着きを取り戻すまで笑い続けていた。そしてピタッと笑いを止めて視線で殺すかと思うぐらいに睨みながら

「……そんなに、そんなにも、たつぷり……許せないわ……」

「なにが、ですか?」

「……長い時間をかけたのよ。圧倒的な『孤独』を。

見えたとしても、その心は、ずっと孤独だと……

なのに、今のあの子は、『幸せ』しか感じない……」

何を言っているのか分からない。

分からないが、一つだけ、分かった。

このフードの者は、明らかに、『敵』だということ。

「……………ふざけないで……」

あの子は、孤独だからこそ、強さを得たのよ……

貴女がいるからあの子は弱くなった。だから……許せないわツツ!!!」

その瞬間に、周りが全て、止まった。

火も、煙も、空気も、空間も、全てが時を止めた。

まるで、『ハジメが使う』一時停止』のような……

「これ、は、一体……」

「やっぱり、貴女には、効かないのね……」

しかし停止した世界で、リユーは動いていた。

フードの者から見える範囲が止まった世界でたった二人。

「ますます、気に食わないわ……」

「誰かは、知りませんが……ハジメの敵なら、容赦しません」

改めて戦闘態勢を取るリユー。

そしてハツキリと、ここで、フードの者は、敵であることを告げるのだった。

「容赦しない??それは、私のセリフよツツ!!!」

あの子は、私の物なのツツ!!! 誰にも、あの子は、あげないわツツ!!!」

!!!!!!



影が薄いためにあれやこれやの出来事に関わらない。

「……な、なんなの…何なのよ…一体…ッ!!!?!」

ボロボロの身体にムチを打ち遠くへ逃げようと移動するイシユタル。さつきからずっとどうして!どうして!と疑問の嵐で頭の中がいつぱいになっており、自分がいま何処を歩いているのかさえ分っていない。

簡単に墜ちるはずだった。

フレイヤの負け顔を見るつもりだけだった。

美の神は私一人で十分だと思いき知らせるつもりだった。

なのに、ただ、それだけなのに……

あの男に少し手を出しただけで歓楽街は崩壊寸前。

恐らく自分の子供達も多くが倒されただろう。

そしてどういうわけか自分のこんなポロボロになっっている。

後悔してもしきれない……

とにかくいまはここから逃げようと動いているが

「………なんや、お前……それ……」

「!?イシユタル!!どうしたんだいそれはッ!!」

ここにきて見つかりたくない者に出会ってしまった。

ロキにヘステイア、そしてその後ろにはフレイヤ。

そしてロキファミリアのフィンとフレイヤファミリアのオツタル。

「随分と、やられたようねイシユタル」

「フレイヤ……ッ!!」

恨みを、憎しみを、怒りを込めたような表情でフレイヤを睨むイシユタル。だと思われていた。

そうイシユタルがフレイヤを毛嫌いしていたことは誰もが知っていた。だから誰もがそんな反応をずっと思っていたのだ。

しかしイシユタルの表情は驚きはあるが、それ以上変わることがなかった。その怪我と何かあるのかと思いいフレイヤは

「でもその様子だとあと一撃かしら?天に帰るのは」

「……………んなの……………」

しかしフレイヤの嫌味にも聞こえる言葉を無視してボソボソと何かを言い出したイシユタル。誰の耳にも届かないその声は恐怖という感情により爆発し

「何なのよアレはッッッ!!!」

あんなのがこの外界に存在していいわけがないわツ!!!

突然の激怒。それもそれはフレイヤに向けられたものではない。きっとそれはイシユタルにその怪我を負わせた相手。

「ちよつ、ちよつと落ち着けや……………」

「あの男を狙ったのが悪かったのよ……………じゃないと、あんな化け物がこんな……………」

「化け物……………ちよつ待ち！イシユタル!!そいつはツ!!!」

「……………ここにいたら殺される……………壊されるわ……………いや、いやあああああああああああああツツ!!!」

突然発狂し何かから逃げるようにフレイヤ達から離れていくイシユタル。しかしその先、壊れた建物の瓦礫が頭上から……………

「イシユタルツツ!!!」

「……………もう、いや……………」

確かにヘスティアの声は届いた。しかしもうこれ以上耐えられないと避ける行動を起こさずにそのまま落ちてきた瓦礫に飲まれてしまい、そしてその後その瓦礫から眩い光が天へと登った。

「……………ヘスティア、こいつはヤバいで……………」

「みたいだね……………すぐにベル君達と合流して撤退だ!!」

イシユタルの天界へ送られたという事実を前にしても、ロキとヘスティアの思考はすぐに切り替わった。

そうしないといけない。判断を間違えると全滅の可能性のある……

……

「……あの、光は……」

「………はあ……もうやめ。やめ……」

攻防につぐ攻防。

必死にしがみついたが決め手にならずにどうしようかと悩んでいた。フィンやガレス達から訓練されていたお陰で未だに立つてはいられるが……

アイシヤはあの光を見たあと武器を捨てた。

その行動に警戒するベルはまだ緊張を解かない。

「どういうこと、ですか……」

「あれは、イシユタル様よ。？がりが、切られたわ」

「分かるんですか？」

「神が天界へ戻ると同時にステータスが封印される。

「このままやってもメリットがないわ」

つまりは……

「ベル様ああああああッッ!!!」

飛び抱きついてきた春姫を上手くキャッチするベル。

涙を流しながら一生懸命に感謝の言葉を告げる。

それを見ていたアイシヤは

「春姫。何処へでもいきな」

「アイシヤさん……」

「ベル・クチネル。春姫を泣かしたら私がアンタを殺すからね」

「はいッッ!!!」

……!!!……!!!……!!!

あらかたの戦闘は終わった。

イシユタルファミリアの負けとして。

しかし、そんなことは関係ないと未だに続く戦闘があった。

……!!!……!!!いや、ほぼ終わりを見せていた。

「……はあ、はあ、……!!!くっ!!」

見たことのない攻撃。魔法だったらどれだけ良かったか……

フードの者の周りには空中で浮いているあらゆるものが全てリユールに向けているのだ。

（あれは、間違いなく……ハジメと同じ力……）

フードの者が指先でリユーの方へ向けると浮いていた物が一斉に襲いかかる。ビンや石、鉄くずやブロック、人や生き物、テーブルから建物まで……

フードの者がリユーを追い詰めている時に無作為に吹き飛ばした物が全て宙で止まっているのだ。さつきまで上級冒険者と並ぶ力を持つリユーをまるで稽古しているかのように実力を隠したまま襲いかかっていたフードの者。普通に戦闘するだけでも追い込まれていたのに、ハジメと同じ力を持つているとなると……

（不用意に魔法が、使えない……ツツツツ!!!!）

魔法を使えばきつとそれも止められ、そして利用される。

同じ力を持つ者ならきつとそうするに違いないと。

だがそれでも、力の差は歴然であった。

「いつまでも避けられるとも思っているの」

かわせるものはかわし、捌けるものは叩き落とし、なんとか最小限で飛んでくるものを避けていたが、最後の大きな壁を切り落とした先に炎が目の目の前に迫っていたのだ。

（やはり！保存していた魔法ツツ!!!!）

ハジメもリヴェリアの魔法を保存していたことを知っている。だからもしかしてと

は思っていたが、目の前にきた魔法を避けるほどの時間はなかった。

とつきに杖を前に出して防御を図るが、そんなものは些細なもの。あつという間に炎に飲み込まれそのまま後方へ吹き飛ばされた。

「グッ!!!」

壁に激突し意識が飛びそうになるのを唇を噛み意識を保つ。

そうしないと次の攻撃がよけれそうになかったからだ。

目の前には全方位からの薄い物体が回転しながら飛んできている。

これもハジメが使っていたトランプに回転力を加えて一時停止させて、それをさらにまた回転させた後に一時停止停止を解除することによってのハイスピード。鉄も切り裂く兇器の完成である。

めり込んでいる壁を壊し、その壁の一部を投げつけた。

しかしそれはすべて切り裂かれてしまったが、その分回転力が落ちたことにより、リユートの力でも叩き落とせる事ができた。

しかし、それをただフードの者が見てるわけではない。

「そこ、アウト」

「しまっ!!」

これも知っていた。

なんでもない箱のような物の中に凝縮された魔法が閉じ込められていることを。そして指をパチンツと鳴らすと一時停止が解除されて……………

「ぐあああああツツ!!!」

まともに魔法を喰らったリユートの身体は宙を舞い受け身を取れずに木箱へと落下した。

フードの者はあーとため息を付きながらリユートの方へと歩きながら

「ダメね。まるでダメ。あの子の使う物をやっただけよ。」

初心の初心の技にここまで振り回されるなんてやはり貴女じゃあの子の隣に置かせることなんてありえないわ」

ふふふ。不敵に笑うフードの者に違和感を感じたリユートは

「どうして、どうしてそこまでして…」

「なに。あの子に執着するのとか言いたいの??」

言わせれば他人である貴女が私にとやかくいう筋合いもないの。これは私とあの子の問題」

「ならば!!どうしてまた一人にさせようとする!!!」

そう。そこが分からないのだ。

どうみてもこのフードの者はハジメに執着している。



しているのにどういう訳かハジメを孤独にさせようとしている。

それが分らないのだ。大切に思うならそんな……

「するに決まつてるじゃない。だってあの子は男の子なのよ」

「な、なにを……言っている……」

「知らないの??強く気高いある動物は自分の子供を崖へと落とすのよ。それはこれから先の未来を生き抜くために。つまりはそういうこと。この先の未来を絶対に生き残るためにどんな犠牲を払っても強くなつてもらおうのよ」

うつとりと、まるでそれが幸せのような表情で語る。

表情は見えない。見えないのにその声が、動作がそのように見せてくるコイツは

明らかに、狂っている!!

だから悲鳴を上げている身体を無理矢理言うことをきかせて立ち上がりフードの者に向かつて

「よく分かりました。貴女はハジメに近づけてはダメだと。

ハジメの隣に立つのは私だ。」

「言ってくれるじゃない。貴女を消してハジメを私の元へ戻すわ」

影が薄いことをここで後悔しないように。

「こいつは、一体何なんだい……?？」

アチラコチラと火の手が周りフリユネはその中で一番面白いと感じた場所向かっていた。しかしどこもかしこも外れ。その間に春姫はベルの元へ、神イシユタルは天界へ帰ったのだが、今のフリユネにはそんな些細なことはどうでもよかった。

強い男。

勘だが近くにいると踏んだフリユネはこの辺りを探していたのだが、突然建物が吹き飛び地面は荒れ、幻想的だったあの遊郭は見る影を無くした。

その元凶となるのはフードを被った何者かと、傷を負っているエルフの戦いだった。

主にフードを被った者の攻撃が辺りを破壊しエルフはそれを避けているのだが、その一つ一つの攻撃が見覚えのないものばかり。

しかしそれさえもどうでも良かった。今求めているのはこの状況を作り出した、引き起こしたベル・クラネルとトキサキ・ハジメだ。

「ツセイ!!!」

近くの瓦礫を持ち上げまずフードの者に投げ、次にエルフの女に投げつけた。もちろん

んそんなもの簡単に避けたがフリユネはこつちに意識を持ってもらえれば良かったのだ。

「……………貴女の、仲間ではないようですね」

「そつちも違うみたいね」

「アンタ達に聞きたい事があつてね。割り込ませてもらつたよ」

全く悪切れもないフリユネはニヤリと笑いながら

「そつちのエルフ。アンタがコレを起こしたんだよね??」

「……………だとしたら」

「その目、男を探してるね。どんないい男なんだい??」

フリユネの頭には男を喰らうという欲求しかない。

それもこうして戦いをやっているのが、あの目が、強く強く、愛しい人を求めていると分かる。

腐つてもフリユネもこの娼婦街にいる人間。

男と女のことは手に取るように分かるのだ。

「それにそつちのフードの奴も、同じだね。」

もしかして同じ男で争つてるのかい??いいね、とびっきりの男みたいだ!!!」

舌なめずりをするフリユネ。

もう完全にフリユネは二人の男が欲しくて、欲しくて、たまらなくなっている。さっきまでベルやハジメを求めていたのに、どうも目の前で起きていることがとてもとても甘美だと感じているのだ。

「ああ〜美味しそうだ!!?そんな男を骨の髄までしゃぶり尽くして再起不能になるまでたっぷりと……ツツツツツ!!!」

その瞬間、フリユネの頬に何かが当たり皮膚が切れた。

通り過ぎたのは何の代わり映えのないただの紙。

その紙が瓦礫に刺さるとまるで花が絞れるようになつた。

それに気づいたフリユネはそつと自分の頬を触りそこから血が、傷がついたことを確認したところで顔が一気に真っ赤になり

「こ、このアマガあああああああツツツツツ!!!」

怒りにまかせて突撃しようとするフリユネ。!!!

しかし、フリユネが気づいたときには目の前に杖が

「ゴブツツ!!!」

顔面にグリーンヒットしたフリユネは無様に倒れる。

鼻から大量の鼻血を出しながら醜く暴れまわる。

それを見下ろすリユエが

「どうやら貴方を先に倒す必要があるみたいですね」

「さっさと終わらせましょう。次は貴女なのですから」

.....

「ベルツツ!!!」

「ベル様ツ!!!」

春姫をつれてリリとヴェルフと合流。

周りのアマゾネス達もベル達が勝ったも理解し戦いを止めたのだ。

そして一番再開したかった命と春姫は互いを抱きしめ合い再会を喜んでいた。

「良かった……本当に、良かった……!!!」

「………会いたかったです………ツツ!!!」

感動している二人だがいまだにここは敵の領地。

早く脱出しないと何が起きるか分からない。

それにいまだにハジメを見つけていないのだ。

「感動は後だけお二人さん」

「そうです!!早くハジメ様を見つけないと!!!」

そう意気込んでいるリリとヴェルフに対して、何故か一番やる気を見せていたベルが

何も言わずにいる。

それを不思議と感じたヴェルフがベルの肩を叩きながら

「どうしたベル。早くハジメを……ツツ!!?!」

するとベルの表情が険しくなっているのを見た。

まるで恐怖なものを見たようなそんな表情を……

「ベル様!!?!」

「どうしたんだベル!!?!何があつた!!?!」

二人の呼びかけに気づいたのか、短く激しく息をしているのを落ち着かせようとするベルの様子は明らかにおかしい。

周りは何も起きていない。なのにこんなにも怯えているなんて……

すると震えた唇を必死に動かしながら

「……か、感じ……ないの……??」

「な、何をだ……」

「……あの時、の……あの……」

「……ベル様!しっかりしてくださいッッ!!」

流石に命も春姫もそんな様子をみて心配してベルの近くに来てみると確かに見たことないほどに怯えているのだ。

「一体何が……」

「わからねえ……だがコイツはヤベエってことか……」

「何が起きているんですか……」

状況が理解出来ずにいるなか、やっと落ち着いてきたベルが

「……………、この場所に、います……」

「何が……」

「あの……? フードの者です……」

「ツツツ!!!」

それを聞き驚愕する二人。

しかし未だにピーンと来ていない命と春姫だが表情が変わった二人を見てとんでもないことが起きているということだけは分かった。

「そ、そんな……ダンジョンの穴へ落ちていきましたよねツツ!!!!」

「生きていたのかよツツ!!!!……おい、ちよつとまで!!ならツツ!!!!」

「……………ハジメが、危ないツツツ!!!!」

……………

「あ、ぶげぎえツツ!!!!」

聞いたことのない声を上げて倒れるフリユネ。

それはフードの者が放ったある一撃によるもの。

攻撃動作も勢いも覇気もなく手をフリユネの胸に添えただけでまるで神の一撃を食らったように沈んだのだ。

それを見てリユーは気づいた。

ハジメがもつと使う攻撃だと。受けた攻撃を一時停止して、それを相手に向けて解除する攻撃。

ゴライアスなどの一撃さえも、上位の魔法でも全てを止めてしまい自分の攻撃にしてしまう反則とっていい攻撃を知っている。

「言っておくけど、これは簡易版よ」

「……………」

「一時停止がそれだけの攻撃なわけがない。

もつと最近になってやっと一つ覚えたようだけどどうして攻撃されるまで待たないといけないのか?」

どうしてそんなことを言ってくるのか……

その答えがすぐに、分かった。

「こういうのは、見たことないかしら?」

「ぐううっ!!!」

突然左肩に激痛が走る。



気づくと左肩に何か貫いていたのだ。そこから血が溢れ出している。

攻撃された動作が全く見えなかった。ただ分かったのが肩に攻撃された瞬間にフーの者から何かが一直線に飛んできたこと。

「いえ。見えるわけがないわね。」

「これはそういう類のものだから」

「なにを、した……!?!」

「この世で最も速いものって知ってるかしら??」

それは「光」。それを一つに纏めただけのものよ」

そういつて今度は右脚の股を撃ち抜いてきた。

堪らずリユーは膝をついてしまったが素早く股を布で止血し、杖を使って立ち上がった。

相手に隙を見せたら、簡単にやられると本能が告げている。

「光は鏡やガラスといったもので反射や軌道が変わるの。」

ガラスは光を通すけど、歪曲なガラスならその光を広げたり一箇所を集めたり出来る。言っていること分かっているかしら??」

聞いていても何の事は分からない。

分からないがリユーの知らない知識で相手は攻撃していることはすぐに分かった。

「そしてその光はどこにでもある。一番は太陽かしら。」

そしてその光を1箇所に集めれば高熱を帯びた光の攻撃の完成って訳ね。それをこうして……………」

また攻撃をされた。今度は杖を折られてしまった。

そのためにまた地面に膝をついてしまったリューはすぐさま折れた杖を両手で握り牽制をする。

「一時停止して好きなきに解除すれば狙うだけで一撃必殺の攻撃が出来る。分かったかしら?? 常にあるもので攻撃をするというのならこれぐらい出来ないと話にならないの」

そしてリューは気づいた。

自分の真上にその光が、待機していることに。

見えるわけではない。ただ本能が、経験が伝えてくる。

「さあ、お遊びは終わりよ。消えてちょうだい」

真つ直ぐ指を自分に向けてくるフードの者。

抵抗したくともあんなに速く強い攻撃を受けることも逃げることも出来ない。

だから、リューは

「……………どうしてそんな目をしているの??」

「……………」

相手を見ることしか出来なかった。

しかしそれがフードの者には分からなかった。

「これから死ぬのよ。泣け叫びなさい。醜く命乞いしなさい。

そうすればもしかしたら助かるかもしれないわよ」

「……………いやない」

「……………はあ??」

「そんな姿を、私はハジメに見せたくない」

そう、例えここで死ぬと分かっているとしても。

それでも惨めに最後を迎えるなんて真似はしない。

「何を言っているの……………ハジメの何を知っているというのツツツ」

「私がハジメを好きだからだツツツ!!!」

「ツツ!!!」

「私がぞうしたい。あの人の隣に立つ女ならそう有りたいたい、私がやりたいからして

るだけ」

こんなにもハッキリ分かっている。

どれだけハジメが好きか。どれだけハジメを想っているか。

!!!!!!!???

言葉に出来なかつたことを後悔するが、それでもきつと幸せな時間だつたと感じている。

「……………そう。そうなのね……………」

やはり、貴女は嫌いよ。私のハジメを奪つた貴女は……………ここで消えなさいツツツ  
「……………」  
振り上げた腕が一気に振り下ろされる。

それと同時に指が真下へ向けられる。リユウの頭上にある光が落ちてくる合図である。

（……………ハジメ……………）

「そんな、愛の告白は。僕の目を見て言ってください」

攻撃された時も目は開いていた。

だけどその声ができるまで全く見えていなかった。

どうして、どうして、こんなに近くにいたのに姿を現さないかと…………

でも、そんなことよりも、きつと、ずっと、この言葉を、言いたかった。

「……………好きです。

好きなんですツツツ

!!!!私ハハジメが好きなんですツツツツツ

!!!!!!」

もう、何も怖くない。きっとコレを伝えたかったから。

ずっと、ずっと、言いたかった言葉。

きつと前にも言った事があつたかもしれないけど、こんなにも心の底から伝える言葉はきつとないと……………

右手を空にかざし、光の攻撃を受け止めたハジメはフードの者の方には視線をやらずに真つ直ぐリユーを見て

「ありがとうございます。僕もリユーが、好きですよ」

……………その言葉を、きつと、ずっと、忘れない。